6月1日（土）

ワークショップ	ワークショップ会場（研究講義棟101マルチメディアホール）	
会場担当	澤村 美幸	
9:30 | 11:00	W-1	ワークショップ1 ポライトネス理論と配慮表現研究 ―今後の展開の可能性― 発表者：宇佐美 まゆみ 山岡 政紀 牧原 功 小野 正樹 司　会：宇佐美 まゆみ
	p.185	

オープン学生セッション	オープン学生セッション会場　…オープン学生セッションの予稿集原稿はありません（研究講義棟吹き抜けスペース：ガレリア）		
会場担当	中川奈津子　宮澤太聡　石黒圭		
10:45 | 11:30	O-1 なし	思考に関わる文末の表現形式に着眼した中学生意見文の調査	吉田 吏玖
	O-2 なし	話し言葉における談話標識「いえ」の機能に関する一考察	彭 津
	O-3 なし	クイズ疑問文における連体修飾節の特徴	俣平 洸希
	O-4 なし	性格類型に基づくアニメキャラクターの発話機能にみる言葉づかいの特徴	佐藤 茉奈花
	O-5 なし	類型論の視点から見た日本語の難易構文	崔 鯤
	O-6 なし	多様な日本語コーパスへの語義情報悉皆付与	浅田 宗磨　古宮 嘉那子 浅原 正幸
	O-7 なし	非規範的構文における「ニーヲ」型フレームの非存在についての解釈 ―統語構造の観点から―	西郷 太一
	O-8 なし	古典語〈をかし〉と〈おもしろし〉の用法の比較 ―『源氏物語』を中心として―	邱 昊煒
	O-9 なし	滋賀県における若年層の素材待遇語の使用実態 ―第三者待遇偏用から「全待遇」へ―	坪井 菜央
	O-10 なし	感動詞性を獲得した動詞タ形について	上田 地平
	O-11 なし	シンハラ語を母語とする日本語学習者の意見文における接続詞の使用に見られる母語干渉 ―シンハラ語母語話者の日本語の意見文とそのシンハラ語訳との比較を通じて―	MUDIYANSELAGE DONA AGRA CHATHURANI
	O-12 なし	泉鏡花と朗読劇―「天守物語」に注目して―	関根 唯央
11:30 | 12:15	O-13 なし	「ようになる」についての日中対照研究	凌 倩潼
	O-14 なし	願望文における格助詞の交代について	深澤 径子
	O-15 なし	地域文化資源として活用される北海道方言に関する研究	玉田 桜子
	O-16 なし	ストーリーライティング作文における接続表現の分析 ―児童生徒の作文データを対象として―	大島 海斗
	O-17 なし	日中接触場面のLINE交流における「ほめ」の表現形式 ―スタンプと絵文字に着目して―	劉 金秋
	O-18 なし	アルファベット語の多角的分析	游 瀚誠　三浦 唯華
	O-19 なし	歴史的日本語資料を対象とした長単位・文節解析器Monakaの開発と検証	尾崎 太亮　古宮 嘉那子 浅原 正幸　小木曽 智信
	O-20 なし	文の構造から見る文末の「だ」の中心的なはたらき	佐藤 蛍葉
	O-21 なし	丁寧体の述語の形態について	河本 健汰
	O-22 なし	『分類語彙表』を用いた格助詞「に」の用法の再考察 ―国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞 -用法と事例-』をもとに―	陳 柏丞
	O-23 なし	外国語を母語とする日本語学習者向けの自学韻律学習教材の提案	狩野 晃弘
	O-24 なし	日本語教育における「文型」観の系譜 ―戦時中の『コトバ』から現代の能力試験まで―	中西 亮介

80周年記念式典・シンポジウム会場　（アゴラ・グローバル　プロメテウスホール）				
13:00 | 17:30		学会創立80周年記念シンポジウム **世界の日本語学**		
		ゲストパネリスト　徐 一平（北京外国語大学）	指定討論者　近藤 泰弘（日本語学会会長／青山学院大学名誉教授）	
		曹 英南（高麗大学）	木部 暢子（日本語学会副会長／人間文化研究機構）	
		ダオ・ティ・ガア・ミー（ハノイ国家大学）		
		ポリー・ザトラウスキー（ミネソタ大学）	企画・司会　庵功雄（一橋大学）	
		ジャン・バザンテ（フランス国立東洋言語文化学院）	太田陽子（一橋大学）	
	p.239	カラム・ハリール・サーレム（カイロ大学）	田中祐輔（筑波大学）	

6月2日（日）

口頭発表	口頭発表A会場 （研究講義棟115）		口頭発表B会場 （研究講義棟226）		口頭発表C会場 （研究講義棟227）		ワークショップ	ワークショップ会場（研究講義棟101マルチメディアホール）	
司会	池上 尚		苅宿 紀子		松浦 年男		会場担当	澤村 美幸	
9:20 ｜ 10:00	A−1 p.1	文部省編輯局編「送仮名写法」の送り仮名法史における位置づけ 岡田 一祐	B−1 p.49	原型からみた形容詞「カワイイ」の意味と新用法 北風 絵里	C−1 p.95	三重県旧南勢町における三拍動詞五段活用第1・2類のタ形アクセント変化 —類による区別から有声性による区別へ— 中津 陽菜			
10:10 ｜ 10:50	A−2 p.7	キリシタン資料のタ行二重子音表記 —パレト写本を中心に— 柄田 千尋	B−2 p.55	なぜ日本語二重目的語構文の基本語順は動詞によって異なるのか 田中 悠介	C−2 p.101	宮古語狩俣方言のアクセント体系と音調実現 —3型から2型への推移— 衣畑 智秀	10:10 ｜ 11:40	W−2 p.197	ワークショップ 2 日本語学習者の作文コーパスの構築に向けて —メタ情報付与の方法— 発表者：横野 光 ライ・タイン・ホア 本多 由美子 司　会：井伊 菜穂子
11:00 ｜ 11:40	A−3 p.13	『金光明最勝王経』平安初期点における不読字処理の特徴 柳原 恵津子	B−3 p.61	現代日本語における表記選択の規則性について 細河 紗羅	C−3 p.107	ノダに後接するヨネの用法 —ノダとの組み合わせによって変化する終助詞の意味— 安藤 清香　幸松 英恵			

ポスター発表	ポスター発表会場 （研究講義棟吹き抜けスペース：ガレリア）		
会場担当	庵 功雄　田中 啓行		
11:40 ｜ 12:40	P−1 p.137	複数短単位版「分類語彙表番号−UniDic」対応表を用いた『分類語彙表』の分析	菊池 そのみ　片山 久留美　高橋 雄太　小木曽 智信
	P−2 p.143	「国立国会図書館デジタルテキストデータ」を利用した日本語研究の可能性と限界	岡田 祥平
	P−3 p.149	尾張洒落本コーパスの構築	宮内 佐夜香
	P−4 p.155	日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅱ教科書の拡張—ハワイ日本語教科書第1期公開について—	ヤロシュ 島田 むつみ　竹内 綾乃 高田 智和　小木曽 智信
	P−5 p.161	『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の拡張計画について—BCCWJ2の構築に向けて—	山崎 誠　小木曽 智信　高田 智和
	P−6 p.167	『日本語歴史コーパス室町時代編Ⅱキリシタン資料』の拡張—天草版『金句集』の公開—	黒川 茉莉　片山 久留美　小木曽 智信
	P−7 p.173	全国自治体職員における外来語・略語使用意識の実時間変容	朝日 祥之　鍵水 兼貴
	P−8 p.179	共通語の語彙を用いた、語が指す対象物の地域差の検討—「バインダー」の呼称・連想・認識対象調査—	吉岡 花菜

口頭発表	口頭発表A会場 （研究講義棟115）		口頭発表B会場 （研究講義棟226）		口頭発表C会場 （研究講義棟227）		ワークショップ	ワークショップ会場（研究講義棟101マルチメディアホール）	
司会	北崎 勇帆		李婷		中川 奈津子		会場担当	太田 陽子	
13:00 ｜ 13:40	A−4 p.19	「点」の抽象化について —近代漢語研究の視点から— 奥山 光	B−4 p.67	小説の地の文における指定指示の「この」と「その」の使用実態 —八冊の小説に基づいた全数調査データによる分析— 鞠 恩彤	C−4 p.113	近世前期上方語の行為要求表現と話し手の階層 手塚 美希	13:00 ｜ 14:30	W−3 p.211	ワークショップ 3 日本語学習アプリを使用した日本語初期指導に関する学際的な研究の試み —外国にルーツのある児童と教師は日本語でどのような談話を行っているのか— 発表者：櫛引 祐希子　米澤 千昌 王 林鋒　森田 英嗣 司　会：櫛引 祐希子
13:50 ｜ 14:30	A−5 p.25	中古和文系資料における反語表現「ヤハ」「カハ」 —結びの傾向と意味機能— 永田 里美	B−5 p.71	換言を表す接続表現の「つまり」「要するに」「要は」の相違 —話者の性別による検討— 李 琦	C−5 p.119	気仙沼方言における疑問詞系感動詞の体系的記述の枠組みの提案 —「ナニ」を中心として— 勝又 琴那			

口頭発表	口頭発表A会場 （研究講義棟115）		口頭発表B会場 （研究講義棟226）		口頭発表C会場 （研究講義棟227）		ワークショップ	ワークショップ会場（研究講義棟101マルチメディアホール）	
司会	鴻野 知暁		大田垣 仁		坂井 美日		会場担当	太田 陽子	
14:40 ｜ 15:20	A−6 p.31	上代における不可能の補助動詞「かぬ」の成立 —従属節用法に着目して— 小澤 颯太	B−6 p.77	児童作文における主題の一貫性の欠如の要因 —学齢別の特徴に注目して— 加藤 恵梨	C−6 p.125	「さすが+の」の順接用法の展開について —BCCWJ と新聞データベースの比較を通して— 周 世超	14:40 ｜ 16:10	W−4 p.225	ワークショップ 4 資料横断的な漢字音・漢語音データベースの公開と活用可能性 —2024年度版の改訂に伴って— 発表者：加藤 大鶴　石山 裕慈 坂水 貴司　高田 智和 大島 英之 司　会：加藤 大鶴
15:30 ｜ 16:10	A−7 p.37	ト条件文・タラ条件文における文末モダリティ制約の史的変遷 竹林 栄実	B−7 p.83	アイドルの発信ツイートとファンのリプライ表現に関する因果構造 —言語行動学的共分散構造モデルによる考察— 中野 亜莉沙	C−7 p.131	人形浄瑠璃における義太夫「語り」の感情表現 —八王子車人形西川古柳座『日高川入相花王』より— 江澤 実紀　井伊 菜穂子 早野 慎吾　蔡 東生			
16:20 ｜ 17:00	A−8 p.43	日本漢文史における単語頻度の安定性の研究 「漢文・漢語コーパスに基づいて」 呉 子凡　王鼎	B−8 p.89	Chat GPTは「ボク」「オレ」らしく発話するのか —人間が作成した発話文と比較して— 西澤 萌希					

文部省編輯局編「送仮名写法」の送り仮名法史における位置づけ

岡田一祐（おかだかずひろ）（慶應義塾大学 k-okada@keio.jp）

一、はじめに

本発表では、文部省編輯局編「送仮名写法」（一八八二、以下「写法」）について、送り仮名法史の観点から意義づけを試みる。

送り仮名法は漢字・仮名の使用にまたがる重要な表記規範であるが、実務的な提案としての比較がほとんどで、史的な跡付けは、山東（二〇〇二、二〇〇三）を最後に進んでいない。本発表は、「送仮名写法」を題材として、その間隙をすこしでも埋めようとするものである。

ここに取り上げる「送仮名写法」は、ふるくは文部省図書局国語課（一九四一）が数ある送り仮名法のひとつとして、あたらしくは久保田（一九九八）が中根淑の二種の送り仮名法と対比しているほか、山東（二〇〇二）では送り仮名法史を描く試みのなかで、「写法」の編纂経緯と用途、その後の影響に触れている。いずれも本法の独自性という観点から検討はされておらず理解を深める余地があるほか、制定後どのように活用されたかの探究は、送り仮名法史研究を実地的なものとする上で意義がある。

二、「送仮名写法」の概略と担当者・内田嘉一

「送仮名写法」は、文部省編輯局における教科書編纂業務の必要から企画され、内田嘉一が筆録を担当した。明治初期小学読本の送り仮名には統一はなく（久保田 一九九八）、本法の編纂事情は、それを不満としたものであるという前文の通りである。編次の記載は本文中になく、三宅は一八八二年制定とするが、吉田・井之口ではのちに触れる改訂の日付を根拠として一八八三年以前数年のうちとして、とくに制定年次を特定しない。

本法の資料的な状況について発表者の知るところをさきに述べる。本法は公刊されたこともなく、現在公的機関において所蔵するところもない。また、『送り仮名法資料集』（一九五二、国立国語研究所）では所在不明とされている。このあとに触れる翻刻にも書誌的な記載はないため、本資料がどのような形態で作られたのか知る手立てがない。その翻刻とは、一九六二年に刊行された三宅と吉田・井之口のことで、どちらも原本や翻刻の手続きの記載を欠く[1]。

「写法」は文部省の内部資料であったと考えられる。昭和戦前・戦中期に文部省国語課にあった倉野憲司が送り仮名法資料の検討にあたって本資料を引くのを見れば（倉野、一九四

[1] なお、岡田（二〇二一）において吉田・井之口の翻刻態度について論じ、出典記載、翻刻態度における不備を見出したことがあり、この資料についても細部にわたる信頼は託しがたい。三宅も「写法」以外でも諸処で編輯に不審な点があるため、全幅の信頼は置けない。

三)、文部省にこの時点まではあったと思われるが、国語研の送り仮名法資料集編纂時までには失われたものか。三宅や吉田・井之口の翻刻が倉野など関係者の手許にあったものに基づくならば、国語研資料集で所在不明のものが現れることも理解不能とは言い切れない。詳細な比較を行っていないが、三宅と吉田・井之口の翻刻に大きな異同は見られないのも同一の出典にもとづくことを予期させる[二]。いずれにせよ、本研究は原資料を確認したものではなく、以下の検討および引用は三宅に基づく。

「写法」の内容は、編纂事情を説明したごくみじかい前文ののち、品詞およびその下位分類ごとに送り仮名の解説を加え、最後に一覧した表を附録とする（図一）。品詞は、「名辞・動辞・形容辞・副辞・代名辞・接続辞・感嘆辞・居後辞」の八品詞である。形容辞に指示形容辞を認める点、「居後辞」という品詞を認める点が特徴的である。「居後辞」は、

（ガ）（ハ）（ノ）（ニ）（ヲ）（ヨ）（ヨリ）（マデ）抔ノ辞ヲ謂フ、名辞ノ後ニアルヲ以テ、姑ク此名ヲ附ス、凡ソ是等ノ辞ハ、固ヨリ仮名ニテ写スハ勿論ナレドモ、此中漢字ヲ用フル者数字アリ、左ノ如ク送仮名ヲ附ス、

為メ　於テ　以テ　ノ類

とするものである（三宅、二二ページ）。指示代名辞も、「我（ワレ）」・「我ガ（ワ）」、「是（コレ）」・「是ノ（コ）」、「此（コノ）」・「此ニ（コ、）」・「此レ（コ）」のごとく送り方で分けている。「明治十六年三月編輯局合議シテ左ノ五条ヲ改正増補ス」（三宅、二四ページ）とあって、五箇条を改めている（以下、「写法」改正と呼ぶ）。修正される五箇条は、㈠動詞連用形転成名詞の活用部分を送る、㈡・㈢シク活用形容詞および同語源の動詞はシから送る、㈣形容動詞中、接尾辞のカなどは送る、㈤は「やや」「ほぼ」など重音の副詞にかんする増補である（用語は現代の用語法的に改めた）。

担当者の内田嘉一[三]は、一八七八年に文部省報告課（のち編輯局に改組）勤務を命ぜられ、八四年に辞して民間で教科書編纂に携わるようになるまで務めていた[四]。大槻文彦らの文法会にほとんどの回に出た一員でもあり（小岩　二〇〇五）、本法編纂を主導する実力はあったものと思われる。また、『絵入智慧の環』（古川正雄）の蔭の編者と名乗ったという逸話もあり（新保磐次「三十年前の田舎の学校」『教育界』一・三、一九〇二、一四一ページ）、たしかに「居後辞」のほかは『絵入智慧の環』と品詞やその中身が類似している点は多い（「写法」の記述が簡素なため断定できない部分もある）。今後の検討に俟ちたい。

二　たとえば、末尾の表のうち、本文中の「形容辞」ではなく「形容詞」と注釈なくされている点。

三　安藤（一九九四）は子孫に取材し、一八四八年生、一八九九年歿であることを明らかにした。安藤（一九九四）は号を自署などに現れる「晋斉」とするが、より適当かと思われる「斎」で自署したものもあり、使い分けに拘らなかったものと見て、ここでは「斎」とする。

四　国立公文書館所蔵『任免裁可書・明治二十九年・任免巻三十四・判任官以下』「内田嘉一内閣属ニ被任三級俸下賜並ニ記録課勤務被命ノ件」（明治二十九年四月八日）添付自筆履歴書による。ここではすべて属官で、三宅に奏任編輯官であったとする（一六ページ）のは不審。

三、「送仮名写法」と中根淑（きよし）

「写法」制定に中根淑が関与したことは、のちに中根の著した『送仮名大概』（一八九五、以下『大概』）趣意に述べられている。中根は『日本文典』附録「送リ仮名法則」（以下「法則」）において送り仮名の規則をはじめて提唱した人物であるが、ここでは、「写法」の成立にどの程度の中根の関与が認められるか考えたい。また、『大概』では、中根在職時文部省編輯局長であった西村茂樹との議論として、「法則」での厳格な規則は動かせないかと問われ、法則も絶対ではなく便利を取るべきよしと答えたと述べられている（五－六ページ）。これは「写法」議論の席上と考えられ、「写法」と『大概』の関係についても検討したい（表一に「法則」を起点とした対照表を示す）。

「法則」は、中根淑の著『日本文典』（一八七六年）附録の一節である。『日本文典』にくわしく立ち入る暇はないが、とくに品詞や構成などにおいて開成所版『英吉利文典』を日本語に当てはめたものであること（山東 二〇〇二a）、西周の文法学説との係わりがあること（服部 二〇一七、随所）などが指摘されている。

「法則」と「写法」との相違点は、「法則」は通則ですべてを律しているのを、「写法」では通則を明確に立てず、便宜に任せているという点がまず大きな相違である。また、「コノ」などの「ノ」を「法則」では後詞とするが、「写法」ではひとくくりに代名辞とする点も、考え方の相違として目につく点である。動詞連用形転成名詞の扱いが「写法」では名詞に準じて送らないとしていたのを改正して「法則」と同じものにしたことは注意される。

共通点もあり、とくに、動詞について「変化ハ声ヲ送ル」（「法則」下七四丁表裏）、「変化ノ字ヨリ之ヲ写ス」（「写法」一七ページ）と共通の表現を取る点、品詞において、「居後辞」の内容が中根『日本文典』や大槻文彦の「天爾遠波」（服部 二〇一七、一〇四－〇五ページ）と近いものである点は注意される。後者は大槻文彦も当時編輯局に在ったことをみれば、中根の影響とは断言できないが、無関係ではあり得まい。

「写法」と『大概』の異同では、副詞の説がほぼ『大概』が「写法」を踏襲するのが注意される。そのいっぽうで、「写法」では明確化されていなかった諸点が『大概』では明確化されており、複合語前項で単独語として送るべきばあいの規定が「写法」にはなかったが、『大概』では原則に従って送るべきとするとの差がある。

『日本文典』と『大概』でおおきく文法説として変るところはないが、形容詞にシの活用を認めるようになった点は見逃せない点である（山東 二〇〇二b、六四－六五ページにも指摘がある）。「写法」の影響とは言い切れないが、「写法」改正でシク活用をシから送るようになった点の検討には、中根も同席していたはずであり、文法説を改訂する機縁となったとしても不思議ではない。

四、「送仮名写法」の影響

「写法」は、文部省編輯局において教科書の送り仮名の統一資料として編まれたのは確かだが、流通範囲などが不明のため影響範囲を確実にすることができない。

ここではこころみに、文部省編輯局編『尋常小学読本』巻七（一八八九）の送り仮名について、「法則」、「写法」、同時代官報編纂のために編まれた箕輪醇『送仮字弁』（以下『弁』）[五]の送り仮名法と比較してみる。ここでは、「写法」の規定と他が異なるものを検討することとして、「単純動詞連用形転成名詞」（「写法」改正にて一字可送、その他不可送）・「和語副詞のうちで副詞の語尾を持たず漢字一字で表されるもの」（「甚だ」の類。「法則」・『弁』不可送、「写法」一字可送）、「其の」「此の」（「法則」・『弁』可送、「写法」不可送）の三種を検討する。結果は表二の通りである。とくに「写法」改正分の適用にばらつきがあるが、おおむねにおいて送り仮名は一貫していることと、「写法」と一致していることが確認でき、編纂実務上の指針となっていたことが確認できたと言ってよい。これは、伝来の「写法」テキストがおおむねにおいて信頼できることをも意味しよう。

「写法」が民間の教科書編纂のために提供されたか、はっきりはしないが、そのような形跡は残っていないと言うべきである。三宅は野に転じて後の内田が自身の名において編纂した小学読本で「上ボル」・「下ダル」と書くが徹底していないと述べる（一六ページ）。そのほかの民間小学読本においても、本法のおおむねには適っていても細部にまで従ったものを見ないのは、本法が単独で流通せず、『尋常小学読本』をつうじて範となったことを示唆するものであろう。

五、結論

本発表では、「送仮名写法」の送り仮名法史における位置づけを考えるべく、資料的問題、前後の送り仮名法、具体的には中根淑のものとの関係、さらに送り仮名整理実用への影響について検討した。その結果、「送リ仮名法則」からの影響のもと発展させていること、中根の『送仮名大概』にも影響を与えていること、あくまで内部資料であって文部省外への影響は間接的であったことを確認した。以上のことから、「送仮名写法」は、送り仮名法史において独自の位置を占め、また、実地における影響力を持ったものと評価すべきものである。

送り仮名法史においては、実地に応用されたものと提案とが同列に扱われることが多かったが、それだけではその提案がなされた背景を等閑視することにも繋がりかねない。本発表では、その点を考慮して、送り仮名法のひとつの提案を検討した。

内田嘉一は、かなのくわい幹部でもあって、その関係性にまでは考えきれなかった。この点の追求は、この規則が内田個人のものであるか、公僕としてのものであるかというところ

五　箕輪醇『送仮字弁』については、岡田（二〇二四）で部分的に検討した。

もふかく考えあわせるべきことであろう。他日に期したい。

資料

三宅卓郎（編）『送り仮名資料集』明治書院、一九六二（三宅）

吉田澄夫・井之口有一（編）『明治以降国字問題諸案集成』風間書院、一九六二（吉田・井之口）

中根淑『日本文典』一八七六　国立国会図書館 815-N452n2

――『送仮名大概』一八九五　国立国会図書館 811.56-N452o

箕輪醇『送仮字弁』〔太政官文書局〕、一八八三　国立国会図書館 811.56-M516o

文部省編輯局（編）『尋常小学読本』巻一、一八八九　小学読本便覧四所収

参照文献

安藤隆弘（一九九四）「福沢諭吉と内田晋斉」『川村学園女子大学研究紀要』五・一

岡田一祐（二〇二一）「いろはならざる画一化のゆくえ　「かなのくわい」の画一化試案」『近代平仮名体系の成立　明治期読本と平仮名字体意識』文学通信

――（二〇二四）「活版印刷は十九世紀の文字・表記をどのように変えたと言えるか」第十五回十九世紀文学研究会、法政大学

久保田篤（一九九八）「明治初期の送り仮名」『成蹊大学文学部紀要』三三

倉野憲司（一九四三）「送り仮名について」『国語と国文学』二〇・六

小岩弘明（二〇〇五）「大槻文彦日本文典立案過程の痕跡（その二）　文法会の実相を探る」『一関市博物館研究報告』八

山東功（二〇〇二a）「洋式日本文典の研究　中根淑『日本文典』について」『明治前期日本文典の研究』和泉書院、二〇〇二（初出　一九九九年）

――（二〇〇二b）「送り仮名法制定経緯について」『女子大文学　国文篇』五三

――（二〇〇三）「送り仮名法と国語調査委員会」『国語文字史の研究　七』和泉書院

服部隆（二〇一七）『明治期における日本語文法研究史』ひつじ書房

文部省図書局国語課（一九四一）「従来の送り仮名法に関する調査研究（未定稿）」（三宅、資料六）

図一　送り仮名一覧（三宅、二三ページ。改正前であることに注意）

表一　「法則」と「写法」・『大概』の対応表（片仮名を平仮名に改めた）

「法則」	「写法」改正	『大概』
第一　変化の声を送る者　動詞等活用部を送る	**名辞**　「「送仮名一字を附す」（改正） **動辞**　「皆其語尾変化の字より之を写す」 「但一字にして数訓あり、誤読し易き者は、便に従て語尾の上より移す」 「也、被［らる］、令［しむ］、為［す・せ・し］等の字は皆仮名にて写し、本字を用ひざるを可とす」 「動辞変化の正例に依らざる者、即ち（行きて）を（行い［ママ］て）［…］と読むの類いは、皆単に（て）の一字を附して、（い）（ん）（つ）の字を省く［…］又（重［おもみ］す）の（重［おも］んず）［…］と成りたるは、皆下に（ん）の字を附して写す」	※転成はもとの品詞に従うとの通則あり **名詞**　動詞転成名詞 **動詞**　「変化の文字より送る」、「書かす」などの活用の転や延言のあるものは元来のところから送る
第二　語中の声を送る者　接尾辞を送る（名詞、副詞、接続詞等）	**名辞**　「第三種　形容辞より転じたるものに、三種あり、一には語尾に（さ）の字を帯びたるもの、［…］」 **副辞・接続辞**　左記参照	**形容詞**　さ・みなどの接尾辞を送る
第三　語中の声を送らざる者　名詞・代名詞・形容詞・副詞等送らないもの（後詞を除く）	**名辞**　第一種　本然のもの **形容辞**　第一種（ク活用形容詞）、第二種（シク活用形容詞）、第三種（形容動詞）（「法則」にいう後詞を含みうる） **副辞**　第一種　本然のもので本字一字のものは送るが、本字二字で語尾変化によらないものは送らない 第二種　名辞にニを添えたものは一字送る 第三種　動辞が転じたものは二字送る 第四・五種　転成副詞や複合表現はもとのものに従う **代名辞**　本文参照 **接続辞**　本字二字は送らない、それ以外は慣例に従って送る	**名詞**　元来のもの 読みやすさのために送るものもあり **代名詞**　すべて送らず **形容詞**　「し」・「（し）き」、「（や）か」を送る **副詞**　原則一字を送る（誤読の恐れのないもの、本字二字のものは送らない） 動詞の転は変化のところから送る **接続詞**　副詞に倣って送る
第四　規則外の者　語の組合せだが送らないもの（雖［いへども］・而［しかうして］の類）	**接続辞**　雖も　而して **副辞**　以て	右記原則に従って送る

表二　『読本』中の送り仮名との適合表記種（平仮名表記は数えない）

	転成名詞（全八種）	和語副詞（全二十種）	其の・此の（全二種）
「法則」	五	二	○
「写法」当初形	五	一八	二
「写法」改正	三	—	—
『弁』	五	二	○

キリシタン資料のタ行二重子音表記
―バレト写本を中心に―

柄田 千尋（お茶の水女子大学大学院生／日本学術振興会特別研究員 DC1）

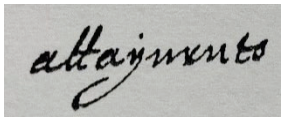
1. はじめに

「バレト写本（ヴァチカン図書館所蔵 Reg. Lat. 459）」は、1590 年に来日したポルトガル人宣教師マノエル・バレトが 1591 年に九州地方で作成したキリシタン資料である。全 384 丁の大部の写本で、福音書・聖人伝などが手書きによるローマ字綴りの日本語で記されている。

この資料のローマ字表記にはキリシタン版と異なる表記が複数見られる。例えば、micando（帝）のように濁音前鼻音が n や符号などで表される例や、canho（肝要）のように連声を表す用例などがある。またバレト写本の四つ仮名を調査した川口（2000）では、当時のポルトガル語の音韻体系に存在しなかった破擦音を書き誤った例の多さから、写本の成立過程にポルトガル人による音声の聞き取りが介在した可能性が指摘されている。

ところでバレト写本で直音のタ行破裂音タ・テ・トは、基本的に ta・te・to と表記されるが、稀に子音 t が 2 つ連続した表記で現れる[1]。（1）に具体例の一部、**【画像 1】**に画像を挙げる[2]。

（1）　matta（また、209v03[3]）、vomotte（面、059r20 など）、atto（後、013r13）



【画像 1】attayuruto
（与ゆると、203v20）

本発表では、タ行直音の子音が 2 つの t で表記されている表記を、タ行二重子音表記として（以下では簡略化して「tt 表記」と呼ぶ）、その生起要因を検討する。

2. 先行研究とその問題点

先行研究で示されてきた見解は、以下（2a～2c）の三説に分けられる。

（2）a. 高アクセントに基づいて記された表記であるという見解（土井 1963：234）
　　b. 二重子音の部分が強めの促音、glottal stop のように聞こえた可能性（福島 1975：20）
　　c. 二重子音がアクセントに基づき二様に現れ、アクセントの音節に二重子音が来るもの（第Ⅰ類）、アクセントの音節の直後に二重子音表記が来るもの（第Ⅱ類）があるとする見解（森田 1976）

（2a）の高アクセントとの対応説、（2b）の促音表記説は、いずれも推測として述べられるにとどまり、詳しい検証は行われていない。

（2a）の検証として、バレト写本が書写された時期と比較的近い『平家正節』のアクセント[4]と tt 表記の語を対照させたが、高アクセントとの明確な対応関係は見出せなかった。『平家正節』と対照できた 11 語のうち、tt の音節が高拍と対応したのは 7 語（attari 辺り、mottomuru 求むる など）であり、4 語は低拍と対応していた（fatta 旗、vomotte 面 など）。

また（2b）の促音表記であった場合、他のキリシタン版資料などのローマ字表記にも促音が表示されるはずであるが、調査の限りではこうした例は見られない。バレト写本の成立地である九州方言では促音だったという可能性も考えがたい。長崎の潜伏キリシタンが口伝で伝えてきたオラショ（祈りの言葉）が記録される『おらしよの翻訳』（1600 年、長崎）を参照したところ、バレト写本で「gojotten」と表記される「御上天」が「御じやうてん」と記されており、「上」が長音であったことが考えられるからである。現代語の研究成果にはなるが、『九州方言の基礎的研究』（風間書房、1969 年）でも、熊本・長崎における特徴的な促音の性質は報告されていない。

---

[1] 用例数は計 97 例（次頁に後述）、タ・テ・トの用例数全体に対する出現率は 1%未満である。
[2] 画像はバチカン図書館蔵資料の複製を使用。
[3] 英数字はバレト写本の丁数・表裏・行数である。r は表、v は裏を表す。
[4] 『日本語アクセント史総合資料　索引篇』（東京堂出版、1997 年）を使用した。

（2c）の説で森田氏はコリャード『西日辞書』自筆稿本の語のアクセント位置と二重子音表記の生起位置が相関することを指摘して、両者を対照すると二重子音表記の約 3 分の 2 が第Ⅰ類・第Ⅱ類に含まれると述べる。しかし、アクセントと二重子音表記との対応関係が二通り存在するという点やアクセントを符号で表さず二重子音表記で表していたとする点には不可解さが残る。

以上のように先行研究（2a～2c）にはいずれも問題点があり、tt 表記は促音・アクセントなどの音声とは関係しないと考えられる。したがって以下では、tt 表記の各具体例における tt の分布を調査した結果をもとに、他の生起要因について検討する。

3. 調査資料・調査対象

デジタル・バチカン・ライブラリーの画像資料[5]を用い、バレト写本 1r～368r の日本語本文・注記を対象に、直音のタ・テ・トの子音が tt で出現している用例を集めた。破擦音チ chi、ツ ccu は t を用いないため、調査対象としていない。バレト写本の 132r～155v まではバレト以外の人物によって書かれた別筆部分で、この部分も調査の対象に含めている。

4. 調査結果

バレト写本で tt 表記の用例数は全 79 例（自筆部分 78 例・別筆部分 1 例、異なり語数 32 語）である。以下（3）～（5）にタ・テ・トそれぞれの内訳と具体例を示す（右端の数字は、tt 表記の用例数／語全体の用例数）。

（3）**タ tta　29 例（異なり語数：8 語）**

attaye（与へ、203v12, 205v14 など）21/99
attatte/attate（当たって、071v14, 133r10(別筆), 356v06）3/17
attari（辺り、247v11）1/29
attayuru（与ゆる、203v20）1/9
matta（また、209v03）1/352
quittate（来たって、028r12）1/22
fatta（旗、003v01）1/2

（4）**テ tte　45 例（異なり語数：19 語）**

gojotten/jotten（御上天/上天、117r15 など）16/25
vomotte/uomotte（面、059r20、120v10 など）5/14
sutte/satte（ママ）（捨て、095v12、192v08）2/77
totte（～とて、002v07、013v11）2/225
vtte（打て、226r11、288r18）2/4
ytte（居て、231r07、330r17）2/11
cocoroatte（心宛て、295v11、313r01）2/2
tatte（立て、331r09、355v09）2/50
mitte（見て、347r07、361v04）2/104
quitte（聞いて、017r12）1/37
votatte（追ったて、335r03）1/1
tatte matte（奉（たてま）って、070v17）1/5
tatte maccureba（奉れば、129v06）1/35
yudanette（委ねて、130v09 枠外）1/1
tatte（建て、160r13）1/12
guoitten（ママ）（仰天、254v01）1/13
tatte maccuru（奉る、288v11）1/341
quuatatte（企て、364v12）1/9
miyette（見えて、240r15）1/7

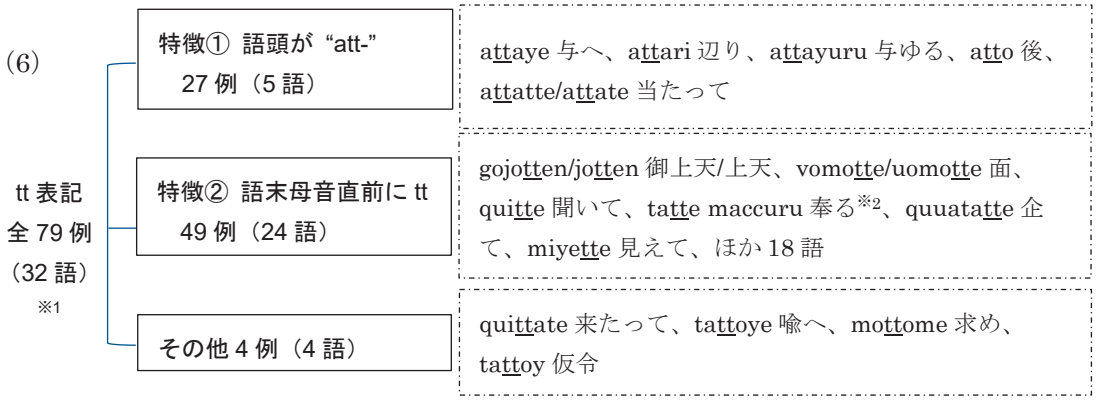
（5）**ト tto　5 例（異なり語数：5 語）**

atto（後・跡、013r13）1/54
tattoye（喩へ 016r18）1/45
motto muru（求むる、312v09）1/6
tattoy（仮令、328r06）1/12
mottome（求め 266v09）1/18

attaye（与へ）21 例、(go)jotten（(御)上天）16 例のように比較的出現数の多い語彙もあるものの、全体的には各語につき約 1, 2 例ずつ広く分布しており、特定の語に偏って生じているわけではない。

ここで、（3）～（5）に挙げた各用例の文字配列に注目すると、（3）の tta の用例で attaye（与へ）、attari（辺り）など、語頭に“att-”が来る語が目立つことに気づく（特徴①）。また、（4）のテ tte の用例を中心に、vomotte（面）、mitte（見て）など、語末母音の直前に tt 表記が見られる傾向も確認される（特徴②）。この特徴①②に基づいて tt 表記の全用例を分類すると、以下（6）に示すように、79 例中の 72 例（32 語中 28 語）が①②のいずれかに当てはまる。

[5] https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.459 を使用。（最終閲覧日：2024 年 4 月 7 日）



※1「atto（後）」は特徴①②の双方に当てはまるため、①と②両方の用例数・語数に数えている。
※2「tatte maccuru（奉る）」のように、一語中にスペースが生じているものに関しては、「tatte」で一つのまとまりとみなし、語末母音直前に tt が生じる例と同様のものとして数えた。

また、バレト写本書写の 2 年後に同じくバレトによって作成された『天草版平家物語難語句解』（1593 年）でも、tt 表記の用例が計 4 例確認される。(7) に示すように、4 例全てが特徴①②のいずれかに合致する（カッコ内には翻字、ページ数・左右・行を示す）。

(7) タ tta 1 例：attata（当たった、56 枠外 23）―特徴①に合致
テ tte 3 例：qitte（着て、39 左 14）、mucotte（向かうて、53 左 7）、tatte naraburu（立て並ぶる、11 右 19）―特徴②に合致

こうしたことから、tt 表記の出現位置には、特徴①②に示す文字配列の傾向が関わっていると考えられる。

5. 考察

5.1 16~17 世紀辞書類におけるラテン語・ポルトガル語語彙の tt

tt が出現するこの配列上の傾向（特徴①②）は、当時のラテン語やポルトガル語の語彙にも同様に見られるものである。『対訳ラテン語語彙集』[6]を用いて、『日葡辞書』（1603-04 年）収載の tt を含むポルトガル語語彙を検索したところ、tt を含む用例は計 12 例（9 語）であった[7]。(8) に結果を示す。また、そのうち特徴①②に当てはまる例は計 11 例（8a, 8b）である。

(8) **tt を含む『日葡辞書』ポルトガル語語彙（12 例）**
a. **語頭“att-”（＝特徴①，7 例）** attẽção 2 例, attonito 2 例, attribue, Attentar, attributo
b. **語末母音直前“tt”（＝特徴②, 4 例）** Setta 2 例, Gotta, remittir
c. **その他（1 例）** guttural

また同様に『対訳ラテン語語彙集』を用いて、バレト写本作成周辺年間に出版されたラテン語・ポルトガル語の辞書 6 種類(a)~(f)[8]のラテン語・ポルトガル語部分それぞれで特徴①②に当

[6] Latin Glossaries with vernacular sources 対訳ラテン語語彙集（豊島正之氏作成）https://joao-roiz.jp/LGR/（最終閲覧日：2024 年 1 月 31 日）2024 年 2 月以降サービス停止予定。
[7] 語彙集で検索を行った後、『キリシタン版日葡辞書 カラー影印版』（勉誠出版、2013 年）で実際に表記を確認した。
[8] 辞書(a)~(f)について、豊島氏作成『対訳ラテン語語彙集』に記されていた資料情報を引用する。 (a) Calepinus1592 ： Calepinus polyglott dictionary (1592) Venezia edition ： (Latin only) 、 (b) Cardoso1592LP：Cardoso：Latin to Portuguese dictionary (1592)、(c)Cardoso1592PL：Cardoso：Portuguese to Latin dictionary (1592, annex to the above)、(d) LLJ1595 ： Dictionarium Latino Lusitanicum ac Japonicum (1595) Amacusa (Jesuit Mission Press)：(Latin-Portuguese-Japanese)、(e) Nizolius1595：Nizolius：Thesaurus Ciceronianus (1595) Basel edition (Latin only)、(f)DictJP1603：Vocabulário da língoa de Japam (1603-1604) Nagasaqui (Jesuit Mission Press) ： (Japanese-Portuguese)

てはまる延べ語数を集計し、tt を含む用例全体に占める割合を算出した。その結果、全ての辞書で特徴①②を含む語彙の割合が半数以上を占めていた[9]。結果を【表 1】に示す。

【表 1】ラテン語・ポルトガル語辞書類における tt 出現数

	(a) Calepinus 1592	(b) Cardoso 1592 (L-P)		(c) Cardoso 1592 (P-L)		(d) LLJ1595 (羅葡日)		(e) Nizolius 1595	(f) DictJP1603 (日葡)
Lat.|Port.	Lat.	Lat.	Port.	Lat.	Port.	Lat.	Port.	Lat.	Port.
全 tt 数	463	280	29	75	11	183	33	785	12
①用例数	220	108	19	20	3	62	17	270	7
②用例数	71	109	3	41	5	45	13	313	4
①②／全 (%)	291/463 (63%)	217/280 (78%)	22/29 (76%)	61/75 (81%)	8/11 (73%)	107/183 (58%)	30/33 (91%)	583/785 (74%)	11/12 (92%)

ポルトガル語とラテン語で tt 出現傾向が類似する理由は、以下（9）に引用する池上（1963：83）に言われるように、16～20 世紀のポルトガル語の綴りがラテン語の影響を受けていたことが関係していると考えられる。

（9） この時期（―発表者補：16～20 世紀）の特徴は所謂ユマニト達の活躍によって、ラテン語、ギリシャ語のポルトガル語との関係が認識され、それらの言語へ戻る運動が展開された。その結果ポルトガル語の正書法もラテン語、ギリシャ語のそれに能う限り近づけようとする努力が行われた。（池上 1963：83）

つまり、バレト写本に見られる tt 表記は、ラテン語の影響を受けたポルトガル語の表記が、ローマ字綴りの日本語において反映されたものと推測されるのである。

5.2 ポルトガル語文法家による文献の記述

17~18 世紀のポルトガル語文法家による文献[10]の記述も、バレト写本の tt 表記がポルトガル語の表記に影響されて生じたことの傍証となる。1631 年にポルトガル語学者 Alvaro Ferreira de Vera が著した“*Orthographia ou Modo para Escrever Certo na Lingua Portuguesa*”（ポルトガル語の正しい書き方）ではポルトガル語の綴りにおける語末の t の連続について書かれた箇所がある。以下、（10）に引用する（以下、上は原文、下は和訳。下線・和訳は発表者による）。

（10） ［i］Outras dobrão per significação, que saõ os diminutivos, que na nossa lingua acabamos em Te; ［ii］que parece não podemos escrever bem sem dobrar, o T, segundo a orelha nos pede: como fraquette, livrette, pequenette, pãnette: & outros assi, ［iii］que pera significarem diminuição acabamos nestas terminaçoẽs,

［i］他には、意味のために重複する語がある。これは指小語で、私たちの言語では Te で終わる単語である。［ii］これらの単語は、聴覚が私たちに要求するために、T を重複させなくてはうまく書けていないように思われる。例えば、fraquette, livrette, pequenette, pãnette などがある。これらの単語は、［iii］縮小を意味するためにこのような語尾で終わっている。

（Vera1631：28v）

下線部［ i ］［iii］から、ポルトガル語で語尾が te で終わる語が指小語（diminutivo）であることが分かる。また、下線部［ii］で、te で終わる語について「que parece não podemos escrever bem sem dobrar, o T （T を重複させなくてはうまく書けていないように思われる）」とあることからは、バレト写本の「vomotte（面）」「miyette（見えて）」なども、このようなポルトガル語の表記意識から発生したことが窺える。

---

9 資料調査の制約上、(a)～(e)の辞書については現時点で原典調査を行えていない。そのため、表に示した数値はあくまでも検索結果に基づく概数である。

10 ポルトガル語文法家の文献を探すにあたり、丸山（2020）、アラウジョ（1990）を参照した。

また、バレト写本より 150 年近く後の文献にはなるが、1734 年に Madureyra Feijo が著した“*Orthographia ou Arte de Escerver e Pronunciar com Acerto a Lingua Portugueza*”（ポルトガル語の正しい書き方と発音）にもポルトガル語の綴り tt に関して以下（11）の記述がある。

（11）　Das palavras, que se escrevem com dous Tt.
2 つの tt とともに書かれる語について

206　O uso de dous tt nas palavras portuguezas he só：por imitaçaõ, ou analogîa das palavras latinas, c saõ as seguintes：
ポルトガル語の単語に 2 つの tt を使用するのは、ラテン語の単語を模倣したり、類推したりするためだけで、以下のようなものがある。

Attemperar.	Attráctivo.	Enfittar.	Remittir.
Attençaõ.	Attrahir.	Fitta.	Sétta.
Attender.	Attribuir.	Intrometter.	Sétte.
Attentar.	Attributo.	Omittir.	Settenta.
Attenuaçaõ.	Attriçaõ.	Otta, Lugar.	Séttecentos.
Attenuar.	Attrito.	Permittir.	Transmittir.
Attónito.	Commetter.	Prometter.	
Attrácçaõ.	Demittir.	Remetter.	

（Feijo1734：96）

上記（11）ではポルトガル語の単語における tt の綴りはラテン語の単語の模倣や類推であると明記されている。この記述は、5.1 で示したように、ポルトガル語で tt を含む単語の綴りの特徴（＝tt 表記の特徴①②）がラテン語語彙と多く共通することと符合する。実際に（11）で Feijo が列挙する 30 語を見ても、掲出語が偏っている可能性には注意する必要があるものの、14 語が“att”から始まり（特徴①）、14 語が語末母音の直前に tt が来ている点（特徴②）で、バレト写本の tt 表記の特徴と一致する。このことからも、バレト写本の tt 表記がポルトガル語の表記からの影響で生じている蓋然性が高いことが窺える。

5.3. バレト写本後半部で tt 表記（“att-”）の出現率が上がることについて

さらに写本内の tt 表記の出現分布からも、tt 表記がポルトガル語の表記の影響で生じたことが裏付けられる。tt 表記の用例は写本全体に広く分布するが、特徴①である語頭に“att-”が来る例については、後半部の 200 丁周辺以降から特に出現が増えることが確認される。語頭が“att”の語の中でも用例数の多い「attaye」（与へ、21 例）の出現頻度を**【表 2】**に示す。

【表 2】50 丁ごとの attaye 出現頻度

	001r-	051r-	101r-	151r-	201r-	251r-	301r-
ataye	15	11	3	10	5	16	18
attaye（tt）	0	0	0	0	16	4	1
tt 出現頻度	0%	0%	0%	0%	76%	20%	5%

【表 2】から分かるように、201 丁以降、attaye の出現頻度が大幅に上がっている。特徴②の語末母音直前に tt が来る用例が全体的に分布する一方で、なぜこのように語頭に“att”をとる用例が 200 丁以降に偏るのかについては、現時点では考察が及んでいない。ただ、バレト写本聖人伝後半部にいくつかの特異な表記が偏って生じることについては、川口（2002）にも既に報告がある。川口氏は“att-”については触れていないが、複数の特異な表記が写本所収聖人伝（164 丁～）の中でも特に後半部に現れることを指摘している。また川口氏は、ゴを guo と表記した例は当時のポルトガル語で go と guo の発音が区別されなかったことによるもの、ウを hu で表記した例はラテン語起源のポルトガル語で hu がウと発音されたことの影響、カを cha で表記した例は当時 cha を「カ」と発音した可能性の高いラテン語の影響であること等を推定している。

このように、語頭に“att”をとる用例が後半に集中するという分布は、ラテン語起源の綴り

方の影響を受けた表記がバレト写本の聖人伝後半部に頻出することと合致する。このことからも、バレト写本の日本語における tt 表記はラテン語の綴り方に基づいたポルトガル語表記からの影響で生じたことが裏付けられる。

6. まとめ・今後の展望

以上では、キリシタン資料の一つであるバレト写本の tt 表記の用例をもとに、その生起要因について検討してきた。先行研究において tt 表記はアクセントや促音と対応した表記であると考えられてきた。しかし、tt が生じる文字配列の傾向、当時のポルトガル語やラテン語の語彙、ポルトガル語文法書類、写本中の tt の分布を踏まえた結果、この表記は音声の反映なのではなく、ラテン語の影響を受けたポルトガル語の綴りの反映であることが明らかになった。

バレト写本のローマ字綴りでは、聞いた通りの日本語音声が積極的に書き記されていたと言える。濁音前鼻音（micando［帝］）、母音の無表記（tasque［扶け］）など音声を反映した表記が写本全体を通して出現するからである。資料の成立背景に鑑みても、バレト写本の作成は宣教師の日本語学習の一環であったと考えられており、日本語の音声を可能な限り正確に表そうとしていたことは十分に想定できる。そうした中で、母語の表記の慣習から抜け出せず、たびたび無意識的に、条件反射のような形で表記したのが tt 表記であったと考えられる。母語の綴りの慣習を表記に反映させてしまったとしても、あくまでこれがポルトガル語の綴りの慣習に由来する表記であって日本語の音声差を表した表記ではないことは、バレトが自らの母語と日本語の知識を総合すれば、自身で理解できたことであろう。それゆえに母語の綴りの癖がローマ字表記に現れてしまうことは、バレト自身の中でもある程度許容されていた面があったのではないだろうか。ただし、タ行促音でも tt の表記を用いるため、それが抑止力にもなって、tt 表記の出現は少数にとどまることになったのではないかと考えられるのである。

本発表では、キリシタン資料の作成と同時代のポルトガル語の辞書・文法書類を参照することを通じて、宣教師の記した日本語ローマ字綴りの性質の一端を明らかにしてきた。本発表によりバレト写本に書写者の母語干渉が現れていることを強く裏付けることができた。母語干渉としては音韻体系の干渉がしばしば取り沙汰されるが、母語の表記もまた影響を与えることがあることを示し得たと思われる。他のキリシタン資料においても音韻のみならず表記の観点から母語干渉を検討することは、今後の研究にとって有効なアプローチになると考えられる。

【調査資料】 Latin Glossaries with vernacular sources 対訳ラテン語語彙集 https://joao-roiz.jp/LGR/（最終閲覧日：2024 年 1 月 31 日）／秋永一枝他編（1997）『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版／デジタル・バチカン・ライブラリーhttps://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.459（最終閲覧日：2024 年 4 月 7 日）／天理図書館編（1953）『善本写真集二 きりしたん版』天理図書館／勉誠製作（2013）『キリシタン版日葡辞書 カラー影印版』勉誠出版

【参考文献】 Moraes Madureira Feijó, João de（1734）*Orthographia; ou, Arte de escrever, e pronunciar com acerto a lingua portugueza para uso do excellentissimo duque de Lafoens.* https://archive.org/details/orthographiaoua00feijgoog/page/n7/mode/2up（Internet Archive から閲覧。最終閲覧日 2024 年 4 月 9 日）／Vera, de Alvaro Ferreira de（1631）*Orthographia ou modo para escrever certo na lingua Portuguesa. Com hum trattado de memoria artificial: outro da muita semelhança, que tem a lingua Portuguesa com a Latina.* https://www.researchgate.net/publication/341042684_Orthographia_ou_modo_para_escrever_certo_na_lingua_Portuguesa_Com_hum_trattado_de_memoria_artificial_outro_da_muita_semelhanca_que_tem_a_lingua_Portuguesa_com_a_Latina_de_Alvaro_Ferreira_de_Vera（Research Gate からテキスト PDF を閲覧。最終閲覧日：2024 年 4 月 9 日）／アントニオ・マルティンス・デ・アラウジョ（1990）「ポルトガル語正書法小史（第 18 回南山大学国語学国文学会講演より）」『南山国文論集』14, pp.1-20／池上岑夫（1963）「ポルトガル語の音韻と正書法」『東京外国語大学論集』10、pp.77-95／川口敦子（2000）「バレト写本の『四つがな』表記から」『国語学』51-3, pp.1-15／川口敦子（2002）『バレト写本の研究』（博士論文、京都大学に提出）未公刊／九州方言学会編（1969）『九州方言の基礎的研究』風間書房／土井忠生（1963）『吉利支丹文献考』三省堂／福島邦道（1975）「ヴァチカン写本 Reg. Lat. 459 の日本語表記」『実践女子大学文学部紀要』17, pp.1-22／丸山徹（2020）『キリシタン世紀の言語学』八木書店／森田武（1976）『天草版平家物語難語句解の研究』清文堂

『金光明最勝王経』平安初期点における不読字処理の特徴

柳原恵津子（やなぎはらえつこ・国立国語研究所）

1.　本研究の目的

春日政治は、西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点に見られる、加点が行われず当該字自体を読まない字について、以下のように言及している。

> 大体本文についての逐字訳であつて、而もすべての文字を読んで、一字も残さないのが原則ではあるが、亦国語として不用の文字は省略して読まなかつた。……（略）……例へば或場合の〔而〕〔以〕〔於〕〔于〕〔之〕〔者〕〔與〕等の如きである。しかしこれらと雖も字のその位置で読落してはゆくものの、その上若しくは下の文字の助辞を以て、テ・ニ・ノ・ハ・トなど補足してある場合が多いのである。（春日（1942）研究篇 32 頁）

広く「不読字」と呼ばれるこのような読まれない字について、小林（2017）は「平安初期のような同一時期を通して諸資料に全く加点の無い附属詞や副用詞を不読字とする」「平安中期以降、特定の宗派・流派が同一時期を通して諸資料に全く加点の無い附属詞を不読字とする」と定義する。

小林が「附属詞や副用詞」と限定して述べる理由は、複数の用法がある字の場合、たとえば格助詞「の」（「之」）や副詞「また」（「亦」）相当の用法の場合は不読とする一方、代名詞「これ」や接続詞「また（は）」（「亦」）相当の場合には当該字に加点をして読むという読み分けがされるからである。このような読み分けの具体例は、『最勝王経』平安初期点については春日（1942）研究篇に詳細に記述されており、他の資料に関しても、大坪併治や小林芳規をはじめとした諸先学によって記述されてきた。さらに小林（2017）は、平安初期に不読とされた字が平安初期の末ごろから不読を継承する流派と読み分けを廃して定訓化を進める流派に分岐し、現在「置き字」と呼ばれている「矣」「兮」「於」「于」などを残して当該字自体を読むようになる過程を詳細に論じた。

このように着実に不読字への理解は精緻になりつつあるが、なお不足している点として、計量的なデータに沿った記述に至っていないため、先行の論を前提とした総論的な記述や加点者の語法への理解のあり方、漢文訓読の場で起きた和語の意味範囲の変化に関する記述といった本質的な議論に踏み出せないことが挙げられる。このような視座に立ち、本発表では『最勝王経』平安初期点で不読字処理が行われている字の計量的な把握を行うことを試みる。

2. 調査対象と調査結果の概要

発表者は『最勝王経』平安初期点の訓読文を新しく作成し、デジタル化する機会を得た[1]。そこで本発表では、西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点（全 10 巻）の新たに作成した訓読文を用いて、不読とする例のある字をすべて抜き出し、それらの字に見られる読み分けの様相を整理したい。

調査範囲とした 10 巻分の訓読文には、不読字として処理された例のある字（一部連語）として、以下のものがある。それらは、特定の用法の場合にほぼかならず不読とする字（連語）と、前後の文脈の影響で例外的に不読とされた例が若干例見られる字（連語）とに二分できる。

①統一的に不読とされる字

　於、之、及（、及以、及於、及與）、者、而（、而爲）、從、爲、乃至、與、曰、于

②例外的に不読や読み添えがされている字

　令、以、使、所、雖、將、在、被、未、謂、名、也、如、欲、言

[1] 本資料の巻 1 に関しては勉誠出版刊の影印を参照して新たに作成した訓読文が公開済みであり、残りの巻 2 ら巻 10 についても作成・修正作業を行っている。本発表ではこの新訓読文を用いて調査・挙例を行う。

またこれら①②とは別に、加点例が見られないが、不読とは認め難かったり、不読字処理される用法の幅を検討する必要がある字が、接続表現、副詞を中心に見られる。先に挙げた小林の「附属詞や副用詞」のうちの「副用詞」は実はここに挙げる語群を指すが、不読としなければ訓読文が非文となる①のように決定的な論拠には欠けるため、今後の再検証が期待される語群としてまとめておく。

③加点例がない、もしくはまれだが、不読とは見なしがたい字
　復、亦、又、即（則便）、便、則、若、唯、乃、雖

3.　調査結果と分析

3. 1　①統一的に不読とされる字

①に整理した字のうち、「之」については柳原（2020）で、「者」「字」「於」については柳原（2021）ですでに精査し、「之」「者」「而」「於」に対応する和語として「の」「は」「て」「に」のような助詞のみを補って読む場合には、当該字は不読として先後の名詞や句末に加点を行い、「これ」「もの・ひと」「しかして」「おいて・うへに」といった自立語や自立語由来の形態素を含む読みを記す場合には、当該字自体に加点をする、という傾向がかなり顕著であることを指摘した。

本発表ではさらに「及」「爲」の二字についてやや詳しく見た上で、①に分類される字全体に通じる傾向を整理したい。

3. 1. 1　「及」の場合

表1　最勝王経平安初期点における「及」の訓法

a.接続詞用法	245	不読	読み添えあり「Nと［及］Nと」	94
			読み添え不完全「N（と）［及］Nと」など	7
			例外的な例	1
			読み添えあり「Nも［及］Nも」系	5
			読み添えあり「Nにまれ［及］Nにまれ」	4
			読み添えなし「N（と）［及］N（と）」	101
			用言の並列のため読み添えなし	33
b.動詞用法	19	加点あり	「およぶ」	15
		不読	意訳的な読み添えのある例	4
c.連語	50		及以	46
			及於	3
			及與	1
d.その他	2	加点なし	陀羅尼	1
		本文存疑		1
計				316

本資料に多く見られる「及」の用法は、中国語学で言う接続詞用法と動詞用法の例で、前者の場合は「及」自体は不読として前後の名詞に「と」などを読み添え（(1) ～ (3)）、後者の場合は「及」自体に加点をする（(5)・(6)）。

(1) 餓鬼と傍生と［及］地獄との是(の)如キ苦趣をも悉皆除（せし）メたまふ。(巻 6)
(2) 汝等天主も［及］天衆も（、）　當に此の經王を供養す應し。(巻6)
(3) 有ル男子（にま）レ［及］女人（にま）レ（、）　婆羅門等の諸の勝族にマレの掌を（巻2)
(4) 尓（の）時に佛（、）妙幢菩薩（と）［及］諸の大衆（と）に告はく、(巻1)
(5) 惡夢悉ク皆無ケむ（。）　［及］諸の毒害を消【ケ】サむ（。）(巻9)
(6) 千分にして［之］一〈一〉にも及〈二〉ば不【ず】。(巻3)
(7) 能ク三途の極重の罪と（、）　［及以］人中の諸の苦厄〈一〉とを滅〈二〉す。(巻2)

注意されるのは、(1) ～ (3) のような例とほぼ同数の 101 例に読み添えが見られず（(4)）、「之」「於」の場合に「の」「に」などがほぼかならず読み添えられる（柳原（2020）（2021））のと傾向が異なることである。並列の「と」は日本語文としては無助詞でも非文ではないなどの理由による可能性があるが、検討を要する。また、用言の終止形や中止形を並列させる場合に読み添えを行わない（(5)）。

連語の一部の例としては「及以」が 46 例と多く用いられる（(7)）。接続詞用法の「及」と同様に先後の名詞に「と」が読み添えられる例が多く、不読として読むのが妥当と思われる。

その他、陀羅尼の中に用いられた例（1 例）、本文に誤写が疑われる例（1 例）が見られた。

3. 1. 2 「爲」の場合

表2 『最勝王経』平安初期点における「爲」の用法

a.動詞用法	234 不読	読み添えあり	といふ	24
			として	11
			す（せり…）	6
			います	3
			たり（たる）	3
			ごとし	1
			とある	1
			とおもふ	1
			なる	1
			らる	1
		読み添えなし	（漢語サ変や形容動詞語尾の加点がある例を含む）	12
	加点あり		す、なる、なす	105
			たすく、つくる、かうぶる	16
			よる（よりて…）	11
			といふ	2
			ためにVす	36
b.前置詞用法	155 加点あり		～のために	155
c.接続詞用法	6		もし	6
d.その他	46 熟語・連語		無為、而爲	3
	白文			43
計				441

田島（1999）をはじめとする先学が指摘するように、「爲」は幅広い用法を持つため訓法もかなり複雑な字のひとつである。本資料でも多くの読みがあてがわれ、若干の未整理な様子も見られるが、「爲」自体の用法の幅の広さを考慮すれば、不読とするか否かを含めて用法ごとの読み分けの様相はよく整理されている。

動詞用法の「爲」は原則として「爲」自体に加点して「す」「なす」「なる」と読む（(8)）が、この語は日本語の「す」と同様に幅広い用法を持つため、しばしば意訳的な訓が当てられ、その場合に「爲」は不読とされる（(9)～(10)）。 また、特に仏法を授けるといった文脈で、動詞に前置された「爲」を「ためにＶす」と読み、この場合も「爲」に加点をする（(11)）[2]。動詞用法と並んで「爲」の主要な用法である「～のために」の意の前置詞用法も、「爲」に直接加点をして「ために」と読む（(12)）。また少数ながら仮定を表す用法も見られ、「もし」の読みを「爲」字に加点する（(13)）。そのほか、二字漢語（「無為」）、連語（「而爲」）の例、また繰り返し用いられるため白文のままとされる定型的な表現の例がある。

(8) 熱を患するには痢するを良【ヨ】シと爲【す】（。）（巻9）
(9) 三（つ）の月は是レ春時なり（、） 三（つ）の月をば名（づけ）て［爲］夏といふ（、）（巻9）
(10) 我昔―曾シ［爲］轉輪王たりシときに（、）（巻9）
(11) 便（ち）爲に説（き）て其に開悟セ令メたまふ（。）（巻2）
(12) 是の十千の天子の本願の因縁を、今汝が爲に説かむ（巻9）
(13) 爲【(も)】シ生（せ）未【ヌ】ヤ故し生する（、）若（し）已に生しにシい生すといはば［者］、何ゾ因縁を用（ゐ）ル。（巻5）

3. 1. 3 ①の例全般について

このように、「及」「爲」の場合も、助詞相当の語を補って読む用法では当該字を不読とし、自立語を伴って読む場合には当該字自体に加点をして読むという、柳原（2021）（2022）で論じた字と同様の傾向が見られた。①に分類した字のうちまだ論じていない字に関しても、同様の傾向がかなり明確に認められる（表3）。

「從」「與」「于」に格助詞「より」(14)、「と」(20)、「に」(26) を読み添える場合はこれらの字自体は不読として後接する名詞に助詞を読み添える例がほとんどで、(17)「したがふ」(21)「あたふ」

[2] このような加点のあり方が石山寺本『大智度論』古点にも見られることが大坪（2005）に指摘されており、また『願経四分律』古点にも同様の例が見られ、本資料に特殊な訓法ではないことがわかる。

のように動詞として読む場合にはこれらの字に加点をして読んでいる。ただし「従」に関しては「従」に加点をした例が 56 例中 1 例のみ見られる（(15)）。また、漢語文法で言う副詞用法は「〜によりて」と読まれ、この場合も 10 例すべてが「従」自体に加点している。

表3　『最勝王経』平安初期点不読字用法のあらわれ方

	不読とする用法（読み添える語）	加点する用法
之	助詞用法（の、が、との、など） ※用言が前接する場合は読み添えなし	代名詞用法（これを）
者	助詞用法のうち係助詞「は」「ば」およびこれらを含む連語（いは、をば、といふは、ては、ときには、など）などを読み添えるもの	助詞用法のうち形式名詞「ひと（は）」「もの（は）」で読むもの
而	接続詞用法のうち「て」「して」「に」「にして」などのように機能語のみ読み添えるもの	接続詞用法のうち「しかくして」など「しか」を含んで読むもの
於	前置詞用法のうち「に」「にして」「には」「を」「と」「より」などを読み添えるもの	前置詞用法のうち、「において」「のうへに」「これが」などと読むもの
及	接続詞用法（Nと［及］Nと Nも［及］Nも Nにまれ［及］Nにまれ、など） ※読み添えをしない例も多くあり ※「及以」なども同様 ※前後が用言である場合には読み添えなし 動詞用法（意訳的な読み添え例）	動詞用法（およぶ）
従	前置詞用法（〜より、よりして）	副詞用法（によりて） 動詞用法（したがふ、かなふ）
爲	動詞用法のうち、機能語的な読みを施すもの（といふ、として、す、います、たり、ごとし、とある、とおもふ、なる、らる）	動詞用法のうち、より動詞そのものとして用いるもの（す、なす、なる、たすく、つくる、かうぶる、よる、といふ） 動詞用法のうち、「ためにVす」と読むもの 前置詞用法（〜のために） 接続詞用法（もし）
乃至	「いまし〜にいたるまでに」などと読む例と、後ろの語に「までに」などを読み添える例が混在	
與	接続詞用法（Nと）	動詞用法（あたふ） 前置詞用法（ともに）
曰	「という名である」の意（といふ） ※「曰」に加点する場合も一部あり	「発話する」の意（いふ、いはく、など）
于	助詞用法（に）	φ

「乃至」は春日（1942）、大坪（2001、2005 他）、小林（2017）などさまざまな資料での訓法が報告されているように、複数の読みが見られ、平安初期における訓法を定めがたい連語のひとつである。本資料でも「乃至」自体を「いまし〜にいたるまでにも」のように読む例（(18)）と、後ろの文脈に「までに」などを加点する例（(19)）の双方が見られる。春日（1942）は（19）のような例を「ナイシ」と音読する例とし、大坪の諸論考もこれに準じる判断をするが、多用される機能語的な語を確実に音読する例は本資料には見られず、不読と主張する小林の説の方が従いやすい。

「曰」はあくまで動詞であり、表 3 にあげる助字の用法を持つ字とは異なる。「発話する」の意ではすべて当該字を読むが（(24)）、「〜という名である」の意の場合、当該字を読む例（25）も 9 例見られるが、不読とする例（(23)）は 26 例見られ、こちらが多数である。名称を示す「といふ」が助詞に準じる判断をされていることが興味深い。

(14) 長者子流水も、亦（た）［従］睡ヨリ寤（め）ヌ。（巻 9）
(15) 復（た）更に是の池の中の水は何の處従リか來レルと推求するに、（巻 2）
(16) 一切の諸法は盡ク無常なり（。）　悉ク無明の縁の力に従（リ）て起ル。（巻 5）
(17) 我レ親リ佛に従（ひ）たてまつりて　無量の衆の經典を聞（き）しかども（、）　曾て是（の）

如キ深妙にして法の中に王たることは聞か未【ず】(。)(巻10)
(18) 若(し)復(た)有(らむ)人の、[於]此の陀羅尼を、乃(し)一句に至(るま)でにも、(巻7)
(19) [乃至]盡形マでに、我レ當に擁護セむ。(巻6)
(20) [與]無量百千の婆羅門衆と佛を供養(し)たてまつリ已【ヌ】(。)(巻1)
(21) 此の魚を可一愍【(あはれ)※可愍二字】みて、其に水を與フ應し(。)(巻9)
(22) 顔貌と名稱と與に等(し)キ『ヒト』無(からし)メむ(巻2)
(23) 彼の長子名は[曰]銀幢といふいあり(。)(巻9)
(24) 尓(の)時世尊、大吉祥天女に告(げ)て曰(は)ク、(巻9)
(25) 世尊、我も今亦(た)陁羅尼呪名は無勝と曰〈一〉ふを説〈二〉かむ。(巻7)
(26) [于]時に大地六種に震動す(。)(巻10)

「從」の「より」のように一部例外も認められるものの、これらの字はまとまった数の用例が、統一的に不読とする場合と当該字に加点して読む場合とに読み分けられている。助詞を補う場合に当該字を不読として前後の名詞や句末などに加点するのは、これらの字がなくても名詞に格助詞・接続助詞を加点して読む文脈は多くあるからであろう。これに対して「〜のために」「〜によりて」などを「爲」「從」自体に加点するのは、原漢文中に「爲」「從」のない文脈で「〜のために」「〜によりて」が読み添えられるケースが想定しにくいため、定訓化が進んでいるものと思われる。ただ、だとすれば「曰」の場合に「発話する」の意と「〜という名である」の意とで加点の場所が異なったようなケースの理由を説明しがたく、加点位置が決まる規則についてはさらに検討される必要がある。

3. 2 ②例外的に不読や読み添えがされている語

②としてあげた「令」「以」「使」「所」「雖」「將」「在」「被」「未」「謂」「名」「也」「如」「欲」「言」は当該字自体に加点をして読むことが原則だが、例外的に特殊な構造の文となっているなどの理由でまれに不読とされている例がある字である。このうち「令」「以」は不読とするケースが比較的多く、「令」は266例中10例、「以」は347例中11例が不読である。(27)は「令」の後ろに加え、前に置かれた「解脱す」も使役で読ませており、(28)は「以」以下の名詞を「供養」の目的語として解釈しているため、「以」字を「もちて」とよまず不読としている。「使」以下はさらに不読の例が限られる。これらは定まった訓法とは言いがたいイレギュラーな不読で、①に挙げた字の不読とは性質が異なる。

(27) 常に[於]生死の大海の中ヨリ 一切の衆生の苦を解脱(せし)メ、[令]彼を能ク安隱の路に住(せし)メ 恒に難思の如意の樂を與(へ)たまふ。(巻10)
(28) [以]種種の華と香と寶の幢と幡と盖とを、[而]供養(し)たてまつリ已【ヌ】。(巻4)

3. 3 ③加点例がない、もしくはまれだが、不読とは見なしがたい字

③に挙げた「復」「亦」「又」「即」(「即便」)「便」「則」「若」「唯」「乃」「雖」は、副詞や接続表現として多用されるが、加点されることが極めて少ない。しかし春日(1942)の訓読文がこれらを不読字としないように、「また」「すなはち」「もし」「ただ」「いまし」「いふとも・いへども」と読む可能性を考慮せざるを得ない。このうち「亦」「復」「又」「若」には「は」のみ、「唯」「乃」には「し」のみ加点する例が一定数見られ、「また」「ただ」などの読みを前提とした「または」「もしは」「ただし」「いまし」と読まざるを得ない。加えて、複数の和訓からひとつを選ぶ、活用形を明示するなどの必要性があるケースが①②に比べると少なく、加点されるべき積極的な必要性も乏しいのである。

ただ小林(2017)が「若」の並列用法、「以」の接続用法、条件の「則」、副詞の「亦」などが不読であったのは、和語としての「もし」「もちて」「すなはち」「また」の用法が限られていたためで、平安初期の末からこれらの和語の用法の幅が広がり、定訓化がすすんだと論じたことは重要である。本資料にも「亦」「復」「又」に「は」が加点されるのは並列用法の場合に限られるといった小林説に反しない特徴もみられるが、これらの字の不読字用法の認定は、慎重を期して今後の課題としたい。

4、まとめにかえて

本調査によって、『最勝王経』平安初期点には、当該字の意味が助詞のみに反映される場合には不読とし、自立語を含む和訓で記される場合にはその漢字に直接加点するという傾向が相当程度明確にみられることが確認できた。この傾向はたとえば山田本『妙法蓮華経』方便品、知恩院蔵『大唐三蔵玄奘法師表啓』や大坪ほかによって釈文・訓読文が公開されている平安初期乃訓点資料での加点状況、また『東大寺諷誦文稿』での加点や小字書きの助詞類の挿入部分などにも、ある程度共通する。

(29)［以］仏の［之］知見をもちて衆生に示（さ）むと欲すが故に、仏之【の】知見を以（ちて）衆生に悟（ら）しめむと欲すが故に、（山田本『妙法蓮華経』方便品、126－7行目）

山田本『法華経』では「之」に(29)のように、不読の例と加点の例が同程度見られる。格助詞は名詞に読み添えるという「の」の加点全般に通じる規則と、「之」は格助詞「の」と関係が深いという用法への理解の双方が加点者の中にあったことが窺えるが、この例に比すると『最勝王経』平安初期点は10巻を通して加点の方針が画一的な資料と判断できる[3]。漢字文資料全般に視野を向けると、このような読みが行われていた時代にたとえば10世紀初頭から現存しはじめる記録体の文体が形成されることになる。実字と助字それぞれの理解のあり方が平安期以降の変体漢文にどう影響したかという観点からも、訓点資料における訓法の実態についてのさらなる文体が待たれるところである。

〈参考文献〉

大坪併治（1992）『訓点語の研究』上・下（大坪併治著作集1･2、風間書房、初版は1961年風間書房刊）

大坪併治（2001）『石山寺本四分律古点の国語学的研究』（大坪併治著作集8、風間書房）

大坪併治（2005）『石山寺本大智度論古点の国語学的研究』上（大坪併治著作集10、風間書房）

春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（斯道文庫、ただし、本発表では『春日政治著作集』別巻（1985年、勉誠社）に拠った。）

小林芳規（2017）『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究Ⅶ　変遷の原理』（汲古書院）

田島毓堂（1999）『法華経爲字和訓の研究』（風間書房）

中田祝夫（1969）『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』（風間書房）

柳原恵津子（2020）「平安初期訓点資料における不読字の再検討――コーパス・電子化テキストを用いた訓点語研究の試みとして――」（「国立国語研究所論集」19）

柳原恵津子（2021）「『金光明最勝王経』平安初期点における助辞の訓法の再検討」（「国立国語研究所論集」20）

〈影印本〉　**※書名**（加点年代）：参照した底本

『金光明最勝王経』平安初期点（930年頃）：総本山西大寺篇『国宝　西大寺本　金光明最勝王経　天平宝字六年百済豊虫願経』（2013年、勉誠出版）、**山田本妙法蓮華経方便品**（850年頃）：日本大学総合図書館編『重要文化財法華経方便品』（1981年、日本大学総合図書館影印叢刊7）、**知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓**（860年頃）：貴重古典籍刊行会編『知恩院蔵　大唐三蔵玄奘法師表啓』（1960年、貴重古典籍刊行会刊）、**東大寺諷誦文稿**（830年頃）：築島裕編『東大寺諷誦文稿總索引』（2001年、古典籍索引叢書第8巻、汲古書院刊）、**古文尚書**（延喜（901－923）頃）：東洋文庫監修『国宝古文尚書 巻第三・巻第五・巻第十二 』（2015年、東洋文庫善本叢書7、勉誠出版発売）、**漢書楊雄伝天暦点**（948年）：京都国立博物館編『国宝漢書楊雄伝 第五十七』（2019年、勉誠出版）

付記：本研究は広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」の助成によって行われたものである。

[3] 『漢書楊雄伝』天暦点、『古文尚書』など漢籍の点本で最初期にあたる平安中期のものを見ると、格助詞「之」に関してはすでに加点しているが、神田本『白氏文集』などには不読の例も見られる。仏家と俗家、さらにそれぞれの内部にある流派ごとの異なりもあり、訓法の変化は単線的ではない。

「点」の抽象化について
—近代漢語研究の視点から—

東京大学学生・日本学術振興会特別研究員 DC　奥山（おくやま）　光（ひかる）

１．はじめに

「点」の意味については森山（2000）に詳しいが、「歴史的な検討や位相との関わりなど」は課題とされていた。本発表では、近代漢語研究の立場から、「点」が多様な意味を獲得した経緯についての「歴史的な検討」を試みる。諸資料の用例や、「点」を構成要素とする漢語「視点」の語誌の検討を通して、「「点」の抽象化は日本語の内部における連続的な変化ではなく、すでに抽象的な用法を持っていた英語 point の影響による変化とみられる」ということを明らかにする。

２．先行研究と問題の所在

森山(2000)では、「点」の一般的な定義として「極小性」と「位置表示」が挙げられ、後者が「抽象的な用法にも拡張され」たものとして「数値」「議論をするうえでの位置関係」を表すものがあり、位置を表す側面が抽象化されて、情報内容や属性を全体の中から抽出する「部分性」をもつものもあるとされている。これらの語彙的意味は、「点」を構成要素とする漢語とともに列挙されており、それをまとめると、**表１**のようになる。

表１　「点」の語彙的意味と漢語の例（森山（2000）をもとに作成）

「点」の語彙的意味	漢語の例
極小性	黒点　傍点　斑点　汚点
位置表示	地点　焦点　頂点　交点　分岐点　分水点　支点　中点 基点　起点　終点　拠点　渡河点　極点
数値	時点　沸点　沸騰点　露点　氷点
議論をするうえでの位置関係	立脚点　観点　視点
部分性（情報内容）	論点　力点　重点
部分性（属性）	要点　利点　欠点　弱点　難点　美点　疑点　盲点 問題点　相違点　共通点　反省点

これらの語彙的意味は、「その点」などの形式化した「点」の用法にも連続し、さらにテクストレベルでの「特性の焦点化」という意味にも関連していると指摘されている。

テクストレベルでの「点」について、高﨑（2021）では、「点」はテクスト構成語[1]の１つの典型とされ、『日本国語大辞典』の第１義「大きさがなく位置だけを持つ図形」[2]に由来する「“広がりの無さ”“小ささ”が、簡単さ、あるいは絞られた集約的な感じを連想させるので、論点の簡約化、集約化というテクスト構成を、言述のストラテジーとしたいときに、メタファー的に拡張的使用がなされたように見える」と述べられている。

このように、「点」は「極小性」や「位置表示」から抽象的[3]に「拡張」されて、様々なレベル

[1] 高﨑（2021）では、McCarthy（1991）における text-organizing words に従い、テクストに構成や構造を与える機能を持つ語を「テクスト構成語」と呼んでいる。

[2] 高﨑（2021）はこれを「第１義」としているが、これは「点」の原義ではなく、数学用語として定義されたものである。

[3] 本発表では、「物理空間において「これ」あるいは「ここ」と指示できないもの」を「抽象的なもの」とする。**表１**においては、「議論をするうえでの位置関係」「部分性」がこれにあたる。森山（2000）は「数値」も「抽象的な用法」の例として挙げているが、時計などの目盛りを「ここ」と指示することができるという点で「議論をするうえでの位置関係」等とは一線を画すものと思われるため、本発表では「抽象的な用法」に含めない。また、脚注２に述べた数学的な定義については、「位置」を持つ以上「ここ」と指示することができると考えるが、物理空間において実体を持たないという点で、ある意味においては

で用いられていることが指摘されているが、その拡張が歴史的にどのように展開されたのかという点については未だ明らかにされていないようである。

ただし、両研究ともに他言語との関係の可能性が示唆されている。森山（2000）では今後の課題が次のようにまとめられている。

> 英語でも“on this point (cf. in this respect, in the respect that〜)”といった語法があり、中国語でも、「在這一点上」といった語法があるという。これらは、本来的な認識上の関連性として個別言語の違いを越えて議論できるのか、あるいは、歴史的にもともと何らかの交渉があったのか（中国語の場合）、調査が必要である。

また、高﨑（2021）は、前述のメタファー的な拡張使用に関して、「第１義でない意味をテクスト構成語として使用するような場合は、翻訳語の影響もあるかもしれない」と述べている[4]。

両研究ともテクストレベルでの用法について他言語の影響の可能性に言及しているが、語彙的意味が抽象化する段階ですでに翻訳語の影響があったとは考えられないだろうか。

表１の漢語を眺めてみると、その大半は近代に成立したものであるように思われる[5]。近代のいわゆる新漢語の急増期において、抽象的な意味の「点」を構成要素とする漢語が多く成立したとすれば、そこに西洋語の影響を想定せずにはいられない。そこで本発表では、「語彙レベルでの「点」の抽象的な意味の獲得には翻訳語の影響がある」という仮説を立て、これを検証していきたい。

３．調査方法

前節の仮説を検証するために、次のような調査を行った。

①「点」 および「点」を構成要素とする語の用例を『日本語歴史コーパス』によって収集し、江戸時代以前と明治時代にそれぞれどのような用法が見られるのかを確認する。
②英語の point の多義性について対訳辞書の記述を確認し、①の調査結果を踏まえた上で、明治時代における形式名詞的な「点」の出現との関連について考察する。
③漢語「視点」の展開を概観し、上記の考察についての例証とする。

なお、用例には適宜句読点を施し、漢字は通行の字体に改めた。また、下線は全て発表者が付したものである。

４．『日本語歴史コーパス』による調査

４．１．江戸時代以前における「点」

江戸時代以前の「点」の実態を明らかにするために、『日本語歴史コーパス』を用いて用例調査を行った。語彙素に「点」を含むものを検索[6]し、「点す」「点てる」の類や誤解析を除いた 333 例を得た。

「抽象的」ということもできる。

[4] 「点」の場合、point の音訳語「ポイント」がそのまま使用されることも多く「３つのポイントがあります」等と使用される、テクスト構成のような用法もよく見られる」とも述べている。

[5] 『日本国語大辞典』（第二版）、『近現代漢語辞源』等による簡単な確認をしたが、詳細な調査には至っていない。

[6] 検索条件式は次の通りである。

キー: (語彙素 LIKE "[点點]%_" OR 語彙素 LIKE "%_[点點]" OR 語彙素 LIKE "[点點]")
IN (時代名="1 奈良" OR 時代名="2 平安" OR 時代名="3 鎌倉" OR 時代名="4 室町" OR 時代名="5 江戸")
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="100" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF";

このうち258例が「合点」の例であった。この語は、もとは和歌や俳諧の批評、あるいは承認等に用いる記号を指し、のちに「承知する」「納得する」といった意味で用いられるようになった。また、「点打つ」「点付く」といった表現や、「点者」「即点」等における「点」も、「(極小性を持つ)「点」をつける」という行為が「評価する」という意味を獲得したものと考えられる[7]。

中世までは、漢字の点画や、踊り字などを表す用例が目立っており、これは「合点」が本来示す記号と合わせて「極小性」の典型例と言えるだろう。また、『平家物語』を中心に、「辰の一点」のように時刻を表す用法が見られた。これは**表1**の分類では「数値」に当たると思われる。

総じて、抽象的な「点」を含む漢語や、形式化した「その点」のような用例は見られなかった。

４．２．明治時代の「点」

脚注６の条件式の時代名を「明治」に変えて検索したところ、江戸時代以前には見られなかった多種の漢語が見られたが、1870年代以前には、抽象的な意味の「点」は見当たらなかった。

この時期の二字以上の漢語用例は、江戸時代以前に見られた「合点」等を除けば、主に1872年の教科書『物理階梯』の収録語であり、次のような漢語がみられた。

血温点　支点　重心点　重点[8]　焼点　中和点　昼夜平分点　点線　投著点　二至点　白点　斑点　氷点　沸騰点　力点

これらの漢語における「点」は、いずれも「極小性」「位置表示」「数値」を表している。『物理階梯』はその序文において、訳語は「博物新編、格物入門、気海観瀾等先哲撰用ノモノニ従フ」としており、上記の語もそれらをはじめとする江戸時代後期の資料に典拠が求められる訳語である可能性が高い。例えば、「氷点」「沸騰点」は佐藤（2007）に用例の指摘があり、早くは『気海観瀾広義』に見られる。

（1）意太利亜国ニ於テ、験温管ヲ改正スト雖、氷点、沸湯点ヲ定メザルガ故ニ、宜シカラズ
（川本幸民訳『気海観瀾広義』巻十22ウ、1851-1858年）

近代には主に自然科学の分野において、「点」を含む漢語が専門語として多く成立したと考えられ、その中にはpoint of ~ や ~ pointの訳語として用いられたものがかなりの数あるようである。たとえば、『英和数学辞書』では、次のようにPointの訳語として「点」が多用されている。

（2）Point of contact 触点　Point of intersection 截点　point in perspective 写形術ノ点
Point of sight 視点　Points of the compass 羅針盤ノ方位点　Principal point 主点即図ノ中心
Regression point 岐点　Singular point 独点　Solstitial points 二至点
（山田昌邦『英和数学辞書』より抜粋、1879年）

1880年代以降になると、「欠点」「弱点」「要点」「論点」「争点」など、「議論をするうえでの位置関係」や「部分性」を表す「点」を含む漢語の用例が散見されたほか、形式名詞的な「点」の用例も見られた[9]。

このように、明治時代には**表1**に掲げたような「点」を構成要素とする漢語が出現しているが、その中でも抽象的な意味の「点」を含む語はやや出現が遅れているようである。この、「点」を

[7] これについてはサ変動詞「点ず」との関連が想定される。本発表では十分に触れられなかったが、今後検討していきたい。
[8] ここでの「重点」は、今日でいうところの（てこにおける）「作用点」を表す。
[9] 1880年以前に抽象的な用例が見当たらないのは、コーパスに収録されている資料の性質によるとも考えられるが、少なくとも本発表における調査では後に挙げる1875年の用例（６）を遡る抽象的な「点」の用例を見出せなかった。

含む語彙の増加と、その過程での「点」の抽象化は、江戸時代以前における「点」の様相を踏まえると非常大きな変化である。江戸後期以来、西洋からの知識の流入に伴って非常に多くの漢語が成立したことは周知のとおりであり、「点」を含む多様な漢語の出現もその流れの中に位置づけられると思われる。では、その過程における「点」の抽象化については、どのように説明できるだろうか。

５．翻訳語としての「点」と形式名詞的用法の出現

Oxford English Dictionary で point を引くと、「位置表示」や「極小性」に対応する用法も、抽象的な用法も、14 世紀には出揃っていたようである。すなわち、少なくとも日本における英学の時代において point はすでに多義であり、「極小性」や「位置表示」にとどまらない抽象的な用法を持っていたのである。このことは、近代の辞書類からも見て取れる。

『英和対訳袖珍辞書』の底本として知られる Picard の英蘭辞典 *A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages* で point を引くと、次のように多くのオランダ語の訳語が見られる。

（３）Point s. punt, spits, f. punt, n. zaak, f. ; doel, n. ; kant ; kompasstreek, f. stip, tijdstip, n. staat momstandigheid ; noot, f. toon, m. ; point of view, oogpunt ; to bring to a point, ten einde brengen ; at all points, in alle opzigten. （p.156）

これらは、『英和対訳袖珍辞書』（初版、1862 年）において次のように反映されている。

（４）Point 尖リ、先、事、事物、的、針盤ノ方角、時限、点模様[10]、歌ノ符（文ノ切レヲ示ス シ ル シ）
Point of view 目的　To bring to a point 仕舞フ　At all points ドウ見テモ （p.610）

抽象的な意味には「事」「事物」といった訳語が充てられているが、これは同辞書のほかの項目においても用いられている。

（５）Moot-case-point 公事[11]ノ起ルベキ丁　（p.512）

この例では、英語の point の形式名詞的用法が反映されているものの、そのような point の訳語として「点」が用いられるには至っていないようである。また、（３）の point of view が「視点」と訳されていないことも注目される[12]。

形式名詞的な「点」の用例の出現時期については、「次世代デジタルライブラリー」を用いて調査を行ったところ、1870 年代半ばころのようである。また、1880 年代になると、次の（７）のように『日本語歴史コーパス』の収録範囲にもさかんに見られるようになる。

（６）斯ル邦国ノ制法者ハ、人民ノ為メニ法律ヲ制定スルニ方テ、其志趣ノ傾ク処ハ専ラ罪悪ヲ防止スルノ点ニ多クシテ、之ヲ懲治スルノ点ニ於テハ却テ寡ナシ（何礼之訳『万法精理』六 18 オ、1875 年）

（７）其富裕の点に至ては、アレキサンツリヤの戦勝により得る所の者を加算すれば、之を前時に比して其幾層倍なるを識りがたきも、終に再度美術の改復を望む能はず（「ヒューム氏自由政治論并に評（一）」『東洋学芸雑誌』60M 東洋 1881_01003, 23240）

[10] 初版では「点模様」が一続きになっているように見えるが、改正増補版では「点」と「模様」の間に区切りがあり、これらは別物であると考えられる。
[11] ここでの「公事」は議論・論争の意である。
[12] Point of view に対応するオランダ語 oogpunt は、oog（目）と punt からなり、『和蘭字彙』では「目的」と訳されている。この語句はのちに（13）のように抽象的な意味での「視点」に対応するようになる。

このような用例は、point という語の多義性を「点」という形式が引き受け始めたために出現したのではないかと考えられる。1870 年代までに、専門語を中心として多くの「点」を含む漢語が成立した[13]。その多くは point of~ や ~point の訳語であり、これによって「point＝点」という対応関係が非常に強固になったと思われる。結果として、抽象的な意味での point をも「点」が担うようになり、1870 年代半ばころから見られる抽象的な「点」を含む漢語や形式名詞的用法の出現に至ったのではないだろうか。

６．「点」を含む漢語の展開―「視点」を例に―

前節までの考察に対する例証として、本節では「視点」を例に、その成立と意味の変化を概観する。「視点」の語は、早くは中国の天文・暦学関係資料にみられる。1851 年の *Outlines of Astronomy* という天文学概説書を中国語訳した『談天』の用例を、原書の対応箇所とともに示す。

（８）地面視法、只有一個視点、乃作画之心、画心至人目乃線、正交画面為一点、餘直線顕于画面、仍為直線（李善蘭訳、福田泉訓正『談天』巻九 7 ウ、1861 年）

（９）In common perspective there is a single “point of sight”, or centre of the picture”, the visual line from the eye to which is perpendicular to the “plane of the picture”, and all straight lines are represented by straight lines.（John F. W. Herschel. *Outlines of Astronomy.* p.70、1851 年）

ここでの「視点」は、人の目から画面に対しておろした垂線の足（すなわち「視線の先」）に当たる点を指し、「点」は「極小性」「位置表示」を表している。

このような抽象的でない「視点」の用例は、明治初期の幾何学、図学、あるいは生理学等の教科書類にも多く見られる。次の（10）は「盲点」についての説明で、図 1 は「第四十九図」に対応する。

（10）第四十九図ヲ正シク両眼ノ前面ニ置キ、左眼ヲ閉ヂテ右眼ノ視点ヲ左円ニ注メ、漸々図ヲ遠ザケテ大約六応ノ距離ニ至レバ、右円全ク消滅スベシ（坪井為春・小林義直訳『弗氏生理書』巻六 36 ウ、1875 年）

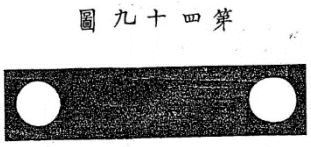


図１　『弗氏生理書』巻六 第四十九図

（11）視点（右ルビ：ポイント、ヲフ、サイト）ハ、画クベキ物体ヲ見ル処ノ目ノ位置ヲ云フ（本多錦吉郎訳『梯氏画学教授法』p.29、1879 年）

ただし、その表すところは（８）（10）のように「視線の先」を表すものと、（11）のように「目の位置」を表すものが混在しており、後者が次第に優位になっていく傾向にある。

1880 年代になると、次のように**表１**の「議論をするうえでの位置関係」に対応する抽象的な用法が見られるようになる。

（12）右ノ勉励モ亦理ニ於テ達スヘキ目途ヨリ遥ニ超過セシ故ニ、斯ノ如キ視点ニ於テ修メタル事業ハ悉ク氏ノ目算ニ反シ、実行上ニ直接ノ価位ヲ占ル者アルヲ見サリシナリ（『独逸参謀要務』一 22 オ、1881 年）

---

[13] 本発表では中国語の状況について詳しく触れることができなかった。（８）の『談天』のように、漢訳資料を通した西洋知識の流入を考えると中国においても point と「点」の対応がありそうだが、英華辞典類には「点」の抽象化の痕跡は見られなかった。また、「這一点」という表現は宋代頃から見られるものの、「極小性」から派生したと思われる「わずかに」という意味で専ら使用されていた。森山（2000）が指摘する「在這一点上」のような用例は、清代になってわずかにみられるのみで、『申報数拠庫』や『CCL 語料庫』による検索によれば、本格的に用例が増えるのは民国期以降のようである。

また、（3）において「目的」と訳されていた point of view を「視点」と訳す例も見られるようになる。

（13）然らば即ち各種の作物を総括して之を一視点（右ルビ：エ、ポイント、ヲブ、ヴィウ）の下に集むれば当に如何の観をか呈す可き　（二葉亭四迷訳「學術と美術との差別」60M 国民 1888_19037, 19530）

1870 年代後半に point の抽象的な意味を「点」が引き受けたことが、このような用例の出現の背景として想定できる。もちろん、そのことだけが「視点」の語を抽象的な用法に拡張させたわけではないだろう。「視点」においては、抽象的な用法は基本的に「目の位置」からの派生であると考えられるため、先に述べた「「視線の先」から「目の位置」への転換」という変化が抽象化の前提となっていると思われる。このような個別の語に特有の事情と合わせて、「点」の抽象化が、それを構成要素とする漢語の意味の抽象化を促す要因となったのではないだろうか。

７．まとめと展望

本発表では、「点」の抽象化について、次のような歴史的展開を提示した。

> 「点」は元来「極小性」「位置表示」を表していたが、幕末から明治初期にかけて point の訳語となり、「点」を構成要素とする専門語が多く成立する中で、「point＝点」という対応関係が強化された。英語の point は多義語であり、抽象的な用法には当初「事」「事物」といった訳が当てられていたが、1870 年代後半にはそれらを「点」が引き受け始め、1880 年代以降は抽象的な意味でも盛んに用いられるようになった。

本発表では「視点」を取り上げてその意味の展開を概観したが、今後「点」を含むその他の語の語誌研究を進める中で、「点」の抽象化との関わりを視野に入れていきたい。また、抽象化した「点」について、形式名詞的な用法から「その点で」のような接続表現への拡張については詳細な検討に至らなかった。これらについては、今後の課題としたい。

参考文献　McCarthy, M.（1991）*Discourse Analysis for Language Teachers.* Cambridge University Press.／森山卓郎（2000）「「点」考」『国語学』51(1), pp.31-45.／佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院. ／高﨑みどり（2021）『テクスト語彙論：テクストの中でみることばのふるまいの実際』ひつじ書房.

参考資料　片山淳吉『物理学階梯』1874 年, https://dl.ndl.go.jp/pid/830260/1/4／川本幸民訳『気海観瀾広義』巻十, 1851-1858 年, https://dl.ndl.go.jp/pid/1086332/1/25／山田昌邦『英和数学辞書』1879 年, https://dl.ndl.go.jp/pid/826187／Picard, H. *A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages*. 2d ed., 1857 年, 国立国会図書館蔵）／堀達之助『英和対訳袖珍辞書』1862 年, 杉本つとむ（1981）『江戸時代翻訳日本語辞典』（早稲田大学出版部）による／何礼之『万法精理』巻六, 1875 年, https://dl.ndl.go.jp/pid/1917775/1/22／桂川甫周『和蘭字彙』1855 年, 杉本つとむ解説（1974）『和蘭字彙』（早稲田大学出版部）による／侯失勒撰、偉烈亜力口訳、李善蘭刪述、福田泉訓正『談天』, 1861 年, 早稲田大学図書館蔵, https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ni05/ni05_01613/index.html／John F. W. Herschel *Outlines of Astronomy*, 1851 年, University of California 蔵／https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.b3124551&seq=80／坪井為春・小林義直訳『弗氏生理書』巻六, 1875 年, https://dl.ndl.go.jp/pid/833923/1/39／本多錦吉郎訳『梯氏画学教授法』1879 年, 文部省, https://dl.ndl.go.jp/pid/850163/1/20／ブロンサルト・フォン・セルレンドルフ著『独逸参謀要務』一 1881 年, 陸軍文庫, https://dl.ndl.go.jp/pid/844218/1/31／

使用データベース　国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス』バージョン 2023.4 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/／『次世代デジタルライブラリー』https://lab.ndl.go.jp/dl/／早稲田大学図書館古典籍総合データベース, https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/／愛如生『中国基本古籍庫』V8.0／愛如生『申報数拠庫』／『CCL 語料庫』http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp／中央研究院近代史研究所『英華字典資料庫』https://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php／Oxford English Dictionary Online, https://www.oed.com/／HathiTrust Digital Library, https://www.hathitrust.org/／

中古和文系資料における反語表現「ヤハ」「カハ」

― 結びの傾向と意味機能 ―

永田里美（明星大学）

0. 本発表の背景および目的

形式的には疑問文で聞き手に問いかけながら，話し手は当然の応答として聞き手に反対の結論を要求し，話し手の主張を伝えようとする，このような用法を「反語」と定義する[1]と，中古語において疑問の助詞ヤ，カに助詞ハを伴ったヤハ，カハはその意味を担う主要な表現形式の一つである。

（例 1）「また，めぐり参るとも，かひやはべるべき。」（『源氏物語』「夕霧」）

（例 2）「親に数まへられたてまつらず，世に知られでは何のかひかはあらむ。」（『源氏物語』「玉鬘」）

※本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。以下，同様。

例文（1），（2）はともに「甲斐があるか」と聞き手に問いかけながら，「甲斐などない」ことを聞き手の応答として求める反語表現であるが，ヤハとカハとの間にはどのような機能の異なりがあり，それは何に起因するのであろうか。古来，疑問の助詞ヤ，カについては研究が重ねられてきている[2]が，ヤハ，カハの振る舞いについては未だ不明な点が少なくない。この問題について，永田（2018, 2019）は『源氏物語』を調査し，ヤハ，カハの結びに着目した考察を行っている。本発表の目的は，永田前掲論文の調査範囲を広げ，中古和文系資料におけるヤハ，カハの結びの傾向と意味機能について考察を行い，それらの反語表現としての特性を提示することにある。

1. 先行研究と調査方法

1.1　先行研究ヤハ，カハについて

ヤハ，カハの相違点を示した富士谷成章の『あゆひ抄』（安永 2 年）によれば，ヤハは「目のあたりの勢」「よし見よかしの心」，カハには「おしなべたる理によりて静かに」「言はねどしるき理」が見られるとする（中田・竹岡, 1960: 147）。この記述が文末用法で和歌を対象としたものであることをふまえ，永田（2018, 2019）は『源氏物語』の会話文・地の文・心内発話文・和歌の会話文の分析を行い，和歌は特殊性が見られるものの，ヤハとカハとの間に結びの傾向の異なりが見られるとし、表現効果の相違に言及している。具体的にはヤハは既実現・現実的な事態を問うために直截的なニュアンスが生じること，一方，カハは未実現・非現実的な事態を問うために間接的なニュアンスになることを指摘し，意味機能として，ヤハは反語表現の解釈に傾くが，カハは反語というよりは逡巡を表す用例が散見されるとする。本発表では永田前掲論文の調査範囲を広げた考察を行う。

---

[1] 反語の定義およびヤハ・カハの語法については小田（2015:255-256）等に負う。

[2] 日本語の疑問表現通史については山口（1990），衣畑（2014）等があり，中古語の疑問表現については岡崎（1996），近藤（2019）等に詳しいが，ヤハ・カハについて焦点化された研究は見られない。

1.2　調査対象と方法

〔調査対象〕括弧内は本発表での記述を表す。

『竹取物語』(竹),『古今和歌集』(古),『伊勢物語』(伊),『土佐日記』(土),『大和物語』(大),『平中物語』(平),『蜻蛉日記』(蜻),『落窪物語』(落),『枕草子』(枕),『紫式部日記』(紫),『和泉式部日記』(和),『堤中納言物語』(堤),『更級日記』(更)の会話文，心内発話文，地の文，手紙文，和歌。

〔調査方法〕

『日本語歴史コーパス』(国立国語研究所)を用いて「ヤ」(助詞)＋後起1語以内「ハ」(助詞),「カ」(助詞)＋後起1語以内「ハ」(助詞)の検索を行い，抽出された本文について,『新編日本古典文学全集』(小学館)にて確認を行う。

表1：文献中に現れるヤハの総数

作品名	竹	古	伊	土	大	平	蜻	落	枕	源	和	紫	堤	更	合計
反語	8	22	4	1	6	8	26	21	24	141	9	6	3	2	**281**
反語以外		2					1		1						**4**

表2：文献中に現れるカハの総数

作品名	竹	古	伊	土	大	平	蜻	落	枕	源	和	紫	堤	更	合計
反語	3	13	3	1	6	4	30	26	36	254	12	4	6	7	**405**
反語以外		5	1		1	2	5	4	8	35			1	3	**65**

〔考察対象〕

調査対象のうち，反語表現と解釈される（表 1，表 2 参照）ヤハ，カハついて，永田（2018, 2019）の分析結果と照らし合わせ，考察を行う。

2. 調査結果と考察

2.1　作品別・文体別にみたヤハ・カハの結び

表 3 はヤハの結び，表 4 はカハの結びを作品別にまとめたものである。表中，「略」は結びが省略されたものを示す。表 5, 表 6 はこれらを文体別に整理し，永田（2018, 2019）による『源氏物語』の調査結果を併せて記している。以下，結びが現れたヤハ，カハの文中用法（ヤハ 175 例，カハ 227 例）の用例を分析対象とする。

表3：ヤハの結び（作品別）

成立年	作品名	略	動詞	形容詞	ツ	タリ	リ	キ	ベシ	ズ	ケリ	メリ	終止ナリ	ムトス	ムズ	ム	ケム	合計
900	竹取物語	3						1	1	3								**8**
906	古今和歌集	6	3			1		1	1	9						1		**22**
920	伊勢物語	1							1	1							1	**4**
934	土佐日記	1																**1**
951	大和物語	2						1	2	1								**6**
960	平中物語	2						1	2	3								**8**
974	蜻蛉日記	10	3	2	1			1	2	4	1			1		1		**26**
986	落窪物語	8	4				1	5	1	1							1	**21**
1001	枕草子	3	15		2	1			1					2				**24**
1008	源氏物語	60	25	3	1		3	5	14	8	8	3	1	1		6	3	**141**
1010	和泉式部日記	4	2							1	1				1			**9**
1010	紫式部日記	3	1						1				1					**6**
1055	堤中納言日記	1	2															**3**
1059	更級日記	2																**2**
	合計	**106**	**55**	**5**	**4**	**2**	**4**	**15**	**26**	**31**	**10**	**3**	**2**	**4**	**1**	**8**	**5**	**281**

全体的な傾向として，表 3, 表 4 からヤハとカハとではム系助動詞の現れ方に差異が認められる。また,これらの分布に顕著な文体差は認められにくい（表 5, 表 6）。この分布について北原（1981），高山（2002），小柳（2014）に従いつつ解釈を行いたい。

2.2　ヤハの結び

北原(1981)の連体形接続のナリ（以下, 連体ナリ）を軸とした助動詞の階層構造によれば, ヤハの結びとして僅少なム，ケムは「主体的」な表現にあたる。ヤハの結びはこうした「主体的」な表現が少ない。ツ，タリ，リ，キは「客体的」な表現であり，ズ，ケリは「主体的」な表現としての用法が限られている（pp.584-610）。メリ，終止形接続のナリ（以下，終止ナリ）は接続助詞やテンス形式への下接の仕方から「客体的」な表現としての要素が強い（p.466）。ベシは「主体的」，「客体的」表現に預かるとされるが，高山（2002: 87）において，ベシ（およびメリ，終止ナリ）はム系助動詞と一線を画することが指摘されている。このようにヤハの結びは「客体的」な表現に預かる助動詞と動詞，形容詞が大半を占める。これらについて小柳（2014: 75-79）による「既実現・現実」，「未実現・非現実」の観点を用いて捉えると，キ，ケリ，ツ，タリ，リのテンス・アスペクトと「あり」を含むメリ，終止ナリというモダリティは「既実現・現実」を表す。ベシについては「中心的な意味は，ある事態が未実現だが実現に傾斜した状態にある（同論考: 75）」とされる。ズ，ムズ，ムトスについては小柳（同）に言及がないものの，ズは上述の北原（1981）による構文論的観点からみれば，「ズ＋アリ」を基本的な構文としており，ムトス，ムズについては，三宅（2021: 31）に「現実に即した概念をも表す」ことが示されている[3]。これらから，ヤハの結びは「既実現・現実」を表す助動詞が大半を占めると言える。

表4：カハの結び（作品別）

成立年	作品名	略	動詞	形容詞	ツ	タリ	リ	キ	マジ	ベシ	ム	マシ	ケム	ラム	合計
900	竹取物語	1									2				3
906	古今和歌集	8	1			1					3				13
920	伊勢物語	1								1	1				3
934	土佐日記										1				1
951	大和物語	5									1				6
960	平中物語	1								2	1				4
974	蜻蛉日記	18	1			1				1	5		1	3	30
986	落窪物語	17	2								7				26
1001	枕草子	13	2					2			19				36
1008	源氏物語	102	6	1	1		1		1	11	116	8	4	3	254
1010	和泉式部日記	7			1						3	1			12
1010	紫式部日記	2									2				4
1055	堤中納言日記	2									4				6
1059	更級日記	1									6				7
	合計	178	12	1	2	2	1	2	1	15	171	9	5	6	405

次にヤハの結びにおける動詞，形容詞については，表 5 に示されるように存在動詞が多い。また和歌については動詞のバリエーションが多いようである。以下に用例を挙げる（括弧内に出典の略称と『新編日本古典文学全集』の頁を記す）。

（例 3）「門の事をこそ聞えつれ，障子あけたまへとやは聞えつる」と言へば，（枕 36）

（例 4）「琴なども天人のおるばかり弾き出で，いとわるき人なり。帝の御むすめやは得たる」（枕 144）

（例 5）「そのかみ，物とやは思ひたまへりし。『部屋に籠めよ』とは，おのれこそ，行ひたまひしか。」（落 249）

[3] 同論考は『今昔物語集』を分析対象としているが、中古語におけるムトス、ムズについては鈴木（2020）も参考になる。

（例 6）「宮仕へのはじめに，ただなほやはあるべき。」（伊 180）

表5：ヤハの結び（文体別）

ヤハ結び	会話	源氏会話	心内発話	源氏心内発話	地の文	源氏地の文	手紙	源氏手紙	和歌	源氏和歌	合計
ツ	2			1					1		**4**
タリ	1								1		**2**
リ	1			2		1					**4**
キ	5	1		1		1			5	2	**15**
ベシ	5	6	2	6		1			5	1	**26**
ズ	8	5							15	3	**31**
ケリ		5	1	2					1	1	**10**
メリ		1		2							**3**
終止ナリ				1	1						**2**
ムトス	2	1	1								**4**
ムズ			1								**1**
ム		3	1	3					1		**8**
ケム	1	2							1	1	**5**
あり	8	6	2	5	7	2					**30**
す					3					5	**8**
はべり	1	1	1		1						**4**
かくる									1	1	**2**
ありく	1										**1**
おはす		1									**1**
おぼゆ						1					**1**
聞く										1	**1**
けつ										1	**1**
さわぐ									1		**1**
たまふ		1									**1**
なる									1		**1**
見る									1		**1**
行く									1		**1**
わく									1		**1**
なし									2		**2**
悲し										1	**1**
うし				1						0	**1**
をしけし										1	**1**
略	13	24	11	22	7	6			15	8	**106**
合計	**48**	**57**	**20**	**46**	**19**	**12**	**0**	**0**	**53**	**26**	**281**

（例 7）わが心のやうに，ひがひがしき心のたぐひやは，また世にあむべかめる，（源 5-278）

（例 8）この草子，目に見え心に思ふ事を，人やは見むとすると思ひて，つれづれなる里居のほどに，書きあつめたるを，（枕 467）

（例 9）「かくなむ帝の仰せたまへる。なほやは仕うまつりたまはぬ」といへば，（竹 59）

（例 10）「あな心憂。少しよろしき人の，さる心持たるやはある。なでふ御名だての落窪ぞ。」（落 192）

2.3　カハの結び

表 4 に示されるように，カハの結びはヤハと異なり，ム系の助動詞が大半を占める。つまり，北原（1981）に従うと「主体的」な表現であり，小柳（2014）における「未実現・非現実」を表す形式である。テンス・アスペクトの表現形式は全体の割合として少ない。ベシがヤハ，カハの両形式の結びとなりやすいのは，反語という性格に起因するのではないかと考えられる。安達（2004）は，現代語の考察ではあるが，反語解釈がなされる疑問文の述部の特徴として「存在動詞」と「可能動詞」が現れやすいことを挙げている。本発表の調査範囲においては可能を表す動詞は見出されなかったが，ベシがそれらの役割を担っていると解釈される。カハの結びにおける動詞，形容詞は表 6 に示されるように，数は少ないが，ヤハの結びの動詞と同様に存在動詞が目立つ。上述の反語解釈がなされる疑問文の述部の特徴と言える。以下に用例を挙げる。

（例 11）「童言にてはなにかはせむ。媼，翁，手捺しつべし。」（土 24）

（例 12）山づらを見れば，霧はげに麓をこめたり。京もげに誰がもとへかは出でむとすらむ，いで，なほここながら死なむと思へど，（蜻 132）

（例 13）「なにかはわざとだちても参らまし。いつ参りしぞとなかなか人も思へかし」など思ひて，明けぬ

表 6：カハの結び（文体別）

カハ結び	会話	源氏会話	心内発話	源氏心内発話	地の文	源氏地の文	手紙	源氏手紙	和歌	源氏和歌	合計
ツ						1			1		**2**
キ					2						**2**
タリ			1						1		**2**
リ		1									**1**
マジ				1							**1**
ベシ		1	2	9					2	1	**15**
ム	12	34	8	44	21	35	3	1	11	2	**171**
マシ		2	1	4		1				1	**9**
ケム		2	1	1		1					**5**
ラム		2	1	1					2		**6**
あり	1			1	1				1		**4**
見ゆ					1	1					**2**
たまふ		1		1							**2**
きこゆ	1										**1**
知る									1		**1**
仕うまつる		1									**1**
劣る				1							**1**
つらし				1							**1**
略	36	45	12	47	7	6	1	1	20	3	**178**
合計	**50**	**89**	**26**	**111**	**32**	**45**	**4**	**2**	**39**	**7**	**405**

れば，くしの筥（はこ）など取りにやる。（和 82）

（例 14）よし，これもて心ざしは見せむとて，などかかる人目を，いかでかはしのぶべき，つつむことだになき身ならばこそあらめ。（平460）

最後に意味機能についてふれると，ヤハは肯否（yes-no）疑問文であり，かつ既実現の事態を対象とする傾向にあるために，反語としての回答が明確である。それに対して，カハは基本的に不定（疑問詞）疑問文であり，かつム系助動詞で表されるような未実現の事態を対象とする傾向にあることから，（例 15）のように反語ではあるが逡巡を表す用例が見られる。冒頭の表 1，表 2 で示したように，ヤハに比してカハの反語表現の割合が若干，減少するのは，こうした理由によるものと考えられる。

（例 15）「末はいかに，末はいかに」とあるを，いかにかはすべからむ。御前おはしまさば，御覧ぜさすべきを，（略）」と思ひまはすほどもなく，（枕 136）

また 1.でふれた『あゆひ抄』によるヤハ，カハの意味合いの違いは，文中用法にも認めることができ，これらはヤハの既実現性とカハの未実現性の表れではないかと考えられる。

3. 疑問表現との関わり

3.1 ヤ，カの結びとの関わり

高山(2016)は，中古の和文資料の疑問文 1282 例のうち，約 7 割がモダリティ形式（ム，ラム，ケム，マシ，ジ）を伴うことを指摘し，この形式を使用しない疑問文を「現場型疑問文」とし，対話場面に目立つと述べている。本発表の分析によれば，「現場型疑問文」はヤハに近い性質を持つものの，ヤハが用いられる場面は対話場面に限らない。また，カハについては対話場面（会話）であってもム系助動詞を伴っていることが指摘できる。このことはヤハ，カハと結びがある程度のパターンをもった語法として認識されていたのではないかと推測される。

3.2 疑問表現ヤ，カの性質との関わり

近藤（2000：282-283）は，ヤによる疑問文とカによる疑問文の特性として，「や」の疑問の対象は述語にあり，「か」のそれは述語以外の部分にあると述べる。そのため，ヤ疑問文

は結果として事態の成立そのものが疑問の対象となるのに対し，カ疑問文では，述語における事態の成立は既定であるという差異が生まれる。このことは，中古語におけるヤ疑問文，カ疑問文の扱う事態が対照的であることを示唆するものであり，反語表現ヤハ，カハがヤ疑問文とカ疑問文で想定される事態を反転させていると考えることができそうである。

4. おわりに

本発表で得られた考察結果は以下のとおりである。

・ヤハは「客体的」，「既実現・現実」を表す助動詞，もしくは動詞，形容詞が結びに現れる傾向にある。
・カハは「主体的」，「未実現・非現実」を表す助動詞が結びに現れる傾向にある。
・ヤハ，カハにおける結びの傾向の相違は文体の制約を大きく受けることなく，現れる。
・ヤハ，カハの結びの傾向の相違は，ヤ疑問文，カ疑問文が有する疑問表現としての意味機能を反転させた結果として生じたものであると考えられる。

今後の課題は，以上の傾向に反する用例について本文の異同をより精緻に調査してゆくことである。また，反語表現の範疇には否定疑問文も存在する（永田，2020）。これらをも含めた反語表現内の機能分担について，さらなる調査分析が求められる。

【引用参考文献】

安達太郎（2004）「疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き」『京都橘女子大学研究紀要』31
小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
岡崎正継（1996）『国語助詞論攷』おうふう
北原保雄（1981）『日本語助動詞の研究』大修館書店
衣畑智秀（2014）「上代から中世の疑問文の様相―データ解釈を中心に―」『福岡大学人文論叢』46・1
小柳智一（2014）「古代日本語研究と通言語的研究」（定延利之編『日本語学と通言語的研究との対話―テンス・アスペクト・ムード研究を通して―』）くろしお出版
近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
近藤要司(2019)『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院
鈴木薫（2020）「中古中世における「むとす」と「むず」」『国語研究』83 國學院大學国語研究会
高山善行（2016）「中古語における疑問文とモダリティ形式の関係」『国語と国文学』93・5　東京大学国語国文学会
高山善行(2002)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
中田祝夫・竹岡正夫（1960）『あゆひ抄新注』風間書房
永田里美（2018）「『源氏物語』における反語表現―会話文中の「ヤハ」，「カハ」について―」『跡見学園女子大学文学部紀要』53
永田里美（2019）「『源氏物語』における反語表現―地の文・の「ヤハ」，「カハ」について―」『跡見学園女子大学文学部紀要』54
永田里美（2020）「『源氏物語』にみる否定疑問文の様相」『日本語と日本文学』66　筑波大学日本語日本文学会
三宅清（2021）「ムトスとムズ―現実・非現実の観点から―」『國學院雑誌』122（4）
山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院
国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス』バージョン 2023.3 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj

上代における不可能の補助動詞「かぬ」の成立
―従属節用法に着目して―

小澤 颯太（学習院大学学生）

1．はじめに

不可能をあらわす形式は、現代語の「できない」「読めない」、古典語の「れず、られず」「得ず」のように可能をあらわす形式に否定辞を下接する形で表現されることが多い。しかし、古代日本語の補助動詞「かぬ」（現代語では「かねる」）はそうした傾向に反して、否定辞を伴わない形で不可能をあらわす。

「かぬ」の不可能用法の起源については既にいくつかの先行研究が見られるが、「なぜ否定辞を下接せずに不可能をあらわせるのか」という問いには明確な答えが出されていないように思われる。そこで、本発表では『万葉集』を中心とする上代日本語資料を用いて、「かぬ」が補助動詞として否定辞を伴わずに不可能をあらわすようになった経緯を考察する。

2．問題の所在

まず最初に、上代の「かぬ」に見られる傾向と先行研究を確認してみたい。上代の「かぬ」については、次の二つの傾向が注目に値する。

傾向１：上代の「かぬ」には完了の助動詞「つ」を下接する例が多い。

傾向２：「かぬ」に上接する動詞は「忘る」「思ふ」「忍ぶ」といった人の内面に生じる事態をあらわすものが多い。

傾向１は「かねつ」に完了の意を読み取りづらいことから、「つ」の問題として論じられることも多かった（井手至 1966，野村剛史 1989 など）が、近藤明（1988）はこれを「かぬ」の問題として初めて大きく取り上げた。近藤（1988）は、古代語「かぬ」の用例を下接語に基づいて、a 類（「つ」を下接するもの）、b 類（接続助詞「て」「つつ」を下接するもの及び連用中止「かね」）、c 類（その他）の三類に分け、上代に 70％近くを占めていた a 類が次第に減少していくことを指摘した。対して、傾向２は吉井健（1999）によって指摘されたもので、吉井健（2004）では同様の傾向を中古の「かぬ」にも認めている。

これらの先行研究の中で、不可能の起源について述べたものとしては近藤（1988）と吉井（1999）がある。不可能の起源となった考えられる本動詞「かぬ」の例は、文献上ではあまり確認できないが、次の二種類の用法の存在は確認できる。

1．あらたまの 年月かねて ぬばたまの 夢に見えけり 君が姿は　　（巻 12・2956）

2．伊香保ろの 沿ひの榛原 ねもころに 奥をなかねそ まさかし良かば

（巻 14・3410）

1は「二つ以上のものを合わせ持つ」意で使われ、2は「将来の事をも考慮に入れる。予定する。予想する。」という意[1]で使われている。前者の意味を「兼具」、後者の意味を「予想」とおくと、吉井(1999)は「兼具」、近藤(1988)は「予想」に不可能の起源を求めたと言える[2]。「つ」との結びつきを重視する近藤(1988)は、「予想」の「かぬ」に完了の「つ」がつくことで「動作の実現が予想にとどまった」等の意となり、それが「実現しようとしてそれが不可能である」の意に転じたとする。このことから、近藤(1988)は「かぬ」の不可能が元来「かねつ」という形式であらわされたとしている。これに対して、吉井(1999)は主体の内面的事態として現れる「実現すべき動作・作用」(上接動詞の内容)と「不可能にする条件」という「相反する」ものを同時に引き受ける内面的「葛藤」が不可能の起源になったとしている。

一方で、吉井(1999)は近藤(1988)の説の問題点をいくつかあげている。その中でも、ここで確認しておきたいのが「思ひかぬ」の問題である。「思ふ」は「かぬ」と共起しやすい動詞の一つだが、「思ひかぬ」には「思うことができない」という通常の不可能ではなく「思われてしかたがない」という一見真逆の意味をあらわすと思われる例が確認できる。近藤(1988)ではこの例が発生する理由を説明していない。ただ、吉井(1999)の説についても「不可能にする条件」という文脈情報を考慮に入れる点は頷けるにしても、それと「実現すべき動作・作用」を「兼具」すること、内面的「葛藤」が否定的意味を伴う不可能に転じることの形態面もしくは構文面の論理が明らかでない。

3．調査の概要と「かぬ」の下接語

調査の主な資料とする『万葉集』の用例調査については、国立国語研究所「日本語歴史コーパス」(CHJ)を使用した。そのため、以下で引用する本文もCHJが依拠する『新編日本古典文学全集』(以下、『新編全集』)のものを用いた。また、それ以外の上代文献の用例として記紀歌謡を確認する場合にも『新編全集』の本文を用いることとした。

このような方法を用いて、まず近藤(1988)も行った「かぬ」の下接語を調査した所、次頁の表1[3]のような結果となった。この結果からは次の傾向も確認できる。

傾向3：b類の例も一定数あり、中でも「かねて」の例が多い。

傾向4：a類「かねつ」の殆どは、「かねつも」と終助詞「も」を下接している。

この二点は特に目新しい傾向ではないが、従来の「かぬ」研究ではあまり重視されてこなかった。傾向3について、近藤(1988)は「つ」が連用中止法を持たない点から、b類

---

[1] この意味分類は『日本国語大辞典 第二版』(Japan Knowledge Lib版)のものを参考にした。

[2] 二つの起源説は厳密には木下正俊(1972)が最初に指摘したもので、二者の考えはこれをふまえて発展させたものだが、それらの関係についてはここでは言及しない。

[3] 近藤(1988)では仮名書の例のみで集計したため、本発表のデータとは差がある。「かぬ」には「不得」「不勝」といった義訓表記があるが、これらの表記については、佐伯梅友(1938)で音数や承接関係の面で訓み分け可能としている点を鑑みて、『新編全集』の訓みで問題ないと判断して集計した。

はａ類と相補的であるとしており、近藤が注目するａ類の勢力の問題では除外して扱っている。起源の問題を中心として扱わない近藤の立場から見ると、やむを得ない措置と言えるが、本発表の立場からはａ類とｂ類の違いは注意すべき点の一つだと言える。

また、近藤(1988)と吉井(1999)は、どちらも上代の「かぬ」の大多数を占める「かねつ」を中心として起源の問題を考えていたが、傾向4についてはあまり触れられていない。終助詞の「も」には、過去・完了系助動詞に殆ど下接しないという特徴が指摘されており(森野崇1999)、「かねつも」はそのわずかな例外に数えられる。「かねつ」の共時的な文意味には完了の意が見出せないことから、「つ」に対して例外的に「も」の下接が認められること自体は問題がないと言えそうだが、近藤(1988)のようにその起源に「動作の実現が予想にとどまった」という完了の意が関わる段階を想定するのには問題が出てくる。「予想」の完了が不可能に転じたとする考え自体はある程度有力であるが、近藤の説では「かねつも」の例が「かねつ」単体の例に対してこれほど多く見られる理由を説明できない。

表１：「かぬ」の下接語

分類	下接語	用例数	計
a類	つも	30	55(57.9%)
	つ	10	
	つ+助動詞	8	
	つる	7	
b類	て	32	37(38.9%)
	連用中止	5	
c類	に	1	3(3.2%)
	む	2	
総計			95

そこで、本発表では「かねつ」という形式から不可能の起源を見るのは困難と判断し、従属節に出現する形式「かねて」の方から不可能の起源を考えてみることとした。

4．従属節の「かねて」と不可能用法

『万葉集』より成立年が早いとされる記紀歌謡には、補助動詞「かぬ」の例は三例[4]しか確認できないが、そのすべてがａ類の「かねつ」ではなくｂ類の「かねて」である。

3 八洲国 妻枕きかねて 春日の 春日の国に 麗し女を 有りと聞きて 宜し女を 有りと聞きて…　（日本書紀歌謡96）

4 梯立の 倉椅山を 嶮しみと 岩懸きかねて 我が手取らすも　（古事記歌謡69）

以上の例は共に不可能の意で訳されているが、その文構造に目を配ると、「かねて」の前に示された事態の未実現によって、後に示された事態が成立するという関係が見出せる。つまり、接続助詞「て」を隔てた前件後件には原因と結果の関係が読み取れる。

5 縄の浦に 塩焼く火のけ 夕されば 行き過ぎかねて 山にたなびく
（巻３・354 日置少老）

6 筑波嶺を 外のみ見つつ ありかねて 雪消の道を なづみ来るかも
（巻３・383 丹比真人国人）

同様の傾向は『万葉集』の例にも確認できる。加えて、5、6のような移動に関わる例

[4] 以下の例の歌番号は『新編全集』のものに準ずる。1、2の他のもう一例は、1の類歌(古事記歌謡2)。

に顕著に見られるのは、「移動(停留)することができず停留(移動)した」といった「移動⇔停留」の対立関係である。この前後件の対立関係には、「かぬ」を除外して考えた場合、「移動(停留)していたが、停留(移動)した」といった継起関係に基づく逆接の関係が読み取れる。「継起性」「共存性」などを基本機能とする接続助詞「て」には、原因理由や逆接など「どのような意味関係をも文脈に依存するかたちで表せる」[5]という特徴が指摘されている。この種の逆接文に「前句から推論される事態の否定」(『日本語文法事典』)という側面があることをふまえると、「かぬ」の可能が否定に限定される理由や否定辞を伴わない理由も構文環境の面から説明できる可能性が見えてくる。

ここで、不可能の起源となる本動詞の意味を考えてみたい。先程確認した通り、「かねて」の前後件には「共存性」ではなく、事態の時間的前後関係に基づく「継起性」が見出せる。こうした構造にあてはまる本動詞の用法は、「現在のことに将来のことを兼ねる」という「予想」用法であろう。そのため、「かねて」を含む文の本来の構造は、「A の事態を予想していて、その後(A ではない)B の事態になった」というように解されるものであったと考えられる。そうした中で、「予想」していた事態をあらわしていた前件に対して、後件をそれに反した実際の事態と理解することで、さらに「A の事態を予想していたが B の事態になった」という二者の逆接関係が見出される。こうした逆接の関係にある前後件は、次のような例の存在を根拠としてさらに原因理由の解釈に転じていくことが推定される。

7 待ちかねて 内には入らじ 白たへの 我が衣手に 露は置きぬとも (巻 11・2688)

8 うつせみの 八十言の上は 繁くとも 争ひかねて 我を言なすな (巻 14・3456)

この二例の後件は打消意志・禁止をあらわしており、「望ましくない」事態になることを危惧する内容となっている。このような後件を持つ場合、それと対立する関係にある前件の事態は相対的に「望ましい」事態と位置づけられる。ある形式に可能の意を認める基準として、「望み」の有無があげられる[6]場合があるが、上の二例のような「望ましい⇔望ましくない」が対立する状況においては前件がその基準を満たしている。すなわち、ここに「望ましい」前件の未実現によって「望ましくない」後件の事態が発生したという因果解釈が生じることで不可能の意が成立したと考えられる。

これらのことから、「かねて」における不可能用法成立の過程は、意味解釈の面からすれば次のように一般化することができる。

(1)A の事態を予想していて、その後(A ではない)B の事態になった
(2)A の事態を予想していたが B の事態になった
(3)A の事態が実現できなかったので B の事態になった

---

[5] 山口堯二(1980) pp.256～269

[6] 可能表現における「望ましさ」或いは「望み」について言及した論としては、渋谷勝己(1993)や吉田永弘(2021)などがあげられる。

5.「かねつ(も)」への派生

前節で述べたような経緯で「かぬ」の不可能用法が成立したと考えると、主節末の「かねつ」は何らかの形でそこから派生した形式であることが推測される。この方向で考えを進めていく場合、二つの形式の接点となり得るものとして次の例があげられる。

9 a. 我が背子が 古家の里の 明日香には 千鳥鳴くなり 夫待ちかねて

(巻 3・268 長屋王)

b. 山科の 木幡の山を 馬はあれど 徒歩ゆそ我が来し 汝を思ひかねて

(巻 11・2425)

10 a. **玉藻刈る 沖辺は漕がじ** しきたへの 枕のあたり 忘れかねつも

(巻 1・72 藤原宇合)

b. **かくだにも 我は恋ひなむ** 玉梓の 君が使ひを 待ちやかねてむ (巻 11・2548)

9 が前節で確認した「かねて」の倒置した例であるのに対して、10 は二文形式の二文目に「かねつ」が出現している。これらの例は、どちらも前半部(9 の主節、10 の一文目)の結果に対して後半部(9 の従属節、10 の二文目)でその原因を示す構造となっている。ここでは主節に対して従属的な 9 に対して、10 では「かぬ(かねつ)」が半ば独立した形で文末での位置を獲得している。こうした流れで、「動作の実現が予想にとどまった」ことをあらわす「かねつ」構文にも不可能の意が認められたと考えられる。なお、2. でふれた「思ひかぬ」についてだが、「思ふ」には「慕う・願う・悩む、など情意にかかわる意味合いで用いられる場合は、人に明かさず密かにそれを保つといった閉塞感や悲愴感を伴う」(『古典基礎語辞典』、下線は筆者)という意が見出せる。したがって、この場合には「人に明かさずにいられない」という形で不可能の意味が成立する。

表 2 : 内面的な動詞と「かねて」「かねつ」

	忘る	思ふ	忍ぶ	慰む	鎮む
かねて	0	2	0	3	0
かねつ	16	8	6	1	1

「かねて」と「かねつ」にこうした構文上の共通点が見られる一方で、両者には二つの相違点が確認できる。それが①上接動詞の種類と②「も」との共起有無である。2. では「かぬ」が内面的な意味をあらわす動詞を承ける傾向を見たが、「忘る」を代表とするこれらの動詞との共起は、特に「かねつ」において顕著である。(表 2)

11. 真木柱 太き心は ありしかど この我が心 鎮めかねつも (巻 2・190)

12. 山川の 清き川瀬に 遊べども 奈良の都は 忘れかねつも (巻 15・3618)

さらに、「かねつ」という形式においては上の二例のような終助詞「も」との共起も注目される。この二つの相違点は、従属節で成立した「かぬ」の不可能用法が下接形式を「て」から「つ」に変えて主節述部に派生したことと密接に関わっているように思われる。川端善明(1963)は文末の「も」について、情意形容詞など全体が「こと」の述語性を持つ文を対象化し、その喚体を構成する機能を持つとしている。4. で見た「かねて」

を含む節をそれ自体構成された内容を持つ一つの「こと」と考えると、「かねつ」を含む節も一つの「こと」全体として不可能をあらわしていたと考えられる。つまり、「かねて」にしろ「かねつ」にしろ、不可能の意が認められるのは節単位においてであり、「かねつ」の場合は「も」がそれを明示する形で下接している。

その一方で、「も」自体には「表現時に成立・展開する事態が機縁となって生じる感情の表出に集中する」(森野 1999)という特徴がある。この特徴は「かねつ」を述語とする主節の表現内容に影響し、そのことが①上接動詞の種類にも反映しているものと考えられる。

6．おわりに

以上、本動詞「かぬ」がどのようにして不可能の意を獲得したのかを見てきた。不可能の補助動詞「かぬ」は、従属節の形式「かねて」が将来のことをも「予定する。予想する」という時間的な用法が、「て」を隔てた前後の文脈に依存する形で成立したことがうかがえた。「かぬ」がなぜ否定辞を伴わずに不可能をあらわせるのかという疑問には、その成立過程に「A の事態を予想していたが B の事態になった」という逆接文に解せる段階があったためと考えられる。また、5. では不可能表現「かねて」がどのようにして主節述部に派生したか、そこになぜ「も」がつきやすいのかについて述べた。

一方で、こうした理論的な部分の整備を重視した反面、実際の用例に則った具体的傾向の分析を行うことは叶わなかった。こうした不十分な点を補いつつ考えをまとめていくことを今後の課題としたい。

【参考文献】 井手至(1966)「古代日本語動詞の意味類型と助動詞ツ・ヌの使いわけ」『国語国文』35-5『遊文録 国語史篇一』和泉書院、1995 年 3 月/川端善明(1963)「助詞「も」の説―文末の構成」『萬葉』47/木下正俊(1972)「可能と不可能」『萬葉集語法の研究』塙書房/近藤明(1988)「接尾語カヌの下接語の時代的変化--助動詞ツとの関係の衰退--」『国語学』152/佐伯梅友(1938)「『難』『不勝』『不得』の訓について」『萬葉語研究』文学社/渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-01/野村剛史(1989)「上代語のツとヌについて」『国語学』158/森野崇(1997)「古代日本語の終助詞「も」の機能」『二松学舎大学論集』40/山口堯二(1980)『古代接続法の研究』明治書院/吉井健(1999)「上代における不可能を表す接尾動詞--アヘズ・カヌ・カツ+否定辞--」『国語国文学藻　井手至先生古希記念論文集』和泉書院/吉井健(2004)「中古における不可能を表す補助動詞―カヌ・ワブ・ワヅラフ・アヘズ―」『国語語彙史の研究 23』和泉書院/吉田永弘(2021)「「可能」「自発」の歴史的対照――「る・らる」と「可能動詞・られる」」野田尚史、小田勝編『日本語の歴史的対照文法』、和泉書院

辞典・データベース類、使用資料『日本国語大辞典　第二版』Japan Knowledge Lib 版(2024 年 3 月 24 日確認) /大野晋編(2011)『古典基礎語辞典』角川学芸出版/日本語文法学会編(2014)『日本語文法事典』大修館書店/ 国立国語研究所 (2017)『日本語歴史コーパス　奈良時代編Ⅰ万葉集』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html#manyo (2024 年 4 月 5 日確認) /山口佳紀・神野志隆光編(1997)『新編日本古典文学全集　古事記』小学館/小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守編(1994～1998)『新編日本古典文学全集　日本書紀①～③』小学館

ト条件文・タラ条件文における文末モダリティ制約の史的変遷

竹林栄実(東京大学大学院生)

1．はじめに

本発表の目的は、近世中期から明治・大正期において、ト条件文・タラ条件文の文末モダリティ制約はどのような様相であるのかを明らかにすることである。従来、現代共通語におけるト条件文・タラ条件文のモダリティ制約については、宮島(1964)、鈴木(1978)、稲葉(1991)、益岡(1993)、蓮沼・有田・前田(2001)、ソルヴァン・前田(2005)等においてすでに研究がなされており、現代共通語においては、ト条件文は文末モダリティ制約が厳しいが、タラ条件文は文末モダリティ制約がないということが明らかになっている。たとえば、「疲れたら、必ず休憩しろ」「雪が降ったら、雪だるまをつくりたい」とは言えるが、「*疲れると、必ず休憩しろ」「*雪が降ると、雪だるまをつくりたい」という文は不自然である。

しかし、明治・大正期以前の時代におけるト条件文・タラ条件文の文末モダリティ制約についての詳細な研究は管見の限り見当たらない。そこで本発表では、近世中期から明治・大正期におけるト条件文・タラ条件文の文末モダリティ制約はどのような状態であるのか、現代共通語とどのように異なっているのかということを明らかにする。

2．先行研究

宮島(1964)は、「主文に命令・すすめ・許可・希望・意志など、判断以外の表現がくるばあいにはタラがもちいられる」(p.321)とし、「ト」は使用できないと述べる。そして、その理由として「トは前件と後件とのつながりが客観的な、自然なものであるとする表現だろう。後件に命令・意志などがこないのは、後件が前件の当然の帰結として展開して、意志によって左右されることがないからではないだろうか」(p.322)としている。

ソルヴァン・前田(2005)は、文末に現れるモダリティを「述べ立て(現象描写・判断)」「表出(意志、希望、許容)」「働きかけ(命令・依頼・禁止、忠告、義務、勧誘、願望、許可)」に分類し、「タラ」は全ての場合において制約なく使用可能であり、「ト」は「述べ立て(現象描写・判断)」以外使用不可である、ということを明らかにしている。

また、小林(1996)は、狂言台本に見られるト条件文を調査・考察している。その中で、狂言台本のト条件文は、帰結句に命令・依頼・禁止・勧誘のような表現をとることはないが、「早々国元へ行ト迎ヲ登セウ　心ヲ慰テマタシマセ」(保教本・墨塗)のような、文末に意志表現が見られる例があることを指摘している(小林(2002)にも同様の指摘がある)。そして、「「ト」の帰結句に意志の「ウ」を用いるのは、現代では不自然であり、今ならさしづめ「行ったら」と「タラ」を用いるところである。この点では、現代よりも「ト」の用法は広いものであったと言えよう」(pp.223-224)と述べている。このような言及があるものの、小林(1996)ではそれ以上の調査・考察はなされていない。

3．調査資料、用例の収集と分類基準

用例は、『日本語歴史コーパス』(国立国語研究所)から収集した[1]。調査の対象とする資料は「近松浄瑠璃」(近世中期上方語資料)、「洒落本」(近世後期上方語・江戸語資料)、「人情本」(近世後期江戸語資料)、「落語 SP 盤」(明治・大正期大阪語・東京語資料)である。なお、用例を示す際はコーパスの本文から引用するが、句読点や傍線を附すなど、読みやすいように適宜改める。

分類は、ソルヴァン・前田(2005)、仁田(1991)を参考に、以下の 10 種類に分ける。これら 10 種類のモダリティを、本発表では「働きかけ・表出のモダリティ」と総称することとする[2]。

「命令」:動詞・補助動詞の命令形(「ヤレ」「～ナサレ」類)、動詞・補助動詞の連用形(「～テオキ」類)

(1)徳兵衛→三太「そのうちおたつが戻つたら、湯屋へ行つたと騙しておけ」

(近松浄瑠璃・心中重井筒 上・51-近松 1707_15001,19230)

「依頼」:動詞・補助動詞の命令形(「～テクレ」「～クダサイ」類)、「頼ム」類

(2)金→谷「谷粋さん、明日ほんに寐忘れたら、どふぞ起しておくんなせんし」

(洒落本(江戸語)・甲駅新話・52-洒落 1775_01010,89690)

「禁止」:動詞+終助詞「ナ」、動詞+打消しの助動詞(「～マイゾ」「～イケナイ」)類

(3)兵衛→おはる「おれは翌をもしれぬ身のうへ。倘も世にない人となつたら、ただ其小六を大事にして、他な心をかならず持なよ」 (人情本・花廼志満台 初編下・53-人情 1836_01003,76080)

「勧め」:「～ガヨイ」類

(4)酔→金五郎「ほんにのふ金さん、おめへもよく目利をして、もし無疵で気に入たら今夜の花にしなさるがいい」 (人情本・仮名文章娘節用 前編中・53-人情 1831_05002,41710)

「勧誘」:「～(ヨ)ウ」「～ナイカ」類

(5)母→波吉「もうおまへがおしまいをしてしまつたらお昼にしよふぜ」

(人情本・明烏後の正夢 4 編 11・53-人情 1824_08011,23520)

「許可・許容」:「～デヨイ」類

(6)茶屋亭半七→喜助「なに中三がはにあふものか。こりや喜助、金屋のがかへられたら肴は梅ぼしとたこ斗でゑいぞ」 (洒落本(江戸語)・郭中奇譚・52-洒落 1769_01001,77250)

「義務」:「～ナラヌ」「～イケナイ」類

(7)小つゆ→のち八「おまへはずつとあつちへ往てねゑや」のち八→小つゆ「ずつとあつちへいてねると船頭様んの茶をわかしてやらにや成ぬ」 (洒落本(上方語)・嘘之川・52-洒落 1804_01018,36320)

---

[1] 用例の検索方法は、以下の通りである。得られた用例はすべて目視で確認し、本発表で調査の対象としない用例は除いた。

「ト」…語彙素読みを「ト」、品詞の小分類を「接続助詞」に指定。

「タラ」…語彙素読みを「タ」、品詞の大分類を「助動詞」、活用形の大分類を「仮定形」に指定。

[2] 発話行為レベルにおいて現れるニュアンスは無視し、形態統語的に規定される形式について分類することとする。

(8)猫「今度寝やがったら、行て、みな食てしもうたらんならん」

(落語(大阪語)・蛸の手・60R 枝雀 1909_02025,9260)

「意志」(有標形):動詞や助動詞の意志形(「〜(ヨ)ウ」「〜べ」類)

(9)はる→ばば「あれさ老婆さんもういいはね。翌見たらまた有かもしれないはね」ばば「何でも夜が明ると畳まで上て見やう。何様したか」

(人情本・花廼志満台 3 編中・53-人情 1837_01008,73360)

(10)不明→不明「や、成田屋と褒められたら、さぁ、二十銭やんべえ」

(落語(東京語)・成田屋息子・60R 小さ 1911_01031,4900)

「意志」(無標形):動詞・助動詞・形容詞の基本形(「スル」「〜ヌ」「〜ナイ」類)

(11)船頭→岩木甚平「早いが好きならこの船初夜が鳴ると出します」

(近松浄瑠璃・鑓の権三重帷子 下・51-近松 1717_24002,61960)

(12)さん→三五郎「おのれまあ/＼大事の子を、怪我でもあつたらぶち殺す」

(近松浄瑠璃・心中天の網島 中・51-近松 1720_20002,4460)

「希望・願望」:「〜タイ」類

(13)女郎→客「それでも若。ぬしのとつさんやかかさんが、ふしようちな時は、どふしんしやうねへ。それを思ふと、死たふおすよ」　(洒落本(江戸語)・総籬・52-洒落 1787_01065,168950)

(14)お松つぁん姐ちゃん→長屋の女房「そやからわたいな、同じ婿はん持つのやったら、あんな人を亭主にしたいわ」　(落語(大阪語)・長屋議会・60R 文雀 1923_02035,17020)

4．用例の分類と分析

4.1 ではト条件文の文末に現れるモダリティについて、4.2 ではタラ条件文の文末に現れるモダリティについて、分類と分析を行う。

4.1　ト条件文の文末に現れるモダリティ

表 1　ト条件文の文末に「働きかけ・表出」「述べ立て」のモダリティが現れる文の用例数と割合

	命令	依頼	禁止	勧め	勧誘	許可 許容	義務	意志		希望 願望	合計①	述べ 立て	合計②
								有標	無標				
近松 浄瑠璃								1 [5.6%]	7 [38.9%]		8 [44.4%]	10 [55.6%]	18 [100%]
洒落本 (上方)							4 [2.7%]	2 [1.4%]	5 [3.4%]		11 [7.5%]	135 [92.5%]	146 [100%]
洒落本 (江戸)									11 [11.3%]	2 [2.1%]	13 [13.4%]	84 [86.6%]	97 [100%]
人情本							1 [0.4%]	1 [0.4%]	13 [5.8%]	2 [0.9%]	17 [7.6%]	208 [92.4%]	225 [100%]
落語 (大阪)											0 [0%]	119 [100%]	119 [100%]
落語 (東京)							1 [0.5%]		2 [1.1%]		3 [1.6%]	179 [98.4%]	182 [100%]

※割合を算出する際の母数は当該資料に現れる「ト」の総数である。なお、小数第二位を四捨五入している。

※「合計①」はト条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる文の合計、「合計②」はト条件文の文末に述べ立てのモダリティが現れる文も加えた合計である。

近世中期(「近松浄瑠璃」)において、ト条件文の文末には「意志」(有標形・無標形)のモダ

リティが現れている。ト条件文の文末に「意志」(有標形・無標形)のモダリティが現れる文が、「近松浄瑠璃」のト条件文の用例全体に占める割合は 44.4%であり、割合が極めて高い点が注目される。

近世後期になると、それぞれの資料においてト条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる文の合計の割合(表 1 の合計①)は低下しているが、ト条件文の文末に、「意志」(有標形・無標形)のモダリティに加えて「義務」「希望・願望」のモダリティが現れており、文末に現れるモダリティのバリエーションが増加している。

明治・大正期においては、大阪語の用例は見られず、東京語の用例もごくわずかと、近世後期より減少している。

また、近世期においても明治・大正期においても「命令」「依頼」「禁止」「勧め」「勧誘」「許可・許容」のモダリティは全く現れていない。近世期や明治・大正期において、ト条件文の文末には働きかけ・表出のモダリティのすべてが現れるというわけではなく、現れるモダリティの種類は偏っているということが分かった。ト条件文の文末には、他者に対して働きかける(行為要求をする)ようなモダリティは現れず、聞き手がいなくても成り立つような、話し手の「意志」「希望・願望」「(話し手の認識する) 義務」を表明する場合のみ文として成立するのである。

ト条件文についてまとめると、ト条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる割合は、「近松浄瑠璃」では 44.4%であるが、「洒落本」(上方語)では 7.5%、「洒落本」(江戸語)では 13.4%、「人情本」では 7.6%と、近世中期から近世後期にかけて減少している。さらに、「落語 SP 盤」(大阪語)では 0%、「落語 SP 盤」(東京語)では 1.6%であり、近世後期から明治・大正期にかけても減少し、非常に低い割合になっている。一方で、ト条件文の文末に述べ立てのモダリティが現れる文の割合は近世後期以降高い水準を維持しており、時代が下るにつれて、次第に現代共通語のようなモダリティ制約の厳しい状態に近づいていっているという変化の流れが明らかになった。

4.2 タラ条件文の文末に現れるモダリティ

表 2 タラ条件文の文末に「働きかけ・表出」「述べ立て」のモダリティが現れる文の用例数と割合

	命令	依頼	禁止	勧め	勧誘	許可 許容	義務	意志		希望 願望	合計①	述べ 立て	合計②
								有標	無標				
近松 浄瑠璃	7 [6.8%]	6 [5.8%]			2 [1.9%]			5 [4.9%]	7 [6.8%]		27 [26.2%]	76 [73.8%]	103 [100%]
洒落本 (上方)	5 [3.2%]	13 [8.3%]	1 [0.6%]		1 [0.6%]		1 [0.6%]	4 [2.6%]	6 [3.8%]	1 [0.6%]	32 [20.5%]	124 [79.5%]	156 [100%]
洒落本 (江戸)	4 [6.6%]	6 [9.9%]				1 [1.5%]		5 [7.5%]	2 [3%]	1 [1.5%]	19 [28.4%]	48 [71.6%]	67 [100%]
人情本	25 [6.4%]	13 [3.3%]	1 [0.3%]	1 [0.3%]	6 [1.5%]		2 [0.5%]	18 [4.6%]	11 [2.8%]		77 [19.6%]	316 [80.4%]	393 [100%]
落語 (大阪)	6 [2.6%]	3 [1.3%]					2 [0.9%]	5 [2.1%]	11 [4.7%]	1 [0.4%]	28 [12%]	206 [88%]	234 [100%]
落語 (東京)	1 [1.5%]	1 [1.5%]	1 [1.5%]					3 [4.4%]	6 [8.8%]	3 [4.4%]	15 [22.1%]	53 [77.9%]	68 [100%]

※割合を算出する際の母数は当該資料に現れる「タラ」の総数である。なお、小数第二位を四捨五入している。

※「合計①」はト条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる文の合計、「合計②」はト条件文の文末に述べ立てのモダリティが現れる文も加えた合計である。

近世中期(「近松浄瑠璃」)において、タラ条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる文が、「近松浄瑠璃」のタラ条件文の用例全体に占める割合は 26.2%である。タラ条件文の文末には「命令」「依頼」「勧誘」「意志」(有標形・無標形)のモダリティが現れており、ト条件文の場合より現れるモダリティの種類が多いことが分かる。

近世後期においては、近世中期に見られた「命令」「依頼」「勧誘」「意志」(有標形・無標形)のモダリティに加え、タラ条件文の文末に新たに「禁止」「勧め」「許可・許容」「義務」「希望・願望」のモダリティが現れている。ト条件文の場合と異なり、働きかけ・表出のモダリティ 10 種類すべてが現れているのである。

そして、明治・大正期においては、ト条件文の場合には文末モダリティ制約が厳しくなるのと異なり、タラ条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる割合、文末に現れるモダリティの種類ともに比較的維持されている。

タラ条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる割合は、「近松浄瑠璃」では 26.2%、「洒落本」(上方語)では 20.5%、「洒落本」(江戸語)では 28.4%、「人情本」では 19.6%、「落語 SP 盤」(大阪語)では 12%、「落語 SP 盤」(東京語)では 22.1%である。上方語・大阪語においては近世中期から明治・大正期まで次第に割合が低下しているが、ト条件文では明治・大正期に急激に割合が下がるのと異なり、明治・大正期においても 10%台を維持している。

タラ条件文についてまとめると、タラ条件文の文末には、働きかけ・表出のモダリティ 10 種類すべてが現れていることに加え、それらの合計の割合も近世中期から明治・大正期にかけて比較的安定している。タラ条件文は現代共通語では文末モダリティ制約がないとされているが、近世中期から明治・大正期においても概ね同様であったのである。そして、タラ条件文の文末モダリティ制約が緩いという現代共通語の状態は、近世中期にはその傾向が見え、近世後期に同傾向が強まって現代に至っていると言える。

5．おわりに

本発表では、近世中期から明治・大正期におけるト条件文・タラ条件文の文末モダリティ制約はどのような様相であるのか、現代共通語とどのように異なっているのかということについて見た。調査の結果、以下のようなことが明らかになった。

ト条件文の文末モダリティ制約について

①近世期や明治・大正期においては、ト条件文の文末モダリティ制約は、基本的に現代共通語より緩い状態であった。

②ト条件文の文末に働きかけ・表出のモダリティが現れる文の割合に着目すると、ト条件文の文末モダリティ制約は、時代が下るにつれて、次第に現代共通語のようなモダリティ制約の厳しい状態に近づいていっているということが分かった。それは、ト条件文の文末に述べ立てのモダリティが現れやすくなっていくという変化をも表している。

③近世期や明治・大正期において、ト条件文の文末には「義務」「意志」(有標形・無標形)「希望・願望」のモダリティは現れる(特に「意志」(無標形)が多い)が、「命令」「依頼」「禁止」

「勧め」「勧誘」「許可・許容」のモダリティは全く現れないというように、現れるモダリティの種類が偏っている。ト条件文の文末には、他者に対して働きかける(行為要求をする)ようなモダリティは現れず、聞き手がいなくても成り立つような、話し手の「意志」「希望・願望」「(話し手の認識する）義務」を表明する場合のみ文として成立しているのである。

タラ条件文の文末モダリティ制約について

①タラ条件文の文末モダリティ制約が緩いという現代共通語の状態は、近世中期にはその傾向が見え、近世後期に同傾向が強まって現代に至っている。

②近世中期から明治・大正期において、タラ条件文の文末には、働きかけ・表出のモダリティ10 種類すべてが現れている。

③タラ条件文の文末に現れる働きかけ・表出のモダリティの合計の割合は、近世中期から明治・大正期にかけて比較的安定している。

今後の課題

a. 調査資料を拡大する。

b. 今回明らかになったことについて、その背景・原因を考察する。

c. バ条件文・ナラ条件文における文末モダリティ制約の史的変遷を調査・考察する。

【用例出典】

国立国語研究所(2023)『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』(バージョン 2023.3)

国立国語研究所(2023)『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』(バージョン 2023.3)

国立国語研究所(2023)『日本語歴史コーパス 江戸時代編III近松浄瑠璃』(バージョン 2023.3)

国立国語研究所(2023)『日本語歴史コーパス 明治・大正編VI落語 SP 盤』(バージョン 2023.3)

【参考文献】

稲葉みどり(1991)「日本語条件文の意味領域と中間言語構造―英語話者の第 2 言語習得過程を中心に―」『日本語教育』75，pp.87-99

小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房

小林賢次(2002)「順接の接続助詞「ト」再考―狂言台本にみる近代語条件表現の流れ―」『国語と国文学』79，pp.107-119

鈴木忍(1978)『教師用日本語教育ハンドブック③　文法 I 』国際交流基金

ソルヴァン，ハリー・前田直子(2005)「「と」「ば」「たら」「なら」再考」『日本語教育』125，pp.28-37

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『日本語文法セルフマスターシリーズ 7　条件表現』くろしお出版

益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』くろしお出版

宮島達夫(1964)「バとトとタラ」『講座現代語 第 6 巻 口語文法の問題点』明治書院

日本漢文史における単語頻度の安定性の研究「漢文・漢語コーパスに基づいて」

呉子凡（蘇州大学）・王鼎（蘇州大学）

1.はじめに

漢語・漢字語の研究は国語学において山田孝雄（1940）、藤堂明保（1969）、佐藤喜代治（1987;1998）、浅野敏彦（1998）などを筆頭に盛んに行われてきた。佐藤武義（2007）は『日本語学研究事典』において漢語の研究史について、「国語研究所が計数的な方法を基礎に、明治以降の漢語を多量に研究し、現代語の位置づけに重要な寄与をなしている。しかし、なんらかの原則を基に、全時代を概観したものはない」と指摘している。また、山田俊雄（1978）は従来の語種分類では説明しにくい漢字語彙があることを考慮し、一般的な漢語の概念よりも広い「漢字語」という概念を提唱している。本研究は漢字の読み方の情報がほとんど付いていない漢文テキストをデータとしているため、漢字語という概念を選択した[1]。既存の研究は漢字の起源、音韻、日本語における漢字・漢字語の受容と使用実態などあらゆる側面を詳細に網羅していると言える。一方、技術的な制限で漢字の文字研究に依存しているところもまだ多く見られており、全体として通時的且つ俯瞰的研究が不足していることも窺える。とりわけ古典文献に関しては大規模なテキスト収集が難しいため、漢字語の通史的変化を研究することが困難である。

漢字語の語彙史の全体像をよりよく把握するためには、どのような語の使用実態が時代と共に大きく変化し、どのような語が人々に使われ続けてきたかを知ることが重要である。そのために、語彙の頻度と通時的な安定性を考察する必要がある。そこで本研究は、漢文・漢語コーパスに基づき、古典漢文における漢字語について、以下の 2 つの課題を解決しようとする。

（1）統計量で頻度情報を分析し、日本漢文史に通じて高頻度で使用される語（高頻度安定語）と特定の時代に限って高頻度で使用される語（高頻度不安定語）はどのような語であるかを明かにする。

（2）これらの語の頻度データのコレスポンデンス分析を通じて漢文史の各時代における語彙使用の特徴を考察する。

2. 調査データと研究方法

近年、通時コーパスの構築は通時言語学の発展に大きく寄与している。中国国家社会科学基金会の助成を受けて、「日中漢文・漢語コーパスの構築と研究」プロジェクトチームが日中漢字漢語通時コーパス「大地コーパス」を構築した。本研究は「大地コーパス β 版」に収録されている 8 世紀から 19 世紀までの日本の漢文文書 691 冊を調査データとして使用した。これらの文献の内容は、文学・哲学・歴史・地理・宗教・科学技術などの分野をカバーしている。日本側のデータセットの総文字数は 5,174,103 字である。単語を切り出し、異体字を統合した結果、1,770 語の二字漢字語が得られた。

本研究では、語の頻度と安定性の両方を検討する。高頻度安定語を抽出する場合、抽出された単語は単語頻度が高く、同時に通時的に安定していることが望まれる。高頻度不安定語を抽出する場合、抽出される語は比較的頻度が高く、通時的な安定性が弱いことが望まれる。

Brezina（2018）は『*Statistics in Corpus Linguistics: a Practical Guide*』で、語彙の安定性を調べるのに使える指標として、変動係数（coefficient of variation）、比率の逸脱（deviation of

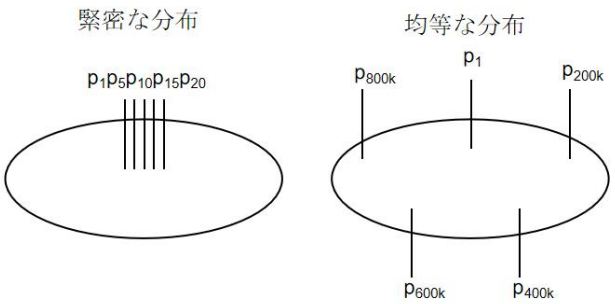
proportions)、平均縮減頻度（average reduced frequency）などを挙げている。本研究ではこれらの指標を参照し、使用するすべての指標を頻度指標と安定性指標の 2 つに分類する。安定性指標は、①データの分散度合い；②コーパスにおける分布の均一性；③時系列データの揺れの大きさ、の 3 つの方法で通時的な語彙の安定性を調べた。③についてはまだ良い指標がないため、本研究では新たに WL2 値を設定した。最終的に選ばれた指標は①頻度指標：使用頻度（TF）、平均減少頻度（ARF）；②安定性指標：変動係数（CV）、比率の逸脱（DP）、WL2 値である。

ここで、ARF と WL2 値について説明する。その他の指標については、Brezina（2018）を参照されたい。ARF は、コーパスにおける語の均等な分布という観点から語の頻度を調整する統計量である。その計算式は以下の通りである。

$$ARF = \frac{1}{v} \times (\min(\text{distance}_1, \text{v}) + \min(\text{distance}_2, \text{v}) + ... + \min(\text{distance}_n, \text{v}))$$

ここでは、v =コーパスの総文字数 / その語の頻度。distance_n はその語の 2 回の出現位置の距離のことであり、min（distance_n,v）は distance_n と v とのうち小さい方を表す。例えば、全部で 10 万字のコーパスの中に、頻度 5 の語が出現したとする。5 回の出現が非常に密接に分布している場合、その ARF 値は 1 に近くなり、5 回の出現は合計で 1 つの出現として見なされるべきことを示す。もし、5 回の出現がコーパスに均等に分布している場合、その ARF 値は 5 に近くなり、5 回の出現がすべて別々の 1 回の出現とみなすことができ、頻度を下げる必要がないことを示す。この例は Brezina（2018）を参照している。したがって、ARF は本質的には頻度情報を表す統計量であるが、語の分布の均一性を測る上で有益な情報となる統計量でもある。

図 1　コーパスにおける 2 種類の語の分布



WL2 値は、まず各世紀間の頻度の差 d_n を計算する必要がある。次に、連続する正数または連続する負数の d_n を分断して段ごとに合計し、2 乗したものを D_n とする。それからすべての D_n を合計し、Range2（語が出現した世紀数）で割り、最後に総頻度で割って WL2 値が得られる。計算の手順は以下のようになる。

$$d_n = F_n - F_{n+1}$$

$$D_n = (d_a + d_{a+1} + ... + d_b)^2$$

$$\text{WL2} = \frac{\text{D}_1 + \text{D}_2 + ... + \text{D}_n}{Range2 \times \text{TotalPMW}}$$

ここで、$\{d_a, d_{a+1}, ..., d_b\}$は連続する正数あるいは負数の集合である。WL2 値は、時間軸上の語頻度の連続的な増減を増幅して示す指標である。ゆえに、WL2 値が小さいほど語頻度が時間軸におけるゆれが小さいことを意味する。

次に、安定性指標を頻度指標とクロスさせ、それぞれの集計グループから最も優れた単語の集合を得た。高頻度安定語の抽出基準として、「頻度順位 47 以内、安定度順位 35 以内」を採用する。高頻度不安定語を抽出する際、ARF を安定度の低い単語の抽出に適した安定度指標 AIF に調整した。AIF の計算式は以下の通りである。

$$AIF = V \times \left(\frac{1}{\min(\text{distance}_1, v)} + \frac{1}{\min(\text{distance}_2, v)} + \ldots + \frac{1}{\min(\text{distance}_n, v)}\right)$$

表 1 クロス集計の概略図

安定度指標			
大	小		
高頻度安定語	高頻度不安定語	大	頻度指標

したがって、高頻度安定語は集計グループが 6 つあるに対しに、高頻度不安定語は 4 グループになる。また、高頻度不安定語の全体的な単語頻度が比較的に低いことを考慮し、「頻度順位 161 以内、安定度指標での順位 30 以内」を抽出基準として採用する。

3. 抽出結果と分析

上述のクロス集計で抽出条件に満たした語に点数をつけ、各候補語の合計点を求めるスコアテーブルの方式で結果を示す[2、3]。

表 2　高頻度安定語の得点表（6 点満点）

スコア	漢字語
6 点	天下*、大夫*、今日*^、菩薩*、日本*^
4 点	朝臣*、先生*^
3 点	和尚*、大臣*^、藤原*^、天地*、文章*^、君子*、左右*^

表 3　高頻度不安定語の得点表（4 点満点）

スコア	漢字語
4 点	和名、麻呂、禅師、皇子*、宿祢、天皇*^、念佛*
3 点	侍者、菩提
2 点	真人、居士*、次韻、先生*^

その結果、14 の高頻度安定語が抽出された。スコアが高いほど安定性が高いことを示す。6 点満点を獲得した単語は、いずれも漢文史において時代を問わず高頻度で使われてた単語である。中でも「天下」は最も頻度が高い。それは「天下」が日本漢文における重要な概念であることを示している。

また、13 の高頻度不安定語が抽出された。安定度は連続尺度であるため、「先生」のように両側で抽出される場合もあった。この状況は、「先生」の安定性は異なる視点によって差があることを示している。得点表のみでは、高頻度不安定語の高頻度期間はわからない。抽出された単語と時代との関係を探るために、各単語の通時的な単語頻度の変化からコレスポンデンス分析を行った。

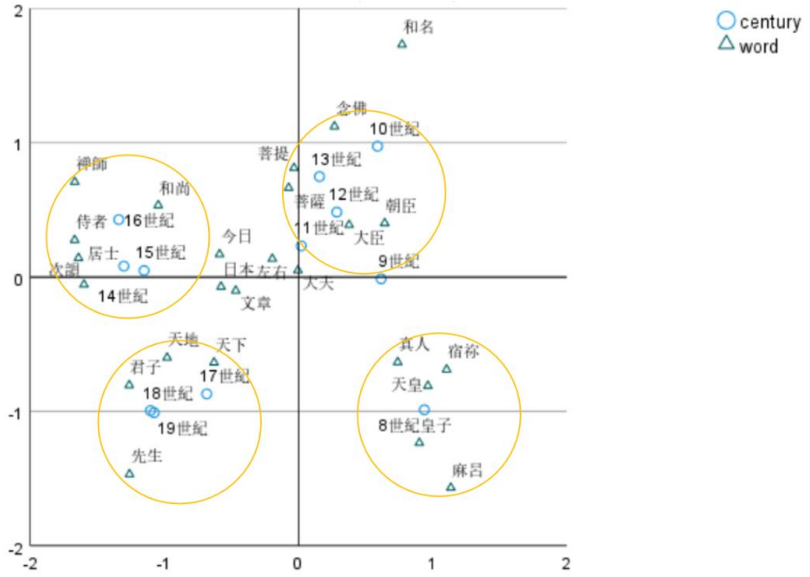
コレスポンデンス分析には、高頻度安定語と高頻度不安定語の各世紀の相対頻度が用いられた。その結果、固有値と寄与率は表 4 の通りである（次元 5 以降は省略）。なお、次元 1 の寄与率は 34.3%、次元 2 の寄与率は 19.7%である。この値は高くないが、次元が増えると寄与率が低くなる上に、技術的な制限で解釈が難しくなるため、本研究では次元 2

までのデータをプロットした。

表 4　各次元の固有値と寄与率

	次元 1	次元 2	次元 3	次元 4	次元 5	…
固有値	0.473	0.271	0.234	0.188	0.101	…
寄与率	34.3	19.7	17.0	13.7	7.3	…

図 2　コレスポンデンス分析の散布図



まず、各世紀のプロットを見ると、左上第 2 象限に 14、15、16 世紀、右下第 3 象限に 17、18、19 世紀がまとまって分布している。また、右上第 1 象限に 10、11、12、13 世紀が分部している。9 世紀は第 1 象限と第 4 象限の境目という微妙な位置にあるが、相対的な距離の近さと時代の連続性を考えると、9 世紀から 13 世紀は 1 つのまとまりを成していると考えることができる。さらに興味深いのは、8 世紀のみが第 4 象限に離れて分布していることである。

次に、日本古典漢文の全体的な語彙の使用特徴を把握するために、語のプロットに注目する。まず、第 2 象限の 14～16 世紀の周囲に「和尚」「禅師」「侍者」「居士」といった仏教に関係する語が多いことが目立つ。さらに、コーパスの内容を見る限り、これらの言葉はいずれも、他者への敬意を表す称呼の言葉として、あるいは称号として人名に続くことが多い。漢文は正式な文体であるため、人名を語る際には何らかの敬称をつけることが多いということが原因であると考えられる。その結果、人への呼びかけ方が高頻度の語彙となりやすい傾向がある。時代によって異なる敬称は、その時代の知識階級の主なアイデンティティの特徴を反映することができる。14 世紀から 16 世紀は、ちょうど日本漢文学史の五山文学期に相当する。幕府の庇護のもとに禅宗が日本で急速に発展したことを背景に、中国との交流の機会を多く与えられた臨済宗の僧侶たちは、積極的に漢文と漢字を学び、自ら執筆し、当時の日本における漢文学の主役となった。「和尚」「禅師」「侍者」「居士」の使用頻度の高さもこの事実に対応している。また、これらの敬称が頻繁に贈答詩や題詞に登場することは、漢文創作が当時の知識階級の間でかなりの人気を獲得し、風雅な流行文化と認識されていることを示している。

1）中竺全室和尚自京師還山作詩以献　　（『蕉堅藁』全一巻）

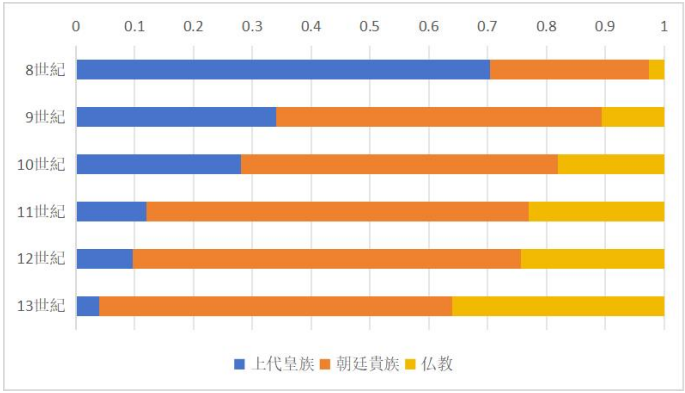
2）皇帝以大林禪師德望最重擢爲住持於　　（『東海一漚集』巻之二）

3）送續芳紹侍者奔母喪且叙舊云二首　　（『空華集』巻第二）
4）籾井丹後守賢弘法号茂林恵秀居士壽像賛　　（『翰林葫蘆集』第四冊）

また、第 3 象限の 17～19 世紀の周囲には「天下」「天地」「君子」「先生」といった儒教の考え方を表している語が点在している。その中でも、「先生」という語は、その時代において最も特徴的であり、その頻度が 17 世紀以降に右肩上がりになっている。「先生」は、意味の変化を経て、その時代には他人に対する敬称となり、漢文でも多用されるようになった。「天地」「天下」は中国伝統的な世界観「天地観」と、世界や国家に対する儒教的な認識に結びついている。

さらに、図の右側のみに着目する。下から上に向かって見ると、まずは第 4 象限にある 8 世紀の周囲の単語グループである。「天皇」「皇子」は明らかに皇室に関する言葉である。「真人」「宿祢」はともに八色の姓として知られているが、「真人」は皇族の最も関係の近い親族に与えた姓であり、「宿祢」は大化改新の前に既に職名や貴人に対する敬称として用いられていた。「麻呂」は上代において男子の呼称として用いられることが多い。次に、9 世紀と 10～13 世紀の間に、「大臣」と「朝臣」がある。「朝臣」も八色の姓の 1 つであり、皇族から下った臣籍の有力氏族に賜る姓である。「大臣」は律令で、国家を統制する太政官の職名として用いられていた。さらに上に行くと、「念佛」「菩提」「菩薩」といった仏教に関する用語がそこに位置する。こうして見ると、Y 軸の値が大きくなるにつれ、図の右側の単語は、上代皇室関連の語、朝廷貴族関連の語、仏教関連の語の 3 つの枠に分けられ、時間の推移によって関連付けられている。これら 3 つの枠の語頻度を合計し、それぞれの枠が占める割合の通時的変化を図 3 に示す。

図 3　8～13 世紀における 3 つの枠の割合の通時的な変化



8 世紀において、上代皇室に関連する語の比率が圧倒的であったが、9 世紀以降はその優位を朝廷貴族の語に譲り、比率が減る一方であった。朝廷貴族に関連する語は 9 世紀から 13 世紀まで優勢であったが、その比率は、8 世紀から 12 世紀まで徐々に増加し、13 世紀にはじめて減少した。また、仏教関連の語の比率は 8 世紀から 13 世紀にかけて右肩上がりの傾向を示し、13 世紀に大幅に増加した。以上の 3 つの語彙枠の比率の変化は、8 世紀から 13 世紀、すなわち奈良時代から鎌倉時代にかけての日本漢文の創作主体や主要な内容構造の変化を反映している。8～13 世紀は漢文の創作階層が公家・貴族から僧侶へと徐々に移行していった時期であると言える。

最後に、図の中心部に「大夫」「今日」「日本」「左右」「文章」などの語が 3 つの時代グループの中間に散在していることが見える。コレスポンデンス分析においては、要素が原点に近い位置にあるほど、その要素が全体的に特徴が弱いと言える。今回は図の中心部に位置する語はいずれも高頻度安定語である。高頻度安定語は、時代を問わずに通時的に安

定的に使われる語であるため、特定の時代性を持たないのが特徴的である。語の意味から見れば、専門用語ではない抽象的な概念、または日常でよく使われる言葉がこういう語にはなりやすい。

4. まとめ

以上の分析を通して、本研究は、漢文コーパスに基づき、統計的な方法を用い、日本古典漢文における通史的に多用され、且つ頻度が安定している高頻度安定語と、特定の時代のみに頻繁に用いられる高頻度不安定語を抽出した。中で「天下」が漢文史におけるコアな漢字語であることが分かった。また、抽出した語の頻度に基づいてコレスポンデンス分析を行い、日本漢文史を 8 世紀、9 世紀から 13 世紀、14 世紀から 16 世紀、17 世紀から 19 世紀の 4 つの段階に分けた。各段階の語彙がそれぞれ一定の分野に関係性を持ち、時代ごとに異なる特徴を持っていることが分かった。8 世紀から 13 世紀にかけては、それ自体が変化の時代だった。漢文創作の担い手は、皇室・公家から武家の支持を得た僧侶へと徐々に移っていった。その背景に、王朝漢文を支えた貴族が政治的な危機を迎え、国の体制は律令政府から武家政治に移行しつつあった。14 世紀から 16 世紀は禅文学の時代であり、その主な創作主体は禅僧であった。17 世紀から 19 世紀の漢文は、儒学者が主役の座を占めていた。つまり、各時代の特徴語に相違が出る主な原因の 1 つは、漢文創作において主導権を握る識字層の変化であると考えている。

注

1. 本研究における「漢字語」の概念には、字音語の以外にも、漢字で表記される和語、外来語、混種語も含まれる。
2. 本研究では、集計グループの半数以上でスコアを獲得した内容語のみが議論の対象として取り上げられた。
3. CHJ と BCCWJ において PMW が 20 以上の語はそれぞれ*と^で表示される。

参考文献

浅野敏彦.『国語史のなかの漢語』.和泉書院.1998
石田基広;金明哲.『コーパスとテキストマイニング』.共立出版.2012
小木曽智信,岡崎友子,青木博史.「『日本語歴史コーパス』中古・中世のデータ構築について」.『コーパスによる日本語史の研究』.ひつじ書房.2022.
佐藤喜代治.『国語語彙の歴史的研究』.明治書院.1971
佐藤喜代治.『漢語漢字の研究』.明治書院.1998
飛田良文.『日本語学研究事典』.明治書院.2007
藤堂明保.『漢語の日本語』.秀英出版.1969
宮島達夫.『言語史の計量的研究』.笠間書院.2019
諸橋轍次.『大漢和辞典（修訂版）』.大修館書店.1999
山田孝雄.『国語の中に於ける漢語の研究』.宝文館.1940
山田俊雄.『日本語と辞書』.中央公論社.1978
董明.『古代漢語漢字対外伝播史』.中国大百科全書出版社.2002
汪維輝.『漢語核心詞的歴史與現状研究』.商務印書館.2018
V. Brezina. *Statistics in Corpus Linguistics: A Practical Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.2018
D. Glynn.2014.Correspondence analysis: exploring data and identifying patterns[C]// D. Glynn & J. A. Robinson.*Corpus Methods for Semantics: Quantitative Studies in Polysemy and Synonymy*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company:443-485.

原型からみた形容詞「カワイイ」の意味と新用法

埼玉大学大学院　北風（きたかぜ）　絵里（えり）

１．目的

形容詞「カワイイ」の使用が近年多くなっていることが、南(2002)、河原(2016)、清澤(2014)において指摘されている。また、「カワイイ」の対象についても、多様化しているとの指摘がある。「カワイイ」の意味について、井上(1995)は、アンケートと聴き取り調査から、話者の内省報告を相互に比較・対照することによって記述している。対象の「小さい」「親愛感」「不快感・嫌悪感を抱かせる形態やしぐさを有していない」といった特徴と表現主体の「対象への好意」といった内面を記述し、言語「カワイイ」の意味と、心内状態とは同一ではないと指摘している。また、「カワイイ」は、対象への評価の面を含んでおり、表現主体と対象とが親密に交わらず一定の距離を保って付き合う関係であれば、気軽に何事につけ「かわいい」と言えるとしている。また、石川(2016)は、「愛らしい」を「カワイイ」の機能の一つと捉え、併せて、「カワイイ」には、気に入ったものを主張する機能、海外の人々にとって日本文化の一部を示す機能、会話上の潤滑油としての機能を持つとしている。

本発表は、先行研究では取り上げられていない「カワイイ」の意味構造に焦点を当て、Coleman and Kay (1981) を援用して「カワイイ」の意味を原型の観点から記述し、新用法を提示することを試みる。原型とは、ある範疇の最も中心的な成員のことである。Colemanらは英語の*lie*の原型の要素として（a）命題が実際に虚偽である（b）話し手が命題を虚偽であると信じている（c）話し手が受け手を欺こうとしている、の三つを仮定し、三つの要素のうち多くを持つものほど*lie*としての判定値が高いこと、判定値への貢献度に関して３要素の間には差があり重要な順から（b）＞（c）＞（a）であることを述べた（山中・安田（2008: 33））。

まず、形容詞「カワイイ」の対象が〈小さい〉〈弱い〉〈生物〉の３つの要素を持っているとき（例えば幼児）、「カワイイ」の原型であると仮定する。それぞれの要素について、基本義、拡張義を定めた。〈小さい〉は容積・身長が占める場所が少ない、年がゆかない（以上、基本義）、程度が小さい、度量が小さい（以上、拡張義）とし、〈弱い〉は力が少ない、構造が脆い（以上、基本義）、能力が乏しい（拡張義）、〈生物〉は人・動物・植物とした。また、３つの要素の間には重要さにおいて差があり、重要なものから〈小さい〉〈弱い〉〈生物〉の順であると仮定した。

２．調査方法

『国立国語研究所書き言葉均衡コーパス』を使用し、「カワイイ」の用例の収集を行い、分類・分析を行った。

２.１．対象

用例の収集対象は、「カワイイ」の多様化した対象や従来と異なる用法を調査するため、検索対象を2000年代に限定し、検索条件を語彙素読み“カワイイ”とした。また、使用されている「カワイイ」が正用であることを担保するため、校閲の入る出版物を検索対象とし、レジスタ

ーを出版・新聞、出版・雑誌、出版・書籍、図書館・書籍、特定目的・韻文、特定目的・ベストセラー、特定目的・広報誌とした。

また、語彙素読み“カワイイ”で得られた全ての用例（2700例）に目を通し、「かわいそう」「可愛がる」「可愛げ」「慣用表現（可愛い子には旅をさせよ、可愛さ余って憎さ百倍）」などの用例は考察対象外とした。考察対象とする用例（2223例）について、形容詞「カワイイ」の対象が何であるかを特定し、文脈から対象の情報と「カワイイ」の表現主体と対象との関係の確認を行った。2223例の中から、非原型的用法と考えられる用法の選別を行い、244例を分析対象とした。その上で、244例が「カワイイ」の原型の要素を持っているか判定した。判定するにあたって、そのことが文脈に明記されている「文脈」、前後の文脈から推定することができる「推定」、一般常識や文脈外の知識全般をもとに判断することができる「常識」を判断基準とした。

2.2. 判断基準

2.2.1. 〈小さい〉

【文脈】

①前後の文脈に対象を修飾する言葉として、下記いずれかが明記されている。

・「小さい」「小」「細い」「軽い」容積、身長など占める場所が少ないことを表す語

・「幼い」「子どもみたい」「子供っぽい」など年がゆかないことを表す語

・「少額」「とるに足らない」など、対象の程度が小さいことを表す語

・度量が小さいことを表す語

なお、実際に対象自身が上記の要素を持っていなくても、表現主体が、対象から上記の要素を見出していることが明記されているものも含む。

【推定】

①前後の文脈から、対象が、上記【文脈】①の要素を持っていると推定できる。

②「大きい」などの「小さい」類の対義語が明記されている場合は、〈小さい〉を持たないと推定できる。

③前後の文脈から、対象が、同種の中で「小さい」と推定することができる。（例）お化け

④文脈から対象が、修飾されている言葉そのものではなく、その動作主を指していることが推定でき、その動作主に対して上記【文脈】①の要素が明記されている。（メトニミー）（例）おひなまつり

【常識】

①一般的に「小さい」と考えられる。（例）アクセサリー、あめ、いちご、あられなど→基準：片手のひらに収まる

②写真から、明確に一般的なものよりも「小さい」とわかる。（例）車：トッポリーノ

2.2.2. 〈弱い〉

【文脈】

①前後の文脈に対象を修飾する言葉として、下記のいずれかが明記されている。

・力が少ない、強くないことを表す語

・堪える力が少ない、もろいことを表す語
・「一生懸命」「余裕がない」「できない」など、はたらきが劣っている、うまくいっていない、能力が乏しいことを表す語（類）慎重に、あたふたしている、懲りない
・「寂しがる」「恐る」など意志が堅固でない、心がしっかりしていないことを表す語
②前後の文脈に対象が、弱っている（恥、泣く）ことが、または弱い立場や状況にいることが明記されている。（例）赤くなる、ドギマギしている、ベソをかいている、無様な、みっともない； 呪われている、謝る
【推定】
①前後の文脈から、対象が、上記【文脈】①の要素を持っていると推定できる。
②「やんちゃ」などの「弱い」類の対義語が明記されている場合は、「弱い」要素を持たないと推定できる。
③前後の文脈から、対象が持っている能力を意図的に発揮していない、あるいは期待値に達していないことが推定できる。（例）逃げ道をふさがない、控えめ、計算に気づいていない
２.２.３. 〈生物〉
【文脈】
①対象が人、植物、動物のいずれか、あるいはその集合である。
②対象が人、植物、動物のいずれか、あるいはその集合の部分、性質、動作、言葉、様子であると、前後の文脈から明らかである。
③対象が指示語であるが、その指示内容が人、植物、動物のいずれかであることが前後の文脈から明らかである。
【推定】
①対象となっている単語は非生物であるが、その動作主（生物）を指示していることが前後の文脈から推定できる。（例）おひなまつり、響
②対象そのものは生物ではないが、人称接尾辞が付属しているなど、生物として扱っている、擬人化されていると推定される。
③対象そのものは生物ではないが、生物を模した形状、装飾がなされている。（例）ゾウの縫い取り

３. 分類結果
非原型的にみえる用例244件のうち、145件は〈小さい〉〈弱い〉〈生物〉のいずれかの要素を持っており（そのうち〈生物〉のみを持っている用例が28件）、99件はいずれの要素も持たない（そのうち64件はファッションアイテムに関連する用例、10件は色に関する用例）と考えられる。したがって、非原型的にみえる用例のうち、145件は仮定した原型と結びつけて記述することができると考える。
非原型的にみえる用例のうち、仮定した要素の基本義により近いと考えられるものから順に対象の性質をあげる（例文末に（ID、開始位置、レジスター）を記す。下線は筆者）。
３.１.仮定した原型の要素を含むものとして記述可能な用例

3.1.1.〈小さい〉

・物理的な体積が小さい

（1）手作りのフェルトのベビーシューズをちょこんと置いて。それだけで小さなかわいい世界が広がっていく。自分と家族とお店の椅子…。暮らしや場所に合わせて選ぶ楽しみ（PM51_00086、9150、出版・雑誌）

・幼い

（2）鈴木　恵美（3年）川越のかしや横町でおかしを買った。私はねりアメとふつうのアメといちごの形のおかしを買った。昔のおかしだったのでお母さんははしゃいでいた。まるで子どもみたいだった。（中略）恵美のお母さんも佑司のお父さんも、なんともかわいいと思いませんか。（PB13_00209、32380、出版・書籍）

・程度が小さい

（3）ヤン・ミミの復讐は二十五年越しで、大手企業の社長＆その家族を破滅させるという壮大なもの。それに比べチェリンは、ただ愛する男を奪われたくない、という可愛いものだった。（PB57_00064、45100、出版・書籍）

・度量が小さい

（4）観察するということは失礼なことではなく、人との関係を円滑にするための基本ですね。そうして、誰かが自分を嫌っていることがわかった時、「嫌いだということを態度に出さないと気がすまないなんて、この人は可愛い人だな」と思えるゆとりも出てくるかもしれません。若いうちからたくさんの人を観察しておきましょう。（PB11_00175、19320、出版・書籍）

3.1.2.〈弱い〉

・力の弱さ

（5）私が夢中な、青の花。透明感のあるさみしげな花をかざしてそこだけは小さな青空空にかざせば、向こう側が透けて見えそうな…。「そう、この透明感。風が吹いてぱらっと散っちゃうのがまた、さみしくもかわいいて」と佐藤さん。（PM41_00434、31030、出版・雑誌）

・構造の弱さ

（6）Process 1 長いままの色違いのゴムを2本、耳の上あたりに結いつけます。ジャマな髪の毛はダッカールなどでとめておくと○。　2髪の毛をすくいとってねじりあげ、ゴムとあみこませながら、頭の周りを1周します。ルーズさがカワイイので、キッチリしなくてOK。3写真のように、ぐるっと1周、最初に結ったところまであみこんでいきます。（PM41_00784、16030、出版・雑誌）

・はたらきが劣っている、うまくいっていない、能力が乏しい

（7）ATM で「もう一度、初めから」と言われている人はかわいいです。（中略）そういうところを見られるのは、本人は恥ずかしい。「もう一度、初めから」という時はあたふたしています。でも、そこがかわいいのです。2回も3回も、「もう一度、初めから」と言われるとあせります。（PB41__00081、106830、出版・書籍）

・意志が堅固ではない、心がしっかりしていない

（8）友達からというより、たとえば男の子が私に好意を持っているのになかなか言い出せない、みたいなそぶりを見せてくれると、何かかわいいなと思って……（PM31_00370,18920,出版・雑誌）

・対象が弱っている、または弱い立場や状況にいる

（9）大柄の宮之原が、ベソをかいているのが、珠代にはひどく可愛く思える。（LBs9_00114、18950、図書館・書籍）

（10）「私が悪かった。すぐ怒鳴るのは私のくせです。あんたには洗濯物もしてもらってありがたいのに、ごめんね…。これから心を入れかえてお世話になります。許してください」と書いてあり、一万円札が置いてあった。まあ、なんてかわいいバアサンだろうと、（PB39__00313、44810、出版・書籍）

3.1.3.〈生物〉

・対象が人、植物、動物のいずれかあるいは一部（例文省略）

・対象が人、植物、動物の性質、動作、言葉、様子

（11）イントネーションとか単語も強いし、言葉が与える影響力って確かに大きいと思いますね。僕も関西弁は好きですよ。特に女のコが話す関西弁なんて、可愛くてもう吸い込まれそう（笑）。（PM21_00481、8540、出版・雑誌）

・そのものは生物ではないが、生物の要素をとれる（人に例えている、人を例えているなど）

（12）私が思うのは、そうじゃなくて、自分の生活の中のムダを見直して、貯めたお金で留学だとか、旅行をすれば、もっとお金がかわいく思えるし、貯めた自分もかわいく思える。（PB55_00127、59730、出版・書籍）

3.2. 新用法と考えられる用例

「カワイイ」がいずれの要素も持たずに対象を形容している99件は、対象が拡大していると考える。いずれの要素も持っていない、あるいは重要さの小さい〈生物〉のみを持っている用例を新用法と考えたい。特にファッションアイテムに対する「カワイイ」は様々な対象に用いられ、新用法の中心となると考える。

3.2.1.〈生物〉のみを持っている用例

（13）撮影は雨に祟られたというが、従軍中はずっと晴れが続いている。富士山がとても綺麗だった。↑緑亀兵の皆さんが一列になって、偽装中。なんかカワイイ↑→火矢を放つ兵。（PB57_00080、66290、出版・書籍）

3.2.2. いずれの要素も持たない用例

（14）実家に帰るついでに鎌倉市内に立ち寄ることも。「一年中クリスマスがコンセプトという可愛いお店。ひと足早いクリスマス気分を味わうために、またプレゼントを買うためにも時々行きます」。（PM41_00044、26590、出版・雑誌）

（15）何故グレートズィールの風車が有名なのかを聞くと、“双子の風車”と呼ばれていて、同じ形の風車が並んで建っているためとても可愛いのだそうだ。風車は近くで見ると本当に大きい。（PB12_00292、14360、出版・書籍）

３.２.２.１．ファッションアイテムの用例

（16）黒は大好きなんだけど、難しい色。地味にならないよう、キラキラしたラインストーンや光沢のある素材で肌がきれいに見えるデザインを選んでちょっぴり可愛いイメージを目指します」（PM51_00620、40850、出版・雑誌）

（17）ベスト×ネクタイのマニッシュなスクールスタイル。シャツがピンクだからとびきりキュートに見えるね。あわいピンクは茶色やグレーと組み合わせると上品でかわいいよ。（PM51_00539、19960、出版・雑誌）

（18）可愛い派はディテールものやカラーアイテムが豊富　荘川　愛さん　成蹊大学新１年生　ピンクや白が中心の可愛いスタイルが好き。ブランドバッグも数多く持っています。大学ではフェミニンなアイテムを取り入れて一層可愛い系に磨きをかけます。（PM41_00796、89230、出版・雑誌）

「カワイイ」ファッションアイテムは、ピンク、白、黄色などの色が示されているものが多い。清澤(2014)も、WEB 調査から女性がかわいいと感じる色はピンク系であり、また一般的に「明るいトーン」の色を「かわいい」と感じる女性が最も多いと報告しており、本発表の調査結果と一致している。

〈参考文献〉

秋田哲郎（2017）「「かわいい」から考える日本と日本語－言語から文化をとらえる授業の試み－」『人文科教育研究』44，pp.161-177./石川なつ美（2016）「「かわいい」の意味について」『東京女子大学言語文化研究』24，pp.21-35./井上博文（1995）「若年層女性における形容詞「かわいい」の意味記述」『佐賀大国文』23，pp.202-182./宇治川正人（2016）「「かわいい」の原因系と結果系の分類―『かわいい』を類型化する」『日本感性工学会論文誌』15(１)，pp.39-46./宇治川正人（2023）「「かわいい」と思う感情の対象の変遷と原因系－古語辞典の用例の分析－」『日本感性工学会論文誌』22(2)，pp.163-169./小原一馬（2000）「「かわいいおばあちゃん」- 女子大生の「かわいい」の語法に見られる、ライフコース最終期に関する社会の葛藤する価値観の止揚-」『教育・社会・文化: 研究紀要』7，pp.25-43./河原茜（2016）「現代社会における若者が使う「かわいい」とは」『筑紫語文』25，pp.28-50/清澤雄(2014)「かわいい色の調査結果に基づく評価者のクラスター分類とその嗜好特性」『日本感性工学会論文誌』13(１)，pp.107-116./新村出 編（2008）『広辞苑』第７版　岩波書店./高木裕子・大村桂子・岡本有花・加藤陽子・上村育代・木村千里・小林幸子・榊原芳美・高林恵利子・津野里恵子・福原美紀・藤本昌子・吉岡思朗（1994）「現代語としての『かわいい』と若者言葉-様相論を基礎にした調査と分析-」『日本語教育論集』４,pp.113-127./土山真未・正本博士・コウハクル ワサナ・重松幹二（2019）「“かわいい香り”の認知構造の検討」『日本感性工学会論文誌』18(4), pp.315-320./飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版./南伸坊・朝日新聞学芸部(2002)『イマドキ現代用語 50』朝日新聞社./村上佳恵（2017）『感情形容詞の用法　現代日本語における使用実態』笠間書院./山中信彦・安田美幸（2008）「「まじめ」の原型意味論－大学生質問紙調査に見られる規範意識－」」『日本語科学』24,pp.31-53./四方田犬彦（2006）『「かわいい」論』筑摩書房./ Coleman, Linda and Paul Kay. (1981) Prototype semantics: The English word *lie*. Language 57(1): 26–44.

なぜ日本語二重目的語構文の基本語順は動詞によって異なるのか

田中 悠介（福岡大学）

1. はじめに

1.1. 本研究の背景と目的

日本語は英語のような言語とは違い，語順の自由度が高い。二重目的語構文（NP1 が NP2 に NP3 を V）[1] の語順に関しても，3 つ項を並べる順番に制限はなく，どの語順を基本語順とみなすかについては複数の見解がある。最初の項はガ格とされるが，ニ格とヲ格に関しては，基本語順を「にを」とみなす立場もあれば，「にを」と「をに」の両方とみなす立場もある (Hoji, 1985; Miyagawa, 1997)。また，基本語順は何かしらの要因によって異なるとする立場もある。この立場としては，以下の 3 つが挙げられる。

1. ニ格名詞が有生であれば「にを」，無生であれば「をに」(Ito, 2007)
2. 使役起動交替の際にニ格名詞が主語になる動詞であれば「にを」，ヲ格名詞が主語になる動詞であれば「をに」(Matsuoka, 2003)
3. 文レベルの意味が使役所有であれば「にを」，使役移動であれば「をに」(中本他, 2006)

これに対し笹野・奥村 (2017) は大規模コーパスに基づく調査を実施し，約 6 割の動詞では「にを」が優勢であり，残り約 4 割の動詞では「をに」が優勢であることを明らかにしている。二重目的語構文の基本語順は動詞によって異なるということであるが，その要因は未解明である。以上の背景を踏まえ，本研究は二重目的語構文の基本語順が動詞によって異なる要因を解明することを目的とする。

1.2. 仮説

本研究で検証する具体的な要因は，ニ格名詞の有生性，項の長さ，動詞の種類，およびニ格名詞とヲ格名詞のタイプ頻度の 4 つである。

まず，ニ格名詞の有生性と項の長さについて述べる。Ito (2007) によれば，二重目的語構文の基本語順はニ格名詞が有生であれば「にを」，無生であれば「をに」である。また，日本語では多数の語で構成される長い項は短い項よりも先に出現する傾向がある (Yamashita & Chang, 2001)。よって，ニ格に有生名詞が生起しやすい動詞やニ格が長くな

[1] ヲ格名詞句を 2 つとっているわけではないという意味では二重目的語構文ではないが，先行研究に倣い，本研究でも「NP1 が NP2 に NP3 を V」という形式を二重目的語構文と呼ぶ。

る傾向にある動詞では「にを」が優勢となり，ニ格に無生名詞が生起しやすい動詞やヲ格が長くなる傾向にある動詞では「をに」が優勢となると予測される。

次に，動詞の種類について述べる。Matsuoka (2003) によれば，二重目的語構文の基本語順は動詞の種類によって異なり，使役起動交替時にニ格名詞が主語になる動詞は「にを」，ヲ格名詞が主語になる動詞は「をに」が基本語順である。この説は心理実験やコーパス調査によって反証されているが (Koizumi & Tamaoka, 2004; 笹野・奥村, 2017)，別の分類が影響している可能性もある。本研究では，Kishimoto (2001) による二重目的語動詞の分類を採用する。それによれば，二重目的語動詞は (i)「所有変化を表すもの」と (ii)「位置変化を表すもの」，(iii)「両方を表すもの」の 3 つに分類可能である。以降では便宜上，(i) を「所有変化動詞」，(ii) と (iii) を「位置変化動詞」と呼ぶ。Kishimoto (2001) によれば，所有変化動詞のニ格は間接目的語である一方で，位置変化動詞のニ格は与格名詞である。この違いが基本語順の違いにつながっている可能性を検証する。

最後に，ニ格名詞とヲ格名詞のタイプ頻度について述べる。タイプ頻度の影響を検証する理由を説明するために，架空の動詞 V について考えてみよう。V はニ格には 100 種類の名詞をとる（＝タイプ頻度 100）が，ヲ格には特定の名詞 N しかとらない（＝タイプ頻度 1）という特徴を持つとする。このとき，V と N は常に共起することで強い結びつきを得る。その結果，V はヲ格名詞である N と近接する語順である「にを」を好むと予測される。このようにタイプ頻度が低い方（上述の例であればヲ格）と動詞が近接する語順が好まれ，これが動詞ごとの基本語順の違いを生んでいる可能性を検証する。

なお，文レベルの意味 (中本他, 2006) については検証しない。中本他 (2006) は，文レベルの意味が使役所有か使役移動かによって基本語順が異なることを心理実験により明らかにしている。しかし，刺激文のニ格名詞の多くは，使役所有に関しては有生，使役移動に関しては無生となっている。つまり，文レベルの意味がどちらであるかはほとんどニ格の有生性に還元されるため，有生性と独立に検証できない。よって，文レベルの意味が語順に影響している可能性はあるものの，本研究では検証の対象外とする。

2. コーパス調査

Kishimoto (2001) が所有変化動詞に分類した動詞と位置変化動詞に分類した動詞 7 ずつを調査対象とした。具体的には，表 1 に挙げる動詞である（アスタリスクが付与されているものが位置変化動詞）。日本語 Web コーパス jaTenTen11[2] からこれらの動詞を含む文を 1 万例ずつ収集し，日本語構文・格・照応解析システム KNP[3] で構文解析を行うことで，ニ格とヲ格の両方が出現している文を抽出した。これらの文を対象に，各動詞における「にを」語順の割合，およびニ格名詞とヲ格名詞のタイプ頻度を算出した。さらに，ニ格名詞を有生性に基づき分類した。日本語形態素解析システム JUMAN[4] の辞書では名詞に対して人や抽象物といったカテゴリー情報が付与されているが，これが人か人

[2] https://www.sketchengine.eu/jatenten-japanese-corpus/

[3] https://nlp.ist.i.kyoto-u.ac.jp/index.php?KNP

[4] https://nlp.ist.i.kyoto-u.ac.jp/index.php?JUMAN

名，動物であるものは有生名詞，それ以外のものは無生名詞とした。最後に，形態素解析結果を基にニ格名詞句とヲ格名詞句の形態素数を算出し，ニ格名詞句の形態素数からヲ格名詞句の形態素数を引いた値を「項の長さ」の指標とした。

表 1　調査対象とした動詞とその分析結果

動詞	ニ格のタイプ頻度	ヲ格のタイプ頻度	「にを」語順の割合	ニ格の有生率	ヲ格に対するニ格の長さ
与える	1215	653	92.9%	41.8%	0.482
渡す	749	671	67.7%	52.5%	0.074
貸す	538	250	86.7%	39.9%	0.791
売る	198	169	67.4%	35.9%	0.347
提供する	353	363	70.0%	42.4%	–0.105
供給する	214	157	75.1%	13.8%	0.500
寄付する	355	285	28.9%	7.7%	–0.292
送る*	490	333	74.4%	27.1%	0.372
投げる*	391	291	66.5%	25.5%	0.244
届ける*	282	357	52.0%	51.0%	–0.172
運ぶ*	635	350	80.2%	8.2%	0.826
持っていく*	509	599	45.1%	13.4%	–0.050
郵送する*	281	265	52.0%	26.0%	–0.146
提出する*	418	264	49.5%	17.3%	–0.736

3. 結果

統計分析に先立ち，データのスクリーニングを行った。構文解析および形態素解析の過程で発生した問題のある文（ニ格名詞あるいはヲ格名詞のカテゴリー情報が取得できなかった文と，ニ格もしくはヲ格を持たない文）を除外した。さらに，「〜には」のようにヲ格やニ格の後ろに何かしらの要素が付加されているものを除外した。スクリーニング後のデータは表 1 のとおりである。笹野・奥村 (2017) の調査結果どおり，基本語順は動詞によって異なることがわかる。

語順比率を目的変数，項の長さ，ニ格の有生性，動詞の種類，タイプ頻度比率（ヲ格のタイプ頻度／ニ格とヲ格のタイプ頻度の総和）の 4 つを説明変数とする線形モデル分析を行った。結果は表 2 のとおり，項の長さ ($p = .0052$)，ニ格の有生性 ($p = .0154$)，タイプ頻度 ($p = .0419$) は統計的に有意であった。一方で，動詞の種類は有意でなかった ($p = .6732$)。このモデルにおいて多重共線性の問題は生じていなかった ($VIFs < 1.6$)。統計分析には R (R Core Team, 2024) と car パッケージ (Fox & Weisberg, 2019) を使用した。

表 2　線形モデルによる推定結果

	推定値	標準誤差	*t* 値	*p* 値
切片	0.8768	0.1741	5.037	0.0007
項の長さ	0.2351	0.0642	3.663	**0.0052**
ニ格の有生性	0.4912	0.1648	2.981	**0.0154**
動詞の種類	0.0212	0.0486	0.436	0.6732
タイプ頻度比率	–0.9485	0.4002	–2.370	**0.0419**

4. 考察

以上の結果から，二重目的語構文の基本語順が動詞によって異なるのは，ニ格とヲ格のタイプ頻度の比率，ニ格に有生名詞が生起する割合，および平均的な項の長さの 3 つが動詞によって異なるためということが明らかになった。一方で，所有変化動詞と位置変化動詞という分類は語順に影響を与えていなかった。本節では，これらの結果について考察する。

まずはタイプ頻度について述べる。語順に影響を与える要因としてこれまでに知られていたのは有生性や項の長さであったが，項のタイプ頻度も語順に影響を与えることが本研究から明らかになった。今後は，項のタイプ頻度が有生性や項の長さと同様にさまざまな言語における語順関連の現象に応用可能かを検証し，項のタイプ頻度の影響が普遍的なものであるのかについて検証していく必要がある。

次に，有生性について論じる。語順に対する有生性の影響は常に認められてきたわけではなく (Imamura, 2019; Tanaka, 2020)，心理実験のような他の条件が統制された環境でのみ効果が認められるという主張も存在する (Imamura, 2019)。本研究の結果は，少なくとも二重目的語構文の基本語順が動詞によって異なる要因の 1 つに有生性が認められることを支持している。この点は，心理実験的アプローチを採用する際に留意すべきである。Koizumi & Tamaoka (2004) が実験で使用した刺激文のほとんどはニ格名詞が有生，ヲ格名詞が無生である。故に，「にを」語順で文が呈示された場合に読み時間が短かったという Koizumi & Tamaoka (2004) の実験結果は有生名詞が先に出現していることに起因し，この語順が基本語順であることの反映ではない可能性がある。同様の指摘が中本他 (2006) の実験に対しても可能なことは，1.2 節で論じたとおりである。本調査結果は，心理実験を行う際に二重目的語動詞の項の有生性を統制する必要性を示唆している。

項の長さについては，笹野・奥村 (2017: 690) は「極めて大規模なコーパスから得られる統計情報を用いることで，個別の用例における項の長さ等の要因は無視できる」という前提に基づいて，これを分析から除外している。しかし，本調査結果は動詞によって平均的な項の長さが異なることを示しており，項の長さは大規模なデータを扱う上でも考慮されるべきであるといえる。

最後に，動詞の種類について述べる。所有変化動詞と位置変化動詞という分類は，語順に影響を与えていなかった。これには，所有変化と位置変化のどちらを意味するかは文レベルで決まるため (中本他, 2006)，動詞レベルでは影響が観察されなかったという可

能性と，そもそもこの分類は語順に影響しないという 2 つの可能性がある。中本他 (2006) は文レベルの意味が所有変化か位置変化かによって基本語順が異なることを実証しているが，その問題点は先にも触れたとおりであり，この分類が語順に影響を与えるかを明らかにするためにはさらなる調査が求められる。また，本調査結果で「をに」語順が優勢だった動詞は所有変化動詞 1 つと位置変化動詞 2 つのみであり（表 1），約 4 割の動詞で「をに」語順が優勢だったと報告している笹野・奥村 (2017) とは異なる。笹野・奥村 (2017) の調査には「感じる」や「見立てる」のような所有変化動詞でも位置変化動詞でもない動詞が含まれていることを踏まえると，所有変化動詞と位置変化動詞は両者ともその他の動詞に比べて「にを」語順を好む傾向があるという可能性も考えられる。したがって，何かしらの動詞の分類が語順に影響を与えている可能性は依然として残されており，調査を続けていく必要がある。

中本他 (2006) は，選好される語順が文レベルの意味によって異なるという実験結果に対する可能な解釈の 1 つとして，学習してきた言語使用における語順の頻度差の反映という見方を示している。このような使用基盤モデル (Bybee & Hopper, 2001) に基づく説明は合理的である一方で，「そもそもなぜ語順の頻度差が存在するのか」については不問になっている。偶然の産物という可能性も考えられるが，本研究は語順の頻度差が存在する要因にニ格とヲ格のタイプ頻度の比率，ニ格に有生名詞が生起する割合，および平均的な項の長さの 3 つがある可能性を示唆している。

5. おわりに

5.1. 本研究のまとめと展望

本研究では，日本語の二重目的語構文の基本語順が動詞のよって異なる要因を解明するためにコーパス調査を実施した。その結果，ニ格とヲ格のタイプ頻度の比率，ニ格に有生名詞が生起する割合，および平均的な項の長さの 3 つが動詞によって異なるためということが明らかになった。

タイプ頻度が低い項は動詞との結束を強め，それらが近接する語順が好まれるようになるというのは，日本語の二重目的語構文に特有の現象とは考え難い。したがって，この知見はさまざまな言語における語順関連の現象に応用可能である。例えば，著者が現在行っている調査によると，英語の二重目的語構文と与格構文も動詞によって選好度合いが異なる。これは厳密には語順ではなく構文の違いではあるが，このような現象に対する応用が期待される。

5.2. 本研究の限界

本研究は構文解析に KNP を使用したが，KNP の精度は完全ではなく，二重目的語構文ではない文が分析に含まれてしまっている。また，情報構造も語順に影響を与えるとされているが (Ferreira & Yoshita, 2003)，これについては考慮できていない。本研究は笹野・奥村 (2017) と同様に，比較的規模の大きいデータを用いることでこれらの問題は無視できるという前提に立っていたが，項の長さにおいてこの前提が成り立たなかったよ

うに，この前提が成り立つという保証はない。より正確な分析のためには，これらの問題にも対処する必要がある。また，コーパスにおいて多数を占める語順を基本語順とみなすことができるかについては議論の余地がある。よって，特に新たに発見されたタイプ頻度の影響は，Koizumi & Tamaoka (2004) や中本他 (2006) のような心理実験的アプローチによっても検証されるべきである。これらの問題に対処しながら，今回扱えなかった動詞も含めた検証を行うことが今後の課題である。

参考文献

Bybee, J. L. & Hopper, P. J. (eds.) (2001). *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*. Amsterdam: John Benjamins.

Ferreira, V. S. & Yoshita, H. (2003). Given-new ordering effects on the production of scrambled sentences in Japanese. *Journal of Psycholinguistic Research*, 32, 669–692.

Fox, J. & Weisberg, S. (2019). *An R Companion to Applied Regression*, Third edition. Thousand Oaks, CA: Sage.

Hoji, H. (1985). *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*. Ph.D. thesis, University of Washington.

Imamura, S. (2019). Word order, heaviness, and animacy. *Corpus Pragmatics*, 3, 123–143.

Ito, A. (2007). Argument structure of Japanese ditransitives. In Takita, K. & Fuji, C. (eds.), *Nanzan Linguistics Special Issue 3: Papers from the Consortium Workshops on Linguistic Theory*, Vol. 1 (pp. 127–150). Nagoya, Japan: Graduate Program in Linguistic Science, Nanzan University.

Kishimoto, H. (2001). The role of lexical meanings in argument encoding: Double object verbs in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 120, 35–65.

Koizumi, M. & Tamaoka, K. (2004). Cognitive processing of Japanese sentences with ditransitive verbs. *Gengo Kenkyu*, 125, 173–190.

Matsuoka, M. (2003). Two types of ditransitive constructions in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, 12, 171–203.

Miyagawa, S. (1997). Against optional scrambling. *Linguistic Inquiry*, 28, 1–25.

中本敬子・李在鎬・黒田航 (2006).「日本語の語順選好は動詞に還元できない文レベルの意味と相関する：心理実験に基づく日本語の構文研究への提案」『認知科学』13, 334–352.

R Core Team (2024). *R: A Language and Environment for Statistical Computing*. Vienna, Austria: R Foundation for Statistical Computing.

笹野遼平・奥村学 (2017).「大規模コーパスに基づく日本語二重目的語構文の基本語順の分析」『自然言語処理』24, 687–703.

Tanaka, Y. (2020). Semantic property in scrambled constituents: The case of objects in Japanese transitive clauses. *KLS Selected Papers 2: Selected Papers from the 44th Meeting of The Kansai Linguistic Society*, 2, 149–160.

Yamashita, H. & Chang, F. (2001). “Long before short” preference in the production of a head-final language. *Cognition*, 81, B45–B55.

現代日本語における表記選択の規則性について

細河（ほそかわ） 紗羅（さら）（関西外国語大学大学院）

1. はじめに

文字を表記する際の文字体系の選択は筆者にゆだねられているが、その選択には規則性があるといえる。例えば、漢語を表記する際には漢字を、和語にはひらがなを、外来語にはカタカナを使用するといった語種による規則性が挙げられる。しかし、実際にはすべてがこの規則に則るわけではないことは明らかだが、先行研究において、語種の観点が第一義的に位置し、文字体系の使い分けが分類されていることが現状である。それゆえ、現代日本語における表記選択の実態を適切にまとめるには、新たな観点からの調査や分類方法が必要とされる。

本研究では、表記選択の実態の解明を目的とした従来の文字・表記研究において、語種の観点が前提であったことを問題意識とし、概観的な文字体系の表記選択の特性の分類方法を設定する。そして、一般的に現代日本語で使用される漢字、ひらがな、カタカナ三種の文字体系の使用実態を調査し、現代日本語文字体系の選択の規則性を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と本研究の立場

表記法に関する従来の研究は、主に語種の分類を前提のもと、さまざまなレベルから表記選択の特徴や要因が明らかにされてきたが、このような分類方法はそれぞれの論考によって異なるため、表記選択の実態を集約することは難しい。しかしながら、適切に表記選択の実態を調査するためには、まず概観的な分類方法を設ける必要があると考える。それゆえ、本章では先行研究における分類方法を見直し、本研究での分類方法を提示する。

2.1. 先行研究

増地（2019）はカタカナ表記に焦点を当て、なかでも非外来語のカタカナ表記に関する先行研究の整理を試みている。この論考においても、外来語にはカタカナで表記するという語種による分類を前提とし、外来語ではない語をカタカナ表記する要因を「言語的要因」と「非言語的要因」に分けている。「言語的要因」を「意識（言語的な側面に関わる表記主体の意識）」「形式（言語に属する側面）」「表現効果」に、「非言語的要因」を「場（コミュニケーションが行われる場面と物理的な場）」「意識（非言語的な側面に関わる表記主体の意識）」に、分類している（増地、2019：151-155）。

笹原（2013）は国語辞書間における漢語表記のゆれについて検討し、表記選択のゆれの条件を約 14 種に分類している。なかでも「言語的条件」を「日本語を構成する語そのもの

の種々の性質等による条件である」としている（笹原、2013：262）。そしてこの言語的条件をさらに五つの要素の「語種」「品詞性」「語義の希薄化」「語義の不分明」「語に関するその他の性質」に分けている。

このように、上記二つの論考は表記のゆれの要因を言語的なものと非言語的なものに分けている点で共通していることがわかる。増地（2019）の「言語的要因」は笹原（2013）が提示した表記選択の条件である「言語的条件」にあたるといえる。これらの論考では「言語的要因」、「言語的条件」と異なった表現がされているが、この違いは対象と目的の違いによるものであると考えられる。増地（2019）は、外来語をカタカナで書くという語種による規則を設け、その規則に外れる非外来語をカタカナで書くという例外を対象とし、なぜ例外が生じるのかを明らかにすることを目的としている。対して、笹原（2013）は漢語を漢字で書くという語種による規則は設けず、漢語を表記する際のゆれにはどのようなものがあるのかを明らかにすることを目的としている。しかし、漢語表記のゆれを対象としていることから、語種による要素が強いといえる。

2.2. 本研究の立場

本研究では網羅的に文字体系の表記選択の規則性を明らかにすることが目的であるため、新たな分類方法が必要とされる。したがって、文字体系の表記選択の特性を大きく「言語的要素」と「二次的言語要素」に分類する。「言語的要素」は語そのものが持つ特性とし、「二次的言語要素」は言語的要素を表記する際に生じる特性とする。なお、本研究では「言語的要素」のみを取り上げ、次章において下位分類を設定する。

3. 言語的要素

本節では表記選択の特性の一つである「言語的要素」の細分化を試みる。

成田・榊原（2004）は増地（2019）同様、外来語をカタカナで書くという語種による規則に外れるカタカナ表記を調査し、収集語を語の性質面と意味用法面から分類している。性質面においては、大きく「体の類」（およそ名詞）、「用・相の類」（主として動詞、形容詞、形容動詞、副詞）、「付属語・接辞」に分けられ、意味用法面においては、大きく「固有名」と「一般語」に分けられている。本研究では、成田・榊原（2004）を参考に、性質面と意味用法面の要素を設けるが、より詳細に分析するため、成田・榊原（2004）での性質面を「品詞」とした。したがって、言語的要素には「品詞」、「意味」の要素が含まれる。さらに、これらの要素に加え、「語種」の要素を設けることとする。成田・榊原（2004）では、「日本語の表記原則」の一つとして語種による規則が前提に置かれているため、語の分類には「語種」が設定されていない。しかし、本研究では前述のように語種を前提としないため、ここで「語種」の要素を設定した。

3.1. 品詞

成田・榊原（2004）は語の性質面を体・用・相の類等に分けているが、本研究では品詞における分類方法を定める。品詞は名詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞、動詞、形容詞、形容動詞、助詞、助動詞に分けた。

3.2. 語種

語種については漢語、和語、外来語、混種語の四種から語の分類を行う。それぞれの語種の定義は、音読みで表記された語を漢語と、訓読みで表記された語を和語と、中国語以外の言語で表記された語を外来語とした。

3.3. 意味

意味については国立国語研究所による『分類語彙表－増補改訂版－』（以下、分類語彙表という）を参考に意味的分類を行う。分類語彙表については、以下のような説明がなされている（国立国語研究所、2004：9）。

> ここに分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。（国立国語研究所、2004：9）

分類語彙表では「単語が表わし得る意味の世界」が分類番号によって体系的に分類されている。それゆえ、まず語が大きく四つの「類」に分けられ、1.体の類 2.用の類 3.相の類 4.その他の類とされる。そのなかで、大きな意味的まとまりである五つの「部門」が設けられている。その五部門とは①抽象的関係 ②人間活動の主体 ③人間活動－精神および行為 ④生産物および用具 ⑤自然物および自然現象である。ただし、用・相の類は②人間活動の主体と④生産物および用具の部門は設けられていない。本研究では、この分類語彙表における「部門」の分類方法を用いて意味的分類を行う。

4. 調査

4.1. 方法

本調査では、朝日新聞社によるデータベース「朝日新聞クロスサーチ」を利用し、投書欄である「声」から語を収集することとした。まず 2011 年から 2023 年までの毎年一月一日に掲載された記事のなかから、一記事を抽出し、全 13 記事を対象にテキストデータを収集した。対象年を 2011 年以降とした理由として、現在の日本語表記の目安とされているものに『常用漢字表』（2010 年内閣告示第 2 号）や『公用文における漢字使用等について』

（2010 年内閣訓令第 1 号）があり、これらの告示年月日が平成 22 年（2010 年）11 月 30 日であることから、この表記法の基準が反映されていると考えられる 2011 年以降とした。

次に、収集したテキストデータのうち、助詞、助動詞、固有名詞、漢数字以外の数字を含む語を除外し、残りの語を抽出した。なお、異なる品詞や意味の範疇に属する語が組み合わさる複合語の場合、二つ以上の語に分けて語を抽出するのではなく、一語として抽出した。したがって、意味の分類において分類語彙表で確認できなかった語は除外している。

4.2. 結果と考察

4.2.1. 品詞

3.1.において、品詞を名詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞、動詞、形容詞、形容動詞、助詞、助動詞の 10 種に分類したが、本調査で表記のゆれが確認された品詞は名詞、副詞、連体詞、動詞、形容詞、形容動詞の六種であった。それぞれの文字体系で表記される品詞別の累計を表 1 に示した。

表 1　品詞の分類結果

	名詞		副詞		連体詞		動詞		形容詞		形容動詞	
	WC	%	WC	%	WC	%	WC	%	WC	%	WC	%
漢字	525	87.6	13	23.6	2	9.5	262	76.8	27	77.1	25	92.6
ひらがな	47	7.8	42	76.4	19	90.5	77	22.6	8	22.9	1	3.7
カタカナ	27	4.5	0	0.0	0	0.0	2	0.6	0	0.0	1	3.7

WC　　延べ語数（Word Count）

%　　割合（＝各品詞における文字体系で使われる語数/各品詞全体の語数）

名詞、動詞、形容詞、形容動詞において漢字で表記される語が 7 割以上を占めており、これらの品詞を表記する場合には漢字が使用される傾向があるといえる。また、副詞と連体詞においてはひらがなで表記される語の値が最も高かった。カタカナにおいては元より収集語数が少なく、比較対象も少なかったが、カタカナ表記語のみを見ると名詞に使用される傾向があるといえる結果が確認された。

4.2.2. 語種

本項では 3.2.で分類したように、収集語を語種別に分けた。以下の表 2 はそれぞれの文字体系で表記される語種別の累計を示したものである。なお、混種語については紙幅の関係上、割愛する。

表 2　語種の分類結果

	漢語		和語		外来語	
	WC	%	WC	%	WC	%
漢字	351	99.2	428	69.0	0	0.0
ひらがな	3	0.8	191	30.8	0	0.0
カタカナ	0	0.0	1	0.2	27	100.0

WC　　延べ語数（Word Count）

%　　割合（＝各語種における文字体系で使われる語数/各語種全体の語数）

漢語には漢字で表記する割合が約 10 割を占め、外来語にもカタカナで表記する割合が 10 割であったことから、これまでの先行研究で述べられてきた「漢語は漢字で表記する」「外来語はカタカナで表記する」という規則があるといえる。しかし、和語に関しては、ひらがなよりも漢字で表記される語の割合が高いことが確認されたため、「和語をひらがなで表記する」という一般的な表記法とは異なるといえる。

4.2.3.　意味

本項では 3.3.で述べたように、収集語を分類語彙表の部門別に分類した。その結果を示したものが、以下の表 3 である。

表 3　意味の分類結果

		①		②		③		④		⑤	
漢	WC	363		114		265		11		40	
	%	75.8	45.8	96.6	14.4	83.3	33.4	64.7	1.4	95.2	5.0
ひ	WC	109		0		45		1		2	
	%	22.8	69.4	0.0	0.0	14.2	28.7	5.9	0.6	4.8	1.3
カ	WC	7		4		8		5		0	
	%	1.5	29.2	3.4	16.7	2.5	33.3	29.4	20.8	0.0	0.0

漢：漢字　ひ：ひらがな　カ：カタカナ

①：抽象的関係　②：人間活動の主体　③：人間活動－精神および行為

④：生産物および用具　⑤：自然物および自然現象

WC　　延べ語数（Word Count）

%　　割合　網掛けあり（＝各部門における文字体系で使われる語数/各部門全体の語数）

網掛けなし（＝各部門における文字体系で使われる語数/各文字体系全体の語数）

すべての部門で漢字表記が最も多く現れていた。これは、元の漢字で表記される語数が最も多いためだと考えられる。さらに、①抽象的関係、③人間活動－精神および行為、⑤自然物および自然現象においてはカタカナ表記語よりひらがな表記語が多く、②人間活動の主体、④生産物および用具にはひらがな表記語よりカタカナ表記語が多いことが確認できた。各文字体系の結果は、漢字には①③②⑤④の順で、ひらがなには①③⑤④②の順で、カタカナには③①④②⑤の順で語の意味を表す場合に表記されていた。

5. おわりに

表記選択の実態の解明を目的とした先行研究では語種による規則が前提として調査されてきた。そこで、本研究では新たな観点から調査することを試み、語種という一義的な一つの規則を設けて文字体系の表記選択の特性を分類するのではなく、大まかな規則を複数設定することで、網羅的に語の表記選択の規則性を見出すことを検討した。

本研究で分類した言語的要素のうち「品詞」「語種」「意味」において文字体系を選択する規則性が確認された。しかし、その規則性の中でも表記のゆれ、各要素のなかで文字体系の異なる語が見られたことは、これらの要素が第一条件ではないことを裏付けている。

4.2.では各要素において最も値として高かった文字体系に注目して結果を示したが、二番目、三番目にあたる文字体系がその要素における例外であるとは言えないだろう。それゆえ、それらが第一条件、すなわち原則にあたるか、あるいは例外にあたるかについて個々の語を考察し、検証しなければならないが、本研究では漢字、ひらがな、カタカナ三種の文字体系の使用実態を集約し、規則性を明らかにすることであるため、その点については稿を改めて論じたい。また、本調査で収集した語数は完全な有意性を認めるには十分とは言えないため、より多くのデータを扱う必要がある。

さらに、本研究では表記選択の特性の要素を「言語的要素」と「二次的言語要素」と分類したが、細分化できる可能性があり、いまだ名称や定義の関連性もあいまいである。それゆえ、今後は分類方法の枠組みを見直しながら、さらにデータ数を拡充し、個々の語についての分析を行う予定である。

参考文献

国立国語研究所（1983）国立国語研究所報告 75『現代表記のゆれ』

国立国語研究所（2004）国立国語研究所資料集 14『分類語彙表 －増補改訂版－』大日本図書.

笹原宏之（2013）「漢語表記のゆれ」pp.261-287. 野村雅昭（編）『現代日本漢語の探究』東京堂出版.

成田徹男・榊原浩之（2004）「現代日本語の表記体系と表記戦略 ――カタカナの使い方の変化――」『人間文化研究』vol.2,pp.41-55.

増地ひとみ（2019）「『非外来語のカタカナ表記』研究の現状と今後の展望」『愛知淑徳大学論集－文学部篇－』vol.44,pp.143-159.

小説の地の文における指定指示の「この」と「その」の使用実態
−八冊の小説に基づいた全数調査データによる分析−

鞠 恩彤（一橋大学大学院）

1. はじめに

本稿では、小説の地の文における指定指示[1]の「この」と「その」の使用状況を考察するが、着目する言語現象には次のようなものがある。

(1) a. 帆花はその少年を友達と一緒にスケートに誘い、心を開かせようと努めたという。だが、その帆花は父親が殺人事件の容疑者ということで、学校に行くことも友達と遊ぶことも叶わなくなっているのだろう。(『誓約』: 305)

b. 革のベルトのついた、赤い大きなグローブ・トロッターのスーツケースを携えていた。三谷は、この誰が持っても目立ち過ぎる、グレーハウンドでも散歩させているようなスーツケースが、こんなに自然に嫌味なく似合っている人を、生まれて初めて目にした。[2] (『マチネの終わりに』: 238)

(1) は先行する名詞句を言い換えなしで「その」か「この」で指示している例である。

(2) a. 「そういえば、西脇君て、明日が誕生日なんだってね」
貴子はいきなりその名前が千秋の口から出たのでびくっとした。
(『夜のピクニック』: 41-42)

b. 島田が真顔で云うのを聞きながら、つくづく面白い人だな、と江南は思う。ただ単に好奇心が旺盛なだけではない。自分などよりもずっと鋭い観察力や洞察力を、この人は確かに持っていると思う。(『十角館の殺人』: 277)

(2) は先行する名詞句を別の名詞句で言い換えて「その」か「この」で指示している例である。

(3) a. 「宏美ちゃん、あなた、本当のことを言わないとだめよ。黙っていたら、誰もあなたのことを守ってくれないんだから。私のいっている意味、わかるわね？警察なんかに何時間もいたら、身体に障るでしょう？」その言葉に、宏美の表情がさっと強張った。秘めていた何かをいい当てられたような表情だった。
(『聖女の救済』: 165-166)

b. 言ってから彼女は何かを思いついたみたいで、リュックから『共病文庫』を取り出しメモをした。この行動は彼女を観察していると頻繁に見かける。
(『君の膵臓をたべたい』: 118)

---

[1] 林 (1983) では「この」と「その」には「指定指示」と「代行指示」という二つの用法があることを指摘している。指定指示とは限定詞「この」「その」全体が指示機能を担う場合の指示であり、代行指示とは「こ」「そ」の部分だけ指示機能を担う場合の指示である。

[2] (1b) (2b) の「この」は「視点遊離指示」とも呼ばれているが、本稿では庵 (2019 : 73) で言う広義文脈指示 (観念指示 (ア)、視点遊離指示 (コ(ア))、狭義文脈指示−テキスト内指示 (コ、ソ、ゼロ)) を対象にしているため、このような例も対象内にする。

(3) は先行する文を「その」か「この」で指示している例である。

2. 文脈指示における二種類の対立

日本語の文脈指示において、「ソ」[3]と「ア」の対立と、「ソ」と「コ」の対立という二種類の対立があると言われている（庵 2019：65)。

(4) a. 話し手：昨日、山田さんに会いました。あの（#その）人、いつも元気ですね。
聞き手：本当にそうですね。
b. 話し手：昨日山田さんという人に会いました。その（#あの）人、道に迷っていたので助けてあげました。

（久野 1973 より一部改変）

(4) は「ソ」と「ア」の対立の例である。(4a) では話し手と聞き手共に知っている人（山田さん）を指すとき、「あの」しか使えないのに対し、(4b) では「山田さんという人」の「という」の部分から、聞き手は「山田さん」のことを知っていないことがわかり、この場合「その」しか用いられない。

この対立に関して、久野（1973）は最初の重要な研究であり、その主張は「ア系列は、その指示対象を話し手と聞き手ともによく知っている場合に用いられ、ソ系列は、話し手だけが指示対象を知っている場合と、話し手と聞き手両方ともに指示対象を知らない場合に用いられる」のようにまとめられる。この対立の解釈に関して、金水・田窪（1990, 1992）の談話管理理論という知識モデルも有力な説明手段だと広く受け入れられているが、知識管理という側面からの解説という点では久野（1973）と変わらない。

(5) a. 真夏の光をあびて、キョウチクトウの花が咲いている。公害に強いという宣伝がきいたためか、この（#その）花は、工業地帯や高速道路ですっかりおなじみになった。（庵 2019 より一部改変、本来天声人語 1985. 7. 23）
b. もう 1 席の「かわり目」はお酒の話だ。小米朝落語というと、昨年演じた「たちぎれ線香」のように若旦那が活躍するネタが得意だというイメージがある。その（#この）彼が、酔っぱらいのおっさんが主役のこのネタを演じる。

（庵 2019 より一部改変、本来「第 2 回桂小米朝独演奏会パンフレット」）

(5) は「ソ」と「コ」の対立の例である。前後の文脈から見ると (5a) では先行詞「キョウチクトウ」を指すとき、「この」しか用いられず、(5b) では先行する「小米朝」を指示するとき、「その」しか使えない。この対立に関して、庵（2002, 2019 など）の一連の研究はかなり説得力がある。庵説は文脈指示の「コ」と「ソ」の対立を「結束性」に基づくモデルによって説明しようとしている。その使い分けを「『この』はテキスト送信者が先行詞をテキストのトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマーカー；『その』はテキスト送信者が先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである」（庵 2019：127）と指摘している。

[3] 日本語の指示詞は、「こ/そ/あ＋範疇を表す形式」という構造を持っている。本稿では、範疇を無視して「こ/そ/あ」の部分のみを問題とするときは、「コ/ソ/ア」のように記し、範疇を問題とするときは、「この/その」という語を用いる。

本稿ではこの第二の対立、つまり「コ」と「ソ」の対立を取り扱う。庵（2002）では新聞データ[4]に基づく定量的な調査により、文脈指示において「この」の中心的な用法は指定指示であることが提唱された。つまり、指定指示の場合、「この」は「その」より用いられやすく、使用率は圧倒的に多いということとなっている。しかし、筆者の実体験から小説の地の文においては、指定指示の場合、「その」が多用されている傾向性が見られる。そこで、小説の地の文では指定指示の「この」と「その」は実際にどのように使われているかという課題が生じた。この課題を解決するため、八冊の小説を用い地の文における指定指示の「この」と「その」の全数調査をした。

3. 調査の詳細と結果

選定にあたっては、歴史小説を避け、記述視点は一人称と三人称それぞれ四冊ずつの計八冊の日本語で書かれた小説を選んだ（作者の重複なし）。書類情報を表 1 に示す。

表 1 書類情報

書名	出版社	作者名	初版発行年	本文ページ数	記述視点
『誓約』	幻冬舎文庫	薬丸　岳	2015	405	一人称（私）
『すずめの戸締まり』	角川文庫	新海　誠	2022	359	一人称（私）
『十角館の殺人』	講談社文庫	綾辻　行人	1987	497	一人称（僕）
『いま、会いにゆきます』	小学館文庫	市川　拓司	2003	429	一人称（僕）
『聖女の救済』	文春文庫	東野　圭吾	2008	424	三人称
『マチネの終わりに』	文春文庫	平野　啓一郎	2016	464	三人称
『君の膵臓をたべたい』	双葉文庫	住野　よる	2017	325	三人称
『夜のピクニック』	新潮文庫	恩田　陸	2004	455	三人称

その後、先行するものが「名詞句」と「文」に分けて、地の文における指定指示の「この」と「その」の全数調査をした。(1) と (2) は先行するものが「名詞句」の例であり、(3) は先行するものが「文」の例である。結果は表 2 に示す。

表 2　「その」、「この」の分布

	名詞句	文	合計
その	277(60%)	320(84%)	597(71%)
この	183(40%)	59(16%)	242(29%)
合計	460(100%)	379(100%)	839(100%)

$\chi^2(1) = 59.37$、 $p < .001$、 $\phi = 0.266$

表 2 から先行するものが名詞句か文かに関わらず、「その」は「この」より多く用いられ、小説の地の文において、指定指示の場合「その」は「この」より用いられやすいことがわかった。

[4] 庵（2002）での調査は日外アソシエーツ社の CD－ROM 版「毎日新聞 1999」を用いて行われた。調査の方法は 1999 年の 1 月から 12 月の各月から各 1 日を乱数を用いたランダムサンプリングによって選択し、その日の朝刊の全データ（ただし、東京版のみ）を対象に、「この」と「その」の文脈指示用法の用例を全て取り出すというものである。

4. 考察

調査をしている間、「その」で指示される名詞句は「ヲ」格と「ニ」格でマークされるのはより一般的であることに気づいた（「この」のほうは、このような傾向性が見られなかった)。そこで、八冊のデータを「が(は)」格(この（は）が「ガ」格に限られる。つまり、「この本は田中さんが書いた」のタイプは含まれていない。以下同様。)と「を/に」格の「その」と「この」の全用例を抽出した。結果は表 3 に示す。

表 3　「が(は)」と「を/に」

	が(は)	を/に	合計
その	162(32%)	351(68%)	513(100%)
この	94(51%)	91(49%)	185(100%)
合計	256(37%)	442(63%)	698(100%)

$\chi^2(1)$ =21.65、 p<.001、 ϕ =0.176

表 3 からわかるように、八冊のデータにおける「この」「その」によってマークされる定情報名詞句（文を含め）が、「ヲ」格と「ニ」格は「ガ」格のほぼ 2 倍（63%対 37%）となっている。つまり、小説の地の文において「この」「その」で同定される定情報名詞句（文を含め）は、「ガ」格より、「ヲ」格と「ニ」格の方が一般的であることが証明された。この結果は恐らく小説というジャンル自体の特徴から生じたものだと考えられる。

また、この結果に導いたのは、「その」によってマークされる定情報名詞句（文を含め）が、「ヲ」格と「ニ」格は「ガ」格のほぼ 2 倍（68%対 32%）だからであることがわかった。さらに、「この」のほうは予想通りに「ガ」格の出現率（51%）と「ヲ」格と「ニ」格のそれ（49%）がほとんど同じであることも証明された。

5. 今後の課題

今回の調査結果では、なぜ小説の地の文における「その」によってマークされる定情報名詞句（文を含め）が、「ヲ」格と「ニ」格のほうは「ガ」格より多かったなのかについて、結論は得られなかった。この結果はただ小説において成立するなのか、もしくは他の書き言葉にも成立するなのかについての検証は今後の課題にする。

先行文献

庵功雄（2002）「「この」と「その」の文脈指示用法再考」『一橋大学留学生センター紀要』5, 5-16.

庵功雄（2019）『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』東京:ひつじ書房

金水敏· 田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 講談社サイエンティフィック

金水敏· 田窪行則（1992）「日本語指示詞研究から/へ」『日本語研究資料集 1』東京:ひつじ書房

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

林四郎（1983）「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語新講座五　運用 I』朝倉書店

換言を表す接続表現の「つまり」「要するに」「要は」の相違
—話者の性別による検討—

李　琦（一橋大学大学院生）

1. はじめに

内容を伝えるには，論理的には，わざわざ別のことばを使って二度も表現する必要はないと考えられるが，実際には「換言を表す接続表現」が頻繁に用いられている。言い換える前の表現と言い換えた後の表現を両方使うことは，表現上の存在意義があることが従来から指摘されてきた（石黒 2001）。ただし，これまでの「換言を表す接続表現」の機能に関する研究は書き言葉を中心に論じられており（市川（1978），日本語記述文法研究会編（2009）など），話し言葉でも同じ機能として働いているのか否かは十分に取り上げられていない。また，表出した接続表現の意味的側面，形態的側面において接続表現の差異を論じた研究はあるが，その使用者の性別などの属性による選好の差異については明らかになっていない。そこで，本発表では，「換言を表す接続表現」の「つまり」「要するに」「要は」が，雑談という場において男女間で使用実態が異なるか否かを検証する。

2. 先行研究と本発表の位置付け

2.1　本発表での「接続表現」の定義と分類

接続表現の分類と呼び方は研究者により異なっている。本発表では，品詞論的議論を避け，より広い範囲で議論するために，「接続詞」ではなく，「接続表現」という用語を用いる。本発表での「接続表現」の定義は石黒（2017）の定義を採用し，また文を超えるレベルで働くものだけではなく，文よりも短い単語・文節・句を含めたものを，調査対象とする。具体的には，以下の 3 条件を満たすものである。

① 先行文脈を踏まえて後続文脈を予告する要素である（単なる副詞ではない）
② 先行文脈の特定の要素を受けず，内容全体を受ける要素である（単なる指示語ではない）
③ 文頭や節頭に位置することが多く，他の要素と特定の関係を持たず，独立して働く要素である（接続助詞ではない）

（石黒 2017：199）

接続表現の分類については，石黒（2016）で定義されている接続詞の分類を採用する。これは幅広い範囲で接続表現の意味と機能を分析しているためであり，具体的には接続表現を大きく 4 類 10 種に分けている。本発表の調査対象である「つまり」「要するに」「要は」は，石黒（2016）の分類によると「理解の接続詞[1]」の下位分類である「換言の接続詞[2]」に相当する。本発表はこの接続表現の分類の観点に従って議論を進める。

2.2　「つまり」「要するに」「要は」の意味・機能に関わる研究

接続表現「つまり」「要するに」「要は」の意味・機能の先行研究として，書き言葉に関しては石黒（2001），『使い方の分かる 類語例解辞典』（2003），話し言葉に関しては『現代副詞用法辞典』（1994）と李（2023）を紹介する。

---

[1] 「理解の接続詞」は，足りない情報を補う補充関係をベースにしたものであり，理解の接続詞があると，読み手の疑問が解消され，文章の理解が深まる（石黒 2016：19）。

[2] 「換言の接続詞」は前件で述べたことを，後件で，内容はできるだけ保持しつつ，表現を読み手にわかりやすくなるように言い換えるものである（石黒 2016：84）。

石黒（2001）は，書き言葉を中心として，「すなわち」「つまり」「要するに」の意味・機能の差異を挙げた。この三つの接続表現はいずれも換言を表せるが，「つまり」は送り手の解釈を加えて，受け手にとって理解しやすいと思われる表現に言い換える接続表現であり，「要するに」は，送り手の解釈を加え，当該の内容の要点を取り出す接続表現であると指摘している。また，送り手の解釈をどの程度，加えることができるかという自由度に関しては，「すなわち」＜「つまり」＜「要するに」という順で高くなると言及されている。『使い方の分かる 類語例解辞典』（2003）では，「つまり」と「要するに」はいずれも論理が最終的に落ち着くところを表わす表現であるが，「つまり」は単に前に述べた事柄を言い換えるような場合から，ある一つの論理展開を終結させる結論を導くような場合まで，広い範囲で用いられる，一方「要するに」は単に言葉を言い換える場合には用いられないと述べられている。

これらの先行研究と比べ，『現代副詞用法辞典』（1994）では話し言葉を中心として，この三つの接続表現の解釈が述べられている。『現代副詞用法辞典』（1994）では，「つまり」は前提と結論をイコールで短絡的に結ぶニュアンスを持ち，かなり主観的で気分的であると記述されている。さらに，日常会話にのみ用いられる間投詞の機能があり，話をわかりやすくまとめた結論を理解してほしいという甘えの心理が暗示されるという機能を持っているとも記述されている。それに対して，「要するに」は途中経過を要約する暗示があり，特に話者は結論に至る途中経過を重要ではないものとして軽視する暗示があると主張している。「要するに」と「要は」は，辞典にはよく同義表現として扱われるが，『現代副詞用法辞典』（1994）では，「要するに」と「要は」は別項目として提示されており，その差についても記述がされている。「要は」は途中経過や付随的な問題などを軽視ではなく，全て無視して，最も重要な判断や結論だけを述べる様子を表すということを指摘している。李（2023）は，『日本語日常会話コーパス』を使用し，「要するに」の話し言葉における使用実態を分析し，書き言葉の「要するに」の機能とは異なり，前の事柄を要約するのではなく，聞き手配慮や話者中での話の整理として機能する用法があることを指摘している。また，男性が女性よりも多く使用しており，性別による偏りが見られるとも言及している。

これらの先行研究により，「つまり」「要するに」「要は」に関する意味・機能の違い[3]は以下のようにまとめられる。

表 1　先行研究における「つまり」「要するに」「要は」に関する相違

接続表現	単なる言い換え	要点を一つにする	間投詞としての使用	解釈が加えられる自由度
つまり	○	×	○	中
要するに	×	△	不明	高
要は	不明	○	不明	不明

2.3　本発表の研究課題

以上から，先行研究に残された課題を踏まえ，以下の 2 点を本発表のリサーチクエスチョン（RQ）とする。

RQ1. 話し言葉と書き言葉において，換言を表す接続表現の意味・機能の違いがあるか。また，その違いはどのようなものか。

RQ2. 話し言葉において，換言を表す接続表現の使用に性差がみられるか。また，その違いはどのようなものか。

[3] 表 1 において，該当機能を持っているものは「○」と示す。該当機能を持っていないものは「×」と示す。該当機能の有無が先行研究によって分かれているものは「△」と示す。該当機能を持っているか否か明らかになっていないものは「不明」と示す。

3. 調査データの概要と調査方法

本発表では，『日本語日常会話コーパス』（Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC）に収録された雑談データ 138 時間分を用いた。CEJC は，日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を対象とすること，多様な場面の会話をバランスよく集めること，音声だけでなく映像まで含めて収録・公開し会話行動を総体的に解明するための研究環境を提供することを目指して，小磯ら（2022）によって構築され 2022 年 3 月に完全公開されている。CEJC の規模は，会話数 577，延べ話者数 1,675 名，異なり話者数 862 名，短単位の語数は約 240 万語となっている。雑談に参加した異なり話者数は 629 名であり，この内，女性は 324 名，男性は 305 名であった。また，収録者 629 名の総語数[4]は 1,504,295 語であり，女性の総語数は 832,227 語，男性の総語数は 672,068 語であった。雑談のデータから，女性の参加者数と発話の総語数はいずれも男性より多いということが確認できた。

本発表では，CEJC データ配布サイトで配布されている『ひまわり』（Version1.0）という全文検索システムを使用し，長単位「つまり」「要するに」「要は」を検索した。その後，検索結果を雑談のデータに絞った上で，「必要は」などのように，検索結果には含まれるが対象とする接続表現ではないものを排除した。

4. 接続表現「つまり」「要するに」「要は」の日本語母語話者の使用傾向

4.1 全体集計データの概要

調査方法に基づいて，CEJCに収録された雑談のデータを確認すると，「つまり」（31件）/「要するに」（170 件）/「要は」（102 件）の合計 303 件の使用例が見られた。本発表では，この 303 件の使用例に基づいて議論を進める。

各接続表現の男女別の使用件数を集計した結果を表 2 に示す。

表 2　換言を表す接続表現の男女別の使用件数

接続表現	女性（件数）	男性（件数）
つまり	1	30
要するに	39	131
要は	21	81
合計	61	242

表 2 より，全体の傾向として，雑談において「つまり」は，「要するに」と「要は」と比べて使用件数が少ないことが確認できた。また，雑談の参加者数と発話の総語数は両方とも女性が多いにもかかわらず，「換言を表す接続表現」の「つまり」「要するに」「要は」の使用件数は男性のほうが多いということが確認できた。使用頻度に関して男性は，「要するに」>「要は」>「つまり」という順に減ることが確認される。使用順に関して女性も同じであるが，「つまり」を用いた女性が 1 名（1 件）のみであり，女性は男性と比べ，雑談の結末に焦点を当てる接続表現「つまり」を選好しづらい傾向が見られた。

また，「つまり」「要するに」「要は」の使用において，男女の差異を見るために，表現ごとに，カイ二乗検定を行った。その結果[5]，3 種類の接続表現のいずれにおいても性差により有意な関連が見られた。その後，残差分析を行い，当該表現とそれ以外の表現の使用頻度における男女差を確認した結果，3 種類の接続表現のいずれにおいても男性の使用が有意に多いことが確認された。なお，特定の個人に使用が偏っている可能性があることから，当該表現を使用した人数においても，カイ二乗検定，残差分析を行った。その結

[4] 記号等を除外した語彙数である。

[5] 「つまり」の頻度は，性差において有意水準 0.1%で差があった（χ^2= 31.967， df=1， p < .001）。「要するに」の頻度は，性差において有意水準 0.1%で差があった（χ^2= 70.827，df=1， p < .001）。「要は」の頻度は，性差において有意水準 0.1%で差があった（χ^2= 48.399， df=1，p < .001）。

果[6]，同様に有意差が確認され，特定の個人の使用によって件数の差が生じていないことが確認できた。

以上の分析から男性は女性より，要点・結論を示す接続表現を選好する傾向にあり，女性は男性と比べ，そのような接続表現を選好しづらい傾向が見られた。量的分析において，「つまり」「要するに」「要は」の使用実態は，性差から見ると偏りがあるということが確認できた。ここからは，具体的な例を挙げた上で，性差により，それぞれの使用に差異があるかを検討する。

4.2　話し言葉における「つまり」「要するに」「要は」の意味・機能

研究対象が現れた会話の文字化された転記テキストと映像・音声データの両方を確認し，前後の文脈を理解した上でそれらの意味・機能を分析した。その結果，表 1 にまとめられる機能が見られたが，それ以外の機能も存在することが確認された。表 3 のように捉えることとする。先行研究で指摘した機能と異なる際には，（　）の中に先行研究の機能を提示する。

表 3　使用実態における「つまり」「要するに」「要は」に関する相違

接続表現	単なる言い換え	要点を一つにする	間投詞としての使用	解釈が加えられる自由度
つまり	○	○（×）	○	中・高（中）
要するに	○（×）	○（△）	○（不明）	高
要は	×（不明）	○	×（不明）	高

先行研究では，「つまり」は，「要するに」と「要は」と比べると，先行文脈との関係が強いと指摘されているが，実際の用例から，先行文脈がない状況で「つまり」を使用することで端的に結論を予告する機能が観察された。これを例 1 に示している。例文は接続表現を【　】で括り，先行文脈は一点鎖線で示し，後続文脈は破線で示す。

例 1[7]【親子はおばあちゃんの血圧が高いことについて話している】

IC01_安藤　　血圧って どうやったら高くなんの?
IC02_圭吾　　あの 【つまり】 血管が細くなると。
IC02_圭吾　　で あんまり圧力が高くなると血管破れたりすることがある。
IC01_安藤　　それが 危険 だから。
IC02_圭吾　　で 例えば ほら 動脈硬化ってのはさ 内側に あの どろどろしたものが溜まって血管が細くなるわけじゃん?
IC02_圭吾　　で 血管が細くなるってゆうことは血圧が高くなるわけだ。
IC02_圭吾　　血液の量は変わんないからさ。
IC02_圭吾　　だ 年取ってくると。
IC02_圭吾　　あの 血圧が高くなってくわけ。
IC01_安藤　　なるほどね。

（CEJC，T009_018）

[6]「つまり」の使用人数に関しては，性差において有意水準 0.1%で差があった（χ^2= 16.828，df=1，p < .001）。
「要するに」の使用人数に関しては，性差において有意水準 0.1%で差があった（χ^2= 7.7654，df=1，p < .001）。
「要は」の使用人数に関しては，性差において有意水準 0.1%で差があった（χ^2= 13.354，df=1，p < .001）。

[7] 会話例の中の相槌を削除した。

例 1 では，父（IC02_圭吾）は娘（IC01_安藤）の疑問に対して，答えを考えながら，言葉の探索中に「あの」というフィラーに続けて「つまり」を使用している。これは先行文脈がないように見えるが，実際のところ，話者の頭の中には答えがあり，それを言語化するため，途中経過を全て略して端的に結論を述べている。話者の頭の中には，筋が通った因果関係があるが，聞き手にはその内容を理解するための知識が不足していることが予想される。そのため，聞き手に配慮し，頭の中で情報を要約し，取捨選択した結果の最低限の情報及び返答を話そうとしている。しかし，結果的に要約した内容のみで聞き手の理解が進まなかった要素も窺える。このため，その後に父は改めて血液量との関係にも言及するなどして説明を補足した。例 1 から，「つまり」の使用における自分の解釈が加えられる自由度は，書き言葉よりも話し言葉の方で高くなる傾向が見られたため，表 3 で「つまり」の「解釈が加えられる自由度」に関しては「中・高」と示した。しかし，このような機能は，女性の使用者の中には見られなかった。「つまり」を用いた用例は女性が 1 件[8]のみ見られ，その話者が書き言葉ではよく見られる「つまり」の機能を用いており，これは先行文脈と後続文脈をイコールで短絡的に結ぶ，話をまとめて簡潔に伝えようとしている使い方に相当した。

「要するに」は本来であれば，単に言葉を言い換えられるために使用しづらいと指摘されてきた（『使い方の分かる 類語例解辞典』2003）が，実際には，単に言葉を換言する「要するに」の機能が女性の使用例に見られた。これを例 2 に示す。

例 2 【母と娘は電話の中でお互いに近況を報告している】
IC01_母　　それをう う お父さんがね。
IC01_母　　まあ【要するに】おじいちゃんだ。
IC02_島村　うん。

（CEJC，K004_001）

例 2 では母は娘（IC02_島村）に孫娘に防犯グッズを持たせる必要性があると語っているシーンである。ここの「要するに」は自分の解釈を入れずに，単に言葉を自分の視点である「お父さん」を娘にとっての「おじいちゃん」に換言した用例である。これは，2.2 でまとめられた先行研究の解釈と異なって，「要するに」を単に言葉を言い換えるために使用した例である。ただし，言葉を言い換えることで，娘（IC02_島村）にとってさらに理解しやすくなるという聞き手に対しての配慮だと考えられる。例 2 と同様の用例は，男性には見られなかった。

「要は」は要点を一つに抑えるというニュアンスが強いこともわかった。これを例 3 に示している。

例 3 【男性に向けたアロマ関連のイベントについて話している】
IC01_直也　そのドライアイを解消するために こうゆう あの アロマがすごく有効なんだよってゆう 情報ってゆうのは 全然 あの 男性 としては興味あったりするわけよ。
IC02_塚田　うん うん。
IC02_塚田　まあ　あの ほんとにドライアイでね あのってゆう人は確かにそうゆうので気になるよね。
（中略）
IC02_塚田　で アロマが云々ではなく 【要は】効くとゆうことに対しての うん 反応。
IC03_聡美　ってゆうよりもね。
IC01_直也　でも まあ そうだけど。

[8] 会話 ID：T011_008，話者 ID：T011

例 3 では，IC01_直也は男性に向けてのアロマ関連のイベントを開きたいが，IC02_塚田はこのようなイベントはアロマに興味がない人なら受講しないだろうという印象を受けていた。そこで，IC01_直也はアロマそれ自体だけではなく，アロマが筋肉痛やドライアイに効果があることにも着目すると興味が持たれるようになるのではないかと提案し，IC02_塚田はそのことに納得を示した。その後，IC02_塚田は，着眼すべき点がどこであるのかわかっていることを示すために，話の対象を絞り込むという目的で「要は」を使用したと考えられる。

今回の分析対象の中には，「要は」を用いて単に言葉を言い換える使用例と間投詞として使われた使用例はなかった。

5. まとめと今後の課題

本発表では，換言を表す接続表現「つまり」「要するに」「要は」の使用実態を分析した。調査対象の 3 つの接続表現はいずれも話し言葉で機能が拡大されたことが確認できた。特に話者が自分の解釈を入れられる自由度は書き言葉より高くなったと考えられる。機能上では，「要は」と「要するに」は話のポイントを誘導する機能を有しているが，「要は」はこの機能が常に働いている。また，「つまり」と「要するに」の使用頻度に大きな開きがあることは，石黒（2016）が指摘した「要するに」が「つまり」に比べて，先行文脈で述べたことを加工する程度が強いことと関連性があると考えられる。雑談においては，より柔軟に文脈の加工ができる「要するに」が適する場面が多いと考えられる。その一方で，加工の程度が高くとも，「要は」を先述の通り使用する際には後続文脈が省略できず，これにより発話内容の自由度が下がりうるため，使用件数は「要するに」より低いと推察できる。

話し言葉における換言を表す接続表現に関して，男性の使用頻度は，女性より高いとわかった。また，話し言葉において，自らの解釈を入れる自由度が高い「つまり」と「要するに」において，女性が自らの解釈を入れなかった用例が確認できた。

今後は，接続表現の使用者の属性として男女の差にとどまらず，会話相手との関係や世代差にまで射程を広げて調査したいと考えている。

参考文献

石黒圭（2001）「換言を表す接続語について ―『すなわち』『つまり』『要するに』を中心に―」『日本語教育』110，pp.32-41.
石黒圭（2016）『書きたいことがすらすら書ける！「接続詞」の技術』実務教育出版.
石黒圭（2017）「談話研究からみた話し方教育への示唆―学習者は接続詞をどのように習得するか―」『習ったはずなのに使えない文法』くろしお出版，pp.195-210.
市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版.
遠藤織枝 （2003）『使い方のわかる類語例解辞典（新装版）』小学館.
小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如 柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2022）『日本語日常会話コーパス』－設計・構築・特徴，国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書 6.
日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 7 第 12 部談話 第 13 部待遇表現』くろしお出版.
飛田良文・浅田秀子 （1994）『現代副詞用法辞典』東京堂.
李琦（2023）「「要するに」の使用実態と用法の分析―『日本語日常会話コーパス』を用いて―」日本語学会 2023 年度秋季大会，日本語学会予稿集，pp.85-90.

児童作文における主題の一貫性の欠如の要因
―学齢別の特徴に注目して―

加藤 恵梨（愛知教育大学）

1．はじめに

主題とは、「書きたいことや伝えたいことの中心」「文章における中心的な内容」のことである（田近ほか（編）2018: 126）[1]。主題は国語科教育で長く親しまれてきた用語で、平成10年版以前の学習指導要領では、書き手の意図や考えを明確にすることの重要性が説かれてきた（田近ほか（編）2018: 126）。現在の学習指導要領では主題について言及されていないが、作文において主題は重要であり、作文の参考書やサポートブックにおいても、最も心に残ることを一つ選んでそれについて書くというように、主題が一貫した文章の重要性が述べられている（橋本2019: 32）。

児童作文をみると、主題が一貫し、状況等が理解しやすい文章も多くあるが、その一方で、主題が一貫していない、すなわち文章を読んで何を一番伝えたいかがわからないものもあり、その特徴は学齢によって異なっている。そこで本研究では、愛知教育大学附属岡崎小学校で発行している児童文集「ひばり」の70号（2019年）～74号（2023年）に収録されている学校生活・学校行事についての作文（1年70編、2年44編、3年46編、4年46編、5年75編、6年58編の計339編）を調査資料とし、主題の一貫性の欠如の要因について、学齢によってどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とする。

2．主題が一貫した文章とは

橋本（2019）は、様々な視点からできるだけたくさん素材を集めていた低学年とは異なり、中学年からはただ素材をたくさん集めるのではなく、伝えたいことを表現するために素材の中から選択（選材）していくことが求められると述べ、主題が一貫していない文章の例として、次の(1)をあげている（p.32）。

(1)　今日、昼休みにおにごっこをした。はじめに、たかしくんがおにになった。ぼくはなかなかつかまらずに、にげきった。次に、しんいちくんがおにになった。しんいちくんはとても足が速いので、ぼくはすぐつかまった。しんいちくんはすごいと思った。さとしくんがころんで足から血が出てかわいそうだった。ゆうやくんが保健室につれていった。（橋本2019: 32）

橋本（2019）は、この文章の主題、すなわち一番伝えたいことが「ゆうやくんがさとしくんを保健室につれていったのがえらい」である場合、あまり関係がない文章を削り、主題に関するさとしくんのけがの様子やゆうやくんの言動、それを見た自分の気持ちなどの文章を付け加えることで、主題が一貫した文章が書けると述べている（pp.32-33）。このように、主題を一貫させるには、最も心に残ることを一つ選び、それについて書くようにすることが重要である（p.32）。

---

[1] 田近ほか（編）（2018: 126）で指摘されているように、主題は読むことの指導において「作品が表現しようとしている中心思想」を指す用語としても使われてきたが、ここでは書くことに限定して述べる。

3. 主題の一貫性についての分析

3.1 低学年の特徴

橋本（2019）でも指摘されているように、低学年では様々な視点からたくさんの素材を集められるようになることが求められる。そのため、集めた素材を整理したり、書くことの焦点を絞ったりすることなどは十分にできておらず、他の学年に比べると、主題が一貫していない作文が多い。

まず1年生の作文をみると、次の(2)や(3)のようにタイトルと文章の内容とが異なっていると感じるものや、(4)のように筆者の頭の中では主題が一貫しているのであろうが、説明が不十分であるため、何を伝えたいのかが読み手には理解しづらいものがみられる。

(2)　きょうは ペアが バックを くれました。とても うれしかったです。あしたも がんばります。ふぞくしょうがっこうの きゅうしょくも たのしみです。これからも たのしみです。

（1年生、74号）

(3)　きょうは にゅうがくしきでした。はやく きゅうしょくを たべたいな。きらいな ししゃもがでないと いいな。これから おねがいします。ながく すわっていたので つかれました。

（1年生、74号）

(4)　きょうは スギッピー、チャッピー、ケンピーの なかの チャッピーが きました。きのうは、スギッピーが きました。だんだん うんどうかいが たのしみに なりました。

（1年生、74号）

(2)のタイトルは「ペアこうりゅう」である。文章前半部分の「あしたも がんばります」までは「ペアこうりゅう」について書かれているが、後半の「ふぞくしょうがっこうの」からは給食について書かれており、この文章で何を一番伝えたいのかがわかりにくい。次の(3)のタイトルは「にゅうがくしき」である。文章の冒頭は「きょうは にゅうがくしきでした」で始まっているが、それに続く文は給食について書かれており、最後は「ながく すわっていたので つかれました」とあるように入学式の話に戻っている。このように書きたいことが筆者の中で定まっていないものがみられる。さらに、(4)のタイトルは「もうすぐ うんどうかい」である。スギッピーなどが来たことと、もうすぐ運動会が始まることは関係しているのであろうが、どのように関係しているのかが文章内で説明されていないため、読み手には理解するのが難しい。

2年生になると、タイトルと文章の内容とが異なっているものは少なくなる。しかし、次の(5)のように、書くことの焦点が絞りきれていないものが散見される。

(5)　ぼくは、し走では くやしかったです。なぜなら、九いだったからです。（後略）
本番では、さいしょは ランニングみたいに 走って、と中に 少し 強く 走って、さい後に 強く 走ったら、六いに なって うれしかったです。（後略）
百二十しゅう年 マラソン大会、いい マラソン大会でした。（2年生、73号）

(5)のタイトルは「百二十しゅう年 マラソン大会」である。マラソン大会の試走、本番それぞれについて詳しく書かれているため、マラソン大会の中の何を一番伝えたいのかがわかりづらい。

3.2 中学年の特徴

中学年では、ナンバリングやラベリングを使い、読み手にわかりやすく伝えようとする姿勢がみられる。ナンバリングとは、「ひとまとまりの主張に通し番号を付けること」（橋本2019: 50）である。ナンバリングを使うと、論拠や具体例が複数ある場合にそれぞれに通し番号がつき、読み手にとって整理されたわかりやすい文章になる（橋本2019: 50）[2]。一方のラベリングとは、「ひとまとまりの主張を短文やキーワードでまとめ上げること、つまり見出しをつけること」（橋本2019: 51）である。ナンバリングを使って「一つ目は・・・」と説明するときに、ラベリングを使って最初に短文やキーワードで見出しをつけることにより、読み手はいま現在の説明が何のために行われているのかを理解しながら読むことができる（橋本2019: 51）[3]。しかし、中学年の作文には、ナンバリングやラベリングをうまく使えていないことで、何を一番伝えたいかがよくわからないものもみられる。

(6)　わたしは、クリスマスコンサートの練習から本番までで、思ったことが三つあります。
一つ目は、音楽部としてはじめてクリスマスコンサートに出たことです。今日のコンサートのために前からずっと音楽部の活動の時に練習をしていたので、そのおかげでコンサートは大成功でした。（後略）
二つ目は、先生のげきのことです。二年生の時から、全学年がアリーナに入って、げきをみることができなくなってしまったけど、それでももり上げるように工夫をしていて、すごいなと思いました。（中略）三つ目は、コーラスクラブの歌のことです。ひさしぶりにその場で歌を聞くことができてうれしかったです。　（4 年生、74号）

(6)はナンバリングとラベリングを用いて書いているが、「クリスマスコンサートの練習から本番までで、思ったこと」の内容がうまくまとめられておらず、「音楽部としてはじめてクリスマスコンサートに出たこと」「先生のげきのこと」「コーラスクラブの歌のこと」という新たなトピックが示されている。また、新たに示されたトピックについて話が展開しているため、筆者が何を伝えたいのかがわかりづらい。このように、ナンバリングとラベリングは話の焦点を絞り、ひとまとまりの主張に対して用いないと、かえって文章を複雑にする。

さらに次の(7)や(8)のように、文章の中でナンバリングとラベリングを何度も使うと、筆者の主張がわかりにくくなる。

(7)　私は、二学期で学んだことが二つあります。
一つ目は、目標に向かって努力することです。特に感じたのがマラソン大会です。（後略）

---

[2] ナンバリングの例として、次のものがあげられている。
私は・・・を・・・すべきと考えます。理由は以下の三点です。
第一に（一つ目に）、・・・　第二に（二つ目に）、・・・　第三に（三つ目に）、・・・
このような理由で、 私は・・・を・・・すべきと考えるのです。 （橋本 2019: 50）

[3] ラベリング（とナンバリング）の例として、次のものがあげられている。
一つ目は、お米は栄養があるということです。（そのことの詳しい説明）
二つ目は、いろいろなおかずにあうということです。（そのことの詳しい説明） （橋本 2019: 51）

二つ目は、相手のことを考えることの大切さです。四のニでは、水道量調べをやってきました。（後略）

これらの学んだことを生かして、三学期は次の二つのことをがんばりたいです。

一つ目は、お別れ会です。六年生の気持ちを考えて、六年生が感動してくれるような音楽を演奏したいです。（後略）

二つ目は、クラスのことです。今年は、コロナの影響で休校になったり、行事ができなかったりしました。（後略）　（4年生、72号）

(8)　二学期をふり返ってわたしは、思ったことが三つあります。

まず一つ目で、わたしはバウンズボールのことで、二つせい長したことがあります。まず一つ目はサーブができるようになったことです。チームのみんなが教えてくれたからできたと思います。二つ目はパスができるようになったことです。練習したからこそできたんだなと思いました。二つ目は、マットのことです。わたしは、さいしょ下手だった後転が上手になったことです。これも自分ががんばったせいかなのかなと思います。

さい後の三つ目は、マラソン大会のことです。去年よりタイムとじゅんいが上がったのでうれしかったです。来年はもっと速くなれるようにがんばりたいし、目ひょうをたっせいできるようにがんばりたいです。　（3年生、73号）

まず(7)は、二学期で学んだことと、三学期にがんばりたいことをそれぞれナンバリングとラベリングを用いて述べているため、筆者が何を一番伝えたいのかがわかりにくい。次の(8)は、二学期をふり返って思ったことについて、「まず一つ目で、わたしはバウンズボールのことで、二つせい長したことがあります」と述べ、さらにそれを「まず一つ目は」というように下位分類しているため、文章構造が複雑になり、内容を読みとくのが難しい[4]。このように、用いなくても良いところでナンバリングやラベリングを用いることで文章が複雑になり、中心的な内容が何であるのかがわからないものがみられる。これは、文章の書き方が十分に身についていない段階で、わかりやすい文章構成を意識しすぎ、型に内容を当てはめた結果生じたと考えられる。

しかし、高学年になるとナンバリングやラベリングを効果的に使い、主張が理解しやすい文章が書けている。次の(9)ではナンバリングとラベリングをうまく用い、「目標にしていたこと」をわかりやすく説明している。

(9)　私は、目標にしていたことが二つあります。

---

[4] 「思ったこと」といった漠然としたことについてナンバリングやラベリングを用いて述べるのは、高学年になっても難しいようである。次の例も「思ったこと」について三点あげているが、うまくまとめられていない。

わたしが思ったことは三つあります。一つ目は、仲間といっしょに城下町の散さくをして、道に迷って困ってしまったときに、町の方が親切に道を教えてくださいました。（後略）

二つ目は、飯ごうすい飯のときのことです。全然火がつかなくて、「まわりのはんよりおそくて間に合わない」と思い、あせって仲間とがんばって火がついたときは「やっとだ」と思いました。（後略）

三つ目は、さばいたり作ったりしてくれている人たちへの感謝です。（後略）　（5年生、74号）

一つ目は、あきらめないで走り切るということです。つかれてくると、苦しいから歩きたくなってしまうので、自分に負けないように、あきらめないで走り切るという目標をたてました。その目標は達成できました。つらいときも、がんばってずっと走っていました。

二つ目は、少しでもいいから、試走のときよりもタイムを上げるということです。試走のときは、七分台で、自分は、おそいと感じました。目標は六分台でした。私のタイムは、六分五十一秒で六分台でした。タイムがかなりよくなりました。なので、この目標も達成しました。二つの目標を達成できてよかったです。　（5年生、73号）

3.3 高学年の特徴

高学年は文章構成を意識し、最初に結論を提示する頭括型や、最初と終わりの双方で結論を提示する総括型で書いているものが多く、他の学年よりも主張が理解しやすい。主題の一貫性という点から考えると、高学年は何を伝えたいかがわかりやすい文章が多いが、最初に結論が述べられることで、結論はどうなるのかと予測しながら読む楽しみやドキドキ感が得られないものもある。また、冒頭に曖昧な表現でまとめが書かれているため、何が言いたいのかをつかみにくいものもみられる。

(10)　ぼくは林間学校で火舞をしました。火舞はぼくに勇気をくれました。火舞の練習をするとき、みんなの上達がすごく早くて、すごいなと思っていました。（中略）ぼくは、
「オーディションに一発で合格できなかったらやめよう。」
と思いました。そして、自分なりに火舞の練習をがんばりました。

火舞のオーディションの日、自分では、
「ああ、これは落ちたな。」
と思いましたが、合格しました。合格と聞いたときは信じられませんでした。（後略）
（5年生、71号）

(11)　わたしは、みんなすごいなと思いました。カ・カ・カ、フラッグ、ボール運び、最後にリレーがありました。みんな、どの競技もすごくできていました。

わたしが一番心に残ったのは、リレーです。他の競技もみんながんばっていたけれど、これは本当にどの競技よりもがんばることができたと思います。（後略）　（5年生、74号）

(10)は冒頭に「ぼくは林間学校で火舞をしました」とあるように、筆者が火舞のオーディションに合格し、林間学校で火舞をしたことが最初に述べられている。そのため、その後に書かれている火舞のオーディションを受けた時の様子などを読んでも、結果がわかっているので、結果がどうなるのかと予測しながら読み進める楽しみが半減する。冒頭に結果が書かれていると何を一番伝えたいのかが理解しやすいが、内容によっては、読み手が書き手の体験を追体験できるよう、出来事が起こった順に書いたほうが適している場合もある。また(11)は、冒頭の「わたしは、みんなすごいなと思いました」が文章全体のまとめであると考えられるが、「すごい」という漠然とした表現が使われているため、筆者の言いたいことがつかみづらく、頭括型の良さもいかされていない。

さらに、頭括型は一般に短い文章に向いているという指摘もある（橋本2019: 52）。

(12)　ぼくは、マラソン大会で初めて九位を取りました。体育の授業や家で走ったことが、本番

で出ました。今まで十二位以内を取ったことがなくて、きん張したけど、九位を取れて、心がすっとしました。そのとき、やったあと心のなかで思いました。来年は、九位よりも上にいきたいです。（5年生、70号）

(13)　十一月二十八日、マラソン大会がありました。目標は三位以内です。試走では、三位をとることができたので、これはいけると思いました。

ついに本番のときがきました。（中略）目標も二つ達成できました。三位以内と十一分十秒を切ったことでした。きらいなマラソン大会も楽しく終えることができました。がんばったいい一日でした。（5年生、70号）

(12)と(13)はともに、マラソン大会について述べたものである。(12)は頭括型で、マラソン大会で初めて九位をとったという最も述べたいことを提示し、その後にそのことについての説明や思いなどを述べて文章を終えている。一方の(13)は尾括型で、最初に事実や説明を詳しく述べ、最後に最も述べたいことを提示しているため、文章の長さは(12)の二倍以上である。(12)と(13)を比べると、(12)のほうは短時間で筆者の言いたいことを理解することができるが、(13)のほうは事実や説明が詳しく述べられている分、結果に至るまでの過程がわかりやすいという違いがある。読み手や書く目的などにあわせ、使いわけられるようになると良い。

以上のように、高学年では主題が一貫しており、主張が理解しやすいものが多い。しかし、最初に結論を述べてしまうと読み手の読む楽しみを半減させることもある。よって、読み手や書く目的を意識し、書きたい内容を伝えるにはどの文章構成法が適しているかについても考える必要がある。

4. まとめ

主題の一貫性の欠如の要因について、以下のような学齢別の特徴があることが明らかになった。

まず、低学年では様々な視点からたくさんの素材を集められるようになることが大切であるため、集めた素材を整理したり、書くことの焦点を絞ったりすることなどは十分にできておらず、他の学年に比べて主題が一貫していない作文が多い。次に中学年では、ナンバリングやラベリングを使い、読み手にわかりやすく伝えようとする姿勢がみられるが、用いなくても良いところでそれらを用いることで文章が複雑になり、中心的な内容が何であるのかがわからないものがみられる。さらに高学年では文章構成を意識し、頭括型や総括型で書いているものが多く、他の学年よりも主張が理解しやすいが、冒頭に曖昧な表現でまとめが書かれているため、何が言いたいのかをつかみにくいものがみられる。

謝辞　本研究は、公益財団法人博報堂教育財団による第19回児童教育実践についての研究助成を受けたものです。

引用文献

田近洵一・井上尚美・中村和弘（編）（2018）『国語教育指導用語辞典〔第五版〕』教育出版
橋本慎也（2019）『国語科授業サポート BOOKS 子どもがどんどん書きたくなる！ 作文テクニック&アイデア集』明治図書

アイドルの発信ツイートとファンのリプライ表現に関する因果構造
―言語行動学的共分散構造モデルによる考察―

中野亜莉沙（なかのありさ）

1.本研究の目的

本研究の目的は、Twitter を利用して発信するツイートとそれに対するリプライ表現と、その因果関係について、特に、アイドルが発信するツイートとそれに対するファンのリプライ表現を対象として、コロナ禍の影響を含めた諸要因によるモデルを構築することで、言語行動学的に明らかにすることである。

本研究で、 特に、アイドルが発信するツイートとそれに対するファンのリプライ表現を対象とするのは、発表者自身が 1 万人以上のツイート・フォロワー数を持つアイドルとしての活動を継続しており、ツイートとリプライについてともに豊富な第 1 次資料を分析できる状況にあるからである。

2.研究方法

本研究で構築を目指すのは、ファンのリプライパターンを目的変数とする共分散構造分析による因果モデルである。

分析対象とする「年」「月」「曜日」は、コロナ禍より前である 2019 年～コロナ渦中である 2020～2022 年のアイドルとしての芸能活動(通常活動：ライブ、CD リリース、舞台出演等を除く、年間大規模行事企画：恒例の大規模イベント)や、そのほかの特別な祝祭日・行事(クリスマス・五輪他)等がみられず比較に適していると考えられる 10 月中の同時期の対応する日曜(休日)・月曜(仕事・学業の週初めの平日)・火曜(週初め以外の平日)とした。

共分散構造分析には、目的変数と説明変数を設定する必要がある。目的変数については、リプライ表現について、Jespersen (1924)等を導入し α「定型表現」β「非定型表現」を設定し、さらに日本語学的視点 (文字数・拍数・長音付加・句読点・特殊記号〈！〉等・絵文字・顔文字等)、言語行動学的視点(Jakobson1960、Hymes1962、1972、南不二男 1974、杉戸清樹 2014 等が示す言語行動要素)、挨拶ことば研究の視点(Jespersen 前掲書、江端義夫 1997、斎藤孝滋 2002、2008、中西太郎 2021 等の挨拶類型・モデル等)を導入した分析により、5 種の表現パターン(a)～(e)：以下を設定することとした。

α「定型表現」

(a)おはよう系・(b)おそよう系

β「非定型表現」

(c)呼びかけ・(d)発信者への働きかけ・(e)受信者の報告

表 1. アイドルが発信するツイートとそれに対するファンのリプライ表現と表現要素(一部分を抜粋)

発信日時	曜日	年	時間	発信内容	リプライ番号	リプライ内容	句読点	クエスチョン	イクスクラ	リプライ時刻	性別	おはよう系	おはよう	おはよー	おはよ	おはー(あ)	おは	おっは	おそよう系	おそよう	おそよー	おそよ	おそ	こんにちは系	こんにちは	こんにち	こんちは	こんばんは系	こんばんは	ばん	顔文字	絵文字
2019/10/20(日) 9:36	1	1	2	おはよー！ 今日も1日がんばるんば¥(ο ´-`ο)/♡	1	おはよー！	0	0	1	9:54	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	1	2		14	おはありり(^ω^) 頑張ろー🐜🍉🔥	0	0	0	9:59	男	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	1	1	2		10	ぎゃんぴゃ りゅんぴゃあ！(´･_･`)ノ	0	0	1	10:35	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	1	1	2		5	おはありり。	1	0	0	9:39	男	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	1	2		6	おはよーございます！	0	0	1	9:38	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2019/10/28(月) 9:32	2	1	2	おはよー！ 今日も1日がんばるんば¥(•`ω•´)/	1	おはよう 今日も1日ガンバリーナ♪	0	0	0			1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	2	1	2		2	おはよー！	0	0	1	12:13	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	1	2		3	おはよ～！！！ バイト行ってきますっ	0	0	1	9:31	女	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	1	2		4	ありりおはよー！	0	0	1	9:33	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	1	2		5	おはよう(o´・∀・)o	0	0	0	9:40	男	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
2019/10/15(火) 8:40	3	1	1	おはよー！ 今日も1日がんばるんば٩(●˙▿˙●)۶	19	おはありりぃ٩(ᐛ)و🍉	0	0	0	8:41	男	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	3	1	1		14	おはありり(^ω^)🐜🍉♪ がんばろー🔥	0	0	0	9:44	男	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	3	1	1		15	おはよー！	0	0	1	8:40	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	1	1		16	ありりおはよー！！！ 一限？？？ がんばるんばー！！！！	0	1	1	8:41	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2020/10/26(月) 10:14 ※写真あり	2	2	3	おはよー！ 昨日は #さよステお披露目配信ありがとうございました♡ 今日は #音楽朗読劇プペルの稽古いってくるよー！！！ 月曜日がんばるんば٩(´O`*)و✧*。	1	おはよー！	0	0	1	10:19	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	2	3		10	🐜🍉 おはよー☀ がんばるんば！！✊	0	0	1	10:15	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	2	2	3		11	おはようございます 衣装も雰囲気も一気に大人っぽくなりましたね 新しいスタート頑張って下さい	0	0	0	10:46	男	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	2	3		20	おはよう頑張ろうね	0	0	0	10:20	男	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2020/10/04(日) 11:16	1	2	4	おはよー٩(๑❛ᴗ❛๑)۶	1	(〃^▽^)ノ゙おはよー♪	0	0	0	11:18	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	1	2	4		8	おはよう！	0	0	1	11:31	女	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	2	4		10	おはようございます よい天気ですね	0	0	0	11:55	男	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	2	4		11	おはよーありり☺	0	0	0	11:17	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2020/10/20(火) 10:17	3	2	3	おはよー！ 今日も1日がんばるんば☆٩(｡•ω<｡)و	1	おはよー！	0	0	1	10:53	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	2	3		2	ありりおはよ～(•̀ω•́)و	0	0	0	10:24	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	3	2	3		3	おはるんばー！	0	0	1	12:23	男	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	2	3		4	ありさおはよ！☀ 今日もがんばろうね٩('ω')و	0	0	1	10:30	男	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2021/10/17(日) 11:25	1	3	4	∩´ ∩ おはよー(˘ᵕ˘)･*	1	おはよ(*´▽｀)ﾉﾉ	0	0	0	11:31	男	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	1	3	4		2	おはよー！	0	0	1	12:53	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	3	4		4	おはよー 今日行くのでひまだったら構ってください	0	0	0	11:35	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	3	4		8	おはよう～ 入試いってくるね	0	0	0	11:26	男	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2021/10/25(月) 14:02	2	3	6	おそよー:.ﾟ٩(๑˘ω˘๑)۶	1	おそよ～✨	0	0	0	15:36	男	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	2	3	6		2	おそよー！！	0	0	1	14:11	男	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	3	6		3	こんばんはー(˘ω˘)	0	0	0	17:06	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0
	2	3	6		4	ありさおそよ☺	0	0	0	14:11	男	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2021/10/19(火) 12:26	3	3	5	∩´ ∩ おそよー(˘ᵕ˘)･*	1	おそよー☃	0	0	0	12:31	男	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	3	3	5		2	ありさおそよ☺	0	0	0	12:30	男	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	3	3	5		3	おそよ！	0	0	1	12:43	男	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	3	5		20	おそよう！！！ 寒すぎん！？！？！	0	0	1	12:30	男	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2022/10/17(月) 12:34	2	4	5	おそようございます	1	おそよう～	0	0	0	12:34	男	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	4	5		2	オッハァー♪☺	0	0	0	14:46	男	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	2	4	5		3	おそよう-	0	0	0	14:56	男	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	4	5		4	おそようございます！ (>ω<〃)～♡	0	0	1	12:42	男	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
2022/10/25(火) 11:31	3	4	4	おはよ ︎ヽ(⊠ᴗ•⊠)ﾉ	1	おはようございます。 寒いので暖かくして体調に気を付けて良い1日をお過ごし下さい。	0	0	0	11:44	男	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	4	4		2	おはかぴさんです👋👁	0	0	0	11:58	男	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	3	4	4		3	おはようございます🌼	0	0	0	12:01	女	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	3	4	4		4	オッハァー♪☺	0	0	0	11:43	男	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2022/10/23(日) 8:16	1	4	1	おはよ(*´ω`*)୨⁾⁾	1	おはよー	0	0	0	10:54	男	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	4	1		2	おはありー	0	0	0	12:02	男	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	4	1		3	おはよう👋😊🌼	0	0	0	11:12	男	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	1	4	1		4	おはよっ🎶	0	0	0	9:33	男	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

説明変数については、時期⑴「年」：①2019・②2020・③2021・④2022、⑵「曜日」：①日曜・②月曜・③火曜、発信者(アイドル)側ツイートの⑶「時間」：①8 時・②9 時・③10 時・④11 時・⑤12 時・⑥13 時・⑦14 時、受信者(ファン)側リプライの⑷「性」、⑸絵文字・顔文字で判断される感情(Russell,1980)における 4 類型の①第 1 象限<嬉しい・愉快等>と②第 3 象限<けだるい・落ち込む等>)について、網羅的に重回帰分析を行い、有効な変数として、⑴「年①～④」⑶「時間①～⑦」⑸「感情①③」を設定した。

その上で、以上の目的変数・説明変数による共分散構造分析を行った。なお、重回帰分析については、中野亜莉沙(2023)で詳細に渡って述べている。

3.感情表現の類型化

本研究では、感情表現の類型化に際して、J.A.Russell(1980)によって提案されたラッセルの円環モデル（Russell's Circumplex Model）を導入した。このモデルは、感情や感情の状態を理解するための有力な心理学的モデルの 1 つであり、このモデルは、感情を 2 つの基本的な次元に沿って配置し、これらの次元を組み合わせることでさまざまな感情の状態を理解しようとするものである。ラッセルの円環モデルは、感情の活発さや覚醒度を表す快適度（Arousal）次元と感情の肯定的なまたは否定的な性質を表す心地よさ（Valence）次元という 2 つの次元を用いて感情を説明する。

ラッセルの円環モデルは、これらの 2 つの次元を組み合わせて、感情を四つの象限に分類する。ここでは、江川ら(2019)による日本語翻訳の用語と・解説・図(図１)を、象限名を明記する形で示す。

第 1 象限：高い快適度 + 肯定的な心地よさ：この象限には、喜びや興奮などの肯定的で活発な感情が含まれる。

第 2 象限：高い快適度 + 否定的な心地よさ：この象限には、不安や緊張などの肯定的ながらも活発でない感情が含まれる。

第 3 象限：低い快適度 + 否定的な心地よさ：この象限には、悲しみや不快感などの否定的で活発な感情が含まれる。

第 4 象限：低い快適度 + 肯定的な心地よさ：この象限には、リラックスや平静などの否定的で活発でない感情が含まれる。

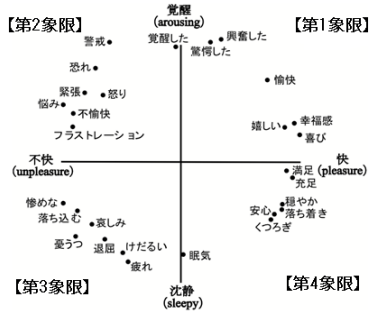


図 1. ラッセルの円環モデルの図

※(J.A.Russell1980,江川ら 2019)をもとに象限名を加えた。

感情表現の類型化は、表 1 の「リプライ内容」のメッセージ内容と、文字部分、記号、顔文字・絵文字を総合的に発表者の判断で行った。

なお、類型化判断の客観性を確認するため、特に感情表現に深くかかわると考えられる顔文字・絵文字について、女子大学生 2 名の協力を得て、発表者の類型判断との一致率をアンケート調査により確認した(表 2 参照)が、おおむね良好な結果が得られた[注 1]。

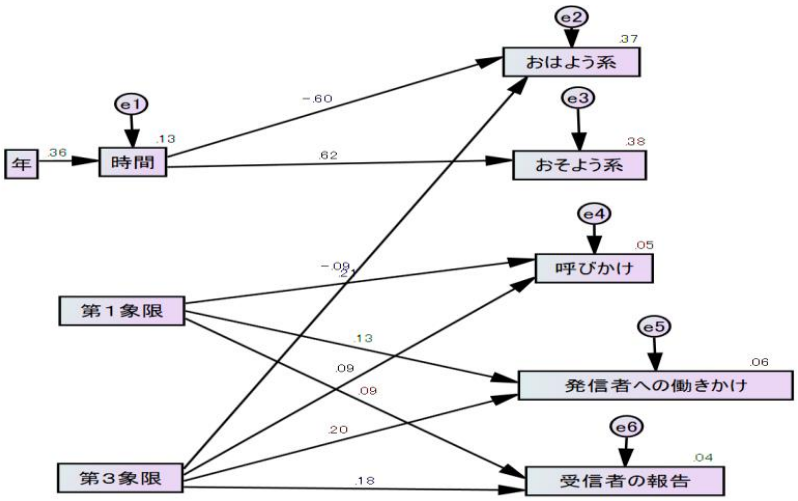
表 2.顔文字・絵文字とそれらの感情表現の類型化

	顔文字&絵文字	アンケート回答者			回答者a氏,b氏と
		a	b	発表者	発表者との一致率(%)
1	(ˇωˇ)	4	4	4	100
2	(•`ω•´)ﻭ	1	1	1	100
3	(*^_^*)	1	1	1	100
4	(^^)	1	1	1	100
5	(^ω^)	1	1	1	100
6	(〃^▽^)ノ゛♪	1	1	1	100
7	(>ω<〃)〜♡	1	1	1	100
8	(๑ ^ ๐ ^ ๑)	1	1	1	100
9	(๑و•`ω•´)ﻭ	1	1	1	100
10	(ノ≧∀≦)ノ	1	1	1	100
11	*(´ᗜ`*)ﻭ♪♡	1	1	1	100
12	.。゜+.(,,・ω・,,)ノ。+.゜	1	1	1	100
13	٩(^‿^)۶	1	1	1	100
14	٩(♡ʻᴗʻ♡)۶	1	1	1	100
15	☺	1	1	1	100
16	□	3	3	3	100
17	😂💔	1	1	1	100
18	☺💔	1	1	1	100
19	☒	4	4	4	100
20	☺💖	1	1	1	100
21	☺	4	4	4	100
22	♪☺	1	1	1	100
23	☺💗	1	1	1	100
24	(∩。•ㅇ•。)っ.゜☆。	1	1	1	100
25	(◍>ᴗ<◍)♡	1	1	1	100
26	(◍•ᴗ•◍)♡	1	1	1	100
27	(๑•ᴗ•๑)💖♪:*	1	1	1	100
28	|・ω・)ノ“	1	1	1	100
29	¥(๑>—´ㅂ<—`๑)/	1	1	1	100
30	♪p(^_^)q	1	1	1	100
31	٩(•`ω•´)ﻭ	1	1	1	100
32	٩('ω')ﻭ	1	1	1	100
33	٩(●ˇ▽ˇ●)۶	1	1	1	100
34	😂	1	1	1	100
35	-`ˏ ๓(〃'ᴗ'〃)๓ ´ˎ	1,4	1	1	75
36	(∩´ᴗ`∩)・*	1,4	1	1	75
37	ρ(´ ▽`o)ノ゛	1,4	1	1	75
38	☹	2,3	3	3	75
39	(*´ᗜ`*)/	1,4	1	1	75
40	(><)	2,3	3	3	75
41	(☒・☒	1,4	1	1	75
42	(o´・∀・)o	2,3	1	1	50
43	(´・‿・`)	3	2	3	50
44	☺☒	1	4	1	50
45	(´・_・`)ノ	2,3	2	3	50
46	(*´‿`*)っ♡	4	1	1	50
47	(*´▽`)ノノ	4	1	1	50
48	:(;´ʷ`;):	2	3	3	50
49	|▷)ﻭ))	1	4	1	50
50	|・ω・)ノ	2	1	1	50
51	٩('ω')ﻭ	3	1	1	50
52	🔍	1	4	1	50
53	□😂	3,4	1	1	50
54	(*っω-)	3	2	4	0
55	(ノ￣o￣)ノ	2	4	3	0
56	(ᵘ ᴗ ᵘ)	3,4	2	1	0
57	٩(◁)ﻭ	2	4	1	0
58	o(-`д´-o)	2	3	1	0
59	☺	2	3	1	0
回答者a氏,b氏と発表者との個別一致率(%)		71.2	81.4	＼	76.7

4.共分散構造分析による総合的因果構造モデル

ここでは、重回帰分析モデルの成果を総合し、「コロナ禍前とコロナ渦中におけるアイドル発信ツイートとファンのリプライ表現の総合的因果構造モデル」を構築する。

最終的に構築したモデルは、図 2 のとおりである[注 2]。



RMSEA=.106

図 2. コロナ禍前とコロナ渦中におけるアイドル発信ツイートと ファンのリプライ表現の総合的因果構造モデル

図２より、定型表現である「おはよう系」「おそよう系」は、ともに、「年」「時間」の影響を強く受けている。これは、発信者であるアイドルのツイート時間が、コロナ禍前と渦中において異なったためである。具体的には、アイドル活動がコロナ禍において著しい制約を受け、発信時間がコロナ前に比べて遅くなった。なお、「おはよう系」は感情「第３象限＜けだるい・落ち込む等＞」の影響を受けているが、これは、「朝がつらく、けだるい」という感情によるものと考えられる。

一方、非定型表現である「呼びかけ」「発信者への働きかけ」「受信者の報告」は、「年」「時間」の影響を受けていないことから、コロナ禍の影響を受けていないといえる。ここにおける「呼びかけ」とは、発信者であるアイドルの名前やニックネームのことであり、受信者であるファンがツイート文の中に発信者であるアイドルの名前を含めてリプライを送っていることを指す。例えば、「今日も頑張ろうね、○○ちゃん」というリプライがある場合、「○○ちゃん」の部分が呼びかけとなる。また、これらの非定型表現はいずれも、感情の影響を受けているが、「呼びかけ」は「第１象限＜嬉しい・愉快等＞」の影響が強く、「発信者への働きかけ」と「受信者の報告」は「第３象限＜けだるい・落ち込む等＞」の影響が強い。ここにおける「発信者への働きかけ」は、発信者であるアイドルに対して受信者であるファンが「今日も頑張ろうね」や「学校頑張ってね」といった言葉を呼びかけることを意味している。「受信者の報告」は、発信者であるアイドルに対して受信者であるファンが「眠いよ」「仕事行ってきます」など自身の気持ちやこれからの予定を報告することを意味している。

「第１象限＜嬉しい・愉快等＞」の影響が強い「呼びかけ」においては、推しのアイドルに対して呼びかける際に嬉しい感情が伴う或いは嬉しい感情を伝えたいためであり、「第３象限＜けだるい・落ち込む等＞」の影響が強い「発信者への働きかけ」と「受信者の報告」は、自分（ファン）は「けだるく・落ち込んでいるけれども、推しのアイドルと一緒なら頑張れるから、一緒に頑張ってほしい」という感情(前者)、或いは「けだるく・落ち込んでいる自分の状況を、

推しのアイドルに聞いてもらいたい」という感情(後者)が伴うためと考えられる。

5.結論

定型表現である「おはよう系」「おそよう系」は、ともに、「年」「時間」の影響即ちコロナ禍の影響を強く受けている。

非定型表現である「呼びかけ」「発信者への働きかけ」「受信者の報告」は、コロナ禍の影響を受けていない。

非定型表現はいずれも、感情の影響を受けているが、「呼びかけ」は「第1象限＜嬉しい・愉快等＞」の影響が強く、「発信者への働きかけ」と「受信者の報告」は「第3象限＜けだるい・落ち込む等＞」の影響が強い。

[注]

1. 調査は、2024 年 4 月上旬に実施した。感情類型判断の客観性の確認には、さらに、「リプライ内容」のメッセージ内容と文字部分を含む要素についての調査も必要と考えられる。それらについては、今後取り組む予定である。
2. 図 2 で示した総合的因果構造モデルは、モデル適合が RMSEA=.106 であり、また、矢印で記された数が全て有意であることから、モデルとして成立すると判断できる。

[参考文献]

江端義夫(1997)「挨拶言葉の分布と歴史-家族との朝の出会いの挨拶」『國文學 解釈と教材の研究』42-7

岡田祥平(2019)「一語からはじめる SNS のことばの研究—SNS の「特性」と先行研究から，その可能性を考える—」『日本語学』38-4

斎藤孝滋(2002)「若者たちの夏の言語生活—挨拶行動の言語行動学的分析」『日本語学』21-10

斎藤孝滋(2008)『Ferris Books 13 正しいか?誤りか?それは問題じゃない 話しことばのフィールドワーク』フェリス女学院大学

杉戸清樹(2014)「言語行動」「言語行動論」『日本語大事典 上』朝倉書店

中西太郎(2021)「新年のあいさつ・不祝儀のあいさつの定型性」小林隆編『全国調査による言語行動の方言学』ひつじ書房

中野亜莉沙(2023)「アイドルが発信するツイートに対するファンのリプライパターンの計量言語行動学的考察—コロナ禍の影響を考慮して—」『多文化・共生コミュニケーション論叢』18

南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店

Hymes,D.H(1972)Toward ethnographies of communication. In P.P.Giglioli(Ed.),Language and social context (pp.21-44) Harmondsworth: Penguin.

J.A.Russell(1980),"A circumplex model of affect,"J.Pers.Soc.Psychol.,39,1161-1178.

Jens Otto Harry Jespersen(1924) *The Philosophy of Grammar*. London ,(安藤貞雄訳 2006『文法の原理』岩波書店)

Roman Jakobson(1960)*Linguistics and Poetics*,The Hague.(川本茂雄監修、田村すゞ子、村崎恭子、長嶋善郎、中野直子 1973『一般言語学』みすず書房)

Chat GPT は「ボク」「オレ」らしく発話するのか
―人間が作成した発話文と比較して―

西澤 萌希（中部学院大学）
nishizawa-moeki@chubu-gu.ac.jp

１．はじめに

本発表の目的は、Chat GPT がどの程度「ボク」らしい発話文、「オレ」らしい発話文を生成することができるのかを明らかにすることである。以下、この目的に至る背景を述べる。

日本語は多くの自称詞を持つ点で特徴的な言語であり、日本語話者は自称詞使用に関する選択を日々行っている。その選択は、話し手との関係や場の公私、人物像との結びつきを基準として行われている（小嶋 2017、三輪 2005）加えて、特定の人物像との結びつきも自称詞選択の基準となることが示されてきた（Miyazaki 2004、大和田 2010）。

以上を踏まえ発表者は、自称詞選択の基準に関して次の立場をとっている。すなわち自称詞の選択では、根本として人物像との結びつきが想定されており、ある自称詞と結びつく人物像が聞き手との関係や場に相応しければその自称詞が使用され、相応しくなければ使用されない、と考える立場である。この立場において自称詞は人物像との結びつきを想定して使用されることばであるため、自己表現の際に果たす役割は小さくない。つまり、自称詞を上手く使用することで自己表現が可能になるが、そのためには自称詞と人物像の結びつきを理解する必要がある。ただし、自称詞と人物像の結びつきの様相は複雑である。同じ自称詞が異なる人物像と結びついたり、異なる自称詞が類似する人物像と結びついたりする（西澤 2021）。そのため、自称詞と人物像の結びつきを理解することは容易ではない。日本語を使った自己表現を学ぶ過程にある母語話者児童や日本語学習者にとっては尚更である。

特定の人物像と結びつく言葉づかいとして「役割語」を唱えた金水（2003）によると、役割語は語彙、イントネーションなど様々な要素から構成され、語彙要素だけを見ても人称代名詞、文末表現、感動詞など様々な要素から構成される。つまり、自称詞と人物像の結びつきにおいても、自称詞が他にどのような要素とともに使われるのかによって、その時々の結びつく人物像が典型的なものから特殊なものにまで、多様に想定される。

母語話者児童や日本語学習者などが自称詞と人物像の結びつきを活かして自己表現を行うためには、まずは典型的な結びつきを理解するとよいだろう。例えば「ボク」らしい言葉づかいや「オレ」らしい言葉づかいを知り、それがどのような人物像と結びつくのかを理解するとよいだろう。では、どのような言葉づかいが「ボク」「オレ」らしいのか。ことばと人物像の結びつきは観念的なものであり、特定の自称詞の使用者らしい言葉づかいを個人が作成するのは一苦労である。

そこで、膨大な情報を基にことばを構築する Chat GPT であれば、特定の自称詞の使用者らしい人物像と結びつくような典型的な言葉づかいを示すことができるのではないかと考えた。本発表では、Chat GPT と人間が「ボク」「オレ」を使用して生成、作成した発話文を日本語母語話者が読み、それぞれをどのくらい「ボク」「オレ」らしいと判断したのかという観点で分析する。そのことを通して、Chat GPT が「ボク」「オレ」らしい言葉づかいの例を生成することができるのかを明らかにすることで、疑問を検証する。なお、本研究では「ボク」「オレ」ともに、男性の発話主が使用する際を想定して調査、分析を行う。

２．先行研究

自称詞使用の実態の調査や自称詞のイメージ調査等の蓄積から、「ボク」「オレ」らしさのそれ

ぞれには、ある程度の共通認識がありそうである。複数の文献で重複して指摘されているものだけでも、「ボク」らしさは弱々しく男性性に欠ける、優しい、知的、子どもっぽい等のイメージと結びつき、「オレ」らしさは強い、かっこいい、男らしい、野生的等のイメージと結びつく（Miyazaki 2004、秋月 2014、大和田 2010、金水編 2014、麻 2019）。ただし、現実場面よりフィクションで結びつきやすいイメージの指摘もある。

また、「ボク」「オレ」を使用する人物の言葉づかいに関する指摘にも、いくつかの共通点が見られる。「ボク」使用者は対称詞の「キミ」、終助詞や間投助詞の「さ」、丁寧体を使い、「オレ」使用者は対称詞の「オマエ」、感動詞の「おい」を使って丁寧体は使わないという（秋月 2014、小林 1999、西澤 2022、麻 2019、村井・松本 2022）。ただし、これらの特徴にも現実場面とフィクションでは違いがありそうである。例えば西澤（2022）は、少年マンガのセリフで終助詞「じゃん」、間投助詞「さ」を「ボク」使用者がよく使用すると示したが、現実場面に近いトーク番組の発話を調査した西澤（2023）では、同じ語彙要素が「オレ」使用者の言葉づかいの特徴として見られた。さらに、村田・松本は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語日常会話コーパス』で「ボク」「オレ」使用者が用いる対称詞に違いがあることを明らかにしているが、このこともフィクションと現実場面で言葉づかいの特徴が異なることを示唆している。

以上より、「ボク」らしさ、「オレ」らしさの共通認識が確かに存在することがわかる。一方で、現実場面とフィクション作品では異なることが予想される。加えて、「ボク」「オレ」らしさの判断が語彙以外の要素からされる可能性もある。果たして日本語母語話者はどのような言葉づかいを「ボク」「オレ」らしいと判断するのだろうか。Chat GPT の生成文は人間が主観をもって作成した文よりも「ボク」「オレ」らしいと判断されるのだろうか。

３．方法

調査は、大きく 2 つの工程により進めた。

①Chat GPT と日本語母語話者に「ボク」「オレ」を使用した発話文を生成、作成させた。

②生成、作成された発話文中の自称詞部分を空欄にし、「ボク」「オレ」のどちらが使用されていると思うかを問うアンケート調査を、日本語母語話者を対象に実施した。

①について、Chat GPT に図 1 のプロンプトを与え、発話文を生成させた。Chat GPT は毎回異なる生成文を作成するため、「ボク」「オレ」それぞれ 3 回ずつ同じ工程で生成させた。その後、20 代の日本語母語話者 11 名（男性 5 名、女性 6 名）にも図 1 と同じ指示文を与え、発話文を作成させた。よって、「ボク」「オレ」それぞれ 14 個、計 28 個の発話文を得た。

これから言う人になりきって話してください。
あなたは 25 歳の男性です。自称詞に「○○」を使用しています。A さんと B さんは 25 歳の男性で、あなたの友達です。あなたと A さんと B さんはとても仲が良く、毎日 LINE をしています。B さんが結婚をすることになりました。そこで、あなたは A さんといっしょに、B さんの結婚祝いを買いにきました。今、あなたは A さんと一緒に店にいます。A さんは、B さんの結婚祝いはお皿がいいと言いました。でも、お皿は縁起が悪いです。だから、あなたはホットプレートのほうがいいと思っています。そこで、自称詞に「○○」を使って、A さんにホットプレートのほうがいいと伝えてください。
※ 「○○」には「ボク」「オレ」をそれぞれ入力し、順番に指示した。

図 1　調査に使用したプロンプト（指示文）

プロンプト（指示文）の A さん、B さんの設定は分析のし易さ（観点の限定）から定めた。また、自称詞は陳述や思考で出現しやすい（村井・松本 2022）ことから、自称詞の省略が起こりにくい、すなわち自称詞を使用することが不自然でない話題を設定した。

②について、関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方の大学各 1 校の協力のもとで行った。

対象者は 19〜23 歳の 134 名、うち欠損の大きなものを除き、127 名分を分析対象とした[1]。最初に回答者の属性（年齢、出身、性別）を問うた。その後、①で得た発話文の場面設定を説明し、28 の発話文の空欄に「ボク」「オレ」のどちらが入るか、発話文のどこからそのように考えたか、回答に自信があるかを問うた。図 2 は実際の質問のうち 1 つである。

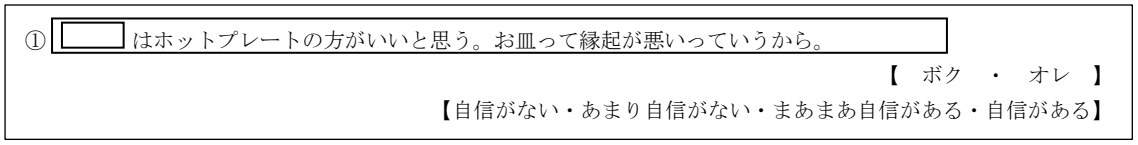


図 2　アンケート調査の問題例

4．分析

表 1 はすべての発話文を、生成、作成時に使用された自称詞とアンケートの回答との一致率（%）が高い順に並べた表で、網掛けが Chat GPT が生成した発話文である。表中の「自信あり率」は、各発話文への回答に対し、「自信がある」あるいは「まあまあ自信がある」と答えた回答者の割合であり、自信あり率の差についてカイ二乗検定と残差分析を行った結果も付してある（$\chi^2(27)=86.599, p<.01$）（有意に高いものは** (p<.01)、* (p<.05)、有意に低いものは## (p<.01)、# (p<.05)、－ (p<.10) を付してある）。作成者の「C」は Chat GPT、「M」は男性、「W」は女性を指す。例えば、発話文 24 は女性が「オレ」を使って作成したもので、アンケートの回答者のうち 96.85%が空欄に「オレ」が入ると答え、72.8%が自信を持って答えた。

表 1　発話文と回答の自称詞一致率

発話文	自称詞	作成者	一致率	自信あり率
24	オレ	W5	96.85	72.8
28	オレ	M5	94.49	72.44
6	ボク	W1	87.4	81.89＊
16	オレ	W4	87.4	69.84
11	ボク	C2	85.83	75.81
25	ボク	W2	85.83	73.02
20	オレ	M2	85.04	73.23
17	ボク	C3	82.68	77.95
15	ボク	W3	74.8	59.52##
27	オレ	W2	72.44	65.87－
8	ボク	C1	70.08	74.8
1	ボク	M5	64.57	67.72
26	オレ	C2	63.78	62.7##
10	オレ	W6	61.42	66.93
4	ボク	W5	60.63	75.59
3	ボク	M3	59.06	78.74
19	オレ	M3	57.48	70.73
23	ボク	W4	57.48	69.6
2	ボク	M4	56.69	65.08#
7	ボク	M1	56.69	73.6
5	オレ	C1	55.91	64.57#
13	ボク	W6	51.18	72.44
21	オレ	C3	51.18	64.29#
9	オレ	M4	48.03	91.34＊＊
14	オレ	M1	37.8	76.8
12	ボク	M2	35.43	78.4
22	オレ	W1	27.56	74.6
18	オレ	W3	18.9	86.51＊＊

表 1 より、一致率の高低にかなりの差が見られる。ただし、Chat GPT が生成したものかどうかは、関係なさそうである。また、母語話者が自信をもって判断したものでも、一致率が低いものがある。それは発話文 9、18 であり、どちらも「オレ」を使った発話文であるが、多くの回答者に「ボク」らしいと判断されていた。このことは、話し手が「オレ」らしく話しているつもりでも、聞き手には「ボク」らしいと思われてしまうこと、すなわちことばで自己表現をすることの難しさを示唆している。

Chat GPT の 6 つの発話文の中で、「ボク」を使用したものの方が「オレ」を使用したものよりも一致率が比較的高いことが気になる。そこで、Chat GPT の 6 つの発話文の一致率の差についてカイ二乗検定を行った結果、有意差が認められた（$\chi^2(5)=55.988, p<.01$）。残差分析の結果、発話文 11、17 は一致率が有意に高く、5、21 は有意に低いことが示された。このことから、Chat GPT は「オレ」らしい発話文よりも「ボク」らしい発話文を生成する方が得意であると思われる。この点は、Chat GPT が生成した発話文への回答の自信あり率において、「オレ」を使った発話文で有意に低いことからも示唆される。

では、Chat GPT が生成した発話文は、人間が作成した発話文よりも「ボク」「オレ」らしいと判断されたのだろうか。Chat GPT が生成した 6 つの発話文の一致率の平均値と人間が作成した 22 個の発話文の一致率の平均値の差について、対応のない T 検定を行った。その結果、有意差は認められなかった（$t(12)=0.8691, p>.10$）。また、「オレ」を使った発話文における一致率の平均値の差についても同様に T 検定を行った結果、有意差は認

められなかった（t(11)=0.6154, p>.10）。一方で、「ボク」を使った発話文における一致率の平均値は、Chat GPT の発話文の方が人間の発話文よりも有意に高いことが示された（t(6)=2.5371, p<.05）。したがって、Chat GPT が生成する発話文は人間が作成する発話文と比べ、「オレ」らしさは同程度であるが、「ボク」らしさはよく表れることがわかった。

以上より、Chat GPT は「ボク」らしい発話文を生成することができ、人間が作成した発話文よりも「ボク」らしいと判断されることがわかった。一方で、「オレ」らしい発話文の生成は人間と同程度にしかできないことが示された。

５．考察

では、なぜ Chat GPT が生成した発話文は「ボク」らしいと判断されたのか。また、なぜ「オレ」らしさは人間が作成した発話文と変わりなかったのか。アンケート調査では、発話文中の「ボク」「オレ」らしさが表れていると感じた部分に下線を引くように指示した。その下線を頼りに、日本語母語話者が発話文のどこを「ボク」「オレ」らしいと判断したのかを考察する。

Chat GPT が生成した発話文、人間が作成した発話文を分けずにアンケートの回答を見たところ、「ボク」「オレ」らしいと判断された言葉づかいにある程度の共通認識が見られた。

「ボク」らしいと判断された発話文の言葉づかい

❶ 「V 基本形＋んだ」の使用は「ボク」らしい。

❷ 終助詞「よ」の使用は「ボク」らしい。

❸ 丁寧なことば（美化語「お皿」、呼称の接辞「さん」）の使用は「ボク」らしい。

「オレ」らしいと判断された発話文の言葉づかい

❹ 丁寧なことばの不使用は「オレ」らしい。

❺ 理由の表現において、「から」ではなく「し」を使っているのは、「オレ」らしい。

例えば、(1)は Chat GPT が生成した発話文 17 である。❶❸が見られる一方で、❹❺は見られない。そのため、もとの発話文通りに「ボク」らしいと判断されたのだろう。また、(2)は母語話者が作成した発話文 16 で、❹❺が見られる。なお、発話文 16 にも❶が見られるが、分析対象の 127 名中 46 名がその後の「よなー」も含めた言葉づかいから「オレ」らしいと判断していた（「ボク」らしいと回答していたのは 6 名）。(3)は表 1 に示した通り、自信あり率が有意に高かったにも拘わらず、一致率が最も低かった発話文 18 である。「ボク」らしいと判断される❷❸が見られる一方で、「オレ」らしいと判断される言葉づかいは見られない。そのため、多くの母語話者が「ボク」らしいと判断したのだと思われる[3]。

(1) ボクはホットプレートの方がいいと思うんだ。お皿もいいけど、縁起が悪いっていうじゃない？ホットプレートなら、B さんも喜ぶと思うし、新しい生活で役立つと思うんだよね。どう思う？（17・C3）[2]

(2) オレは皿だと割れるから縁起が悪いし、ホットプレートみたいに割れにくいものの方が喜んでもらえると思うんだよなー。（16・W4）

(3) 聞いた話だとお皿は縁起が悪いみたいだよ。オレはホットプレートの方がいいなあ。（18・W3）

以上より、「ボク」「オレ」らしさは言葉づかいの特徴から判断されていると思われる。加えて、次の 2 点でも「ボク」「オレ」らしさが判断されていると思われる。

❻ 「どう思う？」等の問いかけで終わる発話文は「ボク」らしい。

❼ 長い発話文は「ボク」らしく、短い発話文は「オレ」らしい。

❻の問いかけは、提案後に聞き手の意見を求める文脈で表れていたもので、9 つの発話文で見られた。アンケートの回答では、その問いかけ部分を「ボク」らしいと考えている様子が見られた。図 3 は、「オレ」を使って生成、作成された 14 個の発話文に対して「ボク」らしいと答えた回答者の割合（以下、「ボク」回答率）を、問いかけのある発話文とない発話文に分けて示した

ものである（p 値に関する記号は、その 14 個の発話文の「ボク」回答率の差についてカイ二乗検定で有意差が認められ（$\chi^2(13)=403.143, p<.01$）、残差分析を行った結果である）。問いかけがある発話文で「ボク」回答率が有意に低いと示されたものがないことから、「オレ」を使用していても、問いかけがあることにより「ボク」らしいと判断されやすくなると考えられる。ただし、問いかけのない「オレ」発話文であっても、「ボク」らしいと判断されたものもある。つまり、問いかけがあることは、「ボク」らしいと判断されるための必要条件でないことが示唆される。

❼はアンケートの回答で明示されたものではなく、分析の中で長い発話文が「ボク」らしく、短い発話文が「オレ」らしいと回答されているように発表者が感じた部分である。本発表ではひとまず発話文の長さを文字の多さと捉えると、図 4 のように各発話文の文字数と「ボク」回答率を軸とした散布図が示された。きれいな比例関係を示す分布ではないが、文字数が多い発話文ほど「ボク」回答率が高くなることが示唆されている（左上と右下の分布がないことから）。

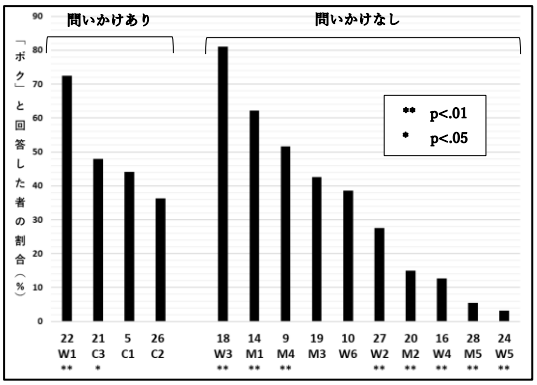


図 3　「オレ」発話文の「ボク」回答率

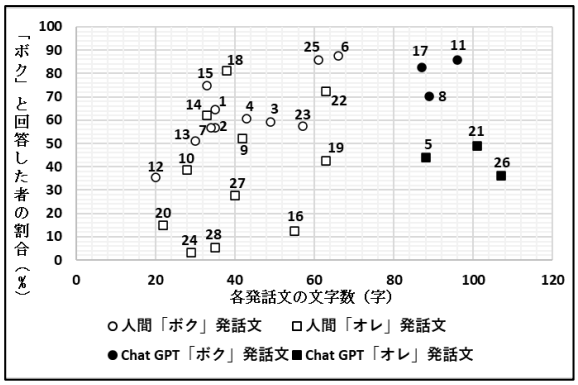


図 4　発話文の文字数と「ボク」回答率

(4)(5)は Chat GPT が生成した発話文である。(4)は「ボク」を使った発話文 11 で、約 85.83%の回答者が「ボク」らしいと判断したものである。(5)は「オレ」を使った発話文 21 で、約 51.18%の回答者が「オレ」らしいと判断したものである。(4)は❷❸が見られ、問いかけもある。文字数は全体で 3 番目に多い（96 字）。そのため、「ボク」らしいと判断されたのだろう。一方で(5)は❹❺も見られるが、❶❸も見られる。問いかけもあり、文字数は全体で 2 番目に多い（101 字）。そのため、約半分の回答者に「ボク」らしいと判断されたのだろう。

(4) ボクはね、ホットプレートの方がいいと思うよ。A さん、お皿もいいけど、縁起が悪いって言われてるからね。ホットプレートなら、B さんも新婚生活で役立つし、一緒に料理するのも楽しいじゃない？どう思う？（11・C2）

(5) オレ、ホットプレートの方がいいと思うんだよね。確かにお皿もいいけど、お皿って縁起悪いって言われてるじゃん。ホットプレートなら、B にとっても実用的だし、これからの新婚生活で役立つと思うんだよね。どう思う？（21・C3）

４．で述べたように、Chat GPT の発話文の「ボク」らしさは人間のものよりも認められるが、「オレ」らしさは同程度に認められた。それは、「ボク」を使った発話文では❶〜❸は見られたが❹❺は見られず、「オレ」を使った発話文では❹❺だけでなく❶〜❸も見られたことによると考えられる。さらに、特に Chat GPT が生成した発話文はすべて問いかけがあり、文字数も多いものであった（図 3、4）。これらの特徴は人間が作成した発話文と異なる部分である。Chat GPT の発話文が人間のものよりも「ボク」らしいとは判断されても、「オレ」らしいとは判断されにくかったのは、問いかけがあることと発話文の長さによるところが大きいのではと考察する[4]。

６．おわりに

本発表を通して、特定の自称詞の使用者らしい発話文の生成における Chat GPT の得意な部分

と苦手な部分の示唆を得られた。Chat GPT の発話文は「ボク」らしい発話文の例として示すことはできそうだが、「オレ」らしい発話文の例として示すためには普段以上に人の目での確認が必要だろう。

なお、「ボク」「オレ」らしいと判断される理由は❶〜❼に挙げたものの他にもあるだろう（例えば下の(6)における「ね？」や(5)の「じゃん」、(3)の「なあ」等）。また、18 は問いかけがなく、発話文が短くても「ボク」らしいと判断されたように、図 3、4 も示唆に留まる。つまり、本発表の第 5 節で示したことは考察の域を出ないものである。これらの点のさらなる検証や、本発表で母語話者が感じ取った「ボク」「オレ」らしさが現実場面での言語使用に即したものであるのかなど、今後、さらなる分析をすすめ、自称詞を使った自己表現の場に還元することを目指す。

(6) お皿は縁起悪くね？オレはホットプレートのほうがいいと思う。（24・W5）

注

1 分析対象 127 名中 39 名が関東地方、82 名が中部地方の大学に通う学生であった。

2 発話文の引用元は「（発話文番号・作成者）」の形で示す。なお、引用中の下線は発表者によるもので、＿＿は「ボク」らしさ、﹏﹏は「オレ」らしさと結びつくと思われるものを指す。

3 18 では本文で述べたものの他に、終助詞「なあ」を「ボク」らしいとする回答も多く見られた。

4 なお、文字数に関しては、もっと短く話すように指示を与えると、Chat GPT も短い発話文を生成する。しかし、それは人工的に「オレ」らしい発話文を生成させたことになるため、本発表の目的に合わない。

参考文献

Miyazaki, Ayumi (2004) “Japanese Junior High School Girls’ and Boys’ First-Person Pronoun Use and Their Social World”, Ed. by Shigeko Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith, *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*, pp.256-274, Oxford University Press.

秋月高太郎（2014）「脇役男子の言語学－スネ夫やジャイアンはどのように話すのかー」『尚絅学院大学紀要』67, pp.41-54, 尚絅学院大学.

大和田智文（2010）「若者における一人称の使用の様相とその機能的意味」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』13, pp.77-86, 関西福祉大学社会福祉学部研究会.

小嶋玲子（2017）「女子大学生の自称詞使用の変化－2001 年と 2011 年の調査結果を比較してー」『桜花学園大学保育学部研究紀要』16, pp.65-77, 桜花学園大学保育学部.

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』, 岩波書店.

金水敏編（2014）『〈役割語〉小辞典』, 研究社.

小林美惠子（1999）「自称・対称は中性化するか？」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』, pp.113-137, ひつじ書房.

西澤萌希（2021）「《ボク》キャラと《オレ》キャラの接点－ことばとキャラクタの結びつきに注目してー」『名古屋大学人文学フォーラム』4, pp.185-200, 名古屋大学大学院人文学研究科図書・編集委員会.

西澤萌希（2022）「自称詞と結びつく人物像の男性性、女性性－少年マンガの《オレ》《ボク》《ワタシ》《アタシ》ー」『ことば』43, pp.21-38, 現代日本語研究会.

西澤萌希（2023）「「オレ」を使用する話し手は年下にどのように発話するかー1 人の男性話者による異なるグループ内での発話に注目してー」『KLS Selected papers』5, pp.81-96, 関西言語学会.

麻子軒（2019）「計量的アプローチによる役割語の分類と抽出の試みーテレビゲーム『ドラゴンクエスト 3』を例にー」『計量国語学』32・2, pp.103-116, 計量国語学会.

三輪正（2005）『一人称二人称と対話』, 人文書院.

村井源・松本斉子（2022）「会話文での自称詞と対称詞の出現傾向と役割－話し言葉と書き言葉での相違からー」『情報知識学会誌』32・1, pp.3-14, 情報知識学会.

三重県旧南勢町における三拍動詞五段活用第１・２類の夕形アクセント変化 ── 類による区別から有声性による区別へ ──

中津陽菜（なかつはるな）（日本大学助手）

1　要旨

江戸期京都方言において「上がった・動いた」のような三拍動詞五段活用第 1・2 類の夕形アクセントには、それが第 1 類であるか第 2 類であるかという類による区別があった。ところが現代京都の一部の話者では、その区別をせず代わりに 3 拍目の音の種類によって区別を行うという事例が報告されている。しかしこの変化の過程や要因についてはこれまで論じられることがなかった。本発表は、この変化がいま進行中であるとみられる三重県旧南勢町神津佐地区において幅広い年代の 17 名を対象に調査を行い、その結果から夕形アクセントの変化の過程について考察するものである。調査の結果この変化は、両類に混乱が生じた際、無声拍の存在が下り目の移動を拒んだことに起因すると主張する。

2　先行研究

三拍動詞五段活用第 1・2 類のアクセントは、早いものでは江戸期京都のものが『平家正節』によって再構され、終止・連体形が第 1・2 類それぞれ HHH, HLL, 夕形（過去形）がそれぞれ HHLL, HLLL であったことが明らかになっている (奥村 1981, 上野 2011；H が高拍、L が低拍を示す)。このように類によってアクセントを区別する方言は、現在も淡路島の一部や高知の高年層などに残存している (山岡 2021 ほか)。

一方、中井 (2001) は、京都市 1957 年生まれの話者と 1971 年生まれの話者において、類別による区別がなくなり、代わりに夕形 3 拍目の音の種類によってそのアクセントを区別するようになっているという事例を報告している。具体的には、「ウカンダ（浮）・ウゴイタ（動）」など 3 拍目が撥音便・イ音便の場合は HHLL, 「アガッタ（上）・サガシタ（探）・ハロタ（払）」など 3 拍目が促音便・シ・短いウ音便の場合は HLLL（HLL）が聞かれるというものである (表 1)。これに似たような変化（またはその萌芽）は中井ほか (1999) の徳島市にも現れ、1967 年生まれのインフォーマントにおいて第 2 類で夕形 3 拍目がイ音便・撥音便であるものの一部に HHLL が聞かれる。

このように、三拍動詞五段活用第 1・2 類の夕形が類別による区別を失い、代わりに夕形 3 拍目の音による区別を獲得する場合があることが中井 (2001) ほかに示されたが、現時点で新しいアクセントのデータがあるのは数名であり、それがどのような過程を経て変化したのかについては不明であった。本発表ではこの変化が現在進行途中にあるとみえる三重県度会郡旧南勢町神津佐において幅広い世代の 17 名を対象として調査を行い、その結果から変化の様相と要因とについての考察を行う。

類	語例	江戸期京都・現代淡路島等	現代京都 (中井 2001)
第 1 類	続く/続いた	HHH/HHLL	HHH/HHLL（有声）
	上がる/上がった		HHH/HLLL（無声）
第 2 類	動く/動いた	HLL/HLLL	HHH/HHLL（有声）
	作る/作った		HHH/HLLL（無声）

表 1: 京都における三拍動詞五段活用第 1・2 類アクセントの変遷（終止・連体形/タ形）(中井 2001, 上野 2011, 山岡 2021 をもとに作成)

本発表で調査対象とする旧南勢町神津佐は三重県の熊野灘沿岸東部に位置する人口 200 人ほどの地域である (南伊勢町 2023)。金田一 (1959) などによれば、当該地域の方言アクセントは、京都方言に近い京阪式アクセントである（次頁図 1)。[*1]一方、隣の旧南島町からはさらに京都方言などとは異なるアクセント体系が見られる（図 1 の B にあたる)。そのため、本発表で対象とする旧南勢町は京都方言に近い京阪式アクセント諸地域（図 1 の A）の中でも周縁部にあたる地域である。

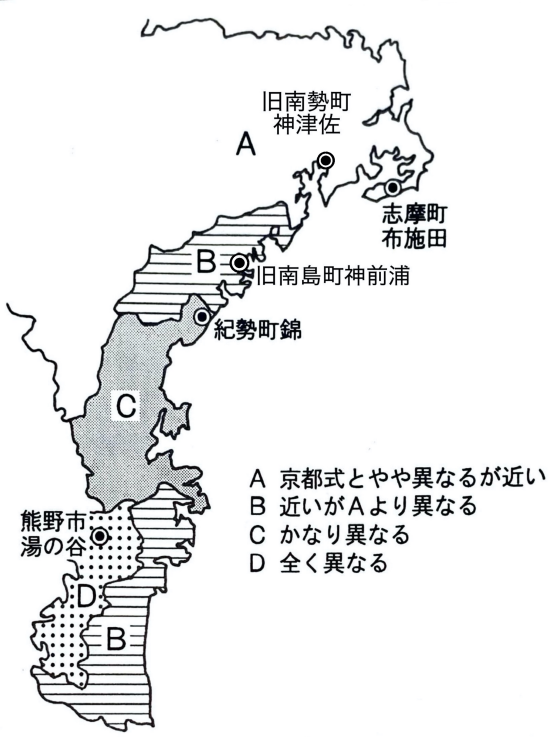


図 1: 三重県南部のアクセント (丹羽 2000 より)

[*1] 丹羽 (2000) の地図に「旧南勢町神津佐」、「旧南島町神前浦」の文字と地点の丸印とを加えた。

3　調査の概要

調査は 2022 年 10 月に行った。調査対象は言語形成期を三重県度会郡旧南勢町神津佐地区で過ごし、現在も同地区に居住する 10 代から 90 代の 17 名である。インフォーマントの生年を並べると、1929, 1936, 1946, 1950（3 名）, 1952, 1960, 1962, 1973（3 名）, 1983, 1988, 1992, 2006, 2009 となる。調査語は表 2 の通りで、それぞれについて終止・連体形とタ形との例文を作成した。動詞の類別は金田一 (1974) による。調査の形式としては、一対一の面接形式で発表者が作成した例文を読み上げてもらい、それを録音する形をとった。アクセントの判定は主に発表者の聞き取りによって行い、補助的に音声分析ソフト Praat(Boersma and Weenink 2022) を使用した。

類別	タ形 3 拍目	調査語	類別	タ形 3 拍目	調査語
第 1 類	イ音便	濯ぐ・注ぐ・続く	第 2 類	イ音便	扇ぐ・急ぐ・動く
	撥音	浮かぶ・囲む・結ぶ		撥音	歩む・好む・憎む
	促音	上がる・変わる・終わる		促音	起こる・被る・光る
	シ	暮らす・探す・渡す		シ	移す・伸ばす・許す

表 2: 調査語

4　調査結果

4.1　終止・連体形

第 1 類の終止・連体形（「続く」など）は世代を問わず HHH が多く、HLL は 102 例中 9 例であった。

第 2 類（「探す」など）は、高年層の 3 名で HLL が優勢であったが、それ以外のインフォーマントでは HHH が多かった。

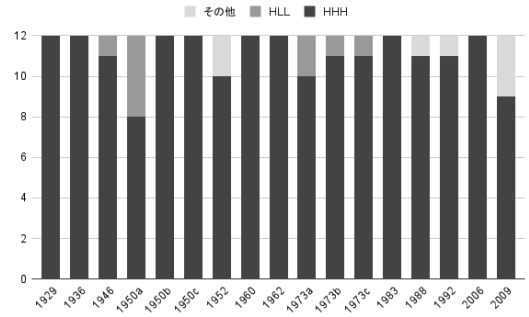


図 2: 第 1 類　終止・連体形

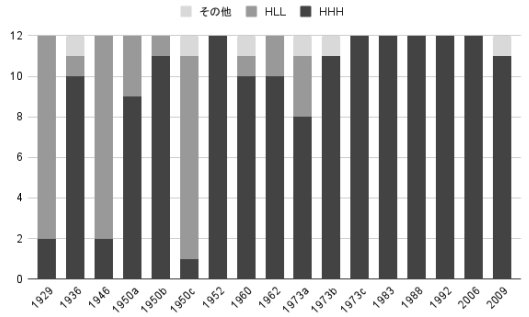


図 3: 第 2 類　終止・連体形

4.2 夕形

第 1 類（「続いた」など）の夕形で 3 拍目がイまたは撥音の場合、そのアクセントは HHLL が約 6 割、HLLL が約 3 割であり、特に世代差は見られなかった（図 4）。次に 3 拍目が促音またはシの場合は、生年が 1952 年までのインフォーマントには HHLL と HLLL とが約 6:4 の割合で現れるが、1960 年以降のインフォーマントでは HLLL がほとんどであった（図 5）。

第 2 類では、3 拍目がイまたは撥音の場合も、世代差は見られず HHLL が約 6 割, HLLL が約 4 割現れた（図 6）。そして 3 拍目が促音またはシの場合は、ほぼ全てが HLLL で、例外は HHLL が 102 例中 3 例聞かれたのみである（図 7）。

なお、3 拍目がシのものはほとんどの例で 3 拍目の母音が無声化しており、無声化していなかったのは 102 例中 3 例のみであった。

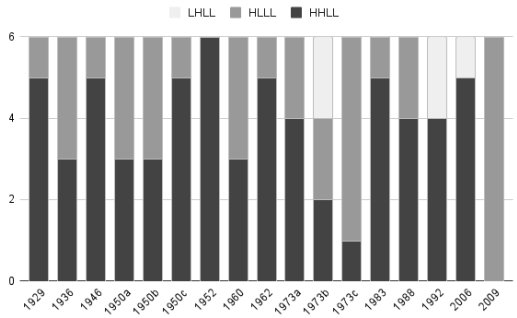


図 4: 第 1 類　3 拍目がイまたは撥音

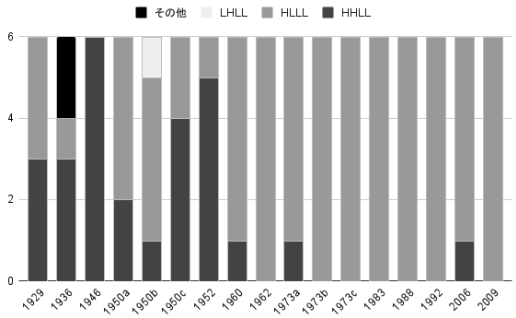


図 5: 第 1 類　3 拍目が促音またはシ

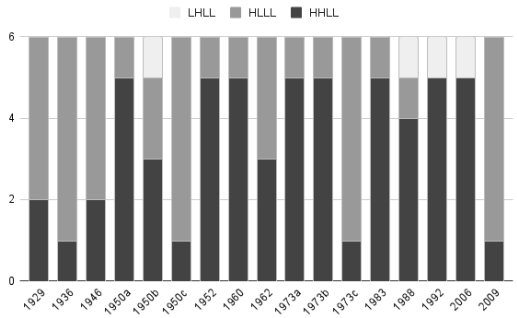


図 6: 第 2 類　3 拍目がイまたは撥音

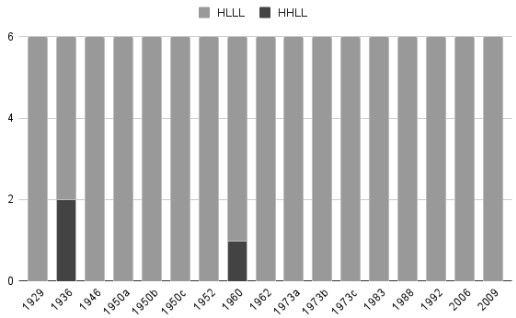


図 7: 第 2 類　3 拍目が促音またはシ

5 考察

調査の結果、旧南勢町でも中・若年層では中井 (2001) の京都市の例と同様に、夕形は 3 拍目がイ音便または撥音便の場合と促音便またはシの場合とで異なるアクセントの傾向をみせることが明らかになった。これら 2 つは有声性によって分かれている。すなわち前者が有声拍で後者が基本的に無声拍である。

そして、三拍動詞（四／五段活用）第 1・2 類の夕形アクセントについて、①上野 (2011) に

よる江戸期京都のアクセントと、②旧南勢町中・高年層（生年 1950 年ごろまで)、③旧南勢町中・若年層（生年 1960 年ごろ以降）のアクセントの概略をまとめると表 3 の通りである（H は高起式であることを、その次の数字は下り目の位置を示す。例えば H2 であれば、高起式で 2 拍目の直後に下り目が来るアクセントを表す。太字は二つのアクセントのうち数が多い方である)。

4.1 節より、旧南勢町においても終止・連体形のアクセントは、京都など京阪式アクセント諸地域と同じくかつては類による区別のあったものが現代高年層あたりで合同しているようである。そこで、タ形アクセントも同様にかつては第 1 類が HHLL, 第 2 類が HLLL という区別を行っていたと仮定すると、旧南勢町のアクセントは、江戸期京都のアクセントから類別による区別を失い、3 拍目の有声性による区別を獲得する途上に位置付けられる。

類別	3 拍目	例	江戸期京都	旧南勢町中・高年層	旧南勢町中・若年層
第 1 類	有声	続いた・結んだ	H2	**H2** & H1	H2 & H1
	無声	作った・暮らした	H2	**H2** & H1	H1
第 2 類	有声	動いた・ 憎んだ	H1	H2 & **H1**	**H2** & H1
	無声	光った・移した	H1	H1	H1

表 3: 江戸期京都、旧南勢町中・高年層、旧南勢町中・若年層のタ形アクセント

ここで、その変化の道筋を考える。まず旧南勢町中・高年層では、第 1 類のアクセントと第 2 類のアクセントとが混乱している状態にあるといえる。しかしその中で、第 2 類の 3 拍目が無声拍であるものについてはほとんど HLLL から動いていないのが目につく。これが有声性による区別への変化のきっかけになっているのではないかと考える。つまり、第 2 類の 3 拍目が無声拍のものにも HHLL へと揺れる機運が生じたが、無声拍の直前には下り目を動かしづらく、HLLL のままで留まったのではないか。そうすると、第 2 類では、3 拍目が有声の場合に HHLL と HLLL とが取れる一方で、無声の場合は HLLL しか取ることができないという対立が起こる（旧南勢町中・高年層の様相)。この区別が第 1 類にも反映されるようになり（旧南勢町中・若年層の様相)、その結果、類別による区別が失われ、3 拍目の有声性による区別が獲得される方向へ変化が進んでいるのではないか。

6 おわりに

本発表では、三拍動詞五段活用第 1・2 類のタ形アクセントが類による区別を失い 3 拍目の有声性による区別を獲得するに至った過程を、旧南勢町神津佐における調査結果から考察してきた。変化の過程についての仮説をまとめると以下の通りである。

1. 江戸期京都のように類別によって区別があった
2. 類別に混乱が生じ、第 1 類と第 2 類とのアクセントが互いに混入しあうようになった
3. しかし、第 2 類で 3 拍目が無声拍であるものは、HLLL から HHLL への変化を拒んだ
4. その結果、第 2 類に 3 拍目の有声性による区別ができる

5. 第 1 類も同様に有声性によってアクセントを区別するようになる

なお、本発表で具体的に示すことはしなかったが、タ形の他にテ形・タラ形も同じような結果になっている。

ここまで旧南勢町神津佐を対象に行った調査から三拍動詞五段活用第 1・2 類のタ形アクセントについて考えてきた。しかし、本発表で考察した過程を直ちに京都などの他方言に当てはめることはできない。発表者は今までのところ、兵庫県神戸市・三木市、京都府京都市・宇治市、三重県伊勢市・玉城町の若年層それぞれ 1 から 4 名に同様の調査を行っている。その結果、宇治市以外のインフォーマントは有声性によるアクセントの区別を行っており、この新しい区別が京阪式アクセント諸地域に広がっていることが予想される。しかし、結果として同じような区別を持つようになった方言でも、その形成過程は地域によって異なる可能性がある。また両類が有声性に関わらず変化している地域もあり京阪式アクセント地域としてひとまとめに論じることはできない (上野 2011, 山岡 2021, 中井 1997)。慎重に研究を進めたい。

また、なぜ無声拍の直前に下り目を移動させることができなかったのかについても確固たる論拠を提出することができなかった。例えば四拍動詞五段活用のタ形（「集まった」など）は 4 拍目の有声性によらず両類が HHHLL へと合同する傾向がある。これとの関係についても今後明らかにしたい。

参考文献

Boersma, Paul and David Weenink (2022) “Praat: doing phonetics by computer [Computer program],” Version 6.2.20, URL: http://www.praat.org/.

上野和昭 (2011) 『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』，早稲田大学学術叢書 15, 東京：早稲田大学出版部.

奥村三雄 (1981) 『平曲譜本の研究』東京：桜楓社.

金田一春彦 (1959) 「熊野灘沿岸諸方言のアクセント：北牟婁郡の部」『名古屋大学文学部十周年記念論集』681–702.

金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究：原理と方法』東京：塙書房.

中井幸比古 (1997) 『高知市アクセント小辞典』，方言アクセント小辞典 (1).

中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ（編） (1999) 『徳島市方言アクセント小辞典』：中井幸比古.

中井幸比古 (2001) 『京都市方言アクセント小辞典；付. 京都府中川・滋賀県野洲方言アクセント』，方言アクセント小辞典 (5).

丹羽一彌 (2000) 「I 総論」平山輝男（編）『三重県のことば』1–58. 東京：明治書院.

南伊勢町 (2023) 「男女別行政区別人口統計表（令和 5 年 10 月 31 日現在住民基本台帳データに基づく）」，URL: https://www.town.minamiise.lg.jp/material/files/group/23/20231107.pdf（2024 年 1 月 24 日最終閲覧）.

山岡華菜子 (2021) 『環大阪湾地域におけるアクセント変化の研究』東京：ひつじ書房.

宮古語狩俣方言のアクセント体系と音調実現—3 型から 2 型への推移—

衣畑智秀（福岡大学）
tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

1　はじめに

松森 (2010) による多良間方言の 3 型アクセント体系の発見以降、南琉球に 3 つの型が対立する方言が相次いで報告されてきた[*1]。また、2 拍以上の語彙的な語根や接語（助詞）に「韻律語」と呼ばれる韻律範疇を想定することで、一見多様に見える南琉球諸方言の音調実現を共通する枠組みで記述することも提案されている（松森 2015, 五十嵐 2016 など）。その中で、新田 (2023) では、宮古諸方言の 3 型体系は、核のない型、第 2 韻律語に核のある型、第 1 韻律語に核のある型の 3 つが対立するとしている。それぞれに所属する語彙の多くが琉球祖語の 3 つの類（A, B, C 類/系列: 松森 2012、五十嵐 2018）に遡ることから、それぞれの型を新田 (2023) に倣って a 型、b 型、c 型と呼ぶ。

表 1　宮古諸方言の 3 型体系

	a 型	b 型	c 型
多良間	[**kuba+gii=mai**	[**mami+gi**]i=mai	[**baɕo**]o+gii=mai
与那覇	saki+gami=[**kara=du**	M[**tsu+gami**]=kara=du	[**maasu**]+gami=kara=du
上地	[**kuusu+pari=ka**]ra=[**du**	[**sɨMna**]+pari=kara=[**du**	[**ba**]soo+pari=kara=[**du**
宮古 3 型体系	$(\ldots\mu)_\omega$ $(\ldots\mu)_\omega$ 核なし	$(\ldots\mu)_\omega$ $\mathbf{(\ldots}\mu)^*_\omega$ 第 2 韻律語に核	$\mathbf{(\ldots}\mu)^*_\omega$ $(\ldots\mu)_\omega$ 第 1 韻律語に核

本発表で対象とする宮古狩俣方言についても、韻律語が 2 つの場合は 2 つの型の区別しかないものの（cf. 平山他 1967）、韻律語が 3 つ並ぶ場合には 3 つの型が区別されることが松森 (2015) によって主張されている。すなわち、a 型ではアクセント核を示す下降は現れず（松森 (2015: 注 16, 17) に従い句末の下降はアクセント核によるとみなさない）、b 型では第 2 韻律語の次末拍に下降が生じ、c 型では第 1 韻律語の次末拍に下降が生じるという。

表 2　松森 (2015) による狩俣方言の対立「X+ 畑=から」

	a 型: 核なし	b 型: 2ndPW*	c 型: 1stPW*
冬瓜/麦/キャベツ	[**suu+bari=kara**]=du	[**mugɨ+ba**]ri=mai	[**tama**]na+pari=kara=du
唐辛子/豆/稷	[**kuusu+bari=kara**]=du	[**mami+ba**]ri=kara=du	[**buugɨ**]+bari=kara=du

ただし、松森 (2015) での調査対象は話者 1 名（1925 年生、男性）であり、この 3 つの対立が宮古狩俣方言話者に広く共有されているかは明らかでない。そこで、発表者は狩俣方言話者 2 名（1934 年生、女性）に対して松森 (2015) の追試を行った。その結果、c 型は a, b 型との区別が認められるものの、a 型と b 型の対立は一部の語彙でしか見られなかった[*2]。また、松森 (2015) で対立が確認されたのは「X+ 畑=から」のような第 2 韻律語に語彙的語根が来て複合語になる例のみであり、結果、この対立が狩俣方言の語彙に広範囲に認められるものかどうかも検証されていない。そこで本発表では、「X=から=も」のように、第 2, 3 韻律語に接語を並べた形を用い、この対立が狩俣方言に一般的に認められるか検証を行う。

2　アクセントの対立

狩俣方言のアクセントの対立を調査するために、松森 (2010) および五十嵐 (2018: 初期調査用 164 語) の語彙リストを使い、前出の話者 2 名（仮に N, K）に、引用形、属格、累加（も）、奪格（から）＋累加（も）

[*1] 宮古諸方言のものだけに絞っても、与那覇方言（松森 2013）、狩俣方言（松森 2015）、池間方言（五十嵐他 2012）、水納方言（セリック 2020）、皆愛方言（セリック 2021）、上地方言（Matsumori 2019）など。

[*2] 表 2 の例について言えば、一名には a 型と b 型の区別はなく、もう一名は suu（冬瓜）に限って b 型と区別していた。

の言い切りと、後二者を文にした形（「～もない」「～からも出た」）を発話してもらった。結果的に、話者 N における奪格＋累加の言い切りに、アクセントの対立が最も明瞭に確認された。よって、以下の説明には、話者 N のこのデータを中心に説明する。

得られた語数は 284 語うち、2 拍名詞が 120 語、3 拍以上の名詞（以下「3⁺拍名詞」）が 164 語あった。2 拍名詞 120 語には、核がない a 型（平板）36 語と第 2 韻律語の次末拍に下降が来る b 型（2ndPW*）84 語に音調の対立が認められたが[*3]、第 1 韻律語に下降がある c 型（1stPW*）は確認できなかった。図 1 は a 型の「瓶からも」と b 型の「亀からも」の対立で、前者には下降がなく、後者には第 2 韻律語に下降（↓で示す）が認められる（以下描画には Praat. ver.6.3.10 を使用）。

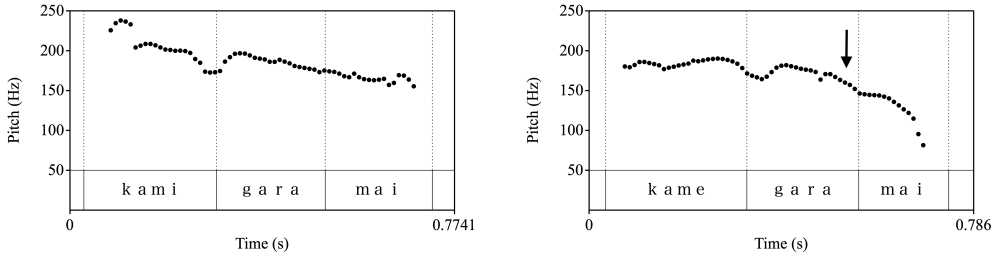


図 1　「瓶からも」（左）と「亀からも」（右）

次に、3⁺拍名詞164 語には、まず、b 型（2ndPW*）と c 型（1stPW*）の対立が認められた。b 型は 94 語、c 型は 63 語あった[*4]。次の図 2 は 3 拍名詞 b 型の「黄金からも」と c 型の「蚊からも」が対立する例である。

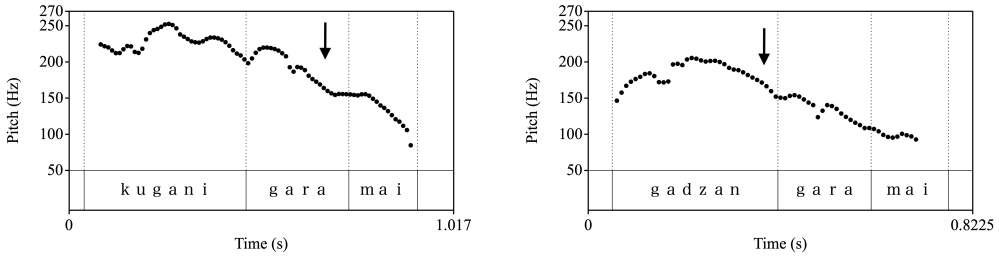


図 2　「黄金からも」（左）と「蚊からも」（右）

このように 3⁺拍名詞 では b 型と c 型が明瞭に対立するのに対し、a 型（平板）は僅か 9 語にしか見られなかった。さらに、この 9 語のうち 4 語については、話者 K は c 型（1stPW*）で発話していた。次の図 3 の左は「春からも」の話者 N による発話、右は話者 K による発話の例である。

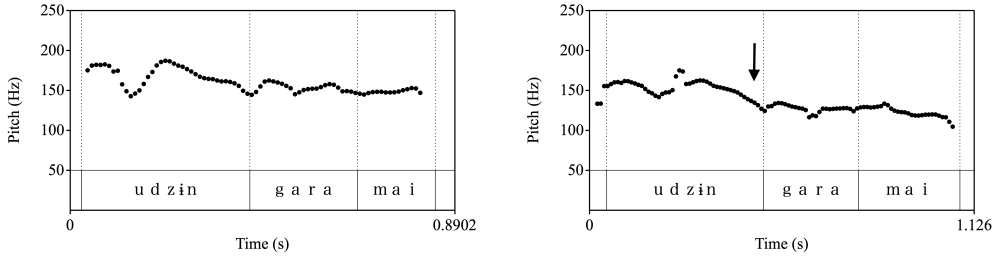


図 3　「春からも（話者 N）」（左）と「春からも（話者 K）」（右）

また残りの 5 語は全て 2 拍 +2 拍の複合名詞と解釈できるものであった。たとえば、nabitsɨtsɨ（煤）は、

[*3] ngi[右] には a 型と b 型で揺れが見られたが、b 型の方が安定して発音されていること、話者 K も b 型で発話していることを踏まえ、b 型に分類した。

[*4] 後述の要因で型が揺れているものが 2 語あり、これをそれぞれの型にカウントした。よって 3⁺拍名詞 の合計は 166 語となる。

nabi（鍋）と*tsɨtsɨ（煤）から成っており、nabi（鍋）は狩俣方言においてa型（平板）で実現するため、「煤からも」はa型の2拍語に韻律語が3つ後続した形とも解釈することができる[*5]。

(1) a. na[**bi=gara=mai**（鍋からも）

b. na[**bi+tsɨtsɨ=gara=mai**（煤からも）

以上の例外的な9語を除くと、狩俣方言は2拍語でa型とb型、3拍語でb型とc型が対立する2型アクセント体系であると言うことができる[*6]。

3 語彙の類別からみた対立

前節では、狩俣方言で名詞に2拍の接語2つを並べた場合、2拍名詞でa型とb型、3$^+$拍名詞でb型とc型の対立する2型アクセントであることを示した。このことは、宮古祖語に措定される3つの型のうちの2つが1つに合流したことを示唆している。特に、2拍名詞でc型、3$^+$拍名詞でa型が欠けているので、もし型がそのまま語彙の類別に対応しているなら、拍数によって類の合流の仕方が異なる可能性がある。そこで、それぞれの型が、琉球祖語の類別（五十嵐 2018）とどう対応しているかを表3に示す。また、琉球祖語には対応が見られない語形も多くあるため、表4に、多良間方言の型（松森 2015）との対応も示す。ここで対応関係を問題にしているものは、琉球祖語もしくは多良間方言と語形が対応するもので、前者の合計は187語、後者の合計は238語となる。

表3 琉球祖語との対応

	a型 (平板)			b型 (2ndPW*)			c型 (1stPW*)		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
2拍	2	1	22	32	36	6	–	–	–
3$^+$拍	0	0	2	21	20	11	0	4	30

表4 多良間方言との対応

	a型 (平板)			b型 (2ndPW*)			c型 (1stPW*)		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
2拍	3	0	30	39	31	6	–	–	–
3$^+$拍	0	0	4	36	21	19	0	4	45

表3、表4では、用例数の集まるところに網掛けをした。網掛けを施していない例外的な分布は表3、表4でさほど変わらないが、網掛けをした用例数が表3よりも表4の方が多くなっており、狩俣方言はより一層多良間方言と対応しているのがわかる。網掛部分に注目すると、2拍名詞においても3$^+$拍名詞においてもA類とB類が合流し、C類と対立している。つまり、2拍名詞と3$^+$拍名詞で異なる類が合流しているのではなく、C類の型が2拍と3$^+$拍で分裂しているのである。

AB類とC類が対立しているとはいえ、3$^+$名詞のb型にはC類の語も一定数分布している。これは、形態音韻規則に伴うアクセント位置の移動に原因がある。狩俣方言には/a/に挟まれた/g/が脱落する(2)の形態音韻則があり（衣畑・林 2014 等）、これによって生じる長音 [aː] の後に下降が移動するのである。

(2) /g/脱落: g→ ∅/ a_a

本発表でアクセントの確認に用いてる=gara=maiという接語の連続が、語根末が/a/の名詞に続く場合、/g/脱落によって長音 [aː] が生じ、第1韻律語の次末拍にある下降が第2韻律語に移動する。結果、元来c型のものがb型と中和するのである。次の図4の左側は接語が

表5 多良間方言との対応: 改訂

	a型 (平板)			b型 (2ndPW*)			c型 (1stPW*)		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
2拍	3	0	32	39	31	4	–	–	–
3$^+$拍	0	0	4	36	21	2	0	4	60

[*5] 他の4語は、innaa（海 <in[海]+naa[中]）、infudzɨmja（クラゲ <in[海]+fudzi[?]+mja[接辞]）、jatsɨfusa（蓬 <jatsi[炎]+fusa[草]）、makugan（ヤシガニ <maku[?]+kan[蟹]）である。このうち前三者については前項がa型（平板）で発音されることを確認している（ただし狩俣でinのみで海を指すのは一般的でない）。makuganの前項は沖縄語の「乱暴者」を意味するmaku（『沖縄語辞典』）に由来するかと思われるが、狩俣方言ではこの語自体の存在が確認できていない。

[*6] 本稿では複合語によるアクセント対立の確認が、複合語になる一部の語彙に限られることから、単純名詞に接語を2つ並べた形でのアクセントの対立を検証した。しかし、複合語でも広い範囲の語でアクセントを確認する方法が近年セリック (2021) によって提案された。そこでの方法に倣って、3型アクセントが認められるかを検証する必要があるが、それは今後の課題にしたい。

=mai のみで第 1 韻律語に下降が見られる c 型の例、右側は/g/脱落によって b 型で実現する例である。また、図 5 のたまたま/g/脱落が適用されなかった例と、適用された例で、下降位置が異なることも確認されたい。

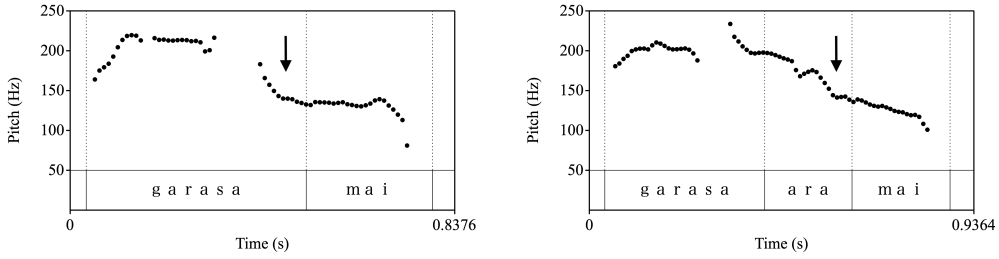


図 4　「烏も」（左）と「烏からも」（右）

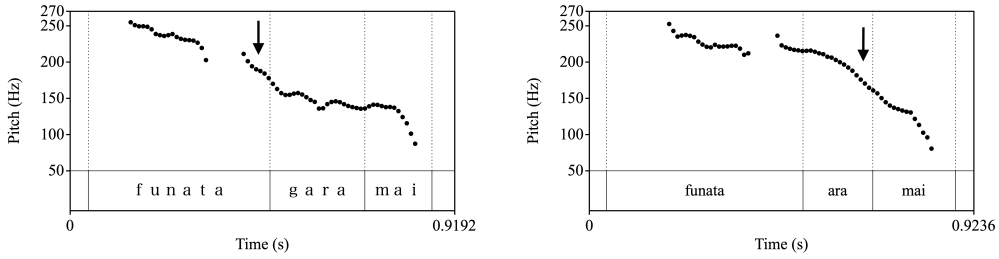


図 5　「蛙も」（左）と「蛙からも」（右）

このように第 1 韻律語と第 2 韻律語の境界に長音 [aː] が生じることによって下降位置が変わる例を c 型として分類すると、表 5 のようになり、b 型にはほぼ A 類と B 類のみが合流していることがわかる。

最後に、例外的に分布している語について、宮古諸方言におけるその所属を表 6 に示す[*7]。「池」間方言については仲間他 (2022)、「皆」愛方言についてはセリック (2021) を参照した。例えば 2 拍 a 型を見ると、狩俣方言で C 類が優勢であり、例外的である AB 類の 4 語が挙げてある。琉球祖語では A 類が faa と dusi、B 類が uja、多良間方言では A の faa、dusi、pisju が該当することが、それぞれ「琉祖」「多」の欄を見ることでわかる。これらのうち、uja は宮古祖語で所属を C に変更し、dusi も多良間方言と分かれた後に一旦は所属を変更した可能性があることが池間方言からわかる。pisju の「–」でデータがないことを意味し、琉祖の X は所属不明であることを表す。所属変更に関して特に顕著なのは、3+拍b 型と c 型で、全ての語が、宮古祖語から宮古本島祖語にかけて、所属を変更し、狩俣方言で見られる型として実現することを予測させる。

表 6　例外的分布が見られる語の所属

狩俣 実現	狩俣 優勢	語彙	琉祖	多	池	皆
2 拍 a 型	C	faa (子)	A	A	A	AB
		dusi(友)	A	A	C	AB
		pisju(旋毛)	–	A	–	–
		uja(親)	B	C	C	C
2 拍 b 型	AB	jadu(宿)	C	B	–	–
		kagi(陰)	C	C	C	C
		mai(前)	C	C	C	C
		muku(婿)	C	C	C	C
		sisi(肉)	B	C	B	AB
3+拍 a 型	特になし	katsiki(雲丹)	C	C	C	–
		gisiki(薄)	C	C	C	C
		makugan(椰子蟹)	–	C	–	C
		dzoofutsi(門)	X	C	–	C
3+拍 b 型	AB	sabani(刳舟)	C	A	C	AB
		zzaku(櫂)	X	C	B	AB
		nkadi(百足)	C	C	B	AB
3+拍 c 型	C	nnutsi(命)	B	B	C	C
		munui(言葉)	B	B	B	C
		toovva(台所)	B	C	–	C
		dzimami(落花生)	B	C	C	C
		ankaa(錨)	–	B	–	–
		funata(蛙)	–	B	C	–

[*7] なお、A、B、C 類は本来祖語における語彙の所属を表すが、ここでは個々の語彙の所属が変更されていくという観点から整理するため、各方言についても A、B、C という大文字記号を用いる。音調型の実現は狩俣方言の a 型と他の方言の a 型に共通性はあっても所属語彙には大きな違いがあることに注意されたい。

4　2 型への変化過程

個別的な語彙の所属変えを除くと、狩俣方言には、以下の 3 つの変化が起こったと想定される。

(3)　a. A 類の b 型 (2ndPW*) 化による B 類への合流
　　b. C 類 2 拍名詞における a 型化 (平板化)
　　c. C 類で韻律語境界に [aː] がある場合の b 型 (2ndPW*) 化 (AB 類との中和)

宮古諸方言から推定される宮古祖語において、A 類が a 型として実現していたとすれば (1 節: 表 1)、狩俣方言では A 類が b 型化して B 類との区別を失う (3-a) の変化が起きていることになる。この変化によって失われた a 型の音調へ、C 類 2 拍名詞が後に変化した。もし逆に、(3-b)C 類 2 拍名詞の平板化が (3-a)A 類の b 型化より先に起これば、C 類 2 拍が A 類と合流し、結果、2 拍名詞は AB 類のみならず、C 類にも区別がないはずである。しかし実際は 2 拍名詞で C 類は AB 類から区別されるので、変化は (3-a)>(3-b) の順で起こったと結論できる。では、(3-c) の変化はいつ起こったのか。この変化は C 類の全ての環境で起こったのではなく、韻律語境界に長音 [aː] が生じる場合のみに起こったので、合流とは無関係に起こってよいように思える。しかし、狩俣方言の音調実現を説明するには、(3-c) の変化は (3-a)(3-b) より先に起こったと考えるのが都合が良い。

そのこと見るために、まず C 類 2 拍名詞がなぜ a 型化 (平板化) したのかを考えてみよう。その際のポイントは、C 類の 3$^+$拍名詞 は平板化せず、2 拍名詞のみが (義務的に) 平板化したということである。この拍数による違いは、狩俣方言のアクセントが韻律語の次末拍からの下降として現れることと関係していると考えられる。つまり、3 拍名詞なら先頭から 2〜3 拍目にかけて下降が実現するが、2 拍名詞なら 1〜2 拍目にかけて下降しなければならない。ではなぜ 1〜2 拍目にかけての下降は避けられるのだろうか。狩俣方言ではしばしば韻律句 (＝文節) を示す上昇が句頭の 2 拍に観察される。図 2 や図 4 を参照されたい。この句頭の音調である %LH (あるいは 2 拍 1 音節の場合の %HH) が義務的ならば[*8]、第 1 韻律語の 2 拍に核 H*L を実現することができない。これを Initial-T とし、最適性理論 (Prince and Smolensky 2002) の制約序列を使って、C 類 2 拍名詞のアクセント核の実現を表 7 のように説明する。

表 7　C 類 2 拍名詞の平板化

/nabi^{C}=gara=mai, H*L/	Ini-T	Al-R	区別	Max-T
a. na]bi=gara=mai	*!			
b. nabi]=gara=mai		*!		
c. nabi=ga]ra=mai			*!	
☞ d. nabi=gara=mai				*

- Ini(tial)-T: 句頭を音調 (tone) によって示せ
- Al(ign)-R$_{(\omega,\text{H*L})}$: H*L を韻律語の右端に揃えよ (右端からも出てはいけない)
- 区別: 他の類とアクセントの実現を区別せよ
- Max-T: 入力にある音調 (tone) を実現せよ

句頭 2 拍で実現できなかったアクセント核の下降は、第 2 韻律語でもアクセントの区別のために避けられ、音調を実現する忠実性制約 (Max-T) に違反するものの、平板化した出力が勝者となる。

一方、この文法では、3$^+$拍名詞 の場合は、どの制約にも違反しない基底の形がそのまま出力される。たとえば C 類「gadza]n=gara=mai」という入力がどの有標性制約にも違反せず忠実な出力が得られることを確認されたい。では韻律語境界に長音 [aː] が生じる場合はどうだろうか。この場合、明らかに長音 [aː] の前での下降を忌避する制約があるため、そ

表 8　C 類 3$^+$拍名詞 で韻律語境界に [aː]: a 型化

/katana^{C}=gara=mai, H*L/	Ini-T	*]aa	Al-R	区別	Max-T
a. ka]tana=ara=mai	*!		*		
b. kata]na=ara=mai		*!			
c. katana]=a=mai			*!		
d. katana=a]ra=mai				*!	
☞ e. katana=ara=mai					*

[*8] セリック (2021: 6.2.1) では句頭に 1 拍分の高音調 %H を仮定することで、宮古語皆愛方言のアクセント核による下降位置が 1 拍分後ろにずれることを説明している。狩俣方言でも同様に句頭の音調を 1 拍分と考えることもできるが、句頭が低音調 %L であることもある。よって、共通部分を取ると 2 拍目が高く実現することが重要であり、句頭の音調は 2 拍分と考える。

れを*]aa として制約の序列に入れる[*9]。すると、表 8 のように、この制約序列では 2 拍名詞と同じく平板化した音調が出力として予測される。

しかし、実際には、韻律語境界に [aː] が生じる場合、C 類 3[+]拍名詞が平板化することはない。なぜ、（忠実性制約には違反するものの）どの有標性制約にも違反しない平板化した音調にならないのだろうか。その原因として、韻律境界に [aː] が生じた場合の下降の移動が、AB 類の合流以前に起こったと想定してみたい。その時代には、句頭の音調の制約 Initial-T は（少なくとも「区別」よりは）低く、A 類は平板（a 型）の音調であったと想定されるため、タブローは表 9 のようになる。すると、平板の出力はアクセントの実現を区別する制約に違反し、結果的に第 2 韻律語に核を実現する b 型の音調が予測される。ただし、この分析では、C 類 2 拍名詞の語末が/a/で終わる場合も、同様に b 型の出力が予測される。この予測は話者 K について正しいが、話者 N では当該の C 類 2 拍名詞も平板化（a 型化）する傾向が強い[*10]。これについては、現在のところ、/a/で終わらない C 類 2 拍名詞からの類推によって平板化しているとみなしておく。

表 9　C 類 3[+]拍名詞 で韻律語境界に [aː]: b 型化

/katana[C]=gara=mai, H*L/	*]aa	AL-R	区別	MAX-T	INI-T
a. ka]tana=ara=mai		*!			*
b. kata]na=ara=mai	*!				
c. katana]=a=mai		*!			
☞ d. katana=a]ra=mai			*		
e. katana=ara=mai			*	*!	

5　まとめ

本発表では、宮古語狩俣方言の名詞に 2 拍の接語を 2 つ後続させた場合の音調を調査し、2 拍名詞でアクセント核がない a 型と第 2 韻律語にアクセント核がある b 型が対立し、3 拍以上の名詞で第 2 韻律語にアクセント核がある b 型と第 1 韻律語にアクセント核がある c 型が対立していること、およびそれ以上の対立は認められないことを示した。これを所属語彙の観点からみると、狩俣方言では A 類と B 類が b 型で合流し、C 類の 2 拍名詞に音調の a 型化（平板化）が起こっていると言える。さらに、C 類で韻律語境界に長音 [aː] が生じる場合には b 型化し、AB 類と中和する。長音 [aː] による C 類の b 型化は、A 類と B 類が区別される 3 型アクセント体系を想定すると説明がしやすく、遠くない過去に狩俣方言が 3 型であったことを示唆している。

参考文献

Matsumori, Akiko (2019) “Prosodic unit, recursive structure, and nature of accent in Miyako Ryukyuan,” *Linguistic Review*, Vol. 36, No. 1, pp. 51–83.

Prince, Alan S. and Paul Smolensky (2002) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*: Rutgers University, enhanced version of record (evor) edition.

五十嵐陽介 (2016)「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」,『言語研究』, 第 150 巻, 33–57 頁, 9 月.

——— (2018)「日琉語類別語彙（2018 年 8 月 2 日版）」,（初版については, 五十嵐陽介（2016）「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』, 233-238 参照）, 8 月.

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラールトマ・久保智之 (2012)「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」,『音声研究』, 第 16 巻, 第 1 号, 134–148 頁, 4 月.

衣畑智秀・林由華 (2014)「琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法」,『琉球の方言』, 第 38 巻, 17–49 頁.

新田哲夫 (2023)「動的音韻解釈からみた南琉球宮古諸方言の三型アクセント体系」, 日本言語学会第 167 回大会予稿集.

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967)『琉球先島方言の総合的研究』, 明治書院.

松森晶子 (2010)「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」, 上野善道（編）『日本語研究の 12 章』, 第 12 章, 490–503 頁, 明治書院.

——— (2012)「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」,『音声研究』, 第 16 巻, 第 1 号, 30–40 頁.

——— (2013)「宮古島における 3 型アクセント体系の発見—与那覇方言の場合」,『国立国語研究所論集』, 第 6 巻, 67–92 頁.

——— (2015)「南琉球の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察」,『日本女子大学紀要 文学部』, 第 64 巻, 55–92 頁.

セリックケナン (2020)「南琉球宮古語史」, 博士論文, 京都大学大学院文学研究科, 京都.

——— (2021)「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」,『言語記述論集』, 第 13 巻, 215–290 頁.

仲間博之・田窪行則・岩崎勝一・五十嵐陽介・中川奈津子 (2022)『池間方言辞典』, 国立国語研究所 言語変異研究領域.

[*9] 長音 [aː] の前の下降を避けているのであって、長音 [aː] の後に下降が好まれるわけではない。たとえば C 類 kaa]ra（瓦）では基底ですでに長母音/aa/の後に下降があるが、これに「からも」を付けると kaara=a]ra=mai のように下降がやはり移動する。長音の後を好むのなら、移動は必要ないはずである。

[*10] 2 拍名詞 120 語のうち、/a/で終わり、かつ=mai で a 型（平板）が確認できるものに、=gara=mai が続くものを見ると、話者 K では 11 例全てが b 型になるのに対し、話者 N で b 型になるのは 11 例中 3 例で、残りは平板（a 型）で発話される。

ノダに後接するヨネの用法
―ノダとの組み合わせによって変化する終助詞の意味―

安藤清香（あんどうさやか）・幸松英恵（ゆきまつはなえ）（東京外国語大学）

1.　はじめに

本研究では文末に現れるノダにヨネが後接したノダヨネ文[1]（以下ノデスヨネ文も含めた形として用いる）を取り上げ、ノダと組み合わせることでヨネ単独の用法から変化が起きることを明らかにし、「説明のモダリティ形式」と言われるノダと終助詞を組み合わせた意味が各形式の意味の足し算では導かれなくなる条件についての統一的な説明を目指す[2]。

2.　先行研究

2.1.　ヨネについて

ヨネについての先行研究は数多く見られるが、ここでは蓮沼(1995)と日本語記述文法研究会(2003)を取り上げる。蓮沼(1995:397)では、(1)のように自分の知識が不確かな場合に聞き手に確認する「相互了解の形成確認」がヨネ固有の働きであり、聞き手も共通認識を持つことが可能な場合は(2)のような「共通認識の喚起」へと意味が派生するとしている。

(1)　私、ゆうべ、眼鏡ここに置いたよね。(蓮沼 1995:397)
(2)　同級生に加藤さんっていたよね。背の高い男の子。(蓮沼 1995:393)

日本語記述文法研究会(2003:266)は、ヨネの基本的意味を「聞き手にも受け入れられるものとして話し手の認識を聞き手に示すという伝達機能をもっている」として、以下の 2 つの用法に分けている。(3)のように「話し手の認識を示すもの」が第 1 の用法であり、(4)のように「聞き手に確認を求めるもの」が第 2 の用法である。

(3)　A「学生時代は楽しかったよね」
　　B「充実していたよね」(日本語記述文法研究会編 2003:266)
(4)　A「佐藤さんはたしか今年就職したんだよね？」
　　B「ええ。貿易関係の仕事だったと思います」(日本語記述文法研究会編 2003:267)

日本語記述文法研究会(2003)による第 1 の用法は蓮沼(1995)のいう「共通認識の喚起」であり、第 2 の用法が蓮沼の(1995)のいう「相互了解の形成確認」に当たると言える[3]。

---

[1] コピュラのダ・デスを伴わないノヨネは今回の研究対象としなかった。(いわゆる)「ノダ文」においてコピュラを必須成分とするかの解釈は研究者ごとに異なるという点、「あのさ、明日、友人のうちでスキヤキパーティがあるのよね」(林真理子 1986『マリコ・その愛』)のようにノヨネの使用は年齢と性別が限定されるという点から、本研究ではひとまず年齢・性別を問わず使用される、ノダヨネ・ノデスヨネを研究対象とする。

[2] 本研究では文における使われ方という意味で「用法」を用い、その形式自体の持つ「意味」と区別する。先行研究を紹介する際には、先行研究における用語法にしたがう。

[3] 蓮沼(1995)のように確認要求機能を中心に認める立場としては、他に宮崎(2000)もある。対して認識の共有性を表明する機能を中心に認める立場として野田(1993)や伊豆原(2003)が挙げられる。

2.2. ノダヨネについて

上出の日本語記述文法研究会(2003:267)では、話し手の認識を示すという第 1 の用法について、話し手の個人的な知識や考えを表す文に用いる場合、(5)のようにヨネ単独では用いることが難しく、(6)のようにノダを添加することによって「聞き手に対して説明しようとする態度を明示」する必要があると述べている。

(5) A「海外旅行中に財布を落としたそうですが、大丈夫でしたか？」
B「？あのときは困りましたよね」(日本語記述文法研究会 2003:267)
(6) A「海外旅行中に財布を落としたそうですが、大丈夫でしたか？」
B「あのときは困ったんですよね」(日本語記述文法研究会 2003:267)

日本語記述文法研究会(2003)における以上の指摘は、ノダヨネ文におけるヨネの意味が、ヨネ単独で用いられる意味からずれを起こしていることを示唆している。ヨネについて記述をする際に、特定の意味についてはノダを伴う例文を多く挙げている先行研究もあるが[4]、ノダヨネ文におけるヨネの意味を、ヨネ単体の分析をもとに論じられてきた意味で語るのには困難があると思われる。こうした点を踏まえて、本研究ではノダヨネ文を収集し、その用法を分析することによって、説明のモダリティと組み合わさったときの終助詞の意味にどのような変化が起こるのかを明らかにする。

3. 用例の収集

ノダヨネ文を調査するため、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を用いてノダヨネ、ノデスヨネを検索し、それぞれの出現件数を確認した[5]。その結果、ノダヨネ 1,991 件、ノデスヨネ 3,671 件を得た。この 5,662 件を対象とし、それぞれの文の意味を検討した。ちなみに同資料でヨネ文は 27,150 件見られるので、ノダヨネ文はヨネ文の 20.9%を占めることが分かった。

4. ノダヨネ文の二種の用法と、ヨネ単独での用法との違い

収集したノダヨネ文を分析すると、大きく二つの用法に分類できる。一つは(7)のように話し手の知識や経験、評価や感情などを聞き手に伝達する文で、ここでは「事実伝達のノダヨネ」と呼ぶ。もう一つは(8)のように聞き手に対して命題の確認を要求する文で、「事実確認のノダヨネ」と呼ぶ。

(7) あたしの名前は、胡桃沢塁。難しい字でしょ？『くるみざわるい』って読むの。変な名前、ってよくいわれる**んだよね**。なんで、『塁』なんて名前がつけられたかっていうと。少し、長くなるけど、聞いてね。(西条せつな『好きだから、負けない』)

[4] 例えば野田(1993)ではヨネが「一致型」の想定を表すとし、ノダ文にヨネが付加されることに言及している。また伊豆原(2003)では「よね I 類」と分類し 7 例挙げているうち 5 例がノダヨネ文であるが、ノダと共起していることに言及がなく「よね I 類」にどの程度ノダの機能が影響しているのか不明である。
[5] ヨネは、キーを「語彙素読みを「ヨ」」、後方共起条件を「キーから 1 語、語彙素読みが「ネ」」に指定し検索した。ノデスヨネとノダヨネについては、ヨネの検索条件に対し前方共起条件として「キーから 2 語、語彙素読みが「ノ」」と「キーから 1 語、語彙素読みが「デス」」、もしくは「キーから 2 語、語彙素読みが「ノ」」と「キーから 1 語、語彙素読みが「ダ」」を指定した。

(8)　「おかあさん、広島にいらっしゃる**んだよね**？」
「はい。妹といっしょに…」(下川博『恋のピエロ』)

分類に迷う中間例を除き、「事実伝達のノダヨネ」と判定できる文が4,561件、「事実確認のノダヨネ」と判定できる文が1,059件見られた。この２つの用法のうちヨネ単独で用いる際の意味から変化が起きるのは、ノダヨネ文の約8割を占める「事実伝達のノダヨネ」の方であった。先行研究において、確認要求を表さない方のヨネは「共通認識の喚起」(蓮沼1995)や「話し手の認識を表す」(日本語記述文法研究会2003)と説明されてきた。

(9)　蓮沼(1995)：共通認識の喚起に用いられるヨネ
「同級生に加藤さんっていたよね。背の高い男の子」(前出例(2))
(10) 日本語記述文法研究会(2003)：話し手の認識を表す（第１の用法）ヨネ
「学生時代は楽しかったよね」(前出例(3))

(9)(10)の話し手にとって「同級生の加藤さん」や「学生時代」に関する命題は、聞き手とその認識を共有することが期待できる状態にある。一方、(7)の「（自分の名前は）変な名前、ってよくいわれるんだよね」の話し手は、聞き手が知らないことであろうという想定のもと自身の経験を披瀝しており、このときヨネは、聞き手に共有してもらえる内容として命題を提示する（共通認識を喚起する）という意味は持っていないと考えられる。

以下に「事実伝達のノダヨネ」の例をさらに挙げる。(11)は前出(7)と同様、話し手の経験を披瀝しており、(12)や(13)は話し手の評価や感情を披瀝する際にノダヨネを用いている。

(11)　作品展が終っても、共同制作をじっと眺めていたり、「これ、ぼくがやった**んだよね**。」と友達と話している子どもがいる。(吉田きみ子『絵に見る子どものサイン』)
(12)「大盛りにしてくれる」　簡単にお客様はよく、こうおっしゃります―　しかしですね、コレが困る**んですよね**、はっきり申しまして大盛りはできません。(横田克治『ファミリーレストラン(裏)マニュアル』)
(13) なかにし:役者人生五十年と伺いましたが、大変なことですね。
仲代:気がついたら、そんなに経っていたという感じですね。考えてみますと実に危険な商売を選んだと思う**んですよね**。何という危険な賭けをしたのかと、今思うとゾッとします（笑)。(なかにし礼/仲代達矢/横尾忠則『人生の黄金律』)

「事実伝達のノダヨネ」に対して、前出(8)のような「事実確認のノダヨネ」で用いられるヨネは、先に紹介した蓮沼(1995)のいう「相互了解の形成確認」、日本語記述文法研究会(2003)のいう「聞き手に確認を求める」という意味を持ち、ヨネ単独の意味と同じであると考えられる。

以上、ノダヨネ文には話し手の知識や経験、評価や感情などを伝える「事実伝達のノダヨネ」と、話し手が聞き手に対して命題の確認を要求する「事実確認のノダヨネ」という２つの用法が見られること、さらに「事実伝達のノダヨネ」におけるヨネは、ヨネ単独で用いられる際の意味と同一ではないことが分かった。次節ではこの現象が何を意味するのかについてノダ文の側から考察する。

5. ノダ文の種類から見る「事実伝達のノダヨネ」とは

（いわゆる）「ノダ文」とは、典型的には先行談話に与えられている事態に対し、その事態がなぜ起こったのか、その事態が何を意味するのかといった〈事情〉を説明する文であると言える。例として(14)(15)はどちらも話し手が当該の知識をなぜ持っているのかについて、その〈事情〉を説明しようとノダ文を発話している。以下、所与の事態（=説明される内容）に波線を付す。

(14)「うちの親父を知っているんすか」
「知ってる。俺は最初に札幌の円山署にいた**んだ**。あんたの親父はあそこで刑事してただろう」（桐野夏生『柔らかな頬』）

(15)「ううん、いいんです。それより、そのことをどうして知っているんですか？」
「ゆきのさんが言っていた**んです**」（吉本ばなな『哀しい予感』）

一方、ノダ文には〈事情〉を表さない文もある。(16)(17)はどちらも、自身の引っ越しの予定や習慣について、聞き手が知らない事実を披瀝するというニュアンスをもって発話されている。このノダを幸松(2023)に倣い、「披瀝のノダ」と呼ぶ[6]。

(16) 人通りの少ない、静かな道を歩きながら、昌也が言った。
「今度、アパートを移ろうかと思っている**んだ**」（赤川次郎『女社長に乾杯！』）

(17) 二十分ほど、人気のない道を歩いて、二人はやっと浜辺に出た。
「この辺で、僕はよく泳ぐ**んです**」（曽野綾子『太郎物語』）

本研究で収集したノダヨネ文を分析した結果、「事実伝達のノダヨネ」の殆どは、先行発話に説明すべき〈事情〉を持たず、話し手の知識や経験、評価や感情などを披瀝するノダ文であった。「事実伝達のノダヨネ」が典型的には「披瀝のノダ」であるということ、この用法の場合にヨネの意味に変化が起きるということから何が言えるのか、次節ではさらに考察を進める。

6. 説明のモダリティと終助詞

「説明のモダリティ」といわれるノダが先行談話で提示された事態の〈事情〉を表すことができるのは、ノダが〈準体助詞ノ＋断定辞ダ〉という組成を持ち、《主題―解説構造》を底に持つ名詞文に準ずる文になっているという点にあると考えられる。ところが「披瀝のノダ」と呼ばれるノダは、先行事態に対する〈事情〉としてその命題を関連づけているのではなく、「聞き手に披瀝する」という伝達的態度を表す機能が主になっている。このときのノダは、ヨネの「話し手の認識を聞き手に示す」というはたらきと重なるため、(7)(11)(12)(13)で挙げた「事実伝達のノダヨネ」の場合、文からヨネを省略してしまっても文の用法自体には変化がない。

これはヨネに限って見られる現象ではなく、日本語記述文法研究会(2003)では、ノダに後接した際、付加の必要性が低くなる終助詞ヨとネの用法について記述している。まず、日本語記述文法研究会(2003:242-243)ではヨについて、「聞き手に対して状況説明をする「のだ」とともに用

[6] このタイプのノダについて、田野村(1990:6)は「血液型は何型ですか？―わたしはＡＢ型な**んです**」といった例を挙げ、ノダには先行事態が存在せず説明すべき事柄が具体性を失ったことについても述べる機能があることを認めている。幸松(2020)では、こうしたノダ文を「事情を表さないノダ」として、なぜ現代語において〈事情〉を表す文と共存しているのかを近世期の資料から明らかにしようとしている。

いられることがよくある」と述べて、「聞き手に対する説明を行う「のだ」には、「よ」の機能と重なるところがある。そのため、このような例では「よ」があってもなくてもそれほど大きな違いがないことが多い」としている。

(18) A「あれ？こんなところでどうしたんですか？」
B「実家がこの近所なんですよ」(日本語記述文法研究会 2003:242)

さらに日本語記述文法研究会（2003:259-260）では「話し手が複数の文を続けて発話する場合に、重要な情報を伝える文の前提として、相対的に軽い情報を「のだ」によって表す文に「ね」が付加される」と述べ「この用法では、「ね」があってもなくても、意味にはそれほど大きな違いが出ない」としている。

(19) 昨日、デパートに買い物に行ったんですね。そうしたら、中学校時代の先生とばったり会って、少し立ち話をしたんですよ。(日本語記述文法研究会 2003:260)

このように日本語記述文法研究会（2003）では、ヨやネの有無によって用法の変化が出ないノダ文について、それぞれ「聞き手に対して状況説明をする「のだ」」や「相対的に軽い情報を「のだ」によって表す」文であると説明をしているが、本研究では、(18)(19)のノダ文は「事実伝達のノダヨネ」と同様に、話し手の知識や経験を述べる「披瀝のノダ」であり、先行談話で提示された事態について〈事情〉を説明している文ではないと考える。披瀝のニュアンスをもって聞き手に提示するという伝達的態度を表すためにノダが使用されるとき、そのノダはもっぱら終助詞的な機能を担う形式になっていると言える[7]。この終助詞的なノダにさらに終助詞が後接する場合に限り、当該の終助詞が単独で用いられる場合からずれを起こしたり、その有無が文の用法に変化を与えなくなったりするという現象が見られるのではないかと考える[8]。

こうして「事実伝達のノダヨネ」のヨネは、ヨネ単独で記述されていた「共通認識の喚起」といった意味は持たず、「聞き手への提示」という意味では「披瀝のノダ」と重なりを持つことを述べた。その一方で、こうしたヨネは、「披瀝のノダ」に後接することによって、その一方的な披瀝性を和らげようとする効果を持つのではないのではないだろうか。以下に示すようなインタビューや対談において、人によっては高頻度でノダヨネ文を用いている。

(20) 橋田:(略)ところで、お子さんは欲しくなかった？うちはいっしょうけんめいがんばったけど、できなかった。
吉永:わたしのところは逆だった**んですよね**。(橋田寿賀子『橋田寿賀子と素敵な 24 人』)

特に(21)のように披瀝する内容が、聞き手の意見に反対する内容の表明になってしまうような場合、ヨネを添加することで語気を和らげる効果が際立つと言える。

---

[7] 幸松（2020,2023)では、近世期資料を用いて調査した結果、そもそも現在の「披瀝のノダ」は準体助詞文としてのノダではなく終助詞文としてのノサ由来なのではないかという可能性を指摘している。
[8] 野田(2002:234)ではノダを「対人的「のだ」」と「対事的「のだ」」に分類し、「対人的「のだ」」は聞き手に情報を提示する性質を持っているため、ヨ、ゾ、ゼなどの終助詞の後接が自然であると指摘している(同：276)。さらに「対人的「のだ」」を、事情や意味として提示する「関係づけ」(本研究のいう〈事情〉を表すノダ)、そうではない「非関係づけ」(本研究の「披瀝のノダ」も含む）に下位分類しているが、この違いが終助詞との共起においてどのような違いをもたらすかについては特に触れられていない。

(21) 子どもが赤ちゃんのころ、仕事を放り出して帰るのが辛かったと海渡さんはおっしゃいましたが、仕事を持っている女性も同じな**んですよね**。(佐藤洋子/海渡雄一『男が語る－家族・家庭』)

ヨネが「披瀝性の緩和」とでも言える効果を持つことから、話し手の知識や経験などを深刻に披瀝しなければならないような場面ではヨネを用いることが軽々しい印象を与える場合もある。例えば(22)は非文とまでは言えないものの、内容の重さからはヨネの使用が不自然である。

(22) よく聞いてください。実は、この病気に対する特効薬はない**んです**(?よね)。(作例)

7. まとめ

本研究ではノダにヨネが後接するノダヨネ文を収集して分析を行なった。その結果、ノダヨネ文には「事実伝達」と「事実確認」という2つの用法が見られた。前者がノダヨネ文の大多数を占めており、この用法においてヨネは単独で用いられる際に指摘されていた「共通認識の喚起」といった意味から変化を起こしていた。ノダ文の種類から見ると、「事実伝達」のノダヨネ文は話し手の知識や経験を聞き手に披瀝する「披瀝のノダ」であり、「聞き手への提示」という点でノダとヨネの意味が重なりを持つ。このため「事実伝達」におけるノダヨネのヨネは省いても文の容認度に大きな変化を与えないこと、この場合のヨネは、ノダによる披瀝性を和らげるために用いられているのではないかと思われることを指摘した。先行研究における指摘と照らし合わせて考えると、ノダと終助詞との組み合わせにおいては、本研究における「事実伝達のノダヨネ」がそうであるように、当該のノダが伝達的機能のために用いられている場合に、終助詞が本来の意味から変化を起こすのではないかという仮説を提示した。

「事実伝達のノダヨネ」は丁寧体のノデスヨネの使用が多いが、今回はノダヨネとノデスヨネの違いについては触れることができなかった。さらに、「事実確認のノダヨネ」については全く言及できなかった。次の機会に論じたい。

資料

「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」(検索ツール「中納言」使用)

引用文献

伊豆原英子(2003)「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」愛知学院大学教養教育研究会編『愛知学院大学論叢』51(2), pp.1-15
田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉書院(復刊　和泉書院 2002 年)
日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法4』くろしお出版
野田恵子(1993)「終助詞「ね」と「よ」の機能:「よね」と重なる場合」『言語文化と日本語教育』6, pp.10-21, お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
野田春美(2002)「第7章 説明のモダリティ」「第8章 終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃著『新日本語文法選書4 モダリティ』pp.230-288, くろしお出版
蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄編『複文の研究(下)』pp.389-419, くろしお出版
宮崎和人(2000)「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106 , pp.7-16, 日本語教育学会
幸松英恵(2020)「事情を表さないノダはどこから来たのか―近世後期資料に見るノダ系表現の様相―」『東京外国語大学国際日本学研究』プレ創刊号, pp.162-178
幸松英恵(2023)「ノダ文の通時的変遷―「事情を表さないノダ」を中心に―」『東京外国語大学国際日本学研究』4 号, pp.92-109

近世前期上方語の行為要求表現と話し手の階層

手塚 美希（東北大学学生）

1　はじめに

近世前期上方語の行為要求表現は、男女の使用形式が異なることが指摘されている。この男女差について矢島正浩（2020）は、男性が主に用いる「~たもる」「~しゃる」、女性が主に用いる「~んす」のように、「尊敬語を命令形で用いる頻度が高い表現に性差が現れている一面がある」と指摘する。

(1) 恨みもつらみも許してたも。（⑤重井筒 130, 4）　〈徳兵衛（紺屋の入り婿, 夫）→お辰（妻）〉[1]

しかし「~たも」の使用を見てみると、主に男性が用いるといっても、(1) の話し手が紺屋の入り婿であるように、町人による使用は見られる一方で、たとえば武士による使用は見られない。行為要求表現は、男女以外の階層によっても使用形式が異なるのではないだろうか。

(2) 庄助は提灯持つて、女房共を迎ひに行け。（⑤重井筒 115, 9）〈徳兵衛（紺屋の入り婿）→庄助（下人）〉

そして、同じ話し手であっても、(1) は「~たも」、(2) は「行く」の命令形が用いられている。では、近世前期上方語の行為要求表現は、どのような話し手がどのように使い分けているのだろうか。

そこで本発表は、近世前期上方語の行為要求表現について、①どのような話し手の階層が認められるのか、②各行為要求表現形式はそれぞれどのような働きをもつのか、③どのような話し手がどのように形式を使い分けているのかを明らかにする。

2　先行研究

さきに見たような行為要求表現形式の使い分けには、待遇的側面がかかわると思われる。この面については山崎久之（2004）が、近世前期上方語の待遇表現には、男性語に 5 段階、女性語に 6 段階の形式の使い分けがあることを示している。その中で行為要求表現についても扱っているが、そのうちの動詞・助動詞を検討するにとどまる。また、たとえば「~られよ」が武士言葉に特有であること等も指摘されている（p.503）が、行為要求表現形式の使い分けが十分明らかにされているとは言い難い。

近世前期上方語の行為要求表現について、森勇太（2016）は尊敬語命令形と受益表現命令形を対照している。近世前期上方語では、尊敬語命令形がひろい用法で使用されるのに対し、受益表現命令形は「依頼」を中心に使用されることが示されている（pp.109-111）。しかし、尊敬語命令形と受益表現命令形を対象とすることもあり、行為要求表現形式の体系的な使い分けは十分明らかにされていない。

3　調査方法および行為要求表現の定義

本発表で近世前期上方語の行為要求表現を検討するにあたっては、近松世話浄瑠璃の中で、文体の性質が同様と見なされる『曾根崎心中』から『薩摩歌』までの 11 曲[2]を対象に用例収集を行う[3]。

本発表は、安達太郎（2002：42-77）、日本語記述文法研究会（2003：66-81）、益岡隆志・田窪行則（1992：117-127）、J・R・サール（2006：21-24）を参考に、行為要求表現を (3) のように定義する。

(3) 行為要求表現とは、次の①～⑤を満たす場合に用いられる言語表現である。
- ① 受け答えのできる聞き手が、話し手が認識している範囲に存在している。
- ② 話し手からの働きかけがあった時点で、行為はまだされていない。
- ③ 聞き手は、話し手からの働きかけがなければ行為をすることが確実でない。
- ④ 話し手は聞き手に、行為をさせることを意図している。
- ⑤ 話し手は聞き手が、あるいは聞き手と、行為をすることを望んでいる。

---

[1] テキストの引用には『近松全集』（岩波書店）を利用する。ただし用例の読みやすさのために文字・表記や句読点等をあらためた箇所がある。（ ）内は『近松全集』において用例のある（巻・作品名の略称・頁, 行）を指す。

[2] これら 11 曲と同様の文体とされる『卯月潤色』を対象としていないが、それは上之巻が『卯月紅葉』下之巻とほぼ一致することや、中之巻の主要登場人物のお亀は霊で、通常の話し手あるいは聞き手として扱い難いことによる。

[3] 本発表では、回想や伝言のために引用されたもの、ことわざや歌、言葉遊びの類は、用例収集の対象に含まない。

この定義に基き収集された行為要求表現（860 例）には、**表 1** のような形式が見られる[4]。その中には、さきの（1）（2）のように動詞を用いる形式や、（4）のように動詞を用いない形式もある。

（4）まづ舅殿へ参らふぞ。それ／＼袴。（④堀川 519, 9）　〈彦九郎（夫, 鳥取藩士）→お種（妻）〉

4　使用形式の違いと話し手の階層

さて、近世前期上方語の行為要求表現には、どのような話し手の階層が認められるのか。これについて、**表 1** に示す各行為要求表現形式の使用の有無から、次の 6 つの階層が認められると思われる。

まず遊女について、遊女や遣手は、「命令形（e, e 二回, i, yo）」「連用形や」を使用していない。

（5）早ふ出ていね。（⑥薩摩 700, 11）　〈おまん（琉球屋の娘）→おらん（尼）〉

（6）それを是に脱いで行きや。（④堀川 538, 9）　〈彦九郎（鳥取藩士）→托鉢の僧侶〉

（5）と（6）は、「命令形（e, e 二回, i, yo）」と「連用形や」の例であり、前者 173 例、後者 85 例と多くの用例が見られる。しかし、その用例数の多さにもかかわらず、（5）の話し手が町人、（6）の話し手が武士であるように、遊女には使用が見られない。この点で、遊女という階層が認められる。

次に武士は、34 例と比較的多く見られる「~たも」を使用していない。

（7）別るゝはなをつらし。〔略〕許してたも、（⑤朔日 487, 7）〈平兵衛（鍛冶屋の弟子）→小かん（恋人）〉

（7）の話し手は鍛冶屋の弟子で、町人である。比較的多い「~たも」だが、用いるのは町人や遊女で、武士の使用は見られない。この点で、武士という階層が認められる。

また町人でも、亭主・親方・法印と、百姓を含むその他の町人は使用形式が異なる。

（8）助けて下され侍衆と、（⑤丹波 214, 8）
〈滋野井（姫の乳母）→侍衆〉

（9）早ふ出てくれと（⑤丹波 184, 6）
〈滋野井（姫の乳母, 母）→三吉（息子）〉

（8）「~くだされ」や（9）「~くれ」の話し手は姫の乳母で、町人である。両形式は合わせて 32 例と比較的多いが、これらの使用者を見ると、亭主・親方・法印という身分的に上層にある町人の使用は見られない。つまり「~くだされ」「~くれ」の使用の有無から、上層町人と中下層町人が区別される。

そして従来の指摘の通り、（10）のように、女性は男性と異なり「~んせ」を使用する[5]。

（10）よしか、おかしやんせ（④紅葉 467, 3）
〈町内の娘友達どうし〉

したがって町人について、上層町人男性・女性、中下層町人男性・女性という階層が認められる。

以上から近世前期上方語の行為要求表現には、上層町人男性・女性、中下層町人男性・

表 1　話し手の階層と使用形式

行為要求表現形式		話し手						形式の用例数
		上層町人		中下層町人		武士	遊女	
		男性	女性	男性	女性			
命令形	命令形（e）	33	1	25	3	25	0	96
	命令形（e二回）	3	1	3	1	1	0	10
	命令形（i）	7	4	9	4	0	0	24
	命令形（yo）	10	*0	15	7	10	0	43
連用形や		17	4	19	36	2	0	85
連用形や＋や		0	0	2	9	0	0	11
命令形（e）（敬語）	ナサレマセ系	3	*0	1	5	0	1	10
	ナサレ系	4	0	8	2	1	0	15
	シャレ系	1	1	7	8	0	0	18
~んせ	~んせ	0	1	0	8	1 ※	5	17
	~しゃんせ	0	1	0	10	1 ※	1	13
	~さんせ	0	0	0	4	0	6	10
命令形（おじゃ）		3	2	1	3	0	1	10
お＋連用形		3	1	3	3	0	0	11
~くだされ		0	0	9	8	0	2	20
~くれ		0	0	9	2	0	0	12
~たも		5	2	8	12	0	6	34
~くださんせ		0	0	0	18	0	15	33
名詞＋「頼む」の類（敬語）		1	*0	5	5	4	0	16
~たい		2	*0	5	6	0	3	16
~う -命令		3	1	3	1	2	0	10
~ん -勧誘		0	0	7	2	4	0	15
名詞		2	*0	2	5	1	1	11
~へ		4	1	3	3	2	0	14
各階層の用例数		101	20	144	165	52	41	523/554

・異形態と見なされる形式の使用が見られるため、実際はその形式も用いられていたと考えられるものには、「0」に下線を付し、枠内は白色で示した。
・用例数の少なさをふまえ、他階層の使用状況から、上層町人女性も用いる蓋然性が高いと判断されるものには、「0」に「*」を付し、枠内は白色で示した。
・「※」の付いたものは、一般的な使用ではないと考えられるものを指す。
・話し手の階層が確定できない場合などがあるため、それぞれの階層による用例数の合計が形式の用例数と合致しないことがある。

[4] **表 1** には 10 例以上使用の見られる形式を示しており、本発表ではこれらを分析の対象とする。
[5] 男性による「~んせ」（2 例）は、それまで女中のふりをしていた聞き手を煽る意図から用いられるようなものであり、一般的な使用とは見なされない。

女性、武士、遊女という 6 つの話し手の階層があると分かる[6]。

5　行為要求表現形式の働き

では、各行為要求表現形式はどのような働きをもつか。その使い分けから各形式の働きを検討する。

5.1　待遇度

（11）御機嫌直しにお目にかけなされませ。（⑤丹波 172, 9）　〈わかな（仲居）→滋野井（姫の乳母）〉
（12）屋敷方廻つて、さうして内へ往にや。（④曾根崎 10, 11-12）　〈徳兵衛（手代）→長蔵（丁稚）〉

（11）の「お~なされませ」という「命令形（e）（敬語）」は仲居から乳母へ、（12）の「連用形や」は手代から丁稚へ用いられている。聞き手はそれぞれ身分から見て、乳母は仲居よりも上位に、丁稚は手代よりも下位にあると考えられる。これは、身分上の下位者から上位者へは「命令形（e）（敬語）」が、上位者から下位者へは「連用形や」が使用されることを示している。

（13）少とろ／＼となされませ。（⑥薩摩 688, 2）　〈おまん（琉球屋の娘）→新兵衛（父, 琉球屋の主人）〉
（14）なふあれを見や。（⑤淀鯉 526, 1）　〈新七（夫, 元江戸屋の手代）→お半（妻）〉

（13）では娘から父へ「~なされませ」という「命令形（e）（敬語）」が、（14）では夫から妻へ「連用形や」が用いられている。父は娘よりも上位に、妻は夫よりも下位にあると考えられる。これは、家族内における上下関係と捉えられる。このように家族内でも、上下での使い分けが見られる。

（15）先おあがりなされませ。（⑤重井筒 141, 8）　〈重井筒屋の内儀→徳兵衛（客, 紺屋の入り婿）〉
（16）イヤ酒はおきや、飲んできた。（④曾根崎 26, 10）　〈九平次（客, 手代の遊び仲間）→店の者〉

（15）では店の内儀から客へ「お~なされませ」という「命令形（e）（敬語）」が、（16）では客から店の者へ「連用形や」が用いられている。立場から見て、客は店の内儀よりも上位に、店の者は客よりも下位にあり、これは立場上においても、上下での使い分けがあることを示している。

このように身分・家族・立場の関係から見て、「命令形（e）（敬語）」は上位者へ、「連用形や」は下位者へ主に使用される。したがってこれは、聞き手との上下関係による使い分けと言える[7]。

次に、聞き手への接し方による使い分けが見られる。「命令形（e）」と「連用形や」は、いずれも下位者へ主に使用される形式であるが、（17）と（18）のように使い分けられている。

（17）はや戻せ。〔略〕我らが家職にきづがつく。（⑤朔日 469, 1）〈利右衛門（親方）→平兵衛（弟子）〉
（18）屋敷方廻つて、さうして内へ往にや。（④曾根崎 10, 11-12）　〈徳兵衛（手代）→長蔵（丁稚）〉

「命令形（e）」を用いる（17）では、話し手は「我らが家職にきづがつく」と聞き手を叱っているのに対し、「連用形や」を用いる（18）ではそのようなことはない。このように、「命令形（e）」は聞き手に厳しく接する場合に、「連用形や」は、聞き手に優しいか厳しいかという点で中立的に接する場合に主に使用される。したがってこれは、聞き手への接し方による使い分けと言える[8]。

以上のような、聞き手との上下関係や聞き手への接し方は、聞き手に対する待遇にかかわる。このことから、これを「待遇度」とすると、各行為要求表現形式は待遇度を示す働きをもつと言える。

5.2　求め度

（19）助けて下され侍衆と、わつとひれ伏し、声を上、人の推量、思はくも、忘れ、はてゝぞ、泣ゐたり。（⑤丹波 214, 8）　〈滋野井（姫の乳母, 捕らえられた三吉の母）→三吉を捕らえた侍衆〉

「~くだされ」を用いる（19）で、話し手は声を上げ泣きながら要求する。このように「~くだされ」は、泣きながら、または聞き手に手を合わせたり縋りついたりしながら要求する場面で主に使用される。「~くれ」「~くださんせ」「名詞＋「頼む」の類（敬語）」も同様の場面での使用が見られる。

---

[6] ひとりの話し手に対して、異なる階層の人物と見なす場合がある。たとえば『薩摩歌』の源五兵衛は、奉公人（＝つま蔵、事介）として登場する場合は中下層町人に、武士（＝源五兵衛）として登場する場合は武士に分類される。
[7] 他に、上位者へ使用される形式に「~んせ」、下位者へ使用される形式に「命令形（e）」等がある（**表２**参照）。
[8] 他に、聞き手に優しく接する場合に用いられる形式に「命令形（e）（敬語）ナサレマセ系」、厳しく接する場合に用いられる形式に「~う -命令」、中立的に接する場合に用いられる形式に「~んせ」等がある（**表２**参照）。

(20) 別るゝはなをつらし。〔略〕許してたも、(⑤朔日 487, 7)〈平兵衛(鍛冶屋の弟子)→小かん(恋人)〉

「~たも」を用いる(20)で、話し手は「別るゝはなをつらし」と聞き手の好意に付け込み、許しを求めている。このように「~たも」は、聞き手の好意に甘えるように要求する場面で主に使用される。

(21) 善か悪か、気遣ひな。聞たいと(⑤淀鯉 565, 9)　〈勝二郎(元江戸屋の主人)→吾妻(恋人)〉

「~たい」を用いる(21)では、「善か悪か、気遣ひな」とあるように、聞き手が廓を出るというのは良い知らせか悪い知らせかという話し手の疑念から要求がされている。このように「~たい」は、話し手の疑念や重大な気がかりを晴らそうと要求する場面で主に使用される。

これらは、泣きながら、あるいは聞き手に手を合わせたり縋りついたりしながら要求する、聞き手の好意に甘えるように要求する、話し手の疑念や重大な気がかりを晴らそうと要求する場面で用いられるという点で、全て話し手の行為の実現を求める度合いが高い場面に使用される形式と言える。

反対に、(22)の「命令形(e)(敬語)」は、そのような場面に使用されているとは言えない。

(22) お通りなされと、戸をあくれば、(④紅葉 450, 10)　〈小女郎→お亀(客人, 古道具屋の娘)〉

「お~なされ」という「命令形(e)(敬語)」が用いられる(22)で、話し手が泣きながら要求しているといったことは見られず、これは話し手の行為の実現を求める度合いが高い場面とは言えない。このことから、話し手の行為の実現を求める度合いによって両形式が使い分けられていると分かる。

以上のような、話し手の行為の実現を求める度合いが高い場面で用いられるものを「求め度」があるとすると、「~くだされ」「~くれ」「~くださんせ」「名詞+「頼む」の類(敬語)」「~たも」「~たい」は、求め度を示す働きをもつ行為要求表現形式と言える。

5.3 緊迫度

(23) 引入あるか吟味せよと、(④歌念仏 631, 5)　〈九左衛門(但馬屋の主人)→下人たち〉

(24) 魂のありかを一つに住まん。(④曾根崎 36, 2)　〈徳兵衛(手代)→お初(恋人)〉

「命令形(yo)」を用いる(23)は、源十郎を刺した犯人を引き入れた者がいるか捜索するように指示する場面、「~ん -勧誘」を用いる(24)は、心中に向かう場面である。

このように「命令形(yo)」と「~ん -勧誘」は、捜索や取り調べ、討ち入りの指揮、心中や逃亡、訴訟、勝負しようとする場面で用いられる。これらは、非日常的な、緊迫感の度合いの高い場面と考えられる。

反対に、たとえば(25)の「命令形(i)」は、緊迫感の度合いが高い場面には使用されていない。

表2　各階層の使用形式と各形式の働き

行為要求表現形式		話し手						形式の働き			
		上層町人		中下層町人		武士	遊女	待遇度		求め度	緊迫度
		男性	女性	男性	女性			[上下関係]	[接し方]		
命令形	命令形(e)	○	○	○	○	○	−	−~±	−~±		
	命令形(e二回)	○	○	○	○	○	−	−	−~±		
	命令形(i)	○	○	○	○	−	−	−~±	−~±		
	命令形(yo)	○	○	○	○	○	−	−~±	−		+
連用形や		○	○	○	○	○	−	−~±	±~+		
連用形や+や		−	−	○	○	−	−	−	±~+		
命令形(e)(敬語)	ナサレマセ系	○	○	○	○	−	○	+	+		
	ナサレ系	○	○	○	○	○	−	+	±		
	シャレ系	○	○	○	○	−	−	+	やや−~±		
~んせ	~んせ	−	○	−	○	−	○	±~+	やや−~±		
	~しゃんせ	−	○	−	○	−	○	±~+	やや−~±		
	~さんせ	−	○	−	○	−	○	±~+	やや−~±		
命令形(おじゃ)		○	○	○	○	−	○	−	±		
お+連用形		○	○	○	○	−	−	+	±		
~くだされ		−	−	○	○	−	○	±~+	±	+	
~くれ		−	−	○	○	−	−	−~±	やや−~±	+▾	
~たも		○	○	○	○	−	○	−~±	±	+	
~くださんせ		−	−	−	○	−	○	±~+	±	+▾	
名詞+「頼む」の類(敬語)		○	○	○	○	○	−	±~+	±	+▾	
~たい		○	○	○	○	−	○	N	±	+	
~う -命令		○	○	○	○	○	−	−	−		
~ん -勧誘		−	−	○	○	○	−	−~±	±		+
名詞		○	○	○	○	○	○	N	±		
~へ		○	○	○	○	○	−	N	±		

・待遇度[上下関係]　…聞き手は話し手より上:+ / 話し手より下:− / 対等に近い:± / 不特定:N
・待遇度[接し方]　…聞き手に優しい態度で接する:+ / 聞き手に厳しい態度で接する:− / 中立的:±
・求め度　…その形式の大半の使用に認められる:+ / 一部の使用に認められる:+▾
・緊迫度　…その形式の大半の使用に認められる:+

（25）雑煮の用意せい。（⑤万年草 705, 10）　〈与次右衛門（紙屋の主人）→なつ（下女）〉

（25）は日常的な仕事の要求をする場面で、緊迫感の高い場面に「命令形（i）」が使用されているとは言えない。このことから、緊迫感の度合いによって両形式が使い分けられていると分かる。

以上の、緊迫感の度合いが高い場面で用いられるものを「緊迫度」があるとすると、「命令形（yo）」「~ん -勧誘」は緊迫度を示す働きをもつ行為要求表現形式と言える。これらは待遇度に加え、緊迫度によっても他と使い分けられると考えられる。

各形式の待遇度・求め度・緊迫度は**表２**になる。なお**表２**には**表１**をもとに、各階層の使用形式も合わせて示す。

6　話し手の階層による行為要求表現の使い分け

では、各階層の話し手はどのように行為要求表現形式を使い分けているのか。**表２**から検討する。

6.1　中下層町人男性・女性の行為要求表現

まず中下層町人について、**表２**から女性は全ての形式を、男性は「~んせ」以外全てを使用すると分かる。これは中下層町人の形式の使い分けに、待遇度・求め度・緊迫度が全てかかわることを示す。

またこの階層の男女差を示す「~んせ」について、女性は（26）（27）のように「~んせ」を用いる。

（26）よしか、おかしやんせ。（④紅葉 467, 3）　〈町内の娘友達どうし〉

（27）少笑ふて見せて下さんせと、（⑤万年草 710, 7）　〈お梅（紙屋の娘）→久米之介（恋人, 寺小姓）〉

中下層町人女性の「~んせ, しゃんせ, さんせ, くださんせ」（40 例）のうち、11 例が（26）のように同性の友人や家族、仕事仲間という近しい人物へ、20 例が（27）のように恋人や夫へ用いられている。

同性の近しい人物、恋人や夫は、自らの身内という意識が働く相手と考えられる。このことから、中下層町人女性は自身にとって身内意識が働く聞き手へは「~んせ」を使用する可能性が指摘される。

身内意識は聞き手への待遇にかかわるものであろう。つまり待遇度により「~んせ」は他と区別されると言える。この点で中下層町人女性の使い分けには待遇度がより積極的にかかわると考えられる。

6.2　上層町人男性・女性の行為要求表現

上層町人について、女性は男性と異なり「~んせ」を使用することが**表２**から分かる。このことから上層町人女性も中下層町人女性のように、待遇度によって形式を細やかに使い分ける可能性があると言える。この点で上層町人女性の形式の使い分けには待遇度がより積極的にかかわると考えられる。

一方、上層町人は中下層町人と異なり、「~くだされ」「~くれ」や「~ん -勧誘」の使用が見られない。また、女性は中下層町人女性と異なり、「~くださんせ」を使用していない。これは、上層町人の形式の使い分けには、中下層町人ほど積極的に、求め度や緊迫度がかかわらないことを示している。

6.3　武士の行為要求表現

武士について、町人男性の用いない「~んせ」に加え、「連用形や＋や」「命令形（e）（敬語）ナサレマセ系・シャレ系」の使用も見られないことが**表２**から分かる。これらの形式は主に上位者へ用いられる、あるいは、聞き手に優しく接する場合に用いられる形式である。これは、武士の待遇度による形式の使い分けが、下位者へ、あるいは、厳しくという下向きのものに限定的であることを示している。この点で武士の形式の使い分けには、町人ほど積極的に待遇度がかかわらないと言える。

そして武士は、「~くだされ」「~くれ」「~たも」「名詞＋「頼む」の類（敬語）」「~たい」をほぼ使用していない。これは、武士の形式の使い分けに、求め度がかかわらないことを示している[9]。このことは（28）で、求め度を示す働きをもつ形式が用いられてないことからも分かる。

（28）とつくと御思案あそばせ。私が腹立も皆おいとしさ故也と、泣いつ叱つゝさまざまゞ〳〵に詞をつくし諫めしは、（⑤朔日 499, 7）　〈和田伝内（迎えの国元の侍, 乳兄弟）→小かん（遊女）〉

[9] 武士による「名詞＋「頼む」の類（敬語）」（4 例）は、話し手のいやらしさを際立たせる意図から使用されるようなもの（3 例）や、法印への定型的な要求（1 例）であり、これらが求め度によって使用されているとは言い難い。

（28）は帰郷するよう説く場面である。「泣いつ」とあるものの「~くだされ」などは用いられず、「御~あそばせ」という「命令形（e）（敬語）」が使用される。さきの通り「命令形（e）（敬語）」は求め度を示す働きをもたない。そのためやはり武士の使い分けに求め度がかかわるとは言い難い。

6.4　遊女の行為要求表現

遊女について、「命令形（e, e 二回, i, yo）」「連用形や」「連用形や＋や」「命令形（e）（敬語）シャレ系」「~う -命令」の使用が見られないことが**表２**から分かる。これらの形式は主に下位者へ用いられる、あるいは、聞き手に厳しめに接する場合に用いられる形式である。これは、遊女の待遇度による形式の使い分けが、上位者へ、あるいは、優しくという上向きのものに限定的であることを示している。この点で遊女の形式の使い分けには、町人ほど積極的に待遇度がかかわらないと言える。

そして遊女には、「~くれ」「名詞＋「頼む」の類（敬語）」の使用が見られない。これは形式の使い分けに、中下層町人ほど積極的に求め度がかかわらないことを示している。

加えて、「命令形（yo）」「~ん -勧誘」の使用が見られず、形式の使い分けに、緊迫度がかかわらないことが分かる。これは（29）で、緊迫度を示す働きをもつ形式が用いられない点からも言える。

（29）すゝめて殺して下さんせと、（⑤朔日 514, 3）　〈小かん（遊女）→平兵衛（恋人, 鍛冶屋の弟子）〉

（29）は心中を遂げようとする場面であるが、緊迫度を示す働きをもたない「~くださんせ」が用いられている。そのためやはり、遊女の形式の使い分けに緊迫度がかかわるとは言い難い。

6.5　各階層による行為要求表現の運用原理

以上から、各階層による行為要求表現形式の使い分けは、**表３**のように異なると言える。すなわち行為要求表現の運用において、上層町人は形式の使い分けに緊迫度があまりかかわらず、そのうちの女性は待遇度が積極的にかかわる。中下層町人は求め度が積極的にかかわり、女性は待遇度も積極的にかかわる。武士は待遇度があまりかかわらず（主に下向き）、かつ求め度がかかわらない。遊女は待遇度があまりかかわらず（主に上向き）、かつ緊迫度がかかわらない。このように、6 つの階層によって異なる行為要求表現の運用原理がある。

表３　各階層の形式の使い分け

	待遇度	求め度	緊迫度
上層町人　・男性	○	○	△
上層町人　・女性	(◎)	(○)	(△)
中下層町人・男性	○	◎	○
中下層町人・女性	◎	◎	○
武士	△	×	○
遊女	△	○	×

・◎：使い分けが積極的にされている
・○：使い分けが見られる
・△：使い分けがあまりされていない
・×：使い分けが見られない
・上層町人女性については、用例数の少なさをふまえ、（）付きで示した。

7　おわりに

本発表は近世前期上方語の行為要求表現について、①上層町人男性・女性、中下層町人男性・女性、武士、遊女という 6 つの話し手の階層が認められる、②各形式は待遇度・求め度・緊迫度を示す働きをもつ、③形式の使い分けは 6 つの階層によって**表３**のように異なることを明らかにした。

また、近松世話浄瑠璃には「詞章が文体の性質として不均一性を有すること」（矢島 2013：389）が指摘されている。今後、文体の変化の過渡にあたると見なされる『今宮の心中』以降の作品を調査し、行為要求表現から当資料の文体の変化を捉えることが課題である。

［調査資料］『曾根崎心中』『心中二枚絵草紙』『卯月紅葉』『堀川波鼓』『五十年忌歌念仏』『心中重井筒』『丹波与作待夜のこむろぶし』『心中刃は氷の朔日』『淀鯉出世滝徳』『心中万年草』『薩摩歌』（『近松全集』岩波書店）**［参考文献］**安達太郎（2002）「意志・勧誘のモダリティ」「命令・依頼のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書４　モダリティ』くろしお出版 / 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法４　モダリティ』くろしお出版 / 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版 / 森勇太（2016）『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房 / 矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院 / 矢島正浩（2020）「浄瑠璃の語彙」飛田良文・佐藤武義［編集代表］小野正弘［編］『シリーズ〈日本語の語彙〉４　近世の語彙―身分階層の時代―』朝倉書店 / 山崎久之（2004）『増補補訂版　国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院 / J・R・サール（2006）『表現と意味　言語行為論研究』（山田友幸監訳）誠信書房（J.R.Searle *Expression and meaning: studies in the theory of speech acts*, Cambridge University Press, 1979）

気仙沼方言における疑問詞系感動詞の体系的記述の枠組みの提案
―「ナニ」を中心として―

勝又琴那（東北大学大学院生）

1.　はじめに

感動詞研究は現代語、特に談話における研究[1]が主であったが、方言における感動詞研究[2]も近年、活発になっている。とは言うものの、未だ、方言における感動詞研究が発展途上段階にあることに変わりはなく、今後更なる研究の蓄積が求められる。就中、東北方言を対象とした感動詞研究はあまり活発ではない。しかし、他地域に比して、東北方言は感動詞が発達しているとの指摘(小林 2014:382)や東北方言の「心の動き、感動といったものを声に乗せる表現力」は「共通語のみならず、他の方言の追随を許さ」ない(小林 2022:103)という指摘からも分かるように、感動詞研究において東北方言を対象とすることには大きな意義がある。さらに、方言における感動詞研究は諸方言感動詞の意味・用法の記述に留まるものが多く、感動詞を体系的に捉える研究はあまり見られない。体系的に捉える上での観点も定まっているとは言い難い現状がある。そこで、本発表では、東北方言の一角を担う宮城県気仙沼市の方言において、多くの種類が存在する、疑問詞由来の感動詞（以降、疑問詞系感動詞）を対象に、第 3 節にて当該感動詞が持つ基本義[3]の記述を行い、第 4 節にて体系的記述を行うための枠組みを提案する。

2.　先行研究

本発表における基本義の記述では、「ナニ」を対象とする。気仙沼方言の「ナニ」には、疑問用法(情報の欠落部を問う形での使用)と「驚き」的意味を表出する場面で、単独、或いは発話内で述部に従属せずに使用される感動用法があるが、ここでは後者を感動詞と認める。気仙沼方言感動詞「ナニ」の基本義については、調査・考察がなされている(加順・呉・石川・齋藤 2022)が、調査の結果から、基本義（相手から与えられた情報に対して、反射的に、腑に落ちないことを表す。）の適切性を判断することは難しく、その証明には至っていない。そこで、本発表では「ナニ」について、改めて基本義を設定した上で調査を行い、その基本義を記述する[4]。

また、感動詞の体系化については、有元(2022)が「定型性スケール」「現場性スケール」という 2 つの指標のもと、諸方言感動詞の位置づけを試みている。ここで言う定型性とは、感動詞の語彙化[5]・定型化[6]の度合いのことを指し、現場性とは、「特に「いま・ここ・私」の内部状態に限って結びつく度合い」(定延 2015:6)のことを指す。2 つの指標による体系的な位置づけの試み

---

[1] 田窪・金水(1997)、森山卓郎(1989)等

[2] 小西(2015)、小林・澤村(2017)、田附(2018)等

[3] 小林・澤村（2017:128）における用語であり、当該感動詞が常時保持する意味のことを指す。

[4] 尚、本発表では基本義のみの記述となっているが、今後、形態・音調も含めた記述も行う予定である。

[5] 「語彙(レキシコン)として心的辞書に登録されている度合い」(有元 2022:31)

[6] 「共起関係を持つ要素どうしが構文的・談話的につながった形で心的辞書に登録されている度合い」(有元 2022:39)

は、諸方言感動詞を連続的に捉えられる点で画期的であり、有元(2022:44)も述べるように、感動詞記述の際の一つの指針となるであろう。しかし、同氏も指摘するように、感動詞の体系を 2 つの指標のみで測ることは難しく、諸方言感動詞の記述の更なる蓄積により、体系化に有効な指標を示すことが重要であると思われる。そこで本発表では、方言における疑問詞系感動詞の体系化に際して、有効と思われる 2 つの指標を提案し、各疑問詞系感動詞の位置づけを試みる。

3. 気仙沼方言感動詞「ナニ」の基本義

第 2 節で触れたように、「ナニ」には共通語と同様の疑問用法と、気仙沼市で慣用的に「驚き」的意味をはらんだ場面で使用される感動用法がある。前者は、(1)のように不足の情報を補うため、目的や対象、理由を問う形で用いられる。従って、「ナニ」単独ではなく、対応する述語や指示詞等と共に用いられる。一方、後者は、(2)のように単独、或いは述部に従属せずに用いられ、不足の情報を問う形式と共起可能であることから、実質的意味を喪失していると思われる。

(1)［妻が重そうな荷物を運んでいるのを見たとき］ナニヤッテンノヤ。(何をしているの)

(2)［散歩中、突然友人が自分を叩いてきたとき］ナニー。　ナニスンノヤ。(何をするの)

以降では(2)のような「ナニ」を感動詞として認め、その基本義を記述する。

結論を先に示せば、気仙沼方言感動詞「ナニ」の基本義は以下のように記述できる。

基本義：**想定に反する事態が生じたことに対して、とっさに、理解できない気持ちを表す。**

次節より「ナニ」の基本義を 3 要素(下線部)ごとに例証し、当該基本義が設定可能なことを示す。

3.1 調査概要

本発表において使用する「ナニ」の調査データは、臨地面接調査(R5.11,R6.3 実施)及び遠隔通信・電話による補充調査(R6.2,3,4 実施)によるものである。話者は、70 代男性(気仙沼市出身生え抜き)1 名、時間は計 4 時間程度である。調査時は、発表者が事前に作成した、感動詞「ナニ」を使用すると考える場面および、使用しないと考える場面の文章を読み上げて提示し、当該場面でどのような言葉を発するか、その回答を求めた。本発表に関する質問数は計 43 問である。

3.2 ①想定に反する事態

初めに、「想定に反する事態」についてである。本調査では、「ナニ」が使用可能な「想定に反する」事態の範囲の明確化のため、冨樫(2015:91-92)を参考に「予想外」、「想定外」の両方の場面を設定した。同氏における「予想外」とは、生じた事態が話者の予想を超えるものの、未だ想定の範囲内にあることを指し、「想定外」とは、生じた事態が全くの考えの範囲外にあることを指す。(3)(4)の飲み物をこぼすことやコップを割ることは、どちらも通常予期しえないが、発生の頻度や確率から、コップを割る事態の方が考えにくく、想定も難しい。従って、(3)が「予想外」、(4)が「想定外」に該当する。(5)(6)は(3)(4)に対する反例である。自身の最近の兆候から、粗相の可能性を一定程度予測できるため、予想・想定通りの事態に該当する。

(3)［運んでいる途中でコップの中の飲み物をこぼしてしまったとき］【予想に反する】
ナニー。

(4)［運んでいる途中で誤ってコップを落とし、割ってしまったとき］【想定に反する】
ナニー。

(5)［近頃、自分が不注意になっているため、物を運ぶときも気を付けなければと思っていたが、案の定コップの中の飲み物をこぼしてしまったとき］【予想通り】

{アリャー　マタヤッタカー。/？ナニ。}

(6)［近頃、自分が不注意になっているため、物を運ぶときも気を付けなければと思っていたが、案の定コップを落として割ってしまったとき］【想定通り】

{アリャー。/？ナニ。}

(3)～(6)より、予想・想定に反する場面で「ナニ」が使用されたことから「ナニ」は、話者の考えと現実の差の大きさに左右されず、意外性が存在する事態に対して用いられると思われる[7]。

3.3　②とっさに（瞬間性）

次に、「とっさに」という瞬間性についてである。瞬間性とは、想定に反する事態が発生した、“まさにそのとき”に「ナニ」が使用されることを表す。従って、「ナニ」は事態の発生に直面した場面((3)(4)(7))では使用されるが、(8)(9)のように、既に発生した事態に直面した(している)場面では使用されにくい。

(7)［妻がコップを落として割ってしまった瞬間を見たとき］【瞬間性あり】

ナニー。

(8)［妻がコップを既に割ってしまっているのを見たとき］【瞬間性なし】

{ナニシタノヤ。(何をしたの。)/？？ナニ。}

(9)［妻が割ったコップの後片付けをしながら、改めて「(妻は) なぜコップを落としてしまったのかなあ」と思っているとき］【瞬間性なし】

{テ　ダイジョブカ、アシ　ダイジョブカ、カラダ　ダイジョブカ。[8]/＊ナニ。}

(7)は妻がコップを割った瞬間を見た場面であり、(3)(4)と同様に「ナニ」が使用される。一方で(8)は、コップが割れているのを見た場面、(9)は、後片付けをしている場面である。どちらも想定に反する事態が既に発生した場面であり、「ナニ」ではなく、当該の状況に至った理由を問う形式や相手を労わる言葉が用いられる。尚、(9)と同場面で自分が対象の場合はどうかと尋ねた際、「片付けの時ではなく、事態が生じた途端には「ナニー」を使用する」と話者から補足情報を得られたことからも、「ナニ」の生起には、事態が生じた“瞬間”が重要であると思われる。

3.4　③理解できない

最後に、「理解できない」という要素についてである。「ナニ」は、想定に反する事態が理解できないという気持ちを表すため、生じた事態が理解できる場合には使用されない。

(10) [夜分の訪問相手がすぐに郵便の再配達と気付いたとき]【理解できる】

{アー　アー。　ソーダ　ソーダ。/＊ナニ。}

---

[7] 以降における「想定に反する事態」や「想定外」という用語は、「ナニ」が「予想外」「想定外」のいずれでも使用可能であり、「予想外」が「想定外」に包含されることから、双方の範囲を包括して表す。

[8] 尚、(9)では「ナニヤッテンダヤナー。」(何をしているんだろうな。)も使用可能との回答があり、質問文で「ナゼ」に焦点を当てたために「ナニ」が使用不可能であったわけではない。

(11) [夜分の訪問相手がすぐに郵便の再配達と気付かないとき]【理解できない】

ナニー。

(10)は、夜分の訪問相手に対して、不審に思うより先に、郵便の再配達であることに気づいた場面である。夜分の訪問は頻繁ではなく、予測も難しいため、(10)は「想定に反する」事態であると言える。しかし、呼び鈴を聞いたその瞬間に、再配達だと気づいたために不理解が生じず、納得したような表現が用いられている。一方で(11)は、呼び鈴が鳴った時点では訪問相手の見当がつかず、「誰が、なぜ来たのか」と不理解が生じている。尚、話者より、再配達を頼んでいたことを思い出せれば、(10)と同様の形式を用いるとの回答があった。従って、「ナニ」は「想定に反する」事態に対し、「理解できない」気持ちが生じる際に使用されると思われる。

4. 疑問詞系感動詞の体系的記述の枠組みの提案

本節では、気仙沼市において多用される疑問詞系感動詞を体系的に記述するための枠組みを提案する。気仙沼方言には、「ナニ」をはじめとして、「ナンダベ」「ナンダ」「ナンダッケ」「ナント」など、疑問詞「何」を核とする感動詞が多く存在する。これらには、想定と現実との不一致が生じた際に使用されるという共通点がある（小林・勝又 2022,勝又・大島・大原 2024）一方で、各形式で使用可能場面が異なることから、表す意味に差異があると思われる。そこで、各形式の相違を捉えるため、①「場面の評価性」、②「反発性[9]」という 2 つの指標のもと、5 形式を体系的に位置づける。①は、対峙する場面が話し手にとって＋か－かの度合いを測るもので、不都合や不利益等が生じる場面は「－」、利益や恩恵等が生じる場面は「＋」となる。また、②は事態の受け入れ難さの度合いを表す。多くの場合、「＋」場面の事態の方が受け入れ易く、「－」の方が受け入れ難いため、2 つの指標は一定程度相関するが、②の指標によって、利益を受け入れ難い場合(謙遜)、不都合を受容する必要がある場合(謝罪)も位置づけが可能となる。

位置づけに伴う各形式のデータは、気仙沼市の方言会話資料(『生活を伝える方言会話［資料編］－宮城県気仙沼市・名取市方言－』、以降「会話資料」)より収集した。当資料内における 5 形式の用例を抽出し、当該形式の使用場面を「＋」、「どちらかと言えば＋(以降、(＋))」、「－」、「どちらかと言えば－(以降、(－))」の 4 種類に分類した[10]。次に、生じた事態が「受け入れ難い(以降、難)」、「どちらかと言えば受け入れ難い(以降、(難))」、「受け入れ易い(以降、易」、「どちらかと言えば受け入れ易い(以降、(易))」の 4 種類にさらに分類し、各形式を位置づけた。例えば(12)は、日にちを過ぎた回覧板を回されることは迷惑である点で「－」、回覧板のルールに反する事態の点で「難」に位置する。(13)は長居をすることは相手の迷惑に繋がる点で「－」、しかし、既に長居してしまった後のため、当該事態を受け入れるしかない点で「(易)」に位置する。また、(14)は、友人に慰められる場面の点で「＋」、不合格にも関わらず歌への賞賛を受け入れることは難しいため「(難)」に位置し、(15)は活きのいいサンマが手に

[9] 尚、本発表における「反発性」はあくまで眼前の事態の受け入れ難さの度合いを示すものであり、小林・勝又(2022)における「反発性」(負の事態に対し、受け入れ難く、抗う気持ち)とは異なる。

[10] ＋にも－にも捉えられるもの、どちらでもないものは除外した。

入ることから「＋」、そんな好ましい事態を受け入れることは容易のため「易」に位置する。

(12)［隣人が日にちを過ぎた回覧板を回してきたとき］【－/難】

ウン。ナーガミー ミダッケサー、ナーンダッケ モー ヒニジ スギタンダイチャー。

（うん。中身　　見たらさ、　なんだい　　もう 日にち すぎているんだよね。）

(3-12. 隣人が回覧板を回さない①同意する　より一部抜粋)

(13)［長居をしてしまった友人の家から帰るとき］【－/(易)】

ナント　ナガナガ　オジャマシタカラネー。

（なんと　長々　　お邪魔したからね。）

(1-61. 友人宅を辞去する②女性→男性　より一部抜粋)

(14)［のど自慢での不合格を「上手いのに惜しかったね」と慰められたとき］【＋/(難)】

ナーニー　アーリャー　アンナモノッサ。

（なに　　あれは　　あんなものさ。）

(1-31. のど自慢での不合格をなぐさめる　より一部抜粋)

(15)［商店で活きのいいサンマがあることを聞いたとき］【＋/易】

アラ　ハイェゴドー　ナンドー。

（あら　(店にサンマが並ぶのが)早いこと　なんと。）

(1-62. 商店に入る　より改変して一部抜粋)

以上のように、会話資料における用例を「場面の評価性」および「反発性」の観点から相対的に分類、かつ位置づけると以下の表 1 のようになる。数値は、該当用例数／総用例数の割合を小数点第三位を四捨五入して示した[11]。網掛けは各形式で最も高い数値に施した。また、位置する形式が多いことから、【－/難】のみ、内訳の割合(該当用例数／【－/難】に分類された用例総数)も示した。尚、本発表で対象とした用例総数を各形式の括弧内に記している。

表 1　「場面の評価性」「反発性」の観点からみた疑問詞系感動詞の位置づけ

指標 / 形式	－/難	① －/難	② －/(難)	③ (－)/(難)	④ (－)/難	－/易	＋/難	＋/易
ナンダッケ(6)	100%	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
ナンダ(6)	100%	33%	50%	17%	0%	0%	0%	0%
ナンダベ(38)	82%	65%	32%	0%	3%	3%	3%	13%
ナニ(48)	69%	42%	36%	18%	3%	2%	6%	23%
ナント(79)	35%	25%	54%	21%	0%	4%	0%	62%

表 1 の網掛けより、疑問詞系感動詞は、【－/難】に偏っていることが分かる。このことは疑問詞系感動詞が、(12)に窺える「非難」「不満」といった“負”の感情が表出する場合に使用されることを示している。また、形式に着目すると、「ナンダ」「ナンダッケ」は用例全てが【－/難】に位置し、次いで「ナンダベ」→「ナニ」→「ナント」の順に位置する。このことから、「ナンダ」「ナンダッケ」は他形式よりも“負”の感情が表出する場合に使用される傾向にあると

[11] 小数点第三位を四捨五入しているため、合計値が必ずしも 100%になっていない場合がある。

思われる[12]。また、【－/難】の範囲内で、「ナンダッケ」の全用例が①「－/難」に分類されるのに対し、「ナンダ」は②「－/(難)」、③「(－)/(難)」にも分類されることから、「ナンダッケ」の方が相対的により強い“負”の感情が表出する場合に使用されると思われる。次に偏りが見られるのは【＋/易】である。【＋/易】に位置する形式は「ナント」が最も多く、次いで「ナニ」→「ナンダベ」となり、「ナンダ」「ナンダッケ」は 0%である。このことから、「ナント」は「ナンダ」「ナンダッケ」と相反し、(15)に窺える「喜び」「嬉しさ」といった“正”の感情が生じる場合に使用される傾向にあることが分かる[13]。また、「ナンダ」「ナンダッケ」と「ナント」の間に位置する「ナンダベ」「ナニ」は、【－/難】、【＋/易】に位置する用例の割合および、【－/難】の範囲内で①「－/難」に分類される用例の割合(「ナンダベ」65%＞「ナニ」42%)より、「ナンダベ」が「ナニ」よりも相対的に“負”の場合に使用される傾向にある。

5. まとめと今後の課題

本発表では、気仙沼方言における疑問詞系感動詞「ナニ」について、その基本義が「想定に反する事態が生じたことに対して、とっさに、理解できない気持ちを表す。」と記述できることを示した。また、疑問詞系感動詞の体系的記述の枠組みとして、「場面の評価性」「反発性」という 2 つの指標を提案し、疑問詞系感動詞 5 形式を位置づけた。そこから、疑問詞系感動詞は【－/難】での使用が多く、特に「ナンダッケ」にその傾向が強く見られることを示した。また、その一方で「ナント」のように、【＋/易】で使用される形式があることも示され、「場面の評価性」「反発性」という 2 つの指標を用いた体系化により、各形式単独の記述からは読み取れない差異が明確になった。しかし、会話資料における各形式の用例数のバラつきにより、比較が難しいことや少人数での結果をもととした体系化であったことから、疑問詞系感動詞の傾向を示すのみとなってしまった。今後は、本発表で扱えなかった「ナニ」の形態・音調まで含めた記述を進めるとともに、多人数での調査を経て、より客観的に疑問詞系感動詞を位置づける必要がある。

参考文献

有元光彦(2022)「感動詞の体系―連続的に捉える試み―」日本方言研究会編『方言の研究』8 pp.29-46 ひつじ書房/加順咲帆・呉金璐・石川武・齋藤優奈(2022)「感動詞「ナニ」(中間報告)」東北大学方言研究センター 『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開5』pp.12-24 東北大学大学院文学研究科国語学研究室/勝又琴那・大島佑萌・大原美怜(2024)「疑問詞系感動詞「ドーモ」「ナント」「ナンダ」「ナンダッケ」東北大学方言研究センター『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究2』pp.40-54 東北大学大学院文学研究科日本語学研究室/小西いずみ(2015)「富山市方言の「ナーン」 否定の陳述副詞・応答詞およびフィラーとしての意味・機能」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.115-131 ひつじ書房/小林隆(2014)「方言形成論の到達点と課題 方言周圏論を核にして(改訂版)」小林隆編『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』pp.341-386 ひつじ書房/小林隆(2022)「東北方言の魅力を語る－気仙沼方言を通して－」東北大学方言研究センター『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開5』pp.94-104 東北大学大学院文学研究科国語学研究室/小林隆・勝又琴那(2022)「感動詞「ナンダベ」の用法と地理的分布」小林隆編『全国調査による感動詞の方言学』pp.335-366 ひつじ書房/小林隆・澤村美幸(2017)「感動詞の方言学」小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名渉子・中西太郎『方言学の未来をひらく―オノマトペ・感動詞・談話・言語行動―』pp.87-205 ひつじ書房/定延利之(2015)「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.3-14 ひつじ書房/田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』pp.257-279 くろしお出版/田附敏尚(2018)「青森県五所川原市方言の感動詞「アッツァ」について」小林隆編『感性の方言学』pp.233-251 ひつじ書房 /東北大学方言研究センター(2019)『生活を伝える方言会話［資料編］－宮城県気仙沼市・名取市方言－』ひつじ書房/冨樫純一(2015)「予想外と想定外 感動詞「げっ」の分析を中心に」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.85-95 ひつじ書房/森山卓郎 (1989)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』pp.63-88

[12] 本発表にかかる調査とは別の調査(気仙沼市出身 60 代女性対象)において得られた、「ナンダ、ナンダッケには－のイメージがある。」という内省は、この傾向を支持する。

[13] 勝又・大島・大原(2024:47)には良い事柄に対して「ナント」を用いやすいという話者の指摘がある。

「さすが+の」の順接用法の展開について
―BCCWJと新聞データベースの比較を通して―

周世超（しゅうせいちょう）（フジ国際語学院）

1　はじめに

「さすが」という副詞には、「の」を介して名詞を修飾する用法がある。これまでの「さすが+の」は、主に次の例(1)のような、ある人物やものがいつも通りの能力や実力を発揮できなくなったという意味として用いられている。

(1)さすがの村上も「単騎」では力を出しづらい。(日経新聞 2023年6月13日)

一方、近年では次の例(2)(3)のような能力や実力が存分に発揮できた用例も見られるようになった。

(2)そこにさすがの下野さん！取材も万全のSAABリポートです。(週刊朝日 2022年4月22日)

(3)◆査定人　さすがの手並み　(読売新聞　小見出し　2016年9月1日)

本発表では、例(1)のような用例を「さすが+の」の逆接用法と呼び、例(2)(3)のような用例を「さすが+の」の順接用法[注1]と呼ぶことにする。これまでの研究は、主に「さすが+の」の逆接用法を検討するものであり、順接用法にふれたものは少ない。また、現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下BCCWJ)と新聞データベースとでは、「さすが+の」の順接用法の生起頻度にかなりの差が見られる。その理由はまだ定かではない。そこで、本発表では、複数の大型データベースに基づき、「さすが+の」の順接用法の使用実態と展開を捉える。さらに、順接用法の使用者と使用条件について検討し、データベースによって生起頻度に差が存在する理由を解明する。

2　先行研究

「さすが+の」に関する研究は、渡辺(1997)、周(2017)、野田(2017)、黄(2022)などが挙げられる。渡辺(1997:pp3-8)は、現代語の「さすが」の用法を「(一) Aはさすがにaだ」「(二)AもBにはさすがにā(b)だ」「(三)さすがのAもBにはā(b)だ」という三つのモデルに分けている。「さすが+の」は第三のモデルとして、「さすが」の評価は素質・力量の持ち主Aに集中し、Aには順当の結果aを実現させるための素質・力量を持っているが、Bという状況により阻止され、āという結果になったと指摘している。また、周(2017)は、「さすが」の意味・機能について、「さすが」の表す評価と構文的特徴との関係を検討し、「さすが+の」に関しては、主語を修飾する場合に分類し、評価と後続動詞との関係を検討している。上記の研究は、「さすが+の」の逆接用法を検討したものであり、「さすが+の」の順接用法にはふれていない。

一方、順接用法について言及したのは、野田(2017)と黄(2022)である。野田(2017)は、BCCWJに基づき、「の」を介して名詞修飾が可能な副詞の諸相を検討している。「さすが+の」に関しては、野田(2017:pp112-113)は、渡辺(1997)の用語を借りて、BCCWJには「Aへの評価を表す『さすがの日清食品さんです。』のような例や，順当な結果aを修飾する『さすがの全勝』のような例があった」と述べている。また、黄(2022)は、蓮沼(1987)に基づき、BCCWJのデータを中心に、「さすがのNも」の意味的・構文的特徴について検討している。「さすが+の」の順接用法に関しては、黄(2022:pp219-225)は、補語になる場合、述語になる場合、状況語になる場合に分けて検討している。

以上のように、「さすが+の」の順接用法にふれた研究は少なく、それに言及した研究もBCCWJの用例の考察にとどまっているものである。

3　問題の所在

本発表では、まずBCCWJにある「さすが+の」の使用実態を再検討した。具体的検索方法としては、BCCWJ通常版(NT1.1)の非コアも含む全データについて、「中納言」(2.7.2)を用いて、「文字列検索」で「さすがの」「流石の」で検索にかけた。その結果、428例が検索され、そのうち20例を除外した[注2]。その結果、「さすが+の」の逆接用法361例と、順接用法47例を得た。この用例数からみれば、書籍がメインのBCCWJでは、「さすが+の」の逆接用法が主たる使い方であり、順接用法の使用

注1 「順接用法」と「逆接用法」は蓮沼昭子(1987)から借りた用語であり、黄(2022)でいう「さすがのN」の順接用法、逆接用法をも参考にしたものである。

注2 除外例について、「さすがの猿飛」という漫画名6例、「(十四) さすがの」という不完全なもの1例、「の」を介さず「のえる」という名前を修飾するもの1例を除外した。逆接用法では、渡辺(1997)でいう「さすがのAもBにはā(b)だ」のバリエーション(「も」以外の助詞と共起するもの)として、30例が検索され、「～でも」「～にも」の用例を採択し、それ以外の12例を除外した。

例は少ないと言わざるを得ない。

一方、新聞データベースにおいて、「さすが+の」の順接用法は BCCWJ と異なる生起頻度を示している。朝日新聞データベース「朝日新聞クロスサーチ」(以下「朝日」)の 2009 年から 2023 年(15 年間)の新聞記事にある「さすが+の」の用例数を調べてみると、逆接用法が 310 例、順接用法が 311 例確認された。また、「朝日」では、もとより順接用法の使用例が多いというわけではない。1986 年から 2000 年(15 年間)における「さすが+の」の使用例は、逆接用法が 357 例であり、順接用法が 49 例である(具体的な調査方法は次節で述べる)。以上のデータをまとめると、次の表 1 のようになる。

表 1　BCCWJ と朝日新聞データベースの「さすが+の」の生起頻度

	逆接用法	順接用法	合計
BCCWJ	361 (88.5%)	47 (11.5%)	408 (100%)
「朝日」(2009-2023)	310 (49.9%)	311 (50.1%)	621 (100%)
「朝日」(1986-2000)	357 (87.9%)	49 (12.1%)	406 (100%)

表 1 に基づいて言えば、BCCWJ と 2000 年以前の「朝日」とでは、「さすが+の」の用例数も、順接用法もほぼ同じくらいの割合(11%−12%)を示している。一方、2009 年から 2023 年の「朝日」では、順接用法は逆接用法を上回る割合(50.1%)である。また、2009 年以降の順接用法はほかより圧倒的に多い用例数(約 6 倍以上)が観測された。

さらに、「さすが+の」の順接用法には、野田(2017:p113)の指摘した通り、素質・力量の持ち主 A を修飾する「さすがの下野さん(例(2)を再掲)」という「さすがの A」タイプと、順当な結果 a を修飾する「さすがの手並み(例(3)を再掲)」という「さすがの a」タイプが存在する。これに基づき、順接用法の用例を細分化すると、次のようになる。

表 2　BCCWJ と朝日新聞データベースの「さすが+の」の順接用法の内訳

	さすがの A	さすがの a	合計
BCCWJ	8 (17.0%)	39 (83.0%)	47 (100%)
「朝日」(2009-2023)	9 (2.8%)	302 (97.1%)	311 (100%)
「朝日」(1986-2000)	2 (4.1%)	47 (95.9%)	49 (100%)

表 2 に示すように、BCCWJ と「朝日」(2009-2023)と比べてみると、「さすがの A」タイプの用例数はさほど変わらないが、「さすがの a」タイプにかなりの差が見られた。また、「朝日」の 2009 年以降と 2000 年以前の用例数と比べれば、「さすがの A」タイプが 8 例増えたのに対して、「さすがの a」タイプは 256 例が増えた。つまり、生起頻度に差が生じたのも、定着しつつあるのも「さすがの a」タイプであり、対して「さすがの A」タイプはまだ言語現象を影響するほどの用例数が蓄積されていないといえる。以上の理由から、今回の考察対象から「さすがの A」タイプを除き、以下では、「さすがの a」タイプを「さすが+の」の順接用法として取り扱うことにする。

以上のように、書籍がメインの BCCWJ と新聞データベースとでは、「さすが+の」の順接用法の生起頻度にかなりの差が存在する。また、新聞データベースにおいて、順接用法は昔から生起頻度が高いわけではない。そこから、少なくとも二つの問題が生じる。

問題一　新聞メディアに「さすが+の」の順接用法がどのように展開したのか。

問題二　「さすが+の」の順接用法は新聞メディアに定着しつつあるのはなぜか。

この二つの問題の解明を本発表の目的とする。

4　「さすが+の」の順接用法の使用実態と展開について

本節では、「さすが+の」の順接用法の使用実態と展開について検討する。朝日新聞だけでは、偏りが生じる可能性があるため、「朝日」のほかに、読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」(以下「読売」)、日本経済新聞のデータベース「日経テレコン２１」(以下「日経」)をも調査の対象とする。

4.1　調査方法

本発表では、「朝日」「読売」「日経」の共通範囲の 1987 年から 2023 年までのデータを調査の対象とする。具体的な検索方法としては、日付範囲を「1987 年から 2023 年」に指定し、「朝日」では「すべてのジャンル」を選択し、「読売」では「全国版・地域版」をすべて選択し、「日経」では「すべての媒体」を選択して、「さすがの」「流石の」で検索にかけ、その結果、3,590 例が収集された。そのうち、計 210 例を除外した。除外例については、まず重複コンテンツの記事 80 件を除外した。次に、「さすがのサスケ」といった商品名 8 例、「さすがの猿飛」といった作品名 12 例、俳句・短歌計 3 例、イベント名 2 例、「流石」が人名のもの 1 例、「の」を介さず「ののちゃん」という名前を修

飾するもの 1 例、「さすが」に「のぞく」が後続するもの 1 例を除外した。さらに、逆接用法の「～も」「～にも」「～でも」を採択し、それ以外のバリエーション 52 例を除外した。それから、素質・力量の持ち主 A を修飾する「さすがの A」タイプ 39 例を除外した。さらに、「一方、暑さに強いはずのケープペンギン２３羽と、フンボルトペンギン３０羽は、さすがの熱気にげんなりした様子。 (朝日 1987 年 6 月 5 日)」という用例がある。この場合、「暑さに強い」素質の持ち主ペンギン(A)が「げんなりした」(ā)ということから、本発表では、渡辺(1997)の用語を借りて、このような用例を「さすがの B に、A もāだ」タイプとして位置づけ、出現頻度が低いという理由から、計 11 例を除外した。以上の過程を経て、「朝日」「読売」「日経」から逆接用法 2,330 例、順接用法 1,050 例を得た。

4.2 「さすが+の」の順接用法の展開

本項では、新聞メディアに「さすが+の」の順接用法がどのように展開したのかという問題一について解明する。三つの新聞データベースから収集した「さすが+の」の 3,380 例を順接用法と逆接用法に分け、年別にまとめると、次の図 1 のようになる。

図 1 「朝日」「読売」「日経」における「さすがの」の生起頻度

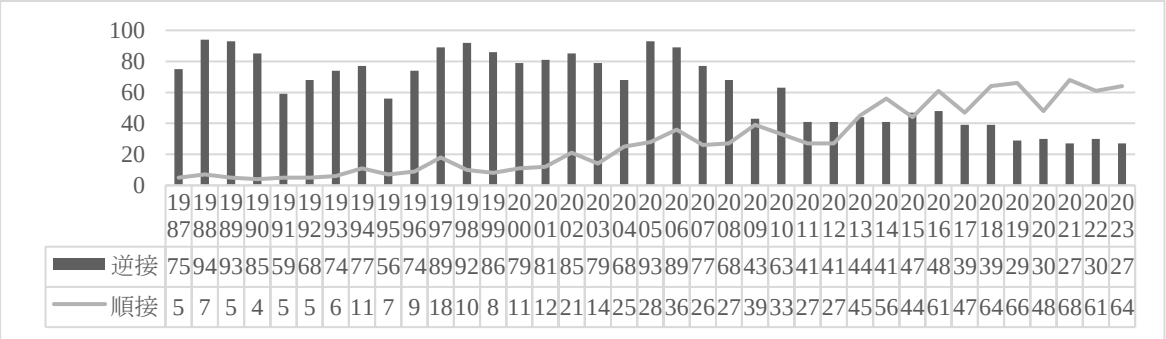


図 1 に基づいて言えば、「さすが+の」の順接用法は、1996 年以前は用例数が少なく、毎年 4～11 例程度である。1997 年に 18 例が出現し、そこから段階的に増え続け、2009 年に至っては、順接用法が 39 例、逆接用法が 43 例というほぼ同じくらいの生起頻度になっている。そこから少し出現数は下がったが、2013 年に順接用法がはじめて逆接用法の用例数を上回った。2013 年以降のデータをみれば、順接用法のほうが優位に立っていることがわかる。さらに、2019 年、2021 年、2022 年、2023 年では、順接用法が逆接用法の倍以上の出現数となっている[注3]。このことから、2019 年以降の新聞メディアでは、順接用法が「さすが+の」の主たる用法としての地位を得ているといえる。

以上をまとめると、新聞メディアにおいて、「さすが+の」の順接用法は、1997 年から段階的に増え続け、2009 年に逆接用法とほぼ同じくらいの生起頻度になり、2013 年以降は逆接用法を上回り、2019 年以降はほぼ毎年逆接用法の倍以上の出現数となっている。このように、「さすが+の」の順接用法は新聞メディアに定着したと認められる。

4.3 各データベースにおける「さすが+の」の順接用法の生起頻度の違い

前項の結果でいうと、新聞メディアでは、順接用法は 2009 年に逆接用法と同じくらいの生起頻度になり、2013 年以降は逆接用法を上回っている。ここであり得る反論は、BCCWJ に収録されていない 2006 年以降の書籍に、「さすが+の」の順接用法は使用例が増え、定着しつつあるということである。そうなると、書籍と新聞メディアにおける順接用法の生起頻度の差がなくなり、本発表の主張も否定されるべきであろう。

そこで、本発表では、2023 年 8 月時点の Google ブックスの 2006 年から 2022 年の書籍データにおける「さすが+の」の使用実態に調査を行った。具体な調査方法は、検索の範囲を「2006 年から 2022 年」に設定し、ジャンルは「すべての書籍」に設定し、「”さすがの”」「”流石の”」で検索を行い、計 858 例を収集した。そのうち 240 例[注4]を除外し、計 618 例を得た。その中、「さすが+の」の順接用法は 49 例であり、逆接用法は 569 例である。BCCWJ と照合してみると、次の表 4 のようになる。

注3 ここでもう一つ注目すべきところは、「サスガノ」の逆接用法の減少である。おそらくは順接用法の定着により、「サスガノ」のイメージは、マイナスからプラスへと変わったと推測できる。

注4 書籍の定着具合の調査であるため、2006 年以降に出版されたものではなく、書かれた作品に限定した。除外例としては、2006 年以前に逝去した作家の作品、過去作の作品集や作者の著作集といったもの 153 例、商品名・作品名 50 例、「～も」「～でも」「～にも」以外の逆接用法の使用例 23 例、「さすがの A」タイプ 7 例、「さすがの B に、A もāだ」タイプ 7 例となっている。

表 4　BCCWJ と Google ブックスにおける「さすが+の」の生起頻度

	逆接用法	順接用法	合計
BCCWJ	361 (90.3%)	39 (9.7%)	400 (100%)
Google ブックス (2006-2022)	569 (92.1%)	49 (7.9%)	618 (100%)

表 4 によれば、2006 年から 2022 年の Google ブックスにおける「さすが+の」の順接用法の生起頻度は、BCCWJ とほぼ同じであり、順接用法の増加は見られなかった。以上のことから、「さすが+の」の順接用法は、新聞メディアに定着し、書籍には定着しなかったと認められる。

５　「さすが+の」の順接用法の使用者と使用条件

本節では、「さすが+の」の順接用法が新聞メディアに定着したのはなぜかという問題二について検討する。本発表では、その理由は使用者にあると考え、まず各データベースの使用例からその使用者を特定し、順接用法の使用条件について検討する。

5.1　各データベースの使用例

本稿では、新聞データベース、BCCWJ の使用例について検討する。

5.1.1　新聞データベースの使用例

新聞データベースにおける「さすが+の」の順接用法は 1050 例である。その使用者に基づいて分類してみると、リポーターの使用例が 905 例、取材対象の使用例が 144 例、書評の使用例が 10 例となっている。使用例からみれば、順接用法の使用者は、新聞記者というより、リポーターのほうが的確である。その基準は、自ら現地に赴き、取材を行なったかどうかにある。

(4)浅野　さすがの強打　Ｕ１８W杯「銅」／野球(読売新聞　2022 年 9 月 21 日)
(5)燕也は次に「深川」や「かんちろりん」。左足一本で踊る「片足かっぽれ」などはさすがの安定感だ。(朝日夕刊　2017 年 11 月 2 日)
(6)隠れたＣＭスターの古田さん、気鋭の竹内さん、杉咲花さんを「新しい家族」にしたのも、さすがのキャスティング。 (日経 MJ　2017 年 10 月 16 日)

例(4)(5)(6)は、野球選手、舞台役者、ＣＭキャスティングへの評価として、「さすが+の」の順接用法が用いられた。このような用例は、取材に基づいたものであり、その使用者はリポーターである。

新聞データベースに記録された取材対象[注5]のことばにも順接用法の使用例がある。

(7)「換気扇とお風呂を頼んでみたら、さすがの出来栄えだった」（新潟県の女性会社員、４３）という人も。(日経プラスワン　2015 年 12 月 19 日)
(8)新井が「さすがの投球。見習いたい」と言えば、橋本は「このレベルで投げ合えて、本当に楽しかった」。 (読売新聞　東京朝刊　2013 年 7 月 18 日)

この場合、例(7)はサービスの利用者であり、例(8)は野球の出場選手である。

新聞データベースの書評からも「さすが+の」の順接用法の使用例が見られた。

(9)さすがの筆力だ。時代とりん、両方の生命力に溢れた一冊である。(朝日朝刊「(書評)『白光』朝井まかて〈著〉」2021 年 9 月 18 日)
(10)批評家陣野俊史――井上靖未発表初期短篇集、デビュー前もさすがの筆力（目利きが選ぶ３冊）(日本経済新聞夕刊　見出し　2019 年 5 月 9 日)

例(9)(10)は書評にある順接用法の使用例であり、その使用者は書評の書き手である。

5.1.2　BCCWJ の使用例

BCCWJ にある「さすが+の」の順接用法は 39 例である。BCCWJ のレジスターに基づいて言えば、ブログが 21 例、書籍が 10 例、雑誌が 5 例、新聞が 2 例、広報紙が 1 例となっている。ということは、BCCWJ という書籍がメインのコーパスにおいて、「さすが+の」の順接用法のほとんどは、書籍以外から検索されたものである。このことからも、順接用法は書籍に生起しにくいことが示唆される。

BCCWJ の順接用法の大半(39 例中 21 例)が Yahoo！ブログの使用例である。

(11)ＢＲが１／十八ダイキャスト完成品初挑戦なのがこのエンツォ。しかしさすがの完成度を誇ります。 (Yahoo!ブログ)
(12)結果は、以下の通りとなりました。『牛肉』流石の貫禄といいましょうか、１位です。２位は『鶏肉』。(Yahoo!ブログ)

注5 ここでいう取材対象というのは、インタビューを受けた人のみならず、ことばが記録された試合の解説者、または感想ハガキを書いた視聴者なども含まれる。

例(11)(12)の「さすがの完成度」「流石の貫禄」といった順接用法は、ブログの発信者が車のプラモデル、牛肉への評価として使われている。

BCCWJ において、雑誌に現れた「さすが+の」の順接用法の使用例は 5 例であり、小説やエッセイの雑誌ではなく、すべて紹介類の雑誌である。

(13)コーナーを攻めてもボディバランスはすばらしく、さすがのひと言。(『ｄｒｉｖｅｒ』2005 機械)

(14)ＰＡＲＴ２みんなの大好きブランドはさすがの可愛らしさ(『ＪＪ』2004)

例(13)(14)はそれぞれ自動車雑誌とファッション誌である。その使用者は、雑誌のライターである。

BCCWJ の書籍における「さすが+の」の順接用法が 10 例であり、すべてが物語である。作品のジャンルでいうと、紀行文が 4 例、人物伝(自伝を含む)が 4 例、小説が 2 例である。

(15)最上階四十七階には、サントリー経営の日本料理店もある。さすがの営業力に感心させられる。(『繊維王国上海』2001)

(16)さて坂田挑戦の七番勝負、一局目、二局目と連敗（ジゴ負け、一目負けの不運）のあと、「これで良い勝負になった」と仲間内に語ったのは流石の負けん気。(『藤沢秀行』1987)

(17)もっとも、それでもきっちりラニエリ邸の夕食も食べるところは、さすがの胃袋だけれど。(『迷宮の記憶』2005)

例(15)(16)(17)はそれぞれ紀行文、人物伝、小説に用いられた用例である。その使用者は、作者と一人称小説の語り手である。

5.2 「さすが+の」の順接用法の使用条件

これらの使用者の特徴に基づき、本発表では、順接用法の使用条件について次のように提案する。

「さすが+の」の順接用法には、二つの使用条件がある。一つ目の条件は、使用者(話し手や書き手)の「実体験」に基づくこと。二つ目の条件は、評価は「使用者以外」に向けること。

この仮説には、次のような意味が含まれる。まず、「実体験」ということは、未発生のことや想像の出来事には使えないということである。次に、評価は「使用者以外」に向けるということは、自分自身の素質・能力、それによって成し遂げた結果に対しては使えないということである。このような使用条件によって、順接用法は使用者を選ぶ用法となったと思われる。

まず、新聞データベースの使用者の特徴について検討する。新聞データベースにおける順接用法の使用者は、リポーター、取材対象、書評の書き手である。リポーターは職業上、取材という「実体験」に基づき、他者に評価を向けるものである。また、取材対象もまた順接用法の使用条件に適合していると思われる。というのは、取材対象として選ばれたのは、その試合や場面を実際に体験した人物であり、「実体験」として語る権利を有する人物だからである。それから、書評の書き手は、「本を読んだ」という「実体験」に基づき、その評価は書評家から作家に向けたものである。

取材対象のことばからみれば、順接用法は書き言葉のみならず、話し言葉にも生起しうる。順接用法の使用権利を持つ話者として、テレビ番組のコメンテーターなどが挙げられる。たとえば、取材 VTR にあるおいしそうな食事に対して、「さすがの出来ばえですね」と発言したところで、誰も不審に思わないであろう。なぜなら、映像を見たといった実体験があったからである。

ここで、使用条件の有効性を裏付けるために、生起し得ない用例として、開催予告のポスターを挙げておく。開催予告のポスターに「隅田川花火大会、さすがの迫力」といったキャッチコピーは付きにくい。なぜなら、開催していない未発生の事柄は、「実体験」という使用条件に反しており、未経験の花火大会に、順接用法が使えないのである。一方、「去年は『さすがの迫力』と評判！」であれば使用可能である。それは、去年の参加者の「実体験」に基づいた評価だからである。

また、書評の書き手と似たような性格の使用者として、担当編集者というものが挙げられる。Google ブックスから収集された順接用法 49 例のうち、作品紹介が 16 例となっている。

(18)【担当編集者コメント】第 15 回スニーカー大賞《大賞》受賞作家作品とあって、さすがの読み応えです。 (玩具堂『探偵くんと鋭い山田さん』2020)

例(18)は、作者によって描かれた作品内容の一部ではなく、編集担当者によって作品の「外側」に書かれたものである。このような内容は、編集担当者が、作家との付き合いや作品を読んだ「実体験」に基づいたものであり、作品に評価を向けたものである。

次に、BCCWJ における使用者は、ブログの発信者、紹介雑誌のライター、紀行文や人物伝の作者、一人称小説の語り手となっている。ブログというのは、発信者が「日常生活」という「実体験」に、自分の感想や評価を書き記したものである。無論ブログの中には、見栄や自慢のために捏造の内容を

書く人もいる。しかし、たとえ捏造のブログであっても、書き記した内容は、あたかも「実体験」のように書いているから、使用条件に反していないと認められる。また、紹介雑誌のライターは、ブランドから取り寄せた服やアクセサリーを見たといった実体験に基づくものである。次に、紀行文や人物伝の作者も、自らの体験に基づき、書かれたものと認められる。それから、一人称小説の語り手も順接用法の使用者に足りうる。なぜなら、一人称視点ということは、語り手が一人の登場人物として物語を体験したものであり、その体験こそ順接用法にふさわしいものである。

最後に、評価は「使用者以外」に向けるということについて、レシピ本とグルメ本のことを挙げておきたい。Google ブックスから収集された順接用法の 49 例中グルメ本が 7 例である。一方、レシピ本からは検索されなかった。順接用法の使用条件からみるレシピ本とグルメ本の違いは、評価の対象にある。グルメ本は、グルメやレビュアーが自ら、有名店や隠された名店を食べに行き、その店、料理人、または料理を評価する言葉として、「さすがの雰囲気」「さすがの腕前」「さすがの味」といった「さすが+の」の順接用法が使用可能である。レシピ本はグルメ本と同様に、作り方や味の描写はあるものの、それはレシピの考案者自身の発想、自身の腕前によって作り出された料理だから、「使用者以外」という条件に反している。そのため、レシピの考案者は、順接用法の使用条件によって阻まれ、グルメ本と似たジャンルにもかかわらず、順接用法を使用しにくいものである。

5.3 順接用法が新聞メディアに定着した理由

「さすが+の」の順接用法が新聞メディアに定着した理由については、リポーターがこのような使用条件に適合することが挙げられる。そして、「さすがの a」タイプの順接用法が選ばれた理由は、人物への評価を表す用法はある[注6]ものの、人物の素質・力量、またはその結果への評価を表す言葉が少なかったことが想定される。人物への評価を表す「さすがのＡ」タイプはさほど増えていない(表 2 を参照)のもおそらく人物への評価を表す既存表現の阻止が原因だと考えられる。

リポーターは自分が見聞きした実際の出来事を伝えるものである。そのため、人物への評価より、その出来事に、ある人物が示した力量、成し遂げた結果といった事実のほうが好まれる。そこで、人物の素質・力量の結果への評価を表せるなおかつ汎用性の高い「さすがの a」タイプが選ばれたわけである。それから、徐々に広がり、そのままリポーターの言葉として定着したと考えられる。

６　まとめ

本発表では、「さすが+の」の順接用法の展開とその使用条件について検討し、以下のようなことを明かにした。

①「さすが+の」の順接用法は新聞メディアに定着し、書籍には定着しなかった。

②新聞メディアにおいて、「さすが+の」の順接用法は、1997 年から段階的に増え続け、2009 年に逆接用法とほぼ同じくらいの生起頻度になり、2013 年以降は逆接用法を上回り、2019 年以降は逆接用法の倍以上の出現数となっている。

③「さすが+の」の順接用法の使用条件は、使用者(話し手や書き手)の実体験であることと、評価は使用者以外に向けることである。

④順接用法が新聞メディアに定着したのは、リポーターが使用条件に適合し、順接用法もリポーターの需要に応えられるからである。

参考文献

黄允實(2022)「いわゆる「さすがの N も」をめぐって―「さすがの N」の形と「も」の機能に着目して―」『日本語文學』98、pp.83-99、日本語文學會.

周世超(2017)「「さすが」の意味・機能に関する考察」『鹿児島国際大学大学院学術論集』9、pp.33-42、鹿児島国際大学大学院.

野田春美(2017)「副詞+「の」による名詞修飾の諸相―書き言葉コーパス調査に基づいて―」『語彙論的統語論の新展開』pp.97-116、くろしお出版.

蓮沼昭子(1987)「副詞の語法と社会通念―「せっかく」と「さすがに」を例として―」『言語学の視界』pp.203-222、大学書林.

渡辺実(1997)「難語「さすが」の共時態と通時態」『上智大学国文学科紀要』14、pp.3-30、上智大学国文学科.

注6「さすが！」という「さすが」の間投詞用法、「さすが大谷選手」という「さすが+N」用法、「さすがは原監督」という「さすがは+N」用法といった人物への評価を表す用法が挙げられる。

人形浄瑠璃における義太夫「語り」の感情表現
—八王子車人形西川古柳座『日高川入相花王』より—

江澤実紀(東京外国語大学院生)
早野慎吾（都留文科大学)
井伊菜穂子(都留文科大学)
蔡東生（筑波大学)

1. はじめに

江戸文楽(人形浄瑠璃)を起源とする八王子車人形西川古柳座が、優れた感情表現などが評価されて 2022 年に国の重要無形民俗文化財に指定された。人形浄瑠璃は三名の人形遣い(主遣い、足遣い、左遣い)による芝居、義太夫の語り、三味線による演奏の三業からなる芸能であり、そのうち三人遣いの人形を一人で遣うようになったのが八王子車人形である。

これまで八王子車人形における感情表現の方法については、主に人形遣いに着目した研究がなされてきた。例えば、感情表現における人形首(かしら)の重要性を指摘した細田(2012)やモーションキャプチャを使用した動作軌跡(図 1)から感情表現を分析した早野・董(2021)、また、人形所作のリズム変化(序破急)と感情変化についてヒルベルトファン変換を用いて解析した Dong et al(2022a)などがある。三業で主導的な役割を担うのは義太夫だとされている [1)]。本研究では、義太夫の発するどのような音声的特徴に対して、人形遣いは、どのように「合わせ(息の合わせ)」を実践しているか明らかにすることを主な目的とする。対象とした人形遣いは八王子車人形西川古柳座家元・五代目西川古柳(以降古柳)、義太夫は竹本綾之助 [2)]で、演目は、感情表現がもっとも現れる『日高川入相花王』渡し場の段である。なお、三業の「合わせ」を行うために使われる音声現象を裏拍(うらびょうし)[3)]と表現する。人形浄瑠璃では、同じ現象を流派によって異なった表現をする場合があるが、本研究では基本的に西川古柳座で使用される用語を用いる。

2. 本研究の位置づけ

人形浄瑠璃は、人形遣い(所作)、義太夫(語り)、三味線(音楽)の三位一体による芸能であり、義太夫の語りに合わせた所作は強い感情移入が起きるといわれている。筆者ら AI 人形浄瑠璃研究会 [4)]のメンバーは、ヒルベルトファン変換を用いた序破急リズム解析(Dong et al.2022a、Dong et al.2022b)やモーションキャプチャを使った人形の動作解析(早野 2020、早野・董 2021)により感情表現について分析してきた。その結果、円の軌道や序破急のリズム変化(「序(slow)」「波(middle)」「急(quick)」の組み合わせ)が効果的に感情表現を演出していることを明らかにした。今回は、義太夫「語り」[5)]を中心に裏拍による「合わせ」を分析する。なお、本研究は AI 人形浄瑠璃研究会の音声分析チームによるものである。

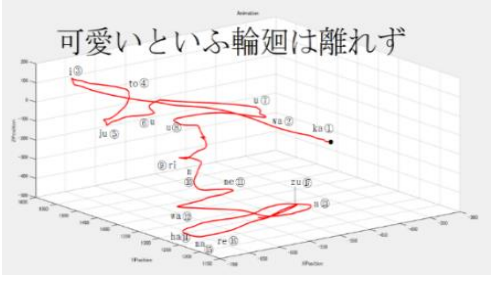


図 1　首の動作軌跡(早野・董 2021)

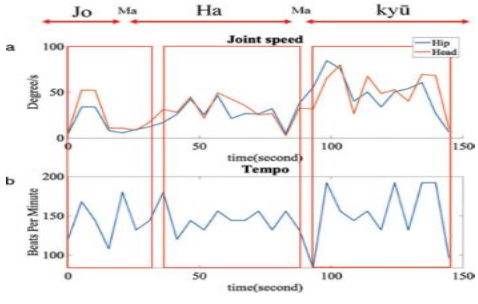


図 2　序破急のリズム変化(Dong et al.2022a)

人形浄瑠璃に関する研究は、物語や人物像など作品そのものに関する研究や、人形浄瑠璃の歴史に関する研究、人形浄瑠璃と教育現場や地域との連携に関する研究など幅広く行

われている。本研究では、義太夫の語りを音響音声学的に解析し、モーションキャプチャで採取した所作データと合わせて分析する。

筆者らの知る限り、義太夫の語りや三業の合わせに着目した研究は少ない。川合ら(2023)では、義太夫の語りに焦点をあて、人形浄瑠璃における滑稽場面(チャリ場)がどのように生み出されているのかを語り・人形・三味線に着目して論じている。そこでは義太夫の語りの特徴として「感動詞」「言い回し」「早さ」「間」「ノリ」などに分類して記述されているが、音声学的手法は用いられておらず、数量的な分析も行われていない。櫻ら(2013)では、三業の合わせではなく、三人遣いでの主遣い、足遣い、左遣いの協調操作のメカニズムを分析しており、細田(2017)では、吉田勘彌に実施した三人遣いの内省調査結果を報告している。これらは人形遣い同士の「合わせ」に着目した報告であり、人形遣い、義太夫、三味線の三業の「合わせ」についての分析ではない。渋谷ら(2017)は、三業の息の「合わせ」に着目した研究として浄瑠璃(義太夫・三味線)と人形遣いの呼吸の同期を分析しており、人形遣いの呼吸と浄瑠璃が一致していることを明らかにしているが、どのように「合わせ」を行っているかなどの具体的現象については論じられていない。本研究では、情報工学的手法を用いて、三業の裏拍を科学的に分析する。

なお、本発表では人形浄瑠璃ではなく八王子車人形をデータとして用いる。文楽などの三人遣いに対して、八王子車人形は一人遣いのため、人形遣い同士の「合わせ」が必要なく、三業の「合わせ」の分析に適していると考えられる。

3. 研究方法

モーションキャプチャによるデータの採取は 2021 年 9 月 10 日、2022 年 3 月 20 日に実施した。対象は古柳、五代目西川柳玉、竹本越孝で、調査者は早野慎吾、董然、江澤実紀である。そのデータに基づく所作と感情表現の対応に関する調査を 2022 年 10 月 27 日に実施した。対象は古柳で、調査者は江澤実紀、小形花である。義太夫語りとの「合わせ」に関する調査は 2024 年 3 月 29 日に実施した。対象は古柳で、調査者は早野慎吾、井伊菜穂子、江澤実紀である。「合わせ」の調査では、古柳の演技の動画を確認しながら、逐一、どのような音声現象が裏拍として使われているかを詳細に確認した。

今回対象とするのは『日高川入相花王』渡し場の段で、清姫の様々な感情表現が演出される場面である。西川古柳座では、通常、渡し場の段のみが上演される。この段は、全五段のうちの四段目に該当し、安珍の裏切りを知った清姫が蛇の姿となって日高川を渡り、道成寺へ向かう場面である。清姫が安珍への想いを語る感情表現が多く、今回使用するのは、人形二体以上の掛け合いでない箇所である。

4. 結果と考察

4.1. 義太夫の「語り」の特徴

西川古柳座の『日高川入相花王』の義太夫「語り」については Hayano(2023)で論じているため、ここでは、「語り」における感情表現について概略する。次頁の表 1 は、本研究の分析対象の一覧(40 句)である。「感情表現」の項の○は、古柳が感情表現として重要な台詞として指摘した箇所である。義太夫の台詞には語りと節があり、語りは説明的箇所で、節は、三味線のメロディに乗せて語られる箇所である。末尾の音を延ばす現象は、感情表現に関係しており、太字で表記している。

図 3 は「姫はあるにもあらればこそ」(通番 1)のピッチ曲線で、上図が義太夫(竹本綾之助)、下図がアナウンサー(比和谷恭子)の発音である。一音節の発音が長く、語末、句末(文節末)を数拍分延ばす長音化(末尾の母音を繰り返す「産字」を含む)が観察できる。アナウンサーでは 2.43 秒で発音される句を 11.01 秒かけて発音している。図 3 からもわかるが、語末を長音化する場合にビブラートを加えている。アナウンサーの発音に観察できる自然下降がないのも特徴である。早野･董(2021)で指摘されてるが、義太夫の発話リズム(序破急)に同調して、人形も加速と減速を行っている。

表１　『日高川入相花王』 渡し場の段の台詞一覧

通番	台詞	感情表現	語り／節	通番	台詞	感情表現	語り／歌
1	姫はあるにもあられば こそ	○	節	21	紅蓮の氷大焦熱	○	節
2	エヽ聞こえませぬ聞こえませぬ安珍さま	○	語り	22	阿鼻修羅地獄へ落るとも	○	節
3	恨みはこつちにあるものを	○	語り	23	思切られぬ安珍さま		節
4	かへつてこの身に恥かゝされ	○	語り	24	聞こえぬわいな」と身をもだへ		節
5	何と永らへゐられうぞいなう	○	節	25	「わつ」とばかりに声を上げ	○	節
6	今日とても父上の御意見		語り	26	嘆く涙の雨車軸	○	節
7	ご尤もとは思へども		語り	27	その名も高き紀の国や		節
8	女は一度我が夫と		語り	28	日高の川に水増して		節
9	思ひこんだらいかなこと		語り	29	堤も穿つごとくなり		節
10	たとへ地獄へ落るとも		語り	30	泣く目を払ひすつくと立ち	○	節
11	可愛いといふ輪廻は離れず		語り	31	「エヽ妬ましや腹立ちや	○	語り
12	まして五月の宮詣でに		節	32	思ふ夫を寝取られし		語り
13	ふつと見染めしその日より		節	33	恨みは誰に報ふべき		語り
14	愛しい床しい恋しいと		節	34	たとへこの身は川水の		語り
15	夢現にも忘れかね		節	35	底の藻屑となるとても		語り
16	焦がれ焦がるゝ恋人に	○	節	36	憎しと思ふ一念の	○	語り
17	逢ふて嬉しい言の葉を	○	節	37	やはか晴さで置くべきか と	○	語り
18	語らふ間さへ情なや	○	節	38	心を定め身繕ひ		節
19	恋の呵責に砕かれて	○	節	39	川辺に立ち寄り水の面		節
20	身は煩悩に繋がるゝ		節	40	写す姿は大蛇の有様		節

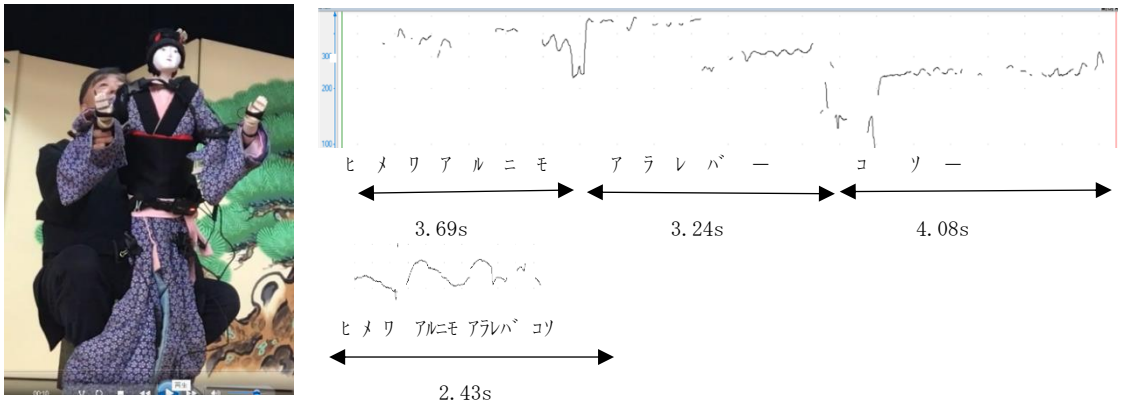


図３「姫はあるにもあらればこそ」のピッチ曲線と人形所作

末尾を延ばす長音化では、上昇音調を伴うことがある(「あられば」の「ば」、「こそ」の「そ」)。「何と永らへゐられうぞいなう」(通番 5)の「なう」、「エヽ妬ましや腹立ちや」(通番 31)の「や」、「やはか晴さで置くべきか」(通番 37)の「か」にも同様の現象が観察できる。この末尾の長音化現象や句末の上昇音調は、次に述べる裏拍と関係している。

4.2　義太夫の語りと裏拍

義太夫「語り」の特徴には、句末の長音化や上昇音調があるが、これらの現象の後にポーズ(間)が入ることが多い。これらの現象は「いっせーの、せ」のかけ声と同様に「合わせ」を行う機能がある裏拍である。古柳の内省をもとに、モーションデータを解析したところ「①上昇音調」「②長音・産字の声の切れ目」「③三味線の音」「④義太夫の突語り」「⑤義太夫の掛け声」「⑥三味線・人形遣いの掛け声」の 6 種の裏拍が確認できた。

「①上昇音調」は、図 4 のように語りの末尾の上昇音調の後にポーズが入る裏拍で、56

例中 30 例と半数以上の例で観察された。「②長音・産字の声の切れ目」は、図 5 のように末尾音を長く延ばした節で声が切れた後に入る裏拍であり、15 例観察された。「③三味線の音」は、図 6 のように義太夫の「語り」の途中に三味線の音が入る裏拍であり、33 例と最も多く観察された。「④義太夫の突語り」は、義太夫の語りを聞いた直後に人形師が動き始めるものであり、語りの開始が裏拍になっているものである。④に関しては、裏拍ではなく表拍と扱うべき現象であるが、「合わせ」に関する現象なので、今回は裏拍に含めておく。本研究のデータでは 3 例観察できた。

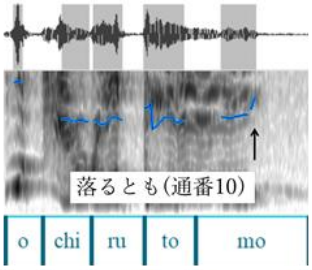


図 4「①ピッチの上昇」の例

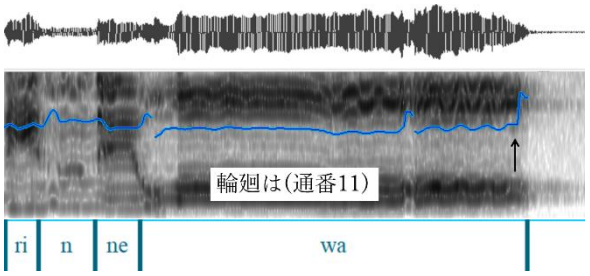


図 5 「②長音・産字の声の切れ目」の例

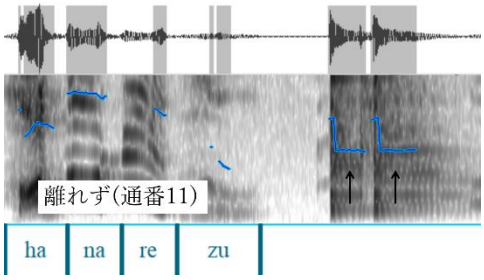


図 6「③三味線の音」の例

「⑤義太夫の掛け声」は、義太夫が「ヨー」「イヨー」「ハ」などの掛け声を入れて行う裏拍で、能楽の囃子方のかけ声(裏拍)と同じである。本研究のデータでは 1 例のみ観察され、清姫の感情が悲しみから怒りに変わる場面で用いられていた。「⑥三味線・人形遣いの掛け声」は人形遣いや三味線が、「ヨー」「ハ」などの掛け声をかけたり、人形遣いが足踏みで音を鳴らしたりする裏拍である。義太夫に合わせることが基本であるが、三味線や人形遣いが「合わせ」を要求することもできる。今回のデータでは 1 例のみ観察されたが、古柳の内省では、メリヤス(三味線が短い旋律を繰り返すこと)の終わり目がわかりにくいために、人形遣いから合図を出すことがあると述べていた。

以上の 6 種類の裏拍子は単独で現れる場合もあれば、複数が複合して出現することもある。同じ演目でも義太夫によって語り方や間の取り方が異なる。また、観客の状況を見てアドリブを加えることもある中で、義太夫は上記のような裏拍を観客にはわからない合図として用いている。たとえば「何と永らへ　ゐられうぞいなう」の「永らへ」は①と②の複合型裏拍であるが、人形は屈みながら両腕を振る「姿見」の型から、裏拍が入り次の「胸おき」に移行する。図 7 では、(3)で裏拍が入り、タイミングを合わせて(4)(5)の「胸おき」に移行している状況が確認できる。

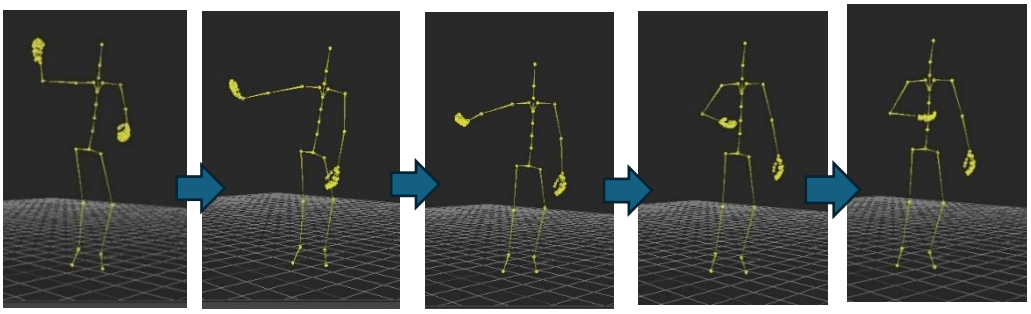


図 7　「姿見」から「胸おき」へ移行するモーションデータ

表 2　裏拍の種類とポーズの長さ(平均ｓ)　n=56

裏拍の種類(n)	単独	全体
1. ①上昇音調(12)	0.36	0.73
2. ②長音・産字の声の切れ目(1)	0.57	0.67
3. ③三味線の音(17)	1.20	1.06
4. ④義太夫の突語り(1)	29.53	10.37
5. ①上昇音調＋②長音・産字の声の切れ目(7)	—	0.41
6. ①上昇音調＋③三味線の音(8)	—	1.57
7. ①上昇音調＋⑥三味線・人形遣いの掛け声(1)	—	0.50
8. ②長音・産字の声の切れ目＋③三味線の音(4)	—	1.00
9. ③三味線の音＋④義太夫の突語り(1)	—	0.43
10. ③三味線の音＋⑤義太夫の掛け声(1)	—	6.56
11. ①上昇音調＋②長音・産字の声の切れ目＋③三味線の音(2)	—	0.69
12. ②長音･産字の声の切れ目＋③三味線の音＋④義太夫の突語り(1)	—	1.13

よく使われる裏拍は、上昇音調、長音・産字の声の切れ目、三味線の音であるが、ポーズの長さは ［三味線の音 ＞ 長音・産字の声の切れ目 ＞ 上昇音調］となっている。複合型においても、三味線の音が入ると約 1 秒の長いポーズが入るので、おそらく三味線の音がもっとも強い裏拍になっていると考えられる。従って［三味線の音 ＞ 長音・産字の声の切れ目 ＞ 上昇音調］は、裏拍の強さの順とも解釈できる。

本研究のデータで観察された裏拍 56 例に続くポーズを、秒数の長い順に 18 例を上位群、それに続く 19 例を中位群、それに続く 19 例を下位群として 3 群に分けた。それぞれの群の間の最大値、最小値、平均値を示したものが次の表 3 である。表 4 は、裏拍の種類ごとに用例数を集計したものである。

表 3　3 群それぞれの間の最小値・最大値・平均値（単位：s）

間の長さ	n	最小値	最大値	平均値
上位群	18	0.82	29.53	3.79
中位群	19	0.39	0.79	0.56
下位群	19	0.13	0.36	0.29

表 4　裏拍の種類と間の長さ

裏拍子の種類	上位群	中位群	下位群	合計
1. ①上昇音調	1	0	11	12
2. ②長音・産字の声の切れ目	0	1	0	1
3. ③三味線の音	9	5	3	17
4. ④義太夫の突語り	1	0	0	1
5. ①上昇音調＋②長音・産字の声の切れ目	0	3	4	7
6. ①上昇音調＋③三味線の音	3	4	1	8
7. ①上昇音調＋⑥三味線・人形遣いの掛け声	0	1	0	1
8. ②長音・産字の声の切れ目＋③三味線の音	2	2	0	4
9. ③三味線の音＋④義太夫の突語り	0	1	0	1
10. ③三味線の音＋⑤義太夫の掛け声	1	0	0	1
11. ①上昇音調＋②長音・産字の声の切れ目＋③三味線の音	0	2	0	2
12. ②長音・産字の声の切れ目＋③三味線の音＋④義太夫の突語り	1	0	0	1
合計(n)	18	19	19	56

表 4 から、ポーズが長い上位群は、ポーズの途中に三味線の音が単独で現れる場合や、三味線の音と他の裏拍との複合型が多いことがわかる。一方、ポーズが短い下位群は、三味線の音の用例は少なく、上昇音調が単独で現れる場合や、上昇音調と他の裏拍との複合型が多い。複合型が現れるのは、上昇音調が含まれる場合のみで、複合型のパターンが上位群と比べて少ない点も特徴である。中位群は上位群と下位群の中間的な傾向が観察できる。複合型のパターンが豊富な点や上昇音調単独の用例が少ない点では、上位群と傾向が類似しており、上昇音調が含まれる複合型が観察される点では下位群と類似している。これらも、三味線の音が強い裏拍で、上昇音調が弱い裏拍であることの根拠となる。

補　注

1) 重要無形文化財保持者(人間国宝)である七代目竹本住太夫が太夫の主導性を指摘しているほか(竹本 2014)、本研究の研究協力者である五代目西川古柳も同様の指摘をしている。
2) 本研究では、古柳座所蔵の四代目竹本綾之助(当時竹本綾一)の録音を用いた。
3) 西川古柳座では、用語として「合わせ」しかなく､「合わせ」は音声以外の現象も意味することから、本研究では裏拍を用いることにする。
4) 2016 年の科研基盤 A(16H01804 代表：中川志信)を発端とする研究チームで、AI 人形浄瑠璃ロボット制作のために人形浄瑠璃に関する分析を行っている。本チームでは科研基盤 C(20K12525 代表：蔡東生)、科研基盤 C(21K01061 代表：早野慎吾)、科研基盤 C(23K11286 代表：續木大介)で継続的に行われ、2024 年度も科研基盤 B(24K02970 代表：蔡東生)、科研費基盤研究 C(24K04478 代表：早野慎吾)が採択された。本研究は特に科研基盤 C(21K01061 代表：早野慎吾)に関係する研究である。
5) 車人形の義太夫の語りには、台詞全体を意味する場合と説明的台詞を意味する場合がある。本研究では台詞全体を意味する場合に「語り」、節(歌謡)に対する説明的台詞の場合はカッコなしで語りと表記する。

参考文献

早野慎吾(2020)「文楽人形と魂に関する社会心理学的研究 ―他者理解と擬人化―」『日本語文化の研究』3、pp.1-12

早野慎吾 董然(2021)「人形浄瑠璃の円の動きによる感情表現 －モーションキャプチャを用いた分析－」『都留文科大学研究紀要』94 pp.1-10

Hayano Shingo (2023) “Emotional Expression and Phonetic Features in Gidayu Narratives in Hidakagawa Iriaizakura” 『日本語文化の研究』5、pp.1-10

細田明宏(2012)「文楽式人形操法における「情」の表現とカシラの演技 ―八王子車人形における操法の使い分けを手がかりにして」『帝京大学文學部紀要 日本文化学』43、pp.113-135

細田明宏(2017)「三人遣いの修業と動きの基本 ―文楽人形遣い・吉田勘彌氏に聞く」『帝京大学文學部紀要』48、pp.17-99

川合由美子・野村眞木夫・洞谷亜里佐(2023)「人形浄瑠璃において滑稽場面のおかしみはどう組み立てられるのか」『上越教育大学研究紀要』43、pp.395-405

Ran Dong, Shaowen Ni, Bo Wu, Shingo Hayano, Dongsheng Cai & Soichiro Ikuno (2022a) “Analyzing Jo-Ha-Kyu Mechanism in Japanese Traditional Performing Art Ningyo Joruri.”, *2022 IEEE (DASC/ PiCom/ CBDCom/ CyberSciTech*, Falerna, Italy, pp.1-5.

Ran Dong, Dongsheng Cai, Shingo Hayano, Shinobu Nakagawa & Soichiro Ikuno(2022b) “Investigating the Effect of Jo-Ha-Kyū on Music Tempos and Kinematics across Cultures: Animation Design for 3D Characters Using Japanese Bunraku Theater.”, *Leonard The MIT Press* 55-5, pp.468-474.

櫻哲郎・成田友紀・沢井和也(2013)「文楽人形遣いの協調操作を実現する非言語情報通信」『電子情報通信学会論文誌. D, 情報・システム』96(1)、pp.195-208

渋谷友紀・櫻哲郎・佐々木正人・植田一博(2017)「文楽における浄瑠璃と人形遣いの呼吸の同期」『認知科学』24(4)、pp.518-539

竹本住大夫(2014)『人間、やっぱり情でんなぁ』文藝春秋

複数短単位版「分類語彙表番号-UniDic」対応表を用いた『分類語彙表』の分析

菊池そのみ（筑波大学）　片山久留美（国立国語研究所）
髙橋　雄太（国立国語研究所／明治大学）　小木曽智信（国立国語研究所）

1. はじめに

本発表は『複数短単位対応版「分類語彙表番号-UniDic」対応表』（国立国語研究所 2024）を用いて『分類語彙表』の見出しを計量的に分析するものである。国立国語研究所（編）（2004）『分類語彙表―増補改訂版―』（そのデータベースである『分類語彙表増補改訂版データベース』（ver.1.0）を以下では分類語彙表 DB と呼ぶ）における「分類語彙表番号」と形態素解析用辞書 UniDic とを対応づけることは近藤・田中（2020）によって試みられているが、これは分類語彙表 DB における見出しのうち、UniDic の 1 短単位と一致するもののみを対象としたものである。これに続く片山・髙橋・菊池・小木曽（2024）は、複数の短単位からなる見出しについて UniDic と対応づけ、その構築とデータの概要とについて報告している。近藤・田中（2020）と片山・髙橋・菊池・小木曽（2024）とのデータセットを合わせたものが国立国語研究所（2024）であり、本発表ではこれを用いて特に複数短単位からなる見出しに着目し、全体を概観した上で、体・用・相の各類における品詞・語種の構成や見出しの長さと「意味的範疇」の分類との関係を検討する。なお、分類語彙表 DB においては見出しの長さに関係なく、全ての見出しに 5 桁の「分類番号」が付与されており、表 1 に示すように類・部門・中項目・分類項目によって「意味的範疇」の分類が示されている。その詳細は、山崎（2004）、柏野（2006）、林（2009）等によって報告されているが、見出しの長さに着目した分析はなされておらず、UniDic との対応表が整備されたことで新たに見出しの長さや見出しを構成する語の観点からも分析が可能になったと言える。

表 1　見出しと分類番号の構造（参考：加藤・浅原・山崎 2019:135（表 1））

	見出し	分類番号	類	部門	中項目	分類項目
1短単位	猫	1.5501	体（1）	自然物および自然現象（.5）	動物（.55）	哺乳類（.5501）
	鳴く	2.3031	用（2）	精神および行為（.3）	心（.30）	声（.3031）
	めでたい	3.3310	相（3）	精神および行為（.3）	生活（.33）	人生・禍福（.3310）
複数短単位 ※「|」は短単位の切れ目	選挙|管理|委員|会	1.2730	体（1）	人間活動の主体（.2）	機関（.27）	議会（.2730）
	頭|の|中|が|真っ白|に|なる	2.3001	用（2）	精神および行為（.3）	心（.30）	感覚（.3001）
	やむ|に|やま|れ|ず	3.1230	相（3）	抽象的関係（.1）	存在（.12）	必然性（.1230）

2. 全体の概観

まず、分類語彙表 DB における見出し全体の概要について述べる。分類語彙表 DB と UniDic との対応づけがなされている全 98525 の見出しの内訳を表 2 に示す[1]。

[1] 本発表においては、「鬼がわら」や「貫き通す」等、近藤・田中（2020）において複数短単位になるとして対象外とされたものの、片山・髙橋・菊池・小木曽（2024）において 1 短単位と認定された 109 の見出し（内訳は体 54、用 19、相 30、その他 6）を 1 短単位に含めてある。

表 2　分類語彙表 DB における見出し全体の内訳

	体の類		用の類		相の類		その他		計	
	見出し数	割合	見出し数	割合	見出し数	割合	見出し数	割合	見出し数	割合
1短単位	50637	76.85%	8358	36.95%	5690	62.35%	467	52.65%	65152	66.13%
2短単位	13353	20.26%	10240	45.27%	1944	21.30%	207	23.34%	25744	26.13%
3短単位	1650	2.50%	3557	15.73%	841	9.22%	114	12.85%	6162	6.25%
4短単位	196	0.30%	280	1.24%	448	4.91%	64	7.22%	988	1.00%
5短単位	47	0.07%	156	0.69%	137	1.50%	24	2.71%	364	0.37%
6短単位	5	0.01%	15	0.07%	48	0.53%	10	1.13%	78	0.08%
7短単位	3	0.00%	13	0.06%	10	0.11%	1	0.11%	27	0.03%
8短単位	1	0.00%	0	0.00%	5	0.05%	0	0.00%	6	0.01%
9短単位	1	0.00%	0	0.00%	3	0.03%	0	0.00%	4	0.00%
計	65893	100.00%	22619	100.00%	9126	100.00%	887	100.00%	98525	100.00%

表 2 から、全体としては 1 短単位からなる見出しが 65152（約 66%）、2 短単位からなる見出しが 25744（約 26%）であり、短単位数が増えるに連れてそれに該当する見出し数が減ることが看て取れる。また、体・用・相・その他[2]の各類について見ると体の類が 65893（約 67%）、用の類が 22619（約 23%）、相の類が 9126（約 9%）、その他が 887（約 1%）である。更に体の類を見ると 1 短単位からなる見出し数が約 77%、2 短単位が約 20%を占め、3〜9 短単位が僅少であると言える。このように 1 短単位からなる見出しが最も多く、短単位数が増えていくに連れて見出し数が減る傾向は、相の類・その他においても同様である。これに対し、用の類は 1 短単位からなる見出し数が約 37%、2 短単位が約 45%、3 短単位が約 16%を占め、2 短単位のものが 1 短単位のものよりも多く、体の類・相の類・その他に比べて複数短単位で構成される見出しが多いことが読み取れる。

次に体・用・相の各類の見出しを構成する短単位の品詞（大分類）を 1 短単位からなる見出しと複数短単位からなる見出しとに分けて表 3 に示す。表 3 においては複数短単位からなる見出しについてその見出しを構成する短単位ごとに品詞を計上してある[3]。

表 3　体・用・相の類の見出しを構成する品詞（大分類）（網掛けは 10%以上の品詞）

	体の類				用の類				相の類			
	1短単位		複数短単位		1短単位		複数短単位		1短単位		複数短単位	
名詞	49636	98.02%	24961	76.23%	0	0.00%	13757	41.40%	1683	29.58%	2824	30.32%
代名詞	136	0.27%	79	0.24%	0	0.00%	7	0.02%	1	0.02%	139	1.49%
形状詞	230	0.45%	225	0.69%	0	0.00%	58	0.17%	1302	22.88%	199	2.14%
連体詞	0	0.00%	77	0.24%	0	0.00%	8	0.02%	42	0.74%	23	0.25%
副詞	45	0.09%	48	0.15%	0	0.00%	333	1.00%	1655	29.09%	366	3.93%
接続詞	0	0.00%	1	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	1	0.01%
感動詞	1	0.00%	3	0.01%	0	0.00%	2	0.01%	5	0.09%	4	0.04%
動詞	1	0.00%	481	1.47%	8332	99.69%	14630	44.02%	8	0.14%	1232	13.23%
形容詞	0	0.00%	196	0.60%	1	0.01%	100	0.30%	873	15.34%	726	7.80%
助動詞	0	0.00%	89	0.27%	13	0.16%	267	0.80%	2	0.04%	953	10.23%
助詞	3	0.01%	648	1.98%	0	0.00%	3757	11.31%	15	0.26%	1985	21.31%
接頭辞	53	0.10%	1241	3.79%	0	0.00%	130	0.39%	72	1.27%	216	2.32%
接尾辞	515	1.02%	4616	14.10%	12	0.14%	179	0.54%	31	0.54%	644	6.92%
記号	17	0.03%	63	0.19%	0	0.00%	4	0.01%	0	0.00%	0	0.00%
補助記号	0	0.00%	15	0.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.01%
計	50637	100.00%	32743	100.00%	8358	100.00%	33232	100.00%	5690	100.00%	9313	100.00%

表 3 から体の類において 1 短単位からなる見出しは名詞が約 98%を占めており、複数短単位の場合は名詞の次に接尾辞の割合が高いことから、名詞同士や名詞と接尾辞との結合

[2] 分類語彙表 DB における「その他」に該当する見出しには〈接続〉「しかしながら」「にもかかわらず」、〈挨拶〉「それではまた」「お疲れ様」、〈動物の鳴き声〉「ぴーちくぱーちく」等がある。
[3] 例えば、「説明|する」は名詞 1、動詞 1 とし、「耳|が|遠い」は名詞 1、助詞 1、形容詞 1 とする。

によって構成される見出しが多いことが示唆される。これに対し、用の類において1短単位からなる見出しはほぼ動詞であり、複数短単位の場合は動詞が約 44%、名詞が約 41%を占め、続いて助詞が約11%を占めている。相の類において1短単位からなる見出しは名詞・副詞が約 30%、形状詞が約 23%、形容詞が約 15%を占めており、複数短単位の場合は名詞が約 30%、助詞が約 21%、動詞・助動詞が約 10%を占めている。各類における複数短単位の語構成の詳細は次節以降に述べる。

更に体・用・相の各類の見出しを構成する短単位の語種を1短単位からなる見出しと複数短単位からなる見出しとに分けて表 4 に示す。表 4 は複数短単位からなる見出しについてその見出しを構成する短単位ごとに語種を計上してある[4]。表 4 から体の類は和語が約 26%、漢語が約 60%であるのに対し、用の類は和語が約 72%、漢語が約 25%であり、相の類は和語が約 67%、漢語が約 29%であり、類によって語種の構成も異なることが判る。また、特に用の類は1短単位の見出しが和語・混種語のみであるという点が体・相の類と異なっていると言える。

表 4　体・用・相の類の見出しを構成する語種

	体の類				用の類				相の類			
	1短単位	複数短単位	計	割合	1短単位	複数短単位	計	割合	1短単位	複数短単位	計	割合
和語	14112	7192	21304	25.55%	7852	22106	29958	72.03%	3174	6895	10069	67.11%
漢語	28764	21039	49803	59.73%	0	10314	10314	24.80%	2043	2266	4309	28.72%
外来語	4930	3257	8187	9.82%	0	472	472	1.13%	261	54	315	2.10%
混種語	2140	255	2395	2.87%	506	331	837	2.01%	212	93	305	2.03%
固有名	573	906	1479	1.77%	0	3	3	0.01%	0	4	4	0.03%
記号	117	94	211	0.25%	0	6	6	0.01%	0	1	1	0.01%
不明	1	0	1	0.00%	0	0	0	0.00%	0	0	0	0.00%
計	50637	32743	83380	100.00%	8358	33232	41590	100.00%	5690	9313	15003	100.00%

3. 体の類

まず、表3を踏まえて、複数短単位からなる体の類の見出しの語構成を見る。2短単位においては「前代|未聞」のような普通名詞＋普通名詞が最も多く、3 短単位においては「世|の|常」のような普通名詞＋格助詞＋普通名詞が最も多い。4 短単位においては「一|つ|二|つ」や「七|転び|八|起き」のような数詞と接尾辞や普通名詞とを組み合わせた見出しが多くを占める。5短単位以上は「風|の|前|の|ちり」「蚊|の|鳴く|よう|な|声」「はし|が|転ん|で|も|おかしい|年ごろ」「飛ん|で|火|に|入る|夏|の|虫」「一|つ|かま|の|飯|を|食っ|た|仲」のように名詞・動詞・形容詞・助詞・助動詞等によって末尾の名詞を修飾する型の見出しが見られる。

次に体の類における見出しの長さ（見出しを構成する短単位数）と「意味的範疇」の分類との関係について検討する。見出しを構成する短単位数について中項目ごとの分布（総計における上位 6 項目）を表 5 に示す。表 5 から体の類においては〈心（.30)〉が最も多く、1 短単位のみならず、2〜7 短単位においても割合が高いことが読み取れる。それに対して

[4] 例えば、「カバー|する」は外来語 1、和語 1 とし、「ローマ|字|書き」は固有名 1、漢語 1、和語 1 とする。UniDic における語種の認定の仕方については、小椋・小磯・冨士池・宮内・小西・原（2011）に詳しい。

〈作用（.15)〉は 1 短単位の割合は高いものの、複数短単位の割合は高くないという違いが見受けられる。

表 5　中項目ごとの短単位数の分布（総計上位 6 項目）

	心（.30）		言語（.31）		作用（.15）		生活（.33）		量（.19）		時間(.16）		…	短単位数ごと総計	
1短単位	4684	9.25%	3225	6.37%	3287	6.49%	2679	5.29%	2108	4.16%	1818	3.59%	…	50637	100.00%
2短単位	1229	9.20%	985	7.38%	284	2.13%	687	5.14%	503	3.77%	479	3.59%	…	13353	100.00%
3短単位	247	14.97%	100	6.06%	27	1.64%	75	4.55%	52	3.15%	109	6.61%	…	1650	100.00%
4短単位	25	12.76%	17	8.67%	2	1.02%	10	5.10%	19	9.69%	15	7.65%	…	196	100.00%
5短単位	11	23.40%	3	6.38%	2	4.26%			4	8.51%	1	2.13%	…	47	100.00%
6短単位	3	60.00%											…	5	100.00%
7短単位	2	66.67%									1	33.33%	…	3	100.00%
8短単位													…	1	100.00%
9短単位													…	1	100.00%
計	6201	9.41%	4330	6.57%	3602	5.47%	3451	5.24%	2686	4.08%	2423	3.68%	…	65893	100.00%

（網掛けは短単位数ごとの上位 6 項目に該当するもの）

また、「分類番号」の部門や中項目を用いて全体を概観すると、短単位数が多くなる（＝見出しが長くなる）に連れて見出し数が減る傾向にあるが、その下位分類である分類項目で見るとこの関係が逆転している場合がある。具体的には（1）の通りであり、これらの分類項目については全体の傾向と異なり、より長い見出しが属していることが窺える。

（1）a. 2 短単位からなる見出し数＞1 短単位からなる見出し数：〈学徒（.2419)〉「上級|生」「児童」，〈機関（.2700)〉「事務|局」「機構」，〈政府機関（.2710)〉「外務|省」「役場」，〈地帯（.5280)〉「南極|圏」「赤道」

b. 3 短単位からなる見出し数＞2 短単位からなる見出し数：〈勢い（.1403)〉「破竹|の|勢い」（2 短単位からなる見出し 0)，〈節・節目（.1634)〉「ひな|の|節句」「バレンタイン|デー」，〈国際機構（.2750)〉「世界|保健|機構」「国際|連合」

c. 4 短単位からなる見出し数＞3 短単位からなる見出し数：〈数記号（.1960)〉「二|分|の|一」「お|ひと|方」，〈議会（.2730)〉「安全|保障|理事|会」「教育|委員|会」

4. 用の類

用の類は 2 短単位において「関連|する」のような普通名詞（サ変可能）＋動詞（非自立可能）が全体の約 8 割を占めており、3 短単位においては「腹|が|立つ」のような普通名詞＋格助詞＋動詞（一般）が全体の半数を占めている。また、4 短単位においては「胸|を|躍ら|せる」のような普通名詞＋格助詞＋動詞（一般）＋助動詞、5 短単位においては「目|から|火|が|出る」のような普通名詞＋格助詞＋普通名詞＋格助詞＋動詞（一般）が最も多い。なお、分類語彙表 DB には「…て|いる」「…て|しまう」「－化|する」「せ|られる」等の見出しがあり、接続助詞・接尾辞・助動詞といった付属語が見出しの先頭に現れる場合もある。

続いて体の類と同様に見出しの長さと「意味的範疇」の分類との関係について検討する。ここでは見出しを構成する短単位数と部門との関係を表 6 に示す[5]。表 2 において見たよう

[5] 分類語彙表 DB において用・相の類には〈人間活動の主体（.2)〉〈生産物および用具（.4)〉がないことから表 6（と後掲する表 7）から除いてある。

に用の類は全体として 2 短単位からなる見出しが最も多いが、表 6 を見ると〈抽象的関係(.1)〉と〈自然物および自然現象（.5)〉とにおいては 1 短単位からなる見出しの方が多いことが読み取れる。つまり、2 短単位からなる見出しが最も多いという用の類全体の様相は、全体の約 6 割を占める〈精神および行為（.3)〉における様相を反映したものであり、部門ごとの内実は異なっていると言える。

表 6　用の類における見出しの長さと部門との関係

	抽象的関係（.1)		精神および行為（.3)		自然物および自然現象（.5)		計	
1短単位	3642	43.58%	4022	48.12%	694	8.30%	8358	100.00%
2短単位	3062	29.90%	6510	63.57%	668	6.52%	10240	100.00%
3短単位	818	23.00%	2527	71.04%	212	5.96%	3557	100.00%
4短単位	52	18.57%	216	77.14%	12	4.29%	280	100.00%
5短単位	26	16.67%	118	75.64%	12	7.69%	156	100.00%
6短単位	4	26.67%	10	66.67%	1	6.67%	15	100.00%
7短単位	0	0.00%	12	92.31%	1	7.69%	13	100.00%
計	7604	33.62%	13415	59.31%	1600	7.07%	22619	100.00%

また、分類項目について、体の類は 1 短単位からなる見出しが全ての項目に属しているのに対し、用の類は（2）に示す項目において複数短単位からなる見出しのみが属している（＝1 短単位からなる見出しがない）場合がある。これらの項目に該当する用の類の見出しは、1 短単位では作りにくいものである可能性がある。

(2)　〈こそあど（.1010)〉「こう|する」「どう|か|する」,〈真偽・是非（.1030)〉「是非|を|分かつ」,〈出入り（.1530)〉「出入り|する」,〈見聞き（.3090)〉「視聴|する」,〈符合(.3114)〉「マーク|する」「句読点|を|打つ」,〈旅・行楽（.3371)〉「ハイキング|を|する」,〈身上（.3410)〉「お|里|が|知れ|る」「すね|に|傷|を|持つ」,〈税（.3720)〉「納税|する」「税|が|掛かる」,〈エネルギー（.5001)〉「放電|する」「ぴかぴか|する」)

5. 相の類

相の類は 2 短単位において「間違っ|た」のような動詞＋助動詞や「本格|的」のような普通名詞＋接尾辞（形状詞的）が多くを占めており、3 短単位においては「耳|が|遠い」のような普通名詞＋格助詞＋形容詞が多くを占めている。また、4 短単位においては「訳|の|分から|ない」のような普通名詞＋格助詞＋動詞＋助動詞、5 短単位においては「味|も|素っ気|も|ない」のような普通名詞＋係助詞＋普通名詞＋係助詞＋形容詞が多くを占めている。

続いて見出しの長さ（見出しを構成する短単位数）と「意味的範疇」の分類との関係について検討する。用の類と同様に見出しを構成する短単位数と部門との関係を表 7 に示す。表 2 において見たように相の類は全体として 1 短単位からなる見出しが最も多いが、表 7 を見ると用の類に比して〈抽象的関係(.1)〉と〈精神および行為（.3)〉との間の数値の隔たりが小さいことが判る。この点について中項目を見ると、前者の中では特に「規則|的」「ちょっと|し|た」等の〈様相（.13)〉と「一|晩|中」「知ら|ぬ|間|に」等の〈時間(.16)〉とが多くを占め、後者の中で

表 7　相の類における見出しの長さと部門との関係

	抽象的関係（.1)		精神および行為（.3)		自然物および自然現象（.5)		計	
1短単位	2503	43.99%	2295	40.33%	892	15.68%	5690	100.00%
2短単位	888	45.68%	878	45.16%	178	9.16%	1944	100.00%
3短単位	347	41.26%	427	50.77%	67	7.97%	841	100.00%
4短単位	225	50.22%	204	45.54%	19	4.24%	448	100.00%
5短単位	69	50.36%	65	47.45%	3	2.19%	137	100.00%
6短単位	27	56.25%	20	41.67%	1	2.08%	48	100.00%
7短単位	4	40.00%	6	60.00%	0	0.00%	10	100.00%
8短単位	2	40.00%	3	60.00%	0	0.00%	5	100.00%
9短単位	0	0.00%	3	100.00%	0	0.00%	3	100.00%
計	4065	44.54%	3901	42.75%	1160	12.71%	9126	100.00%

は特に「親し|げ」「気|が|進ま|ない」等の〈心（.30)〉が多くを占めている。また、分類項目で見ると〈信念・努力・忍耐（.3040)〉には 7 短単位以外の全ての長さの見出しがあり、〈良不良・適不適（.1332)〉等には 7 短単位・9 短単位以外の全ての長さの見出しがある。具体例は（3）の通りである。

（3） 〈3.1332 良不良・適不適〉「中途|半端」「まんざら|で|も|ない」「帯|に|短し|たすき|に|長し」「毒|に|も|薬|に|も|なら|ない」，〈3.3040 信念・努力・忍耐〉「手|を|替え|品|を|替え」「雨|が|降ろう|が|槍|が|降ろう|が」「横|の|物|を|縦|に|も|し|ない」

6. おわりに

本発表では『複数短単位対応版「分類語彙表番号-UniDic」対応表』を用いて分類語彙表DBの見出しについて全体を概観し、体・用・相の各類における特徴を見出しの長さの観点から分析した。本発表は分類語彙表 DB の分析を通して短単位という言語単位に基づいて日本語の語彙を捉えるための方法論の開拓やその際に生ずる問題点・解決策を模索することを試みるものとして位置づけられる。また、この対応表は水谷（1983）が「語彙に関する分布問題」の 1 つとして提起するような語の長さと出現頻度・語彙頻度との関係を捉えようとする計量語彙論的な分析に資するデータセットであり、加藤・浅原・山崎（2019）に類するコーパスデータの分析や意味分類を用いた文章の分析にも寄与するものと言える。

付記　本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」の成果の一部です。

資料　国立国語研究所（編）（2004）『国立国語研究所資料集 14 分類語彙表―増補改訂版』，大日本図書／国立国語研究所（2004）『分類語彙表増補改訂版データベース』（ver.1.0）（https://github.com/masayu-a/WLSP）／国立国語研究所（2020）『分類語彙表番号-UniDic 語彙素番号対応表』（https://github.com/masayu-a/wlsp2unidic）／国立国語研究所（2024）『複数短単位対応版「分類語彙表番号-UniDic」対応表』（https://doi.org/10.15084/0002000248）

参考文献　小椋秀樹・小磯花絵・冨士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕（2011）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集』第 4 版，国立国語研究所／柏野和佳子（2006）「『分類語彙表』の特徴と位置付け」『日本語科学』19，pp.143-160，国立国語研究所／片山久留美・髙橋雄太・菊池そのみ・小木曽智信（2024）「複数短単位版「分類語彙表-UniDic」対応表の整備と公開」『言語処理学会第30回年次大会発表論文集』，pp.165-170，言語処理学会／加藤祥・浅原正幸・山崎誠（2019）「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍・新聞・雑誌データ」『日本語の研究』15（2），pp.134-141，日本語学会／近藤明日子・田中牧郎（2020）「分類語彙表番号-UniDic 語彙素番号対応表」の構築」『国立国語研究所論集』18，pp.77-91，国立国語研究所／水谷静夫（1983）「語彙に関する分布問題」『朝倉日本語新講座 2 語彙』，pp.86-120，朝倉書店／山崎誠（2004）「『分類語彙表―増補改訂版―』の分類の特徴について」『日本語文學』20，pp.73-86，日本語文學會／林彦伶（2009）「『分類語彙表』における各意味分野の語数」『語彙研究』7，pp.40-47，語彙研究会

「国立国会図書館館デジタルテキストデータ」を利用した日本語研究の可能性と限界

岡田　祥平（新潟大学）

１．はじめに

日本語研究において，コーパスや電子化資料が利用されるようになって久しい。日本語研究用のコーパスの構築，整備の中心である国立国語研究所のプロジェクトでは，今後も様々なコーパスを構築，整備が進められ[1]，それらを利用した日本語研究の発展，飛躍が期待される。

その一方で，日本語研究用には整備されていないものの，用例の検索が（比較的）手軽にできる（インターネット上で公開されていて，無料で利用できる）電子化資料（各種 Web サイトや「国会会議録検索システム」，Twitter など）を利用した日本語研究も，精力的に進められている（そのような研究を概観したものとして，松田［編］,2008，荻野・田野村［編］2011，荻野 2014，岡田, 2014・2019，田川, 2024 などを参照）。また，有料のデータベースを日本語研究に利用する可能性を模索した試みもある（竹部, 2023 など）。

このように，近年の日本語研究では，日本語研究用に整備されたコーパスのみならず，（特にインターネット上で公開されている）電子化資料を利用した研究が盛んになっているわけであるが，国立国会図書館が 2000 年度から進められている作業によってデジタル化された所蔵資料（https://www.ndl.go.jp/jp/preservation/digitization/index.html なども参照）も無視できないだろう。というのも，日本語学会 2023 年度春季大会のシンポジウム「情報技術と大規模テキスト資源がひらく日本語史研究」でも取り上げられた通り，「2021 年度に，その時点で国立国会図書館デジタルコレクションから提供していたほぼ全ての明治期以降に刊行された活字のデジタル化資料約 247 万点（2 億 2300 万画像）を，資料の読み取りに最適化した OCR でテキスト化する事業を実施」（上記シンポジウムの「趣旨」説明文より）され，全文検索が可能となった資料が飛躍的に増えたからである。

そのような状況の中，既に日本語研究の世界でも国立国会図書館のデジタル化資料を利用した研究の試みが発表されつつある（小西, 2023 や岡田, 印刷中など）。また，「初学者にとって効果的な日本語研究の手法について紹介し」た岡田一祐氏によるウェビナー「日本語研究に役立つ情報資源の効果的な使い方」[2]や，国立国会図書館（2023）では，国立国会図書館のデジタル化資料を利用法についても示唆に富む解説がなされている。さらに，国立国会図書館のデジタル化資料を日本文学研究に利用する試みが紹介された日比嘉高氏によるウェビナー「日本研究のための情報源活用法」（令和 5 年度）（「全文テキストデータを利用した近現代日本文学の研究」）[3]も非常に示唆的である。さらに，小林（2023）は，国立国会図書館のデジタル化資料をめぐる近年の状況の変化（２．１を参照）を踏まえ，「日本の学問が全部書き変わる」とまで述べている。

ただ，国会図書館が所蔵する資料のデジタル化作業は現在も進行中であることに加え（国立国会図書館, 2021），そもそも日本語研究用に開発，制作されたコーパスではないことから，日本語研究者が国会図書館のデジタル化資料をどのように使っていくのか，知見を共有し，その可能性と限界に関する議論を深める必要があると思われる。

そのような問題意識のもと，日本語学会 2023 年度春季大会のシンポジウムでの問題提起，議論も念頭に置きつつ，本稿では，まず，２節で現在利用可能な国立国会図書館のデジタル化資料検索システム，プラットフォームの概観を行う。そのうえで，筆者や既に国立国会図書館のデジタル化資料を活用されている方の実践などを踏まえ，国立国会図書館のデジタル化資料を日本語研究に利用する可能性（３節）と限界（４節）を簡単に述べる。

以下，本稿（本発表）では国立国会図書館のデジタル化資料のうち，特に全文検索が可能なものを（引用文中は除く）「NDL デジタルテキストデータ」と表記する。なお，NDL デジタルテキストデータの詳細については青池（2023）や国立国会図書館（2023），また，その検索システム，プラットフォームの活用法については小林（2023，2024）や上記岡田氏のウェビナーの内容からも大きな

---

[1] 文化庁（2024）によると，「国語施策の充実」の予算として，令和 6 年度から令和 10 年度までの予定で実施される「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」で，「「現代日本語書き言葉均衡コーパス」に，2006 年から 2025 年までの 20 年分の日本語データを追加し，１億語規模から 3 億語規模の現代日本語コーパスに拡充」されることは，特に注目に値しよう。

[2] 国立国会図書館のページ（https://www.ndl.go.jp/jp/library/training/remote/2022webinar1.html）で，講義動画や資料，参考リンクなどが閲覧可能。

[3] 国立国会図書館のページ（https://www.ndl.go.jp/jp/library/training/guide/jsl_webinar2023.html）で，ウェビナーの概要と「受講者から寄せられた質問と講師による回答」が閲覧可能。

示唆を得，それらに拠る部分も大きいことをあらかじめ付記しておく。ただし，筆者の誤解，誤認識も含まれている場合，その責はその責は筆者にあることは言うまでもない。。

２．NDL デジタルテキストデータの検索に使える三つのシステム，プラットフォームの概観

NDL デジタルテキストデータは，２で引用した国立国会図書館（2023）の中で言及されていた「国立国会図書館デジタルコレクション」も含め，以下に示す三つの検索システム，プラットフォーム（以下「検索システム」と表記）で全文検索が可能である（②，③は NDL ラボ https://lab.ndl.go.jp/によって開発，提供されているもの。詳細は青池, 2023 なども参照）。

①「国立国会図書館デジタルコレクション」（https://dl.ndl.go.jp/ja/，以下「デジコレ」と表記）

②「NDL Ngram Viewer」（https://lab.ndl.go.jp/ngramviewer/，以下「Ngram」と表記）

③「次世代デジタルライブラリー」（https://lab.ndl.go.jp/dl/，以下「次世代」と表記）

それぞれの検索システムは，検索可能な資料の量や特徴が異なる。それらをまとめたのが，以下の表１である。

表１　NDL デジタルテキストデータの全文検索に使える三つの検索システムの概要

	国立国会図書館 デジタルコレクション	NDL Ngram Viewer	次世代デジタル ライブラリー
全文検索が可能な資料の量（点数）	約 257 万点（「デジコレ」に収録されている資料の総数は，音源，映像資料も含め約 550 万点）	約 230 万点	約 35 万点
収録されている 主な資料と その年代	・明治期以降，1987 年までに整理された図書（約 107 万点） ・劣化した雑誌や刊行後 5 年以上経過した学術雑誌（約 132 万点） ・博士論文（約 15 万点） ・1883～1952 年の官報（約 2 万点）　など[4]	・主に 1960 年代までに刊行された図書（約 97 万点） ・主に 1990 年代までに刊行された雑誌（約 132 万点）	・著作権の保護期間が満了した図書(約 28 万点) 及び古典籍資料(約 8 万点)
特徴	・多種多様なデータ ・公開範囲が 3 種類（「ログインなしで閲覧可能」「送信サービスで閲覧可能」「国会図書館内限定」）	・検索語対象語出版年代ごとの出現頻度と出現比率の可視化が可能（頻度のデータもダウンロード可能） ・簡単な正規表現を用いた検索が可能 ・本文を確認するには「デジコレ」を参照する必要あり	・検索語が資料画像の上に一致箇所がピンで表示される ・全文のテキストファイルがダウンロード可能

当然であるが，NDL デジタルテキストデータを日本語研究に利用する際には，表１で示したようなそれぞれの検索システムを念頭に入れ，目的に応じた使い分けをする必要があるが，その点については次節で筆者の利用経験も踏まえつつ簡単にまとめを行うことにする。その前に本節では，以下，その前提となる事項について 4 点，簡単に確認したい。

２．１　NDL デジタルテキストデータの作成に利用された OCR 処理について

紙媒体のテキストをデジタル化した電子化資料を利用するにあたっては，OCR の精度が資料の信頼性に大きく関係する。青池（2023）によると，現在，提供されている NDL デジタルテキストデータ資料は，2020 年度補正予算（第 3 号）を用いて 2021 年度に OCR によるテキスト化がされたものである。その際，使用された OCR は，国立国会図書館が従来使用していたものに改善作業が施されており（詳細は https://lab.ndl.go.jp/data_set/ocr/r3_text/も参照），青池（2023）は「1870 年以降に出版された評価対象の出版年代の資料に対し，F 値（適合率と再現率の調和平均）による評価において平均 0.968 という極めて高い認識性能を有しており，NDL が全文検索サービスに利用するうえで十分な品質に到達したと考えている」と述べている。

このようにして「改善作業後の OCR で作成した約 247 万点，2.2 億画像分のテキストデータは，2022 年 12 月にリニューアルした NDL デジタルコレクションの全文検索機能において利用提供が開始」（青池, 2023）された。それに対し小林（2023）は，リニューアル前の「デジコレ」で提

[4]「デジコレ」に収載されている文献の書誌情報は https://www.ndl.go.jp/jp/dlib/standards/opendataset/index.html を参照。

供されていたデータと比較し，「「質」も良くなっている」「インターフェイスの改善もあって，247 万点の全文データは十分使い物になる。」と高く評価している。

とはいえ，「OCR 処理による全文テキストは校正を行っていないため，誤認識されたテキストが検索・表示される場合があ」る（国立国会図書館, 2023）ことも事実である。国立国会図書館（2023）では，NDL デジタルテキストデータの全文検索を「使いこなすポイント」として「ノイズ対策を考えてみる」「文字を何でも機械的に読み取っていることを踏まえる」「表記揺れを意識し，色々と試してみる（表記揺れの補正はされない）」[5]の三つを挙げている。これらのポイントは，「デジコレ」や「次世代」を日本語研究に利用する際にも非常に有益であろう（詳細は２．３の議論も参照）。

２．２　検索可能な資料の量とその種類，ならびに刊行年代について

表 1 で示した通り，NDL デジタルテキストデータのうち最も多くの資料を検索できるのは，「デジコレ」で約 257 万点である。国立国会図書館（2023）には，「日々進化中：デジタル資料は追加され，全文検索可能な資料が増えることもある。」という記述があるが，日本語学会 2023 年度春季大会のシンポジウムや小林（2023）で言及されていた点数（247 万点）からさらに増えていることになる[6]。なお，国立国会図書館（2023）によると（おそらくは当該資料作成された時点で）国立国会図書館の所蔵資料は約 4,680 万点とのことであるので，デジコレで全文検索可能な NDL デジタルテキストデータは国立国会図書館所蔵の資料の約 5.5%を占めることになる。

この数字をどのように受け止めるかは立場によって異なるであろうが，小林（2023）は 2022 年 12 月の「デジコレ」のリニューアルの「目玉」は「「量」の改善」，すなわち「全文データが劇的に増えたことだ。以前の 5 万点から 247 万点，つまり量において約 50 倍になった」点をあげている。結果として，NDL デジタルテキストデータが検索できるシステムの中では最も多種多様な種類，そして非常に幅広い年代の資料が収録されている。

一方，「次世代」は，青池（2023）によると，２．１で紹介した形で電子化した資料を「デジタルコレクションにおける提供に 1 年程度先行して，次世代室（引用者註：　国立国会図書館電子情報部電子情報企画課次世代システム開発研究室のこと）が開発・運用している実験サービス」で，「著作権保護期間満了図書資料約 28 万点に限定した形で試験的な機能提供を開始し」たとのことである。表１に示した通り，本稿執筆時点で「次世代」には古典籍資料が加わっている，上述したような経緯，性格で提供されているものであり，「デジコレ」と比較して検索可能な資料が少なく，また，基本的には著作権が切れた資料が収録されていることになる。

ただ，「次世代」で検索可能な資料数が少ないというのは，あくまで「デジコレ」と比較した場合である。青池（2023）によると，サービス提供時点で約 28 万点の資料の検索ができる「次世代」では「検索時にヒットする情報が大幅に増加したことで，調べたい対象と関係が薄いノイズとなる情報も増え，利用者が必要とする資料が埋もれてしまうという新たな課題も浮かび上が」った。そうした課題に対して，「利用者の労力を抑えて大量の情報から効率的に目的の資料に辿りつけるよう，膨大な情報の中から必要な検索条件に「当たり」をつけることのできる手段を提供すること」（青池，2023）を目的に公開されたのが，「Ngram」である。

表 1 からわかるように，「Ngram」では「次世代」よりも多くの，また幅広い刊行年代の NDL デジタルテキストデータの検索が可能である。ただし，「デジコレ」と比較すると検索可能な資料の種類は少なく，また，刊行年代の幅も狭くなる[7]。

２．３　NDL デジタルテキストデータを検索する際の留意点

２．３．１　文字の「正規化」について

２．１で紹介した通り，国立国会図書館（2023）では NDL デジタルテキストデータの全文検索を「使いこなすポイント」の一つとして「表記揺れを意識し，色々と試してみる」ことをあげ，たとえば「ミケランジェロ」を検索する際には「ミケランヂェロ」「ミケラアンゼロ」「ミケランゼロ」「ミケルアンヂェロ」といった表記も検索するようにとの注意喚起を行っている。

---

[5] 岡田（印刷中）では校正中に調査対象語（表現）の別表記に気付くというミスを犯していることを告白しておく（詳細は岡田，印刷中の「付記」を参照）。

[6] 国立国会図書館の Web ページ「2024 年 1 月 18 日「「国立国会図書館デジタルコレクション」の全文検索対象資料を順次拡大します」（https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2023/240118_03.html）によると，令和 6 年度末までには合計 322 万点が全文検索の対象になるという。

[7] なお，青池（2023）によると，「Ngram」の「公開当初は著作権保護期間が満了した図書 28 万点を対象としたものだったが，2023 年 1 月に範囲を拡大」され，表 1 で示した点数の検索が可能になったとのこと。

この点に関して，「デジコレ」の「ヘルプ」の「2-5 検索における注意点＞(1)検索における正規化について」(https://dl.ndl.go.jp/help#idx2-5) によると，少なくとも「デジコレ」での検索では以下の処理がなされているとのことである。

①数字の全角/半角，異体字（例　竜/龍など），ひらがな/カタカナ，拗音（「や」/「ゃ」，「ゆ」/「ゅ」，「よ」/「ょ」），促音（「つ」/「っ」）は区別しないため，どちらを入力してもヒットする。

②半角記号（!?=^_など）と全角記号（、。,．・：；など）は無視される。

一方で，「Ngram」や「次世代」でも「デジコレ」と同様の処理が施されているのか，判然としない（どこかに情報が提供されているのかもしれないが，筆者には見つけることができなかった）。

そこで，三つの NDL デジタルテキストデータの検索システムにおいて，検索の際，（漢字の）異体字や文字種（ひらがなかカタカナか），拗音表記，促音表記がどのように処理されているのか推測する手がかりを得るべく，以下の文字列をそれぞれの検索システムで検索を試みた。以下の表 2，表 3，表 4 は，それぞれの文字列の検索の結果の件数をまとめたものである。

・「竜之介/龍之介」「国立大学/國立大學」（漢字の異体字の処理の確認）

・「ドン・キホーテ/ドンキホーテ/どん・きほーて/どんきほーて」（文字種と記号の処理の確認）

・「ミュージック/ミユージック/ミュージツク/ミユージツク/みゅーじっく/みゆーじっく/みゅーじつく/みゆーじつく」（文字種，ならびに拗音表記，促音表記の処理の確認）

表 2　NDL デジタルテキストデータの検索システムの検索結果①：漢字の異体字の処理に関して

	デジコレ	Ngram	次世代		デジコレ	Ngram	次世代
竜之介	91,929	294,056	2,166	国立大学	193,006	249,294	2,166
龍之介	91,929	「竜之介」の結果が表示	2,166	國立大學	193,006	「国立大学」の結果が表示	2,166

表 3　NDL デジタルテキストデータの検索システムの検索結果②：文字種と記号の処理に関して

	デジコレ	Ngram	次世代		デジコレ	Ngram	次世代
ドン･キホーテ	55,188	結果非表示	911	どん･きほーて	1,140	結果非表示	1
ドンキホーテ	55,188	125,775	877	どんきほーて	1,140	24	3

表 4　NDL デジタルテキストデータの検索ｼｽﾃﾑの検索結果③：文字種，拗音，促音の処理に関して

	デジコレ	Ngram	次世代		デジコレ	Ngram	次世代
ミュージック	105,326	346,583	457	みゅーじっく	5,842	結果非表示	1
ミユージック	12,419	3,921	60	みゆーじっく	5,777	結果非表示	1
ミュージツク	7,101	681	45	みゅーじつく	5,772	結果非表示	0
ミユージツク	9,633	3,445	279	みゆーじつく	5,778	結果非表示	1

表 2 からは，少なくとも漢字の異体字については，どの検索システムも統一的に処理されているようである。また，表 3 からは，「次世代」で記号「・」の有無によって検索結果が多少異なるが大きな違いではなく，また，「デジコレ」での検索結果は記号の有無に関わらず同じ，さらに「Ngram」では記号ありの場合は検索結果が表示されないとのことで，「デジコレ」だけでなく「Ngram」や「次世代」でも各種記号は検索の際に無視されることが推察できる[8]。

一方で，表 3，表 4 からは，文字種の違い，ならびに拗音表記，促音表記の違いによって，検索結果が異なることが読み取れる。

以上の点は，日本語研究，特に文字・表記研究で，NDL デジタルテキストデータを使用（検索）する際に留意しなければならないだろう。

２．３．２　書字方向への配慮

高橋さきの氏は，「次世代」を利用していわゆる「右横書き」の文字列を検索する際には「さかさ言葉で検索せねばならない」（たとえば，原本で「右横書き」で表記されている「シマコフカ」を「次世代」で検索する際には「カフコマシ」と入力しなければならない）と指摘している（https://x.com/sakinotk/status/1763425393472905410）。高橋氏のポストを受け確認したところ，「デジコレ」や「Ngram」で確認したところ，同様の配慮をしなければならないことが分かった。つまり，NDL デジタルテキストデータを検索する際には，書字方向にも配慮をする必要があるわけである。

３．NDL デジタルテキストデータを利用した日本語研究の可能性

３．１　「国立国会図書館デジタルコレクション」の場合

表 1 で示した通り，「デジコレ」は NDL デジタルテキストデータの検索システムの中で最も

[8] 勿論，「・」以外の記号でも確認する必要があるが，三つの検索システムでは，少なくとも句読点は無視されることは確認している。

多くの（多種多様な）資料を格納している。ただし，基本的には単純な文字列しかできない[9]。

ただし，「詳細検索」画面で検索対象資料を指定したり，出版年月日を指定したりすることができる。これらを利用すれば，特定の資料，あるいは特定の年代における用例を簡単に確認することができる。また，検索結果は，出版日の古い順，あるいは新しい順に並べ替えることもできる。この機能を利用すれば，NDL デジタルテキストデータにおける用例の初出を簡単に確認できる（国立国会図書館「リサーチナビ」の「日本語の初出・語源，ものごとの始まりを調べる＞1.言葉の初出・語源を調べる＞1-2.データベースから調べる」https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/humanities/etymology-origin#a1-2 も参照）。

なお，表 1 で示した通り，「デジコレ」で検索可能な NDL デジタルテキストデータには，「ログインなしで閲覧可能」「送信サービスで閲覧可能」「国会図書館内限定」という三つのカテゴリが存在する。そのうち，自身の端末で閲覧できるのは「ログインなしで閲覧可能」だけである。「送信サービスで閲覧可能」な資料を自身の端末で閲覧するためには，利用者登録をしなければならない（https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html）[10]。さらに，「国会図書館内限定」の資料は，国立国会図書館（本館・関西館・国際子ども図書館）内の端末でしか閲覧できない[11]・[12]。

その他，「デジコレ」を利用した用例検索の方法については，小林（2023）に様々な試みがまとめられており，非常に参考になる。

３．２　「NDL Ngram Viewer」の場合

２．２でも引用した青池（2023）のような意図をもって開発された「Ngram」は，NDL デジタルテキストデータを検索する際に大変重宝する。「Ngram」は簡単な正規表現を使用した検索ができるため，日本語研究にも応用しやすい。たとえば，正規表現を利用して「京都に/へ行く」といった助詞の使い分けや，「ご機嫌よう/きげんよう」といった表記のゆれ，さらに「ざあます」といった表現にどのような語・表現が続くのかといったコロケーションの研究にも利用できる。

しかも，検索結果は，検索語の出現頻度，あるいは出現比率[13]の経年変化を可視化（折れ線グラフ化）したものが表示される。また，検索結果を合算した折れ線グラフも簡単に作成できる。そして，折れ線グラフのマーカーをクリックすると，「デジコレ」で当該年の検索結果を確認することができる。さらに，出現頻度（最大 10,000 件）や出版年代ごとの総対象 Ngram 数の情報をダウンロードすることも可能であるため，自身で検索結果を加工することも可能である。

その他，「Ngram」を利用した用例検索の方法については，小林（2024）に様々な試みがまとめられており，非常に参考になる。

３．３　「次世代デジタルライブラリー」の場合

「次世代」の最大の特徴は，「次世代」に収録されている全文テキストデータをダウンロードできるところにあろう。それを利用すれば，コーパスを自作することも不可能ではない[14]。また，資料画像において検索語に対してピンが表示されるため，資料画像（原典）から検索語を探し出すことが（「デジコレ」と比較して）非常に容易である（小林, 2023 も参照）。

国立国会図書館「リサーチナビ」の「全文検索を活用するには＞3.NDL ラボの全文検索等＞1.

---

[9] 「デジコレ」の「ヘルプ」の「2-5 検索における注意点＞(2)検索仕様について」（https://dl.ndl.go.jp/help#idx2-5）によると，「検索語の後ろにアスタリスク（*）をつけることで，前方一致検索ができ」るが，後方一致検索はできないようである（後方一致検索ができるのは請求記号，各種番号の検索のみ）。ただし，文字列の「AND 検索」「OR 検索」「NOT 検索」は可能である。

[10] 福林（2022）には「海外への送信は来年度以降に検討予定」とあるが，本稿執筆時点で利用者登録ができるのは日本国内に居住者に限定されている。なお，福林（2022）によると，2022 年 11 月 1 日現在，海外の図書館 6 館にデジタル化資料の送信を行っているとのことである。

[11] ただし，検索語の前後文脈は「スニペット表示」で国会図書館外からの端末でも確認可能である。

[12] 岡田（印刷中）では，「デジコレ」で「ざあます言葉」（種々の表記のゆれも含む）という表現を検索した結果，自身の端末で閲覧できる用例（「ログインなしで閲覧可能」「送信サービスで閲覧可能」での用例）が過半数を超えるのは 1960 年代までであること，1970 年代以降はそれらに該当する用例の割合が 20%代から 40%弱に減少すると報告している。

[13] ただし，「Ngram」で表示される出現頻度の扱いには注意を要する。日比（2022）や小林（2024），さらに註 2 で紹介したリンク先に up されている岡田一祐氏による「講義資料」も参照。

[14] なお，日比（2024）では「次世代」に収録されている全文テキストデータをダウンロードし，形態素解析をしたうえで，トピックモデルと称されるテキスト分析である LDA(Latent Dirichlet Allocation)を用い，1901-1905 年の期間の作品について，各トピックの一致度の高いデータから 5 つのサブジャンル名を推定すると同時に，全文書に対するサブジャンルの割合も算出する試みが紹介されている。

言葉の初出・語源を調べる＞3-1.次世代デジタルライブラリーの全文検索」によると,「令和 6 年 2 月現在, 古典籍資料は, 国立国会図書館デジタルコレクションでは全文検索が行え」ないため,「古典籍資料の全文検索を行いたい場合」は「次世代」を利用する必要があるとのことである。

３．４　NDL デジタルテキストデータを利用した日本語研究の可能性：　まとめ

以上，検索システムごとに NDL デジタルテキストデータを利用した日本語研究の可能性について述べてきたが，最後にまとめとして，検索システムの違いを越えた NDL デジタルテキストデータを利用した日本語研究の可能性について述べておきたい。

まず，特別な知識なしでも利用が可能で，それ相応の成果を出せる点である。国立国語研究所が制作, 開発しているコーパスは非常に有用であることは言うまでもないが，日本語学に関する一定の知識が必要であるし，使いこなせるようになるまで一定の時間がかかる（ある程度の訓練が必要である)。一方，NDL デジタルテキストデータは日本語学の知識がなくてもある程度使いこなせる[15]。また，無料で使えるという点も魅力的である（小林, 2024 の指摘も参照)。これらの特徴は，日本語研究を専門としない人々に対して（用例収集を重視する）日本語研究にきっかけを持ってもらえる「きっかけ作り」のツールとしても生かせるのではないだろうか。

４．NDL デジタルテキストデータを利用した日本語研究の限界

最後に，NDL デジタルテキストデータを利用した日本語研究の限界について，筆者が現時点で抱いている三つの検索システムに共通する課題をあげておく。

まず,（「周辺的」な現象であっても）検索結果が膨大出ることがほとんどであり，逐一，用例を確認できないという点である。その結果, 検索結果に検索者が意図しない用例が含まれていたとしても, それを除外することが難しいし, 用例を逐一検討して, 詳細な記述をすることも困難である。また，２．３．１でも触れたように，句読点やカッコ類は検索できないため，たとえば「文末の述語の表現」を調査することは非常に困難である。さらに,「Ngram」については検索不可能な文字列も存在するようである[16]。

その他にも，NDL デジタルテキストデータを日本語研究に利用する際の「限界」が存在するかもしれない。本稿をもとに，NDL デジタルテキストデータの活用に関心をお持ちの日本語研究者と，それらに関する情報や「限界」に対する打開策などについて，議論を深めたい。

参考文献（副題は省略）●青池 亨（2023）「日本語資料に対する国立国会図書館の OCR 関連事業と成果物の活用」『日本語学会 2023 年度春季大会予稿集』●岡田祥平（2014）「インターネットを利用した新語・流行語研究の可能性」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』6(2)●岡田祥平（2019）「一語からはじめる SNS のことばの研究」『日本語学』38(4)●岡田祥平（印刷中）「〈ざあます言葉〉と呼ばれる言葉遣いに対する眼差し」日本近代語研究会［編］『論究日本近代語　第 3 集』勉誠社●荻野綱男（2014）『ウェブ検索による日本語研究』朝倉書店●荻野綱男・田野村忠温［編］(2011)『講座　IT と日本語研究 6　コーパスとしてのウェブ』明治書院●国立国会図書館（2021）「資料デジタル化基本計画　2021-2025」https://www.ndl.go.jp/jp/preservation/digitization/digitization_plan2021.pdf●国立国会図書館（2023）「レファレンスサービス研修 令和 5 年度 人文情報の調べ方」講義資料 https://dl.ndl.go.jp/pid/13206399●小西いずみ(2023)「「方言の島」の語られ方」『社会言語科学会　第 47 回大会発表論文集』社会言語科学会 https://conference.wdc-jp.com/jass/47/contents/common/doc/S2.pdf●小林昌樹（2023）「大検索時代のレファレンス・チップス　第 1 回　デジコレの 2022 年末リニューアルをチェック！　ファミリー・ヒストリー編」https://www.libro-koseisha.co.jp/webcolumn/reference_tips2_01/●小林昌樹 (2024)「大検索時代のレファレンス・チップス　第 13 回　「ナウい」言葉が死語になる時」 https://www.libro-koseisha.co.jp/webcolumn/reference_tips2_13/●田川拓海（2024）「Twitter (X) 上の日本語を対象にした言語学的研究に関する覚え書き」『筑波日本語研究』第 28 号●竹部歩美（2023）「ジャパンナレッジに見られる接頭語「御」」『言語の研究』11 号●日比嘉高（2022）「NDL Ngram Viewer を使って「私小説」概念の歴史を大づかみしてみた」https://hibi.hatenadiary.jp/entry/2022/06/05/012005●福林靖博（2022）「国立国会図書館の個人向けデジタル化資料送信サービス」日本図書館研究会 2022 年度図書館学セミナー資料 https://www.nal-lib.jp/wordpress/wp-content/uploads/2022/11/2022seminarRop3.pdf●文化庁（2024）「令和 6 年度予算案参考資料（文化庁国語課）」文化審議会国語分科会（第 86 回）（令和 6 年 3 月 11 日）参考資料 1 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_86/pdf/94016602_02.pdf●松田謙次郎［編］(2008)『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房

---

[15] 日本語学を専門とはしない大学生を対象とした授業で「Ngram」を使った用例収集の方法を扱った際, 受講生とのやり取りを通じて，筆者自身が様々な使い方を学ぶことができた。

[16] たとえば「Ngram」で「桃太郎」「西村京太郎」「赤川次郎」を検索してもいずれも検索結果が表示されない（「桃太」「西村京太」「赤川次」であればヒットする)。

尾張洒落本コーパスの構築

宮内 佐夜香（中京大学）*

１　はじめに

本発表では、発表者が作業を進めている尾張洒落本のコーパス化について、設計方針と研究利用の見通しを報告する。まず、尾張洒落本をコーパス化することの意義を述べる。その上で、収録作品の選定やコーパス化の優先順位、付加情報の方針、最適な形態素解析辞書の策定について述べる。さらに一部文法形式の出現状況を概観し、研究利用の見通しを述べる。

２　尾張洒落本のコーパス化の意義

洒落本は古くから日本語史研究において活用されてきた近世口語資料であり、日本語史研究のための代表的資料を収録する『日本語歴史コーパス』（CHJ、国立国語研究所 2024）にも京都・大坂・江戸の三都市で出版された洒落本が収録されている。洒落本はその他地域でも作られたが、尾張名古屋を舞台とした洒落本（尾張洒落本）はこれを用いた各種の研究成果が蓄積されている。尾張洒落本の言語資料としての有用性を明確にした代表的な研究としては彦坂（1997）の論考があり、以降、湯浅（2019）、三宅（2018,2019）、森（2019）、等の活用が確認される。その資料としての価値は確かなものであると言えるだろう。近世語の研究は資料的な制約から上方語と江戸語をそれぞれに追うものが中心とならざるを得ない。その中で、上方、江戸以外の地域で、資料的価値が明確なまとまった量の作品が認められる尾張洒落本は、貴重な資料群である。尾張洒落本を用いた研究はもちろん一方言としての尾張方言史研究に資するものであり、また、上方語や江戸語との対照研究にも活用できる。対照研究で着目されるのはまずもって各地方言ならではの特徴の抽出であるが、それだけでなく、三地域に共通する傾向や西日本・中部日本・東日本という地域的なグラデーションといった、近世日本語の総合的な時代的特徴の発見も期待される。研究の中心が二大方言となるのは致し方ないことながら、せめてその中間地点の方言だけでも合わせ見て、大局的な実態解明を目指すことも重要な観点であると考える。

尾張洒落本の研究利用は実はさほど困難ではなく、各種の先行研究を参照すれば資料として有用な作品の詳細が確認できるし、多くは『洒落本大成』（全 29 巻、補巻、中央公論社、1978-1988）を用いて調査することができる。しかしながら日本語史研究のためのコーパスの整備が著しく進展した近年では、相対的に利便性に欠ける状況であることは否めない。そこで、すでに上方、江戸の洒落本が CHJ に収録されているところに、同様の設計で尾張洒落本がコーパス化されれば、確実に利便性は高まり、近世日本語の総合的な研究の進展が見込まれるであろうと考え、コーパス化を計画した。

* smiya[a]lets.chukyo-u.ac.jp　ほか、作業協力者に鈴木春野（中京大学大学院文学研究科院生）、野田太暉（同）。

３　コーパスの設計

３．１　収録候補作品の選定と構築の優先順位

コーパス化する資料の選定には、主として彦坂（1997）の資料研究を参照した。彦坂（1997:12-13）は尾張洒落本には「甲＝庶民を描く洒落本」と「乙＝遊里を描く洒落本」があり、「甲」が「もっとも尾張方言における庶民層の口語の実状を語るもの」であると指摘する。また、「乙」については「遊里の位相をよくかたるものの、資料間の様相にかなりの差異がみられ、その評価には注意が必要である」と述べ、次のように大別する。

A　客が全体として江戸風仕立ての気味のつよいもの

B　客の一部ないし筋の一部に江戸仕立ての部分があるか、堅苦しい設定のあるもの

C　客・遊女ともかなり自然で地方的な人物設定であるもの―ここにも江戸的な客の設定で出る者があるが、その設定が明示され、その部分だけが異質で他の状況とほぼ区別できる場合はここに入れる。

D　客はかなり自然な方言で、遊女が上方語的事象を使う傾向のもの

これらの「甲」、「乙」の情報を添えて、コーパス化の候補とした作品を表１に示す。

表１：コーパス化候補の尾張洒落本[1]

彦坂分類	書名	書名よみ（テキストに見られる表記による）	成立年（和暦）	成立年（西暦）	大成巻数	文字数概算
甲	囲多好髷	いたこわげ	寛政十二	1800	18	8,700
甲	女楽巻	おんならくわん	寛政十二	1800	18	11,450
甲	儛意鈔	まひいせう	寛政十三	1801	20	28,650
甲	通妓洒見穿	つぎしやみせん	文化十？	1813	補	5,750
甲	春遊南訶一夢	はるのあそびなんかのいちむ	文化十三？	1816	補	13,900
乙A	浮雀遊戯嶋	うかれすゞめゆうきしま	文化三	1806	23	19,200
乙A	南楼丸一之巻	なんろうまるいちのまき	文化十一？	1814	25	13,700
乙B	指南車	しなんしや	享和二	1803	22	24,100
乙B	野圃の玉子	やぼのたまご	文化二	1805	23	25,950
乙C	軽世界四十八手	けいせいかゐしゞはつて	寛政十二	1800	18	29,000
乙C	蓬駅妓談	ほうゑきぎだん	文化二	1805	23	28,250
乙C	駅客娼穿	ゑきかくしやうせん	文化二	1805	23	34,350
乙D	南駅夜光珠	なんえきやかうしゆ	文化四	1807	24	25,750
乙D	夢中角庵戯言	むちうかくあんげげん	文政二	1819	補	23,100
						291,850

彦坂（1997）の分類を踏まえると、もっとも有用なのは「甲」の作品群である。そのため、コーパス化は「甲」を最優先とする。また、「乙」のうちCやDには尾張方言の特徴がよく現れているものと思われるため、優先順位第二位をC、序でDとし、A、Bは作品の内容に応じて今後適宜優先順位を検討することとした。３.２、３.３では「甲」のうち言語量が最も多い『儛意鈔』をサンプルとして、XMLの構造化と形態素解析に関する検討を行った結果を述べる。

[1] 成立年は彦坂（1997）の示すものと異なる場合があるが、『洒落本大成』の解題を参照し、発表者が改めて確認したものである。また、文字数概算は後述の形態素解析用プレーンテキストのファイルサイズから算出した。

３．２　XML による構造化

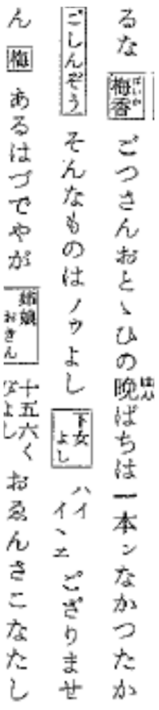


図１

XML による構造化は CHJ に準拠する。要素や属性は CHJ「江戸時代編 I 洒落本」（国立国語研究所（村山ほか）編 2019）構築を担当した市村（2015）や村山（2019）の解説や、実際の近世資料 XML データ（国立国語研究所 2015,2017）を参照して定義した。紙幅の都合上、詳細は上記の先行研究を参照されたい。図 1 は今回サンプルとした『儛意鈔』の『洒落本大成』上の紙面の一部、図 2 は図 1 に示した箇所を XML で記述したものの画面である[2]。

```
<s><hi rend="囲み"><r rt="ばい">梅</r><r rt="か">香</r></hi></s>
<s>ごつさんおと<odoriji originalText="ゝ">と</odoriji>ひの<r rt="ばん"
晩</r>ばちは一本<char script="カタカナ">ん</char>なかつたか</s>
<s><hi rend="囲み">ごしんぞう</hi></s>
<s>そんなものは<char script="カタカナ">の</char><char script="カタカナ
">う</char>よし</s>
<s><hi rend="囲み">下女よし</hi></s>
<s><char script="カタカナ">は</char><char script="カタカナ">い</
char><char script="カタカナ">い</char><odoriji originalText="ヽ">い</
odoriji><char script="カタカナ">え</char>ござりません</s>
```

図２

作業の結果、少なくとも『儛意鈔』については先行事例で用いられているタグセットですべての現象に対応できた。よって、現時点で洒落本の構造化のために新たに定義した要素、属性はないが、他資料で特殊な書式が生じる可能性はあるため、検討を続けたい。

３．３　適した形態素解析辞書の策定

さらに CHJ に準拠して形態論情報を付与するに当たって最適な形態素解析辞書を策定した。近世口語の形態素解析辞書には「近世上方口語 UniDic」（以下、上方語 UniDic）と「近世江戸口語 UniDic」（以下、江戸語 UniDic）（小木曽・市村・鴻野 2013）がある。今後、近世尾張方言に特化した形態素解析辞書を開発することも視野に入れつつ、さしあたり尾張洒落本の解析により適しているのはどちらなのかをテストすることとし、構造化を終えた『儛意鈔』を上記 2 つの UniDic で解析した。解析には「Web 茶まめ」[3]（堤・小木曽 2023）を利用した[4]。解析結果から補助記号を除いた 100 語をランダムに抽出し、エラーチェックを実施した。エラーチェックの結果を示したのが表 2 である。

---

[2] XML の記述には"Visual Studio Code"（https://azure.microsoft.com/ja-jp/products/visual-studio-code）の拡張機能"XML(v0.26.1)"を利用した。

[3] https://chamame.ninjal.ac.jp/index.html

[4] 構造化したデータには<s>タグによって文区切り情報が付けられているが、「Web 茶まめ」ではその情報を利用した解析ができない。そのため便宜的に文区切り位置に句点を挿入して解析した。

表２：『傀意鈔』形態素解析のエラーチェック結果

解析辞書	解析結果総語数	ランダム抽出	全エラー	境界エラー
近世上方口語UniDic	12,171語	100語	27語	18語
近世江戸口語UniDic	12,178語	100語	22語	15語

エラーの数のみでは江戸語 UniDic の方が少ない結果となったが、内実を精査すると、江戸語 UniDic でエラーとなった箇所が上方語 UniDic では解析できていたものには、(1) のような方言の文法的特徴に関わるものが複数見られた。

(1) a 上方：なん（何）なと（副助詞）めせ（召す）
江戸：なん（何）な（終助詞）とめ（止める）せ（助動詞） (p.245 上 l.9[5])
b 上方：さい（差す）て（接続助詞）おつ（居る）て
江戸：さい（咲く）て（接続助詞）おつ（居る）て (p.245 下 l.13)
c 上方：心中しやう（サ変意志推量形）
江戸：心中しやう（接尾辞　星） (p.238 下 l.13)

一方で、上方語 UniDic でエラーとなった箇所が江戸語 UniDic では解析できでいたものは、固有名詞と普通名詞の同語形に関わるもののみで、方言的な問題が関わるものはなかった。尾張方言に現れる上方語に近似した文法的特徴は江戸語 UniDic では解析し難いことが多いようである。ごく一部の精度チェックによるものではあるが、尾張洒落本の自動解析には、現行の UniDic の中では上方語 UniDic を用いるのが適しているものと判断する。なお、(2) に示すような尾張方言ならではの言語形式についてはいずれの UniDic でも解析できていなかった。このような尾張方言特有の事象の処理については今後の課題である。

(2) a らちのあかんなんのまねでや ※断定辞[6] (p.232 上 l.13)
b ごつさんおとゝひの晩ばちは一本ンなかつたか ※「奥様」の意[7](p.231 下 l.11)
c はよいつてくだい ※ください[8] (p.243 下 l.15)

４　プレーンテキストの解析と言語分析試行

尾張洒落本の言語研究利用の見通しを得るために、発表者の関心にしたがって、接続辞の出現傾向を事例に特徴を確認することとした。表１に示した全ての資料について、形態素解析用プレーンテキスト（構造に関わる情報を含まない本文文字列のみのテキストデータを作成した。片仮名は平仮名に置き換えたが、踊り字や濁点無表記は原文ママ）を準備した。３.３で述べたように最適な解析辞書は上方語 UniDic であると判断し、「Web 茶まめ」で上方語 UniDic を選択して解析、試行版形態論情報付きデータを作成した。解析結果から品詞情報が「助詞-接続助詞」のもののみを抽出し、集計した結果を表３に示す。

---

[5] 以下例文には『洒落本大成　第 20 巻』の『傀意鈔』の頁数、上段下段の別、行数を示す。
[6] 断定辞「デャ」については古くはロドリゲス『日本大文典』に関連する記述があり、先行研究での各種検討は彦坂（1997、四　表現法　2 断定表現）によって詳細が整理されている。
[7] 「尾張の方言で、奥様・御新造を呼ぶ称。」（『角川古語大辞典』）
[8] 「くだい　方言〔動〕下さい。補助動詞としても用いる。」（『日本国語大辞典第二版』）ただし、掲載されている方言資料に愛知県内の「くだい」の例はない。

表３　尾張洒落本の「助詞-接続助詞」（試行版データより）

語彙素	語形	出現数
いで	イデ	26
が	ガ	376
から	カラア	2
	カラ	80
きに	キニ	4
けれど	ケレド	27
けれども	ケレドモ	1
けん	ケン	4
さかい	サカイ	17
し	シ	41
すけ	スケ	1
たって	ッタッテ	1
	タッテ	2

語彙素	語形	出現数
つつ	ツツ	45
て	ッチャア	1
	ジャア	2
	チャ	4
	タ	4
	ッテ	4
	チャア	7
	デ	159
	テ	3429
で	デ	28
と	ト	213
ど	ド	62
ども	ドモ	60

語彙素	語形	出現数
とて	トッテ	2
	トテ	23
とも	トモ	58
ながら	ナガラ	113
なり	ナリ	1
に	ニ	103
ば	バ	277
も	モ	1
よって	ヨッテ	2
を	ヲ	2
於いて	オイテ	15
雖も	イエドモ	1
総計		5198

今回は序、跋、地の文、節付け等、会話文以外の箇所を除くことができていないため、口語形式と分かるもののみ取り上げて見ていく[9]。また、３.１で確認した「甲」の ABD のように登場人物が必ずしも尾張方言を用いているとは限らず、詳細な検討は話者属性を踏まえることが必須である。そのためあくまで粗々の確認ではあるが、今後着目すべきポイントを探っておきたい。まず、逆接確定条件に関わるものでは「ガ」376 件[10]、「ケレド（モ）」28 件がある。比して「ケレド（モ）」が少ないことは上方語よりも江戸語での使用状況に近似する（宮内 2015）。理由表現では「カラ」80 件（「カラア」2 件は誤解析）と江戸語の特徴形式（宮内 2023）の数値が大きいが、「サカイ」「ヨッテ」のような上方語の特徴形式の出現も目に付く。逆接仮定表現では「（ッ）タッテ」3 件「トッテ」2 件がある。このような形式は江戸語に特徴的であり、上方語には現れないことが分かっている（矢島 2020，宮内 2023）が、ごく少数のためテキストに戻って確認したところ、1 例の「タッテ」を除き誤解析であった。つまり尾張洒落本の確例は現時点で極めて少ない。ごく簡単に他地域資料と比べて探るべき事象を取り上げたが、このような状況がいかに位置付けられるのか、三地域を対照しながら観察することを発表者の本コーパスを活用した今後の研究目的としたい。

５　おわりに

以上、尾張洒落本のコーパス化計画と研究利用の見通しを示した。今後は XML 化を進め、新たに定義すべき要素がないか随時検討を行う。また精度の高い単語情報の付与を目指し、話者情報や本文種別情報等も整備して、精密な言語分析に堪えうるデータを構築する。最終的には近世語研究に資する言語資源として公開し、広く提供することを目指したい。

[9] ただし、前接語を正確に解析できていないケースも多く、特徴的な形態であっても誤解析の可能性は含む。

[10] この表３の「ガ」は逆接ではない用法を含むが、これまでの調査結果（宮内 2015）から推測するならば 3 割程度が逆接以外の用法であると思われる。

参考文献

市村太郎（2015）「ひまわり版「洒落本コーパス」Ver.0.5 利用案内」
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#himawari

小木曽智信・市村太郎・鴻野知暁（2013）「近世口語資料の形態素解析の試み」『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』,145-150

国立国語研究所（2015）『ひまわり版「洒落本コーパス」（日本語歴史コーパス江戸時代編）』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#himawari（Ver.0.5）

国立国語研究所（2017）『ひまわり版「人情本コーパス」（日本語歴史コーパス江戸時代編）』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#himawari（Ver.0.2）

国立国語研究所（村山実和子ほか）編（2019）『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share（Ver.1.0）

国立国語研究所（2024）『日本語歴史コーパス』バージョン 2024.3
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/

堤智昭・小木曽智信（2023）「複数の UniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』の実装と運用」『情報処理学会論文誌』Vol.64,No.3,749-757

彦坂佳宣（1997）『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院

宮内佐夜香（2015）「近世後期における逆接の接続助詞について―上方語・江戸語の対照―」『中京大学文学会論叢』1,(45)-(63)

宮内佐夜香（2023）「接続辞を指標とした近世資料の統計分析の試み」岡部嘉幸・橋本行洋・小木曽智信編『コーパスによる日本語史研究 近世編』ひつじ書房,219-238

三宅俊浩（2018）「近世後期尾張周辺地域における可能表現」『名古屋大学国語国文学』111,86-72

三宅俊浩（2019）「近世後期尾張周辺方言におけるラ抜き言葉の成立」『日本語の研究』15-03,1-17

村山実和子（2019）「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』テキストの凡例と『中納言』表示項目について」https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share

森勇太（2019）「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差―京・大坂・尾張・江戸の対照―」『日本語の研究』15-02,69-85

矢島正浩（2020）「逆接仮定条件史におけるトテの位置づけ―近代文法史記述のあり方再考―」田中牧郎・橋本行洋・小木曽智信編『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房,51-73

湯浅彩央（2019）『近代日本語の当為表現』武蔵野書院

付記 本研究は JSPS 科研費 JP23K00563 の助成を受けたものです。また、国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」（2022.4～）及び「尾張洒落本コーパスの構築」（2024.4～2025.3）の研究成果の一部です。

日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅱ教科書の拡張

―ハワイ日本語教科書第１期公開について―

ヤロシュ 島田（しまだ） むつみ（明治大学）・竹内（たけうち） 綾乃（あやの）（国文学研究資料館）
高田（たかだ） 智和（ともかず）（国立国語研究所）・小木曽（おぎそ） 智信（としのぶ）（国立国語研究所）

１．はじめに

2024 年 3 月、国立国語研究所が日本語を通時的に研究するための基礎資料として構築・公開を進めてきた『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅱ教科書」（以下、CHJ 明治・大正編Ⅱ教科書）に、布哇教育会編纂『日本語読本尋常科用』のデータ「ハワイ日本語教科書」が追加された。

本発表では、『CHJ 明治・大正編Ⅱ教科書』に新たに追加されたハワイ日本語教科書について説明するとともに、同じ芳賀矢一の編纂であり、1910 年から 1917 年まで日本で使用されていた第２期国定国語科教科書と比較した、分析の一例を紹介することとする。

２．コーパスの概要

太平洋戦争以前のハワイへの日本人移民は、1868（明治元）年の元年者に始まり、ハワイ王国からの要請による官約移民期（1885～1894 年）、ハワイ王政廃止からアメリカ合衆国ハワイ準州成立までの時期に重なる私約移民期（1894～1899 年）、その後の自由移民期（1900～1907 年）、呼び寄せ移民期（1908～1924 年）を経て、1924（大正 13）年の排日移民法成立まで続く。日本人移民は農園や工場での労働力として受け入れられ、日本各地から 20 万人以上がハワイへ渡ったとされる。

ハワイ日系社会の拡大にともない、日本人移民の児童に対する日本語と日本文化の教育ニーズが高まり、1890 年代からハワイ各地で日本人学校の開設が相次いでいく。日本人学校では主にハワイの公立学校の放課後に授業を行い、教師は日本人であった。民間の国語読本や国定読本が教科書に使用され、運動会や天長節、教育勅語の奉読など、日本の国民教育に準拠した教育が実施された。このような日本の様式をそのままハワイに持ち込むやり方は、ホスト社会からの大きな反発を招くことになった。日清戦争、日露戦争による日本のアジア進出も相まって、排日運動が高まったため、日系社会はホスト社会への同化の姿勢を打ち出していく。

ホスト社会からの誤解を解き、教育内容を統一するため、1915 年に布哇教育会が設立された。日系二世に日本語教育を行うことを目的とし、日本人学校も日本語学校に改称し、独自の教科書編纂が企画された。編纂主任を芳賀矢一に依頼し、1917 年に『日本語読本尋常科用』（全 6 冊）が刊行され、130 以上の日本語学科校で使用された。CHJ 明治・大正編Ⅱ教科書に収録したハワイ日本語教科書は、ハワイ日系社会が初めて独自に編纂した 1917 年刊『日本語読本尋常科用』である（底本は筑波大学附属図書館所蔵本）。

３．データ

使用するデータはCHJ明治・大正編Ⅱ教科書に収録されているハワイ日本語教科書及び小学校国語（国定読本）第２期[1]である。ハワイ日本語教科書の収録短単位数は 9.2 万語（異なり語数 8317 語）であり、第２期国定国語教科書の収録短単位数は8.4 万語（異なり語数 8376 語）[2]である（いずれも空白・補助記号を除いた数）。ハワイ日本語教科書は各学年に１冊、計６巻となっており、第２期国定国語教科書は各学年に２冊、計12巻の構成になっている。各学年の教科書に収録されている課数[3]は表１の通りである[4]。

表１．各教科書の課数

学年	ハワイ	国定
1	26	24
2	52	52
3	54	52
4	56	54
5	68	56
6	68	58
総計	324	296

第２期国定国語科教科書は、近代の国定教科書制度のもとに作られ、尋常小学校で使用されていたものであり、ハワイ日本語教科書はハワイに移住した日本人子弟の日本語教育のためにハワイで作成された教科書である。その編纂には前述の通りどちらも芳賀矢一が関わっている。表２はハワイ日本語教科書と第 2 期国定国語科教科書で課名が一致するものを転用とみなし、その転用数と転用率をまとめたものである。表２によると、ハワイ日本語教科書は、第２期国定国語科教科書から転用している課が多いことがわかる[5]。特に低学年では一致率が高いが、高学年になるとハワイ日本語教科書は独自の課が増えて来る。ハワイ日本語教科書では、日本の軍隊に関する記述が減少し、アメリカやハワイの生活や偉人に関する課が増加する傾向にある。表３は各教科書の文語体の比率をまとめたものであるが、これをみると、文体に関しては第２期国定国語科教科書の方が低学年から文語体の比率が高くなっていることがわかる[6]。

表２．ハワイ日本語教科書　第２期国定国語科教科書からの転用数と転用率

学年	1	2	3	4	5	6
課数	26	52	54	56	68	68
転用数	13	33	24	28	15	17
転用率	50%	63%	44%	50%	22%	25%

[1] 中納言の検索画面の表示は「ハワイ日本語教科書」「小学校国語２期」となっている。本文中でそれぞれの教科書について述べる際は、それぞれ「ハワイ日本語教科書」「第２期国定国語科教科書」とする。

[2] 短単位の集計は、語彙素の数で行っている。

[3] CHJ 明治大正編Ⅱ教科書では、課数＝サンプル数として扱っている。ただし、第２期国定国語教科書は、各巻の始めに教科書のタイトル（例：尋常小学読本巻九）が１サンプルとして含まれている。表にはこのタイトルも課数として含まれている。

[4] 第２期国定国語科教科書は２巻分に収録されている課の数である。

[5] 課名が一致するものを転用している課としたが、「シンネン」（国定）と「日本ノシンネン」（ハワイ）のように、課名がやや異なっていても内容が同じものは転用と認めた。

[6] 文体の集計は課ごとに行った。１つの課の中に文語体と口語体が混在している場合は、多く使用されている文体をその課の文体と認めた。実際は口語体の地の文の中に、文語体の歌や詩が引用される場合がほとんどであった。

表３．ハワイ日本語教科書と第２期国定国語科教科書の文語体比率

学年	1	2	3	4	5	6
ハワイ	0％	0％	2％	20%	37%	65%
国定	0％	0％[7]	13%	44%	75%	81%

次に、資料の特徴を明らかにするため、各教科書の語種別比率を表４、５に示す。

表４．語種別粗頻度比較

語種	ハワイ	国定
外来語	390	136
漢語	15199	13681
記号	354	120
固有名	3866	2187
混種語	952	914
和語	71279	67265
合計	92040	84303

表５．語種別調整頻度（100 万語あたり）比較

語種	ハワイ	国定	ハワイ/国定
外来語	4237.29	1613.23	2.62
漢語	165134.72	162283.67	1.02
記号	3846.15	1423.44	2.70
固有名	42003.48	25942.14	1.62
混種語	10343.33	10841.84	0.95
和語	774435	797895.69	0.97

表４は語種別の粗頻度、表５は語種別の調整頻度（100 万語あたり）を示している。表４を見ると、漢語・混種語・和語についてはほとんど差がないことがわかる。ハワイ日本語教科書に収録されている記号は、「あいうえお」「かきくけこ」といった、ひらがな表の１語１語が多く含まれており、特に第２期国定国語科教科書には見られない拗音の記載が低学年を中心にみられていたため、このような差になっている。また、固有名に関しては、ハワイ日本語教科書にはハワイ、アメリカといった地名・国名が多く含まれており、これが頻度の差に影響を与えていた。外来語に関しては、ハワイ日本語教科書は第２期国定国語科教科書と比べ明らかに差が見られた。ハワイ日本語教科書では第２期国定国語科教科書の約 2.6 倍であり、マイル、セントといった身近な単位やバナナ、マンゴー、パイナップル、パパイアといった身近な果物や植物の名前が多く用いられている。

４．相関分析

ハワイ日本語教科書と第２期国定国語科教科書は、20 世紀初頭に日本とハワイという異なる地域において日本語教育に使用されていた二種類の教科書だが、上記のような語種の比較においては、外来語と記号以外の語種においてあまり大きな差はみられなかった。そこで、この二種類の教科書に使用されている語彙の使用頻度において何らかの関係があるかを調査するため、相関分析を行う。相関分析とは、複数の変数間において相互に関係があるのかどうか、そして、変数間において相互に関係がある場合にはどの程度の強さで関係しているのかを調べる統計分析の手法である。

まず、ハワイ日本語教科書と第２期国定国語科教科書における語種の出現頻度の間に何らかの関係があるかを調べるため、相関分析を行った。分析結果は以下の通りである。二つの変数のうち、縦軸がハワイ日本語教科書、横軸が第２期国定国語科教科書を表してい

[7] ０％となっているが、実際は１つの課で、口語体の文章の中に「君が代」（文語体）が引用されていた。

る[8]。

図１．語種の相対度数相関

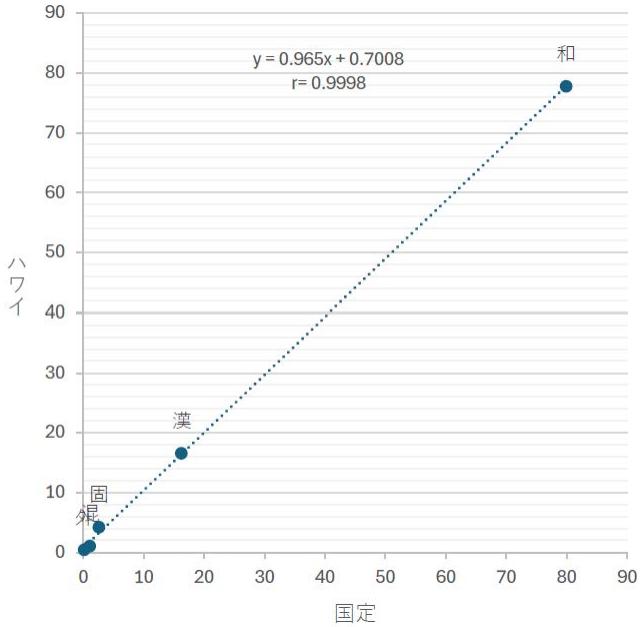


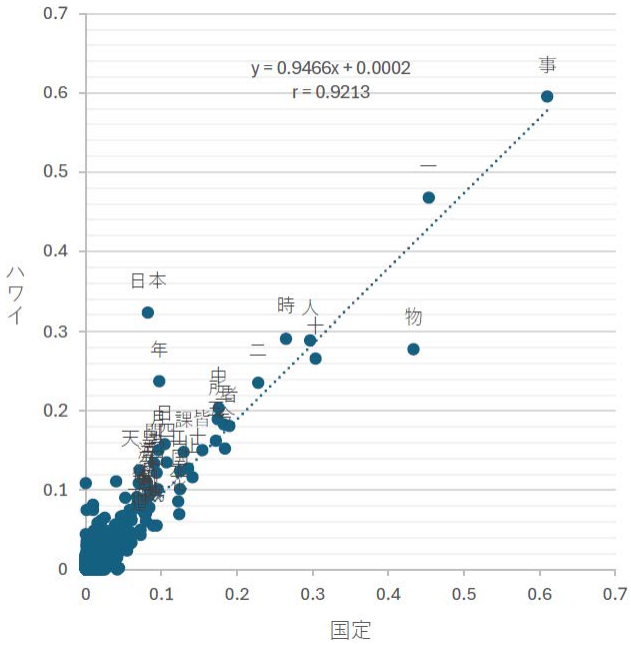
図１からわかるように、データの分布は右上がりで、点線で示された回帰直線上に位置している。相関係数は .99 と高く、ハワイ日本語教科書と第２期国定国語科教科書に使用されている語種には非常に強い正の相関があると言える[9]。つまり、ハワイ日本語教科書に多く使用されている語種は第２期国定国語科教科書にも多く使用されている。使用率が一番高いのが和語、そして漢語・固有名・混種語と続き、どちらの教科書においても外国語の使用率は一番低いという傾向が共通していることがわかる。

次に、品詞別にデータを分類し、名詞および助動詞に対して相関分析を行った。結果は次の通りである。

[8] 相関分析を行うにあたり、出現頻度そのものではなく割合（出現頻度/延べ語数）に変換した。これは散布図の作成において縦軸と横軸の尺度を合わせるために行ったが、出現頻度を用いた場合と相関係数は変わらない。散布図の軸の値の単位はパーセントである。

[9] 相関係数は相関の強さを示す指標であり、その値は 1 から-1 の間の値をとる。相関係数が 1 に近いほど正の相関が強く、-1 に近いほど負の相関が強いことになる。また、相関係数が 0 に近い場合は、相関がほとんどないと言える。

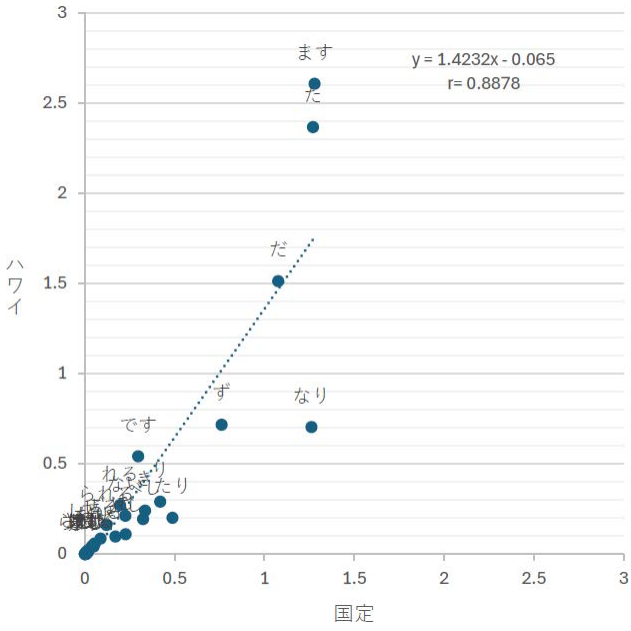
図２．名詞の相対度数相関



データの分布は右上がりで相関係数が .92 と高く、名詞の使用においてもハワイ日本語教科書と第２期国定国語科教科書の間には強い正の相関があると言える。しかし、語種における相関分析と違い、全ての語彙が回帰直線上に位置しているわけではなく、回帰直線から外れた場所に分布している語彙が多数あることがわかる。特に、「日本」は最も回帰直線から離れた場所に位置しており、第２期国定国語科教科書に比べて、ハワイ日本語教科書に特に多く使用されている。

次に、助動詞の相関分析を行った。結果は以下の通りである。

図３．助動詞の相関分析結果



名詞と同様に、データの分布は右上がりで相関係数が .88 と高く、助動詞の使用において

もハワイ日本語教科書と第 2 期国定国語科教科書の間には強い正の相関があることがわかる。しかし回帰直線から離れた位置に分布している語彙は、名詞における相関分析結果よりも多く、文語体で使用される「なり」「たり」「べし」などは第 2 期国定国語科教科書に多く使用され、口語体で使用される「ます」「た」「です」などはハワイ日本語教科書に多く使用されていることがわかる。これは、ハワイ日本語教科書における文語の課数は全体の 25%、第 2 期国定国語科教科書における文語の課数が全体の 40%を占めていることによると考えられる [10]。

以上のことから、ハワイ日本語教科書と第 2 期国定国語科教科書に使用されている語彙の間には強い相関があると言える。しかし、ハワイ日本語教科書において「日本」が多く使用されるなど、どちらかの教科書により多く使用されている語彙や、ハワイ日本語教科書における「ナイチンゲール」「ルーズベルト」「ペリー」、第 2 期国定国語科教科書における「孔明」「孔子」「孟子」など [11]、どちらか一方の教科書にのみ使用されている語彙もあることがわかった。これは各教科書における題材の違いによるものであると言える。

５．おわりに

ハワイ日本語教科書のデータが追加されたことにより、同一人物によって編纂され、同時期にハワイと日本という異なる場所において使用されていた二種類の教科書を比較・分析することが可能となった。今後のグローバル社会の中で、日本語がどのように現地で教えられ、発展していくのかを考える上でも、ハワイ日本語教科書コーパスの活用が望まれるところである。

参考文献

芥川昭寿（1998）「海外での文化摩擦による日本語教育の展開―戦前でのハワイ教育会の場合―」『日本語教育研究』第 36 号、言語文化研究所、pp.66-80

高木（北山）眞理子（2011）「『ハワイ日本語学校教科書集成』解説」『ハワイ日本語学校教科書集成』第 10 巻，不二出版

船越亮佑（2016）「布哇教育会初の尋常科用日本語教科書に関する一考察」『国語科教育』80 巻、全国大学国語教育会、pp.23-30

謝辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」の成果の一部です。

[10] ハワイ日本語教科書は 324 課中 81 課が文語体、第 2 期国定国語教科書は 296 課中 120 課が文語体である。

[11] これらの語彙は出現頻度が低く、本予稿集の図では見えなくなっているが、ハワイ日本語教科書にのみ出現する語彙は縦軸上、第 2 期国定国語教科書にのみ出現する語彙は横軸上にプロットされている。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の拡張計画について ―BCCWJ2 の構築に向けて―

山崎 誠（国立国語研究所）
小木曽 智信（国立国語研究所）
高田 智和（国立国語研究所）

1. はじめに

国立国語研究所では、文化庁からの委託事業として「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」を 2024 年度から 5 年計画で実施することになった（文化庁 2024: 4）。この事業の目的は、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ と呼ぶ）を現在の倍の規模に拡張することである。本発表では、この計画について現時点での概要を説明し、コーパスの利用者である日本語学会の会員との意見交換を行う。

2. 経緯

2.1　日本語コーパスの充実

近年、日本語コーパスが盛んに構築・公開されており、日本語研究だけでなく、日本語教育、自然言語処理、辞書編纂などに活用されている。中でも国立国語研究所が開発した各種のコーパスは、統一的な仕様でアノテーションされ、同一の検索ツール「中納言」で利用できるなどの特徴から、日本語研究に幅広く利用されている。表 1 は、「中納言」で利用できるコーパスの一覧である。

表 1　「中納言」で利用できるコーパス（2024 年 4 月現在）

コーパス	ジャンル	略称	データバージョン
現代日本語書き言葉均衡コーパス	書き言葉	BCCWJ	2021.03
日本語話し言葉コーパス	話し言葉	CSJ	2018.01
日本語日常会話コーパス	話し言葉	CEJC	2023.03
昭和話し言葉コーパス	話し言葉	SSC	2022.02
名大会話コーパス	話し言葉	NUCC	2022.10
現日研・職場談話コーパス	話し言葉	CWCP	2018.03
日本語歴史コーパス	書き言葉	CHJ	2024.03
昭和・平成書き言葉コーパス	書き言葉	SHC	2023.05
日本語諸方言コーパス	方言	COJADS	2024.03
日本語学習者中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス	日本語学習者	C-JAS	2024.03
多言語母語の日本語学習者横断コーパス	日本語学習者	I-JAS	2024.03
北京日本語学習者縦断コーパス	日本語学習者	B-JAS	2024.03

これらのコーパスは、日本語研究を文体、時間、地域、年代、母語などの多面的な観点から観察できるようにすることで日本語の総体的な把握を可能にするものである。なお、表 1 に挙げた各コーパスについては、国立国語研究所言語資源開発センターのホームページから種々の情報を得ることができる。

2.2　BCCWJ の現状

BCCWJ は現代日本語の書き言葉を対象として、2006〜2010 年度にかけて構築された。収録されているデータの年代は、主に 1976 年から 2005 年の 30 年間となっている。このうち書籍については、図書館書籍は上記 30 年間を、出版書籍は 2001〜2005 年の 5 年間を対象としている。したがって、最新のデータでも 20 年ほど前のものとなり、近年誕生した新語や新用法についての情報が欠落している。日本語学習者をはじめ、日本語の使用実態についてその典拠を仰ぐ人々や産業界にとって最新の情報がないことは社会的な損失となっている。

2.3　社会からの要請

文化審議会国語分科会国語課題小委員会（第 60 回、2023 年 7 月 21 日開催）において、小木曽（2023）により、BCCWJ の意義と今後の課題が示された。そのうち BCCWJ の問題点を小木曽（2023）より引用する。

1. 収録資料が現代語としては古くなっている
→最新のデータを収録して更新したい
2. 経年的な調査ができない
→経年調査ができるよう継続的に拡張していきたい
3. 規模が必ずしも十分でない
→BCCWJ に加える形で全体として規模を大きくしたい

また、文化審議会国語分科会（第 85 回、2023 年 9 月 29 日）においても「日本語のデジタル言語資源の整備に関する国語分科会の見解（案)」が示され、そこでも BCCWJ の拡張の必要性が訴えられた。

このような状況に鑑み、文化庁は令和 6（2024）年度から 5 年計画で「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」を行うことになり、その委託先として国立国語研究所が決定した。

3. BCCWJ の拡張計画

文化庁から示された事業内容を以下に引用する（文化庁 2024: 72)。

> 国（独立行政法人国立国語研究所）が 2005 年までのデータで整備した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」に、2006 年から 2025 年までの 20 年分の日本語データを追加し、１億語規模から２億語規模の現代日本語コーパスに拡充する。
> （米国：約 2 億 2 千万語、仏国：約 2 億 6 千万語の国費コーパス）
> 書籍、新聞等から、現代日本語の縮図となるように統計的に適切な文のサンプル

を選択・特定し、著作権処理をした上で、日本語の品詞、意味、文構造等の情報を付与し、電子データ化を図る。1 年間に 2 千万語を整備し、5 年間で 1 億語を追加する。

この記述を BCCWJ に即して述べると、BCCWJ における出版サブコーパス部分の拡張ということになる。表 2 は出版サブコーパスのレジスター別の語数（短単位）である。語数は毎年 700 万語程度、中心となる書籍については毎年 600 万語程度である。今回の拡張の対象となる期間は 2006〜2025 年の 20 年間であるから、1 年間で 500 万語を取得すれば拡張部分全体で 1 億語になる。出版書籍全体のサンプル数は 10,117 であり、単純に平均を取ると 1 サンプルあたり約 2,822 語となる。したがって、毎年 500 万語を取得するためには 1 年当たり約 1,770 サンプルが必要になる。なお、この新規に構築する部分を BCCWJ2 と呼ぶことにする。

表 2　BCCWJ 出版サブコーパスの語数（短単位、固定長＋可変長、記号等除外）

年 / レジスター	2001	2002	2003	2004	2005	計
出版書籍	5,855,838	5,918,717	5,844,114	5,950,110	4,983,504	28,552,283
出版雑誌	880,259	977,051	818,282	928,948	839,952	4,444,492
出版新聞	277,288	255,673	274,366	277,273	285,633	1,370,233
計	7,013,385	7,151,441	6,936,762	7,156,331	6,109,089	34,367,008

※「BCCWJ 短単位語彙表(Version 1.1)」により算出

4. BCCWJ2 の課題

BCCWJ を拡張するに当たってはまず構築方法や仕様の検討が必要である。前回の構築から 20 年近く経っていることから、その間の社会の変化やこれまでの利用実績等を踏まえ、適切な変更を加え、効率的な構築を目指すことが重要である。以下、コーパス構築の各段階にそって課題を示す。

4.1　サンプリング

BCCWJ は 13 個のレジスターから構成されているが、BCCWJ2 は書籍を中心としたコーパスになる。BCCWJ では書籍の種類として出版書籍、図書館書籍、ベストセラーがあるが、経年調査の目的に最適なのは出版書籍である。図書館書籍は年代による変化が大きくはないと見られる。

書籍の母集団は前回と同じく国立国会図書館の提供する書誌情報データ（JAPAN/MARC）を利用する。現在、2023 年 12 月 17 日時点でのデータの提供を受けており、そこから得られた、出版サブコーパスの継続部分に当たる 2006 年〜2023 年の書籍の情報を図 1 に示す（2024 年以降の情報は今後取得する）。図 1 は、JAPAN/MARC において物理的属性コード化情報（文字資料）フィールドの資料カテゴリの値が”t”、特定資料種別の値が”a”（普通活字）となっているレコードのうち、刊行年が 2006 以降のものを集計したものである（国立国会図書館 2024: 25）。図 1 から毎年 12 万冊前後の書籍が対象となることが分かる。

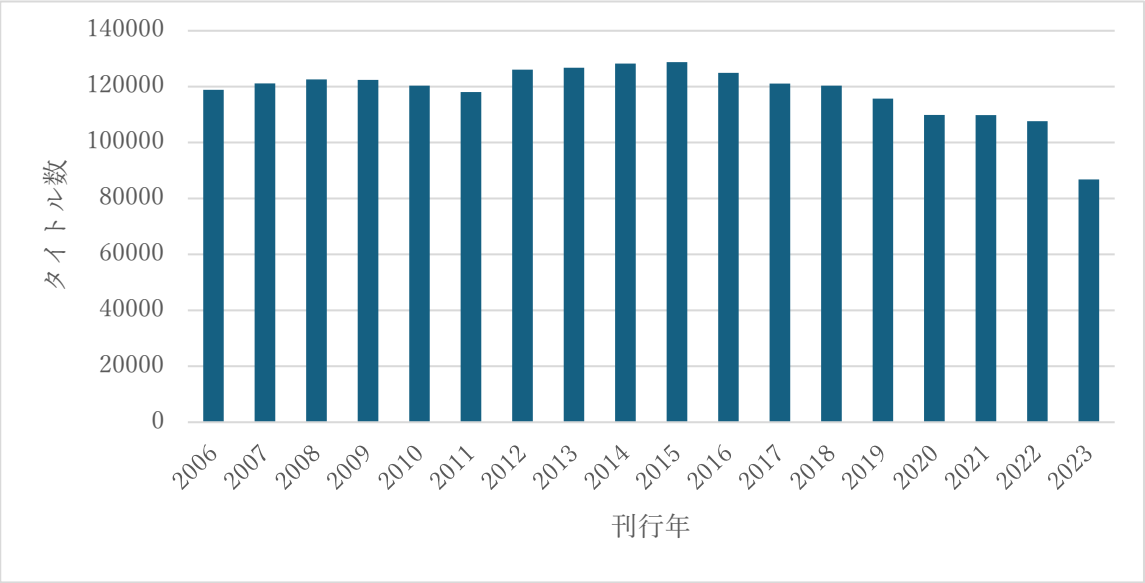


図 1　JAPAN/MARC における刊行年別のタイトル数(2006-2023)
（刊行年情報が不明なものを除く）

また、サンプリングについては、電子書籍版の利用も検討課題である。電子書籍版は入力の手間が省ける可能性があるが、リフロー型電子書籍の場合、デバイスやフォントのサイズによってページ数が流動的になる。この場合、サンプルをどの位置から取得するか、あるいは、出典としてのページ数表示が難しいなどの問題が出てくる。

雑誌は、BCCWJ では『雑誌新聞総かたろぐ』（メディア・リサーチ・センター）を母集団の選定に利用していたが、同書は 2019 年に廃刊になったため、これに代わる資料を探す必要がある。

4.2　電子化

BCCWJ のタグは、山口他（2011）によると 47 種類が挙げられている。これらは大別してサンプルに関するもの、文書構造に関するもの、文字・表記に関するものに分けられる。文書構造に関するタグは、さらに階層構造、図表、引用、注記、その他に分かれている。これらのタグをすべて踏襲するか、あるいは、利用頻度が少ないと思われるものを省いたり、新規に追加したりするタグがあるかなどを検討する必要がある。

4.3　メタ情報

BCCWJ では公開後に文体情報などのメタ情報を付与したが、BCCWJ2 ではそのような情報はサンプリング時に行うことでより効率的なアノテーションが行えると考えられる。また、教育的な観点からは望ましくないサンプルの指定などもサンプリング時に行うとよいだろう。

4.4　形態素解析

短単位から長単位を生成するツールの再開発が必要である。長単位生成ツールは BCCWJ の際に開発されたが、長い間メンテナンスされておらず、使い勝手が悪くなっているため、この際に新たに開発を行う。

4.5　その他の検討事項（SNS、漫画）

現代の書き言葉として重要な位置を占めているものとして、SNS と漫画がある。BCCWJ では、Yahoo!知恵袋と Yahoo!ブログがネットの言葉として収録されているが、BCCWJ のリリース後に盛んになった X(旧ツイッター)などは条件が整えば収録する道を探りたい。同様に BCCWJ の際には断念した漫画についても、改めて収録の方策を探る。

5. 著作権処理について

著作権処理については、前回の BCCWJ 構築の時とは比べものにならないくらい有利な状況が生じている。平成 30（2018）年の著作権法の改正において、第 30 条の 4（著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない利用）及び第 47 条の 5（電子計算機による情報処理及びその結果の提供に付随する軽微利用等）が加えられたためである。前者は、著作物の本来の目的である思想や感情の享受に当てはまらない利用は、必要と認められる限度において、著者の許諾を得ずに使えるという柔軟性のある規定である。ただし、著作権者の利益を不当に害することとなる場合はこの限りではない。

文化庁著作権課（2019）によると、著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない利用の例の 1 つとして、日本語研究のために著作物を複製する行為が挙げられている（p.7）

また、同文書には、「③対象となる利用行為について」として、どのような利用行為にこの規定が当てはまるかを以下のように説明している。

> 本条の権利制限の対象となる利用行為は，「いずれの方法によるかを問わず，利用することができる」こととしており，複製に限らず，公衆送信，譲渡，上映，翻訳・翻案等の二次的著作物の創作，これにより創作された二次的著作物の利用等，支分権の対象となる行為は全て権利制限の対象となっている。これにより，例えば人工知能の開発を例にとると，自ら人工知能の開発を行うために著作物を学習用データとして収集して利用する場合のみならず，自ら収集した学習用データを第三者に提供（譲渡や公衆送信等）する行為についても，当該学習用データの利用が人工知能の開発という目的に限定されていれば，本条に該当するものと考えられる。もっとも，その利用は，必要と認められる限度において行うものでなければならない。

また、第 47 条の 5 は、例えば情報解析の結果を提供する際、「軽微利用」であれば著者の許諾を必要としないことを述べている。これらの改正により、コーパス構築のために著作物を必要な範囲で複製することや検索結果の表示については著者の許諾が要らなくなり、その趣意に基づいていち早く「昭和・平成書き言葉コーパス（SHC)」が公開された。この詳細については小木曽他（2024: 283-284）を参照されたい。

著作権処理については、今後、文化庁著作権課等の専門家の意見を取り入れつつより適切な方法を見いだしたい。

6. 終わりに

今後のロードマップとしては、2025 年末までにはその時点で形態素解析まで終了したデ

ータを少納言、中納言で検索できるようにしたいと考えている。

BCCWJ2 は 2028 年度に完成する予定であるが、文化審議会国語分科会（2023: 4）が提言しているように、さらに構築を継続することで、言語研究のみならず、「時代ごとの日本語の姿を文化財として残していくという意義」も認められ、コーパスを一種の文化財と見る新たな視点が浮かび上がってくる。

参考文献・参考 URL

小木曽智信（2023）「現代語の書き言葉コーパスが果たす役割―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の意義と今後の課題―」文化審議会国語分科会国語課題小委員会（第 60 回）資料 5　https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo_kadai/iinkai_60/pdf/93925701_01.pdf（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

小木曽智信・近藤明日子・髙橋雄太・間淵洋子（2024）「『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開」『情報処理学会誌』65(2)　https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/doc/IPSJ_SHC.pdf

国立国語研究所（2017）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』短単位語彙表(Version 1.1)」https://doi.org/10.15084/00003219（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

国立国語研究所言語資源開発センター　https://clrd.ninjal.ac.jp/data.html（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

国立国語研究所コーパス開発センター（2015）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引第 1.1 版」　https://doi.org/10.15084/00003228（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

国立国会図書館（2024）「JAPAN/MARC MARC21 フォーマットマニュアル（2021 年 1 月）単行・逐次刊行資料編」　https://www.ndl.go.jp/jp/data/JAPANMARC_MARC21manual_MS_202403.pdf（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

文化審議会国語分科会（2023）「日本語のデジタル言語資源の整備に関する国語分科会の見解（案）」（第 85 回、令和 5 年 9 月 29 日）資料 2-2　https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_85/pdf/93946301_02.pdf（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

文化庁（2024）「令和 6 年度予算の概要」　https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/yosan/pdf/94033601_01.pdf　（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

文化庁著作権課（2019）「デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定に関する基本的な考え方（著作権法第 30 条の 4 , 第 47 条の 4 及び第 47 条の 5 関係）」https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/h30_hokaisei/pdf/r1406693_17.pdf（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

山口昌也、高田智和、北村雅則、間淵洋子、大島一、小林正行、西部みちる（2011）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における電子化フォーマット ver.2.2」　https://doi.org/10.15084/00002854（2024 年 4 月 7 日最終閲覧）

『日本語歴史コーパス　室町時代編 II キリシタン資料』の拡張
—天草版『金句集』の公開—

黒川茉莉（日本学術振興会・国立国語研究所）片山久留美（国立国語研究所）
小木曽智信（国立国語研究所）

1. はじめに

本発表では、国立国語研究所から 2018 年 3 月に公開されている『日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリシタン資料』への大英図書館所蔵天草版『金句集』（1593）の追加と、そのデータの概要に就いて報告する。『日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリシタン資料』は、国立国語研究所の共同プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」に於いて構築中の『日本語歴史コーパス』（CHJ）の一部である。

2. 『日本語歴史コーパス室町時代編 II キリシタン資料』の概要

天草版『金句集』（1593）は、天草版『平家物語』・天草版『伊曽保物語』とマノエル・バレトの自筆『難語句解』と併せて一冊に合綴されている。『CHJ 室町時代編 II キリシタン資料』は、天下の孤本として大英図書館（British Library）に所蔵される次の文献を底本に構築されたコーパスである。

a. Nifon no cotoba to Historia uo narai xiran to Fossvrv fito no tameni xeva ni yavaragvetarv feiqeno monogatari. 天草版『平家物語』（1592）
b. Esopo no Fabvlas. Latinuo vaxite Nippon no cuchito nasu mono nari. 天草版『伊曽保物語』（1593）
c. Xixo,xixxo nadono vchiyori nuqi idaxi, qincuxŭ to nasu mono nari. 天草版『金句集』（1593）

（請求番号：Or.59.aa.1）

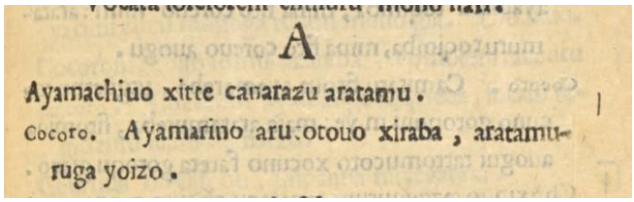
『CHJ 室町時代編 II キリシタン資料』は、2018 年 3 月に天草版『平家物語』（1592）、天草版『伊曽保物語』（1593）の二作品のデータを公開した。

今回の天草版『金句集』の追加により、バレト自筆本『難語句解』と天草版『平家物語』・天草版『伊曽保物語』の「言葉の和らげ」以外のコーパス化が完了した事になる。

中世日本語の口語資料として扱われる事の多い天草版『平家物語』・天草版『伊曽保物語』は、いずれも物語であるが、天草版『金句集』は、遡れば漢籍や国書などから金言を集成して作られた金言集であり[1]、性質を異にする。アルファベット順 A～Z のうち、 17 のアルファベットと「五常」（GOIO.）の見出しが示され、その見出しの下に複数の金言（文語）とそれに対応する口語訳「心」（口語）が列挙される。

[1] 天草版『金句集』の出典の検証に関しては、福島邦道（1969）、山内洋一郎編著（2007）に詳しい。

【天草版『金句集』A の部 一部抜粋[2]】


A

Ayamachiuo xitte canarazu aratamu.

Cocoro. Ayamarino aru:otouo xiraba, aratamu-
ruga yoizo.

A（見出し）
（金言）Ayamachiuo xitte canarazu aratamu.［過ちを知って必ず改む.］
Cocoro.（心）Ayamarino arucotouo xiraba, aratamuruga yoizo.
［誤りのある事を知らば,改むるが良いぞ.］

3. 天草版『金句集』コーパスの概要

3.1 . 出現形の表記に就いて—漢字仮名交じりテキストの特徴—

CHJでは、形態素解析辞書「UniDic」 と形態素解析器「MeCab」によって形態素解析を行なっている。天草版『平家物語』・『伊曽保物語』のコーパス構築に於いて、底本のローマ字表記のままでは、これらを用いた形態素解析が困難である事・またローマ字テキストのままでは他のサブコーパスの検索結果と並べた際に視認性が低下する事から、UniDicの「語形代表表記」を用いた独自の漢字仮名交じりテキストを作成する事とした（片山・小木曽・中村（2018））。天草版『金句集』に於いても同様に、本コーパス独自の漢字仮名交じりテキストを作成した。

「語形代表表記」とは、「UniDic」の階層構造上で、それぞれの「語形」の下に登録されている「書字形」の中、最も代表的な表記と見做されるものを指し、主に『日本国語大辞典（第二版）』の表記を参考にして決定している。

本コーパスに収集された全ての語は、「UniDic」の「語形代表表記」により表記を決定した上で、漢字かな交じりテキストを構成しており、作業者の解釈を挟まずに揺れの少ない斉一なテキストを自動的に作成する事となる。例えば、次の天草版『金句集』の例では、底本のvazauai（ワザワイ）というローマ字表記に対し、語彙素「災い」の語形代表表記である「災い」を当てている。

原文ローマ字	出典（と推定される文献の）表記[3]	本コーパスの漢字かな交じりテキスト
Xitaua□core□vazauai no□ne. Cocoro.Xitaua□vazauaiuo□manequ□monogia□.（天草版『金句集』547頁）	口是禍之門　舌是禍之根（童子教）	舌は此れ災いの根. 心. 舌は災いを招く物ぢゃ.

[2] 天草版『金句集』の画像の引用は、国立国語研究所公開の画像に拠る。
[3] 山内洋一郎（2007） p.165 参照

「UniDic」は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』など現代語のコーパス構築の際に設計されており、「語形代表表記」もやや現代語に寄った表記となっている。

よって、語形代表表記によるテキストは、歴史的仮名遣いとは異なる表音性の強い仮名遣いとなる。ローマ字原本の表記に現れている音韻的特徴（四つ仮名・オ段長音の開合）に関しては、原本の表記を出来る限り生かす為、「語形代表表記」の修正を行なった（片山・渡辺（2022））。

漢字仮名交じりテキストは、他のサブコーパスとの整合性を保つ為に、便宜的・補助的に作成したものに過ぎない。実際に、キリシタン文献を引用する際には、3.3.節で扱うローマ字の「原文文字列」を参照しつつ、国立国語研究所（2019）により公開されている原本の画像を併せて参照されたい。

3.2. 公開する言語単位と形態素解析の方法

本コーパスでは「短単位」・「長単位」の 2 種類の言語データを公開する。天草版『金句集』は、天草版『平家物語』『伊曽保物語』と異なり、文語と口語が共存しているという特徴を持つ。その特徴を生かす為、形態素解析に当たっては、金言（文語）・心（口語）に分けた上で、それぞれに異なる解析用辞書（UniDic）を用い、形態素解析を行なった[4]。

文語部分：中世文語 UniDic　口語部分：中世口語 UniDic

また短単位・長単位の形態論情報を付与するに当って、文体に応じて金言（文語）には、平安・鎌倉時代編の形態論情報規程を、心（口語）は室町時代編の形態論情報規程を適用した。例えば室町時代編の規定では、形容詞について、基本的に口語活用とする事としているが、文語体の金言の中には文語活用でしか処理できない例が多く見られる。この様に文語活用・口語活用が混在している場合がある為、コーパス使用の際には注意が必要である。

【文語】君子は温にして激し,威あって猛からず.

「激し」: 形容詞-一般・文語形容詞-シク・終止形-一般

【口語】心．柔らかにして激しゅう：威勢有れども,睦ましい．後生恐るべし.

「激しゅう」: 形容詞-一般・形容詞・連用形-ウ音便

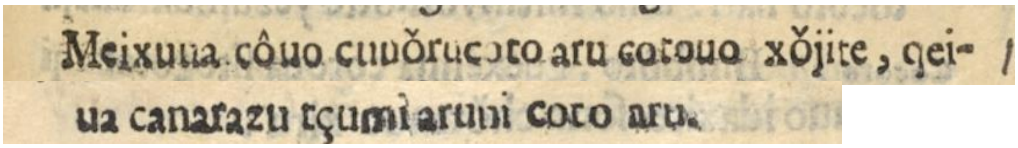
3.3. 原文文字列の概要

「原文文字列」は、原本の表記に忠実に翻字する事を方針として作成したローマ字テキストである。本コーパスに於いても、他の天草版コーパスと同様のローマ字テキストを作成した。原本でアルファベットとアルファベットの間にスペースがある箇所に、「□」を挿入して、分かち書きを表現している。記号の前後は、スペースの有無の判断が困難である事から、スペースを入れない方針を取っている。明らかな脱字、文字が潰れるなどして判読が困難な箇所に就いては、文脈上文字が推定可能である場合も、無理に翻字せず、「■」とした。

---

[4] 文語と口語が共存する文献の解析に於ける複数の UniDic の切替に関しては、間淵・小木曽（2015）参照。

【天草版『金句集』523-524 頁】



【原文文字列】

Meixuua□côuo□cuuŏrucoto□aru□cotouo□xŏjite,qeiua□canarazu□tçumi□aruni□coto■aru.

【漢字仮名交じりテキスト】

明主は功を加うる事有る事を賞じて，刑は必ず罪有るに断る.

4. 本コーパスに関する語彙統計

本コーパスに関する語彙統計を示す。天草版 3 作品の短単位・長単位の総語数は表 1 の通りである（数値は記号等も含めた総語数）。

表 1：『CHJ 室町時代編Ⅱキリシタン資料』各作品の総語数

	天草版平家物語	天草版伊曽保物語	天草版金句集
短単位	112079	26044	10795
長単位	103602	24883	10560

次に、今回追加された天草版『金句集』に関する語彙統計を示す。表 2 は文体ごとの品詞の総語数と割合をまとめたものである。品詞は、名詞・動詞・形容詞・助動詞・助詞を分析対象とした。以下の計数では、金句集の口語解釈を導く「心」の語は、除いた。

表 2：金言（文語）部分と、「心」（口語）部分の品詞比率

			全短単位数	名詞[5]	動詞[6]	形容詞	助動詞	助詞
全体	全体	頻度	10795	2938	1713	381	729	3002
		割合	100%	27.2%	15.9%	3.5%	6.8%	27.8%
金言	文語	頻度	4823	1297	850	169	325	1269
		割合	100%	26.9%	17.7%	3.5%	6.7%	26.3%
心	口語	頻度	5972	1356	863	212	404	1733
		割合	100%	22.7%	14.5%	3.5%	6.8%	29.0%

文語部分（金言）に関しては、口語部分（心）よりも、名詞・動詞の比率が高く、助詞の比率が低いという差はあるが、全体的に両者は近い性質を示している。

[5] 序文、五常は、文語として扱った。
[6] 全体の割合は、全動詞数/全短単位数、金言・心の割合に関しては、金言の全動詞数/金言の全短単位数、心の全動詞数/心の全短単位数とした。

5. 文語と口語の共存—天草版『平家物語』との対照－

天草版『金句集』は、前述の通り、文語と口語が共存する特徴を持つが、天草版『平家物語』にも、口語中に、文語の平曲が引用された箇所（巻 4 第 12「重衡の東下りの事,同じく千手の前が沙汰」）がある。

この文語部分に関しては表 3 の様な品詞比率になる。天草版『金句集』の文語部分（金言）の品詞比率と比較する。

表 3：天草版『平家物語』の文語部分と、天草版『金句集』金言（文語）部分の品詞比率

			全短単位数	名詞	動詞	形容詞	助動詞	助詞
天平	文語	頻度	378[7]	117	44	8	29	122
		割合	100%	31.0%	11.7%	2.1%	7.7%	32.3%
金言	文語	頻度	4823	1297	850	169	325	1269
		割合	100%	26.9%	17.7%	3.5%	6.7%	26.3%

天草版『金句集』の金言（文語部分）と、天草版『平家物語』の東下りの平曲引用部（文語部分、「ホンボンに」と明記してある）の品詞比率に於いて、天草版『金句集』の金言(文語)は、天草版『平家物語』よりも、動詞の使用率が高いが、全体的な性質は類似している。

次に、天草版『平家物語』の口語部分と、天草版『金句集』の口語部分（心）の品詞比率を分析する。

表 4：天草版『平家物語』の口語部分と、天草版『金句集』「心」（口語）部分の品詞比率

			全短単位数	名詞	動詞	形容詞	助動詞	助詞
天平	口語[8]	頻度	111701	25651[9]	17552	1732	12022	34097
		割合	100%	23.0%	15.7%	1.6%	10.8%	30.5%
心	口語	頻度	5972	1356	863	212	404	1733
		割合	100%	22.7%	14.5%	3.5%	6.8%	29.0%

天草版『金句集』の「心」（口語）部分は、天草版『平家物語』の口語部分より、形容詞が多く、動詞・助動詞が少ない。

天草版『金句集』の文語部分は、天草版『金句集』の口語部分よりも、動詞の使用率が高く、助詞の使用率が低い。天草版『平家物語』の文語部分・口語部分では、動詞・助詞ともに有意差が無いので、これは天草版『金句集』に見られる固有の特徴である。

6. おわりに

天草版『平家物語』・『伊曽保物語』と共に合綴された天草版『金句集』を今回コーパス化し、『CHJ 室町時代編 II キリシタン資料』の拡張を行なった事により、天草版

[7] 天草版『平家物語』の文語部分の全短単位数を指す。

[8] 天草版『平家物語』のうち、文語部分を抜いた部分を指す。全短単位数は、112079（全短単位数）から 378（文語部分全短単位数）を引いた数。

[9] 天草版『平家物語』の語り手名（喜一・右馬）の語は名詞の計数から除いた。

3 本の文体や品詞ごとの比較が可能になった。また、今回公開した天草版『金句集』は文語・口語が共存している為、狂言をはじめ、他の時代のコーパスとの比較検証も出来る。本コーパスの公開が、日本語の通時的研究の一助となれば幸いである。

関連 URL

工藤拓（2006）MeCab : Yet Another Part of Speech and Morphological Analyzer http://taku910.github.io/mecab/（2024 年 4 月 9 日確認）

国立国語研究所（2019）「大英図書館所蔵天草版『平家物語』『伊曽保物語』『金句集』画像」https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/ （2024 年 4 月 9 日確認）

国立国語研究所（2019）『日本語史研究用テキストデータ集』「天草版平家物語」https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/amhk/ （2024 年 4 月 9 日確認）

国立国語研究所（2024）『日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリシタン資料』（短単位データ 1.1 / 長単位データ 1.1）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/muromachi.html#Cristian（2024 年 4 月 9 日確認）

引用文献

片山久留美・小木曽智信・中村壮範（2018）「キリシタン資料のローマ字原文対応和文テキストの作成」（『じんもんこん 2018 論文集』, pp.89-96, 人文科学とコンピュータ研究会）

片山久留美・渡辺由貴（2022）「『日本語歴史コーパス室町時代編 II キリシタン資料』解説」（青木博史・岡崎友子・小木曽智信編『コーパスによる日本語史研究　中古・中世編』,pp.299-320,ひつじ書房）

福島邦道（1969）「天草版金句集の出典について」（『国語学』第 79 集, pp.90-99,国語学会）

間淵洋子・小木曽智信（2015）「異なる文体の混在するテキストに対する複数辞書切り替えによる解析手法の提案」（『じんもんこん 2015 論文集』, pp.89-96, 人文科学とコンピュータ研究会）

▼漢字仮名交じりテキスト・原文文字列の作成に当っては、次の注釈書を参考にした。

山内洋一郎編著（2007）『天草本金句集の研究』汲古書院

吉田澄夫（1938）『天草版金句集の研究』東洋文庫

付記

本稿は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」による研究成果の一部である。

全国自治体職員における外来語・略語使用意識の実時間変容[1]

朝日祥之（国立国語研究所）　鑓水兼貴（国立国語研究所）

１．はじめに

国立国語研究所では、2002 年から 2006 年にかけて「外来語言い換え提案」を実施した。この提案は、第 22 期国語審議会の答申「国際社会に対応する日本語の在り方」（文化庁 2024）において取り上げられた外来語・外国語増加の問題、特に国民一般に対する官公庁、報道機関等における外来語・外国語の取り扱いついての考え方をきっかけとした調査研究に基づく。一般にとって分かりにくいとされる 176 語に関する提案がなされた（国立国語研究所 2006）。

それから 20 年が経過した現在、「外来語言い換え提案」の果たした役割を検証すべく、国立国語研究所で進めている共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」において、調査研究を行っている。その一環として、国立国語研究所で 2003 年に行われた「行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査（自治体調査）」（国立国語研究所 2003）の経年調査を 2023 年に実施した。この調査は全国自治体職員による行政コミュニケーション意識について、特に行政、医療・福祉等の分野に関する専門情報を発信する際の工夫に関する回答を得た。

本発表では、この経年調査により、その意識の実時間変容を明らかにし、その言語的・社会的意味を考察することを目的とする。

２．国立国語研究所による調査の概要

本発表では国立国語研究所により 2003 年 11 月に実施された全国調査「行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査（自治体調査）」（以下、2003 年調査）とその約 20 年後である 2023 年 2 月に実施した調査（以下、2023 年調査）の調査データを用いる。二つの調査は同じ調査主体、調査手法、自治体選定の方法も前回と同様の基準を用いるなど、経年変化について検証ができるよう、条件を整えた。

2003 年調査では全国 680 自治体の首長、広報紙／ウェブサイト担当者、一般行政職員のそれぞれに調査が行われた。それに対し、2023 年調査ではその対象を一般行政職員に限定する形で調査が実施された。それぞれの調査で対象となった自治体数・対象者数などの概要（2003 年調査では一般行政職員対象の調査概要のみ）を示す（**表１**）。

調査で取り上げた質問項目は、住民と接する機会の多い一般行政職員が、行政情報を発信する上でのコミュニケーション意識、広報紙やホームページでの言葉遣い、外来語増加に関する意識、行政用語におけるカタカナ外来語、住民とやり取りとりする際の言葉遣いなどである。2023 年調査の設計にあたり、調査内容は原則として 2003 年調査に変更を加えない方針を採用した。

[1] 本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」による研究成果の一部である。

表１　自治体調査の概要（2003 年調査・2023 年調査）

	2003年調査	2023年調査
自治体数	680（全国）	528（全国）
対象者数	一般行政職員：22,440人	一般行政職員：19,140人
回答者数	14,217	8,183
回収率	63.4%	42.7%
調査実施時期	2003年11月	2023年2月
調査法	郵送法	郵送法
調査主体	社団法人新情報センター	社団法人新情報センター

３. 分析

３．１．話し言葉・書き言葉における外来語・略語への配慮

一般行政職員による行政コミュニケーション意識の実時間変容を分析する。最初に一般行政職員が住民に対して発信する（広報紙など文書による説明、窓口などで住民と口頭による説明における）外来語・略語の使い方に対する工夫から取り上げる（**図1、図２、図３、図４**）[2]。

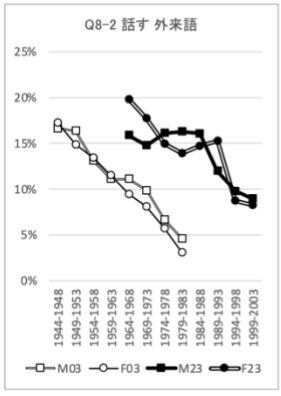


図１ 外来語(話す)

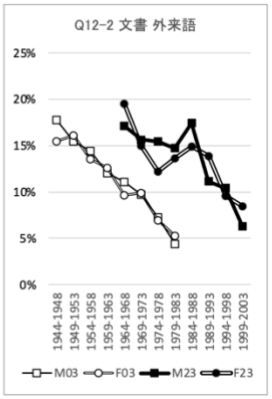


図２ 外来語(文書)

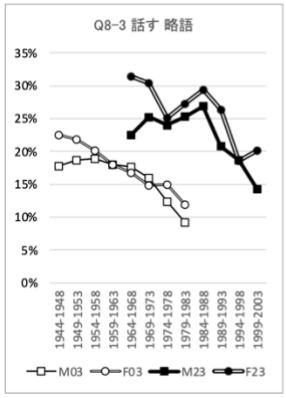


図３ 略語(話す)

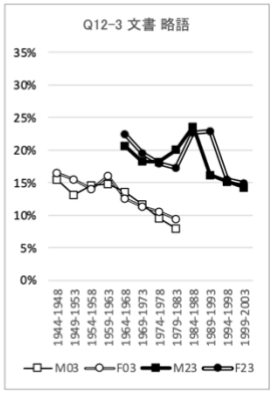


図４ 略語(文書)

2003 年調査と 2023 年調査を比べると、一般行政職員の間では［外来語］では回答する割合がほとんど変わらないのに対し、［略語］では 2023 年調査になると全体的にその割合が高くなる傾向が認められた。

また、それぞれの調査に見られる傾向だが、2003 年調査では年齢による効果（高年になるほど回答率が高くなる）がある点で共通しているが、2023 年調査では、高年層で高い回答率を見せつつ、中年層でその割合が高くなる傾向が認められる。つまり年齢以外の効果が関わっていると考えられる。

３．２．広報紙における外来語・略語の表記意識

広報紙における外来語・略語の表記についての意識に見られる傾向を取り上げる。一般行政職員は、例えば専門性の高い外来語・略語を広報紙で使う必要がある場合、その語義を併記するかどうか、言い換え語のみを記すなどの配慮をすることが求められる。

[2] グラフの凡例は M03 が 2003 年男性、F03 が 2003 年女性、M23 が 2023 年男性、F23 が 2023 年女性を表す。また、縦軸の最大値を 100%にしていないグラフが多いので注意が必要である。

本発表では、外来語、略語（計 8 語[3]）のそれぞれについて、外来語のみの表記（以下、[外来語・略語]）、外来語と言い換え語との併記（以下、[外来語・略語（言い換え語)]）の調査結果を示す。調査結果から、広報紙での表記についてのいくつかの傾向を見出すことができる。

（1）[外来語・略語] の定着（「ボランティア」）（**図 5、図 6**）

2003 年調査で「ボランティア」による表記を選択する率が極めて高く、2023 年調査で、その割合が 9 割を超える。それに対し [外来語・略語（言い換え語)] による表記を選択する率が 2023 年調査で 5%程度にとどまっている。ボランティアは日本語に定着した語である上、認知度も高いことから、言い換え語との併用はほとんど見られない。

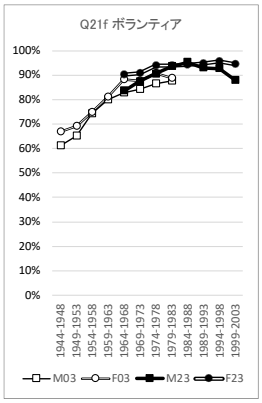


図 5 「ボランティア」

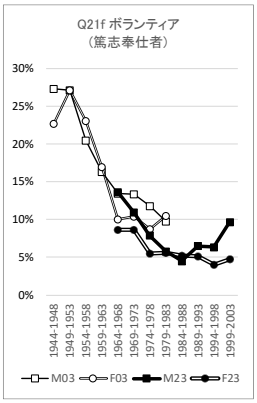


図 6「ボランディア（篤志奉仕者)」

（2）[外来語・略語] が増加するが、[外来語・略語（言い換え語)] が減少する（「デイサービス・ニーズ」）（**図 7、図 8、図 9、図 10**）

[外来語・略語] を選択する率が 2023 年調査で高くなる一方で、[外来語（言い換え語)] を選択する率が 2023 年調査で低くなっている。[外来語] の結果（図 7、図 9）では、2023 年調査で高率になったが、3.1 節と同様、中年層でその割合が最も高く、若年層で割合が低くなる傾向にある。これは「外来語」のみの表記への志向が強くなる一方で、2023 年調査の結果から、[外来語（言い換え語)] を好む傾向が強くなっている可能性がうかがえる。

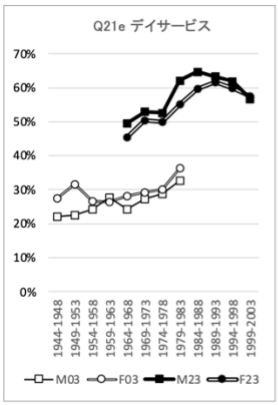


図 7「デイサービス」

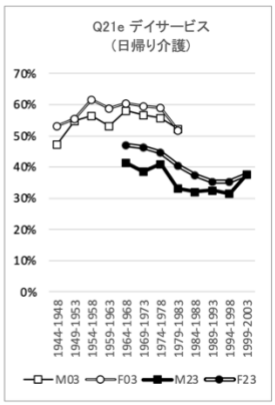


図 8「デイサービス（日帰り介護)」

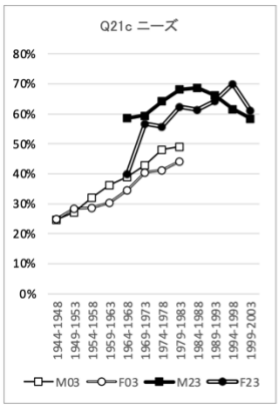


図 9 「ニーズ」

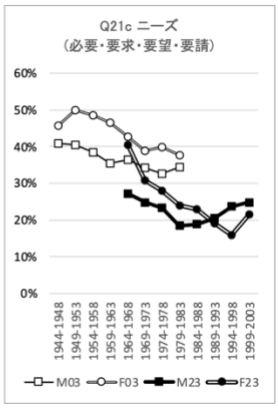
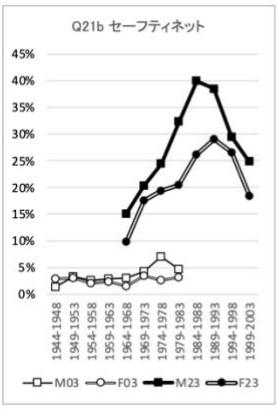


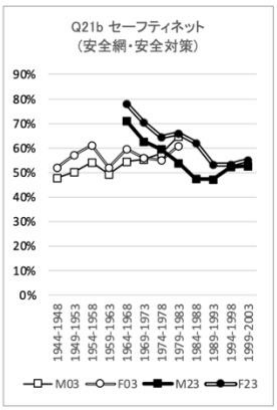
図 10「ニーズ（必要・要求・要望・要請)」

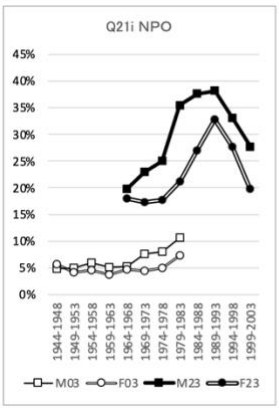
[3] 本文で示す 7 語以外に「パートナーシップ（協力・共同)」があるが、グラフは「セーフティネット」と類似した傾向を示している。

（3）[外来語・略語] が増加するが［外来語・略語（言い換え語)］は高率で使用される（「セーフィティーネット・NPO」（**図 11、図 12、図 13、図 14**）

2003 年調査では[外来語]の使用率が 5%前後と低率であったのが、2023 年調査では中年層で使用率が最も高くなり、若年層では使用率が低くなる。［外来語・略語（言い換え語)］では、2003 年調査と 2023 年調査とでは大きく使用率に変化は見られない。ただし、2023 年調査の若年層では使用率が中年層より高くなっている。ここでも若年層で［外来語・略語（言い換え語)］が支持されていることが示唆される。







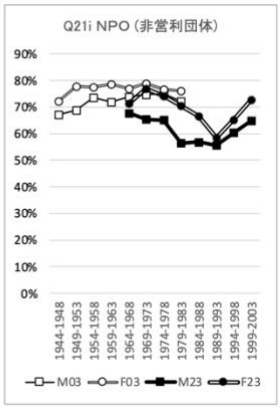
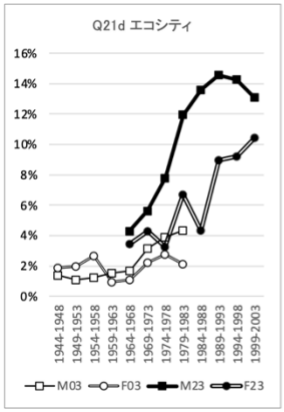
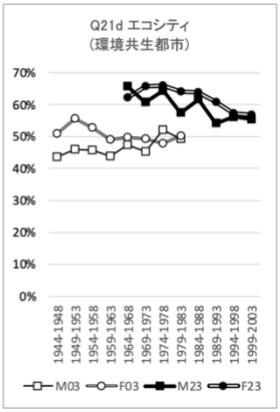


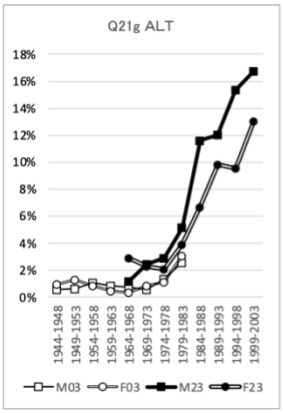
図 11「セーフティネット」図 12「セーフティネット（安全網・安全対策)」　図 13 「NPO」　図 14「NPO(非営利団体)」

（4）[外来語・略語（言い換え語）]がさらなる増加し、[外来語・略語] も使用率が上がる（「エコシティ・ALT」）（**図 15、図 16、図 17、図 18**）

2003 年調査と比べ、2023 年調査の方が[外来語・略語（言い換え語）]の使用率がさらに上がる一方で、[外来語] もその使用率が上がっている。（3）と同様、[外来語・略語（言い換え語)] の使用率の方が［外来語・略語] のそれよりも高いことで共通している。「エコシティ」の 2023 年調査の男性若年層回答者でその使用率が下がっているが、[エコシティ（環境共生都市)] の男性若年層回答者では使用率が上がっていることから、[外来語・略語（言い換え語)] が支持されていることが言えよう。







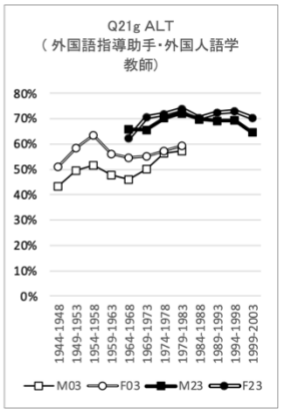
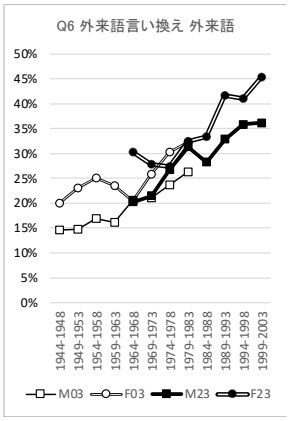


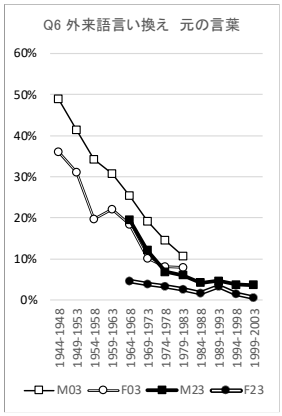
図 15「エコシティ」　図 16「エコシティ（環境共生年)」　図 17 「ALT」　図 18「ALT(外国語指導助手・外国人語学教師)」

３．３．外来語に言い換えることへの評価・言い換え提案への要望

3.2 節では具体的な外来語と略語を取り上げ、その言い換え語の広報紙での表記に見られる傾向を分析した。一方で、[外来語・略語] のみを用いると回答する傾向が強くなるものもあったが、[外来語・略語（言い換え語)] をより好む傾向にあるものもあった。ここでは、元からある言葉を外来語にすること、その反対に外来語を別の語に言い換えることに関する質問項目を取り上げる。

まず、例えば公共職業安定所や老人をハローワーク、シルバーやシニアと外来語に言い換えることについての考え方に関する調査結果から取り上げる（**図 19、図 20**)。図 19、図 20 から、外来語への言い換えの方が元の言葉をそのまま使うより、より多く使われるようになっている。





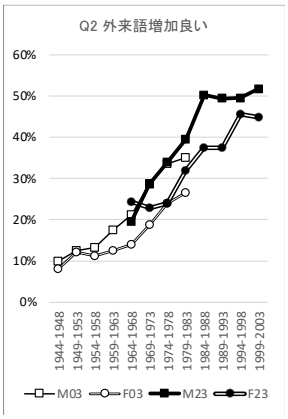


図 19「外来語に言い換えた方がいい」 図 20「元の言葉の方がいい」　図 21「外来語増加は好ましい」

これを裏付けるものに、本調査の質問項目「外来語の増加は好ましいか」がある。この質問に「好ましい」と答えた結果（**図 21**）を見ると、全体的に「外来語増加は好ましい」と回答する割合が 2003 年調査より 2023 年調査で高くなる。また、「外来語言い換え提案」への要望に関する回答結果（**図 22**）によれば、全体的にその要望が少なくなっている一方、若年層でその割合が高くなっていることが読み取れる。図 21 で 2023 年調査の若年層回答者の間で割合が伸びていないことを踏まえると、外来語が増加していることに対する評価が若年層と中年層以上では異なる可能性が考えられる。

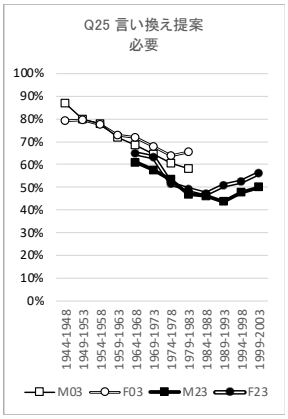


図 22 言い換え提案へ要望

３．４．外来語・略語を使うことの良い点、悪い点

これまで外来語・略語の使い方、広報紙での外来語・略語の表記についての実時間変容のあり方を見てきた。本節では、外来語・略語を使ういい点、悪い点に関する調査結果を取り上げる。質問では、外来語・略語を使ういい点、悪い点について、例えば、「新しさを感じさせることができる」「知的な感じを表すことができる」「気取っている感じを与える」「難しくて覚えにくい」などの選択肢を用意し、質問を行った。ここでは良い点として「話や通じやすく便利である」「言葉の暗いイメージをなくすことができる」、悪い点として「日本語の伝統が破壊される」「誤解や意味の取り違えがおこる」を取り上げる（**図 23、図 24、図 25、図 26**)。

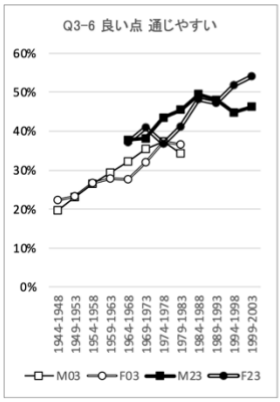


図 23 良い点(通じやすい)

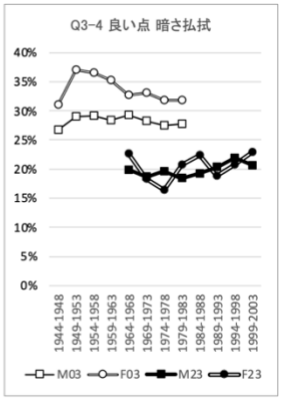


図 24 良い点(暗さ払拭)

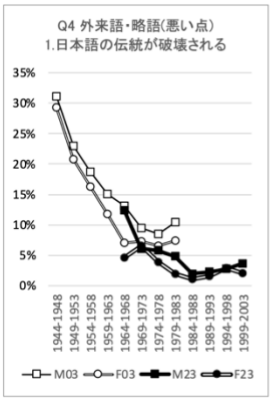


図 25 悪い点(日本語の伝統が破壊される)

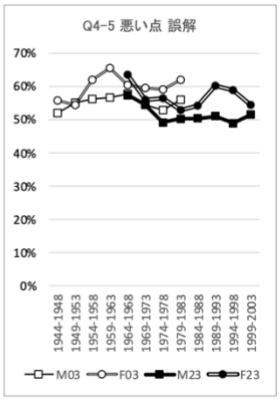


図 26 悪い点(誤解)

図 23、図 25 から「外来語・略語が増える」良い点として、より話が通じやすくなるとともに、「日本語の伝統が破壊される」と回答した人が 5%未満で推移するようになったことがわかる。その一方、図 24 から「これまでの語の持つ暗いイメージを払拭する」と答える割合が低くなり、また、図 26 から「誤解や意味の取り違いが生じる」と答えた回答率は 2003 年調査と 2023 年調査との間で大きな変化が生じていない。つまり、外来語が増加することによるメリットがある一方で、誤解や意味の取り違いがなくなったり、暗いイメージを払拭しているわけではないということなる。

なお、図 24、図 26 には、これまでの分析で明らかになった、2023 年調査の若年層に顕著な傾向が見られるわけではないが、外来語・略語の使用意識に多かれ少なかれ変容が生じていると思われる。

４．まとめと今後の課題

本発表では、全国の自治体の一般行政職員を対象に 2003 年と 2023 年に実施した行政コミュニケーションに意識に関する大規模社会調査データを活用し、外来語・略語意識に見られる実時間変容を考察した。外来語・略語の増加は進んでおり、外来語使用を志向する一方、特に若年層において、外来語と言い換え語との併用を志向する傾向が見てとれた。また、この年齢層において、外来語からの言い換え提案を要望することも示された。これらの点について、本調査の他の質問項目、回答者の属性を含めた詳細な分析を行う必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

国立国語研究所（2003）『行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査（自治体調査）』国立国語研究所

国立国語研究所（2006）「『外来語』言い換え提案：分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫　第１回～第４回総集編」国立国語研究所

田中牧郎（2007）「本報告書の目的」国立国語研究所（編）『公共媒体の外来語』（国立国語研究所報告 126）国立国語研究所，pp. 1-5.
(https://doi.org/10.15084/00001287)

文化庁（2024）『第 22 期国語審議会答申「国際社会に対応する日本語の在り方」』（https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/22/tosin04/index.html）（2024 年 4 月 9 日確認）

共通語の語彙を用いた、語が指す対象物の地域差の検討
―「バインダー」の呼称・連想・認識対象調査―

吉岡（よしおか）　花菜（かな）（明治大学）

1. 目的

方言にはいくつかの種類がある。例えば、母語として身につけられ、日常生活で使用される生活語における方言や、他の地域では使用されない地域語における方言が挙げられる[1]。これらの方言の中には、一つの語が複数の意味や対象を持つ語が存在する。例えば、「からい」という語は、東日本では唐辛子などの刺激の強い辛さを意味する[2]。しかし、西日本では塩気が多いという意味でも使用される[2]。このような語は様々に存在するが、認知されているそのほとんどが動詞や形容詞、形容動詞である。これらの品詞は語形変化が起こりやすい[3]。そのため、文法の観点から他の地域との差に気づきやすい。また、行動や状態を表す言葉なので意味の違いに気づきやすい。一方、名詞は語形変化を伴わず、単純に別の単語が用いられる。そのため、一つの対象に複数の呼称がある例は多く存在するが、一つの語が複数の対象に用いられる例は少なく気づきにくい。しかし、名詞が指す対象は物であるため文脈を考慮する必要がないという利点がある。さらに、対象物が全国で使用されている場合、全国的な地域差の観察が可能である。そこで、本研究では同一の名詞が指す対象が地域によってどのように異なっているかを調査した。

複数の意味や対象を持つ語において、語が指す意味や対象には地域差がある。語を使用する際に語に持たせる意味や対象の地域差は、先行研究にて調査されている。しかし、先行研究の主たる興味は語の使用方法ばかりである。ところが、語が指す意味や対象の理解の有無と語の使用の有無は等価ではない[4]。首都圏の方言や「気づかない方言」では、本来の意味とは異なる意味で使用されている語が多くある[4]。そのため、方言とされている語であっても、どのような意味で理解・使用されているのかを調査する必要がある[4]。共通語は、全国で共通に理解され使用される語である[1]。しかし、語の使用の有無に着目した研究で共通語とされていても、語の使用の仕方と語の理解の仕方とが一致しないのであれば、その共通語の理解が全国で共通しているとは言い切れない。語が全国で共通に理解・使用されているかを判断するためには、語の使用のみではなく語の理解についても調査する必要がある。しかし、方言研究でも、自分が使用しない意味や対象で語が使用された場合にその意味を理解できるのかについてまで調査した研究は少ない。特に、複数の意味や対象を持つ名詞や共通語を用いた研究はほとんど存在しない。そこで、本研究では共通語とされている語の理解と使用について、「バインダー」という語を用いて調査した。

会話の中で「バインダー」という語を相手から言われた場合、通常、「バインダー」として最も印象の強い対象物を思い浮かべて話を進めることになる。この時、思い浮かべた対象物が話者間で一致していない場合、話がかみ合わなくなる。したがって、会話において、語から想起される意味や語が指す対象の印象として何が最も強いかは重要である。し

かし、思い浮かべた対象物が話者間で違っていても、その話者のいずれかが語の対象物として他の対象物も認識していれば、途中で話をかみ合わせることができる。自分はある語をある対象物に使用しないが、その対象物を指して語を使用されても納得できる状態こそが、語の理解ができている状態である。したがって、語の認識や語から連想される対象物が話者間、とりわけ生活地域が異なる話者間でどのように異なるか、どのように異なり得るかの把握は重要である。そこで本研究では、語から最も強く連想される対象と対象の認識を調査することで、各地域の語の理解のあり方を調査した。さらに語の使用の調査と比較することで、語が指す対象の地域差を調査した。この調査により、語の理解と語の使用の地域差の違いの観察を試みた。

本研究では「バインダー」が指す文房具として、Z 式ファイル（図 1A)、クリップボード（図 1B)、リングファイル（図 1C）の 3 点を想定した。「バインダー」という語を含む商品名で最も多く販売されている文房具は、リングファイルである。リングファイルは、ルーズリーフを綴じる文房具である。紙を挟むという観点では、Z 式ファイルやクリップボードを「バインダー」と認識している人もいると考えられる。そのため、複数の対象を「バインダー」と認識する人が多いと推測される。「バインダー」として最も印象が強い対象物は、使用頻度が最も高い対象物だと考えられる。一方で、同一の呼称名を似た用途の対象物に用いると、対象物の区別が難しい。それゆえに、複数の文房具を「バインダー」と認識している場合であっても、「バインダー」を呼称名に用いる文房具は、各話者内で一つに限定されると考えられる。

2. 方法

18 歳から 23 歳の大学生を対象にアンケート調査を実施した。調査対象の地域は、北海道、宮城、新潟、東京、愛知、大阪、広島、愛媛、福岡の 9 都道府県とした。調査人数は各都道府県 60 名ずつ、合計 540 名であった。調査では、図 1 を用いて、「バインダー」という語を聞いた時に最も強く連想する文房具（以下「連想対象」）を一つと、「バインダー」と認識している文房具（以下「認識対象」）を全て選択させた。選択肢は、A: Z 式ファイル、B: クリップボード、C: リングファイル、D: その他の 4 つとした。また、ABC の文房具それぞれにおいて、普段使用する呼び方（以下「呼称名」）を全て回答させた。

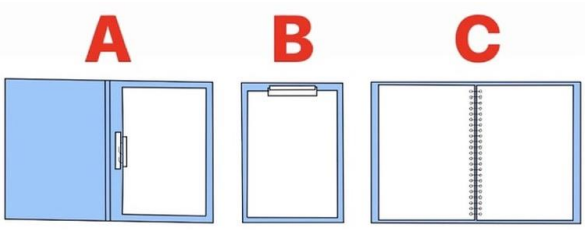


図 1　調査に用いた画像

打ち間違いと考えられる回答は、フリック入力を加味して判断した。また、長音の揺れ

は考えないものとした。その上で、認識対象ではない対象を「バインダー」と呼称していると回答した者 58 名と、ABC 全ての呼称名を「わからない」や無回答とした者 19 名は、信頼できない回答として削除した。その結果、463 名の回答が解析対象となった。

3. 結果

図 2 に「バインダー」という呼称名を用いる対象物の個数を示した。また、図 3 に各文房具を「バインダー」と呼称する人の割合を示した。

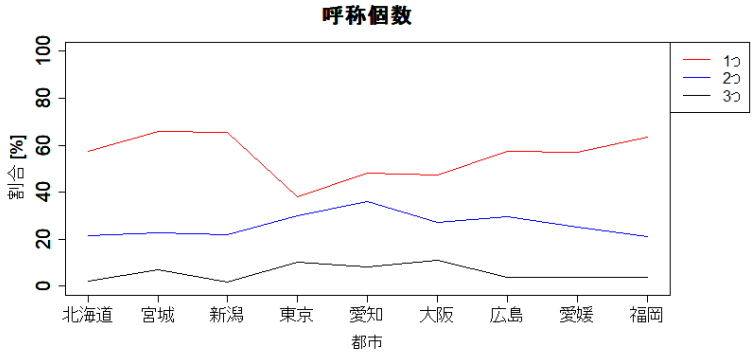


図 2　「バインダー」という呼称名を用いる対象物の個数

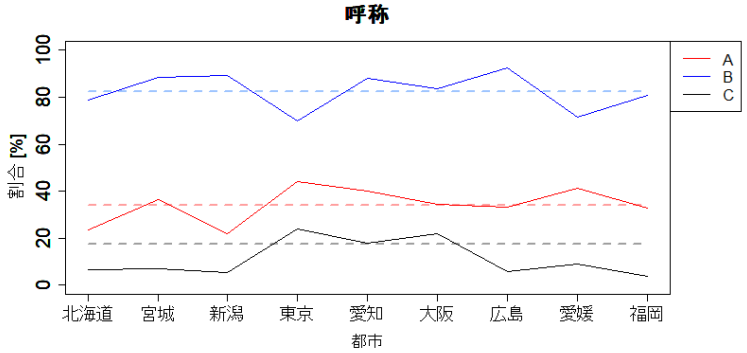


図 3　各文房具の呼称率

図 2 のように、呼称対象が 1 つの人は、東京が最も少なく、東京から遠い地域ほど増加した。また、呼称対象が 2 つの人は愛知で最も多く、愛知から遠い地域ほど減少した。呼称対象が 3 つの人は東京、愛知、大阪で 10%程度見られた。東京、愛知、大阪の 3 大都市では、呼称対象を複数もつ人が多く、この 3 大都市から遠い地域ほど呼称対象が一つだけである人が増加する傾向が示された。

図 3 のように、各文房具の呼称率には地域差があった。クリップボードの呼称率は、東京と愛媛で全国平均よりも顕著に低かった。リングファイルの呼称率は、東京、愛知、大阪の 3 大都市のみが 20%近くあった。また、この 3 大都市でのみリングファイルの呼称率が高く、呼称対象が 3 つの人も多く見られた。この結果から、リングファイルを呼称対象

とする人の多くは、呼称対象が 3 つの人であり、リングファイルのみを呼称対象とする人はほとんど存在しないと考えられる。さらに、東京と愛媛ではクリップボードの呼称率が低かったが、東京は呼称対象を複数持つ人が多く、愛媛では呼称対象を一つだけ持つ人が多かった。これらの結果から、東京ではクリップボードを呼称対象とする人が少ないが、愛媛ではクリップボードのみを呼称対象とする人が少ない傾向が示唆された。

図 4 に「バインダー」という語から各文房具を連想する人の割合を示した。

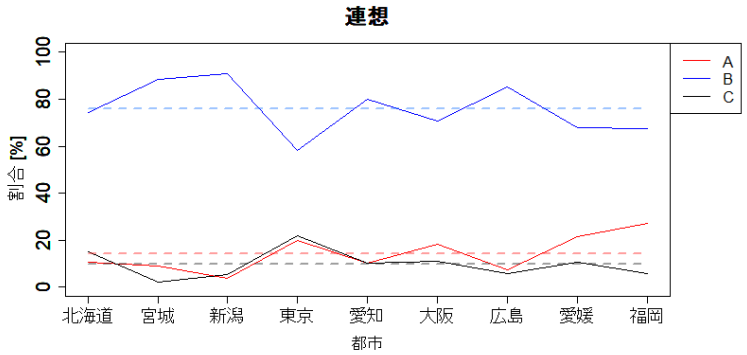


図 4　各文房具の連想率

図 4 のように、各文房具の連想率には地域差があった。クリップボードの連想率は、東京が全国平均よりも顕著に低かった。しかし、東京ではリングファイルの連想率が全国平均よりも顕著に高かった。東京では呼称対象を複数持つ人が多く存在していたために連想対象がクリップボードのみに集中しなかったと考えられる。また、愛知と大阪も呼称対象を複数持つ人が多く存在した。しかし、東京と異なり、クリップボードの連想率が高かった。Z 式ファイルとリングファイルの連想率は、3 都府県で全て異なっている。この結果から、呼称対象を複数持つ人が多い地域でも、連想対象は地域によって異なる可能性が示された。

図 5 に「バインダー」と認識している対象物の個数を示した。また、図 6 に各文房具を「バインダー」と認識する人の割合を示した。

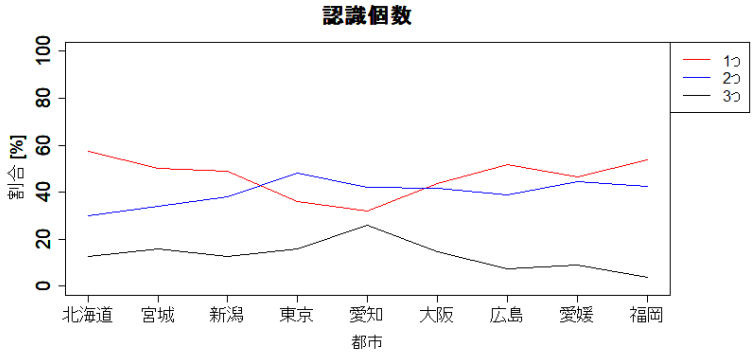


図 5　「バインダー」と認識している対象物の個数

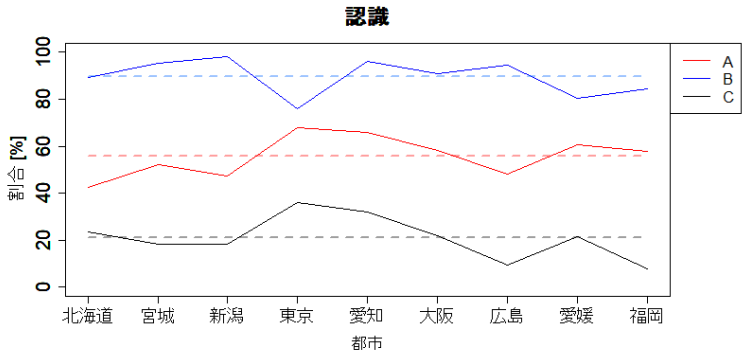


図 6　各文房具の認識率

図 5 のように、認識対象の個数には地域差があった。東京と愛知では認識対象が 2 つの人が最も多かった。大阪を除く西日本でも認識対象が 2 つの人は平均と比較して多く見られた。この結果から、3 大都市以外の地域での認識個数を複数持つ多数の人の存在が示唆された。認識対象が 3 つの人は愛知が最も多く、愛知から遠い地域ほど人数は減少した。

図 6 のように、各文房具の認識率には地域差があった。東京はクリップボードの認識率が全国平均よりも著しく低かったが、Z 式ファイルとリングファイルの認識率は顕著に高かった。愛媛でも東京ほど顕著ではないが、同様の傾向がみられた。東京は呼称対象を複数もつ人が多いが、愛媛は 1 つの人が多い。呼称では同様の傾向が見られない地域でも認識では似た傾向がみられることが示された。この結果は、語をある対象と認識していながらも、その対象の呼称名に語を用いない人の存在を顕著に示している。

4. 考察

呼称、連想、認識対象と、各文房具の呼称率、連想率、認識率には地域差があった。

呼称対象は、3 大都市（東京・愛知・大阪）で複数持つ人が多く、中心都市から遠い地域ほど一つだけ持つ人が増加した。呼称対象の個数にも各文房具の呼称率にも地域差があった。呼称対象の個数と呼称率との比較によって、ある対象物の呼称率が低い原因の推測が可能となった。このように、複数の対象物に対する呼称の有無の調査は重要である。

呼称と連想の結果との比較を通じて、呼称対象が必ずしも連想対象にならないことが示唆された。呼称対象を複数持つ人が多い地域では、連想対象は地域により傾向が異なった。3 大都市では、呼称対象を複数持つ人が多かった。しかし、Z 式ファイルとリングファイルの連想率は東京で全国平均以上、愛知では全国平均以下、大阪では Z 式ファイルのみが全国平均以上となった。呼称対象の個数のみを見ると、3 大都市で語の多様化が進んでいると考えられる。しかし、連想対象の結果まで含めて見ると、語の多様化が進んでいるのは東京のみだと推測される。このように、呼称の多様化が進んでいても、語の印象まで大きく変化しているわけではない。この変化は、呼称としての語の使用の有無のみの調査では明らかにすることができない。語からの連想対象まで調査する必要がある。

また、呼称と認識の結果の比較を通じて、呼称対象と認識対象の不一致が示された。呼称

対象を複数持つ人は 3 大都市で多く見られた。しかし、認識対象を複数持つ人は 3 大都市以外でも多く見られた。この結果は、呼称対象と認識対象の地域差が異なる可能性を示唆する。また、認識対象であっても呼称対象とはしない対象物を持つ人の存在が明らかになった。このような人は、認識対象を複数持ちながら、相手に伝わるかを考慮して呼称対象とするかをきめていると推測される。東京ではクリップボード以外を連想対象とする人も多いため、話がかみ合う機会が多い。話がかみ合わない場合でも認識対象を複数持つ人が多いために修正が容易だと推測される。その結果として、呼称対象を複数持つ人が多いのだと考えられる。一方、愛知は連想対象をクリップボードとする人が多いために、認識対象が 3 つの人が東京より多いにも関わらず、呼称対象が 3 つの人は東京よりも少ないのだと推測される。

会話の成立において、語から連想する対象や語として認識している対象は意思疎通の上で重要な役割を担っている。本研究では、その連想対象や認識対象には地域差があることが示唆された。ある対象に対する語の使用の有無に地域差があることは、既に先行研究で明らかになっている。そのような語に対して、連想対象や認識対象を調査する必要がある。また、共通語とされている語でも、語の理解が全国で共通していない可能性がある。その真偽を確認するためにも、語の連想対象や認識対象を調査する必要がある。

5. 結論

共通語は、語の理解と使用が全国で共通する語である[1]。しかし、語の理解は会話の成立に重要であるにもかかわらず、語の理解に関する研究はほとんどなされていない。そこで、本研究では、連想される対象と認識されている対象の地域差の調査を、共通語とされている「バインダー」という語を用いて行い、各地域の語の理解のあり方の差の観察を試みた。さらに、「バインダー」を呼称名に用いる対象を調査し、語の使用と語の理解が一致しているのかを調査した。その結果、連想対象と認識対象には地域差があった。共通語とされている語であっても、その語の理解は全国で共通していないことが示唆された。また、各対象の呼称率にも地域差があった。その地域差は、連想率や認識率の地域差とは異なっていた。この結果から、語の使用と理解は一致してないと考えられる。方言は共通語よりも語の使用に地域差がある。したがって、語の使用と理解が大きく乖離すると推測される。全国的に一般的な語に対しても、その語の使用の有無だけではなく、語から連想する対象や認識を含めた語の理解について調査する必要がある。

6. 参考文献

[1] 井上史雄「現代方言のキーワード」『方言の現在』小林隆 他 編（1996）明治書院
[2] 篠崎晃一（2017）『東京のきつねが大阪でたぬきにばける　誤解されやすい方言小辞典』三省堂
[3] 大西拓一郎 編（2002）「方言文法調査ガイドブック」文庫堂
[4] 鑓水兼貴（2014）「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して，国立国語研究所論文集, Vol. 8, pp.197-222

ポライトネス理論と配慮表現研究－今後の展開の可能性－

宇佐美 まゆみ，山岡 政紀，牧原 功，小野 正樹

１　本ワークショップの趣旨

宇佐美 まゆみ（東京外国語大学）

ブラウンとレヴィンソン（以降，B&L）のポライトネス理論（1978[1]）が初めて発表されてから早半世紀が過ぎようとしている。この理論は，言語学，日本語学にも多大な影響を与えた一方，1990 年代初頭には，「ポライトネス」と「個別言語における敬語の原則」とを誤って同一視したり，「フェイス」や「普遍性」の捉え方の誤解に基づく批判が，主に東アジアの言語学者や記述的アプローチを取る研究者から起こった。しかし，2000 年代に入る頃には，英語圏の学界におけるポライトネス研究は，かみ合わない議論の末に，理論的研究と記述的研究に二極化してくことになり，理論的研究の一つの成果としての B&L の理論は，言語研究分野におけるポライトネス理論の基本理論となって現在も様々な形で活用されている。

2000 年代に入って，ポライトネス理論が日本語学の分野においてもよく知られるようになると，この理論を踏まえた上で，日本語の配慮表現研究を展開させようという動きが出てきた（山岡，2004[2]）。本ワークショップでは，普遍理論としてのポライトネス理論と，日本語という個別言語における「配慮表現」がいかなる関係にあるか，また，今後，両者がどのように展開していくのが望ましいかを展望するとともに，実際の配慮表現に関する研究も報告する。発表１では，「ディスコース・ポライトネス理論（DP 理論）と日本語の配慮表現研究の展開に向けて」と題して，DP 理論の今後の課題と配慮表現研究の連携の可能性を探る。発表２では，日本語における「ポライトネスの慣習的表現」として配慮表現を位置づけ，その定義と特徴を明確にした上で今後の配慮表現研究の展開の見通しを論じる。発表３では，配慮表現には日本語学習者が理解しやすいタイプと理解しにくいタイプがあることに着目して調査を行い，日本語母語話者，日本語学習者の丁寧さの理解度が，配慮に関わる成分の統語的な出現位置と関連していることを示す。最後にフロアも交えて，ポライトネス理論と配慮表現研究の今後の展開の可能性について議論を行いたい。

1:　Brown, P., & Levinson, S. (1978). Universals in Language Usage: Politeness Phenomena. In E. Goody (Ed.), Questions and Politeness: Strategies in Social Interaction.56-310.

2: 山岡政紀（2004）「日本語における配慮表現研究の現状」『日本語日本文学』14:17-39.

２　ディスコース・ポライトネス理論（DP 理論）と日本語の配慮表現研究の展開に向けて

宇佐美 まゆみ（東京外国語大学）

１．はじめに

DP 理論は，B&L のポライトネス理論の鍵概念は踏襲した上で，研究対象を談話レベルに拡大するとともに，ポライトネスについて，話し手側のストラテジーとしてだけではなく，聞き手側の受け止め方という観点を導入し，「ポライトネス効果」も対象とした。また，その場におけるポライトネスだけでなく，「後日のお礼の言葉」の有無なども，ポライトネスにかかわるものとして，「時間的概念」を導入し，話し手と聞き手それぞれが，「フェイス侵害行為」を行った際には，「フェイス侵害度軽減行為」を行い，フェイス侵害度を「差引き０」以上に保とうとするという「フェイス均衡原理」を新たに導入した。

さらに，「フェイス充足行為」という概念も導入し，フェイス侵害度を０に保つということ以上に，「ほめ」などのフェイス充足行為を行って，フェイス充足度を０よりも高い状態に保つことも可能であるとする考え方を導入した。ただ，B&L の理論と同様，これらの理論的捉え方は示したが，個別言語における特定の状況において，具体的にはどのような表現が用いられるのか，その表現の選択肢をどのように提示するのかということが，応用的課題であった。本発表では，DP 理論の課題であるこの問題を解決していく際には，日本語の配慮表現研究に期待できるということを論じ，今後の協働展開の可能性を探りたい。

２．DP 理論のエッセンスー「見積もり差」の同定方法を中心にー

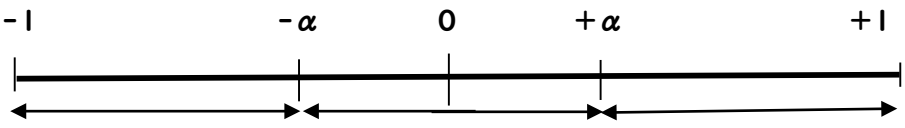
DP 理論の基本的概念の詳細については，宇佐美（2001，2003 等）に記した。B&L も含めて，それまでのポライトネス研究が扱っていたのは，話し手が，場面や状況に応じて，いかにポライトネス・ストラテジー，すなわち，ポライトな言語表現を用いるかということであった。しかし，DP 理論では，聞き手が話し手の発話をどのように受け止めたかという聞き手側から見た「ポライトネス効果」も扱うことにした。B&L では，話し手が，特定の状況・場面で，どのような言語表現を選択するかを「フェイス侵害度見積もりの公式」に基づいて「見積もる」が，DP 理論では，聞き手も同じ公式に基づいて，どのような言語表現がその場にふさわしいかを見積もっていると仮定するのである。そして，聞き手の側の快・不快の受け止め方である「ポライトネス効果」は，話し手と聞き手の「見積もりのずれ」が，「許容できるずれ幅（±α）」を超えているかどうかで決まるとした。

「見積もり差（De 値）」は，絶対的な数値として算出できるわけではないが，0 を挟む－1 から＋1 までの一つの連続線上に分布すると仮定することによって，体系的に捉えることができる。つまり，「De 値」とは，「話し手の発話のフェイス侵害度の見積もり（Se: Speaker’s estimation）」と「聞き手側による話し手の発話のフェイス侵害度の見積もり（He: Hearer’s estimation）」のギャップ（De ＝Se－He）を－1 から＋1 の間で表した値である。「フェイス侵害度見積もりの公式」としては，「話し手自身のフェイス保持欲求度」を差し引く形の「修正版」（宇佐美，2017，2019） を用いる。

図１で示したように，話し手と聞き手の「見積もり差（De 値）」が，0 か，「許容できるずれ幅（±α）」の範囲内に収まる行動は，「行動の適切性」の観点からは「適切行動」とみなされ，不快感をもたらさない。つまり，ポライトネス効果の観点からは，プラス効果を生むか，ニュートラル効果になる。また，話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも，「許容できるずれ幅（－α）」を超えて少ない場合，それは，行動の適切性の観点からは「過少行動」となり，ポライトネス効果の観点からは，マイナス効果（無礼，不快）を生む。

逆に，話し手の見積もりが，聞き手の見積もりよりも，許容できるずれ幅（＋α）を超えて高い場合，それは，行動の適切性の観点からは「過剰行動」となり，ポライトネス効果の観点からは，マイナス効果（慇懃無礼，不快）を生むことになる。

これまで敬語研究などでは，あまり扱われてこなかった「慇懃無礼」は，DP 理論で解釈すると，「聞き手が当該の状況で適切であると考える言語行動よりも「許容できるずれ幅＋α」を超えて，話し手が「丁寧な表現」を使用した」場合であると解釈できる。



見積り差（De 値）の範囲	－1≦De<－α	－α≦De≦＋α	＋α<De≦＋1
行動の適切性	過少行動（例：粗野）	適切行動（適切）	過剰行動（例：慇懃無礼）
ポライトネス効果	マイナス効果（失礼，不快）	プラス効果（快） ニュートラル効果（中立）	マイナス効果（失礼，不快）

話し手の行為xに対する話し手と聞き手双方の「フェイス侵害度の見積もり」*1

$W(x)=D(S,H)+P(H,S)+R(x)-DSF(S)$

DSF（S）：Desire for Saving his/her own Face 話し手自身のフェイス保持の欲求

*1 修正版「フェイス侵害度見積もりの公式」（宇佐美，2017，2019）に基づく

見積もり差（De 値：Discrepancy in estimations）

$D(e)=S(e)-H(e)$

S(e)：話し手（Speaker）の「見積り（estimation）」*2

H(e)：聞き手（Hearer）の「見積り（estimation）」 *2

*2 仮に，0 から 1 の間の数値で表すものとする

ポライトネス効果

① $D(e)=S(e)-H(e)>+\alpha$ 過剰行動（慇懃無礼） マイナス・ポライトネス効果

② $D(e)=S(e)-H(e)=\pm\alpha$ 適切行動（適切） ニュートラル効果，プラス効果

③ $D(e)=S(e)-H(e)<-\alpha$ 過少行動（無礼） マイナス・ポライトネス効果

$S(e)=D(S,H)+P(H,S)+Rx-DSF(S)$

$H(e)=D(S,H)+P(H,S)+Rx-DSF(S)$

α：許容できるずれ幅

＊「見積もり（estimation）」には，以下の 3 種がある

①話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度についての「見積もり（期待値）」

②「フェイス侵害度の見積もりに応じて選択されたストラテジー」の「見積もり（期待値）」

③「談話の基本状態」が何であるかについての「見積もり（期待値）」

図 1 「ポライトネス効果」の同定方法

３．DP 理論における「フェイス均衡原理（face-balancing principle)」

その後，宇佐美（2017）において，次のような概念を追加した。すなわち，①時間経過，②フェイス充足行為，③フェイス充足度，④フェイス均衡原理（face-balancing principle）である。時間経過の概念を加えることによって，一定の期間内における 2 者間の相互作用というフェイス・ワークを時系列的に質的に分析することを可能にした。これによって，「フェイス侵害度見積もりの公式」（修正版）を用いた量的研究と，「フェイス均衡原理」を枠組みとする質的研究の双方からのアプローチが可能になった。

４．ディスコース・ポライトネス理論と配慮表現研究

以上，DP 理論の理論的枠組みを示したが，個別言語における特定の状況において，具体的にはどのような表現が用いられるのか，その表現の選択肢をどのように提示するのかということが，長年の応用的課題であったところ，山岡（2015，2019）は，普遍理論であるポライトネス理論に基づき，その個別言語における各論として「配慮表現研究」を展開していた。ポライトネス理論と配慮表現研究は，必然的な形で融合し展開していたのである。

しかし，DP 理論については，聞き手の側の受け止め方や，話し手と聞き手の「見積もり差」がかかわるため，具体的表現を分類，列挙するという形だけではまとめられない。それでも，筆者は，心理学者や工学者とも協働することによって，DP 理論の検証や配慮表現の使用について様々な実験や調査が可能であると考えている。DP 理論に関係づけると，例えば，ある文脈におけるいくつかの配慮表現のポライトネスを，話し手側，聞き手側の 2 群に分けた被検者に 10 段階くらいで評定してもらい，それらの中に，文脈によって「見積もり差」が生じるものもあるのか，その「差」が，「許容できるずれ幅（±α）内」に収まるのか否かなどを，様々な表現を組み合わせて行うというようなことが可能である。

山岡（2019）では，「配慮表現辞典」が必要ではないかと述べられており，同感であるが，個人的には，さらにその先の談話レベルにおける配慮表現の使い方，つまり，語法（用法）の辞典もほしいところである。「慣習化」の度合いがさほど高くないものも含めてその用法が体系的に提示されれば，現在の日本語学習者だけでなく母語話者にとっても有益である。

参考文献

宇佐美まゆみ（2001）「談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想ー」『談話のポライトネス』，国立国語研究所: 9-58.

宇佐美まゆみ（2003）「異文化接触とポライトネスーディスコース･ポライトネス理論の観点からー」『国語学』54(3)，国語学会: 117-132.

宇佐美まゆみ（2017）「ディスコース・ポライトネス理論の新展開ー「時間」「フェイス充足度」「フェイス均衡原理」という概念を中心にー」『漢日語言対比研究論叢』第 8 号, 125-139.

宇佐美まゆみ（2019）「21 世紀礼貌現象研究的可能性—話語礼貌理論的新発展—」(李瑶訳)『日語学習与研究』第 204 巻，第 5 号, 23-34. 日本語：chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://isplad.jp/lab/pdf/monograph/2019bJ.pdf

山岡政紀（2015）「慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義」『日本語用論学会第 17 回大会発表論文集』10 日本語用論学会，315-318.

山岡政紀編（2019）『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版.

３　ポライトネスの慣習的表現としての配慮表現の定義と特徴

山岡 政紀（創価大学）・小野 正樹（筑波大学）

１．ポライトネスと配慮表現

配慮表現は「対人的コミュニケーションにおいて，相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが，一定程度以上に慣習化された言語表現」と定義される（山岡 2015）。端的に言えば，ポライトネスの慣習的表現ということである。

ポライトネス理論は主に Leech(1983)や B&L(1987)で提唱された理論体系で，対人コミュニケーションを調整しようとする心理的な動機づけを言語化して記述し，それに基づく対人行動全般を説明する説明原理として体系化したものである。対人行動には言語行動のみならず，発話しないという選択や表情・身振り・対人距離といった非言語行動も含まれる。B&L(1987)は，対人関係（親疎・上下）や特定文化における行為の負荷度などを変数としてポライトネスの対人行動が変容することをポライトネス・ストラテジーとして説明しており，これによってポライトネスが，特定の語彙や表現の意味として固定的に現れるとは限らず，極めて文脈依存的で流動的な機能現象であることが的確に記述されている。

ポライトネスの文脈依存性を示す事例の一つに，宇佐美まゆみの一連の研究（宇佐美（1995）など）にみられる日本語のスピーチレベルシフトの機能がある。敬体（丁寧体）の談話を常体（普通体）にシフトすることは，ある文脈では親しみを表すポジティブ・ポライトネスにもなるが，別の文脈では相手を見下すインポライトネスにもなり得る。逆に常体を敬体にシフトすることも，ある文脈では相手への敬意を表すネガティブ・ポライトネスにもなるが，夫婦げんかのような文脈では相手と距離を置こうとするインポライトネスとなる。つまり，敬体か常体かという形式選択がどのようなポライトネス機能を果たすかは文脈によって変動するというのである。

ポライトネスの文脈依存性を示す別の事例としてほめ言葉が挙げられる。「きれいだね」のようなほめ言葉は，ある文脈では相手を喜ばせるポジティブ・ポライトネスとなるが，人間関係や状況の異なりによる別の文脈では，アイロニー（皮肉），ハラスメント（嫌がらせ），マウンティング（上から目線）といったインポライトネスともなり得る。このように，ポライトネスという文脈依存的な機能現象は，原理的に言えば特定の言語表現と必ずしも固定的な関係を結ぶものではないのである。

ところが，人間の社会生活ではポライトネスを必要とするような同一の対人的文脈が繰り返し生起する。そのような同一文脈では表現の選択を効率化して特定の表現を繰り返し用いる傾向がある。その結果，ポライトネスの機能が特定の表現に固着しているように見えるようになる。この現象が慣習化(conventionalization)であり，ポライトネスが慣習化した表現が配慮表現である。本発表では慣習化をめぐる理論的背景を確認しながら，配慮表現を生み出した対人的文脈の例として依頼と贈与を取り上げ，ポライトネス理論と配慮表現研究の関係性について考察したい。

２．依頼表現に見られる慣習化現象

Leech（1983: 24-30)では，語用論の原理(principle)と文法の規則(rule)との対比を様々論

じるなかの一つとして動機づけ(motivation)と慣習(convention)との相補的な関係を説明している。それによると語用論の原理は基本的に非慣習的である。つまり，ある表現意図を相手に伝えるという話者の動機づけが意識上に顕在化していて，その動機づけに基づいて意識的に言語行動を選択する際に働くのが語用論の原理である。

これに対して，文法的な規則は慣習的である。つまり，形式と意味とをつなぐ規則が無意識の領域に潜在化していて，無意識的に表現を選択する際に働くのが文法規則である。

そのうえで，語用論の原理も，それが適用される文脈の頻出によって表現の選択が効率化されて動機づけの意識が薄らぎ，あたかも文法規則であるかのように当該文脈上で定型表現の使用が定着していく。これが慣習化である。リーチは語用論の原理が慣習化する現象の説明に隠喩(metaphor)が慣習化して死喩(dead metaphor)となる事例を挙げている。

慣習化には様々な程度の中間段階があり，慣習化が進めば進むほど動機づけの意図がその分薄らぐ。リーチはこれを慣習化の勾配性(gradience)と呼んでいる(Leech 1983: 28)。ただし，慣習化はあくまでも語用論の領域内で起きるものであり，さらに進んで完全に文法規則となってしまう現象は文法化(grammaticalization)と呼ばれて一線を画している。

ポライトネスが慣習化した事例としてリーチが挙げているのが英語の依頼表現である。英語では依頼に際して可能疑問文 “Can you ～?” で問いかけることで相手にかける負担感を緩和するポライトネス機能を帯びて慣習化しており，配慮表現の定義に合致する。

(1) Can you repair this watch? （この時計を修理してもらえませんか）

(2) Can you pass me the salt? （そのお塩を取ってもらえませんか）

“Can you ～?” は(1)のように可能疑問の原義が活きている文脈でも，(2)のように可能疑問の原義がもはや喪失する文脈でも依頼を表し得るところまで慣習化している。いっぽう，別の可能疑問文 “Are you able to ～?” の場合，(3)のように適切な文脈（話者が壊れた時計を時計店に持ち込んで発話した場合等）で用いられた場合は依頼となり得るが， (4)は依頼を表すことはできない。つまり“Can you ～?” と “Are you able to ～?” とでは依頼表現としての慣習化の度合いに大きな差があるということである。

(3) Are you able to repair this watch? （この時計を修理できますか）

(4) ?? Are you able to pass me the salt? （お塩を私に渡せますか）

中国語でも同様の現象が見られる。可能疑問文のうち(5)はポライトネス機能を帯びた依頼表現として慣習化しているが，(6)は英語(3)と同様，原義のままの可能疑問文であり，適切な文脈においてのみ依頼となる。

(5) 你能不能修这块表？（この時計を修理してもらえませんか）

(6) 你会修这块表吗？ （この時計を修理できますか）

日本語でも依頼は日常会話で頻発するため，(7)に示す多様な形式群がポライトネス機能を帯びた依頼表現として慣習化している。

(7) この時計を修理し＋てくれますか／てくれませんか／てもらえますか／てもらえませんか／てほしいのですが／てもらいたいのですが。

当初，間接的な表現とされていた(8)も今日では依頼表現として慣習化しているし，(9)も近年急速に慣習化が進行している表現である。

(8) この時計を修理してくれたら＋うれしい／ありがたい／助かります。

(9) この時計を修理してもらっていいですか。

しかし，英語(1)，中国語(5)の直訳に相当する日本語の(10)はこのままでは依頼とは見なされず，英語(3)，中国語(6)と同様，適切な文脈においてのみ依頼の効力を持つ。

(10) この時計を修理できますか。

日本語の場合，依頼の意図を相手に伝えるには授受補助動詞を用いて話者が受益者であることを示す必要があり，そのことが慣習化の構文的制約となっていることがわかる。

３．贈与表現に見られる慣習化現象

出現頻度の高い文脈の別の事例として，他者に品物を贈る贈与の文脈を挙げたい。その場合，人は恩着せがましさを薄めることや，相手に借りを負ったと思わせないことなどを意図したポライトネスを動機づけとして，贈り物の価値を低めに言う傾向がある。このポライトネス現象は通言語的現象として普遍的に見られる。

(11)这是我一点儿心意，你收下吧。（中国語）

(12)This is a little token of my gratitude to you. I hope you like it. （英語）

日本語でも同様に贈り物の価値を低めに言うことが一般的に認められており，(13)，(14)のように多様な表現が用いられる。

(13) 大したものじゃないんですけど，よろしかったらお召し上がりください。

(14) いつもお世話になっていますので，ほんの気持ちです。

この時点で既に通言語的な慣習化の傾向が見て取れるため，配慮表現の定義に合致する。ただし，個別言語の文化的要因に応じて慣習化の度合いには違いがある。日本ではお中元やお歳暮といった伝統的な贈与の文化があって贈与の機会が頻繁にあるため，表現の選択が効率化され，この文脈にふさわしい表現の慣習化がいっそう進み，(15)のような極端な表現が定型句として使用される。

(15) つまらないものですが，ご笑納ください。

(15)における「つまらないものですが」や「ご笑納ください」のような極端に慣習化した配慮表現は他言語に直訳して使用することができない。

「つまらない」は原義としては「面白くない。興味が感じられない。意味や価値がない」といった否定的な意義(sense)をもった形容詞だが，このような贈与の文脈ではこの原義が完全に喪失して相手に気を遣わせないためのポライトネス機能を帯びた定型句的な配慮表現として使用される。この表現は贈与の文脈でしか用いられないため，依然として文脈依存性に変わりはないが，文脈と表現とがセットで慣習化する現象によって，あたかもこの表現の意義のひとつであるかのように捉えられ，辞書にも登載されるに至る。実際に国語辞書の「つまらない」の項には語釈②の「使い方」に「つまらないものですが」の定型句としての用法が使用文脈（下線部）も添えて記載されている。

(16) つまらない【詰まらない】［連語］①心がときめくようなことがなくて，面白くない。また，興味が感じられない。②意味や価値がない。また，無意味でばかばかしい。使い方「つまらないものですが，…」の形で，贈り物などを差し出すときに謙遜の気持ちを添える挨拶語としても使う。「つまらないものですが，ご笑納ください」（『明鏡国語辞典』第三版（2021），用例と③以下を省略，下線は本発表者）

(13), (14)の表現よりも「つまらないものですが」のほうが慣習化の度合いが強く，その

分，動機づけは弱まっている。

もっとも，「つまらないものですが」は次第に使われなくなり，文化庁の「国語に関する世論調査」等の結果から，現代の若年層はあまり使わなくなっているという報告がある（塩田（2023）など）。このように，慣習化は一方向ではなく，一度慣習化した表現が再び非慣習化していくこともあり得る。したがって，長期的視点で見れば依然としてその流動性は語用論の領域で潜在的に滞留しており，完全に文法化しているわけではない。

４．まとめ

配慮表現の定義にある「一定程度以上の慣習化」というのは曖昧な表現だが，慣習化には勾配性があるため，慣習化の度合いのどこかに不連続の境界線を見つけることはできない。そのうえで，例えば「配慮表現辞典」を作るとしたら，実用的な観点から慣習化の度合いの強いものをリストアップする線引きを「決め」の問題として行う必要がある。

一方でポライトネス理論の側から見ると，慣習化のあらゆる度合いの事象も考察の対象となる。ポライトネス機能の慣習化がいかなる表現に対してどのように発生するかは個別言語の構文的制約や文化的要因などに左右されることから，普遍理論であるポライトネス理論の個別言語各論として配慮表現研究を位置づけていくことが可能ではないだろうか。

参考文献

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662: 27-42.

塩田雄大（2023）「“何もありませんが”とは言わなくなっていくのか～2022 年『日本語のゆれに関する調査』から（2）」『放送研究と調査』第 73 巻第 1 号，44-62.

山岡政紀（2015）「慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義」『日本語用論学会第 17 回大会発表論文集』10 日本語用論学会，315-318.

山岡政紀編（2019）『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版.

Brown, P. and S. Levinson （1987） *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.

Leech, G. （1983） *Principles of Pragmatics,* London: Longman.

４　文中の配慮の理解度について－日本語母語話者と日本語学習者を比較して－

牧原 功（群馬大学）・小野 正樹（筑波大学）

１．はじめに

日本語において母語話者が意識的あるいは無意識に用いている対人配慮に関わるストラテジーの中には，日本語学習者が理解しにくいタイプと，理解しやすいタイプが存在している可能性がある。そして，これには様々な要因が関与していると考えられる。例えば，語彙的に対人配慮に関わる意味を読み取りやすいか否か（凄く有益な情報なのですぐに連絡してみます：早速連絡してみます），述語に含まれる文法成分か副詞的成分か（この点に問題があるように思います/ました:ちょっと問題があると思います），副詞的成分の場合，副詞句（節）か一語の副詞か（せっかく来ていただいたのに申し訳ないんですが今不在にしておりまして：生憎今不在にしておりまして），述語成分の場合，語幹寄りか文末寄りか（この点に問題があるように思います/ました：この点に問題があるのではないでしょうか），文の構造的な変化－名詞化等－（今日の遠足は中止します：中止です），ポライトネス・ストラテジーの言語差，母語からの干渉の有無，等々である。

本発表では，これまでのいくつかの研究から得られた知見をもとに，対人配慮に関わる成分が文中に現れる位置と，対人配慮との関連の理解度とに一定の関連性が見られるのではないかということを主張し，それを言語教育に活かすことができるのかということを検討したい。

２．文の対人配慮の理解のしやすさ

日本語のポライトネスについて，共同研究者と考察を進める中で，配慮表現について，発表２で示されたとおり「対人的コミュニケーションにおいて，相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが，一定程度以上に慣習化された言語表現」と定義した。ここで言う慣習化の程度は，副詞句のレベルでは「僭越ではございますが」のように極めて慣習化され固定化された表現から，「私のような者がこの場でお話しするというのもなんなのですが」というような表現の自由度を有するものへの連続性として考えることができる。このような例では，慣習化の度合いが直観的に理解されやすいが，文法形式が対人配慮を表す場合にも慣習化の程度が存在することが予想される。例えば以下のような例である。

(1)（明らかな誤りを指摘する際）ここ，数字が違ってますよ。
(2)（明らかな誤りを指摘する際）ここ，数字が違っているみたいですよ。
(3) 本日から 2 泊でよろしいでしょうか。
(4) 本日から 2 泊でよろしかったでしょうか。

慣習化の程度をどのように測ればよいかと考えてみると，慣習化が進んでいるものほど対人配慮との関連性を直観的に感じ，慣習化が進んでいないものであれば対人配慮の程度の変化に気づきにくいと予想される。この仮説に従えば，例えば，上記の文の対比において，対人配慮の程度の変化に気づきやすいものほど慣習化が進んでおり，気づきにくいものほど本来の文法的成分の意味がより強く意識されることによって，結果的に対人配慮と

の関連を気づきにくいこと考えられる。発表者の語感では，(1)（2）も（3）(4）も，モダリティ成分の「みたい」，テンスの「た」を用いた表現の方が丁寧であると感じられる。しかしながら，(1）と（2）の差と比較すると（3）と（4）の違いはわずかであるようにも思われる。一定数の母語話者にそれぞれの文の表す対人配慮の程度の違いについてどう感じるかというアンケートを実施してみれば，(1）と (2) の差は明確に示されるのに対し，(3）(4）では回答に揺れが出るであろうことが予測される。これが，慣習化の度合いと関係しているのではないか，というのが本発表での主張の一つである。(2）の文脈では，話者は指摘する点を明らかな誤りであると考えているのだから，そこで蓋然性判断として「みたい」を用いる必要性はない。つまり（2）は蓋然性判断のモダリティ形式を用いているが，その機能は蓋然性判断ではなく，「自分の判断が間違っているかもしれない」ということを示し，不一致を避ける（一致しない部分を小さくする）といったポライトネス・ストラテジーに特化して用いられているわけである。その一方で，(4）の「た」はポライトネス・ストラテジーとして (1) の「みたい」ほどには慣習化が進んでいないため，聴者はなぜ「た」を使うのだろうと，相手の発話に不自然さを覚える場合も出てきそうである。

上記の例はモダリティとテンスという文法形式が対人配慮と関与する場合での比較であるが，述語成分には，ボイス，アスペクトなども存在しており，それらが対人配慮を変化させている場合，理解しやすさにどのような要因があるのかを検討したい。

３．対人配慮に関わる成分と文構造

本発表では，牧原・西田（2022)，牧原・李・西田（2023）をもとに，述語成分の構造と，対人配慮に関わる成分の出現位置に焦点を当てることとする。

牧原・西田（2022）では，英語と日本語におけるテンスと配慮との関連を対照し，英語の場合，依頼などでは法助動詞が冒頭に位置するため，そこに過去形を用いて「心理的に遠」であることを示す用法が高度に慣習化（形式化）されやすかった可能性を示した。以下のような例では，時制の変化は実際の時間とは関係がなく，もっぱら対人配慮に関わるものとして用いられている。

（5）Do/Did you want to see me now?

一方，日本語では，文頭及び文末に位置するムードの成分がポライトネスと関与して形式化されやすく，文の内部（副詞的成分であれば述語よりに位置する，述語成分であれば語幹に近い部分に位置するという意味で用いている）に出現するテンスは，本来の時制的意味を残しつつ，副次的にポライトネスに影響を与えることになった可能性があり，対人配慮との関連性がわかりにくいと指摘した。

（6）本日から 2 泊でよろしかったでしょうか。

また，述語内部の構造は以下のようになっていることから，述語末に位置する蓋然性判断に関わるモダリティ成分などは高度に慣習化され，対人配慮に関わる成分に特化された用法を持ち，配慮表現としての汎用性を持つに至っているが，述語の内部に位置するボイスやアスペクト等の成分は，本来の文法的な意味（ボイスやアスペクト等）を保持しつつ対人配慮に関わるため慣習化が進みにくいのではないかとの仮説を提示した。

たべ	させ・られ	てい	なかっ	た	ようだ　よ。
語幹	ボイス	アスペクト	肯否	テンス	モダリティ

述語以外の成分においても，野田(1983)が指摘しているとおり，日本語の副詞的成分は述語成分の配列と鏡像関係を成しており，文頭に位置するモダリティに関わる副詞的成分は配慮の意味を理解しやすく，文の内部に位置するボイスやアスペクトの成分などは理解しにくいということとなる。

次に，このテンスの対照研究での知見をもとに，牧原・李・西田（2024）では，文の内部に位置する成分ほど，慣習化は進みにくい（＝配慮的機能は文法的成分としての機能と共に働くため，配慮に特化した表現となりにくい）と考え，文の内部に位置する成分ほど，日本語母語話者，日本語学習者とも対人配慮に関わっていることを理解しにくいと考え，アンケート調査によってこれを検証した。

アンケートは，場面を設定しそこで使用可能な 2 つの表現を提示し，言い方を変えると丁寧さに変化が感じられるかという質問と，変化が感じられるという場合その変化はどのようなものかを問う質問（「丁寧になると感じる」「少し丁寧さが上がると感じる」「少し丁寧さが下がると感じる」「丁寧でなくなると感じる」の四つから選択）の 2 段階で行った。また，アンケートで用いる「丁寧さ」は，敬意とは異なり，言い方がソフトになる，柔らかい感じになる，ということなどを含むことをあらかじめ説明した。質問例を以下に示す。

友人に本を貸しました。返してもらったところ，ジュースの薄いシミが 1 ページについてしまったというお詫びがありました。その時の発話です。
「ごめんね，ページのここのところにちょっとジュースをこぼしちゃって・・・」
のかわりに「ページのここのところにちょっとジュースがこぼれちゃって・・・」
という表現を使うと丁寧さに変化は感じられますか？
変化が感じられる，という場合，それはどのようなものですか？

このような調査を，日本と中国の大学生を対象とし，日本語母語話者 15 名，日本語学習者 28 名について行ったところ，以下の傾向が見られた（□は文の内部の成分であるにも関わらず日本語学習者の回答が母語話者の回答に非常に近かった事例を分析し，回答者が授業で留意すべき事項として提示されることの多いものであることを把握できたことによる）。

□文の内部（述語の語幹寄り）に位置する成分ほど，日本語母語話者も日本語学習者も，配慮に関わっていることを理解しにくく，慣習化が進んでいない可能性がうかがえた。
□言語教育において，対人配慮に関わることに留意して指導することにより，学習者の理解が深まる可能性が見られた。

４．母語話者は本当に文の対人配慮を直観的に理解できているのか

上記の調査により，文の内部（述語の語幹寄り）に位置する成分ほど慣習化は進みにくいこと，そのため，文の内部に位置する成分ほど，日本語母語話者，日本語学習者とも対人配慮に関わっていることを理解しにくいという仮説に一定の正しさが見られるであろうことを確認した。しかし，その後，25 名の日本人学生を対象に再度同様の調査を行ったところ，牧原・李・西田（2023）とは全く異なる結果が示された。

この差異は，最初の調査が，日本語のポライトネス等について扱う授業を履修していた学生が回答者であったのに対し，再調査が日本語のポライトネス・ストラテジーなどにつ

いて触れることのない学生であったことが関係している可能性が高い。とすると，そもそも日本語の文が表す対人配慮の程度の正確な理解が，母語話者にとっても非常な困難を伴うものであることとなり，なんらかのトレーニングを受けたり，予備知識を持つ者でないと正確な判断ができないような事柄について，その理解を学習者に求めることが本当に必要なのかという問いに繋がることとなる。この点も，今回のワークショップにて検討したい重要なものとなる。

これまでの仮説と，その妥当性，また日本語教育における対応等について，多くの方々の意見をいただければと考えている。

参考文献

野田尚史(1983)「日本語とスペイン語の語順」『大阪外国語大学学報』62，35-53.

牧原功・西田光一(2022)「配慮表現に関わるテンスの日英対照」『日本語用論学会第 24 回大会発表論文集』第 17 号，197-200，日本語用論学会

牧原功・李奇楠・西田光一（2024）「日本語学習者にとっての発話中の配慮理解の困難さについて」」『日本語用論学会第 26 回大会発表論文集』第 19 号，日本語用論学会（発行予定）

山岡政紀（2015）「慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義」『日本語用論学会第 17 回大会発表論文集』10 日本語用論学会，315-318.

山岡政紀編（2019）『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版

Brown, P. and S. Levinson （1987） *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.

日本語学習者の作文コーパスの構築に向けて
—メタ情報付与の方法—

井伊 菜穂子（国立国語研究所）　　ライ・タイン・ホア（一橋大学大学院生）
横野 光（明星大学）　　本多 由美子（国立国語研究所）

1　ワークショップの趣旨

近年、コーパスを用いた日本語・日本語教育研究が盛んに行われている。コーパスを用いた研究では、大規模に収集されたテキストや発話データはもちろん、データに付与された様々なメタ情報も研究の発展に寄与する重要な情報である。メタ情報の例として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の「図書館サブコーパス」のうち「書籍サンプル」には「専門度」「客観度」「硬度」「くだけ度」「語りかけ性度」の五つの文体情報が付与されている（柏野 2013、国立国語研究所 2015）。

一方、日本語を母語としない学習者のコーパスを研究・教育に活用する場合、母語や日本語レベルがざまざまであるため、メタ情報の認定が人によってばらつきやすい。学習者コーパスにメタ情報を安定的に付与するには、どのようなメタ情報をどのように付与すべきだろうか。本ワークショップでは、次の三つのメタ情報の重要性を考えたい。

一つ目は、作文を分析する際の基本的単位である形態論情報である。他の主要なコーパスと同様に、学習者コーパスも形態素解析が不可欠である。しかし、学習者が書いた作文の場合、誤用が含まれるため、そのままの状態では正確に形態素解析を行うことができない。そこで、形態素解析の精度を上げる独自の工夫が必要になる。

二つ目は、誤用情報である。『JCK 作文コーパス』や『学習者作文コーパス「なたね」』のような既存の学習者コーパスにも誤用情報が付与されており、分析に活用されている。だが、いずれも単純な日本語レベル別のコーパスであり、同一の学習者を対象に、縦断的に日本語能力の成長を追跡したものではない。学習者の日本語の習得段階によってどのような誤用が生じるのかという、連続的かつ安定した誤用情報を付与する必要がある。

三つ目は、読み手が作文を読んだときに感じる印象評価の情報である。学習者が書いた作文に対する読み手の評価は、文章の内容や構成、表現など様々な要素が組み合わさって形成されるものである。印象評価の情報があれば、客観的な作文評価の指標となるだけでなく、作文の質を向上させるための教育上の指針としても活用することができる。

本ワークショップでは、国立国語研究所の共同研究プロジェクトで構築中の『日本語学習者縦断作文コーパス（Written Corpus of Learner Japanese）』（以下『W-CoLeJa』）を紹介し、縦断的に収集した学習者の作文に形態論情報、誤用、印象評価の三つのメタ情報を付与する際の方法と問題点を報告する。学習者縦断コーパスにメタ情報を安定的に付与できれば、日本語教育だけでなく、機械による自動添削・自動評価システムの構築にも貢献できると考える。フロアとの議論を通じて、学習者コーパスに実装すべき適切なメタ情報を考えていきたい。

２　データの概要

当該プロジェクトは、海外の大学で日本語を学び始めた学習者が大学 4 年間でどのように文章執筆能力を身につけていくのかを明らかにしようとしている。『W-CoLeJa』の構築にあたり、中国語圏のみならず、韓国、ベトナム、タイ、フランスなどの大学と連携している。

作文のテーマには A と B があり、大学によってどちらのテーマで執筆するかは異なる。学習者は年に 3 回異なるテーマで作文を執筆し、それを 4 年間継続する（図 1）。このようなデータにより、特定の学年におけるテーマ間の比較を行ったり、一つのテーマを対象に習得の過程を追うことが可能となる。

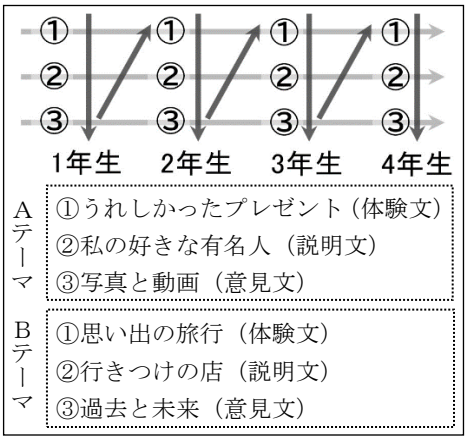


図 1 作文テーマとデータ収集の計画

また、「日本語による作文」のほかに「母語による対訳」「作文の執筆メモ」「作文の執筆過程」「学習者の背景情報」のデータも収集している。データの収集はすべてオンライン上で行っており、作文はキーボードで入力されている。なお、作文の文字数の目安は 1 年生が下限 200 字・目安 400 字、2 年生が下限 400 字・目安 800 字、3 年生と 4 年生が下限 600 字・目安 1,200 字である。

本プロジェクトではデータ収集を 2021 年に開始した（開始時の協力者約 800 名、開始年が異なる大学もある）。2024 年 6 月現在、多くの大学で 4 年目最後のデータ収集を行っている。今後もデータ収集およびメタ情報の付与を行い、データ公開へ向けて準備を進めていく。

３　本ワークショップの構成

趣旨：井伊菜穂子「日本語学習者の作文コーパスの構築に向けて ―メタ情報付与の方法―」
発表①：横野光「誤用を含む文の形態素解析の分析とアノテーションの検討」
発表②：ライ・タイン・ホア「人手による誤用認定の『揺れ』とその対処法」
発表③：本多由美子「読後の印象評価の設計 ―クラウドソーシングを用いた日本語母語話者への調査―」

参考文献

柏野和佳子（2013）「書籍サンプルの文体を分類する」『国語研プロジェクトレビュー』4-1、pp.43-53.
国立国語研究所（2015）『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』（2015 年公開第 1 版）https://doi.org/10.15084/00003109

付記

本研究は、科研費 JP21H04417 および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」（共同研究番号 L411062227）の研究成果を報告したものである。本研究の遂行にあたり、国立国語研究所の上記プロジェクトのスタッフ各位、調査協力校の教員・学習者のみなさまのご協力を得た。記して感謝申し上げる。

誤用を含む文の形態素解析の分析とアノテーションの検討

横野 光（明星大学）

1　はじめに

形態素解析はテキストの定量的な分析などの機械処理に必要な処理であるが、既存の形態素解析器の入力は誤用を含まない文が想定されており、誤用を含む文をどのように処理すればよいかは明確に決められていない。また、文中の誤用により、周辺の正しい箇所の解析を誤ることがあり、解析器の精度を落とす原因となる。言語学習支援を対象とするデータの場合、入力は誤用を含む文であることが多く、そのような文に対しても頑健な解析器を構築できるよう、誤用を含む箇所に対して解析器はどのような処理を行い、どのような解析結果を出力すればよいかを考慮する必要がある。

本発表では、そのための言語資源構築に向けて行った、日本語学習者が書いたテキストに対する形態素解析誤りのアノテーションをもとに、誤字などの誤用によってどのような形態素解析誤りが起こっているかを分析し、解析器の構築に必要となるアノテーションの仕様について議論する。

誤用には発音の誤り、表記の誤り、語彙の誤り、文法の誤り、表現の誤りなどの分類（明治書院企画編集部 編 1997）が考えられるが、本発表ではこのうち形態素解析に関係すると考えられる表記の誤り（表記の違い、空白の挿入）、語彙の誤り（存在しない語）、文法の誤り（語の接続の誤り）に焦点を当てる。

2　形態素解析結果に対するアノテーション

発表者は、I-JAS[1]（迫田 2020）の作文データに収録されたエッセイのデータ約 11,200 文に対して MeCab+IPA 辞書[2]で形態素解析を行い、解析誤りと思われる箇所に人手でラベル付けを行った。このアノテーションは予備的に行ったものであるため、誤りかどうかの判断は作業者に委ねている。

付与したラベルの一覧と各ラベルが付与された文の数を次頁の表 1 に示す。形態素解析結果には読み情報も含まれているが、本研究では書き言葉の解析を想定しているため読みの誤りに関しては無視している。

“j”は一般的な形態素解析誤りであり、“h”、“e”は誤用の箇所に対する形態素解析誤りである。“g”は語の使用としては間違っていないが解析時に周辺の誤用の影響で解析誤りとなった箇所であり、“e”や“h”とセットになって付与される。本発表では誤用によって生じた形態素解析誤りに注目するため、分析では“h”、“g”、“e”のラベルが付与された事例のみに着目している。

[1] https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ihome2.html
[2] https://taku910.github.io/mecab/

表 1: ラベルの種類

ラベル	説明	ラベルが付与された文の数[3]
j	文脈に対して適切な語彙、表記だが、形態素解析が誤っている。	897
h	文脈に対して適切な語彙だが、表記の違いにより形態素解析が誤っている。	410
g	文脈に対して適切な語彙、表記だが、前後の誤用によって形態素解析が誤っている。	122
e	誤用であり、形態素解析が誤っている。	1,065

３　誤用の箇所周辺の形態素解析結果

誤用を含む文の形態素解析の事例を示す。各図のキャプション中の括弧内は I-JAS のデータに振られている ID である。

存在しない語

誤字などにより存在しない単語となっていると、そこで解析誤りが生じる。しかし、多くの形態素解析器は未知語処理を行っており、形態素辞書に登録されていない語であっても語の境界などを推定するため、存在しない語であっても一語として解析されることがある。MeCab では片仮名連続はまとめて名詞の未知語と判定することが多く、図 1 のように境界は正しく判定されている。

```
ファートフード　　名詞, 一般, *, *, *, *, *
と　　助詞, 並立助詞, *, *, *. *. と. ト. ト
家庭　　名詞. 一般. *. *. *. *. 家庭. カテイ. カテイ
料理　　名詞, サ変接続. *. *. *. *. 料理. リョウリ. リョーリ
```

図 1: 存在しない語を含む例(CCH31)

```
海　　名詞, 一般, *, *, *, *, 海, ウミ, ウミ
?　　名詞, サ変接続, *, *, *, *, *
物　　名詞, 接尾, 一般, *, *, *, 物, ブツ, ブツ
や　　助詞, 並立助詞, *, *, *, *, や, ヤ, ヤ
大豆　　名詞, 一般, *, *, *, *, 大豆, ダイズ, ダイズ
加工　　名詞, サ変接続, *, *, *, *, 加工, カコウ, カコー
品　　名詞, 接尾, 一般, *, *, *, 品, ヒン, ヒン
```

図 2: 存在しない文字を含む例(CCH26)

一般的な日本語フォントでは対応していない文字はテキスト化の際に “?”などの記号で表現することがあり、解析時にそこで語の分割が起こる（図 2)。

表記の違い

形態素解析は平仮名に弱く、平仮名が多く含まれている文は解析誤りを含みやすい。日本語学習者の作文には母語話者が漢字を用いる語が平仮名で書かれていること

```
ファースト　名詞, 一般, *, *, *, *, ファースト, ファースト, ファースト
フード　　名詞, 一般, *, *, *, *, フード, フード, フード
はべん　　動詞, 自立, *, *, 五段・ラ行, 未然特殊, はべる, ハベン, ハベン
り　　助動詞, *, *, *, 文語・リ, 基本形, り, リ, リ
で　　助動詞, *, *, *, 特殊・ダ, 連用形, だ, デ, デ
```

図 3: 平仮名表記による解析誤りの例(EAU16)

[3] 1 文に複数のラベルが付与されている事例もある。

があり、そこで解析誤りを生じる。平仮名で書かれた語は過分割されることが多いが、適切に使用されている周辺の語を含んで誤りとなる場合もある。図 3 の事例では本来は“便利”と表記される語が平仮名で書かれており、前後の“は”を含んだ語として解析されている。

空白の挿入

語の境界として空白が挿入されている場合がある。空白の位置が語の境界とあっている場合は解析には影響がないように思われるが、形態素解析は前後に出現する形態素も考慮しながら解析を行うため、空白が挿入された結果として解析を誤ることがある。図 4 の事例の最終行の空白は語の境界としては適切であるが、本来この“ある”は動詞であり、空白が入ったことにより解析誤りとなっている。

```
料理        名詞, サ変接続, *, *, *, *, 料理, リョウリ, リョーリ
            記号, 空白, *, *, *, *,  ,  ,
も          助詞, 係助詞, *, *, *, *, も, モ, モ
たくさん    名詞, 副詞可能, *, *, *, *, たくさん, タクサン, タクサン
            記号, 空白, *, *, *, *,  ,  ,
ある        連体詞, *, *, *, *, *, ある, アル, アル
```

図 4: 空白挿入の解析誤りの例(VVN20)

語の接続の誤り

用言に関して、後接する語に対する活用の選択を誤ることがある。しかし、形態素解析においては活用の選択を誤っていても比較的正しく解析されることがある。図 5 の事例では、“終わる”は本来は“終わりたかったら”と連用形にしなければならず、誤りを含んだ文となっているが、形態素解析結果としては“終わる”の活用も含めて正しく解析されている。

```
仕事        名詞, サ変接続, *, *, *, *, 仕事, シゴト, シゴト
を          助詞, 格助詞, 一般, *, *, *, を, ヲ, ヲ
早く        形容詞, 自立, *, *, 形容詞・アウオ段, 連用テ接続, 早い, ハヤク, ハヤク
終わる      動詞, 自立, *, *, 五段・ラ行, 基本形, 終わる, オワル, オワル
たかっ      助動詞, *, *, *, 特殊・タイ, 連用タ接続, たい, タカッ, タカッ
たら        助動詞, *, *, *, 特殊・タ, 仮定形, た, タラ, タラ
```

図 5: 語の接続の誤りの例(KKD34)

4　誤用を含む文の形態素解析に向けて考慮すべき要素

誤用を含む文の形態素解析における問題の一つに、図 3 や図 4 で示した事例のように、誤用ではなく正しく解析されるべき箇所が文中の誤用によって解析誤りとなってしまう、という点がある。誤用の影響を最小限に抑えるために、このような解析誤りをいかにして減らしていくかということが重要な課題となる。

語の境界は正しく解析されている場合（図 4）であれば誤用の箇所と切り分けられており、本アノテーションでは“g”と“e”でそれぞれ分けて付与されているため、例えば、形態素解析結果に対して“g”タグが付与されるべきか否かを分類するモデルを構築するといった方法でこの種の誤りを事後的に修正するという手法の適用が考えられる。しかし、語の境界が誤っている場合（図 3）では誤用の箇所との切り分けができず、現状の仕様では“e”タグが付与されており誤りの適切な切り分けができていない。

また、誤用の箇所に対する形態素解析をどのように位置付けるかという課題もある。例えば、図 6 の事例では、本来は“ほとんど”とあるべき箇所が“ほどんど”となっている。“ほとんど”は副詞であるが、解析結果としては図 6 のように助詞などの形態素として解析されている。

```
ほど        助詞, 副助詞, *, *, *, *, ほど, ホド, ホド
ん          助詞, 格助詞, 一般, *, *, *, ん, ン, ン
どの        連体詞, *, *, *, *, *, どの, ドノ, ドノ
ファースト  名詞, 一般, *, *, *, *, ファースト, ファースト, ファースト
フード      名詞, 一般, *, *, *, *, フード, フード, フード
店          名詞, 接尾, 一般, *, *, *, 店, テン, テン
```

図 6: 誤字による誤りの例(CCH08)

形態素解析の入力は誤用などを含まない文が想定されているため、誤用の箇所について形態素解析はどう振る舞うべきかについては考慮されていない。しかし、誤用の形態素解析誤りが他の箇所の解析誤りの原因となっていることから、誤用の影響を低減するために誤用の箇所の形態素解析について検討する必要がある。

アノテーションに関して、今回は予備調査であったため、タグ付けの基準や解析誤りかどうかの判定は作業者に判断を委ねていたが、基準などを定める必要がある。特に“g”タグに関しては、本稿で挙げた例のように誤用の周辺にあれば判定は比較的容易であるが、形態素解析器は入力文を大域的に解析するため、離れた位置にある誤用が解析誤りの原因となることがあり、これを考慮するためには誤用を訂正した時にその誤りも修正されるかどうかを確認するなどのような作業が必要となる。

５　おわりに

本発表では、誤用を含む文に対して頑健な形態素解析のための言語資源の構築に向けて、形態素解析結果に対するアノテーションを行い、既存の形態素解析器が誤用を含む文に対してどのような解析誤りを起こすかの分析を行った。

誤用の箇所に対する形態素解析誤りだけでなく、誤用が原因となって他の箇所の解析を誤ることがあり、頑健な解析のためにはこの問題の対処が重要となる。また、誤用の定量的な分析のためには誤用の箇所における形態素解析をどのように扱えば良いかを検討する材料としても、本アノテーションは有用であると考えられる。

本発表では含めていないが、定量的な分析の観点からはフォントの問題や手書きからの書き起こしの際に生じる存在しない文字についての対応も必要であり、今後はこれについてもあわせて検討を進める。

【参考文献】

明治書院企画編集部編（1997）『日本語誤用分析』明治書院

迫田久美子（2020）「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』pp. 2-13、くろしお出版

人手による誤用認定の「揺れ」とその対処法

ライ・タイン・ホア（一橋大学大学院生）

1　はじめに

学習者コーパスの分析において、誤用タグは不可欠なメタ情報の一つである。なぜなら、学習者の日本語習得の実態と経年的変化を解明するために誤用は重要な指標であり、認定された誤用の箇所とその修正は、日本語教師が指導する際の参考情報となるからである。また、それらのデータを大規模に収集することができれば、将来的には日本語学習者が執筆した作文の自動添削システムの構築の際に役立つのではないかと考えられる。

しかし、日本語学習者の作文にある誤用を認定する際は、日本語母語話者の間でも認定者によって誤用の認定基準が異なる場合がある。従来の研究では、複数の添削者が同じ作文を読んで誤用を評定することが、添削者の主観による問題を解決するのに有効な対策とされている。それでも複数の添削者がいる場合、添削結果に「揺れ」が生じることは、書き手である学習者の日本語習熟度や添削者の作文教育経験、添削スタイルなどの要因によるものである（中川 1995、宿利 2020）が、その解決案はまだ明確ではない。

本発表では、複数の認定者間で誤用の認定結果が異なる状態を「揺れ」と呼び、複数の母語話者による認定結果の「揺れ」の例を通して、縦断作文コーパスを分析する際の安定的な誤用認定の方法を検討する。

2　誤用認定のパイロット調査について

『W-CoLeJa』の構築の一部として誤用タグの付与作業のパイロット調査が行われた。この調査では、日本語母語話者 3 名（日本語教師 2 名、非日本語教師 1 名）の認定者がそれぞれ一人で作文を読み、前処理された作文をまとめた Excel ファイルに認定結果を反映した。その際、認定者が書き手に意味を確認したり、コメントしたりすることができず、自身の判断に従って誤用を判定した。また、誤用は 1 文の中だけで判定し、誤用だと思った箇所に、図 1 のように表記・語彙・文法の 3 種類のタグからいずれかを選んでつけた[1]。

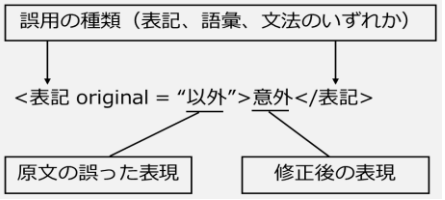


図 1　誤用タグのサンプル

また、誤用認定に用いた作文データは、中国人日本語学習者 3 名とベトナム人日本語学習者 3 名が書いた 6 回分の作文（計 36 本）である。作文データは縦断的に収集されており、第 1 回～第 3 回の作文は 1 年次に、第 4 回～第 6 回の作文は 2 年次に書かれている。作文のテーマは、第 1 回と第 4 回は「思い出の旅行」（体験文）、第 2 回と第 5 回は「行きつけの店」（説明文）、第 3 回と第 6 回は「過去と未来」（意見文）である。

[1] 本研究では、音や文字にかかわる表記の誤りを「表記の誤用」、実質的な内容にかかわる語彙の選択の誤りを「語彙の誤用」、語の活用や文の組み立てにかかわる文法の誤りを「文法の誤用」に分類する。

3　人手による誤用認定の「揺れ」

本節では、誤用認定の過程を「第 1 段階：誤用の認識」（誤用と認識するか否か）、「第 2 段階 : 誤用タグの範囲」（どこからどこまで誤用とマークして修正すべきだと判断するか）、「第 3 段階 : 修正後の表現」（どのように修正するか）の三段階に分けて誤用認定の「揺れ」の事例を提示する。

第 1 段階では、誤用であるか否か、または誤用の種類で認定者間の意見が分かれる。

例 1：中国_第 2 回
原文　：　食べ物と飲み物が安いくて、おいしいです。
認定 1：　食べ物と飲み物が安くて、おいしいです。<文法>
認定 2：　食べ物と飲み物が安くて、おいしいです。<文法/表記>
認定 3：　＜非修正＞

第 2 段階では、誤用タグの範囲が一致しないという「揺れ」が生じる。そのうち、例 2 のように第 3 段階における修正後の表現が一致している場合がある一方、例 3～4 のように範囲が一致しないため、修正後の表現も異なる場合もある。

例 2：ベトナム_第 3 回
原文　：　その時間、私があまり話さないし、かわいく見えないし、彼らは私と一緒に遊ぶのが好きじゃなかったと思いました。
認定 1：　＜非修正＞
認定 2：　（前略）私はあまり話さないし（後略）<文法>
認定 3：　（前略）私はあまり話さないし（後略）<文法>

例 3：中国_第 6 回
原文　：　私の将来の仕事はどんな仕事を知りたいです。
認定 1：　私の将来の仕事はどんな仕事か知りたいです。<文法>
認定 2：　私の将来の仕事はどんな仕事かを知りたいです。<文法>
認定 3：　私の将来の仕事はどんな仕事をしているか知りたいです。<文法>

例 4：ベトナム_第 1 回
原文　：　ホイアンは食べ物がおいしいですがやすみです。
認定 1：　ホイアンは食べ物がおいしいですが安いです。<表記/語彙>
認定 2：　＜非修正＞*「やすみです」は「休み」なのか、「安い」の誤りなのか、母語を確認しないと分からないというコメントがある。*
認定 3：　ホイアンは食べ物がおいしくて、やすいです。<文法/表記>

第 2 段階における誤用タグの範囲が一致していても、第 3 段階における修正後の表現が異なることがある（例 5)。

例 5：ベトナム_第 3 回
原文　：　その時間、私があまり話さないし、（後略）
認定 1：　　当時、私があまり話さないし、（後略）<語彙>
認定 2：　その時期、私があまり話さないし、（後略）<語彙>
認定 3：　その　時、私があまり話さないし、（後略）<語彙>

4　母語対訳の有用性

3 で分かるように、誤用認定過程の三段階のいずれにおいても、認定結果の「揺れ」が生じる。中でも、最優先に解決すべきなのは、第 1 段階である。なぜなら、第 1 段階で生じる「揺れ」が第 2 段階と第 3 段階まで影響を及ぼす恐れがあるためである。そこで、本発表では、第 1 段階の「揺れ」を解決するために、学習者の意図を最も反映している母語対訳に着目する。次の例 6～8 は、第 1 段階で認定者が誤用かどうか判断が難しかったとコメントした箇所である。これらの例を分析してみると、いずれも母語の影響を受けた表現がかかわった例であり、母語対訳を参照すれば解決できる例であった。

例 6：中国_第 2 回
原文　：　学生街にはいろいろなスナックや衣料品店などもある。
認定　：　＜非修正＞*「スナック」の意味に気になり、その後に出た「八番寿司というスナック」という表現に違和感を感じたというコメントがある。*
母 語 対訳　：　（在我的学校附近有一条学生街,）里面有各种各样的小吃店，服装店等等。
　　（直訳：（私の学校の近くに学生街があって）軽食堂（屋台）や洋衣料品店が軒を連ねている。）

例 7：ベトナム_第 4 回
原文　：　母は電話せずにずっと遊んで事で私たちの姉妹を叱りしたり、私たちは風景写真だけを撮りました。
認定 1：　＜非修正＞*母は電話をせずに遊んでいたことと、私たち姉妹が風景写真だけを撮っていたことを叱ったなのか、疑問を持ったというコメントがある。*
認定 2：　母は電話せずにずっと遊んでいた<文法>事で私たちφ<文法/語彙>姉妹を叱った<文法>り、私たちは風景写真だけを撮りました。
　　＊修正案があるが、母が叱ったことと、私たちが風景写真を撮ったことの関係がよく母語の確認が必要とのコメントがある。
認定 3：　母は電話せずにずっと遊んでいたこと<文法>で私たちの姉妹を叱って<文法>、私たちは風景写真だけを撮りました。

母語対訳：	Mẹ đã trách chúng tôi mải chơi mà không goi điện về cho bà, và cả những tấm ảnh chỉ toàn chụp phong cảnh mà không có chúng tôi trong đó. （直訳：母は、私たちが遊んでばかりで母に電話せず、しかも私たち自身が写っていない風景写真ばかり撮ったことを叱った。）

例 8：ベトナム_第 5 回
原文：　二人は通常、午後１１時まで売り、翌日の昼に売り続けます。
認定 1：　＜非修正＞*（翌日の昼に売り始めます？というコメントがある）*
認定 2：　二人は通常、午後１１時まで売り、翌日の昼に売り始め<語彙>ます。
認定 3：　二人は通常、午後１１時まで売り、翌日の昼まで<文法>売り続けます。
母語対訳：　Thường thì hai ông bà sẽ bán đến 11 giờ đêm và đến buổi trưa hôm sau mới bán lại. （直訳：通常、おじいさんとおばあさんは、午後 11 時まで店を営業し、そして翌日の昼になったら営業を再開する）。

5　おわりに

本稿では、日本語学習者が執筆した作文に対して 3 名の日本語母語話者の認定者が誤用タグの付与を行った結果を「表記の誤用」「語彙選択の誤用」「文法の誤用」の三つの観点からみた。3 名の認定結果にかなりの幅が見られ、認定者の間に誤用認定の「揺れ」が生じた。これらの「揺れ」を対処するには、認定基準を改善することで一致度が上がると考えられる。それと同時に、認定過程の第 1 段階で認定者の判断を助けるために、母語対訳を活用することが重要である。

参考文献・資料

宿利由希子（2020）「作文添削における日本語母語話者の正誤判断の揺れ」『京都精華大学紀要』53、pp.3-25

中川正弘（1995）「作文の添削と文体差」『広島大学留学生センター紀要』7、pp. 1–15.

読後の印象評価の設計
—クラウドソーシングを用いた日本語母語話者への調査—

本多（ほんだ） 由美子（ゆみこ）（国立国語研究所）

1　はじめに

「よく書けている」と感じる作文とはどのような作文であろうか。本プロジェクトでは文章の評価システム構築のための基礎情報として、クラウドソーシングを用いて日本語母語話者から日本語学習者が書いた作文の印象評価データを収集している。

日本語教育のライティング評価研究で人による評価を扱った研究は、主に日本語教師を評価者としている（田中・長阪 2006、田中 2016 など）。文章の評価システムの構築には、一般の日本語母語話者による評価の実態も考慮することが重要であるが、この分野の研究は宇佐美（2014）などに限られる。人による評価では評価者間の評価が一致しないことが指摘されており（宇佐美 2014、田中 2016）、評価作業での評価者間のずれを小さくするような評価の設計を行うことが重要である。本発表では本調査に先立って行ったパイロット調査をもとに、①「パイロット調査で安定した印象評価のデータが得られたか」、②「安定したデータを得るために調査方法をどのように改善すればよいか」の 2 点について検討する。

2　評価対象の作文

作文は 3 種類 42 本である（表 1）。『W-CoLeJa』の中国語およびベトナム語を母語とする学習者の作文に加え、日本語母語話者の作文を用いた。各母語、各学年を代表する作文として、作文執筆時に示した字数の目安に近い作文を選んだ。

表 1　調査対象の作文（単位：本）

種類	テーマ	母語			計
		中国語	ベトナム語	日本語	
体験文	うれしかったプレゼント	1〜3 年 各 2	1〜3 年 各 2	2	14
説明文	私の好きな有名人	1〜3 年 各 2	1〜3 年 各 2	2	14
意見文	写真と動画	1〜3 年 各 2	1〜3 年 各 2	2	14
計		18	18	6	42

3　評価項目

評価者は、総合評価、全体の理解、項目別評価の 3 種類の評価を行った。総合評価は 1〜50 点（1 点刻み）、全体の理解と項目別評価は 5 段階評価である。項目別評価は 11 項目（表 2）で田中・長阪（2006）、石黒（2017）を参考に設定した。また、総合評価と項目別評価は評価する作文全体の中で、中程度の作文を「3」（総合評価では 21~30 点）として評価基準を定めた（表 3）。これは、パイロット調査の前に行った予備調査で、評価者によって評価の厳しさに差があることが見受けられたためである。構築中の『W-CoLeJa』には初級から上

級以上まで、幅広いレベルの作文が収められる。表 1 のように、レベルの広がりを意識して調査対象の作文を選び、その中の中程度の作文を 3 にすることで、評価者ごとの評価の尺度を調整しながら評価データが収集できるのではないかと考えた。

表 2　評価項目

項目		評価内容
総合評価 （1～50 点、1 点刻み）		作文を総合的に判断する。主観的な評価でよい。42 本の中で中程度の作文を「平均的（21~30 点）」として評価。
全体の理解（5 段階）		書かれている事柄がどのくらい理解できたか。5「すべてわかった」、1「まったくわからなかった」で評価。
項目別評価（11 項目 5 段階）		42 本の中で中程度の作文を「平均的＝3」として評価。
内容	1.発想力	独創的で読んでいておもしろい。
	2.説得力	読んでいてなるほどと思わされる。
	3.情報面での配慮	必要な情報が過不足なく書かれている。
	4.心理面での配慮	読んでいて不快感を覚えず温かい気持ちで読める。
	5.共感力	書き手や登場人物の気持ちが理解できるように書かれている。
構成	6.構成	文章全体がわかりやすい構成で書かれている。
	7.結束性	文と文とのつながりがなめらかで自然である。
	8.一貫性	文章の筋が通っていてまとまりがある。
表現	9.正確さ	表現が日本語として正しく使われている。
	10.ふさわしさ	作文の内容に合った自然な表現が選ばれている。
	11.豊かさ	さまざまな種類の表現が使われている。

表 3　評価基準

評価の目安	総合評価（50 点満点）	5 段階評価
平均より非常に優れている	41～50 点	5
平均よりやや優れている	31～40 点	4
平均的　（42 本の中で中程度の作文）	21～30 点	3
平均よりやや劣っている	11～20 点	2
平均より非常に劣っている	1～10 点	1

4　評価者および評価データの収集方法

クラウドソーシングを通じて募集した日本語母語話者 13 名に評価を依頼した。13 名のうち評価作業の内容に不備が見られた 1 名を除き、12 名を分析対象とした。外国人が書いた文章を添削した経験を有する人が 6 名いた。性別は男女それぞれ 6 名であった。

評価者には作文 42 本の PDF ファイルをまとめて渡し、表 2、表 3 の評価項目および基準に従ってエクセルファイルに総合評価（1～50 点）、全体の理解（5 段階）、項目別評価（5 段階）の評価結果を入力してもらった。また、項目別評価については、評価の理由も入力してもらった。ファイルのやり取りはクラウドソーシング上で行った。

５　結果と分析

(1)　総合評価

まず、総合評価（1～50 点）を検討する。図 1 は評価者 12 名の総合評価点の分布である。箱ひげ図に各作文の点数をプロットした。塗りつぶした丸は平均点を表す。12 名の中で平均と中央値がいずれも最も低いのは評価者 6（平均 20.2、中央値 18）、最も高いのは評価者 9（平均 31.6、中央値 32.5）であるが、全体的には、平均と中央値のいずれも表 3 の「平均的」（21～30 点）の範囲内にある。

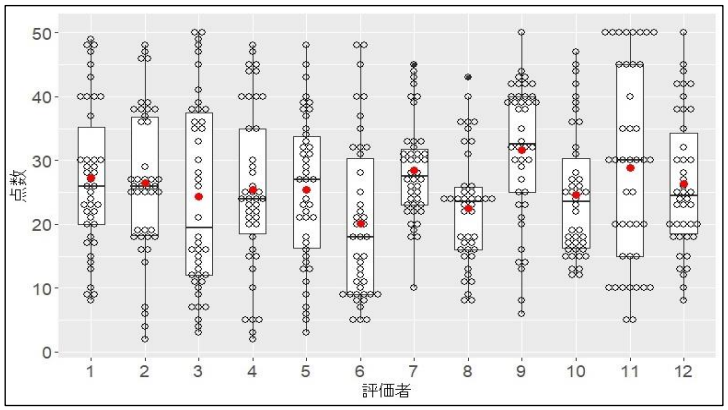


図 1 評価者別総合評価点の分布（*N*=12、42 作文）

表 4 は 12 名から 2 名ずつ抜き出しスピアマンの順位相関係数を求めた結果である。12 名から 2 名抜き出すと組み合わせは全部で 66 組となる。66 組のうち 57 組（86.4%）で中程度以上の相関が見られた。総合評価は 1 点刻みで評価を依頼したが、図 1 のプロットを見ると、評価者 5 のように細かく点をつける人がいる一方で、評価者 11 のように 5 点間隔で評価する人もいたことがわかる。細かい点数を付けにくいと感じた可能性が考えられ、改善の必要性が示唆される。

表 4 評価者間の相関係数（12 名、66 組）

相関係数	組数
0< r ≦0.2 （ほとんど相関なし）	0
0.2< r ≦ 0.4（弱い相関あり）	9
0.4< r ≦0.7（中程度の相関あり）	56
0.7< r ≦1.0（強い相関あり）	1

・相関係数の解釈は山田・村井(2004)による

(2)　項目別評価

次に、項目別評価（11 項目、5 段階）の値について、評価者間の評価のばらつきを検討する。ここでは作文、評価者、項目の 3 つの変動要因が評価に与える影響を検討する際に用いる一般化可能性理論（generalizability theory）を利用した（R4.3.2 バージョン、lme4 パッケージ使用）。一般化可能性理論は、テスト項目や評価者などの誤差要因が点数に与える影響を、点数の分散という観点から捉える分析方法である（平井 2018）。一般化可能性理論には要因ごとに分散成分を推定する G 研究（G study）と、G 研究で算出された分散成分を用いて項目数や評価者数をシミュレーションする D 研究（D study）の 2 つの段階があるが、本発表では G 研究のみを扱う。

表 5 は各変動要因の分散成分の推定値と全体に占める割合を示す。推定値の割合が最も高いのは作文（36.1%）である。これは作文によって評価が異なることを表しており、本調査では割合が高いほうが望ましい。次に、作文と評価者の交互作用（pr）の割合も 24.3%と高い。これは、項目別評価では同じ作文でも評価者によって評価の高低が異なるものがあることを示す。本研究では評価が一定の範囲内に収まる作文と、評価が分かれる作文があることを想定しているが、詳細は今後検討したい。

最後に残差（*pri,e*）の割合も 31.6%と作文に次いで高い。残差は設定した要因では説明できない成分である。平井（2018:72）では「ある受験者がたまたま疲れてある項目だけ答えられなかった」可能性や、日本語教師のライティング評価を分析した福田・石井（2016）では、評価者が評価基準を評価に十分に結び付けられなかった可能性が指摘されている。本調査に当てはめると評価作業の方法や項目別評価の内容を検討する必要があることが示唆される。評価作業の方法については、発表者も同じ作業を行ったところ、42 作文をまとめて評価するのは作業負担が大きく、一気に作業するには慣れが必要だと思われた。また、項目別評価の作業については、評価理由の記述から評価の観点を確認したところ、評価者の中に「結束性」の評価を「一貫性」の評価と混同している記述が見られ、評価基準や説明に使う用語や表現の見直しが必要であることがわかった。

表 5 分散成分の推定値と割合

変動要因	自由度	推定値	割合
作文（*p*）	41	0.51	**36.1%**
評価者（*r*）	11	0.01	0.5%
項目（*i*）	10	0.04	2.6%
作文×評価者（*pr*）	451	0.34	**24.3%**
作文×項目（*pi*）	410	0.04	2.8%
評価者×項目（*ri*）	110	0.03	2.2%
残差（*pri,e*）	4510	0.44	**31.6%**
TOTAL		1.41	100.0%

６　おわりに

まず、①「パイロット調査で安定した印象評価のデータが得られたか」については、中程度の作文を 3（21～30 点）とすることで、評価者間の相関がある程度見られるデータが得られた。次に、②「安定したデータを得るために調査方法をどのように改善すればよいか」については、総合評価が 1～50 点（1 点刻み）では細かすぎるため評価方法を見直すこと、42 作文をまとめて評価するのは作業の負担が大きいため一度に評価する本数を減らすこと、「結束性」のような専門的な語は一般の人には理解が難しいため平易な表現にすることが改善点として挙げられた。今後、改善点を修正し、より安定したデータの収集を目指したい。

【参考文献】

石黒圭（2017）「文章とは何か：日本語の表現面から見たよい文章」李在鎬編『文章を科学する』pp.14-37、ひつじ書房

宇佐美洋（2014）『「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか』ココ出版／田中真理・長阪朱美（2006）「第 2 言語としての日本語ライティング評価基準とその作成過程」『世界の言語テスト』pp.253-276、くろしお出版

田中真理（2016）「パフォーマンス評価はなぜばらつくのか？：アカデミック・ライティング評価における評価者の「型」」宇佐美洋編『「評価」を持って街に出よう』』pp.34-53、くろしお出版

平井明代（2018）『教育・心理・言語系研究のためのデータ分析』東京図書

福田純也・石井雄隆（2016）「中国語を第一言語とする日本語学習者の作文に対する日本語教師の評価：一般化可能性理論を用いた検討」『日本教科教育学会誌』39(2)、pp.81-89.

山田剛史・村井潤一郎（2004）『よくわかる心理統計』ミネルヴァ書房

日本語学習アプリを使用した日本語初期指導に関する学際的な研究の試み

―外国にルーツのある児童と教師は日本語でどのような談話を行っているのか―

櫛引祐希子[1]　米澤千昌[2]　王林鋒[3]　森田英嗣[4]

1. 本ワークショップの趣旨

文部科学省が隔年で実施している「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」結果によれば、日本語指導が必要な児童生徒数は増加を続けている（令和 3 年までの過去 10 年間で 1.7 倍増加）。しかしながら、学校における日本語指導が必要な児童生徒への対応は必ずしも十分ではない。その原因のひとつに適切な日本語学習教材の不足がある。そこで発表者が所属する大阪教育大学は株式会社 NTT ExC パートナーと共に、渡日間もない日本語を母語としない児童（以下、外国にルーツのある子ども）のための日本語学習アプリ「アプリで にほんご ―がっこうに いこう―」（以下、「アプリで日本語」）を開発した。2023 年 5 月から研究協力機関を募集し、2024 年 2 月時点で全国 11 教育機関において「日本語アプリ」を活用した日本語指導が行われている。

「アプリで日本語」は、渡日するまで日本語に触れる機会が皆無であった外国にルーツのある子どもが日本語による多様なコミュニケーションに親しむための教材であり、子どもが一日の大半を過ごす学校生活で必要となる語彙や表現の習得だけでなく、学習活動自体が日本語のコミュニケーション能力を育むものになるよう設計されている。実際、トライアルに参加する教育機関の授業においても「アプリで日本語」の学習活動を介して児童が積極的に教師と共に談話を構築していく様子が観察された。そうした談話を分析することは、いまだ確立されていない外国にルーツのある子どもへの日本語初期指導の方法論を打ち立てる一助となることが期待される。

本ワークショップで発表するのは、2023 年 Y 小学校で行われた日本語初期指導の取り出し授業（45 分）における談話についての分析結果である。Y 小学校は在籍生の 19%近くが外国で出生したか、あるいは外国に繋がる。今回分析したのは学習者 A さん（1 学年に在籍）と日本語指導の教師の談話である。A さんは日本で生まれたが、その後 5 年間を母国で過ごし 2023 年 7 月に再来日した。

本発表では Y 小学校の日本語初期指導の談話を日本語学、日本語教育学、教師教育学

[1] Kushibiki Yukiko（大阪教育大学）kushibiki-y11@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
[2] Yonezawa Chiaki（大阪教育大学）yonezawa-c73@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
[3] Wang Linfeng（大阪教育大学）wan-r50@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
[4] Morita Eiji（大阪教育大学）morita@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

の視点から分析し、日本語初期指導の談話を多角的かつ学際的な視点で分析する重要性について述べる。さらに授業の談話の分析結果を踏まえ、教育工学の視点から「アプリで日本語」の学習記録とその活用について述べ、外国にルーツのある子どもへの日本語指導において日本語の研究が貢献できる点について考える。

2. 日本語学から見た日本語初期指導の談話　（櫛引祐希子）

2.1　授業における教師と子どもの談話に見られる基本的な構造

甲斐（1997）は、授業における談話について教師と子どもの上下関係に基づき「教師（発問・指名）→子ども（応答・回答）→教師（応答・評価）」という三つの発話で一組の談話が構成されると指摘している。

甲斐の分析は教師 1 名が多数の児童に対して行う授業を対象にしており、本発表で取り上げる Y 小学校で行われた教師 1 名と学習者 1 名による日本語初期指導とは授業の在り方が異なる。とはいえ、語彙学習のための絵カード（対象の絵と名称が平仮名で書かれているカード）を使用した場合、概ね上記のような構造の談話が確認される。例えば苺の絵カードを用いた日本語指導では、［教師の発問；これは？（カードをめくる）］→［学習者の応答；いちご］→［教師の評価；いちご。ピンポンピンポーン。］となる。

しかし、「アプリで日本語」で音声出力が設定されている「ことばのれんしゅう」の学習活動における談話は、絵カードを挟んで教師と学習者が行う談話とは様相が異なる。

2.2　アプリを用いた日本語初期指導における教師と子どもの談話の構造

「アプリで日本語」における「ことばのれんしゅう」は画面下の「きく」をタップすると予めアプリに設定された音声が出力される（図 1）。

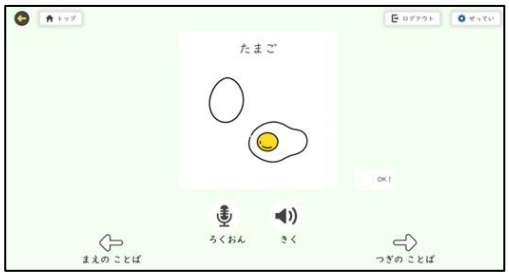


図 1：「ことばのれんしゅう」の画面

Y 小学校の日本語指導の授業実践では開始約 7 分から UNIT4（きゅうしょく）の「ことばのれんしゅう」を約 3 分間行い、その後別の学習活動をしてから開始 25 分後に UNIT3（もちもの）の「ことばのれんしゅう」を約 9 分間行った。この実践の談話に注目して、正解が発話される順序を整理したのが表 1 である。

表 1：正解を提示する発話の交代パターン

	UNIT4	UNIT3
A さん⇒教師⇒アプリ	4	15
A さん⇒アプリ⇒教師	1	7
アプリ⇒ A さん⇒教師	5	7
教師⇒ A さん⇒アプリ	0	5
アプリの音声の出力なし	0	2
教師⇒アプリ	0	1

表 1 で〈A さん⇒教師⇒アプリ〉とあるのは最初に学習者である A さんが正解を発話し、その後に教師が正解を繰り返して

アプリの音声が出力されるパターンである。ここで興味深いのは、この時アプリを操作して音声を出力させるAさんの行動である。このパターンで最もシンプルなのは⑴のような談話である。なお、各発話者の前の数字はY小学校の日本語指導の授業実践全体における発話の通し番号である。

⑴ 339 A さん： ……えんぴつ。
340 教 師： えんぴつ。
341 アプリ： えんぴつ。

画面に表示された絵や文字を見てAさんが正解を回答し、教師は正解を繰り返す。この時点でAさんは自分の回答が誤っていないことを知るはずだが、自らアプリを操作することで正解の音声を出力させる。またアプリで提示された他の問題（机・袋・タオル）では、アプリの音声出力の後にAさんは再度正解を発話している。こうしたAさんの行動から、アプリの音声の出力は単に正解を確認するためのものではないことがうかがえ、あたかも自分と教師の談話にアプリの音声を参加させているかのようである。

こうした学習者の行動に対して教師は、学習者が出力させたアプリの音声を自分たちの談話の重要な要素となるように位置づける発話を行う。⑵ではアプリの音声の後にAさんの筆箱に関する質問へと話題を転じ、Aさんとの談話をアプリの学習に即した内容からAさん自身の話題へと展開させ、談話に奥行きを生むことに成功している。

⑵ 372 A さん： ふでば、こ。
373 教 師： うん。
374 アプリ： ふでばこ。
375 教 師： A ちゃん、ふでばこある？どれ？あ、これ。〈A が筆箱を手に持って見せる〉おっけー。

〈Aさん⇒アプリ⇒教師〉の順で正解が提示される場合も、⑴のように三者それぞれが正解を発話（アプリの場合は出力）するだけの談話が多い。だが、例えば弁当の問題においてAさんが出力したアプリの音声を機にAさんが弁当を食べるかどうかを尋ねて教師は話題を拡げている。これは⑵と同様、アプリの音声の後に教師がAさんの自己表現に関わる発問をするケースである。

一方、〈アプリ⇒Aさん⇒教師〉のようにアプリによって正解が先に提示されて始まる談話は問題の語彙について学習者であるAさんの理解が十分ではない場合が多く、教師は⑶のような発音練習や、物差しと習字セットの問題のように単語の意味を説明する指導を行うことでAさんの学びの深化に繋げる工夫をしている。

⑶ 111 アプリ： きゅうしょく
112 A さん： きゅうくしょ。
113 教 師： きゅうしょく。もっかい言って、きゅうしょく。
114 A さん： きゅう、くしょ。
115 教 師： きゅうしょく。きゅ（きゅ）、う（う）、しょ（しょ）、く（く）。きゅう（きゅう）、しょく（しょく）。きゅうしょく（きゅうしょく）。おっけーい。

〈教師⇒A さん⇒アプリ〉の場合も、教師はアプリの音声を自分たちの談話の重要な要素として談話の中に取り込む。⑷の 482 の教師の「聞いてみ？」は、アプリの操作を学習者である A さんに促すものであり、その後に自らも発話していることから、アプリをもう一人の教師として位置付けるような発話である。

⑷ 477 A さん： ……マ…
478 教 師： フ。
479 A さん： ラ。
480 教 師：うん、マフラー。
481 A さん： マフラー。
482 教 師： マフラー。聞いてみ？
483 アプリ： ……マフラー。
484 教 師： マフラー。
485 A さん： マフラー。
486 教師： うん。

2.3 日本語初期指導の談話におけるアプリの音声の役割

以上、アプリを用いた日本語初期指導において学習者は自分の習得状況に応じてアプリを操作し、アプリの音声に談話の参加者としての資格を与えるのに対し、教師は学習活動の談話を意味あるものにするために学習者が出力させるアプリの音声に対して談話の展開に関わる重要な役割を与えていることが確認できた。

小学校の授業の談話を分析した石井（1997: 28）は「教師はその授業の到達点に向けて自らの発話も子どもたちの発話についても予定の文脈上に組み込もうとする意識が見られた」と指摘するが、アプリを用いた日本語初期指導においては学習者の発話を教師が予定した文脈に組み込むのではなく、限られた語彙しか使用できない学習者の発話と予め設定されたアプリの音声を取り込んで、学習者と作り上げる談話に拡がりを持たせようとする教師の意識が見られた。

3. 日本語教育学から見た日本語初期指導の談話　（米澤千昌）

3.1　研究の目的

外国にルーツのある子どもへの日本語指導は、日本語の文字や語彙、文法といった言語知識を教えればよいというものではなく、日本語を使って周囲と関わり、学級活動や学習活動にも参加できるようになるための支援、つまり子どもの学びや成長を育むという視点での支援が必要である。しかし、日本に来て、もしくは日本語を学び始めて間もない外国にルーツのある子どもにとって、日本語指導を受けたからと言って周囲とコミュニケーションをとったり、日本語で学習活動に参加したりすることは容易なことではない。本発表では、スキャフォールディングという視点から日本語指導の談話の分析を行い、そこで何が起きていたのかを明らかにすることで、上記の課題解決へとつながる支援の特徴および、そこで「アプリで日本語」が果たしていた役割を探ることを試みる。

3.2　スキャフォールディング

ヴィゴツキー（2001）は、子どもが自分一人でできることと人の助けがあればできることの間の相違を「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development, ZPD）」として提示し、効果的な学びは、ZPD の中で起こると指摘している。この理論に基づく教育者の実践として考えられているのがスキャフォールディングである。スキャフォールディングは、マクロ・スキャフォールディングとミクロ・スキャフォールディングに大別される（Hammond ＆Gibbons, 2005）。マクロ・スキャフォールディングは支援構造を指し（Walqui, 2006）、予め盛り込まれたスキャフォールディング（Hammond ＆Gibbons, 2005、ハモンド，2009）と言われている。ハモンド（2009）は具体的な例として、生徒の既習経験とカリキュラムの目標に応じた明確な目標の設定、タスクの選択と配列への配慮、学習への異なる参加形態の利用、「メッセージの多様性」の使用、メタ言語的な気づきの伸長を挙げている。

ミクロ・スキャフォールディングとは授業中に偶発的に起こる相互作用レベルのもの（Hammond ＆Gibbons, 2005）であり、具体的には、過去の体験と結び付ける、相手の発話を取り入れる、生徒の発言を言い直す、ヒントを与えて、引き出すなど（ハモンド, 2009）が挙げられる。Hammond ＆Gibbons（2005）は、予め盛り込まれたスキャフォールディングが相互作用レベルのスキャフォールディングを可能にし、その結果、ZPD の中での活動が可能となると説明している。つまり、子どもたちの学びにおいてはマクロな視点とミクロな視点両方からのスキャフォールディングが必要なのである（Hammond ＆Gibbons, 2005）。

3.3　授業概要

本節の分析対象となる授業は教師と A さんの 2 名で行われたものである。事前に計画

されていた学習項目は「アプリで日本語」の UNIT4 であった。UNIT4 は食べるもの、食べないものが言えるようになることを目的とするが、この授業ではさらに、他の人が食べるもの、食べないものと比べることを活動の中心に据えていた。「比べる」という活動は、学習指導要領の中にも記載されている重要な学習活動の 1 つであり、小学 1 年時から算数では量の大きさの比較が行われ、小学 1，2 年生を対象とした生活科においても、比べることにより気づきを促す大切さが指摘されている。つまりこの授業は、日本語でのコミュニケーションとともに、子どもの年齢相応の学びを育むことが企図されたものであった。

授業はウォーミングアップから始まり、振り返りで終了しているが、本発表では、この授業の主要な取り組みである、語彙学習からコミュニケーション練習に焦点を当てる。まず語彙学習では市販の絵カードと「アプリで日本語」の両方が使用された。絵カードでは、「アプリで日本語」には出てこない、その後の活動でも使用する語彙の学習が行われ、「アプリで日本語」では、音声も聞きながら語彙の確認が行われた。語彙の学習に加え、イカやタコという語彙が出てきた際には、足の本数を数え、数の数え方の練習も行われた。コミュニケーション練習では、まず、「アプリで日本語」の「ひょうげん」を用いて「食べる」「食べない」の概念の確認を行った。そして、「アプリで日本語」に表示される食べ物のイラストを見ながら、教師の「食べる？」という問いに答える形で、A さんの食べるもの、食べないものについて、単語レベルでのコミュニケーションが繰り返し行われた。その後、A さんと他の人（他の時間に日本語指導を受けている B さん、C さん、D さん、教師）との比較活動へと移った。教師自作の食べ物の絵カード、他の人の食べるもの食べないものが記された写真、黒板が使用された。最初に、絵カードを見ながら、これまでの活動で練習した表現を用いて対話形式で A さん自身が食べるもの、食べないものを確認し、その結果を「たべる」「たべない」と 2 つに区分けされた黒板に貼り付けていった。そこから今度は家族、そして友達、教師の食べるもの、食べないものへと話題は広げられていった。友達、教師の食べるもの、食べないものは、同じように絵カードが黒板に区分けして貼られた写真を見ながら、これまでに練習してきた語彙、表現、数の数え方を用いて対話を行い、共通点と相違点を見つける活動が行われた。

3.4　マクロ・スキャフォールディング

3.3 の授業の流れを見ると、本実践は、前の活動が次の活動の下準備となり、自分のことから家族、友達、先生のことへと A さんの周囲を巻き込む形で、徐々に会話の範囲が広げられている。さらにAさん個人の話から他者との比較へと、より難しい活動が行えるように、1 つずつステップを進める形でタスクの選択と配列への配慮が行われていた。これらの活動の中ではメッセージの多様性も活用されていた。イラスト、文字、音声、図（ここでは、食べるものと食べないものが黒板に区分けして貼られた視覚的情報を指

す）が用いられ、さまざまな形、材料から情報が取り込めるように準備され、これらの教材を通して、日本語で対話するだけでなく、非言語での意思表示も行えるよう工夫がなされていた。予め盛り込まれたこれらの工夫が、A さんの ZPD の中での作業を可能にし、自分の考えについて表現したり、比較したりするタスク達成の手助けとなっていた。

3.5　ミクロ・スキャフォールディング

ミクロ・スキャフォールディングについては、①語彙導入、②「食べる」「食べない」を使ったコミュニケーション、③比較という 3 つの観点についての分析結果を述べる。

①語彙導入では、教師はＡさんが答えられなかった語彙、つまりＡさん一人の力では答えることができなかった語彙について、正解を提示するのではなく、A さんが正解にたどりつけるように、少しずつヒントを出し、次のことばを促したり、A さんの発言を言い直したり、語彙の意味理解を確認するためにＡさんの母語を活用したりしていた。

②「食べる」「食べない」という表現の導入では、スモールステップを踏みながらＡさんの発話を引き出そうとする教師の働きかけが見られた。「食べる」「食べない」を使ったコミュニケーションでは、最初に絵カードに描かれた食べ物について教師が「これ、なーんだ」「食べる？」と質問し、A さんが「食べる」「食べない」と答えを述べた。その答えに対し教師は「みかん食べる」のように【食べ物＋食べる/食べない】の形でＡさんの発話を取り入れ、言い直すことを繰り返した。すると、活動の途中から A さんに、「これ、食べない」という発話が見られるようになった。他の人との比較活動では、教師は「どれ食べない？」という尋ね方も使用していた。授業中に A さんができることを見極め、そこから一歩先に進んだ表現を使用しながら発話を行っていたことがわかった。

③比較については、言語の問題とは別に、どのように比べるのか、その方法や比べる観点をＡさんは学ぶ必要があった。そこで、これまでに練習した表現を使用し、対話をしながら、⑴Ａさんが食べるもの、食べないものの確認、⑵Ａさんが食べないものを C さんが食べるかどうかの確認、⑶食べないものの絵カードの数の比較、⑷A さんが食べるものの中で、C さんはどれを食べないか相違点の確認を行った。この活動中、教師は質問したり、見本を見せたり、発話を促したりし、活動を方向付ける発話を行っていた。

上記のように、授業の中で教師はＡさんが一人でできることとできないことを見極め、A さんの発話や理解を促進したり、A さんに新たな表現のモデルを提示したり、比較活動のプロセスや観点を提示したりしながら、タスクの達成へと繋げていった。

3.6　まとめ

本実践では、予め盛り込まれた授業設計、および授業中の偶発的な教師と A さんとの相互作用が、A さんの ZPD での活動を可能にするとともに、そこでの A さんのコミュニケーションを促進し、さらに教科学習でも求められる「比べる」というタスクの達成

へとつながっていた。これらの活動の中では、「アプリで日本語」は、基本的な表現の確認、Aさんのコミュニケーションの促進、基本的なやりとり練習という役割を担っており、その後、「アプリで日本語」を離れて、Aさんを取り巻く環境を取り入れた、日本語面でも認知面でもより難易度の高い練習が行われていたことが明らかになった。

4. 教師教育学から見た日本語初期指導の談話　（王林鋒）

日本では、学校の授業を対象とした授業研究が 100 年以上にわたり広く行われてきた（稲垣，1995; 稲垣・佐藤, 1996；佐藤，2008）。教師が作成した教材や実践記録が多く残されており、これらを基に授業について省察を行い、授業改善が行われてきた伝統がある（佐藤，2008）。教室談話研究では、教師や児童生徒の会話記録がエビデンスとして分析者によって帰納的に検討され、その過程で分析と解釈が明らかにされる。そのため、第二言語習得（SLA）研究においても授業研究や教室談話研究の知見を活用することで、教室での授業デザイン及び学習の有り様に関する新たな理解が生まれる可能性がある。

本節の分析方法である授業分析は、授業における教師と児童生徒の発言といった授業を構成するものをできるだけ詳細に記録し、その記録を分析することによって授業において生起する現象を解釈しようとするものである。授業過程を明らかにするため、授業を実際の授業展開に即して分節化することによって、教師の指導と児童生徒たちの思考がどのように相互的に影響しつつ発展していくかを捉えることができる（重松，1961）。

従って、本節では、授業実践を参観し、入手した映像及び教室談話記録を元に、授業分析を用いて、教師と学習者である児童による発話の特徴を捉えてみる。また、本節は、特定のアプリの使い方と外国にルーツのある子どもの日本語学習過程を照射する一方で、授業において教師の営みをより広く捉え、日本語指導に関する教師の授業デザインにも焦点をあててみる。

4.1　授業の展開から見えたアプリと学習内容の連動活用

授業分析及び分節分けの観点から本授業を大きく表 2 のように 5 つに分節化した。分節の区切りは、教室談話記録による時間帯で示してある。授業の始まりは、当日の曜日確認から順番に曜日を読み上げた上に、「今日、昨日、明日」に合わせた曜日クイズの課題が行われた。続いて、絵カードを使いながら、食べ物の単語を確認してからイラストだけで A さんに言わせる活動が続いた。

授業開始 7 分が過ぎた時点から「アプリで日本語」を 2 回連続で活用した。一回目の UNIT4 の学習活動は、授業計画通りで行われたが、2 回目の UNIT 3 の学習活動は、授業時間が余った状況が生じて、その場での教師の判断によって行われた。「アプリで日本語」を使った関連学習活動は、合計 30 分程度、授業時間の大半を占めていた。

授業計画通りに行われた「アプリで日本語」UNIT 4 の内容は、教師が自ら選んだ食べ物の絵カードと連動しながら A さんの学びがデザインされていた。具体的には、教師が食べ物のひらがなことばカードを A さんに見せながら発音の練習を行ってから、「アプリで日本語」UNIT 4 の給食に関連する「ことばのれんしゅう」と「たべる・たべないひょうげん」を A さんとともにノートパソコンを持ちながら、やりとりを重視した指導で単語と表現を確認していた。さらに、食べ物のことばカードに「たべる・たべない」カードを加えて、A さんに黒板で食べるものと食べないものがわかるように貼り付けてもらった。そこから、教師が A さんから A さんの両親、兄弟の食べるものや食べないものを聞き取り、ほかの児童ならびに教師自身の結果も確認していた。

表 2：本授業の授業構造分節

	学習活動	学習内容の展開及び時間帯
1	**曜日** 本日の確認 及び 練習 **ひらがな言葉カードでクイズ（食べ物）**	0:00~03:53 順番に曜日を確認 今日、昨日、明日のそれぞれの問いに曜日カードを並び替え 「例：明日は水曜日です。昨日は何曜日？」 04:10~06:40 一回出てきたひらがなことばのカードを裏返してことばクイズ
2	**「アプリで日本語」** UNIT 4「ことばのれんしゅう」（給食） UNIT 4「ひょうげん」（たべる・たべない） カードでたべるものとたべないものを黒板に貼る	07:20~10:50 きゅうしょく・さかな・えび・たまご・ぱん・みず・おちゃ・ぎゅうにゅう・おさら 12:50~14:25 14:45~23:15 A さん、A さんの両親及び兄弟、ほかの児童、先生の結果確認
3	**「アプリで日本語」** UNIT3「ことばのれんしゅう」 （もちもの）	25:10~34:40 つくえ・いす・えんぴつ・けしごむ・ほん・のーと・したじき・ものさし・ふでばこ・はんかち・てっしゅ・らんどせる・すいとう・かさ・はさみ・のり・鉛筆削り・かばん・かっぱ・ べんとう・ふくろ・はぶらし・マスク・ぼうし・ぼうさいずきん・ぺん・いろえんぴつ/クーピー・えのぐ・てぶくろ・まふらー・りこーだー・どうぐばこ・しゅうじせっと・てーぷ・たおる・こっぷ・いえ・
4	**絵カード**	35:15~40:30 おむれつ・とうもろこし・りんご・ぽっぷこーん・なっとう・たまご・さかな・さしみ・りんご・りんごじゃむ・りんごぜりー・おむれつ・ちーず・ぎゅうにゅう・ばたー・こむぎ・ここあ・まよねー

		ず
5	**本日の振り返り**	41:15~43:20 今日の学習内容の確認・板書 （たべものカード・UNIT 3・UNIT 4） A さんがワークシートに書く

本授業では、一連の学習活動のように、A さんが食べ物に関する単語及び表現を習得するため、教師が図 2 のように絵カードとアプリを組み合わせながら、連動した形で授業がデザインされていた。イラストで単語を示すアプリの特色と単語カードから始まるサバイバル期の単語学習が有機に活用されていた。これによって、日本語指導の学習内容にアプリを取り入れ、組みあわせて活用する可能性が広がったと言える。

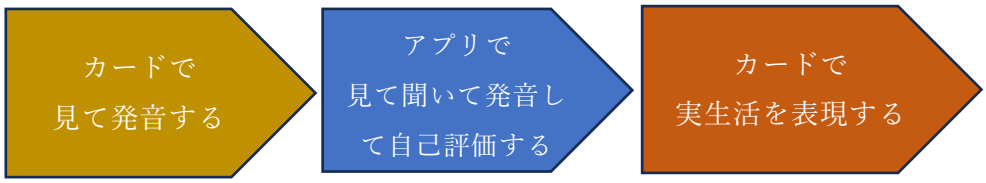


図 2：絵カードとアプリの連動

4.2　児童の発言から見えたサバイバル日本語の学びの様子

A さんの発言に焦点をあててみると、サバイバル期の児童の日本語学習の特徴は、児童の母語や英語によるトランスランゲージングの現象が見られた。トランスランゲージング（Translanguaging）とは、多言語話者が自分のレパートリーである多様な言語を扱い、言語間を行き来する能力（Canagarajah, 2011）を指す。A さんは、それぞれ独立した言語ではなく、母語のベンガル語、英語、第二言語としての日本語が統合されて一つのシステムになっている言語リソースを持っている。そのレパートリーのすべてを活用しながら効果的にコミュニケーションをしようとしている。表 3 のように、日本語の「牛乳」の習得に戸惑った A さんは、英語のミルクやベンガル語のトゥートゥを言い、教師とやりとりをした場面があった。また、「かに」から「はさみ」へ連想して、「はさみ」のベンガル語を教師が言い出した。2 つの場面においては、教師が意図的に A さんの母語に関連させようとしていた。授業後のインタビューでは、教師が日本語の指導中にベンガル語や英語を言い A さんと単語の意味を確認している場合が多かった。つまり、サバイバル期の日本語学習においては、トランスランゲージングを活用することが特徴である。トランスランゲージングの活用によって、日本語の学習やアイデンティティの形成にも影響を与えることが考えられる。

表 3：児童の母語や英語によるトランスランゲージング

発言項目　A＝児童　T＝教師		発言項目　A＝児童　T＝教師	
139	**A：ぎゅうにゅう。**	**87**	**T：かに知ってる？**
140	**アプリ：牛乳。**	**88**	**T：かに。あれこれなんだっけ？チェキ（ケチ）ケチ**
141	**T：牛乳。あ、牛乳なんだっけ？**		
142	**A：ミルク**	**89**	**A：はさみー（はさみー）**

143　T：ミルク。なんだっけ？バングラ　90　　T：ベンガル語ケッチ。
ディシュ。
144　A：トゥートゥ
145　T：トゥートゥ。トゥートゥ。思い
だした。トゥートゥ。

5. 日本語初期指導の学習記録とその活用　（森田英嗣）

本節では、Y小学校での試行研究で得ることのできた学習者4名のアプリを用いた学習の行動データ（アプリに機械的に蓄積される行動データ）をもとに、量・質の両側面から、どのような学習評価に役立つ資料を得ることができるか、加えて、どのような意味で談話分析に資する資料とすることができるかの検討を試みたい。

5.1　行動データの記録フォーマット

アプリでの学習の行動データのフォーマットを表4に示す。ここで、「団体ID」「ユーザーID」「クラス名」「生徒名」には、学習者を同定するための所属、氏名が記録される。また、「Unit」にはユニット番号、「ひょうげん/ことばクイズ/ことば/なぞりレベル」には学習活動の種類（文字の練習の際には「なぞりのレベル」が1～３の範囲）、「問題タイトル/文字」には各学習活動でのタスクの名称が記録される。さらに、「学習日時」には学習の開始日時時刻、「学習時間(秒)」には学習活動に充てられた時間、「選択肢」には選択肢があるタスクの場合に回答として選択された項目、「正誤」には正誤判断を伴うタスクで学習者に与えられたフィードバック情報が記録される。以下、これらのデータを用いた量的・質的分析の可能性について検討したい。

表4：行動記録データのフォーマット

名称	団体ID	ユーザーID	クラス名	生徒名	Unit	ひょうげん/ことばクイズ/ことば/なぞりレベル	問題タイトル/文字	学習日時 (YYYY-MM-DD H:i:s)	学習時間(秒)	選択肢	正誤
例1	*****	*****	*****	*****	1	ひょうげん	おなまえは？	2023/10/18 9:26	17	-	
例2	*****	*****	*****	*****	1	ことばクイズ	えを えらぼう	2023/11/29 9:14	4	選択肢1	○
例3	*****	*****	*****	*****	3	ことば	つくえ	2023/6/7 14:00	12	-	×
例4	*****	*****	*****	*****		level1	む	2023/6/23 12:13	10	-	○

5.2　量的分析の例

5.2.1 学習活動ごとに充てた学習時間の分析

表5に協力学習者の背景と学習者ごとの各学習活動に充てた時間を示す。Y小学校における既存の日本語カリキュラムや学習者の日本語学習歴等との関係でアプリの活用状況は様々であったが、アプリが提供する学習活動のどれに重点が置かれたのかが把握できる。

表5：学習者の背景と学習者ごとの各学習活動に充てた学習時間　（秒[%]）

	学年	年齢	ルーツのある国	母語	ことば	ことばクイズ	ひょうげん	もじ	計
Aさん	小1	6	バングラデシュ	ベンガル語	800[23.8]	681[20.2]	871[25.9]	1015[30.1]	3367[100.0]
Bさん	小4	10	ハンガリー	ハンガリー語	2739[11.1]	1389[5.6]	3255[13.2]	17210[70.0]	24593[100.0]
Cさん	小2	8	バングラデシュ	ベンガル語	1076[38.2]	434[15.4]	1304[46.3]	0[0.0]	2814[100.0]
Dさん	小1	7	バングラデシュ	ベンガル語	697[31.0]	291[13.0]	0[0.0]	1259[56.0]	2247[100.0]

例えば、Cさんは「もじ」を全く実施していないが、Bさんはアプリでの学習時間の70%を「もじ」に充てている。カリキュラムや指導員の判断が反映していると考えられる。

5.2.2　学習活動ごとにみた１タスクあたりの学習時間

表6に学習活動ごとにみた１タスクあたりの平均学習時間を示した。これによれば、「もじ」の学習活動は１タスクあたり、平均48.6秒が費やされており最も長い。逆に「ことばクイズ」は平均4.1秒であり短時間でタスクが終了していることがわかる。こうした平均値がより多くの学習者の記録から算出されると、それとの差異という観点から、各学習者の学習の特徴や教師の指導の特徴も把握できそうである。さらに、本アプリが期待する教師と学習者の談話が、どのような場面で活性化されやすいのかを把握する資料ともなり得る。

表6　学習活動ごとにみた平均学習時間[秒]

学習活動	ことば	ことばクイズ	ひょうげん	もじ	計
合計時間　[秒]	5311	2795	5430	19484	33020
出題数	436	674	487	401	1998
１タスクあたりの平均時間[秒]	12.2	4.1	11.1	48.6	16.5

5.3　質的分析の例

5.3.1　学習の履歴

本アプリは、学習の種類や順序をあらかじめ定めておらず、学習者の状況や既存のカリキュラムとの関係によって、さらには教師の判断に基づいて、ユニットや学習活動の選択に自由度を持たせた設計になっている。そこで、教師としては、ユニットや学習活動の実施状況を把握する必要があるが、それらは記録されたデータに基づいて確認することができる。これにより、本アプリが学習者個々人のカリキュラムの展開にどのように貢献することになったかを知る資料となる。

5.3.2　特徴的な学習行動の抽出

学習行動の記録は、特徴的な学習行動を把握することにも役立てることができる。表7に特徴的な学習行動の例を示した。①の事例は「もじ」の「あ」の筆記を何度も繰り返している例である。Levelの1と2はクリアできたがlevelの３で2回続けて失敗し、levelの2に戻ってやり直しているように見える。これらは旺盛な学習意欲を示すとも考えられる。②の事例は、「ひょうげん」を、時間をかけてゆっくりと回答している例である。この時、情報を想起したり、知識を整理したりと、認知活動が活性化している場面である可能性がある。またそうした場面で教師がどのように関わっているかを把握する価値ある場面とも考えられよう。③の事例は、「ことばクイズ」で「がっこう」という正しい文字の順序づけを行おうとしているが、「がこっう」「がこうっ」と回答した後に、諦めて別の課題に移ってしまった例であると考えられる。ここからは、促音の記述方法の習得に苦労している様子を示していると考えられよう。④の事例は、③と対照的に、２度の誤りの後に「うわぐつ」という正しい文字順に到達した例と考えらえる。③や④の事例でも、教師と学習者の談話がどのように実現されて、日本語の習得に貢献しているか確認してみたい場面である。このようにして、記録された学習行動データは、特徴的な学習場面を同定・抽出することができ、それによって談話分析で注目に値する場面のインディケーターとして活用することもできると思われる。

表7：抽出された特徴的な学習場面の例

事例	Unit　ひょうげん/ことばクイズ/ことば/なぞりレベル	問題タイトル/文字	学習日時（YYYY-MM-DD H:i:s）	学習時間（秒）	選択肢	正誤	考察
①	level1	あ	2023/9/6 11:55	10	−	○	何度も挑戦している
	level2	あ	2023/9/6 11:55	17	−	○	
	level3	あ	2023/9/6 11:56	7	−	×	
	level3	あ	2023/9/6 11:56	19	−	×	
	level2	あ	2023/9/6 11:56	8	−	×	
	level2	あ	2023/9/6 11:56	21	−	○	
	level3	あ	2023/9/6 11:57	4	−	×	
	level3	あ	2023/9/6 11:57	13	−	×	
②	2 ひょうげん	いい？　だめ？	2023/12/4 13:43	18	−		時間をかけてじっくりと回答している
	2 ひょうげん	いい？　だめ？	2023/12/4 13:44	10	−		
	2 ひょうげん	いい？　だめ？	2023/12/4 13:44	9	−		
③	1 ことばクイズ	ことばを かんせいさ	2024/2/2 11:25	48	が こ っ う	×	正答に到達できず途中で諦めてしまっている
	1 ことばクイズ	ことばを かんせいさ	2024/2/2 11:26	4	が こ う っ	×	
	1 ことばクイズ	えを えらぼう	2024/2/2 11:26	3	選択肢1	○	
④	2 ことばクイズ	ことばを かんせいさ	2023/12/4 13:59	101	ぐ つ う わ	×	苦労して正答に到達してる
	2 ことばクイズ	ことばを かんせいさ	2023/12/4 14:02	16	う わ つ ぐ	×	
	2 ことばクイズ	ことばを かんせいさ	2023/12/4 14:03	3	う わ ぐ つ	○	

5.4　今後の課題

今後の課題として以下の２点を指摘しておきたい。

① ルーブリック評価を含む教師による形成的評価や総括的評価が、上述のようなデータと組み合わせることで成果が上がる場合や、反対に上がりにくい場合のパターンを抽出することが可能か、検討する価値がある。十分な量の学習行動データを得ることができれば、データサイエンスによる技術を活用し、次の学習をレコメンドしたり、あるいは教師に参考情報を提示したりできるようになる可能性もある。

② 本アプリは、学習者によるアプリの個人使用だけでなく、教師とともに、会話しながら学習活動を展開することで成果を引き出そうとしている。どの場面でどのような効果的な談話があり得るか、とりわけ質的データ分析（特徴的な学習場面）と組み合わせることで、検討していきたい。

引用文献

石井恵理子（1997）「教室談話の複数の文脈」『日本語学』16,21-29.

稲垣忠彦 （1995） 『授業の歩み 1960-1995 年』評論社.

稲垣忠彦・佐藤学 （1996）『授業研究入門』岩波書店.

甲斐睦朗（1997）「授業の談話分析の方法」『日本語学』16,13-20.

佐藤学（2008）「日本の授業の歴史的重層性について」秋田喜代美・C. ルイス（編著）,『授業の研究 教師の学習―レッスンスタディへのいざない』明石書店, 43-46.

重松鷹泰（1961）『授業分析の方法』明治図書.

ヴィゴツキー レフ セミョノヴィチ（1934），柴田義松（訳）（2001）『新訳版 思考と言語』新読書社.

ハモンド ジェニファー（2009）「スキャフォールディングの実践とその意味－在籍学級の ESL 生徒の学びをどう支えるか」川上 郁雄，石井 恵理子，池上 摩希子，齋藤 ひろみ，野山広（編）『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する－ESL 教育と JSL 教育の共振－』第 1 部 2 章，ココ出版，8-42.

Canagarajah, S. (2011). Translanguaging in the classroom: Emerging issues for research and pedagogy. *Applied Linguistics Review*, 2, 1-27.

Hammond, J. & Gibbons, P. (2005). Putting scaffolding to work: The contribution of scaffolding in articulating ESL education. *Prospect,* 20(1), 6-30.

Walqui, A. (2006). Scaffolding instruction for English language learners: A conceptual Framework. *The International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 9(2), 159-180.

資料横断的な漢字音・漢語音データベースの公開と活用可能性
—2024 年度版の改訂に伴って—

加藤（かとう）　大鶴（だいかく）（早稲田大学）

1. ワークショップの主旨

発表者らは 2019 年から、個別資料の扱いに止まりがちな漢字音・漢語音の史的研究を俯瞰的視点から横断的に捉え、新たな研究領域を創発することを目的として、大規模データベース（"Database of Historical Sino-Japanese Readings"・略称 DHSJR）[1]の作成に取り組んできた。その成果は加藤他 2021・2022、加藤 2023・2024 にて段階的に報告してきた。DHSJR は①古代から現代までという通時性、②中国語原音に規範的な資料から日常言語的な資料までを広く扱う位相的横断性、③単漢字単位と漢字連接単位という異なる単位における字音の単位的多様性、の 3 つの特徴を持つ。2023 年度版は試行的な段階として平安時代から江戸時代までの 30 の文献を含む約 8 万 6 千字（延字数）のデータを公開してきたが、2024 年度版は節博士を含む声明等音楽資料や近現代までの 26 の文献を追加し合計 56 文献 27 万字を超えるデータ数（2024 年 3 月 31 日現在）が整った。これまで、これらのデータは資料ごとの個別データ（Excel 形式）と統合データ（タブ区切りテキスト形式）で公開してきた[2]。合わせて、今後拡大が見込まれる大規模データを整備するに伴って、ユーザへの利便性のために「簡易検索サイト」[3]を公開した。ついては、このワークショップでは本 DB の概要、含まれる資料の概観、利用上の注意点および活用法などを紹介すると共に、4 名から研究の実践例を紹介することで、本 DB の学術的意義の一端を報告する。

2. データベースの概略

(1) データの構造について：統合データ（DHSJR_data_all_********.zip、*は公開の日付をバージョン名として記す）と個別データ（DHSJR_data_files_********、解凍すると Excel ファイルが現れる）は若干の違いはあるものの、基本的には同じ 22 の項目からなるデータの構造をなしている。詳細はサイト内「データセット＞データ列の構成」を参照されたいが、大きく分けてⅠ. 資料番号情報、Ⅱ. 漢字情報、Ⅲ. 語種・形態情報、Ⅳ. 字音情報、Ⅴ. その他の情報、の 5 つから構成される。統合データは Excel などの表計算ソフトに（タブ区切りなのでコピーすればそのまま貼り付けが可能）読み込むことで、検索や加工しやすくなる。検索を行う場合は、「単字_見出し」「漢語_見出し」列を使うのが良い。JIS 漢字第 2 水準の範囲内の字体は康熙字典体としてある。この他、「仮名注」、「声点」、「反切」、「類音注」、「節博士」などからも検索が

[1] 浅田健太朗（島根大学）、石山裕慈（神戸大学）、大島英之（東京大学大学院生）、加藤大鶴（早稲田大学）、坂水貴司（広島経済大学）、佐々木勇（広島大学）、高田智和（国立国語研究所）、中澤信幸（山形大学）、肥爪周二（東京大学）らによる。

[2] 2024 年 4 月 1 日より新サイト、https://dhsjr.w.waseda.jp からダウンロード可能。

[3] https://dhsjr.kojisho.com、京都大学人文科学研究所 附属人文情報学創新センター劉冠偉氏作成。

可能である。なお、現時点では 30-026-02_四座講式_元禄版のみ、「声点型」・「仮名型」を単字レベルの「声点」・「仮名注」に分解していない。

(2) 統合データと個別データの違いについて：統合データでは全てのデータ行を一意に区別できるようにするために、「ID」列を設けている。これは「資料番号」と「資料内漢字番号」を組み合わせたものである（統合データ「資料内漢字番号」は 6 桁で表示)。また個別データには、共通する 22 の列とは別に各入力担当者が研究上有用とみなした情報列が、末尾に入っている場合がある。例えば、30-038-01_金沢文庫本五悔ならば SAT 所在位置、40-045-01_東洋文庫本法華経音訓ならば国立国会図書館デジコレ複製本リンク、60-028-01_平曲譜本ならば仮名表記の推定語形、などである。

(3) 利用に際して、書誌データについて：本 DB は複製や影印、デジタル画像が公開されている資料を優先的に格納してきた。それは文献研究の立場からできるだけ原資料で確認すべきであるという姿勢を反映してのことである。格納してある 56 の文献資料名についてはサイト「文献資料一覧」を参考されたいが、電子画像が公開されている資料にはリンクも張って利用に供した。

書誌データ（Bibliography_********.md）にはリンクの他に、複製資料等の情報も記す。この他、入力凡例も記した。ただし 30-038-01〜05 の声明資料については、テキストファイル上に節博士を表示できない関係上、個別データファイルの別タブに詳細な凡例を示してある。また、書誌データには、資料が概略的にどのような字音を反映しているかを示しながら、さらに当該資料の漢字音について詳細を知るための参考文献も掲げた。

なお、データは CC BY-NC-SA 4.0 DEED（表示 – 非営利 – 継承 4.0 国際）ライセンスのもとに提供する。データを研究に利用される場合は、「資料横断的な漢字音・漢語音データベース（DHSJR)」利用を明記の上、ファイル名のバージョンも記していただきたい（”DHSJR_data_all_20240301″ ならバージョン”20240301″)。

(4) 簡易検索サイトについて：本 DB は研究の目的に応じて二次加工・利用が可能である。個別データは多いものでも 3 万行程度であるから Excel 等で動かしても動作は軽快だが、統合データは関数などを使うと処理に時間がかかる。そこで簡便な検索を行う利用者のために、直観的に検索できるインタフェースの「簡易検索サイト」を作成し、利用に供した。

■参考文献：加藤大鶴 2024「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの課題と進捗—よりよい運用・連携を目指して— 」東洋学へのコンピュータ利用 第 37 回研究セミナー,2024.1.19、加藤大鶴 2022「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの概要と課題」研究集会 古辞書・漢字音研究とデータベース 2022,2023.3.4、加藤大鶴, 石山裕慈, 佐々木勇, 高田智和 2022「「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」の設計と発展的な運用について」シンポジウム古辞書・漢字音研究と人文情報学,2022.3.10、加藤大鶴, 石山裕慈, 佐々木勇, 高田智和 2021「「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」の構築と運用可能性 」日本語学会 2021 年度春季大会,2021.5.16

活用例１：四座講式諸本を使った漢字音研究の可能性

石山　裕慈（神戸大学）

１　問題の所在

涅槃講式・羅漢講式・遺跡講式・舎利講式から成る『四座講式』は、金田一春彦（1964）以来、日本語アクセント資料として重視されている。発表者は、かつて『四座講式』の日本漢字音資料としての側面に着目し、字音声点の日本語化について論じたことがある（石山 2005）。そこで得られた結論として、現存最古の大慈院本（東京大学国語研究室蔵）と後世の本（14 種）とを比較すると、同じ箇所に記入された声点が異なっている例があること、その声点の相違の中には、以下に示すような中低型を解消する声調変化が含まれていること、などがあった。

羅刹王…（大慈院本）上入上（ＨＬＬＨＨ）→（後世の本）上入平（ＨＬＬＬＬ）
生死海…（大慈院本）去平上（ＬＨＬＨＨ）→（後世の本）去平平（ＬＨＬＬＬ）

その一方で、石山（2005）は、大慈院本涅槃講式とそれ以外の本との比較を主目的としたものであったことから、涅槃講式以外の三点（羅漢講式・遺跡講式・舎利講式）で出現する漢語は手つかずであったこと、各本における漢語声調そのものの分析まで手が回らなかったことなどの問題点が残っていた。

この度、石山（2005）で使用した 15 種類の『四座講式』のうち、「30-026-01 大慈院本（南北朝～室町初期）」「30-026-02 元禄版（1699 年、新義派）」「30-026-03 宝暦版（1758 年、進流（高野山））」「30-026-04 正徳版（1711 年、新義派）」「30-026-05 貞享版（1686 年、新義派）」のデータが本データベース上で公開されることになり（ただし貞享版は現在涅槃講式部分のみ）、研究の幅が広がった。本稿では、作成時の論述の都合上、大慈院本・宝暦版・正徳版を題材とした漢字音（特に声調）研究についての一端を提示する。なお用例の所在は、漢語冒頭字の「資料内漢字番号」で示した。

２　四座講式各本における漢語声調

２－１　大慈院本の中低型

大慈院本の２字漢語では、「上去」「去去」型の中低型は、殊特（上去濁）323、遺跡（去去）1575 のような「後項の去声字が『入声軽』などの誤りと考えられる例」か、あるいは囲繞（上平／去）1008 のような「後項字に去声点以外の声点が付されている例（『囲繞』は宝暦版・正徳版では『上平』）」以外には見られない。その一方で、雙林（平軽去）228、哀声（平軽上）722、哀傷（平軽去）888、金棺（平軽去）900 のように、平声軽点が関わる中低型は数多く拾える。ことに下線を引いた「哀」字には平声軽点とともに節博士も付されていることから、誤点・誤認の可能性は低いと考えられる。

師子王（上平去）418、羅刹王（上入濁上）764、千輻輪（去入濁去）1118、今但聞（去上去）1388、生死海（去平濁上）1457、三百余歩（去入濁上平濁）1582 のように３字漢

語の中低型が見られることは、石山（2005）で述べたところであった。

２－２　宝暦版・正徳版の場合

２－２－１　中低型

大慈院本で平声軽点を含んだ中低型を形成していた「哀～」は、宝暦版・正徳版ではいずれも「平軽平」「上平」「上上」となっていて、中低型は解消されている。また２字漢語の「上去」「去去」型の中低型は基本的に出現しないものの、正徳版に数万（上去新濁）4633 という例があり、漢音語であれば中低型が許容された可能性がある（同じ箇所は、宝暦版では「平上新濁」）。

（以下、本節では宝暦版の例を示す）３字以上の漢語であれば、千輻輪（去入新濁去）1087、今但聞（去上去）1376、灯法師（去入上）1608、三十三天（去フ入濁去平新濁）2364、一千三百（入上去入新濁）2429、可住山（上平濁上）2464 のような中低型の語が見られ、石山（2005）で述べた声調変化は完成されたものではない。

２－２－２　フ入声点・新濁点

宝暦版・正徳版では、平声と入声の間（漢字の真下の位置）に差された「フ入声点」や、圏点を縦に並べた「新濁点」が出現する。「フ入声」と「入声」について、宝暦版の「十」を例に示すと、八十（入フ入濁）413、十六（フ入濁入）2039、第十（平濁フ入濁）2344／十方（入濁平）1093、十指（入濁上）4164 などであり、フ入声点とは「開音節化したｐ入声字」を明示したものと察せられる（沼本 1986）。

新濁点の例としては、歓喜（去平新濁）81、中心（平軽平新濁）368、両足（上入新濁）1085、境界（平平新濁）3311 などがあり、連（声）濁の資料として期待される。なお「新濁」すなわち「連（声）濁」とは限らないようで、力士（入平新濁）372、日月（入新濁入濁）1813、大臣（平濁平新濁）2932 などもある。先述した正徳版の「数万」ともども、ここでは広く「通常は濁らないのが、濁って読む」ことを注意するものか。

３　字音声調をめぐる問題

３－１　節博士と声点との対応関係

３資料とも、漢字に声点が付されているのに加え、漢字に直接節博士（便宜上この呼称とする）が加えられている例、仮名に節博士が加えられている例など様々な形式がある。本節では節博士の加点密度の高い正徳版に即して述べる。

まず、栴檀塔（去上濁フ入）63…角徴徴徴角（ㄴ＼ㄱ）＝ＬＨＨＨＬＬという具合に、声点と節博士とが示す音調は基本的に一致しており、『補忘記』で見られたような、両者が食い違う例は存しない（石山 2008）。

入声字にはＬＬ、入声軽字にはＨＨの節博士が記入されるのが原則であるが、その中で、ことに仮名に付された節博士では、入声字・入声軽字がＨＬとされているものが散見される。今日（去入、ニツにＨＬ）1676、三藐（去入、ミヤクにＨＬ）2865、入声軽…黄黒（去入軽、コクにＨＬ）1589、金色（去入軽新濁、シキにＨＬ）314 といったごとくである。

四声の音価については、金田一（1951）の見解が通用しており、そこでは入声軽は「高平調」とされている。それに対して、呉音の入声軽の音調をＨＬとする見方が小倉（2014）で示された。四座講式の例からは確かなことが言えないものの、留意すべき指摘であると思われる。なお入声軽字にはｋ入声字が多く、また去声字に後続するものが目立つが、因果関係については不明である。

３－２　字音声調と漢語声調

漢字に記入された声点が、中国原音に由来する字音声調なのか（呉音の場合はその素性についても議論を要する）、漢語を形成した場合の漢語アクセントの一部分なのか、後者だとすると日常的に使われる漢語のものか、声明におけるそれか、などと問題は多岐にわたる（加藤 2018 ほか）。「九十九億」には平フ入濁上入の声点が付せられており（宝暦版も同様）、「九」の声調が一定していないことから、ここでの声点とは漢字固有の声調を示したものではない公算が高い。なお他の「九」は、「第九」では上声、「九十人」「九百」「九結」では平声となっている。また「帰」字は、「帰ス（４例）」「帰顧」の場合は平声、「帰依（３例）」「帰仰」「帰命」だと上声点が付されている。

石山（2005）で、大慈院本で「平上」だった「化儀」が、「八相一代ノ化儀ハ 97」という箇所では正徳版・宝暦版を含む後世の本で「平平」になっていること、それ以外の箇所では一貫して「平上」であることを指摘した。具体的には「歓戚ノ化儀 247」「入滅ノ化儀ヲ 1790」という箇所であり、類例と併せて文脈や前後の音調などを分析することにより、漢語の声調変化のあり方について見通しを得られることが期待される。

４　終わりに

以上、四座講式にまつわる内容について、順不同で述べてきた。データベースの利点として、漢字・漢語単位で検索できることが挙げられる。すでに研究が行われた資料群を、新たな切り口で再検討できるようになったという点で、日本漢字音史研究全般が新たな段階に入ったと言うことができよう。

＜参考文献＞

石山裕慈（2005）「涅槃講式における漢語声調の変化についての考察」（『訓点語と訓点資料』115）
――――（2008）「貞享版『補忘記』の漢語アクセント」（『国語と国文学』85-3）
小倉　肇（2014）『続・日本呉音の研究　第Ⅰ部・研究篇』（和泉書院）
加藤大鶴（2018）『漢語アクセント形成史論』（笠間書院）
金田一春彦（1951）「日本四声古義」（『国語アクセント論叢』、法政大学出版局。『日本語音韻音調史の研究』（吉川弘文館、2001）によった）
――――――（1964）『四座講式の研究』（三省堂。『金田一春彦著作集』第五巻（玉川大学出版部、2005）によった）
沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版。2023 年に同社から刊行された新版によった）

活用事例 2：個別的事例を対象としたデータベース活用の可能性

坂水（さかみず） 貴司（たかし）（広島経済大学）

1. DHSJR から得られる研究の着想

発表者は室町時代ごろの文献で、ある字音形態素が特定の語で長形を示すことに興味をもち、個別的事例を対象とした研究を公表している（坂水 2021 など）。同一の音環境でも一様に長形を示すわけではなく「語彙にかたよりのある」現象であるため（中田 1979: 35）、事例研究を積み重ねて傾向を理解する必要があると考える。

中世の字音語で長形が出現する音韻的条件として、イ段・ウ段・オ段のみに存在することが指摘されている（柳田 1993: 155）。これを参考に、「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」（DHSJR、以下「本 DB」）のデータセット（ver. 20240331）を使用し、「仮名注」欄においてイ段の長形を示すもの（イイ、キイ、シイ、……）を検索すると、本 DB の範囲内で字音形態素「四」には「四時」の語でのみ長形が出現することが判明する[1]。そこで「漢語_見出し」で「四時」を検索すると、語形が判明する例として次の例が得られる。

シシ：四（シ）-時（シ） [シイシト不讀]（論語_京大清家文庫蔵_宣賢点 50-035-01、34 ウ 5）／四（シ）-時（シ）（清）（中庸章句_京大清家文庫蔵_宣賢点 50-047-01、25 ウ 1）

シイシ：四（シイ）（去）時（シ）（上）（岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 30-040-02、1-27b2）／四（シイ）（去）時（平）（同、1-41b4、2-13a2 [仮名音注別筆か]）／xijxi（邦訳日葡辞書_50-041-01、765l[2]）

シジ：SHIJI 四時（和英語林集成第三版_70-042-01、562）／四時（シジ）（三省堂初版明解日本語アクセント辞典_90-046-01、339）

これらのうち「シシ」「シイシ」は後部要素「時」が清音であるため、漢音語であると考えられる[3]。これらの例を通覧すると次のような見通しを立てることができる。

見通し①：清原宣賢加点『論語』には「シイシト不讀」という注記があるため、室町時代の経書では長形が許容されず、「シシ」という語形が規範的とされたらしい。

見通し②：明治時代には「四」「時」ともに無標な形の「シ」「ジ」に移行するらしい。

以下これらの見通しを検証しつつ、個別事例を対象とした本 DB の活用方法を述べる。

2. 調査

2.1. 室町時代の経書では長形が許容されなかったか

まず室町時代の経書で長形が許容されなかったという可能性（見通し①）について、室町時代の経書で仮名注が得られる例を追加して確認する。中央研究院「漢籍全文資料庫」https://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm（2024 年 3 月 30 日確認）によって「四時」が出現する箇所を検索し、訓点本の該当箇所を参照する。すると次の例が得られた。

シイシ：四 時 行（[朱]シイ[朱]シヲコナ）ワル焉（『雑字類書』241-8、719-2）※出典：『論語』陽貨篇／四-時（シイ シ）・行（ヲコナ）ハレり焉（『論語』建武本⑨87）※「シイシ」は室町期後筆／四時（シキ シヲコナ）行ワル焉（『論語鈔』⑤10 ウ 5）

長形「シイシ」が出現することから、室町時代の経書では長形が許容されるものとそうでないものがあったと考えられる。また長形が許容されない文献があることから、長形の「シイシ」は新形であり、新たに経書に入ってきた形である可能性が想定される。

2.2. 近世～近代の変化

『和英語林集成』のに「シジ」があることから、明治時代ごろには無標の形[4]である「シジ」に移行したことが推定される。このことを確認するために、近世～近代の例を追加する。

まず近世の経書では「シイシ」の他、「シジ」という形が確認される。ただし「シイシ」の「時」の清濁については十分な証拠があるとはいえない。

シイシ ?：四-時(イ)行(ヲコナ)ハル焉（『論語』慶長ごろ版、②48 ウ 4）／たとへはしいしのたかいにおこなはるかことし（『仮名書き中庸』江戸末写・306 上 13）

シジ：しじおこなわれ（『仮名書き論語』江戸末写 131-上 7）／四時(シジ)行(ヲコナ)ハレ焉（『論語』文化 8[1811]年序、②38 オ 5）

さらに「日本語歴史コーパス」（データバージョン 2024.03、コーパス検索アプリケーション「中納言」https://chunagon.ninjal.ac.jp/ [2024 年 4 月 2 日確認]を利用し、語彙素「四時」で検索）で用例を集めると、近世の次の例が得られる。

シジ：人生一期(じんせいいちご)四時(しじ)に似(に)たり。（『比翼連理花廼志満台』初編上・自叙 1 オ 2）

シイジ：天(てん)に寒暑温涼(かんしょうんりやう)の四時(しいじ)あれば。（『比翼連理花廼志満台』初編上 1 オ 4）

このように近世では「シジ」「シイシ」「シイジ」の三形が出現する（「シイシ」は存疑）。

次に近代の例では唐代の書名である『四時寶鑑』の例として「シイジ」の形が得られる（日本語歴史コーパス、データバージョン 2024.03、コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用して語彙素「四時」で検索）。

シイジ： 餅(もち)、生菜(あをな)などを盤上に盛ること。四時寶鑑(しいじほうかん)に載たり。

（『太陽』第 1 巻第 1 号、1895 年、p.153）

また『和英語林集成』の諸版を調査すると（明治学院大学「デジタル和英語林集成（各版検索）」https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search [2024 年 4 月 2 日確認]による）、初版とロンドン版では「シイジ」が、その他の版では「シジ」が現れる（表 1）。

表 1　『和英語林集成』諸版における「四時」

番号	版	ローマ字	仮名	漢字	ページ
1-1	初版	SHĪ-JI	シイジ	四時	400
1-2	ロンドン版	SHĪ-JI	シイジ	四時	400
1-3	日盛館偽版	SHI-JI	シジ	四時	400
2-1	再版	SHIJI	シジ	四時	461
2-2	ニューヨーク版	SHIJI	-	-	238
2-3	東洋堂偽版	Shiji	-	-	238
2-4	上海版	SHIJI	-	-	238
3-1	3 版	SHIJI	シジ	四時	562
3-2	縮刷丸善版	SHIJI	-	-	560

このように、近代に入ってからは「シイジ」「シジ」の二つの形が確認される。

3. まとめ

本パートでは個別事例として「四時」を取り上げ、本 DB から得られる見通しを検証した。本パートでの調査範囲では表 2 のような流れが推測される。このように見ると「四時」の長形は室町から近代以降まで残存することがわかる。その一方後部要素「時」が漢音「シ」から呉音「ジ」へと転換する様子も認められる。

本 DB を利用した個別事例の調査では、本 DB を起点に他の索引やデータベースに範囲を広げることが有効であると考えられる。

表 2　「四時」の語形

語形	室町時代	江戸時代	近代以降
シシ	■		
シイシ	■	▨	
シジ		■	■
シイジ		■	■

参考文献

坂水貴司（2021）「漢語「富貴」の語形について」『訓点語と訓点資料』第 147 輯、訓点語学会、pp.1-29

中田祝夫（1979）「文明本節用集のために」中田祝夫『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引』勉誠社、pp.1-49

平山久雄（2022）『平山久雄　中古音講義』汲古書院

柳田征司（1993）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院

依拠テキスト

『仮名書き中庸』江戸末期写（祖本は江戸中期か）臨南寺蔵本：木村晟・片山晴賢・渡會正純編（1994）『臨南寺学術研究資料集成第一 臨南寺蔵 仮名書き四書』椋伽林／『仮名書き論語』江戸末期写（祖本は江戸中期か）臨南寺蔵本：木村晟・片山晴賢・渡會正純編（1994）『臨南寺学術研究資料集成第一 臨南寺蔵 仮名書き四書』椋伽林／『雑字類書』国立国会図書館蔵本（WA16-21）：中田祝夫（1979）『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引』勉誠社・「国立国会図書館デジタルコレクション」https://dl.ndl.go.jp/pid/1286982（2024 年 4 月 2 日確認）／『太陽』：日本近代文学館編（1999）『太陽』CD-ROM 版、八木書店／『中庸章句』：京都大学附属図書館清家文庫蔵本（1-66/チ/4 貴）：「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008052（2024 年 4 月 2 日）／『日葡辞書』オックスフォード大学ボードレイアン文庫蔵本：亀井孝解説（1975 [初版 1973]）『日葡辞書』勉誠社／『日葡辞書』エヴォラ図書館蔵本：大塚光信解説（1998）『エヴォラ本日葡辞書』清文堂出版／『日葡辞書』リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵本：エリザ・タシロ・白井純編（2020）『リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵　日葡辞書』八木書店／『比翼連理花廼志満台』国立国語研究所蔵本（W99/Sh9）：「日本語史資料 [国立国語研究所蔵]」https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=hananosimadai（2024 年 4 月 2 日確認）／『論語』建武本大東急記念文庫蔵本（22-3-3）：蒲田政治郎編（1939）『論語 建武本』蒲田政治郎／『論語』清原宣賢点京都大学附属図書館清家文庫蔵本（1-66/ロ/8 貴）：「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008057（2024 年 4 月 2 日確認）／『論語』慶長ごろ版国立国会図書館蔵本（WA7-37）：「国立国会図書館デジタルコレクション」https://dl.ndl.go.jp/pid/2543875（2024 年 4 月 2 日確認）／『論語』文化 8（1811）年序国立国会図書館蔵本（862-105）：「国立国会図書館デジタルコレクション」https://dl.ndl.go.jp/pid/2568310（2024 年 4 月 2 日確認）／『論語鈔』石川武美記念図書館成簣堂文庫蔵本：編者不明（1917）『論語鈔』民友社

［付記］本発表は科学研究費補助金「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」（基盤研究Ｂ・研究課題番号：22H00665）の成果の一部である。

[1] 本 DB 以外の範囲で調査すると、実際には字音形態素「四」は他の語でも長形を示すことがわかる。

[2] 『日葡辞書』原本（ボードレイアン文庫本・エヴォラ本・リオ本による）でも確認できる。Xijxi. Yotçuno toqi. *Os quatro tẽpos do ãno*.（『日葡辞書』301 オ r）

[3] 「時」は中国語中古音で常母の子音（[ʑ-]）をもち、漢音で清音の「シ」、呉音では濁音の「ジ」で対応することが期待される。中国語中古音の推定音価は平山（2022: 115-119）による。

[4] 「四」「時」は、それぞれ「シ」「ジ」が無標の形であることは仮に本 DB の『邦訳日葡辞書』のデータを利用することで確認できる（「四」シ 55 例：シイ 1 例：ジ 1 例：シッ 1 例／「時」ジ 37 例：シ 3 例）。

活用例３：大規模データを使った漢字音研究の可能性

大島英之（東京大学学生）

1. はじめに

DHSJR の 2024 年度版では、辞書体資料に基づく漢字音・漢語音データとして、新たに『邦訳日葡辞書』（原本 1603-04 年刊，以下「日葡」）、『和英語林集成（第三版）』（1886 年刊，以下「和英」）、『明解日本語アクセント辞典』（1958 年刊，以下「明解」）の三種類が公開された。いずれも総行数が 5 桁に及ぶ大規模データである。また、非辞書体資料とは異なり、出現する全ての漢語の語形が分かるため、計量的な調査にも有用と思われる。本発表では、以上 3 種のデータを活用して、近世以降の漢字音の変化を数量的側面から概観する。

2. 分析用データの作成

3 種のデータの原本には、混種語が多く収録されているが、いずれにおいても網羅的には採られておらず、データ間でも採用方針に小異がある。今回の調査では、それぞれのデータにおいて「語種」欄に「混種語」とある語は除外し、また「仮名注」列に和訓が入力されている行が一部に確認されたため、該当する語は除外した。すなわち、原則として、字音のみで構成される語のみを分析対象とした。

「仮名注」列の字音仮名遣いは 3 データとも異なるため、現代仮名遣いに統一して、新たに作成した「仮名注（現代）」列に入力した。「日葡」の-t は全て「ツ」とした。「和英」は促音も大文字の「ツ」で表記するが、アルファベット表記を参考に「ッ」に改めた[1]。更に、博士（ハカセ）・双六（スグロク）・大徳（ダイトコ）・正身（サウジミ）・歴（レッキ）のように、字音由来であっても非典型的な音節構造を有する行は除外した。

3. 考察

3-1. 音形の使用頻度の変化

各資料における音形の数（異なり数・総数）は、右の表 1 に示す通りである。このうち、音形ごとの使用率（例数/総例数×1000（‰））を「日葡」「明解」間で比較し、変化の大きい音形を抽出したところ、表 2 のような結果となった。

表 1 音形の数

日葡	418 種 27805 例
和英	423 種 26419 例
明解	439 種 77261 例

表 2　日葡→明解（10 例以上）で使用率が５倍以上に増加した音形

	日葡	和英	明解
リツ	5 例（0.18‰）	20 例（0.76‰）	126 例（1.62‰）
スウ	8 例（0.29‰）	31 例（1.17‰）	161 例（2.08‰）
ジュッ	3 例（0.11‰）	5 例（0.19‰）	44 例（0.57‰）

[1] 「和英」には、「RISSHŪ リンシウ 立秋」のように、原本に掲げられる仮名表記がアルファベットと対応していない例が散見される。このうち「備考」列に「ママ」とある行については、アルファベットに従って「仮名注」を訂正した。また、仮名表記を欠く例についても、アルファベットに従い、仮名注を入力した。

表 3　日葡（10 例以上）→明解で使用率が５倍以上に減少した音形

	日葡	和英	明解
ホツ	12 例（0.43‰）	8 例（0.30‰）	2 例（0.03‰）
シイ	14 例（0.50‰）	3 例（0.11‰）	3 例（0.04‰）
ブク	24 例（0.86‰）	8 例（0.30‰）	6 例（0.08‰）
ギョク	64 例（2.30‰）	14 例（0.53‰）	25 例（0.32‰）
キク	17 例（0.61‰）	7 例（0.26‰）	7 例（0.09‰）
モツ	44 例（1.98‰）	31 例（1.17‰）	25 例（0.32‰）
バチ	11 例（0.40‰）	5 例（0.19‰）	5 例（0.06‰）

リツ：「日葡」では律 5 例のみ。「和英」では律 9 例、立 9 例、率 1 例、慄 1 例。「明解」では立 67 例、律 30 例、率 27 例、慄 2 例。「立」の慣用音リツと、字音接辞「率」の一般化が、いずれも近世以後に起こったことがうかがえる。

ホツ：「日葡」には発 6 例のほか、払 3 例、髣 1 例（髣髴）、忽 1 例、法 1 例があるが、「和英」では発 8 例のみとなり、「明解」では発 2 例（発議・発願）に減少。促音形ホッはここまで大きく減少せず（30 例→11 例→35 例）、また「払」「髣」等の音もフツに変化したことなどを考え合わせると、ホツという音連続そのものに理由があるか。

3-2. 呉音・漢音の割合の推移

現代日本語では呉音よりも漢音が優勢であるが、『日葡辞書』では呉音の方が優勢であることが今泉（1951）などに指摘されており、主に明治時代を画期として漢音の使用が伸張したと言われている。しかし、大（呉音ダイ／漢音タイ）のように、呉音と漢音とが清濁のみで対立する字においては、濁音（すなわち呉音）側が優勢となる傾向が指摘されている（松井 1971・湯沢 2017・石山 2022 等）。この様相を、3 データを用いて量的に確かめてみたい。

表 4・5 に、各資料における呉音／漢音の数（字種数・総字数）を示した[2]。表 4 下段の括弧内には、3 資料全てに呉音・漢音双方の音形が確認される 190 字種における例数を示した。

表 4　呉音・漢音が清濁以外で対立する字の数

	日葡	和英	明解
呉音	581 字種 5295 例 〈190 字種 3055 例〉	509 字種 3978 例 〈190 字種 1988 例〉	520 字種 10262 例 〈190 字種 4759 例〉
漢音	493 字種 4283 例 〈190 字種 2742 例〉	599 字種 5143 例 〈190 字種 3270 例〉	627 字種 16805 例 〈190 字種 10469 例〉

[2] 呉音／漢音の判断基準は『三省堂五十音引き漢和辞典（第二版）』に従った。具体的な手順としては、まず、本辞典において呉音・漢音双方が記載される漢字とその呉音形／漢音形のリストを作成し、促音形・連濁形・半濁音形を追加入力した。続いて、分析用データの「仮名注（現代）」列に対して、リストの音形を完全一致で参照することにより、呉音／漢音を自動で判断した。なお、連濁形の参照は、分析用データの「位置」列の値が 2 以上の場合に限定した。

表 5　呉音・漢音が清濁のみで対立する字の数（語頭のみ）

	日葡	和英	明解
呉音(濁)	200 字種 1539 例	228 字種 1400 例	247 字種 3727 例
漢音(清)	81 字種 396 例	84 字種 453 例	103 字種 1088 例

清濁以外で対立：総字数では、呉音＋漢音に対する漢音の割合が 44.7→56.4→62.1（%）と推移する。漢音の字種の増加が目立つが、字種を限定した場合（下段）でも 47.3→62.2→68.7（%）と推移し、漢音使用の拡大が確認される。

清濁のみで対立：呉音＋漢音に対する漢音の割合は、20.5→24.4→22.6（%）と推移する。一貫して濁音形が多いが、近代初期に漢音使用の拡大の影響で清音形が増加し、現代に至るまでに再び濁音形の使用が増加したという事情が、数値に反映されているか。

3-3. 呉音・漢音混読現象の展開

現代日本語には「言語」（漢音ゲン＋呉音ゴ）のように、呉音と漢音を混淆させた読み方（以下「混読」）をする漢語は多くあるが、古くは異例であった。大島（2022）では、呉音同士ないし漢音同士で読まれる漢語に対する、混読される漢語の割合（混読率）が、三巻本『色葉字類抄』では 15%程度だったものが、『日葡辞書』では 24%程度に拡大することを示した。同様に、近世以降の混読率の推移を確認してみたい。なお、以下では、呉音・漢音の判断は「清濁以外で対立する字」に限定し、分析対象は二字熟語に限定する。

結果は表 6 の通り[3]で、混読現象の拡大が確認された。

表 6　「日葡」「和英」「明解」における漢語語形の字音体系

	日葡	和英	明解
呉音＋漢音	153 語	229 語	527 語
漢音＋呉音	189 語	201 語	453 語
呉音＋呉音	588 語	363 語	504 語
漢音＋漢音	460 語	558 語	1233 語
混読率	24.6%（342/1390）	31.8%（430/1351）	36.1%（980/2717）

参考文献

石山裕慈（2022）「日常使用の日本漢字音の歴史―『日葡辞書』と現代日用語辞典との比較を通して―」『国語と国文学』99(9). 49-62.／今泉忠義（1951）「日葡辞書を通して見た字音と語法と」『国語学』6. 11-18.／大島英之（2022）「中世における呉音漢音混読現象の展開―『色葉字類抄』と『日葡辞書』の漢語語形の比較を通じて―」『計量国語学』33(6). 373-388.／松井利彦（1971）「近世漢学における漢字音の位相」『国語国文』40(5). 1-33.／湯沢質幸（2017）『漢字は日本でどう生きてきたか』開拓社.

[3] 漢字表記と語形とが同一である漢語が、複数行に跨がって入力されている場合は、1 行に統合し 1 語として数えた。なお大島（2022）では、呉音・漢音の判断基準や対象とする漢語の範囲を更に狭めた。そのため、表 6 の「日葡」の語数は大島（2022）のものと異なっている。

活用例 4：外部データベースとの接続可能性

高田智和（国立国語研究所）

１．接続のためのキー項目

最近の人文情報学分野では、データベース同士をつなぐことがトレンドである。研究データのオープン化がこれを加速させているが、データベース同士をつなぐこと自体は、もちろん従前から行われている。つなぐことがよりやりやすい環境が整ってきた結果だと言えるだろう。

「漢字音・漢語音データベース」は、ほかのデータベース・データセットとの接続を可能とする項目を多数持っている。例えば、単字項目（漢字字種に関する情報）は Unicode で記述されているため、「漢字字体規範史データセット」（https://www.hng-data.org/）や「平安時代漢字字書総合データベース」（https://hdic.jp/databases/）などと接続させることができる。出典項目（出典資料内の所在情報）を用いれば、「国立国会図書館デジタルコレクション」（https://dl.ndl.go.jp/）や「古典籍総合データベース」（早稲田大学図書館、https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）など、デジタル画像の見開きまたはページ単位で原本画像を参照することができる。近年、日本国内でも普及してきた IIIF（International Image Interoperability Framework）対応のデジタルアーカイブ（「国書データベース」国文学研究資料館、https://kokusho.nijl.ac.jp/ など）ならば、行や文字列などの画像中の部分にフォーカスした参照も可能である。ただし、ここで言う「できる」は実現可能性のことであり、容易にできることを意味するわけではない。

「漢字音・漢語音データベース」の仮名音注、声点、反切、類音注、節博士などの漢字音・アクセントに関する項目は、他の漢字音データ・アクセントデータの連携利用が今後行われることであろう。ここでは、このような「漢字音・漢語音データベース」の「正統的な」活用ではなく、「目的外利用」の活用法を考えてみたい。具体的には、「漢字音・漢語音データベース」の漢語項目の語彙資源への転用である。「漢字音・漢語音データベース」に集積された漢語は、仮名音注、反切、類音注により語形がわかる漢語であると見なされよう。歴史的な漢語語彙資源として利用できるものであると考えられる。

2. 「漢字音・漢語音データベース」の語彙資源への転用

2.1. Unidic の語彙素 ID の利用

形態素解析用辞書 Unidic（https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/）は、コーパスに形態論情報を付与するため、国立国語研究所を中心に開発が進められている電子化辞書である。語の単位は短単位で、異表記・異形態に対して同一の見出し（語彙素）が与えられている。語彙素 ID をキーにして、データベース同士をつなぐ方法である。

国立国語研究所の語誌情報ポータル（https://goshidb.ninjal.ac.jp/goshidb/、開発中）は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や『日本語歴史コーパス』の語彙統計情報、辞書類の見出し情報、「言語地図画像データベース」の項目情報、言語記事の情報、研究文献の情報を集積し、それぞれのデータセットを語彙素 ID で結び付けている。コーパスの語彙統計情報以外は語彙素 ID を持たないため、それぞれのデータセットに語彙素 ID を付与することが必要となる。データセットに形態素解析を施し、人手修正を行う手順を採るが、辞書類の見出しなどは形態素解析の対象として不適当であり、また、Unidic に未収録の語もあって、これらへの対処が課題である。

2.2. 『日本国語大辞典』（ジャパンナレッジ）の URL の利用

ジャパンナレッジで提供されている『日本国語大辞典』は、見出し単位で 1 ページを構成し、URL がある。この URL を単語 ID として利用する方法を考えた。収録語数が多く、語釈や用例など同定情報が少ない形態素解析用辞書よりも、生身の人間が扱うコードブックに適している。試みに「漢字音・漢語音データベース」の 5 資料の漢語について、『日本国語大辞典』での有無を調べ、カバー率を求めると下表のようになる。歴史的漢語の語彙資源化には、未収録語の取扱いが大きな課題であることがわかる。

表: カバー率

資料名	漢語数	日国にあり	カバー率
20-002-01_医心方_半井家旧蔵本（東博蔵本）	2,917	1,691	58.0%
30-008-01_遊仙窟_金剛寺本	668	380	56.9%
30-013-01_尾張国郡司百姓等解文_早大本	3,868	2,777	71.8%
30-012-01_群書治要 経部_金沢文庫本	502	377	75.1%
30-018-01_三帖和讃	4,137	2,631	53.6%

2.3. 今後の展開

「漢字音・漢語音データベース」を語彙資源への転用するために、つなぎ役の語彙コードブックに利用できそうなものとして、Unidic の語彙素 ID と『日本国語大辞典』（ジャパンナレッジ）の URL とを取り上げてみた。カバー率の観点では高い評価を下せないものの、目下のところ簡便に利用できる点においては有益なものであろう。今後は「漢字音・漢語音データベース」収録漢語と「語誌情報ポータル」との接続に取り組んでいきたい。

参考文献

伝康晴・小木曽智信・小椋秀樹・山田篤・峯松信明・内元清貴・小磯花絵（2007）「コーパス日本語学のための言語資源―形態素解析用電子化辞書の開発とその応用―」『日本語科学』Vol.22、 pp.101-123

山崎誠 (2018)「日本語史研究に関する二次的情報の集約―語誌データベースの構築―」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 2018』、pp.141-146

日本語学会2024年度春季大会 シンポジウム

世界の日本語学

パネリスト

徐　一平（じょ　いっぺい）	（北京外国語大学）
曺　英南（ちょ　よんなむ）	（高麗大学）
ダオ・ティ・ガア・ミー	（ハノイ国家大学）
ポリー・ザトラウスキー	（ミネソタ大学）
ジャン・バザンテ	（フランス国立東洋言語文化学院）
カラム・ハリール・サーレム	（カイロ大学）

指定討論者

近藤　泰弘（こんどう　やすひろ）	（日本語学会会長 / 青山学院大学名誉教授）
木部　暢子（きべ　のぶこ）	（日本語学会副会長 / 人間文化研究機構）

企画・司会

庵　功雄（いおり　いさお）	（一橋大学）
太田　陽子（おおた　ようこ）	（一橋大学）
田中　祐輔（たなか　ゆうすけ）	（筑波大学）

趣旨

本企画『世界の日本語学』は、日本語学会設立80周年記念事業の一環として企画されたシンポジウムである。世界における日本語学に着目すると、時々の日本語の諸相を捉える取り組みの歴史は長い。様々な国や地域において、文化の理解や人々の接触、交易や交流に際して日本語を考察する試みが行われてきた。また、学問としての日本語学は、宗教や制度の流入時における言語把握や古典資料の解釈、各地域の言語的特色と社会基盤としての言語をめぐる議論の中で発展し、現在では多様な日本語話者や機械言語をも射程に入れた広範で深い研究領域を形成している。

本シンポジウムでは、そうした日本語学の源流と展開、そして、現在の状況と展望について世界的視野から検討を行うことを目的とし、中国・韓国・ベトナム・アメリカ・フランス・エジプトから、日本語学研究を牽引する専門家らをお招きした講演会とパネルディスカッションを実施する。具体的には、それぞれの国や地域でどのような課題の下に日本語学が展開し、現在に至る過程でいかなる研究手法やテーマが生まれ、近年の言語資源や新しいテクノロジーを活用した取り組みや研究がいかに広がり、国際間の共同研究などはどのような形で実施されているかについて話題提供をいただく。その上で、パネルディスカッションを実施し、世界における日本語学の展開と展望を、フロア参加者を交えた議論を通して検討したい。

構成

趣旨説明・登壇者紹介

講演

講演 1　徐一平（北京外国語大学）「中国における日本語研究」

講演 2　曺英南（高麗大学）「韓国における日本語学―その歴史的な歩みと展開―」

講演 3　ダオ・ティ・ガア・ミー（ハノイ国家大学）「ベトナムの日本語学―過去・現在・今後の展望―」

講演 4　ポリー・ザトラウスキー（ミネソタ大学）「アメリカにおける日本語の言語学」

講演 5　ジャン・バザンテ（フランス国立東洋言語文化学院）「フランスにおける日本語学」

講演 6　カラム・ハリール・サーレム（カイロ大学）「エジプトの日本語学―途上段階における学習者世代の変遷―」

休憩

パネルディスカッション

総括

中国における日本語研究

徐一平（北京外国語大学）

1. 中国における日本語研究の歩み

1.1 歴史的な発展

北京大学の日本語専攻は1862年に成立した「京師同文館」にさかのぼる。その後1946年に、東方語言文学部が成立し、それと同時に日本語専攻が立ち上げられた。1949年に第一回日本語専攻の学部生が募集され、北京大学は、中国で最も早く日本語専攻が設けられた大学となる。そのような歴史の中で、19世紀末から、20世紀中頃までは日本語研究の黎明期と言える。

この期間中に出版された日本語教材、日本語研究書などの著書もかなりあるが、まだ完全な調査研究がなされていないのが現状である。その中で、代表的なものをあげれば、1906年上海商務印書館出版の『東文教程』、1935年汪大捷著『現代日文語法講義』、1934年北京で創刊された『日文与日語』雑誌などがある。

1949年、新中国成立後、北京大学のほか、洛陽外国語学院、上海外国語学院、北京外国語学院などの大学でも、相次いで日本語専攻が設けられた。更に1964年をきっかけに、北京第二外国語学院、大連日語専科学校、黒竜江大学なども政府指導の下で、日本語専攻が設けられ、全国的に日本語教育が展開され、日本語研究もそれに伴って、展開されていった。

その時から1982年の中国日語教学研究会が成立するまでの30数年間は中国における日本語研究の草創期である。50、60年代における研究成果は多くはないが、後世に残る物もいくつかあった。陳信徳著『現代日本語実用文法』（1958）、陳涛主編『日漢辞典』（1959）、北京大学編『大学一年級日語課本』などである。

1966年の文化大革命までに刊行された研究書や教科書は20数種で、概説、文字研究、類義語研究、構文研究などで構成される。この基礎の上で順調に発展すれば、中国における日本語研究はきっと大きく発展する時期が訪れるだろうと予想できる。しかし、文化大革命により、それが中断され、ある統計によれば、1966年から1973年まで、日本語研究や日本語教育関係の著書は、一冊も刊行されなかったという。

1972年に中日国交が正常化され、大学における日本語教育が再開し、社会人による日本語学習のブームも盛んになった。1973年上海日本語ラジオ講座が開講、1975年北京日本語ラジオ講座開講、その後大連などの都市においても日本語ラジオ講座が相次いで開講された。上海人民出版社『日語学習』（1976）、商務印書館『日語学習』（1979）、対外

貿易大学『日語学習与研究』(1979) などのような雑誌も相次いで創刊された。

1982 年 2 月、中国日語教学研究会が成立。これにより、中国における日本語研究が新しい発展期に入ったと思われる。学会が成立して今日まで 40 数年になるが、歴代会長の下、中国の日本研究機関と研究者が結集し、中国の日本語研究及び日本語教育の発展をずっと牽引してきた。

1.2　日本語研究界の基本構成

中国日語教学研究会は、中国における日本研究関係の最大の学会である。学会は団体会員制を実施し、およそ 350 の大学の日本語学部が会員になっている。

地方分会：大連分会、上海分会、江蘇分会、河南分会、華南分会、貴州分会、山東分会、浙皖贛分会、河北分会、遼沈分会、西北分会、湖北分会、黒竜江分会、湖南分会など。

中国日語教学研究会は、全体の年次大会のほかに、各地方分会はまた年次大会や非定期的なシンポジウムを開催し、全国各大学の日本語教師に、日本語研究や日本文学研究のプラットフォームを提供している。そのほかに、以下のような語学研究の学会もある。

漢日対比語言学研究 (協作) 会 (2009 年成立)、日語偏誤与日語教学学会 (2014 年成立)。

ほかには、各大学に付設されている研究所や研究センターも日本語研究界の基本構成の一部を担っている。『中国的日本研究 (1997)』(北京日本学研究センター・中国社会科学院日本研究所編)『中国的日本研究 (1997—2009)』(南開大学日本研究院編) の調査によれば、全国各大学付設の日本研究関連の研究所はおよそ 48 あり、その中で日本語研究や日本語教育研究を研究内容として設定しているものは 20 を数える。

2. 現代における日本語研究の動向

2.1　国家社会科学基金プロジェクト取得成果から見た日本語研究

学会第二世代と言われる研究者は、個人的な研究はもちろんのこと、国家レベルの研究プロジェクト (所謂「科研費」) をとることで、研究成果を上げることがより重要になってくる。1986 年 5 月国家社会科学基金成立、1991 年 6 月全国哲学社会科学企画事務室成立。この時から、各大学の教師たちは、国からの研究プロジェクトを獲得することに、全力を注いでいる。

日本語研究は、言語学研究の分野に含まれている。

言語学研究分野：中国語研究 (古代中国語、現代中国語、方言)、少数民族言語研究、応用言語学研究 (コンピュータ言語学、コーパス言語学、心理言語学、社会言語学など)、外国語研究 (諸外国語研究、対照研究、パラレルコーパス、翻訳研究、第二言語習得、諸外国語の辞書編纂など)。

1999 年から 2020 年まで、取得されたプロジェクト 100 件の日本語研究プロジェクト

の内訳は、対照研究：42 件（日中対照研究：文法、語彙、輸入語彙、翻訳。日中韓、日中英、内モンゴル語日など)、日本語研究：25 件（文法、語彙、文型、構文、文章、メタファーなど)、日本語教育研究：18 件（教授法、習得、教材、教師発展など)、コーパスの構築：6 件（中日対訳、学習者、翻訳、言語行為、中介語、漢字語彙など)、その他：9 件（多言語辞書、佛教経典、歴史書類翻訳）となっている。

2.2　人材育成から見た日本語研究

20 世紀 80 年代から、中国は多くの留学生を海外に派遣し、日本でも中国人留学生の数が大きく増えた。その中には、博士号を取得し、中国に戻り、中国の日本語研究と日本語教育の分野で活躍する研究者も現れた。その後、中国の大学で、日本語日本文学の博士課程も設けられ、独自に育成された博士課程卒業生の若手研究者も続々と成長してきた。

率先して、日本語日本文学博士課程を設けた大学は、北京大学（1986)、北京外国語大学（1993)、東北師範大学（1998)、上海外国語大学（2000)、吉林大学（2000）である。

後に、日本語日本文学博士課程（二級学科）の設立から外国語外国文学博士課程（一級学科）の設立に変更され、現時点で、全国において、日本語日本文学の博士課程学生を募集できる大学は 42 か所もある。

中日双方の学術交流により、各大学の博士課程の学生は、在学期間中に、それぞれの交流校に留学することができ、彼らは順調に博士号を取得し、大学の教師になり、中国の日本語研究の第一線で活躍している。

一部の博士課程学生のドクター論文のテーマと内容を見てみると、やはり対照研究が最も多い。次に、語彙、構文、表現、コミュニケーション、意味論などの研究も多く見られる。方法論としては、認知言語学や分散形態論など新しい研究理論に基づく研究も見られる。

3. 新たな日本語研究の展開と今後の展望

3.1　データベースの構築から見た日本語研究の展開

『中日対訳コーパスの構築と応用研究』は北京外国語大学北京日本学研究センターが実施した国家社会科学基金研究プロジェクトで、1999 年に立案され、2003 年 7 月に完成した。最終成果は、『中日対訳コーパス』(CDROM）と『中日対訳コーパスの構築と応用研究論文集』である。

『中日対訳コーパス』(CDROM）は、世界初の中日対訳のパラレルコーパスで、中日両言語のデータを 2013 万字収録している。後の言語研究と自然言語処理の必要を考えて、原文と訳文の量と質を重視すると同時に、データ文章の体裁や年代のバランスも考慮さ

れている。収録された文章のうち、最も多いのは小説で、ほかには詩歌、散文、伝記、論文、評論、法律、国会演説などもある。検索ツールとして、アラインメント作業とタグ付けが行われた。

完成されたコーパスがより中日両国の言語研究者のニーズに応えるものとなるように、コーパスの構築作業を進めながら、ある程度検索機能が備えられたデータを利用して、対照研究の試みも実施してみた。そして、中日双方の研究者にも利用していただき、2001年9月と2002年9月、それぞれ二回ほど「中日対訳コーパスを利用した日中対照研究」の国際シンポジウムを開催した。その研究成果は、文法、語彙、翻訳、辞書編纂、通時的研究など多方面に渡り、そして、参加者から言語学や情報処理などの方面から、コーパスの精度や便利さなどについて、貴重なアドバイスをいただいた。

その後、コンピュータの進化に従って、中国国内でも、いろいろな日本語研究や日本語教育に関連するコーパスが開発された。『中国日本語学習者コーパス』(CJLC) 上海外国語大学、『日本語学習者作文コーパス』上海交通大学、『北京日本語学習者縦断コーパス』(B-JAS) 国立国語研究所、北京日本学研究センター、北京師範大学、『湖南大学学習者中間言語コーパス』湖南大学、名古屋大学、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』日語偏誤研究与日語教学研究会などがある。

3.2　今後の課題と展望

以上、中国における日本語研究の発展、日本語研究界の基本構成、そして、国家社会科学基金プロジェクト取得成果から見た日本語研究や人材育成から見た日本語研究、またデータベースの構築から見た日本語研究などの面から、中国における日本語研究の発展を振り返ってみた。

まず、日本以外の国や地域の日本語研究は、その国や地域における日本語教育との関係は密接にあると考えられる。中国における日本語研究も、80年代以降の日本語教育の発展と日本語学習者の増加に大きく関連している

次に、日本の外から日本を見たときには、やはり自国の言語や文化の視点から、比較や対照の観点から研究を進めていくのが、より自然な切り口になる。その意味で、日本以外のほかの国と地域における研究者との連携も非常に重要になってくる。

今後の課題：若い世代は、より広く世界各国の日本語研究者との連携と交流を求めること。国内では、日本語研究以外の語学研究者（中国語、英語や諸外国語）との交流を強めること。

立ちはだかっている二大壁：いわゆるCSSCI研究雑誌発表と科研費の取得。AI（人工知能）からの挑戦。

チャレンジとチャンスはいつも共存しているので、勇気を奮って邁進していきましょう。

引用参考文献一覧

許海華（2008）近代中国日語教育之発端―同文館東文館《日語学习与研究》1

徐一平（1997）中国的日語研究与日語教育《日語学习与研究》4

徐一平・曹大峰（2002）《中日対訳語料庫的研制与応用研究論文集》外語教学与研究出版社

戴炜棟・胡文仲（2009）《中国外語教育発展研究（1949―2009》上海外語教育出版社

田中祐輔（2015）『現代中国の日本語教育史』国書刊行会

駱為竜・徐一平主編（1997）《中国的日本研究》社会科学文献出版社

韓国における日本語学
――その歴史的な歩みと展開――

曺英南（高麗大学）

1. 韓国における日本語学の歩み

1948 年に大韓民国が成立してから 20 年近くの断絶期間を経て、1965 年に日韓基本条約が結ばれて日本と韓国、両国間の国交が正常化した。それに続く 1970 年代には、政治・経済・外交の面で相当な進展も見られた中、いくつかの事件も発生し、両国間に感情的なわだかまりが残ったのもまた事実である。【韓国日本学会 10 年の回顧とその展望】（1983）によると、このような時期に韓国で最初に日本に関連する学会を創立するには相当の決断力が必要であった。1971 年頃、東京に留学していた数名の韓国人の先生が集まり、韓国における日本研究とそのための集まりが必要であるという問題意識が共有され、1973 年 2 月 1 日にソウル大学で【韓国日本学会】が創立する運びとなった。下の表 1 は、日本関連学会の創立と各大学における日語日文学科の設置設立を年表の形で表したものである。

表 1：学会の創立・高等教育機関における日語日文学科の設立

年度	内容
1973 年	韓国日本学会の創立（日本学報 1 号：73 年 8 月、国際学術発表会：74 年 11 月 2 日）
1978 年	韓国日語日文学会の創立
1980 年代	全国の大学に日語日文学科が設置（例外として、61 年：韓国外国語大学、62 年：国際大学(現：西京大学)の夜間部に日本語科、67 年：祥明女子大学、日本語教育専攻を設置） （2024 年度　学科数：大学 137、大学院 36（修士 23／博士 13）
1990 年代	各地域基盤の学会・研究所の創立（2024 年度　政府で認証を受けた学術誌(KCI）学会 12／研究所 7）

2.　現代における研究動向

2.1　1945 年から 1987 年までの日本語学論文

1945 年から 1987 年までの韓国人による「日本語学関連論文」299 本をまとめた李（1988）によると、1945 年以降に日本語を扱った最初の論文は 1955 年の「韓・日両国の語彙比較試考-糞尿語を中心として」（李崇寧）で、1957 年「捷解新語における日本語転写について」（金完鎭）、1962 年「韓・日両国語の比較言語学的考察」（이명성）がそれに続く。1945 年から 1972 年までに発表された論文は 7 本あり、当時はまだ日本語専門学会が存在しなかったた

め、韓国語、言語学、大学の論文集に掲載されていた。

表 2：1945 年から 1987 年までの分野別「日本語学関連論文」：李（1988）より

音声音韻	語彙	文字表記	文法	敬語	文章文体	比較・対照	教育	合計
12	25	3	70	16	1	133	39	299
4.0%	8.4%	1.0%	23.4%	5.3%	0.3%	44.4%	13.0%	100%

両国語の「文法」、「語彙」、「音声音韻」等の分野において「比較・対照」が行われている論文が 44.4%ともっとも多く、それに「文法」23.4%、「教育」13.0%、「語彙」8.4%が続いている。このように、韓国における日本語学は比較・対照の視点の研究から出発しており、現在も同分野の研究は活発である。「音声音韻」は 79 年後半から 80 年代に始まった分野で、日韓比較の音韻研究が多くを占めているという。「語彙」は外来語、慣用語句、漢字語、比喩表現を含めたものであり、純粋な語彙研究以外に比較・対照研究において扱われている。「文法」は日本の学校文法に基づいたものが多く、動詞を中心とした述部に関する研究を筆頭に、助詞研究がそれに続いている。

2.2　日本語専門学会の学術誌 51 年の推移

ここでは韓国で最初に創立された日本語関連の学会から出版された論文を紹介し、韓国日本学会の学術誌『日本学報』（1973 年～2023 年）に掲載されている日本語学の論文 1054 本（全体の論文数 2879 本の 36.6%）の分野やトピックを概観する。

表 3 ：1973 年～2023 年の日本語学の論文数

分野 / 年度	文法	日本語史	教育	社会言語学 語用論	語彙 表現	音声 音韻	通訳 翻訳	文章 文体	文字 表記	その他	合計
73-82	1	5	4		2			1		1	14
83-92	46	17	8	4	7	6			1	2	91
93-02	**96**	**74**	**62**	**25**	**23**	**3**		**2**		**3**	**288**
03-12	**142**	**113**	**73**	**63**	**37**	**7**	**7**			**3**	**445**
13-22	49	39	49	35	15	6	10	1	1	1	206
23	4	1	2	1	2						10
合計	338	249	198	128	86	22	17	4	2	10	1054
	32.1	23.6	18.8	12.1	8.2	2.1	1.6	0.4	0.2	0.9	100

51 年間の日本語学論文の中では「文法」が 32.1%で一番多く、「日本語史」23.6%、「日

本語教育」18.8%、「 社会言語学・語用論 」12.1%、「語彙・表現」8.2%、「音声・音韻」2.1%、「通訳・翻訳」1.6%、「文章・文体」0.4%、「文字・表記」0.2%がそれに続いている。「その他」0.9%にはコーパス言語学・日本文化、日本語研究に関するものが含まれている。以下、時代別に特異な点を述べる。

① 1973 年から 1982 年までの第１期の日本語学論文は 14 本で年１本ほどのペースであるが、「日本語史」と「日本語教育」が多くを占めており、対照言語学的手法が 21%であった。

② 1983 年から 1992 年までの第２期は 91 本で、1984 年に 8 本が出版されたのを皮切りに以後は「文法」、「日本語史」、「日本語教育」、「語彙・表現」、「音声・音韻」、「社会言語学・語用論」、「文字・表記」の順に論文数が飛躍的に増えた。日本語学の細部分野も拡大され、１期にはなかった「音声・音韻」、「社会言語学・語用論」、「文字・表記」の分野が見られ、対照言語学的手法が 18.7%であった。

③ 1993 年から 2002 年までの第３期は 288 本で、政府による大学教員の業績評価制度の導入の影響（李康民 2012）により、第２期に比べ大幅に飛躍した。特に 1993 年の 9 本が、1994 年には 26 本と急激に論文数が増え、その後も 2000 年 35 本、2001 年 49 本、2002 年 55 本という具合に増加の一途を辿った。「文法」が一番多く、「日本語史」、「日本語教育」、「社会言語学・語用論」、「語彙・表現」、「音声・音韻」、「文章・文体」の順である。第 2 期に比べると、4 番目の「語彙」の代わりにこの時期に急激に増えた「社会言語学・語用論」がランク入りしている。

④ 2003 年から 2012 年までの第 4 期は 445 本と、第 3 期よりさらに増加している。1998 年の政府による日本文化開放宣言と 2001 年に中学校で日本語が選択科目として採択されたことの影響により、日本語教師の採用の急増、日本語への関心が高まったことによるものと思われる。細部分野は第３期と同様に「文法」、「日本語史」、「日本語教育」、「社会言語学・語用論」、「語彙・表現」、「音声・音韻」＝「通訳・翻訳」の順であるが、ここでの「通訳・翻訳」分野の出現からは、日韓交流の活発さが影響していると見て取れる

⑤ 2013 年から 2022 年までの第 5 期は 206 本と、成長期の第３期よりも減少しており、その原因の一つには大学院に進学する研究者の減少があると考えられる。学位取得後の大学、研究所への就職口のインフラが十分ではないことがその理由である。公立中等教員採用試験は 2019 年には募集がなく、教育大学院の存続の危機も見られた。国際交流基金の調査によると、2021 年度の韓国人日本語学習者数は 470,334 人で、2009 年度の 964,014 人から半減している。細部分野は「日本語教育」が「文法」と並んで１位を占めており、「日本語史」が 3 位ではあるものの「社会言語学・語用論」と大差はない。「語彙・表現」、「通訳・翻訳」、「音声・音韻」、「文章・文体」＝「文字・表記」が後に続いている。

⑥ 2023 年の状況を見ると、1 年に 10 本の論文が発表されているが、少子化の状況を受け、大学の改革、学科の合併といった事情から、研究者の縮小がさらに進んでいるのではないかと考えられる。

3. 新たな展開と今後の展望

3.1 教育・社会環境の変化がもたらした研究者への影響

最近、韓国では人口知能（AI）時代、融合・複合の人材育成、人文系の生き残りのための対策（学科の併合、学齢期人口の低下等）といった言葉が叫ばれている。その対策として高麗大学では AI 時代に対応したスキルの習得を目的として 2022 年から「デジタル人文学入門」を必須科目としている。このような風潮のため、大学ではデジタル関連の無料講座を受講できる環境が整えられ、 学会では「デジタルヒューマニティーと日本研究」という大会テーマが企画されている（韓国日本学会 2025 年２月)。要は、日本語学のみならず、日本文学と日本学においても教育や研究に AI やコーパスの利用が目立ってきている。一方、国家レベルでは知能情報産業のインフラの助成事業として進められてきた AI 用学習用データ（14 分野）が公開されている。日本語関連のデータでは「韓日の通訳・翻訳朗読体のデータ（2023)」、「韓国語の日本語による翻訳データ（人文学・基礎科学・技術科学)」、「教育用韓国人の日本語音声データ」、「観光地紹介の日本語翻訳データ（2023)」「韓日翻訳コーパス（2021)」があり、これらは対照研究や日本語教育の研究にも活用できると考えられる。

3.2 国際共同研究と今後の展望

韓国の学会における国際共同研究は、海外から講演者を招待し、学術大会のテーマのもとに不定期的に本の出版を企画する傾向がある。直近では『情報化時代の日本語学・日本語教育』(韓国日本学会 2021 年刊行)、『デジタルヒューマニティーと日本研究』(2025 年発行予定) がある。最近の大学院生の動向からは、中国語学科との融合論文のプロジェクト企画や、中国人留学生が増えていることから対照分析を中国語まで含めたケースが多く見られている。また、メディアの発達により、対照言語学の手法が新たな分析資料でアプローチされるケースが多く見られる。YouTube の K-POP の映像に対する書き込みから日韓の肯定的表現を分析したり、ディズニーアニメの視覚障害者のための音声情報から日韓の視点を分析したり、Chat GPT のような AI と日本語母語話者の断りメールを比較分析したり等、対照・比較研究の面でさまざまな可能性が期待できる。

引用参考文献一覧

李康民（2012)「한국에서의 일본어학 연구-현황과 과제-」『日本学報』91 韓国日本学会

李鳳姬（1988)「韓國에 있어서의 日本語學」『日本学報』20 韓国日本学

ベトナムの日本語学
――過去・現在・今後の展望――

ダオ・ティ・ガア・ミー（ハノイ国家大学）

1. ベトナムの日本語学の歩み

ベトナムと日本の貿易交流は16世紀から始まり、おそらくその時代から日本語がベトナムで学習されたと考えられる。しかし日本語クラスが正式に開設されたのは1940年代、日本軍のベトナム進駐時からである。当時、日本人と取引を行う一部のエリートや華僑・フランス人には日本語学習のニーズがあり、日本の駐在施設で小規模な日本語クラスが開かれた。1961年にハノイ貿易大学で日本語講座が開始され、1973年の日越国交樹立という記念すべき年にはハノイ大学で日本語教育が開始された。しかし、日本語が高等教育機関で教えられたとはいえ、当時は学習者が少なく、仕事の機会も限られていた。

1986年にベトナムでドイモイ政策導入により、外国との関係が活発化し、1992年に日本の対ベトナムの経済協力再開により，日本とベトナムの関係が一層改善されたことを受け，北部のハノイ国家大学外国語大学と南部のホーチミン市国家大学人文社会科学大学で日本語教育が開始された。2009年の日越経済連携協定（EPA）の締結を機に、日越間の交流が増え、日本語ができる人材へのニーズが高まった。そのため、通訳，翻訳者のみならず，日本語が出来るエンジニアや他分野の専門家の養成も求められるようになり，日本語教育機関の範囲が拡大された。

2023年、日越両政府の合意により，中等教育機関で日本語が課外授業として導入された。また国民の外国語能力を引き上げるという外国語教育改革を目的に「2008～2020 年期国家教育システムにおける外国語教育・学習プロジェクト」が実施された。このプロジェクトの一環として，2016年から小学校で日本語教育が始まり、10年間の学習で日本語レベルN3相当の能力が身につくことが目標とされた。それと同時に，技能実習制度・EPAなど，日本への受け入れ人材の育成のための日本語教育ニーズも増加している。両国の関係の深化により，両国の相互理解・貿易・経済・友好関係促進の基盤となる日本語研究への意欲も増し，日本語ブームを招いた。Covid-19 パンデミック後、ベトナムでの日本語学習者数は少し減少したが、国際交流基金の2021年度の調査では、ベトナム全土に629か所の日本語教育機関があり，学習者数は約169582人で，世界6位を維持している。

2. 現代における研究動向

グエン・タイン・タムら（2015）によれば、日本語及び日本語教育に関する研究テーマは初期（1970 年代～ 1990 年代前半)、1990 年代後半～ 2000 年代、そして2000年以降の3つの時期に分類される。初期段階では教育現場で直面する課題（漢字・音声・文法・

作文等）が主要なテーマとして取り扱われた。1990 年代後半から 2000 年代にかけては、四技能テキスト編集や辞典編集などの研究が中心であり、2000 年以降は、学問的なテキストの編集や学術論文の作成、発表が研究の主流となっている。

2000 年以前は、ベトナムにおいて日本語研究が少数であり、日本語がまだ馴染みのない言語であった。研究といっても、日本語の参考文献をもとに文法、文字語彙、漢字の特徴を簡単にまとめる程度であった。しかし、2000 年代に入ると日越友好関係の緊密化とともに日系企業のベトナム進出が進み、日本語ができる人材の需要が急増した。それに伴い、ベトナムにおける日本語及び日本研究が活発化し、主要大学に日本語学科が次々に設立され、国費留学生の日本の留学が増加した。また各大学で開催される国際シンポジウムでの研究成果の発表も盛んになった。

2000 年代からの研究テーマを①「日本語を対象に行われる言語学の研究」②「個別研究分野」③「応用言語学の研究」と 3 つの分野に分類できるが、総じて③の研究が圧倒的に多い。また①の研究は、ベトナム人研究者は少なく、その多くは 60 代、70 代である。

2.1　日本語を対象に行われる言語学の研究

この分野の研究にはさらに、日本語の漢字、漢語、音声音韻、文法、語彙、慣用句と下位分類できる。

日本語の漢字、漢語には「日本語の漢字と漢字研究の歴史」「漢日語と漢越語における訓読みについて」「日本語の漢語の意味・用法とベトナム人日本語学習者の日本語漢語の学習」などが含まれる。音声音韻では「日本語の拍の特徴」「現代日本語の音声」「日本語の音韻の変遷とベトナム人学習者の留意すべき点」などが研究されている。文法では「日本語とベトナム語における使役表現の対照研究：他動詞、テモラウ、ヨウニイウとの関連性」「日本語における英語由来の外来語の日本語化―音声側面から」「日本語における時制とベトナム語との対照」、「日本語とベトナム語における他動詞、自動詞の対照」などが研究テーマである。語彙では「日本語における位置及び方向を示す語」、「通訳翻訳の教育・学習を目的に日本語とベトナム語の代名詞の対照」などの研究が行われている。慣用句は「日本語の慣用句と慣用句論」「日本語慣用句における動詞の特徴」等の研究がある。

2.2　個別研究分野の研究

これらの研究は「日本語とベトナム語における挨拶表現」「日本語の授受表現―ベトナム語との対照」などの社会言語学の研究がある。また「日本語とベトナム語における『喜び』と『怒り』の概念の対照」「日本語における色彩語の文化的概念化」など、認知言語学に分類できる研究が行われている。待遇表現・ポライトネスの研究は「日本語とベトナム語におけるポライトネス表現の対照」「日本語の教科書における依頼表現の一考察」「日越コミュニケーションにおける相槌の使用；ポライトネス理論の視点から」「ベトナム人日本語学習者による断りにおける語用的転移」ポライトネスの表現である日本語の敬語と

ベトナム語との対照」などが挙げられる。そして「日本語における男女の言葉の違いーベトナム語との対照」といったジェンダーに関する研究もある。

2.3　応用言語学の研究（日本語教育に関する研究）

ベトナムにおける日本語教育は1960年代から本格的に始まったが2000年まではほとんど研究がなされていなかった。2000年以降の研究テーマは、Covid-19流行前（2000年～2019年）とCovid-19流行後（2019年～現在）の2つの段階に分けられる。

2.3.1　2000年～2019年

この期間、ベトナム国内で、日本語教師と日本語学習者の数が増加し、日本語教育が盛んになった。ベトナムの高等日本語教育機関と日本の大学の間で多くの連携事業が行われ、初等及び中等教育機関においても日本語教育が導入された。これにより、日本語教育に関する研究が飛躍的に増加し、その研究テーマも多岐にわたる。

言語習得：ベトナム人母語話者にとって漢越語知識が日本語学習にどの程度影響を与えるか、日本語のオノマトペの習得、ベトナム人日本語学習者の漢字語彙習得などが研究されている。

学習者の誤用分析・言語の転移：漢字語彙の誤用、自動詞・他動詞の誤用分析などが行われている。

学習ストラテジー・指導法・教授法：漢越語と漢語の関連性を基にした漢字学習法や学習者主体の指導法の実践などをテーマとした研究が行われている。

教室活動の研究・実践研究：ベトナム語を母語とする日本語学習者の言語使用実態や教室活動での使用言語の影響が研究されている。

教師／学習者の信念／ビリーフ：教師への期待や教師国籍の関係性、元技能実習生日本語教師の教育観に関する研究がある。

教材／カリキュラム開発：動画教材作成や異文化間の協働学習に基づく授業開発などが行われている。

産学連携／国際連携の可能性／成果報告：日系企業の大学教育への参加や国際共同教育プログラムの開発、理系学部における日本語教育導入プロジェクトの成果などの研究が進められている。

通訳・翻訳・機械翻訳：日本語ベトナム語の機械翻訳技術や自動翻訳システムの開発などが行われる。

2.3.2　2019年～現在

Covid-19の流行を契機に教育機関はIT、ICTの重要性を再認識した。それに伴い、オンライン授業支援システム開発やICTを活用した教授法の開発が進んだ。この時期の研究テーマはICT、オンライン教育、デジタル化、自動評価、アプリケーションなどに関連するキーワードが目立つ。

2021 年にベトナム日本語・日本語教育学会が主催した国際シンポジウではオンライン教材・デジタル教材の利用や高等教育における ICT の活用などがテーマとして取り上げられた。また、2023 年に Van Lang 大学で開催されたシンポジウムでは、CEFR 準拠のオンライン教師研修の可能性やコロナ時代の体験をもとにした国際交流活動の交流方法の提案、自動評価ツールの開発、自動採点システムの精度、バーチャル交流を通じる持続的な交友関係の構築など、多岐にわたる研究が発表された。

3. 新たな展開と今後の展望

デジタルトランスフォーメーション（DX）の流れの中で、ベトナムの各大学はオンラインシステム・ICT・AI の導入を進め、教育やマネジメントの質的向上を目指している。この背景のもと、日本語学においても新たな展開が見られる。多くの大学が日本の大学や研究所と連携し、協働学習プログラムを展開し、国際共同研究が活発化している。

日本語ができる IT 人材や技術系の人材のニーズが日本においてもベトナムにおいても高まっている。そのため、今後日本語教育機関と IT・技術系企業や大学との連携がさらに強化されると考えられる。

Covid-19 及び円安の影響で、近年ベトナム人日本語学習者の増加率が低下し、日本語学習への熱意が若干減少している。日本語教育の再活発化を図るためには魅力的な教育方法や効果的な日本語教育政策の導入が必要だと思われる。

引用参考文献一覧

グェン タイン タム・グイェン チ ツオン バン・マイ　ゲェン　ゴック（2015）『ベトナムにおける日本語教育と日本研究の動き』日越交流における歴史，社会，文化の諸課題シンポジウム（P.249-P.258）

Cao Le Dung Chi(2017)『ベトナムの外国語教育政策と日本語教育の展望』大阪大学博士論文

松田真希子（2017）『ベトナム人のための日本語・日本語教育研究－今後の展望と課題－』ハノイ国家大学外国語大学主催国際シンポジウム「ベトナムにおける日本研究と日本語教育―グローバル人材養成のための連携の可能性をめぐって」での基調講演

アメリカにおける日本語の言語学

ポリー・ザトラウスキー（ミネソタ大学）

1. アメリカにおける日本語の言語学の歩み

アメリカでの日本語の言語学がいつ頃，どのような背景から始まり，どのように発展してきたかを歴史的に概観する。日本語の言語学の歩みを図 1「80 年間のアメリカにおける日本語の言語学者の地理と所属との関係」で示す。大文字で記す 14 人は、アメリカの日本語の言語学の基礎を作った初代の教員である。日本人の教員は西海岸と東海岸に 3 人ずつで，アメリカ人（つまりノンネイティブ）の教員は東に集まっており，少し多いが，現在は日本人の教員は約 6 割と多くなっている。初代の女性教員は西の赤塚紀子と東のエレノア・ハーツ・ジョーデンだけであったが，現在は女性が約 6 割を占めている。初代 14 人の教員の内 12 人は亡くなり，後の 2 人、牧野成一と久野暲は退官している。

図 1 の左上の初代のアンドリュー・ネルソン（1892-1975）は，宣教師で外国に移り，教員ではなかったが，ワシントン大学から名誉博士号を授与され，言語学に基づく日本語の漢英辞典を作ったことで大きな影響を与えている。次に東海岸にあるイェール大学では構造主義で有名なレナード・ブルームフィルドの弟子のバーナード・ブロック（1907-1965）が挙げられる。ブロックは日本に滞在したことはないが，日本人に質問しながら日本語の形態，統語，語彙，音韻を明確にした。さらにブロックの下で現代口語日本語の統語論でジョーデン（1920-2009）が，日本語の形態音素論でサミュエル・マーティン（1924-2009）が博士号を取得した。

ジョーデンはアメリカの日本語の言語学の研究にかなり大きな影響を与えているため，特に取り上げたい。博士号取得後，駐日アメリカ合衆国大使館の日本語教育課程とアメリカ合衆国国務省の外務省宿院局（FSI）での勤務を経て，1969 年からコーネル大学の言語学の教員になった。1978〜1984 年はアメリカの日本語教育学会の会長になり，日本語のネイティブだから日本語教育ができるわけではなく，日本語の言語学の基盤がなければよい教員にはなれないと強く主張した。その後言語学に基づいて日本語を教える教員を養成するために日本語の言語学を研究する教員が増えた。さらに日本語のように言語も文化も英語から遠く，アメリカ人にとって習得難易度が高い言語の運用能力を身につけるためには従来の言語学のように文を場面から切り離して分析するのではなく，言語行動（依頼，異なる意見の述べ方，勧誘等の行動）の展開や社会的な要素（性，年齢，肩書，親しさ）を含め考察する語用論，会話分析，社会言語学の分析が必要となった。

初代の教員からの流れがいくつかある。以下退官した教員を＊で示す。イェール大学

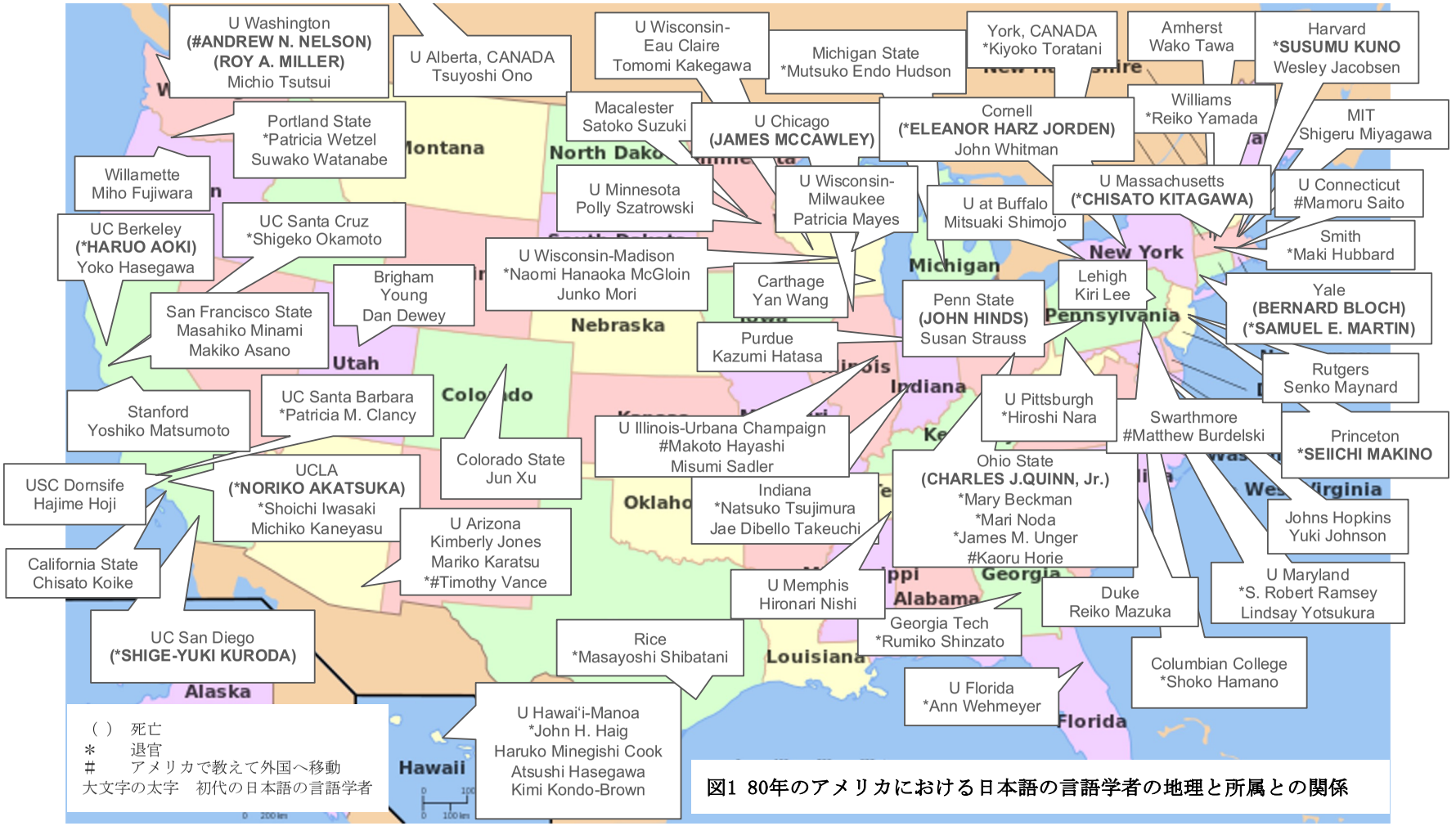


図1 80年のアメリカにおける日本語の言語学者の地理と所属との関係

を源として，コーネル大学のジョーデンの指導で博士号を取得した敬語が専門の＊パトリシア・ウェッツエル,「ノダ」とパーフォーマンス理論を取り入れた言語習得の＊野田眞理，否定の＊山田れいこ，現役の会話分析のポリー・ザトラウスキーの流れと，イェール大学のマーティンの下で学んだ日本語・韓国語の歴史言語学の＊ジェームス・アンガーと＊ロバート・ラムゼイーの流れがある。また，MIT のチョムスキーの下で博士を取得した，初代のシンタックスの久野暲と黒田成幸，日本語のアクセント体系のジェームズ・マコーレーの流れもある。久野は現役のジョン・ホイットマン，マコーレーは，音韻専攻の＊ティモシー・バンスと現役のテンス・アスペクトのウェスリー・ヤコブセンの指導教官であった。また，UC バークレーで博士号を取得した初代の青木晴夫（1930-2022）はそこで現役のテ節の長谷川葉子と連体修飾の松本善子の評価委員会に入っていた。初代の，アマーストのシンタックス専攻の北川千里（1932-2022）と UCLA の条件節の赤塚（1937-2016）はミシガン大学の言語学科で博士号を取得した。北川は＊宮川繁の MIT の評価委員会の委員の一人であった。赤塚は現役の談話分析のスーザン・ストラウスと会話分析の小池千里の博士の指導教官であったほか，＊岩崎勝一と現役のヤコブセンの評価委員であった。ジョン・ハインズ（1943−1994）は指導教官ではなかったが，＊岩崎勝一に談話分析を指導しており，古文の文法のチャールズ・クイン（1948-2023）の教え子は現役のリンゼイ四蔵である。以下に詳しく説明するアンケートに答えた教員に限っていえば，日本語の言語学での博士号授与数は（アメリカで就職せず，日本に帰った教え子は数に入っていない），1 人当たり平均 0.8 人であるが，マグロイン花岡直美は 5 人，ヤコブセンとザトラウスキーはそれぞれ 3 人である。

2. 現代における研究動向

現代における研究動向についてはインターネットで調べ，アメリカで日本語の言語学を研究している准教授と教授約 60 人にアンケートを送って情報を集めた。アンケートの項目は名前（ローマ字と日本語），現在までの所属と肩書の要約，博士号の大学名・年度・学位，博士論文の題名，指導教官と評価委員の名前，専攻（5 つまで），助言者（mentor，5 人まで），主な出版物（5 つまで），現在テニュア・トラックのポストにいる教え子の名前・所属・肩書，個人自身のデータと公のデータ，ＡＩのプロジェクト，自身の研究はどのように変わってきたか，今後のアメリカにおける日本語の言語学はどうなると思うかであった。アンケートの回収率は約 3 割（現役の教員 14 人，退官した教員 6 人；教授 14 人，准教授 6 人）だけであった。そのため，アメリカの事情を正確に反映しているかどうかには自信がないことを前もって断っておきたい。

日本語の言語学者に指導を受けたかどうかについては，指導教官からは 8 人，評価委員会の委員からは 11 人，どちらもないのは 3 人であった（複数回答可）。日本語の言語学以外の指導教官の専攻は一般言語学が多く，人類学，言語の習得，応用言語学もあった。アンケートの回答にある研究の専攻には約 45 種類あって，特に多いのが日本語の言語学（11 人），

談話分析／会話分析（11 人），社会言語学，語用論，シンタックス・文法（それぞれ 6 人），歴史言語学（4 人）であった。シンタックス・文法は構文文法，RRG，創発的文法，文法の再定義も含め，様々な観点が見られた。

出版物で主に取り上げたテーマは，**社会言語学・語用論**（社会化，スピーチスタイル，コードスイッチング，ポライトネス，フェース，敬語，女性語），**文法形式の使用**（接続表現，指示代名詞，ゼロ代名詞，ゼロの前項，テ節，動詞のテンスとアスペクト，可能形，否定，否定疑問文，連体修飾，「テイル」「ノデス」，「シ」，「テイウ」，終助詞「ネ」），**シンタックス**（項構造, 語順, 格と項構造, 一致），**言語的現象**（主観性, 他動詞性, 定型化（formulaicity），省略，情報の顕著性），**談話分析・会話分析**（ストーリーテリング，話題，提題化，食の分類化，談話の構造分析，評価，問題提起と解決，問い合わせの交渉と確認）であり，**マルティモダリティ（multi-modality）**（顔文字，視線，指示的な身ぶり，言語と食べ物），**音韻論と音声学**（ライマンの法則，熟語のアクセント），**文字**(writing)，**オノマトペ**，**方言・歴史言語学**（日本語・韓国語の歴史，京都方言のアクセントの歴史），**翻訳**等も見られた。考察の資料は自然談話, 独話, ソーシャルメディア, 料理番組, 試食会, ビジネスの電話の会話, 高齢者の会話等，多岐にわたっていた。

3. 新たな展開と今後の展望

データベース・コーパスに関してはアンケートで個人のものと公のものの別に聞いたが，個人で収集した資料は，録音（3），録音と録画（12），いずれか示していない（9），書き言葉（5）で，1 人平均 1.5 個，文字化資料も付いている。話し言葉は，夕食の食卓，職場，インタビュー，学生と先生の会話，地震，ミサイルの誤報，COVID-19 の時の会話，介護付き生活施設での会話，低年齢・中年齢・高年齢の女性の会話，友達同士の会話，試食会，ビジネスの電話，子供と介護者の継承語による会話，書き言葉はアニメの要約であった。アメリカの公の日本語のコーパスとしてカーネギーメロン大学の Brian MacWhinney の TalkBank にある CallFriend と Sakura Corpus，ペンシルバニア大学の Data Consortium の CALLHOME のコーパスが挙げられる。AI に関しては，2 名からの回答に留まるが，語学教育に書き言葉で練習させるものと TripAdvisor の Review で話題を識別するプロジェクトがあった。今後の日本語の言語学はどうなるかに対するアンケートの回答をまとめると，普遍性と理論より，今まであまり取り上げなかった人（高齢者等）も含めた，様々なメディアや自然な会話／ディスコースにおける言語と人間の体験との関係（アイデンティティ，認知，人間関係等），言語の変化，マルティモダリティを含めた相互作用のパターンを考察する必要がある。さらに課題として，アメリカにおける日本語の言語学の教員は日本語教育限定のポストにいたり，言語学の学科に属しても日本語を勉強したことがない学生に教えたりすることが多い。日本語能力が高い学生に日本語の言語学が教えられるような環境構築が切に望まれる。

フランスにおける日本語学

ジャン・バザンテ（フランス国立東洋言語文化学院）

本発表では、19 世紀半ばから現代までのフランスにおける日本語学の推移を簡単に紹介する。この 150 年を超える長い期間を各時期に細分化し、それらの言語学的思考と研究対象の観点から最も代表的な特徴を述べることによって、日本語学の発展のダイナミクスを伝えることを目指す。

1. 第 1 期：日本語学の誕生　(1825-1886)

フランスにおける日本語学の誕生は、19 世紀前半ごろから漢学者たちの推進によって進められた。その時、『日本文典』をはじめ、宣教師による文法書の仏訳やシーボルトが日本から持ち帰った書物から構築された『日本文献目録』が重要な情報源となった。当時の主な関心事は日本語の文字のいわゆる「解読」であり、1823 年に設立されたばかりのアジア協会がその目標とした。1863 年に、現在の「フランス国立東洋言語文化学院」（通称 Inalco）の前身であった「皇室特別東洋言語学校」で、若きオリエンタリストのレオン・ド・ロニー（Léon de Rosny, 1837-1914）によって日本語の教育が開始され、これにより日本学は独立した分野として誕生した。当初、日本語教育を目的として、まず文法書が編纂された。ロニーの主な業績は日本語の文法記述と漢字研究であったが、これは口語からかけ離れた文体の文法であったのみならず、日本語は古代ギリシャ・ローマ言語の枠組みで記述されたものであった。従って、これらの研究は、学術的な価値よりもむしろ歴史的な視点から興味深いと言える。

2. 第 2 期：辞書編纂と文法書の時代　(1886-1914)

この試行錯誤の時期に続いて第一次世界大戦まで、口語文法書や辞書の編纂が盛んに行われた時期が訪れた。これらの文献の多くは、パリ外国宣教会の宣教師によって編纂された。1888 年から 1905 年の間に、仏和辞典 4 冊と和仏辞典 3 冊の合計 7 冊の対訳辞書が出版された（Garnier 1999）。その中で特筆すべきは、1904 年にジャン＝マリ・ルマレシャル(Jean-Marie Lemaréchal)によって発行された大規模な和仏辞典である。ルマレシャルは日本に 30 年以上滞在した後にこの辞典を出版し、注目を浴びた。この辞典には多数の図版が含まれ、そしてヘボン式ローマ字表記が採用されていることで注目を集めた。また、1905 年にはエミール・ラゲ(Émile Raguet)によって同様の仏和辞典が刊行され、後にマルタン(Jean-Marie Martin)によって再出版された。この辞典は、日本人を対象とした多くの辞典とは異なり、日本語の単語を漢字ではなくローマ字で掲載している。

なお、1899 年から 1907 年の間に、5 つの口語文法書が出版された。そのうち、2 冊（E.

ラゲ、C. バレ）は日本の出版社三才社から出版された。これらの文法書の記述方法は、アストンとチェンバレンの研究に触発されたものであり、以前の文法書とは一線を画している。いわゆる折衷文法の影響も大きかった。当時の研究者は、日本語を無理にグレコローマン言語の枠組みに当てはめようとする方法が不適切であることを認識し、より適切なアプローチの必要性を感じていた。この時期の文法書は、日本語の特異性を明確に示し、その一貫した記述を試みたことで、かなりの進歩を遂げた。明治時代の軍事や技術の交流とともに、専門用語の日仏辞書の誕生も見られた。たとえば、「法律、政治経済、行政の用語」や「軍事、海軍、馬術の用語」、「日本の地理と行政の用語」などが挙げられる。また、1912 年には日仏軍事用語辞典も出版された（Renondeau, 1912）。ほかには、農民のことわざや俚諺に関する研究を通じて、日本人の言語生活に対する関心も見られた。

3. 第 3 期：戦間期

戦間期には大きな発展は見られなかったが、1939 年に発行されたジョルジュ・セスラン（G. Cesselin）による『日仏辞典』は特筆すべきものである。2365 ページにも及ぶこの壮大な辞典は他に類を見ないものである。2006 年には、すずかわ書店から復興版が出された。

4. 第 4 期：シャルル・アグノエルの活躍期間

戦後から 1960 年～1970 年代にかけて、日本語学に関する研究はシャルル・アグノエル（Charles Haguenauer）が中心的な役割を果たした。アグノエルは、日本語、中国語、マレー語、サンスクリット語、インド研究、民族学、社会学の教育を受けた幅広い学識者であった。言語学はアントワーヌ・メイエ（Antoine Meillet）に師事した。

彼は 1924 年から 1932 年まで、ポール・クローデル（Paul Claudel）によって開設された東京フランス文化学院の最初の奨学生として日本に滞在した。戦後、彼は国立東洋言語文化学院で日本語の教授職を務めた。1951 年の著書 Morphologie du japonais moderne [現代日本語の姿]で、日本語の現代的な記述に影響を与えた。彼は、また、歴史言語学研究に精進し、1956 年の Origines de la civilisation japonaise [日本文化の起源]、そして、1976 年には、Nouvelles recherches comparées sur le japonais et les langues altaïques [日本語とアルタイ語の新しい比較研究]で、日本語とアルタイ諸語を比較している。彼は、日本の古典文学の著名な翻訳家であったルネ・シフェール（René Siefffert）、女流歴史家のフランシヌ・エライ（Francine Hérail）、文学者のジャン・ジャックオリガス(Jean Jacques Origas)、古典語の研究家のジャクリーヌ・ピジョー（Jacqueline Pigeot)など、20 世紀末の日本学を主導した学者を育成した。

5. 第 5 期：画期的な 10 年間

1970 年代には、日本語教育は大学および中等教育において著しい発展を見せた。ユベール・マエス(Hubert Maës)の活躍により、日本語の言語学研究の本格的な幕開けともなった。

ユベール・マエスは言語学者としての教育を受け、マルティネの弟子として自認している。1960 年代には、早稲田大学での招聘研究者として、そして都立大学や東京外国大学での派遣教師として数年日本で過ごす。1970 年には、『現代日本語におけるテンスとアスペクト』と題した博士論文を提出し、パリ第 7 大学で初めての日本語言語学の講義を担当した。彼は、日本独自の言語学的伝統の存在を明らかにし、その独創性を強調し、その研究がまた一般言語学にも多くの示唆を提供できることを主張することに尽力した。

彼は自身の周りに研究者グループを結集し、1975 年から 1986 年の間に 9 巻が刊行された Travaux du groupe de linguistique [言語学グループの研究]と題する雑誌に彼らの研究を発表した。第 3 巻は機能主義理論に基づいた標準日本語の文法記述である。第 5 巻は、金田一春彦との共著による日本語の音韻論の紹介である。この時代の研究焦点は主に統語論であった。研究の結果、マエスはフランス語の標準日本語用語のリストを提案した。マエス氏は1976年に早逝したが、彼のお陰でフランスでの日本語言語学研究は軌道に乗っていた。他に、アンドレ・ヴロダチェック(André Wlodarczyk)やモーリス・コヤウ（Maurice Coyaud）という言語学者も活躍し始め、彼らはそれぞれ動詞句の構造や名詞句の機能に研究を進めた。このように、70 年代は言語学の研究にとって非常に豊かな十年であった。

6. 第 6 期：80 年代から情報時代まで

80 年代から、日本語学は日本学の中で独立した分野として確立され、同時に日本語の現象や記述も一般言語学に認められるようになった。パリ第 7 大学にて A.クリオリ（Antoine Culioli）の指導の下、留学してきた日本人研究者も、この動きに参加した。一般言語学の雑誌である Language [言語]などが日本語に関する特集号を発行し、また Recherches en linguistiques japonaises[日本語言語学研究]のような新しい雑誌も登場した。

研究が盛んで、多岐にわたる分野へと広がっている。大局的な視点から専門的な研究への移行が進んでいる。フォネティックスとフォノロジーの分野では、ローランス・ラブリューヌ(Laurence Labrune)による歴史的フォノロジーの研究が特筆される。また、文字や文字システム、言語の歴史、古典言語（ジャクリーヌ・ピジョ）の研究が進展している。さらに、翻訳研究や自然言語処理、専門用語のレクシコンなども重要な分野である。言語現象の記述に焦点を当てた言語研究領域が広く取り上げられており、その中には形態論、形態構文論、意味論も含まれている。

フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)では、1988 年からイレーヌ・タンバ（Irène Tamba）が日本語言語学のセミナーを主催し、多くの弟子を育成した。この学校は日本語言語学の中心的な研究センターとなった。彼女が 2013 年に引退した後にアレクサンダー・ヴォビン(Alexander Vovin)が、彼女の後任として継承した。

7. 最近の動向

最後に、この 10 年間を特徴づける動向と主な研究テーマの紹介で本発表を締めくくる。

まず、日本語言語学と日本語教育のコースが各大学のカリキュラムで普及し、現在、フランスでは約 30 人の研究者がいくつかの研究機関で活躍している。その間、日本の研究者を含めた共同プロジェクトが増える傾向を見せている。研究テーマにおいて、音韻学者や音声学者のグループが活発な研究活動を展開している一方で、琉球諸語の類型論やタイポロジーの研究も成果をあげている。同様に、方言、言語コーパス、語用論、そして社会言語学、特にポライトネスに関する研究も目立つ。

学術論文において、西洋の言語学的思考の支配的な立場が検討され、日本語の言語現象を再考する中で、いくつかの概念根拠が問われている傾向が観察される。

引用参考文献一覧

FRANK, Bernard (1979) « La japonologie – Histoire et définition d'une approche » in Les études japonaises en France (actes du colloque), Paris.

GARNIER, Catherine (1999) « La linguistique japonaise en France depuis 1825 », Cipango N°8, Paris : Publications langues'O : 259-283.

LABRUNE,Laurence (à paraître) « Un regard réflexif sur les thèses de linguistique et de didactique du japonais soutenues en France (1902 – 2023) », Japon Pluriel, Paris, SFEJ.

MAËS, Hubert (1975), La linguistique japonaise en France, Travaux du groupe de linguistique japonaise vol.2., Université Paris VII.

デロワ中村・弥生(2020)“海外における日本語研究―欧米語圏を中心に―”『日本語の研究』第 16 巻 2 号、日本語学会

国語国立研究所（1997）日本語文献目録 III ：1091-1146

エジプトの日本語学

――途上段階における学習者世代の変遷――

カラム・ハリール・サーレム（カイロ大学）

1. エジプトの日本語学の歩み

エジプトが日本に最初に接触したのは、1862 年文久遣欧使節がその旅程でスエズ運河と首都カイロを経由しアレキサンドリアから南欧に入った時のことです。

当時のエジプトは、オスマン帝国から半ば独立に成功したムハンマド・アリー朝であり、日本と同様に、欧州列強に対抗すべく中央集権化と近代化を推し進めていた時代です。両国は欧州列強へ抵抗するアジア・アフリカの大国であるという共通点から、互いに大きな関心を持っていたようです。両国の国交は 1922 年、2 月 28 日にイギリスよりエジプト王国が独立し、それを大日本帝国が承認して樹立しました。

しかし 2 つの世界大戦と戦後の混乱期には、両国関係の発展はなく、「日本語学」の始まりはカイロ大学文学部日本語・日本文学科設立を待たなければなりません。

カイロ大学日本語学科の設立は 1974 年、欧米やアジア圏の大学機関に比べると大変遅いスタートですが、アフリカ中東では最古の日本語学科です。

それ故、1950 年以前の「日本語学」は今のところ確認できません。またエジプトの日本語教育は歴史が浅いため、まとまった研究史もまだありません。

そこで本稿では、カイロ大学日本語学科設立当時の卒業生を「第一世代」、第一世代が指導した次世代を「第二世代」と仮に分類し、各世代ごとの特徴と傾向を分析します。

2. 現代における研究動向

1 - 第一世代（1978～1987 年学部卒業）

1-1　カイロ大学日本語学科創設当時に日本人教師にのみ指導を受け、1978～1987 年に学部を卒業した世代です。

この世代の最大の特徴は外国人向けの日本語教育専門家ではなく、中東研究専門家が指導をしていたため、「日本人が日本の基礎教育で学習する国語としての日本語」に大変近い形で日本語を学習していました。

1-2　日本語学科を選ぶ学生は国民的詩人の詩文『ガダ・アルヤーバーン（日本の乙女)』をアラビア語の高校教科書で読み日本を知った志望者が大半でした。この世代の大学院進学者は研究テーマに日本文学をはじめ思想、文化、歴史を選ぶ傾向にあり、エジプト人による日本語学そのものの研究はまだ始まっていません。

これは指導陣のほとんどが中東研究の専門家であり、日本語教育の専門家ではなかった

ために、語学的な理解深化が研究にまでは及ばなかったのではと推測しています。

1-3　この世代輩出の指導教官は、アフマド・ファトフィ（カイロ大学名誉教授)、イサーム・ハムザ（カイロ大学名誉教授)、故アラア・アリ（カイロ大学名誉教授)、カラム・ハリール（カイロ大学名誉教授、ACU 言語翻訳学部副部長)、マーヒル・シェルビーニー（カイロ大学名誉教授)、ハナーン・ラフィーク（カイロ大学名誉教授）です。

2 - 第二世代（1988－1997 年学部卒）

2-1　1990 年からカイロ大学において国際交流基金による日本語教育専門家の派遣が始まり、また第一世代が専任講師として後進の指導を始めました。

日本語教育専門家による効率的な指導、エジプト人講師による円滑なコミュニケーションにより、日本語学習者が急増した世代です。

外国人向けの平易な用語で解説した日本語教授法で日本語文法の指導がエジプトにおける初中級学習者向け学習法のスタンダードとなります。

他に特筆すべき点としては、アラビア語で解説された日本語テキスト『アラブ人のための日本語』[注1]の発行があります。エジプト人との日本人の初の共著であり、他国との共同研究の第一歩となるものでした。

2-2　この世代では、文学よりも言語学を専攻する傾向にあります。日本人の日本語教育専門家常勤により、指導を受けやすいと考える院生が多かったのかもしれません。

実質的な「エジプトにおける日本語学」が始まった世代と推測できるでしょう。

日本語学習者が急増した背景には、指導する側の充実だけでなく、一般社会での日本への関心が急激に膨らんだ背景もあるかと推測します。90 年代には『おしん』が繰り返し放送され、日本は立身出世が可能な豊かな国と一般にはみなされていました。また 90 年代は日本人観光客が大変多く、「日本語は儲かる」というイメージが先行しすぎたためか、日本語学科生の多くが観光ガイド希望でした。

そういった志望動機が主流となり、学習者、学習志望者の多さに比べて日本語教育専門家、日本研究者は少ない世代です。これは学習者の総数が少ないにも関わらず、多くの研究者を輩出した第一世代とは対象的です。

2-3　この世代輩出の指導教官は、アーデル・アミーン（カイロ大学教授、元カイロ大学日本語・日本文学学科長)、ワリード・ファールーク（カイロ大学教授）のみです。

3 - 第三世代（1998－2007 年学部卒）

3-1　第二世代が専任講師として指導側に加わった世代です。

この世代の顕著な出来事は、アイン・シャムス大学言語学部の日本語学科設立です。それに加え、第一世代が准教授に昇格し、シンポジウム開催や専門書出版が始まり、日本語教育と研究がエジプト人主導へと次第に移り変わった時代です。

本格的な共同研究はこの時代でようやく始まります。2005 年には日本人研究者との共著『日本語動詞練習帳』[注2]がエジプトで発行されました。2010 年カイロ大学日本語学科主催シンポジウムでは、発表数 20 のうち日本人研究者との共同発表[注3]が一例だけあり、分野はやはり言語学です。

3-2　しかしながら、大学院生の志望専攻は言語学研究希望が減少し、文学、思想、歴史などのテーマが再び増えます。

文学専攻を主とした第一世代が指導教官を務めるようになり、アラビア語で記された日本文学についての著作や専攻研究が増え、文学部院生だけなく言語学部院生にとっても文学専攻のほうが学位取得論文を書きやすい環境が整ったためと思われます。

このような現状を踏まえると、エジプトの日本語学は専門性を追求する前の、研究のタイトル数を増やす段階なのかもしれません。

3-3　この世代出身で既に指導教官を務める研究者は、ハサン・カマール（カイロ大学教授、現日本語学・日本文学科長）とリーナ・アブディルハミード（カイロ大学准教授、現日本語翻訳学科長）の 2 名です。第一、第二世代に比べると、指導教官になるまでのスピードは格段に早いです。

4 - 第四世代（2008 年学部卒業以降）

4-1　現在カイロ大文学部日本語・日本文学科と日本語翻訳学科のそれぞれで学科長を務める第三世代両名が、専任講師として加わった世代を仮に第四世代と分類します。

4-2　第一世代を指導教官として文学、第二第三世代を指導教官として言語学を専攻する傾向にあり、比率は半々です。第一世代に多かった日本思想は研究者の後続が生まれず、第四世代では現在専攻志望者がいない状況です。

日本語学習者の傾向について、注目すべき時代背景としては 2011 年の革命で、観光産業の安定回復の見込みがなくなったため、ガイド志望の日本語学習者が激減し、日系企業でのチャンスを求めて、日本語学科卒業者がドバイなど湾岸諸国へ流出しました。

入れ替わるように、日本のアニメ、マンガ、あるいはもっと漠然と韓国ドラマや K-pop から日本だけでなく極東アジア文化に興味をもった学習志望者が増えました。

この世代の一部は日本語学科入学前から、アニメ作品などで日本と極東の文化に比較的多く触れているので、第二、第三世代には理解の難しかったアジア独特の多神教的文化を最初から「そういったもの」と受け入れているようにも見えます。

現状、エジプト社会では日本語学科生が日本語を生かすチャンスは極めて少ないにも関わらず、地方国立大学と私立大学の文学部と言語学部で、日本語学科が相次いで新設されています。エジプトでは若年層増加をうけ、高等教育機関の新設増設が急務とされているためで、日本語学だけの現象ではありません。

しかしながら、日本語学科の数が増え、日本文化を最初から受け入れている学習志望者の

増加により、将来の研究者による理解深化と研究テーマの多様化を期待します。

3. 新たな展開と今後の展望

以上のように「エジプトの日本語学」はまだ途上段階にあり、 歴史も短く研究史というものが始まっていません。強いて言えば、今回の発表のために作成したこの原稿が「エジプトにおける日本語学研究」の第一歩となるかもしれません。

今後世代を重ねていき、後世のエジプト人日本語研究者によって、カイロ大学日本語学科設立当時以降の学習指導状況や研究テーマ変遷について、調査研究されることを期待するばかりです。そのためには当時の記録が残るよう、大学間をまたいだ組織作り、学会ならびに学会誌編集部が必要ですが、具体的な準備はいまだ未定です。

しかしながら、後に振り返った時に 2010 年代後半から現在に至る流れは、大きな転換期の中にあるとみなされるかもしれません。

地方国立大と私立大で日本学科設立が相次いでいますが、この設立はエジプト側主導です。1974 年にカイロ大学で設立された時には、日本側から中東諸国との友好関係構築を目的に積極的に行われ、多くの援助を日本側に頼っていたのとは対照的です。

もうひとつの新しい流れは、工学系大学内での日本語学科、日本語コースが求められていることです。日本語研究の側面的な需要が、両国間の友好関係構築から、実務現場で有益な語学教育に次第に変わりつつあります。

だからと言って日本文化理解の意欲が下がった訳ではありません。第四世代は日中韓のポップカルチャーから日本文化に興味をもち、かつインターネットで情報にアクセスしやすい環境にあります。中東人にありがちな異文化への抵抗感が大変低く、この世代がエジプト人主導での日本文学・言語研究で大きく貢献し、他国との共同研究に参加できるレベルにエジプトの日本語学を押し上げられるのではと期待しています。

注 1　『アラブ人のための日本語』シハーブ・ファーリス編、シハーブ・ファーリス、カラム・ハリール、阿部俊之共著、アフラーム新聞社、2000 年。

注 2『日本語動詞練習帳』吉田昌平、小田切由香子、アーデル・アミーン共著、エルアラビーヤ・エルアーラム・エルクトブ出版社、カイロ、2005 年。

注 3「The licensing of phonological empty categories in Arabic and Japanese」吉田昌平、ハナーン・ラフィーク共同発表、カイロ大学文学部日本語・日本文学科創立 35 周年記念シンポジウム『エジプトにおける日本研究―過去、現在、未来』2010 年。

日本語学の 80 年

――理論（音韻・文法・語彙・文字）・日本語史研究――

近藤泰弘（日本語学会会長/青山学院大学名誉教授）

1. 日本語研究の 80 年の歩み―海外との交流の観点を入れて

日本語学会の前身の国語学会は、1944 年に設立された。それまで、日本語を研究する学会としては、1926 年に創立された音声学協会（後に、日本音声学会）、1928 年に創立された東京方言研究会（後に、日本方言学会）、1938 年に創立された日本言語学会などがそれぞれ活発に活動をしていたが、橋本進吉氏の発案により新たに国語学会が創設され、東條操氏が代表者であった日本方言学会もそれに合流して全国規模の大きな学会となったのである。戦後、学会が本格的に活動を開始し、公開講演会、そして学会機関誌刊行、研究会発表会の開催と活動を広げていったわけである。学会当初からの主要コンテンツである、文献学・日本語史の研究と、方言研究は、現在に至るも、日本語学会の非常に大きな部分をなしている。

日本語学会（国語学会）が、日本言語学会と別組織で、独自に日本語研究を行っていることは、日本における日本語研究の重要性から見て当然であるが、そのことは、日本語研究の 80 年の歩みにおいて大きな特徴を形作っている。この後の個別の展望でもわかるように、海外の理論を応用して研究することについては言語学の世界が強く、日本語の言語資料についての研究は、日本語学（国語学）で盛んであるという方向性は、国語学会創設当時から続いていることであり、現在でもその傾向はなくなってはいない。それには、メリットとデメリットがあると言える。メリットとしては、日本語の古典文学研究などと連携して、日本語史の個別事象の研究が深化したことなどがあげられ、デメリットとしては、言語一般の記述の中における日本語研究の位置が不明確になったことなどがある。

もうひとつの日本語学会の特徴としては、創設当時にはあった国語教育関係の研究は、他の国語教育専門の学会に任せることにしていることがあげられる。それに対して、外国人に対する日本語教育については、国立国語研究所が中心となって事業が行われてきた部分があり、その点で、日本語学会でも日本語教育の研究者は多い。なお、国立国語研究所は、1948 年に設立され、日本語学会と非常に密接な関係を持って運営されてきている。日本語学会において方言研究が盛んであることや、近年では、言語コーパスを用いた研究が広く行われるようになったことは、国語研究所における研究動向を抜きには考えられない。

上記のように、日本語学会の世界は、海外の研究との交流という点ではあまり積極的ではなかった点があるが、1980 年代から、徐々に海外との交流ということに焦点があたってきている。1981 年の大会講演会の B・サンジャック氏（ブリティッシュ・コロンビア大学）、1984 年 40 周年記念講演会の S. マーチン氏（エール大学）などが初期のものである。特に大きなものとしては、2004 年の 60 周年記念国際シンポジウム「世界の日本語研究の新たな発

展を求めて」があげられる。ジェニー・トマス（英・ウェールズ大学)、丹波イレーヌ（フランス・社会科学高等研究院)、アンドレイ・ベケシュ（スロベニア・リュブリャーナ大学)、安平鎬（韓国・誠信女子大）の各氏を招いて、それぞれの国における日本語研究の最新のトピックスが紹介された。それまでの、海外の研究の受容というあり方から、研究の交流という形へと大きく変化しつつあったことを示しているが、その後 20 年たった今も、いまだそれは十分とは言えない。本年にいたって、Language in Japan という名称で、国際英文機関誌を刊行したが、これを機にさらに、研究の交流に向けての機運が高まることが期待される。

2. 各分野の 80 年の研究

2.1　音韻

1955 年頃から、学会機関誌『国語学』に、服部四郎の「音韻論」が連載され、欧米で行われていた構造主義的記述言語学の「音韻論」を日本語に適用するひとつの方法を示した。その後も、「二項対立」による音素論の考え方も広く普及していった。言語学の方では、近年は生成音韻論による記述も行われたこともあるが、日本語学の世界では、広く行われたとは言えない。日本語学の方では、橋本進吉の「上代特殊仮名遣い」についての諸研究者の音価推定（有坂秀世『上代音韻攷』1955 等)、金田一春彦らによる日本語アクセントの歴史研究が最大の成果であると言える。

理論的研究としては、アクセントの 2 段階説、アクセント核による記述方法などに特色がある。また、これに付随して、1948 年に服部四郎によって提唱された「モーラ」の考え方もその後の研究に非常に大きな影響を与え続けている。上代特殊仮名遣研究とアクセント研究が、日本語史と方言研究の融合を生んだことも、日本語研究の大きな特徴である。その流れを引き継いで、近年、日琉諸語における比較言語学的手法による日琉祖語の探求が大きく進んでいる。また、コンピュータの発達によって、各種の実験機器が開発され、音響音声学の分野が飛躍的に進んだことも、音韻の理論的研究における大きな成果であった。また、国語研究所による各種の音声コーパスの完成も、その方面に多大な貢献をなしている。

2.2　文法

戦後の日本語の文法研究は、1941 年の時枝誠記『国語学原論』で提唱された「詞・辞」論への賛否の論争から始まった。これは、それ以前からあった日本語のいわゆる「陳述論」の流れの上にあるもので、ソシュールによるラング・パロルの区分、ブルームフィールド等の「形態素」を中心とした構造言語学の考え方などが、一度にまとめて「陳述論」に流れ込んで、非常に混沌とした研究史を作り上げたことが、日本語文法研究の一大特色であると言える。この「陳述論」の集大成は、渡辺実の『国語構文論』(1971）である。流れを大きく変えたのが三上章による一般言語学的な方法論であり、「陳述」は「モダリティ」に集約さ

れ、その他、ヴォイス・アスペクト・テンス・主題といった今の日本語文法記述に継承されている様様な用語の日本語文法へのあてはめの基礎を行っていった。後に、南不二男によって完成される、述語の階層構造の基礎も三上の発案になる。なお、日本語研究にも生成文法の影響はあったが、国語学会内では、その影響は小さかったと言える。文法史研究も、この流れは同じで、江戸の国学以来の伝統の解釈文法的研究から、一般言語学的用語を用いた普遍性を重視した文法への変化が大きかった。しかし、それにも関わらず、文学研究との提携を図る研究も変わらず重要視されているのが、日本語学の大きな特色である。

2.3　語彙

日本における語彙の理論的な研究分野は、国立国語研究所から発せられた諸研究が中心となっている。そのひとつの代表が、林大によって主導された日本最初の本格的シソーラスの『分類語彙表』(1964 年) である。他にも『同音語の研究』(1961)・『類義語の研究』(1965)・『動詞の意味・用法の記述的研究』(1972) などが主要なものである。また、国立国語研究所は、最初期からコンピュータを日本語研究に導入したことも重要であり、『電子計算機による国語研究』のシリーズでは、非常に多くの成果が得られている。後で述べるように、古辞書を始め、種々の日本語史言語資料の開拓が進んだことで、従来知られていなかった語や語の意味が明らかになっていった。その集大成が、『日本国語大辞典』(1976) である。

この分野においても、コンピュータの発達の影響は大きい。特に、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」や「日本語歴史コーパス (CHJ)」などの言語コーパスの開発によって、日本語の語彙研究はまったくその姿を変えたと言ってよい。コンピュータは、文法研究にも大きな影響を与えたが、語彙研究におけるその力は破壊的である。ただ、まだ言語コーパスを本格的に活用した辞書は日本にはない。今後の大きな課題となっている。

2.4　文字・表記

日本語学における文字・表記研究は、理論的な面では、仮名遣い研究という形での研究が行われている。その代表的なものとしては、服部四郎『音韻論と正書法』(1951) があげられる。また、戦後の特殊な事情を表すものとして『日本人の読み書き能力』(1951) も漏らすことはできない。しかし、文字・表記の研究の主たる成果は、日本語史研究から出ている。上代特殊仮名遣については先に述べたが、他にも、定家仮名遣における「お」「を」の区別が、単語アクセントによることを発見した大野晋の研究 (1950) や、仮名に付されるアクセント符号 (声点) に、「平声軽」と言う下降調アクセントを示すものがあるという小松英雄の発見 (「和訓に施された平声軽の声点―平安末期京都方言における下降調音節の確認―」1957) などが重要であった。いずれも今の研究に直結したものである。

これらの発見の背後には、訓点資料研究の存在がある。訓点資料は、漢文に付されたヲコト点や仮名点という特殊な表記形態を持った資料であり、1953 年に創設された訓点語学会でその主な成果が発表されている。文字表記研究としては、他に、近代語における仮名遣い

研究・異体字研究や、キリシタン資料におけるローマ字研究の成果も見逃すことはできない。

2.5　コンピュータによる研究

ここまでにも見て来たように、1970 年代以降、パソコンが一般に普及し、コンピュータによる研究が一般化してきたことは、それ以前の研究との大きな差である。様様な統計的研究・計量的研究がやりやすくなり、大きな成果があがっている。その初期の研究としては、水谷静夫による諸研究がある。1956 年に水谷が中心となって創設された計量国語学会では、当初から大型コンピュータを用いた計量的研究を推進してきていた。

21 世紀になり、一般の研究者にもコンピュータによる研究が広まっているが、その主たる要因としては、パソコンの普及によりコンピュータが使いやすくなったことと、言語コーパスの整備の両方があげられる。国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)」(2011）は、標準的な日本語コーパスとして、日本語学の世界だけでなく、情報工学の世界でも広く用いられている。コンピュータによる研究は、最初、文字のレベルから始まったが、形態素解析の自動化により単語や文の研究にも及んでいる。また、近年の AI の発達により、その研究は意味のレベルにまで及ぼうとしていることは注目される。

2.6　日本語史研究

ここ 80 年の日本語史の研究は、新資料の発見という形と表裏一体で進展してきたと言える。つまり、訓点資料・悉曇資料・キリシタン資料・抄物資料・洋学資料といった新しい資料のジャンルが確定され、それぞれにおける新発見という形で、研究が進んできた。これは、実は、明治時代の上田万年の研究（P 音考）に既に見られるもので、新しい資料における言語事実の発見が理論の形成に役立つという形である。また、新資料は、漢文・ポルトガル語・オランダ語・英語といった、本来日本語ではない資料との交渉の中で作られた資料であることも見逃せない。そういう意味で、日本語史研究の資料が「国際化」ということと密接に関わっているというのも、おもしろい現象である。もちろん、これは、ロゼッタストーンを例に引くまでもなく、多くの言語研究に普遍的に見られる現象である。

日本の文字の起源が中国の漢字にあることは言うまでもないが、訓点の起源も、中国の周辺国家（例えば、古代朝鮮半島）にあることは間違いない。また、小林芳規は、片仮名のような表記体系も、朝鮮半島が起源であると述べているが、ルーツの問題はともかく、同じような方法が中国周辺で行われたことは確かだろう。

もうひとつ日本語史研究でのトピックスをあげておくと、古辞書研究がある。『倭名抄』『新撰字鏡』に始まり、『類聚名義抄』『色葉字類抄』そして、『節用集』へと続く膨大な日本語辞書は、まさに研究の宝庫であり、様様な成果をあげてきている。特に『類聚名義抄』は、金田一春彦の初期の研究から、方言アクセント研究と密接な関係を持ち、現代に至っている。『日葡辞書』と並び、至高の日本語研究資料と言えるのではないか。

日本語史研究については、個別の部分でも触れてきたが、文法史の分野での大きな変化を

ひとつ上げておくと、品詞論的研究から、統語論的研究へと大きく変化したことがあげられる。その大きなきっかけとなったのは、石垣謙二の『助詞の歴史的研究』（1955）だと思われる。現代語研究における三上章の研究方法の一般化に伴い、このような統語的研究方法が、日本語文法史研究でも 2000 年代には広く行われるようになった。体系化への指向は、語彙史研究でも見られる。前田富祺『国語語彙史研究』（1985）などに見られる体系としての語彙の歴史という見方は、大きく研究の流れを変えたと言えるだろう。

3. 今後の展望

日本語学会を中心としたこれまでの 80 年間の日本語研究の概要は、『国語学辞典』(1955)、『国語学大辞典』（1980)、『日本語学大辞典』（2018)、『国語学研究辞典』（1977)、『日本語学研究辞典』(2017)、『日本語大辞典』(2014)、その他専門的分野のものなど多くの辞典で参照することができる。

以上見てきたように、日本語学会（国語学会）における日本語研究は、日本語史資料研究と方言研究を重要な柱として進んできたことが重要な特色であると言える。このことは、今後も変わることがないと思われる。また、これはもうひとつの指定討論者の方から述べられると思うが、戦後、国語研究所を中心に提唱された「言語生活」という考え方が、その後の社会言語学の大きな進展に影響を与えていることも特色として認められるかもしれない。

その反面、理論的な研究については、十分な成果があがっているとは言えない部分がある。特に、現代語の文法研究については、三上章以降、根本的な進展はないと言ってもいい。実は、現代語の理論的な研究は、情報工学の方では急速に進歩を見せている。形態素解析や統語解析の自動化といういわゆる NLP（自然言語処理）の技法の進展がまず起こり、近時では、言語モデルと言われるアプリケーションにより、文を生成させたり、単語や文の意味をそのまま計算することが可能になりつつある。したがって、日本語研究者の数も、創立 50 周年の水谷静夫の論文（1995）で、すでに、理系研究者の数が文系研究者の数より多くなっていることが述べられているが、現時点では、すでに比較することに意味がないレベルの差になっている。

また、研究の国際化も見逃すことができない。日本以外で行われている日本語研究のレベルは非常に高く、それらとの交流抜きには、日本語研究の全体像をつかむことは不可能である。また、情報工学的な新しい NLP の手法も、ほとんどが英語で発表されている。情報化と国際化とを進展させながら、一般言語学の流れを外すことなく、そして、得意とする分野をさらに深化させていく工夫が、今後の日本語学研究には重要であると考える。

方言研究・社会言語学的研究から見た 80 年

木部暢子（きべのぶこ）（日本語学会副会長/人間文化研究機構）

1. 方言研究・社会言語学的研究の歩み

1.1　文部省・国語調査委員会「音韻口語法取調」

近代の方言研究は、国語調査委員会の「音韻口語法取調」（1903）に始まる。「方言ヲ調査シ標準語ヲ選定スルコト」を目的とした調査で、その報告書『音韻調査報告書』『音韻分布図』（1905）、『口語法調査報告書』『口語法分布図』（1906）により全国的な方言の状況が初めて明らかとなった。日本の方言を東西に分ける境界線（後に「糸魚川・浜名湖線」と呼ばれる）が発見されたのもこの報告書がきっかけである。

1.2　東条操の方言区画論

上記の調査を受け、東条操は方言区画論を発表した（１次案：1927「大日本方言地図・国語の方言区画」、２次案：1934『日本文学大辞典』、３次案：1953『日本方言学』）。方言区画論には、「区画」の定義、基準が明確でない、共時態と通時態とが未分化であるなどの批判があるが、東条の目的は方言の分裂の順序を地理的区画によって示すことにあった。方言区画論は 1960 年ごろまで、方言研究の柱の一つとして役割を担った。

1.3　柳田国男の方言周圏論

柳田国男は、自身の方言収集の経験により、「蝸牛考」（1927、『人類学雑誌』42 (4) - (7)）、改訂版『蝸牛考』（1930、刀江書院）を発表し、方言周圏論を提案した。これは柳田独自の発想であるが、1922-23 年にジュネーブに滞在したおり、柳田はドーザの『言語地理学』に接しており、その影響を受けていたと考えられる。また、テューネンの『孤立国』(1826) が念頭にあったという（柴田 1980）。方言周圏論に対しては、孤立変遷論、多元的発生論、逆周圏論などの批判があるが、言語地理学の基本原理として、後の研究に大きな影響を与えた。

1.4　雑誌『方言』

昭和の初めごろ、各地で方言研究が盛んになり、1928 年に東京方言学会が、1931 年に近畿国語方言学会、国学院大学方言研究会、広島方言学会、東京文理科大学方言研究会、南島談話会が発足した。これら諸団体の統合連絡を目的の一つとして、春陽堂から月刊誌『方言』が刊行された（1931-38）。服部四郎「国語諸方言のアクセント概観」、金田一春彦「現代諸方言の比較から観た平安朝アクセント」、平山輝男「南九州アクセントの研究」など、初期のアクセント研究がこの雑誌に掲載された。

1.5　日本方言学会の設立、日本方言研究会の設立

雑誌『方言』の廃刊後、1940 年に日本方言学会が設立された。機関誌『方言研究』を第十輯まで発行（1940-1944）、『日本語のアクセント』（1942、中央公論社）、『国語アクセントの話』（1943、春陽堂書店）を刊行し、1944 年 3 月の国語学会の創立にあたり、発展的解消を遂げた。その 20 年後の 1964 年（1963 年とも）に日本方言研究会が設立された。きっかけは、東条操の 80 歳の誕生日を祝うために『日本の方言区画』が編纂され、その世話人会が研究会の設立を企画したという（佐藤 2016）。会員制をとらない研究会として、広く市民を巻きこんで方言研究の中核を担った。

1.6　国立国語研究所の設置

1948 年に、国語に関する総合的研究機関として、国立国語研究所が設置された。八丈、鶴岡、岡崎などの地域言語の調査、『日本言語地図』や『方言文法全国地図』の作成、各地方言の記述的研究、社会言語学的調査などを行い、方言研究を牽引した。

1.7　記述的研究と言語地理学的研究

国立国語研究所の『日本方言の記述的研究』（1959、明治書院）は、方言の体系的な記述をめざした最初の報告書である。このあと、『方言学講座』全 4 巻（1961、東京堂）、『講座方言学』全 10 巻（1982～1984、国書刊行会）が刊行され、各地方言の記述が行われた。また、国立国語研究所の『日本言語地図』全 6 巻（1966–1975）（全国 2400 地点、300 枚の言語地図）が刊行されると、地理的分布からことばの歴史を探る言語地理学が盛んになった。日本方言研究会でも討論「言語地理学における解釈とは何か」（1970）、シンポジウム「言語地理学と語史」（1972）が開催されている。

1.8　社会言語科学会の設立

社会が流動化したことにより、言語を社会との関係で捉えようとする動きが、1960 年代にアメリカやイギリスで盛んになった。日本ではこれより早く、国立国語研究所が「言語生活」の名称で社会言語学的調査を実施していたが、これをさらに進め、研究による社会的貢献と既成の学問領域の枠を越えた学際的研究を目指して、1998 年に社会言語科学会が設立された。学会誌ではこれまで、コミュニケーション、ウエルフェア・リングイスティクス、敬語、多言語社会、『共生』、『コロナ禍』などの特集が組まれている。

2. 現代における研究動向

2.1　社会の変化と方言の変容

1960 年以降、中央の文化や標準語が各地に広まり、方言が大きく変容した。日本方言研究会の 1980 年代の発表には、標準語化による方言の変容、世代差を扱ったものが多数ある。1990 年の大会では、特集「方言の現在ー今、方言はどう動きつつあるかー」が組まれ、「方言は消滅するのか」「地域言語の改新と世代差」「方言と標準語」などのテーマで議論が行われた。

2.2　消滅危機言語・危機方言の記述と継承

方言の変容に加え、地域の言語・方言が次の世代に継承されずに消滅するという問題が生じている。ユネスコは、*Language Vitality and Endangerment* (2003)、*Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd ed.* (2009) を発表し、言語の多様性こそが人間文化の基本であるとして、消滅危機言語の保存・継承を訴えた。このリストには、アイヌ語、八丈語、琉球 6 言語が含まれている。琉球大学では、以前から琉球諸言語の調査やデータベース化を行ってきたが、これをきっかけに活動がさらに活発化した。2010 年に国立国語研究所に発足した消滅危機方言プロジェクトでは、琉球諸言語に限らず、日本の危機言語・危機方言の調査と継承活動を行っている。また、方言文法研究会では、『全国方言文法辞典』の編纂を目的として、2010 年から『全国方言文法辞典資料集』を編集し、現在、第 8 号まで発行されている。2010 年ごろから方言教育に関する研究や報告が増えてきたのも、方言を消滅の危機から守ろうとする動きの一つである。日本方言研究会では 2017 年に「方言に関する教育活動」というテーマでブース発表が行われた。

2.3　方言研究をとおした地域支援・社会支援

20 世紀の終わりごろから、方言研究者が災害復興や地域活性化などに積極的にかかわるようになった。阪神淡路大震災（1995）のときに、外国人に情報が伝わらなかったという反省から、佐藤和之氏らのグループが「やさしい日本語」の活動を始めた。現在は外国人だけでなく、多様な人々を含む多文化共生社会に不可欠のものとして、「やさしい日本語」の活用が政府・自治体、マスメディア等により進められている。東日本大震災（2011）のときには、方言による災害復興支援活動の可能性が模索された。日本方言研究会では 2012 年に「東日本大震災関係ポスター発表」を、2016 年にシンポジウム「方言を介した地域支援活動」を企画し、「震災の中で方言研究者ができること・なすべきこと」「医療・看護・福祉の現場と方言」などについて議論を行った。社会言語科学会では、「コミュニケーション」「多様性」「共在」「モビリティ」などをテーマに、現代社会に即したシンポジウムが行われている。

3. 新たな展開と今後の展望

3.1　危機言語・危機方言の記録とオープンアクセス化

将来的には、危機言語・危機方言の多くは生き延びることが難しい。だとすると、できるだけ多くの地域の言語資料を未来へ残すことが課題である。言語の記録は、３点セット（辞書・文法書・談話テキスト）の作成を基本とする。音声と動画も必要。また、個々の研究者が所有する方言データが失われないような手立ても必要である。これらのデータはオープンアクセス化し、多くの人が利活用できるようにする必要がある。

3.2　シチズンサイエンスの推進

方言による地域支援、社会支援を越えて、今後は、言語・方言の使い手である地域の多様な人々と共同で研究を進め、その成果を社会へ還元するといった循環システムを構築する必要がある。危機言語の記録も社会言語学的研究も、話し手との共同関係が成り立たなければうまくいかない。方言の分野では、「科学者自身が市民と一体となるシチズンサイエンス」（日本学術会議 若手アカデミー 提言、2020）が一層、求められる。

3.3　国際発信、国際展開

現在の日本の方言研究の最大の問題は、研究成果が世界に知られていないことである。これを改善するためには、研究成果の英語での発信を積極的に進める必要がある（英語での発信がすべてとは思わないが）。日本語学会では、2024 年 3 月に *Language in Japan* をオンラインで公開した。国立国語研究所では「先駆的名論文翻訳シリーズ」で過去の論文の英語版を公開、*HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS* シリーズ（*Handbook of Japanese Dialects* は近刊予定）、*Endangered and Lesser-Studied Languages and Dialects* シリーズなどで英語での出版を進めている。国際発信に力を入れることで、方言研究・社会言語学的研究に新しい展開が生まれることと思われる。

引用参考文献一覧

佐藤亮一 (2016)「〈講演録〉日本方言研究会の 50 年をふり返る」『方言の研究 2 特集 日本方言研究会の 50 年をふり返る』pp.5-19. ひつじ書房.

柴田武 (1980)「解説」『蝸牛考』pp.223-235. 岩波文庫.

Moseley, Christopher (ed.). 2010. *Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd ed.* Paris: UNESCO Publishing. Online version: http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlas

UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages. 2003. *Language vitality and endangerment*. Document adopted by the International Expert Meeting on UNESCO Programmer Safeguarding of Endangered Languages Paris, 10–12 March.